魔法少女リリカルなのは StrikerS WitH 2nd

八神煌斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは　Ｓｔｒｉｋｅｒｓ　ＷｉｔＨ　２ｎｄ

【Ｎコード】
Ｎ８２７３Ｉ

【作者名】
八神煌斗

【あらすじ】
魔法少女リリカルなのは　Ｓｔｒｉｋｅｒｓ　ＷｉｔＨの続編的

01．帰ってきた日常

「何故？」
《さぁ？》
《私は新参者だからな。分からん》

首に掛かっている白と黒の指輪に聞いてみても、返ってくるのは俺を突き放す言葉。

一時的な軟禁……もとい、監査が終わって、暫らくぶりに外の空気を吸う事が出来た。
襲撃の際、半壊状態だった六課も既に修繕が終わっていると言う話だったのでまっすぐ帰宅。

うん。ここまでは途中飲食店のトイレを借りた所も含めてしっかり覚えてる。
久方振りに六課の正面玄関を見たのも覚えてる。

だけど――……。

「何故だろう？思い出せない」
《既に記憶の消去に掛かっているようですね》
《体が覚えてるのか目に光るモノが見えるがな》

気が付けば六課が誇る訓練場の真ん中に立っていた俺。
何度も言うが、本当にココに立つ事になった経緯が思い出せない。

ただ、俺の目の前にはジャケット、甲冑を来た我がお姉さま方が腕を組んで仁王立ちしてます。

風なんか吹いてないのに、何だか押し返されてるような気がしてならない。
本当は今すぐにでも逃げ出したいんだけど――……。

「なぁ、頼むから離してくれないか？　そして全力で俺を逃がせ」
「スミマセン、私達も命は惜しいんです！」
「可愛い部下の為に犠牲になってください！」

若干、キャラが崩壊しながら俺を後ろから捕まえているスターズ３と４の二人。
ま、二人共腰が引けて捕まえるというかしがみ付いてるって表現が正しいかも。

因みにライトニング３と４もさっきまで俺の脚を捕まえてたんだが、今は青ざめた顔で訓練場外に避難している。

なんで帰宅早々こんな目に合わにゃいかんのだ!?

「本当に分からないのかな？」

答えてくれたのはフェイ姉。

でもな、声のトーンがいつもと比べて３６０度も違うんだよ。

《一周して元に戻ってます相棒》

「え、マジ？」

《……しかし、今の声、なにやら別の言葉も聞こえたような……》

《レイラ、それが俗に言う副音声です》

《成る程。中々に興味深い……》

仲良いのな、二人共。

いや、姉妹だから当たり前なのかもしれないけどさぁ。

お兄さんはそれ所じゃないよ。

「公開陳述前の無断外泊」

「……む」

はや姉が、これまた副音声込みで喋る。

「陳述会護衛任務の欠席」

「万華鏡を秘密にしていた事」

「そして自爆」

「は、ははは……」

続くようになの姉、フェイ姉、シグナム姉さんにヴィータ姉さん。
俺はもう笑い事しか出来ない。

全て心当たり、というかバッチリドストライクで俺の取った行動です。

というかヴィータ姉さん、自爆ってなんだ自爆って。
アレは立派な戦術――……。

「自爆だろ？」
「はい」
《コレがヘタレです》
《中々……》

チクショウ……。結局アレか？
今までばら撒いたお仕置きフラグを一気に回収とか言う……。

だけど何でこんな扱いをうけにゃならんのだ！
今言われたことは全て良かれと思ってやったことだぞ！？
呆れられたとしても、お仕置きなんておかしいじゃないか！！

「で、何か言うことは？」
「スミマセンデシタァァ！！」

土下座。

俺にしがみ付いていた二人を振り払い、その場に土下座。

いやね、もう理屈とかそんなんじゃないんですよ。
怖いモノは怖い。仕方ないだろ？

《姉さん、コレもヘタレで合っているか？》
《そうです。成長しましたねレイラ》

とうとうレイラにまれコレ扱いされた。
……泣いてもいいだろうか？

「ウィズ君、そこまで必死になること無いよ」
「なの姉？」

両手両膝を付いたまま、土下座の体制を保ったまま顔だけを上げる。
姉さん達はさっきと違い皆笑っていて、特に起こっている様子は無い。

「私達は特に怒ってないんよ？」
「私達が言ったこと、お前は全部良かれと思ってやったんだろ？」
「まぁ……」

なの姉に続いてはや姉とヴィータ姉さん。

あれ？
もしかしてそんなに起こってない？
俺の思い込み？

「でもそれならなんで皆さんは甲冑とかを着用中なのでしょうか？」

単に思ったことを口にする。
すると一歩前に出たのはフェイ姉とシグナム姉さん。

「ウィズ、監査中は特に外に出してもらえなかったんだよね？」
「うん」
「と、言うことは運動不足気味、だな？」
「うん。……うん？」

何だか雲行きが怪しくなってきたよ？

「だから模擬戦をしよう！」
「やっぱりか、コンチクショー！！」
「あ、逃げた！」
「追うんや、逃がしたらあかん！！」

文字通り脱兎の如く逃げたした。
あんな化け物５人も相手にして生きてられる訳ねぇだろ！

チクショウ、開始早々コレかよ！

《おい……逃げ出してもよかったのか？》
《コレが日常ですからねぇ。レイラも早く慣れることですね》
《ふむ……》
「お前ら呑気に喋ってないでこの状況何とかしろ！！」
《無理です》《無理だ》

シンクロ。
さすが姉妹機。

と、油断したその瞬間、俺の行く手を遮った一本の蒼い道。
そして同時に聞こえてくるのはやっぱり駆動音。

「はあぁぁぁ！！」
「どわあぁぁ！！？」

頭を掠めた蒼い疾風こと、スバル。

「ティア！」
「わかってるわよ！」
「なあぁぁ！？」

避けた先に飛んできたのはオレンジの魔力球一杯。
数を数えてる余裕なんて無いんだよ。

「ティアナ！　どういうこちゃね！？」
《相棒、言葉使いが何だか変です！》

そんなこと言われなくても分かってるけど、しょうがないじゃないか。
それだけ焦ってるんですよ。

「私も命は惜しいんです！」
「……ああ」

もう分かった。つまり脅されたんだな？
多分ライトニングが追撃に来ないって事はまだ震えてるんだろ。
トラウマにならなきゃいいけど。

《マスター！　上空から魔力反応！》
「なにゃあぁぁ！！？」

横に跳ぶ。と、俺が居たところに雨の様に降り注いだ桃色の魔力球。

《おい、本当にコレが日常なのか？》
《……今回は中々激しい部類に入りますかね》

「ウィズ君！」

声のするほうを見ると、レイジングハートを構えたなの姉が空に浮かんでいた。

「次は当てるよ？」
「何悪役っぽいこと言ってんの！？」
「ツッコミを入れている暇などあるのか！！」
「うひゃあぁ！！？」

横から切りかかってきたのはシグナム姉さん。
太刀筋が何時もより鋭そうに見えたのはきっと気のせいじゃない。
髪の毛が何本か落ちていくのを見て冷や汗が流れる。

「立ち止まるってのは戦場じゃ命取りだぜ！！」
「ひゃあぁぁぁ！」

避けた所で間髪要れずに上から攻撃を入れてくるヴィータ姉さん。
跳ぶように交わす俺。

「ウィズ、避けてね。轟け、轟雷！」
「ならそんな攻撃しないでくださいーー！！」

「サンダースマッシャー！！」
「イーーーヤーーーー！！」

放たれるフェイ姉のサンダースマッシャー。
なの姉のディバインに比べたら弱いけど、雷纏ってるのもあって破壊力はコッチが上なのよ！？
分かってる！？

「休んでる暇は無いで！！　刃以て、血に染めよ――」
「ちょ！？　はや姉それ使えんの！！？」
「当たり前やろ！　穿て、ブラッディダガー！！」
「だあぁぁぁ！！？」

詠唱が終わる前に横に跳んでいたため何とか交わすことが出来ました。
いや、あれ早すぎて視認できないのよ、マジで。

《相棒！　叫び方にも色んなバリエーションがあるんですね！！》
《勉強になるぞ、マスター》
「んな呑気なこと言ってる場合かぁ！」
《ところでマスター》

次々に繰り出される攻撃をかわしつつているところでレイラが話しかけてきた。

なんだ？

《彼女達が使っている魔法……突撃槍（ランス）なら簡単に防げるが？》

「……」

隣で爆発が起きているが、あまりに突然の事に足が止まり無言になる。

そういえばアイスマン、俺のサードもそれで防いでたっけか？

およ？

もしかして連載早々救済フラグか？

《ちょっと違います》

《旗がどうかしたのか？》

レイラの教育はまた追々アテナとするとして――

「よっしゃ！　ならレイラ、頼めるか！？」

《勿論だ》

《相棒、私というものが有りながら浮気なんて許しませんよ！！》

うるさいな。

今は命の方が大事なんだ。

「レイラ、セットアップ！」
《了解だマスター。――　ｓｅｔ　ｕｐ　――》
《相棒の浮気者ーーー！！》

ティアナ　ｓｉｄｅ――――――――――――――――

なのはさん達の攻撃が始まると同時に私達は一目散に訓練場から出た。
今は外からモニターも使って様子を見ている。

「うわー、ウィズさんすごーい」

隣で呑気な声を出しているパートナーにため息をつく。

確かに凄いとは思うけど……私はあの光景を見て怖くなってるわよ……。
本当に頭が痛いわ……。

「あれ、ウィズさんが使ってるの槍じゃないですか？」
「え？　あ、本当。アテナって槍型にもなれたのかしら？」

エリオの呟きを聞いて再び殺戮空間（ジェノサイドフィールド）に目をやる。
そこには今まで見たことの無い黒い大きい槍でなのはさんたちの攻撃を凌いでいるウィズさんが見えた。
バリアジャケット纏ってないのも気になるけど……一体どんな効果なのよ、あれ。

「でも、なのはさんたち楽しそうですね」

どこを見ればそう見えるのか。
キャロに突っ込みたかったけど、しなかった。
それは単純に私もそう感じたからで……。

この一週間、なのはさんを含めて隊長たちはどこか元気が無かった。
それが今ではアレだけ笑顔……でいいのかしら？

兎に角、どこか楽しそうに見えるのよね。
こんな光景を見て、やっと日常に戻ってきたって思う私は可笑しいのかしら？

「あ、直撃」

０１．帰ってきた日常（後書き）

お久しぶりです、八神煌斗です。
とうとうやりやがっちまいました、続編。

暫らくはＷｉｔＨの方で掲載していた閑話の修正を載せていきます。
因みに今回の修正は姉ちゃんズのタコ殴り以外全部とＦＷスターズの追加。
本当はライトニングの二人も入れようか悩んだけど……操りきれずに却下。

今回も定期更新出来るように頑張ります。

それでわ。

02．アテナ・レイラ

「えぇと……あぁ、居た居た。ヴィータ姉さん！」
「あん？　ウィズじゃねぇか。どうしたんだ？」
「少し頼みたいことがあってさ」
「頼みたいこと？」

「で、何だよ？」

朝練が始まる前に俺はヴィータ姉さんと二人で一足先に訓練場に来ていた。
理由もなく連れてきたので少し半目になってる。
元々目つき悪いのにそんな半目じゃ……。

「あいたっ！　何！？」
「お前今、私の目つき悪いのに、余計に悪くなってる、とか思っただろ？」
「……エスパー？」
「やっぱりかあぁ！！」
「あ。ゴメっ、いや、アイゼンは駄目！　アーーッ」

「で、なんだよ」
「少し手伝って欲しい事があるんです……」

正座。

「手伝って欲しいこと？」
「はい、少し模擬戦をお願いしたいんです」
「……お前正気か？」

その気持ちはよく分かります。
だって数日前にあんな事があったのに、頼み込むことじゃないですよね？
でも今回はちゃんとした理由があるんです。

……だから「M？」とかちっちゃい声で言わないでください。
後ずさりしないでください。

「いや、少し調整したいことがあるんだよ」
「調整？　あぁ、そいつらか」

一瞬首を傾げていたヴィータ姉さんだっかが、俺の首に掛かってい

る二つの指輪を見て納得した様子。
デバイスが二つとなると色々戦い方が変わるからなぁ。
確かに戦術の幅は広がるけど……ひとつ間違えたら腕落とす。
はやいうちに対策をうっておいて損はないだろう。

「でもなんで私なんだ？　他に居るだろ？」
「俺に死ねと？」

今回は調整目的だからある程度接近戦が出来る人じゃないと意味が無い。
そこで上がるのがヴィータ姉さん、フェイ姉、そしてシグナム姉さん。
昨日の今日で模擬戦なんて頼んだら俺確実に死にます。
スグにその考えに到ったのか、ヴィータ姉さんも視線を横にずらして頬をかいている。

「ま、まぁ、それなら仕方ねぇか……。でも調整って何をどうするんだよ？」
「そんなに難しいことじゃないよ。単に戦い方も模索したいだけだから」
「というかお前って槍使えんのか？」
「……それを含めての模擬戦という事で」

はっきり言って槍は全然使えなかった。

前回のお仕置き中にレイラを使ったけど……付け焼刃とはよく言ったのモノ。

始めの数手こそ防げたがスグに落とされました。

まぁ、剣術はガキの頃から体に教え込まれたからある程度使えたけど……。

多分レイラつかった戦闘じゃエリオにでもスグ負けそうだ。

「仕方ねぇな」

なんて言いながらアイゼンをセットアップ（表現あってんのかな？）する姉さん。

甲冑は着ていない。

……まぁ、分かってたよ。うん。

「じゃ、俺達も準備するか」

《分かりました！》

《了解した、マスター》

《《――　ｓｅｔ　ｕｐ　！　――》》

アテナとレイラが白黒に輝き、甲冑を生成する。

「へぇ、二つ同時にセットアップか。おもしれぇ事考えたな」
「こうしないと色々危険だったんです」
「あん？」

この二人、どっちが戦闘とかでどっちがセットアップするかで毎回喧嘩するんだもんな……。

で、色々思案した上でこの同時セットアップに行き着いたって訳だ。
まぁ、道のりは楽じゃなかったけど……。

二人の甲冑構成情報をシャーリーさんと協力して作り直しては着てみての繰り返し。
しかも色の好みも白と黒で分かれてるから配色にまで気を使う始末……。
今日まで戦闘面の調整が出来なかったのはその為だ。

そのお陰でアイスマンの戦い方を思い出すことは出来たけどな。

因みに今の俺の甲冑だが、インナーは形はそのまま白色に変更してあり、ズボンは以前と同じ。
ジャケットは黒く、左胸部分に白のラインで十字が描かれている。
そして白い腰布を装備。
後は以前と一緒だ。

「おい、たそがれるのは別にいいけどよ、さっさと始めねぇか？」
「あ、ゴメン。分かった。姉さんには準備運動にもならないかもだけど……」
「別に構わねぇよ。おら、来いよ」

アイゼンを構える姉さん。
んじゃ、俺もやってみますかね。

「アテナ、ノーマルソード」
《――Ｎｏｒｍａｌ（ノーマル）　Ｓｉｌｈｏｕｅｔｔｅ（シルエット）――》

アテナをノーマルにすると同時に姉さんに向って切りかかる。
まぁ、案の定簡単に防がれるわけで。

「おい、レイラは使わねぇのか？」
「戦い方を考えるだけですしね」

それに短期間で槍を使いこなせるようになる訳無いのは重々承知。
なら、レイラを今までのスタイルの中にどうやって織り交ぜていくか。
それが俺の今の課題だ。

「考えがあるなら別にいいけどよ」
「なら、もう少し激しく行かせてもらいます！」
「よし、来い！」

その声を聞くと同時に体を低くし、ヤクザキックを繰り出す。

姉さんはそれをアイゼンの柄で防ぎ、上空に飛び上がる。

「ウィズ、コレはどうする？」

《――Ｓｃｈｗａｌｂｅ（シュワルベ）　ｆｌｉｅｇｅｎ（フリーゲン）――》

姉さんの前に４つの鉄球のような物が現れる。

アレは射撃魔法！

「アテナ！」

《――Ｈｙｐｅｒｉｏｎ（ハイペリオン）――》

「でりゃあぁぁ！！」

ギリギリの所でハイペリオンの展開が間に合い、防ぎきる。

あの戦いの後、ずっと三番を開きっぱなしだったせいなのか、二番までの状態でもある程度強力なものを作れるようになった。

それでも三番開放に比べると低いんだけどな。

「アイゼン！」

《――Ｋｏｍｅｔ（コメート）　ｆｌｉｅｇｅｎ（フリーゲン）――》

自身の頭より巨大な鉄球に真紅の魔力光をまとわせているヴィータ姉さん。

確かシュワルベの強化版だっけか？

――って、なんつー技出してんだあのツンデレロリっ子は！！

「殺す！」

あれ、俺口に出してないよね？
コメートってあんなに大きくなったっけ？

《顔に出てたんじゃないですか？　相棒分かりやすいですからねぇ》
《殺気も確実に倍以上に膨れ上がっているな。――　マスター》

冷静に状況を分析する相棒二人。
そしてレイラは自分を使え、と言ってきているのと同じだ。

まぁ、それが一番だよな。

「アテナ！　レイラとチェンジだ！」
《仕方が無いですね。レイラ、精々役に立ちなさい》
《フッ。マスターがピンチな時に変えられているクセに》
《なぁ！？　どの口がそんなことを言うのですか！！》
「喧嘩してる場合かぁ！！　レイラ、来い！」
《承知した、マスター！！》
《チクショーー！！》

断末魔のように叫んでいるアテナはこの際無視、半強制的に待機状態に戻す。

そしてレイラをセットアップ。
勿論形式は突撃槍、ランス。

少し大きい為両手で持ち、姉さんに向き直り、構える。

「この流れは予想外だったけど、いいチャンスって考えるか」
《それがいいでしょうね。さて、ちゃんと扱いきってくださいよ》
「アイスマンよりも扱いきってやるよ！」
《それは無理でしょう》
「言ってろ！」

そしてレイラに魔力を流し始める。

先日使ったときに聞いたんだが、あの魔法を無力化（マジックキャンセラー）を使うのにも相応の魔力を必要とするらしい。
世の中そう上手くないって事だな。

アテナが使用者の補助を目的としてるなら、レイラは正に使用者の強化が目的だ。

アテナは戦況や魔力付与によって使用者の補助が主だ。
それに反してレイラは本当に反対。

使用者の魔力を使って、自身の特殊能力を発動させる。

使用者がある程度の腕と魔力を持っていることが大前提のデバイスだ。

……アテナで本当によかった。

「行くぞ、レイラ！」
《承知！　――ｍａｇｉｃ（マジック）　ｃａｎｃｅｌｅｒ（キャンセラー）　！！――》
「コメートフリーゲンーー！！」

「スイマセンデシタ」

土下座。

結果だけいうとコメートがでか過ぎてキャンセル仕切れませんでした。
大きさで言うと元に戻ったんだど、魔力使いきって、そこをアイゼンで直接打撃。
あっさり負けました。

そして土下座。

《（最近新しく【相棒＝土下座】の式が出来てきた気がします）》
《（そうなのか？　……コッチにきたのは間違いだったか？）》

そして相棒ズからの罵倒。
もうくじけそうだよ、僕。

「ったく、ついマジになっちまったじゃねーか。これに懲りたら控えろよ？」
「はい！　誠心誠意そうさせていただきます！！」
「……なんか違う気もするけど……まぁ、分かったなら許す。ほら朝練の時間だ。行くぞ」
「いや、ウィズはコッチだ」

だから俺が何をしたって言うんだ？
もう振り向くのもイヤだが、逃げ切れるはずも無いことは分かっているので振り返る。

案の定そこには甲冑を着たシグナム姉さん。

「なんでしょう？」
「新しい力を手に入れたんだろう？その力をモノにするには経験あるのみだと思うが？」
「だからさっきヴィータ姉さんと……」
「一度でいいはずが無いだろう！」

いや、そんなに握りこぶし作って力説されても……。

「だから今度は私とだ！」
「え、だから何で！？　どんな話の流れでそうなるの！？」
「問答無用！！」
「イヤーーーー！！」

色々と……完

コメ返し

青いタヌキさん
応援ありがとうございます。
今週あたりは以前の閑話だけの予定ですが、よろしくお願いします。

ＴＯＵＤＡさん
あの場合、ウィズは負けでもいいからとにかく生き延びることを優先しました。
あと隆浩は逃げなくても十分迎撃できると思います。
あらためて、これからもよろしくお願いします。

02．アテナ・レイラ（後書き）

こんにちは、八神煌斗です。

今回はデバイスの説明のお話。
以前はヴィータとのお話って言ってましたが、変えました。

予定では次も閑話で、その次からが新賞の予定です。
それでわ！

03．しょーぶ！

「フフフ、今回も俺の勝ちだな」
「うーー！！　もう一回！」
「よっしゃ、何度でも来い！！」
「えっと……何をやってるの？」

ＪＳ事件が終わって、もう二週間。
ある意味事件の中心に居たヴィヴィオも、事件前に比べて少し大人びた感じがする。
って言っても、何も知らなかった子供から年相応の子供にくらいだが。
ま、ここに来たときが幼すぎたんだろう。

そうなると出てくるのが遊び相手が欲しい！　という事らしい。
始めに上がったのがザフィーラ兄さんだったのだが……犬だし。
それを言われて人間体になったら今度は思いっきり引かれて撃沈。
今は何処に居るかすら分からない。
突然人になったら誰でも驚くわな。

で、次に上がったのが俺。理由は簡単に暇そうだから。
……泣いていいかな？

いや、まぁ皆に比べたら暇なんだけどよ。

それで色々遊んでいるのだが……。
何故かヴィヴィオは俺に勝負を挑んでくる。
勿論負けてやる訳などなく、いつもマジでやってます。

「なの姉、いつもの如く俺に勝負を挑んできてるんだよ」
「ああ成る程。それであんなにムキになってるんだ。今回は何？」
「今回は徒競走。勿論俺が勝った」

右手でガッツポーズもどきみたいなことをする。

《相棒、私は情けないです……》
「俺もこんな自分がイヤだ」

負けてやるつもりは無いがな！！

「にゃはは。まぁ、ほどほどにね」
「ん、了解」

そしてなの姉は六課に戻って行った。

「おじーちゃーーん、もう一回しょーぶー！！」
「……」

ここからはダイジェストでお送りする。

・勝負１【腕相撲】

「う～！！」
「……」
「う～～！！」

顔真っ赤にしちゃって。
まぁ、このままだとエンドレスになりそうなので

「ほいっ」
「あうぅ～～……」

・勝負２【腕立て】

「（この勝負はする必要があるのか？）」
「ん～～っ！！」
「ハイ次、ごー」
「ご、ご……もう駄目～……」
「はやっ！？」

・勝負3【あっちむいてほい】

「「じゃんけんぽい！」」
「あっちむいてほい！」

俺、右向く。ヴィヴィオ下指す。

「フッフッフ。残念だな」
「う～……」
「ほら次」
「「じゃんけんぽい！」」
「あっちむいてほい！」

ヴィヴィオ上向く。俺上指す。
実はこれ、ヴィヴィオが上向いてからさした。
ヴィヴィオのヤツ、目線も一緒に動くからな。
因みに逆の場合も目がさす方を向いているので分かりやすすぎる。

「俺の勝ちだ」
「う～～！」

・勝負4【ボードゲーム・オセロ】

「ほいきた！」
「あー、また角取られたー！」
「ほれ」
「あーー！」

ふふふ……。

俺もはや姉に何度同じ事をされた事か。
あれ、勝ってるのに涙が出てくるよ？

はやて　ｓｉｄｅ――――――――――――――――

「なんや今回もウィズが勝ったみたいやなぁ～」

食堂で大騒ぎしている二人を別のテーブルかた眺めつつ言う。

「それにしてもウィズも負けてやれば良い物を」
「だよなぁ～。全く大人気無いヤツだ」
「……貴方達がそれを言えるのかしら？」

シグナム、ヴィータの台詞にシャマルが突っ込みを入れた。
それを聞いて二人は気まずそうな顔になる。

「いや、アレはだな……そう！　優しさだ」
「そ、そうだそうだ！　私達は別にムキになってたり、負けたくなかったとかそんなんじゃねぇぞ！」
「うむ！」

二人共、自爆してるっての気づいてないんやろか？
その台詞に汗まで流してたら、本心丸分かりやねんけどなぁ。

昔まだ、私達が鳴尾に住んでた時、ウィズにも似たような時期があって、相手はもっぱらこの二人と私やった。
ウィズはいろんな勝負を挑んで、その度にコレでもかって言うほど叩きのめされてた。
……もしかしてウィズの負け癖ってコレのせいやろか？

「んじゃぁ、俺は資料整理があるからここまでな」
「えー。もう少しだけ！」
「駄目だ。仕事たまってんだよ。じゃなぁ」
「うーー」

そしてウィズはテーブルを離れどこかに行ってしまった。
ヴィヴィオは文句を言いながらもウィズを見送り、姿が見えなくなると頭を下げてしまった。

う～ん……流石に少し可哀相やね。

「ヴィヴィオ、ちょっとおいで～」
「はやてさん！」

私が呼ぶとトテトテと音が聞こえてきそうな足取りでコッチに駆け寄ってくる。

あーん、もう！抱きしめたいわぁっ。

「はやてさん？」
「はっ！？　あ、ゴメンゴメン」

どうやら少しとんでた見たいや。
自重自重。

「さて、気を取り直して……。最近よくウィズと良く勝負しとるな？　どうや？」
「まだ一回も勝った事ないの。はやてさん、特訓相手になってくれない？」
「え、わたし？」

ん～……手伝ってあげたいのは山々やねんけど、コッチも仕事が溜まってるからなぁ。
主にＪＳ事件（ウィズがそう呼んでた）のが。
全く、捕まってからでも私らを苦しめるねんから……。

「もしかして駄目なの？」
「駄目じゃないねんけど……」

一度一緒にやると日が暮れるまでやっちゃいそうやし……。
かといって断るんもなぁ。

うちの子らは皆目そらしてアテになりそうも無いし。
少しは主を助けようとは思わんのかい！

さて……どうしたもんか。
そもそも経験とかもウィズの方が上やし、体なんか比べるまでも無いし……。

「お？」
「どうしたの、はやてさん？」

何かが舞い降りてきた。

「ヴィヴィオ、明日まで待っててくれるか？　そしたら絶対にヴィヴィオが勝つ勝負を教えたる！」
「本当！？」
「ほんまや！　それも反則もなし、正々堂々の勝負で勝たしたる！」

期待に満ちた目をするヴィヴィオに胸を張って自信満々にそう告げ、その日は終わった。
フフフ……久々に疼いてきたで！

side　out――――――――――――――――

「おじいちゃん！」
「……なんだ？」

もう最近は諦めた。
訂正するたびに疲れる上になんか悲しくなる。

「なんだ？　悪いけど今日は仕事が押してるから勝負は無理だぞ？」
「じゃ、じゃぁ負けたら何でもいう事聞くってルールも付けるから」

何時もにも増して自信満々だな。
なんかいい勝負でも見つけたのか？

そこまで自信満々だと気になるな……。

「反則とかなしだぞ？」
「うん！」
「約束守れよ？」
「おじいちゃんもね！」

そしてヴィヴィオに連れられるがまま六課を出た。
そこに待っていたのは……。

「なぁ、ヴィヴィオ。やっぱり特別ルール無しにしないか？」
「だめ！」

今俺の目の前には一本の棒の両端を互いに持ったエリオとキャロが居る。
それだけで分かった。
今回の勝負は【リンボーダンス】だと。

「おじいちゃん！　勝負だよ！」

翌日、四つんばいになりヴィヴィオを背中に乗せて一日中走り回っているウィズが目撃された。

コメ返し

緋雨　ヒウさん
コメント、ありがとうございます。
デバイスたちが可愛いと思っていただけたら嬉しいです。

そして、前話の件ですが描写はあえて削らせてもらいました。
自分でも少ない気はしましたが前提はギャグだったので、けずちゃえ、見たいな感じで。
ただ、ゆりかごの時はそんなことも考えてなかったので、確かに失敗だったかも。
貴重なご意見ありがとうございました。

03．しょーぶ！（後書き）

こんにちは、八神煌斗です。

早速ですが、緋雨　ヒウさん以外にも続編と言うことが分かりにくいという事でタイトルを変更させていただきました。
ただ、特に良い案も無かったので安直に２ｎｄ。
ネーミングのセンス無いんです。ゴメンナサイ。

さて、次回からはようやく本編に入ります。
ウィズたちを待ち受けているのモノはなんなのか！？

期待せずにお待ちください。

０４．始まりは突然に

クロノｓｉｄｅ――――――――――――――――

ＪＳ事件（ウィズがそう呼んでいた）から約一ヶ月。
戦闘機人の攻撃によって大きな被害を受けていた管理局も何とか落ち着きを取り戻してきた。
僕もようやく本来の仕事に戻り、今はクラウディアで次元航行中だ。

さて、仕事と言っても管理局は落ち着きを取り戻しただけで正常稼動には程遠い。
全体の統率が未だに不十分。
まぁそのお陰で少し余裕が出来ているんだが。

今のうちにエイミィの奴にでも会いに帰ろうか。
この機会を逃したら、次はいつ休暇を取れるか分からないし。

それに家に帰った時、カレルとリエラに『いらっしゃい』と言われるのも辛い。
いい加減『おかえりなさい』と言われたい。

そう自嘲気味に笑いながらも、今後の予定を確認している時、耳を劈(つんざ)くアラームが鳴り響いた。

「艦長！」
「何事だ一体！？」

僕がブリッジに駆け込むと、ほぼ全ての隊員が慌しく手元のコントロールパネルを操作していた。

「艦がウイルスに進入されました！」
「ウ、ウイルス？」

思わず呆けてしまう。

確かに艦にウイルスが進入することは危険だ。
だが、それでもアラームを鳴らすほどではない。
報告書か口頭が精々だろう。

「それが、強力なウイルスでして艦の３０％が感染しています」
「何だって！？」
「しかもウイルスを利用してハッキングも同時に行われています。何者かは特定出来ていませんが感染した３０％は既にコントロールを奪われています！」

一瞬、何を言われたのかわからなかった。
が、直ぐに頭を振り状況を整理する。

詰まる所、ハッカーがウイルスを使い現在僕らが乗っているクラウ

ディアを乗っ取ろうとしているということ。
何のために!?
いや、今はそんなことどうでもいい!
「ハッカーの特定は後回しでいい! 今はウイルスの駆除を最優先、艦の制御をこれ以上奪わせるな!」
「了か……艦長! 何者かが転送してきます!」
「何だと!?」
このタイミングで?
ハッカーの仲間の可能性が高いな。
「武装隊、今すぐ転送ポートへ向かえ! 僕も直ぐに行く!」
幸い通信機能はまだこちらの手の内に在ったようで無事伝えることが出来た。
くそ、まだ暫く会いに行くのは無理そうだ……。
ｓｉｄｅ　ｏｕｔ――――――――――――――――――――
「休暇?」

「そや、休暇」

１０月末。
朝から書類整理していた俺の所にはや姉の通信があった。
そして部隊長室に来て言われた一言目がそれ。

「ウィズあんた、六課に来てから一回も休み取ってへんやろ？」
「あぁ、そういえばそうだな」

あのアイスマンに肩ぶち抜かれた時に入院した以外は休みなんて無かった。

でもそれを言うと姉さん達もそうなんじゃ？
ＦＷは一回午後からだけど休みは在ったらしいけど。

「でも急に言われてもなぁ……まだ書類整理残ってるんだよなぁ」
《いえ相棒、ここははやてさんのご好意に預かるべきです！》
「アテナ？」

俺が休みを取ることに抵抗を感じているとアテナがあわてた様子で説得にかかってきた。
何そんなにあわててんだ？

《どうしたのだ姉さん？　休暇より仕事を選ぶというマスターの

姿勢は評価すべきだ》

俺の気持ちを代弁するかのように、次はレイラが。
いや、選ぶって言うか出来れば俺も休みは欲しいんだけどな。
期限が迫ってるのが多いから已む無しってやつなんだが……。

《何を言っているのですレイラ！　このままだと私たちは再びあの大量の仕事を手伝いは目になるのですよ！》
《む！？　それはいけない。マスター、甘んじて休日を享受したまえ！》
「おまえらなぁ……」

いや、確かに書類整理手伝ってもらうつもりだったけどよ。
ここで休んだら後でさらにキツくなるのが分からんかね？

《無償で手伝わされるより幾倍もマシです》
《右に同じ》
「……」

こんなやり取りもあって次の日、俺は私服に着替え町に繰り出してきた。
インビエルノに乗ったのもかなり久しぶりだったな。
最後に乗ったのは……単独ロストロギア探索任務の時だっけ。

「平日だって言うのに人が多いな……」
《いや、今日は少ないほうだぞ？》
「そうなの？」

まぁ、確かに二年近く町になんて顔出さなかったから感覚がおかしいのかも知れないけどさ。

《レイラは最近町に出たのですか？》
《あぁ、よくマスターと共にな》

ここで言うマスターってのはアイスマンのことだろう。
というか何やってんだアイツ。仮にもテロリストの仲間だろうに。

「で、何しに町なんか来てたんだ？　まさか遊びに来たとかじゃないだろうな？」
《マスターはよく食事をしに来ていた。何なら行ってみるか？》
「そうだな。アイツがどんなもん食ってたのか興味あるな。案内頼む」
《承知した》

そしてインビエルノのエンジンを吹かした、その瞬間。
地面を揺らすほどの爆発、そして爆音が鳴り響いた。

「……」

《相棒の休暇、二時間弱》

《これでまた提出書類が増えること間違いないな……》

「はぁ……。とりあえず行くぞ」

どうせどっかの店がガス爆発でも起こしたんだろう。

いや、それだけでも大事なんだけどロストロギア担当の六課に所属している俺は実際関係ない。

現場に行って他の隊員の手伝いでもしておけばいいか、何て軽く考えていた。

そう、この時までは……。

《相棒、魔力反応です！》

「はぁ！？」

立ち昇る黒い煙を目印に、現場に向かっていた時、アテナがそんな事を言ってきた。

一瞬地上部隊の連中かと思ったが、それはそれで厄介なことに気づく。

魔力を使わないといけない状況になっているということだ。

しかも最悪の場合、戦闘一歩手前、又は真っ只中という事。

「くそ……」

アクセルを全開まで吹かす。
次の角を曲がれば、現場が見えるはず！

「おいおいおい……どうなってんだよ、こいつは……」

一番に俺が見た光景。さっきまで軽く見ていた自分を殴り飛ばしてやりたくなった。

爆煙が充満する現場。
俺が一番近くにいたのか管理局員の姿は見られない。
あたりには巻き込まれただろう一般市民が何人も倒れている。

そして感じる魔力は間違いなく戦闘に使われたもの。
それは辺りの惨状を見れば俺だってわかる。

「姉さん！」
『んお？　ウィズやんか、休暇満喫しとるかぁ？』
「そんな場合じゃない！　街中で魔力戦闘行為だ！　市民にも被害が出てる！」

さすがに故意かどうか解らねぇけど、現場から近い部隊でもまだ連絡は来てなかったらしい。
俺の一言を聞いて、はや姉の顔も見る見る強張っていく。

『それホンマか！？　場所は！』
「今送った。俺は犯人懲らしめてくる！」
『無茶したらアカンで！』

そこで通信は終わり。

インビエルノを待機状態に戻して、俺は戦闘者を探す。
怪我人を無視するのはいい気分じゃねぇけど、ほっといたら被害が広がるだけだからな。

「魔力反応、どこにある！？」
《少しま……マスター、目の前だ！》
「っ！？　そんないきなり！」

横に跳ぶ。

と、同時に魔力弾だろうか。
俺のいた所が少しだが弾けとんだ。

今の感じは流れ弾か？
いや、今はそんなことよりも――。

「こんな街中で……強力すぎるだろ」

魔力弾が跳んできた方を見る。

そこには三つの影があった。

コメ返し

空羅さん

コメントありがとうございます。

ウィズ達の会話はある意味この小説のウリなので、そう言ってもらえると嬉しいです。

同じｓｓ作家同士頑張りましょうね。

あと挿絵ですが、質問板の方に詳しく説明してくれている方がいらっしゃいますのでそちらを見てみてはどうでしょうか。

０４．始まりは突然に（後書き）

こんにちは、八神煌斗です。

とうとう始まりましたやっちまいました本編突入。
次回はかるーく戦闘パートかな、と思います。

それにしても鈍ってるな、と。
中々ストーリーが浮かばない上に文章力もかなり落ちている気がします。
読みにくいでしょう、ゴメンナサイ。

そ、それはともかく、皆さんの感想が書かれていたり、お気に入り件数が増えていたりすると本当に嬉しいです。
まだまだ捨てられていないな、との安心感もあります。

あ、それと今更ですが、ウィズ君、結構色んなところに出張していたりします。
そちらも読んでみてください。

それでは二日後に会いましょう！

05．激情の赤・離反の白

俺の目に写った三つの影。

一人は女性。
腰まである灰色の髪は三つ網に黒いリボンで結ばれている。
着ているのはバリアジャケットだろうが、煤などで汚れているせいで細かいことはマッタク分からない。

残る二人は男。
片方は全て逆立てている黒ずんだ赤い髪。着ているジャケットはライダースーツの様に体にフィットしていて、簡単なジャケットを羽織っている。
色は髪よりさらに黒ずんだ様なと赤。

残りの一人は、白い髪。
それも俺のような濁った色ではなく、純粋な白、純白である。
ジャケットも色が白とい言う点を除けば赤いヤツと全く同じ。

今の立ち位置は女性を二人の男が半壊した建物の上から見下ろしている形だ。
そして俺は女性の後ろに立っている。
お互いがお互いに集中しているようで俺の存在には気づいていない様子。

どうする？

考えている内に、間の前にいる女性が体を沈めた。

「止まれ！　時空管理局だ！」

ここで再び戦闘を再開させる訳には行かない。
俺はとっさに叫んでいた。

「都内での魔法戦闘行為は禁止されている。全員、武器を納めて投降しろ」
《武器なんて持っていないがな》
《もう、相棒の慌てん坊さん》
「水差すな、馬鹿共。特にアテナは気持ち悪い」
《ヒドい！！》

アテナのＫＹさにウンザリしながらも、目の前の三人から目を離さない。
相手は抵抗し、俺に攻撃行為、又は逃走すると俺は思っていた。
しかし、俺の予想は大きく外れることになった。

「――ク、ククッ……あはははははっ！」

赤髪の男が狂ったように片手で顔を隠しながら笑い始めたのだ。

隣にいる白いヤツも君の悪い笑みを浮かべている。

キモチワリィ……。

「バカッ！　何で出てきたのよ!?」

「は？」

女に至っては駆け寄ってきて俺に罵声を浴びせてくる。一体なんだって言うんだ？

状況がまったく理解できねぇ。

「は？　じゃなくて……っ！　危ない！」

「!?」

突然、女が俺を突き飛ばす。

そしてほぼ同時、俺の居た場所が爆発した。

魔力弾が打ち込まれたんでもない。ただ爆発した。

「なっ……どういう――」

「早く立ちなさい！　次、来るわよ！」

「っ！」

女に即され立ち上がり、後ろに後退する。

そしてまた、俺の居た場所が爆発を起こした。

「一体どうなってんだよ！？」

とにかくランダムに動き回りつつ、男たちを見る。
白いヤツは右手を俺に向けていた。

だが、それだけだ。
魔力弾どころか、魔方陣さえ展開されていない。
なのに――……。

《マスター、右だ！》
「くっ！」
《相棒、好きだ！》
「頼むからお前は黙っててくれ！　空気がぶち壊しだから！！」

まるで打ち出しているように、俺の行く先々で爆発が起こる。
アテナ達によれば確かに魔力反応はあるみたいだ。

何かのレアスキルと見たほうがいいな……。

「おい、女！」
「何よ！　今忙しいの……よっ！」

俺と同じように、爆発を避けていた女に問いかける。
横目で何度か見たが、どうにもあの男たちに向かっていこうとしていた。
それもあの不明の爆発に遮られてたみたいだけどな。

「あいつ等とは敵対してるって考えていいか！？」

さっきまでの様子を見れば一目瞭然。
この女はあいつ等とは敵対している。
そして俺を庇った。
なら――。

「当たり前でしょ！　というか私はあんたの味方よ！」

やっぱり。
味方って言い切ってる事は少し気になるが、今は言ってる場合じゃねぇし。
もし嘘でも、少なくともこの状況を抜け出すまでは裏切らないだろう。

「なら協力しろ！　まずこの爆発は……」
「何だと思う？」
「づっ！！？」

最後まで言い切ることが出来ずに、背景が一気に前に流れる。
それが攻撃を受けての後退だと理解するのに少し時間がかかった。

《相棒！　大丈夫ですか！？》
「あぁ、助かった」

俺は間一髪、甲冑を着ていた。
いや、正確にはアテナが着せてくれていた。
やっぱりこの辺は年季の差が出たらしい。
レイラも同じ事をしようとしたらしいが、俺に着せるのに少し時間がかかったらしい。
今更甲冑を変えてる暇も無いので、慣れたアテナフォームで行くことにする。

「捜査妨害、一般市民への攻撃及び都内戦闘。軽くは無いぞ？」

最後通告。
しかし目の前の赤髪は何も言わない。

「お前たちの目的は何だ？」
「お前だよ」

今度は即答。
だが、俺？

「――どういう意味だ？」

一瞬、ほんの一瞬アイスマンが頭に浮かぶ。
だがそれをすぐに否定する。
お世辞にも俺とは似ても似つかない。

「他に意味なんてねぇよ。俺たちと来い。神崎ウィズ」

少し前かがみの状態で俺に手を差し出してくる。
意味が分からない。
管理局員を仲間に引き込む？　しかも俺を？
メリットが無い。

「おら、どうすんだ、兄弟？」
「兄弟？」
「ウィズから離れなさい！！」
「ちっ」

会話を遮って、女が赤髪に攻撃にかかる。

赤髪の男は後ろに大きく飛び攻撃を交わし、女は守るように俺の前に立った。

「わりぃ、たすか――」

「悪いと思うならもう少し機敏に動きなさいよね」

「……悪かったな」

一言目とは大きく意味の違う『悪かったな』。

でも流石にいいすぎだろ。相手の能力、まったく意味わかんねぇんだし。

「こらユリアぁ！　邪魔すんなボケ！」

赤髪は半壊した建物の上に膝をついてこっちに罵声を浴びせていた。

白いのも隣にいる。

口悪いな、あいつ。

俺の周りにあんな口の悪いの……いや、一人いたな。切れたらあんな口調になるチッコイの。

まぁあそこまでとは言わねぇけど。

それにしてもこの女、ユリアって言うのか？

「ごめんなさいね。ウィズを守るのが私の仕事だから」

また俺のわかんねぇとこで話進んでるし。
何だ？
俺とユリア、昔に会ったことでもあるのか？

「メンドクせぇ。お前今度こそ潰すぞ……」
「できるならやって欲しいわね。出来るなら」

ユリアはあくまで余裕の態度を崩さない。
だけど後ろにいる俺にはわかる。
背中が、赤く染まっていることが……。

「いい度胸だ。ユリア覚悟できてんだろうな？」

赤髪が体をさらに沈める。
俺も迎え撃つ為にアテナをテクニカルにする。
だが、終わりはあっけないものだった。

「ここまでだ、ヴィオル」
「あぁん？」

今まで沈黙を保ってきた白いのが終了を告げた。
だが、赤髪は治まらないのか食い下がる。

「ふざけんな！　目の前にいんだぞ！　今なら一人だ！　俺たちなら……」

「駄目だ。予め増援を呼んでいたんだろう。大きい魔力が近づいてきている」

俺も言われて魔力を探る。

あいつ等の能力か、魔力が乱れてて感知しにくいが確かに魔力が近づいてきていた。

これは……なの姉。スターズだな。

「ちっ……」

流石に分が悪いと踏んだのか、赤髪の男も不満足下に立ち上がる。

「覚えておけ、神埼ウィズ。必ず迎えに来る」

そういい残し、やつ等は煙のように俺たちの前から姿を消した。

すぐに後を追おうとするが……目の前でユリアが倒れた。

「お、おい！　大丈夫か！？」

上半身を抱き上げる。

「平気よ。少し疲れただけだから静かにして」
「お……おう」

そしてユリアは目を閉じた。
薄く胸が上下している所を見ると、多分寝たんだろう。

っていうか何で大丈夫なんだよ。
ジャケット越しに滲むほど出欠してんのに。

「ウィズ君！」
「！　なの姉！」

どうしようか悩んでるところになの姉たちスターズがやってきた。

「ウィズ君、その子は？」
「戦闘してた一人。俺と協力して逃げたヤツと戦ってたんだけど……」
「だけど？」
「俺を知ってるみたいなんだ。俺を守るのが仕事、とか言ってた」
「おいおい！　それマジかよ！？」

なの姉の隣にいたヴィータ姉さんが驚きの声を上げる。
隣にいるなの姉、スバル、ティアナも声は上げてなくても同じような表情をしてる。

無理もない。俺だって驚いてるんだから。
アテナからある程度昔を教えてもらったけど、ユリアのことは聞いてない。

「とりあえず、六課に運んでいいかな？」
「私もそうしたほうがいいと思う。ヴィータちゃん」
「ああ。アタシはウィズと一緒に戻る。こっちは頼んだぞ」

こうして俺の、慌しい休日は終わりを告げた。

込め返し

ＧＰＳさん
ありがとうございます。
レイラはちゃんと毎日ウィズとアテナの教育を毎日受けてスクスクと育っています。
アイスマンの手元に戻ったときにどうなるのかは、私にも分かりませんが……
今後の期待も裏切らないように頑張りたいです。

クロックさん
私は日常等は三人称の方が書くのが難しいんですよね。
戦闘時は三人称が書きやすいですけど……。
師走のせいで少し忙しいです。

暇が出来たときに必ず読ませてもらいますね。

空羅さん

レイラは表面はそのままですが、内部はジワジワと汚染され始めています。

少なくともウィズ達のやり取りが当たり前と思える程度には……。

そんな所も見ていただけると嬉しいです。

あと、やり方をメッセージで送っておいたのでご覧ください。

０５．激情の赤・離反の白（後書き）

こんにちは、八神煌斗です。

さて、新キャラをイキナリ三人登場させてしまいました。
自分でもおかしくない様にしたいですが、何かあればオブラートに包んでご指摘もらえれば嬉しいです。

さて、今回で５話に突入しましたが、お気に入り登録や評価、感想を多くもらえてとても嬉しく、増えるたびに一人部屋で悶々と……ゴホンっ！

あ、あとコレで最後ですが活動報告にヘタレ作者から少し連絡事項を書き込んでいます。
皆様には出来れば見ていただきたいです。

それでわ！

06．ユリア【前編】

「はや姉。目を覚ましたって本当？」
「さっきシャマルから連絡があったわ。一緒に行くやろ？」
「もちろん」

あの戦闘から一夜あけ、朝一番にはや姉から連絡があった。
それはユリアが目を覚ましたって言う内容だった。
ユリアは思った通り、背中に大きな切り傷があった。
シャマル姉さんによれば攻撃を受けてから甲冑を着たんだろうということ。

まぁ、怪我自体は出血の割りに傷は浅く、シャマル姉さんのおかげで大事に至らなかった。
そして俺は今はや姉と共に医務室へ向かっている。

「シャマル、目が覚めたんやって？」
「えぇ。そこに」

医務室に入ってすぐ横、何故かある横長のソファーに薄い灰色の髪の女性、ユリアが座っていた。
髪は三つ網じゃなくてストレートにしてるんだな。
あ、目の色は紫か。昨日は見てる暇なんて無かったからなぁ。

とりあえず座ってるところを見ると、目が覚めたどころか結構元気みたいだな。

「体調はどうや？」

「まぁまぁね。とりあえず、この通り座れるくらいは元気になったわよ」

腕を組みながら言うユリア。

そういう性格なのか、見栄張ってんのか……。

「そんなことより、私に聞きたいことがあるんじゃないの？」

座ったまま目を細め、はや姉に挑発的な視線を送る。

あ、こいつマジで余裕だな。

確証なんてないけど、何となくわかる。

「そんなら詳しく聞かせてもらおか。いきなりやけど名前はユリアでええ？」

「？　あぁ、ウィズから聞いたのね。その通りよ」

何で自分の名前を知っているのか不思議に思ったみたいだが、自分で答えを出していた。

その答えも間違ってないから凄いよな。

「何で街中で戦闘なんてしたん？」
「あれは私のせいじゃないわよ。あいつ等のせい。言っとくけど私は攻撃なんていたの一回だけよ」

ん？って事は俺を守ったときの一回だけ？

そういえば昨日の戦闘中もその時しか攻撃してなかったな。
あの意味不明な爆発のせいで近づけなかったってものあるんだろうけど。

「私はただ追われてただけ。ま、そのせいで町があんな事になったのは否定しないけど」
「何で追われてたんや？」
「ウィズに会う為よ」
「俺？」

はや姉が逃げる理由を聞いたら、ユリアはアッサリ俺だといった。
昨日もそうだったけど、コイツ……俺のこと知ってる？

「お前……」
「悪いけどその言い方は止めて。呼ぶなら名前で」
「……ユリアは俺の事を知ってるのか？」
「勿論。と言うかアンタは私の顔を見て何とも思わない訳？」

自分のことは名前で呼ばせておいて俺はアンタ呼ばわりか？

だけど自分に見覚えないか、とか。新手のナンパか？　古いぞ。
馬鹿な事を考えながらも記憶を辿ってみるが、ユリアの顔には全く見覚えはない。
でも何か引っかかるモンもあるんだよなぁ。

そう考えてる時、ユリアがあ、と言って手を叩いた。

「確か記憶無いんだったけ。分からないのは当然か」
「……あんた、何者や？」

はや姉が最初とは比べ物にならない程、警戒した声でを出した。
シャマル姉さんも警戒し、俺の前に壁になるように立つ。

無理も無い。
俺がロストロギア級の能力持ちと言うことや、ＦＳ計画の完成例だと言うことは既に管理局内に知られている。

だけど、俺の過去まで知っているのはこの起動六課のはや姉たち隊長陣だけだ。
俺の記憶が無いと言うことは外部に漏れることは絶対にない。
怪しむのは当然だ。

だが……。

「私が答えてもいいけど……もう気づいてるんでしょ？　アテナ、レイラ」
「……本当か？」
目線を下ろし、首にかかっている二つの指輪を見る。
疑うわけじゃない。だけど、確かに昨日から様子がおかしかった。
レイラは兎も角アテナの口数が異常に少ない。
しかも時々念話を使って二人で話してるみたいだ。
デバイス同士が念話ってどうよ？
《ありえません》
「そんなことは無いわよ。現に此処に居るんだから」
「おい、お前ユリアの事を知ってんのかよ？」
この様子だと、心当たりはあるみたいだな。
《ユリア自身は私も知りません。ですが、魔力は知っています》
「魔力？」
《彼女の魔力……アリヤ嬢とまったく同じなのだ》
「アリヤ？」
もったいぶった言い方しかしないアテナに変わってレイラが説明し

てくれた。
それにしても……アリヤ？
それって確か、母さんの名前だったよな？
魔力反応が同じ？
まさか……。

「ウィズも気づいた見たいね」

腕を組んだまま、足も組み、見上げるように聞いてくる。
まるでこっちこ挑発するような。

「ありえへん」
「さっきも言ったでしょ。ここに居るのが事実であり、最大の証拠よ」

はや姉の言葉も真っ向から否定する。
ユリアはソファーから立ち上がり、俺たち三人を見据え、口を開いた。

「私はユリア。ＦＳ計画で作られたアリヤのクローンよ」

紛れも無い真実を告げた。

「そして、ウィズを守護するために生まれた騎士」
「ウィズ君の……騎士？」

シャマル姉さんから絞り出すような声が聞こえた。
もう俺もはや姉も何も言わない。いや、言えない。

ユリアは信用云々以前に怪しすぎる。
俺が医務室に来てから、ユリアから聞く一言一言が突拍子の無いことばかりだ。
これでハイそうですかって言えるヤツはどうかしてる。

「ま、そんな顔されるのは分かってたけど……。いい気分じゃないわね」

頭を？きながら、呆れたような、疲れたような口調のユリア。
さて、どこから話したらいいかしら……。なんて言っている。
もう俺もどっから聞いたらいいのかわかんねぇよ。

「簡単に説明してあげるわ。質問してくれたら答えてあげる。ＯＫ？」

しかもいつの間にか仕切ってる。
もしかしたらはや姉以上のカリスマ持ちかもな。

「ならウィズのおか……アリヤさんのクローンって言うのはどういうことや？」
「そのままの意味よ。生まれたのは確か……新暦６６年だっけ」

闇の書事件の翌年か……って！

「ちょっと待てぇ！　なら何か！？　お前――」
「ユリア」
「……ユリアお前何歳だよ？」
「あんた計算も出来ないの？　今年で９よ」
「……」

アリヤが年を言った瞬間、部屋の気温が急激に下がった気がする。
はや姉とシャマル姉さんは目を限界に挑戦しているのかってくらい開いている。

そうだよな。
だって見た目はどう見ても俺やはや姉より少し上に見える。２０代とかその辺。

それが何だ。真顔で９歳。エリオよりも年下……。

「あぁ、安心しなさい。私の肉体年齢は２１だから」
「なんでそっち言わねぇんだよ！？」
「女は若く見られたいものなのよ」
「限度があるだろ！？はや姉もシャマル姉さんも頷かない！！」

もうさっきまでの空気は綺麗さっぱりなくなっていた。
それどころかあの一言ではや姉が警戒心を解いてるっぽい。
まぁ俺だって悪いやつとは思わないけどさ。
なんだかなぁ……。

06．ユリア【前編】（後書き）

こんにちは、八神煌斗です。

さて、今回はユリアが何者なのか、と言うことだけで終わりましたね。

少し詰め込みすぎた感が否めませんが……こんなキャラが居てもいいじゃん。
と言うことで採用しました。

次回は後編です。

さて、話題は変わりますが、次回からの感想はアンケートの結果、コメ返しはウィズ達にやってほしいと言う声が多かったので来年からそうさせてもらいます。

そして、年末特別編も現在執筆中です。
参加キャラクターの紹介や、あらすじ等はまた後日、活動報告でさせていただきます。

それでは皆さん。二日後にお会いしましょう。

07．ユリア【後編】

今俺たちは向かい合うように座っている。
シャマル姉さんは何時もの定位置、デスクのイスに。
俺とはや姉は近くの長いす。そしてユリアはさっきまで座っていたソファー。
シャマル姉さん以外不思議に向かい合う形になったんだな。

「話戻すけど、ユリア。何でウィズに会いに来たんや？」

暫らくしてようやく脱線していた話が戻りそうだ。

「ウィズが狙われたからよ」
「狙われた？」

シレッと言うユリアにはや姉は怪訝に聞き返す。
また話がとんでもない方向に飛びそうだ。

「そ。私を追ってた奴等……って言ってもウィズしか見てないんだけど」

あの赤髪と白髪か。
俺でもすぐに只者じゃねぇって感じた。
正直悔しいが、俺じゃ勝負になるかすら怪しい。

「そいつらがウィズ、正確には能力なんだけど。それを狙ってるのよ」

俺の能力。

それは【封印の力】
俺自身使ったことねぇし、力自体も厳重に封印されているから実感なんて全く無いんだけど。

「それがホンマやとして、目的を知ってるのは何でや？」
「あなた、何でや、ばっかりね」
「う……し、仕方ないやろ！」

まぁね。と、自分からツッカかといて流すユリア。
はや姉は明らかに不機嫌な顔をしている。

仲良いね、二人とも。

「私も同じグループに居たからよ。情報を掴めるのは当たり前でしょ？」
「はぁ……」

「む。何よ、そのため息」
「気にしないでくれ」

これがため息つかずに居られるかってんだ。
もう一々反応してたんじゃ身が持たない。
はや姉も隣で頭を抱えてるし、シャマル姉さんは机に突っ伏してる。
何であなたが一番疲れてるのでしょうか？

「それで結構前から探してたんだけどね、ウィズ、ココ最近頭痛とか無かった？」
「そんなの……あ」

あった。アグスタ警備の任務のとき。
あれはてっきりアイスマン関係だと思ってたけど……ユリア達のせいだったのか。

「ウィズってば次元世界転々としてて居場所特定できないし。ちょっとした強攻策ね。それも失敗だったけど」

次元世界云々ってのは、多分あの二年間の事を言ってるんだろう。
ロストロギアを破壊、確保する為に別次元世界を飛び回ってたしな。
ミッドに滞在したのも長くて５日。怪我の治療で１０日だっけか？

「そんなことまで知ってんのか……」
「だから今の今まで、正確な居場所が特定できなかったのよ。だけどつい最近、ウィズの居場所特定るることができた」
「スカリエッティの放送やな？」
「ご名答」

はや姉の質問に、後ろに音符が付きそうなくらい上機嫌な声で人差し指一本立てて答えるユリア。
もうシャマル姉さんは聞くことに徹することを決めたようだ。

それにしても、あの放送か……。
確かにあん時『起動六課の部隊長殿！』とか『神崎ウィズ！』とか言ってたな。
しかもその後六課としてゆりかご戦で結構派手にドンパチやったからなぁ。
居場所を見つけらるのは当たり前か。

「で、落ち着いてきて緩んでるだろうって事で今日辺り攻め込む予定だったのよ」
「さらりと恐ろしいこと言うとるな？」
「そこで私はウィズを守るため、前日……昨日組織を抜けたって訳。お分かり？」
「そこや！」
「うお！？」

突然はや姉が大声をだした。

今まで少し重い内容って事もあってユリア以外は比較的声が小さくなっていた。
そこで突然、しかも隣で大声を出された。
驚くなって方が無理だろ？

「さっきから言ってるウィズを守る。とか、守護騎士とか……どういうことや？」

それは俺も気になっていた。
守ってくれるのは情けない気がするけど……そうなる意味がわからない。

いくら母さんのクローンだからって、意思は個人にあるモノだ。
つまりユリア自身の意思で俺を守ると言ってくれてる事になる。

「頼まれたって言うのもあるけど……単純に私がそうしたいからよ」
「頼まれたって誰に？」
「あなたのお母さんによ」

もう驚かないぞ。
飛んだ回答が帰ってくるのは何となく分かってたからな。

「私が生まれた日、つまり生態ポットから出た日だけどね。そこ

にお母さん、アリヤが居たのよ」

そしてユリアか自分の過去を話し出す。

「その時私はある程度記憶も受け継いでてね。思いっきり反感したのよ」

腕を組み、思い出しながら懐かしそうに語るユリア。
そして俺はその反感する姿が簡単に想像できて、不謹慎だけど笑いそうになった。

「ま、ここからはよくある話。お母さんに接して私も変わったって訳」

よくある話かは分からないが、言いたい事はわかった。
だけど、それが俺を守るって事とどうつながるんだ？
全く接点がないように思えるけど。
まさか母性ってガラでもないだろうに。

「話は最後まで聞きなさい。私が生まれてから三年後……ひとつの事件が起こったの」

《（相棒）》

「（？アテナ？）」

ユリアの話の途中で今まで黙っていたアテナがワザワザ念話で話しかけて来た。

「（何だよ一体）」

《（ユリアさんが生まれた三年後、つまり新暦６９年。分かりませんか？）》

「（全く）」

悪いが今回はふざけてる訳でもなく本当に分からない。

６９年。確かはや姉が上級キャリア試験に受かった年だ。

でもこれが関係ないのは明白だし。

《（あの発信者不明の研究日誌ですよ）》

「（研究日誌……あぁ！）」

思い出した。

六課にきて初めてレジアスのおっさんに頼まれたときだ。

たしかプロジェクトＦ．Ａ．Ｔ．Ｅって明記されてるヤツだったな。

《（新暦６９年　２／５

　ヤツらが反乱を起こした。この記録を、研究成果を誰かが受け継いでくれることをねg。この一文。おそらくユリアさんの言

ってる事件と同じものかと）≫

ヤツらが反乱。これを前文から判断すると造られていた者たちだと思う。
ユリアの言うことは大よそ、俺が予想した内容と同じだった。

この二月五日。
ある人物が作られた者たちを引き連れ反乱を起こしたらしい。
この騒動が起きたとき、ユリアは母さんと少し離れたところに居て気づくのに遅れ、気づいた時には既に施設は火の海。
その中で造られた者たちが、造った者達も復讐をしていた。

「この時の私は自分でも認める程のマザコンでね。一緒に逃げようって言ったんだけど」

母さんはそれを拒んだらしい。
自分を逃がせばユリアも追われる事になるから、と。

結局ユリアは母さんを説得できずに母さんは別の脱出口から逃げることになったのだと言う。

「その別れ際に言われたのよ。『アナタとウィズは兄妹、どちらも私の子。兄妹は助け合うの。だから何時か、めぐり合ったら助け合いなさい。約束よ』ってね」

この言葉を最後にユリアと母さんは分かれたのだという。

そしてユリアは母さんの言いつけを守り、俺を守れるようにと力をつけ、今回俺を助けに来たらしい。

「なぁ、今の話やと今回ウィズを狙ってるのはかなりの人数がうるんとちゃう？」

すべての話を聞き終え、はや姉がユリアに問いかけた。
今の話がすべて本当ならＦＳ計画で造られたヤツらが敵に回ると言うことだ。

「それは心配ないわ。もともと研究途中の技術。反乱の首謀者共々殆どが死んだわ」

その一言に、苦しくなる。

俺だって同じ方法で作られたのに、苦しい思いもせずに、楽しい毎日を送っていた。
だけど、俺の知らないところで、苦しんで死んで逝ったヤツも居る。
くそ……。

「今残ってるのは三人……そんなもんじゃない？」
「なんや、それならどうにかなりそうやな」
「本当にそう思う？」

はや姉が安心した声を、ユリアが正面から打ち砕いた。
ユリアの目は、真剣そのものだった。

「逆に今まで生き残ってるって事は実力も相当なものよ。下手をしたらＳＳランクいってもおかしくないわね」

本当に笑えない。

ＳＳクラス魔道師が三人。
しかも全員がレアスキル、または変換資質持ち。
荷が重過ぎる。

「ま、安心しなさい。私がちゃんと守ってあげるから」
「お、おう」

俺に歩み寄ってきて肩を組んでくるユリア。
あまりに突然で適当に返した。

それにしても何でかなぁ。

隣からの視線が痛いよ。

07．ユリア【後編】（後書き）

こんにちは、八神煌斗です。

かなり早足で進めました今回の話。
閲覧数、感想ともども下がり気味だったので、受けはよくなかったみたいです。
これからも精進がんばります。

それにしてもオリストは本当に難しい。
オリジナルで書いている人、本当に尊敬します。

さて、これからの予告ですが、今週で一旦休憩させてもらいます。
ですから今年の更新はあと三回だけになります。

すこし評判が悪いのかと不安になってるのでできれば感想ください。

それでは皆さん。
二日後にお会いしましょう。さようなら。

08．妹萌え？

「そういえば俺の能力が欲しいって……また何かの制御装置か何かか？」
「そうよ。確か……魔力が集まる……何とかの渦がどうたらこうたら」
「曖昧だなぁ」

頭の隅にある記憶を手繰り寄せるように、思い出しながら答えるユリア。
いくら抜けたと言っても昨日まで仲間だって癖に。

「仕方ないでしょ。元々怪しまれてたから私に情報回ってこなかったんだし」

怪しまれてたって……。
もう少し上手くやれよな。

この件については、ユーノさんに調べてもらうことになった。

魔力が集まる渦。
これだけの情報で見つかるのかと不安になるが、何故かあの人なら見つけるだろうとも思う。

その後はユリアを含めた四人で少しの間だけ雑談を交わし、今は食堂に向かっている。
シャマル姉さんはまだ少し仕事が残っているという事なので医務室に残った。

「なぁ。さっき言ってたけどユリアってウィズの兄妹にあたるんか？」

そんな中、はや姉がユリアに質問をした。

「そうなるんじゃない？　一応血のつながりもあるし。あ、お母さんのほうがいい？」
「いらん」

ユリアの話によると、俺の体は正確には元になったヤツの複製体じゃないらしい。
体の基盤は確かにその元になったヤツのモノ。
だが、母さんのＤＮＡも少なからず入っているのだと言うこと。

理由は単純。
よりよいモノを掛け合わせたほうが良いものができる筈。そういう事。

そしてその過程で作られたのが俺と、アイスマン。

だから俺とアイスマンは瓜二つで、元のヤツとは逆に似ていないら

しい。
つまり俺は単なるクローンでは無いと言う事。
そして母さんの血が流れてる俺と、母さんのクローンのユリア。
成る程。兄妹って言うのはあながち間違いじゃない。

「と言うことは……ユリアも私の妹って事やな」
「は？」
「はい？」

俺とユリアは足を止め、唖然とする。
あなた突然何言ってやがりますか。

「だってウィズは私の弟やし。その妹って事は私の妹でもあるやろ？」

うれしそうに話すはや姉。
でもそれ理に適ってる様に見えて言ってること滅茶苦茶だからな。
ほら、ユリアも頭抱えて唸ってるし。

「ウィズ、この人いつもこんな感じなの？」
「まぁ、比較的」
「はぁ……」

大きいため息だ事。
幸せ逃げるぞ。

「なんや、何か不満か？」
「不満ねぇ……。姉と言うなら責めて私より大きくなってから言いなさいよね」

不満げなはや姉に呆れたように返すユリア。
その視線ははや姉のある一点だけを見つめている。
はや姉はその視線の先を追い、たどり着いた瞬間顔に一気に赤みが刺す。
そして後ろに後ずさり、腕を組むようにしてその場所を隠す。

「う、うるさいわ！まだまだ発展途上なんや！これからや！」
「でも１９なんでしょ？その年でそれだと望み薄ね」
「うぅ～……」

言っておくがユリアがいくら俺より年下、９歳だと言っても肉体年齢は２１。
勿論成長するところはちゃんと成長している。
正直はや姉のとなの姉たちに比べて幼さも抜け切ってる。
美人とかカッコいいとかそんな言葉が似合う。

「そうね……あ、責めてあれ位は欲しいわね」

「え？」
「うん？」

ユリアが指差した先に居たのはフェイ姉となの姉。
二人ともいきなり見ず知らずの人に指差されて驚いている。

んで横では、はや姉が壁に頭をつけ、これ異常ないほどの負のオーラを出している。
そんなに、そんなに巨乳がええんか……。とか。
同性にまで巨乳であることを求められる時代になったんか……。とか呟いている。

いろんな意味で怖いから無視することにする。

「あ！あなた昨日の。元気になったんだ？」
「ええ。お陰様でね」

なの姉がユリアの事を思い出してフェイ姉と一緒にこっちに駆け寄って来る。

「よかったぁ。あ、私高町なのは。よろしくね」
「私はフェイト・T・ハラオウン。よろしく」

名前を名乗って握手を求める二人。
それにユリアも応じて手を出し、二人と握手をする。

「神崎ユリアよ。よろしく」
「え？」
「うん？」
「はい？」

コンボか決まった！

じゃなくて、今度の発言にはさすがになの姉たちだけじゃなくて俺も驚いた。

はや姉は相変わらず向こう側に居るけど。
まぁ、八神家……てか、はや姉に胸の話題はいろんな意味で禁句だからなぁ。

そしてはや姉を送った当の本人は「やっぱりこれくらいはいるわよね」とかいってる。

「おい、何で神崎なんだよ？」
「別にいいじゃない。お母さんの姓を名乗る資格なんてないし。別に兄妹なんだからいいでしょ？」

別に構わないけどよ。
何でこんなタイミングで、しかも兄妹とかサラッと言うかねぇ。
そんな事言ったら――……。

「え!?　き、兄妹!?」
「ウィズ、どういうこと!?」

ほれ見ろ。やっぱりこんな状況になった。

「ウィズ！　アンタまで巨乳派か!?　フェイトちゃん達みたいなけしからんのがええんか!?」
「はやて、けしからんって何!?」

いやもう……勝手にしてください。

ここから先は言うまでもなく、ユリアが二人に説明をした。
二人とも滅多に見られない様な顔をして驚いてた。無理もないけどな。
因みにその間俺ははや姉に絡まれていた。

んで今は食堂。
俺が絡まれている間になの姉達とユリアは何故か仲良くなり、今は楽しそうに話しながら食事をしている。

何ていうか……なんでそんなにナチュラルに仲良くなってるのかな?
少しは疑っても良いと思うんだ、俺は。

そりゃ姉さん達が疑うことをあんまりしないのは知ってるけど。
だけど会って数時間も経っていない相手への接し方じゃないと思う。

「ん？　なによウィズ？」

俺の視線に気づいてユリアが声をかけてきた。

「いや、なんでもねぇ」
「あ、もしかして……」

俺の素っ気無い返事に何か感じたのか、目を細め、既に見慣れた挑発的な表情をする。
もしかして疑ってるのが気づかれたか？

「私に惚れた？」
「ブーー！！？」
「うわ！？　何やってんねん！？」

俺の予想を１８０度裏切る言葉に思わず噴出してしまう。
隣で食べていたはや姉は素晴らしい反射神経で料理を避けていた。

「でも駄目よ。私達は仮にも兄妹だからね。残念でした」
「違ぇよ！　何その自信！？」

机を叩き、乗り出して言い返す。

ここでちゃんと否定しておかねぇと、後々言われそうだ。

「ムキになるって事は……図星？」
「だから違ぇ！」
《相棒……だから逆効果ですから……》

アテナが呆れたように言う。
って言うかここまで全く喋ってなかったくせに、一言目がツッコミかよ。

「あ、でもこの場合どうなるのかしら？」
「ユリア、どうしたの？」

何かを思いつき、考える素振りを見せたユリアにフェイ姉が不思議に思ったんだろう。
ユリアを挟むようになの姉と座ってたから、隣にいるなの姉もユリアも見てる。

「私の年、言ったでしょ？」
「うん。９歳でしょ？信じられないけど……」
「この場合ウィズって幼女趣味になるのかしら？ほらロリコンって言うの？」

本日二度目の気温低下。

冬に近づいている今、気温の低下は厳しいのです。
ほら、なの姉とフェイ姉の目が凄く冷たい。
俺が何かしましたか？

「あ、ウィズさーん」

なんな時、救いの手が差し伸べられた。
スバル達ＦＷ陣が来たのだ。
今日の朝練には参加してなかったし、今日始めて会うことになる。

「よう、スバルにティアナ。エリオとキャロも一緒――」

シュバッと。こっちに向かってきていたエリオとキャロ前に金色の光が現れた。
まぁ、言うまでもなくそれはフェイ姉なんだけど。
二人を庇うように前に立っている。なぜエリオまで庇ってるのかな？

「泣いてもいいかな？」
「げ、元気出して、ウィズ君！」
「そうやで！　私はどんなウィズでも受け入れるで！」

普段そんな風に言われたら嬉しいんだけど、この状況では追い討ち

以外のなんでもないですよ。特にはや姉。
ＦＷ陣は目を丸くして状況が掴めていない。
フェイ姉は体が勝手に動いたって、俺に色々説明してる。
なの姉とはや姉は苦笑い。

そしてこの状況を作り出したユリアは知らん顔で食事を再開しながら

「あ、妹萌えって言い方もあるわね」

とか言ってる。

《（これが俗に言うカオスですね）》
《（この会話を交わしている私達も含まれて、だろうがな）》

本当だよ、チクショウ……。

この状況はシグナム姉さん達が来るまで続いた。

コメ返し

ａｓａｋｕｒａさん
貴重なコメ、ありがとうございました。

複雑な設定が無いのにグダグダ、と言うのはかなりの欠点だと思うので早くどうにかしたいです。
言われて初めてこの作品に方向性が無かったことに気づきました。
『面白おかしく好きなように』と思って書いていたので。

08．妹萌え？（後書き）

さらに読者が減りました。八神煌斗です。
もうどうしていいかわかりません。

今回のａｓａｋｕｒａさんのコメは為になりました。
本当にありがとうございました。

ですが、名前は出しませんが、メッセージを送ってきてくれた人。
あれは思うんですよ？
さすがに『面白くない。やめろ』と言われては……。
どこが駄目なのか言ってほしいです。

さて、誤解の内容に言っておきますが。、ウィズのコメ返しは来年からになります。
それでは、また二日後に会いましょう。
さようなら。

09．特別魔法

ユリアと出会って五日経った。

今回の事件の事は不透明は事が多過ぎる為、上には特に報告していない。
俺とスターズが報告書を提出した程度。勿ユリアの事は殆ど書いていない。
ま、書いた所で信じてもらえないだろうし。

信じられたとしても俺とユリアが保護観察下になる恐れも会ったからだ。
正直、今の六課の戦力はある意味本局相手に拮抗出来そうなくらいだし。

それでユリアだが、立ち居地は俺を訪ねてきた途中に事件に巻き込まれた健気な妹らしい。

あの気さくな正確が良かったのか既に六課に馴染んでいる。
何だか人気も有るみたいで、この前ヴァイスさんが紹介しろとか言ってきた。
もし管理局に入るなら競争率が上がりそうだから今のうちにお近づきになっておきたいとの事。
正直なのは良いことだけど、仮にも身内の俺にそこまでぶっちゃけるのもどうかと思う。

一応紹介しておいたけど後日、生気の無い顔で歩いてた所を見たのはまた別のお話。

で、今俺は恒例の様だが、食堂に居る。
メンバーはいつものＦＷ陣と、ユリアを含めた６人。
朝練が終わって皆で飯を食いに行く途中、ユリアが加わったという形だ。

「そういえばユリアさんってどんな魔法使うんですか？」
「私？」
「あ、私も知りたい！」
「こらスバル！」

エリオが少し興奮しながらユリアに聞き、便乗するようにスバルも声を上げる。。
ティアナもそんなスバルを注意しているが、チラチラとユリアを見てる。

そういえば俺も知らねぇな。

なんて考えながらそばを啜る。

「あれ、エリオ。もしかしてお姉さんに興味あるの？」
「あ、いえ……。そういう訳じゃなく……」

声が尻すぼみになり、顔を赤くして俯くエリオ。
隣でキャロが睨んでるのに気づいてるか？

「あんまからかってやんなよ」

もうこの数日間でユリアの性格は大体わかった。

まず、隙あらば人をからかう。あの目を細めた挑発的な表情で。
その表情は妙に色っぽく、ヴァイスさん何かはそれにやられた口だ。
後は良くも悪くもマイペース。
こいつ母さんのクローンって言ってたけど、性格は絶対に反映されてない。
記憶無いけど言い切れる。

「はいはい。そうね、何なら見せてあげよっか？」
「本当に！？」

スバルが身を乗り出す。
目がスッゴイキラキラしてる。

「おい、ここ室内だぞ？」

どんな魔法を使う気かは知らんが、こいつの事だ。
実演するって言ってる時点で嫌な予感がする。

「分かってるわよ。ほら行くわよ」

そういってユリアは右手の平を握り出した。
もう何を言っても無駄だろうし、俺は大人しくその光景を見ることにする。

「――ｃｒｅａｔｅ（クリエイト）――」

短くそう唱え、右手を開く。

その掌の上にはユリアの髪色と同じ灰色の鳥が居た。
簡素な飴細工の様な見た目だが、それは間違いなく鳥だった。

「おぉ、すげぇな」

素直にそう思った。

魔力で球体や刃など、形を作る簡単だ。
だけど、こんな複雑な形を作り出すのは勝手が違う。

「ふふん。それだけじゃないわよ？」

ユリアがそう言うと、手の上に居た鳥が羽ばたき、飛んだ。
そして人差し指一本を立て、さながら指揮者のように指を動かす。
鳥は操られるように、宙を踊る。

これには言葉を失った。

その魔法のレベルに対してもだが、鳥を操っているユリアが絵になりすぎていた。

「わぁ！　鳥さんだ！」

そんな声が聞こえた。

声のほうを見ればヴィヴィオがなの姉に連れられて食堂に来ていたのだ。
ユリアもヴィヴィオを確認すると、鳥を操作、ヴィヴィオの肩に着地させた。
それにヴィヴィオは大喜びしている。

これがユリアの魔法と気づいたらしいなの姉がヴィヴィオの手を引いてこっちに来る。

「この鳥、ユリアちゃんの魔法？」
「そ。クリエイトで作ったアヴェ（トリ）。お母さんと作った私

だけの魔法よ」

ずっと鳥を操作しながら答えるユリア。

ヴィヴィオはそれをキャッキャッと喜んで追いかけている。

スバルがワナワナしてるのは無視だ。

「これ以外にも動物の形だったら作れるわよ」

「でもあの魔法本当に凄い。少し見ただけでも凄い複雑だよ……」

「お母さんは魔法創造（マジック・メイク）が得意だったらしいし、私も一応本人だし」

「魔法創造（マジック・メイク）？」

なんだそりゃ？そんな単語初めて聞くぞ。

まぁ名前の意味通りだと思うけど……。

《相棒、以前教えましたよ？　教導官試験の勉強中に》

「そうだっけ？　まぁ、受かっちまえばこっちのモンだし……」

《だから忘れたと？　情けないな、現マスターは……。嘆かわしい》

「ぐ……」

二人してそこまで言うこと無いと思うんだ。

アテナだけでもしんどいのに。最近はここにレイラも加わったからな。

心労が絶えない……。

「魔法創造（マジック・メイク）は名前の通り魔法を作る事。大層な名前だけど、誰でもしてることよ」

って事は俺のソードダンスもそれになるって事か？
名前負けだな。

「母さんはその能力が特出してね。だから私が生まれたんだけど……。クリエイトみたいな複雑で特別な、他の人が真似できない魔法を作れたのよ」

俺の母さんってそんなに凄い人だったのか……。

確かにこの魔法は滅多なことが無い限り、ユリアしか使えないだろう。
どういう効果があるのかは分からないけど、これを覚えるくらいなら他の魔法を覚えたほうが何倍も効率がいい。

「なんか魔法創造者（マジック・メイカー）とか呼ばれてた見たいよ。詳しくは知らないけどね。……なんなら私のこともそう呼ぶ？」
「呼ばない。というかその……クリエイトってどんな魔法なんだよ？自由に動くってだけじゃないだろ？」
「ウィズ君、それだけでも凄いことなんだよ？」

そうなんだろうけど……。

ユリアの事だ。動くだけって言う魔法を覚える訳がない。
意味の無いこととか絶対にしないタイプだからな。

「そういうなら見せてあげるけど……責任はあなた持ちよ？」
「は？」

責任って何だよ？
そう聞く暇も無く、ヴィヴィオの周りを飛んでいた鳥がユリアの元に戻ってくる。

そして――。

「――ｐｌｕｎｇｅ（つっこめ）！――」

短く命令、指を食堂の壁に向けた。
瞬間、鳥は指し示された壁に光の線となり、突っ込んで行き、壁を貫いた。

俺たちは言葉すら失い、小さく開いた壁を見つめる。
唯一ヴィヴィオがすごーいって行って拍手をしてる。

ユリアはその言葉を聴き軽く微笑み、指を自分に向ける。

「――ｔｕｒｎ（もどれ）！――」

そして別の箇所に穴を開けて戻って来た一羽の鳥は、今度はスバルの頭の上にとまった。

スバルは大喜び。ヴィヴィオは残念そう。

俺はどうして言いか分からない。

「じゃ、修理費はウィズ持ちね」

この日、俺ははや姉に一ヶ月分の給料が飛ぶことを知らされた。

予断だか、この日からユリアはヴィヴィオにお姉ちゃんと慕われるようになった。

「俺と同じ髪色じゃなかったっけ？」

《……》

《……》

「何か行って！？」

コメ返し

ａｓａｋｕｒａさん
コメと励ましのお言葉ありがとうございます。
こう、ほのぼほ書いてるときが一番楽しかったりします。
結構後先考えずに書いてたりするので。
これからもがんばっていきます！

ナイトホークさん
はじめまして。
応援ありがとうございます。
日常パートの会話のやり取りは戦闘中よか全然考えさせられます。
短く、かつ分かりやすくテンポよく。
まだまだですが、面白いといっていただけるとうれしいです。

鴇坂カスハさん
コメありがとうございます。
まぁ、かなり厳しいでしょう。
ですが、さっき調べてみたところ１５歳（Ａ－ｓエンディング時点）
ではフェイトとはやてが同率三位、なのはが五位ということが判明
しました。因みにすずかとアリサで１、２。
……４年間でなのはが逆襲したと言うことで。

09．特別魔法（後書き）

こんにちわ。八神煌斗です。

励ましの言葉ありがとうございます。
こんなこともあるだろうと思いつつ、ほんとにあって落ち込んでいたので大分元気付けられました。

さて、思いもよらぬバストサイズはさて置き、次回が今年最後の更新となります。
一応ギャグを予定しています。

が、もしかしたら大晦日に一本食い込むかも……。
正月用に書いているのが予想以上に長くなっています。
何とか抑えたいと思います。

それでは皆さん、さようなら。

10．浮気騒動

ユリアｓｉｄｅ――――――――――――――――

「……まだ眠いわね」

窓から差し込む光で私の目は覚めた。

こう何年経っても朝起きることだけは慣れない。

だからと言ってこのまま寝るのは時間を損してる見たいで嫌だ。

ベッドから抜け出し、伸びを一回。

顔を洗って、渡された管理局の茶色い制服に着替える。

最後に鏡の前で髪を整え、最終チェックをして食堂に向かう。

「あ、ユリアだ！」

食堂に着いて聞いた一言目がそれだった。

声の方向を見ると、予想通り水色のショートカットの女の子、スバルだった。

彼女はこの六課で数少ない私を警戒していないうちの一人。

本当に裏心とか無いんだけど……突然現れて何でも知っています、

って言うんだから警戒されても無理も無いけど。

私は注文した朝ごはんを手に、スバルが座っている席に向かう。
そのテーブルにはスバルの他に三人、時計回りにティアナとキャロ、エリオも一緒にいた。

この四人とは比較的友好的な関係を気づけてると思う。
スターズの二人に関しては私の年を知ってからは敬語でも無くなってるくらいだしね。

私はスバルとエリオの間に座らせてもらう。

《おはようございますユリアさん》
「おはよう……って、何でアンタがここに居るのよ?」

ツッコミを入れた相手、アテナが何故かスバルの首に掛かっていた。

《あんなヘタレの事なんてもう知りません、過去の男です》
「未練がある女の言い訳にしか聞こえないけど?」
《な、何をバカなことを! 私は決して……》

尻すぼんでいくアテナ。
感情表現を豊かにしたって言うのは知ってるけど……良いのかしらコレで?

「それでどうしたのよ？」

アテナじゃなくてスバルに聞いてみる。
するとスバルは苦笑いをしながら答えてくれた。

「何でも最近レイラばかりを使っているとか何とかで……」
「あぁ。そういえばレイラでの戦闘経験ってゼロなんだっけアイツ」

簡単に纏めるとヤキモチね？

《相棒は私って言うものが在りながら、あろう事か目の前で浮気をするんですよ！？
だから私もスバルさんと浮気することにしたんです！》
「え、そうだったの！？」

スバルが驚いて食事の手を止める。
浮気って……アンタ確か女性人格じゃなかったかしら？

《そうです。ですのでティアナさん。スバルさんを借りています》
「……なんで私に？」
《？　二人は付き合っているんでしょう？》

アテナがいい感じに暴走してきてるわね。
見てるこっちは面白いけど……本人と巻き込まれた側はたまったもんじゃなさそう。
でも見てるだけってのは……ね？

「あら、私も付き合ってるのかと思ってたわ」
「ユリアまで！　違うわよ！　スバルもなんか言いなさい！！」
「あ、あはははは……」

向こうが盛り上がってる間に、今度はエリオをからかおうかしら。

「いい、エリオ。コレが禁断の関係よ」
「え……あ……はい」

隣に座っていたエリオに小さい声でそう言う。
案の定、聞いたとたん顔を真っ赤にして俯いてしまう。
純情ねー。

「あの、きんだんのかんけいってなんですか？」

どうにも聞こえてた様子のキャロ。
単純に疑問に思ったみたいで私に尋ねてきた。

「んー……うっふんあっはんな関係」
「うっふんあっはん……ですか？」
「そこ！　変な事を教えない！！」

「話し戻すけど、アンタ何時までそうしてるつもりよ？」
《相棒が土下座して、三回回ってワンと言った後、私のことを女王様と呼ぶまでです》
「詰め込み過ぎで逆に面白くないわよ」
《私は真面目ですよ！？》

尚悪いわよ。

あの混乱が治まった後、テーブルの上にアテナを置きお話。
テーブルの上に指輪が一つだけ置いてあって、それを五人で囲むって言う少し変な構図が出来上がってる。

「んー。じゃぁウィズの本心を聞き出してみる？」
「どういう事よ、それ」
「一芝居うつって事」

私の提案に皆頭の上にハテナを浮かべる。
ま、コレだけで全部分かるわけないから当然だけどね。

「ちょっと耳かしなさい」

私はテーブルに乗り出して、小さな声で説明を始める。

シナリオはこう。

1．六課に殺人犯が侵入して、アテナを人質にする。
2．騒ぎを聞きつけたウィズは食堂に駆けつける。
3．犯人はアテナに刃物を突きつける。
4．ウィズは「俺が身代わりになる！だからアテナを離してやってくれ！」と交渉する。
5．それに心打たれた犯人は「こんな相棒が居るやつを殺すことは出来ない」って言ってアテナを開放。

「――で、最後にウィズが俺が悪かった、俺のそばに居てくれって……」
「なるかーー！！」

最後まで言い切る前にティアナの声で中断さえられた。

「耳元で大きな声ださないでよ。そうね……犯人役は……」
「じゃなくて！　無理あるわよ！　何で人質がデバイスなのよ！？」

「二人を仲直りさせるためだよ、ダメだなーティアは」
「そういう意味じゃないわよ！」

優越感に浸っている様子のスバルにツッコミを入れるティアナ。
でもスバル言ってるのが正解なんだけどね。

「あんたもコレで良いでしょ？」
《構いません！》
「構いなさいよ！？」

今度はアテナにツッコム。
大変ね、ツッコミ役も。

「犯人だけど……ここに居るメンバーは無理そうよねぇ……。あ、やりたいなら別にいいわよ」
「あ！　じゃぁ私やりたい！」
「ダメに決まってるでしょ！！」
「え～。じゃぁティアも一緒にやる？」
「そういうことじゃないのよ……」

疲れきった様子でテーブルに突っ伏すティアナ。
流石にコレだけ全部にツッコミを入れてたらそうなるでしょうね。

「さて、ツッコミ役も居ないことだし真面目に考えないとね、犯

人」

「お？　皆で集まってなにやってんだ？」

「……いた」

「あん？」

私の後ろに居たのはヘリのパイロットだった。

「あ、ウィズさん着ましたよ！」

「よし、準備して！早く！」

「何で俺がこんなことを……」

スバルの声で一斉に準備に掛かる。

私の後ろでは、目元以外隠した黒いフェイスマスクを付けた男、ヴァイスが文句を言いながらも準備を開始し始める。

因みに食堂にいたほかの局員にも協力を頼んでる。

皆面白そうだとか良いながら快く協力してくれた。

何人かに休日誘われたけど、そういうのには笑顔で引っ叩いておいた。

「いいから、始めなさい」

「はいはい……うらぁ！　お前ら動くなぁ！　こいつがどうなっても良いのか！？」

「んあ？何の騒ぎだ？」

ヴァイスが騒ぎ始めたと同時に、食堂にウィズが顔を出した。

「あ、ウィズさん、実は――」

「六課で犯罪とはいい度胸だ！　レヴァンティンの錆にしてくれる！」

「え？　ちょっと待ってください、俺で――」

「問答無用！！」

「ギャーーー！！」

「――たった今殺人犯が捕まったところです」

「それは良かった」

一瞬で静かになった食堂にスバルとウィズの声だけが響いた。

流石の私もこんな展開になるとは思ってなかった。

「あ、そうだスバル。アテナ返してくれないか？」

《嫌です、帰りたくありません》

何の脈絡も無く、ウィズがスバルて手を差し出した。

当然まだ怒っているアテナはそれを拒否する。

「いや、そろそろ戻ってきてくれねぇと仕事が進まねぇんだって。レイラは慣れてないから期待できねぇし……」
《レイラは私より役に立たない、と？》
「だからそう言ってんだろうが」
《何処までも着いていきます相棒！！》

突然元気になったアテナ。

結局そのままアテナはウィズの元に戻り、二人仲良く食堂を後にしていった。

「万事解決ね」
「あの、ヴァイスさんは……」
「万事解決よ」
「……はい」

コメ返し

ａｓａｋｕｒａさん
毎回コメありがとうございます。
更新に関しては自分でも少し不安だったりします。
プロットは完成しているんですが、そこに肉付けをする過程がどうにも苦手です。
最後も何択か用意していますが、未だに決められない始末。（ふざ

けてバッドエンドまで考えた）

とりあえず、最終局面までは今の更新速度を保ちたいと思います。

１０．浮気騒動（後書き）

こんにちわ。八神煌斗です。

今回の話、第三者から見た「ウィズとアテナ」が主題です。
私の頭の中ではこんな感じだったのですが、書いたこと無いな、と思い書きました。

あと、関西地区在住の方は特に見慣れた部分があったと思います。
そこはスルーしてもらえるとうれしいです。

さて、今年の更新は多分最後です。
もしかしたら大晦日辺りに一本行くかもしれませんが、期待しないでください。

後一回くらいは活動報告を書きますのでそのでご確認ください。

それでは皆さんよいお年を

P．S．
いないと思いますが、自惚れてるので一言。
とりあえず毎日ログインはする予定です。
ウィズを使いたいと言う人はメッセージを送って置いてください。

特別企画　『第一夜・交わる道』（前書き）

今回の話は本編とは完全独立しています。
本当は外伝の方に掲載しようかと思いましたが……何となくコッチにしました。
もし、外伝の方がいいと思うならお知らせください。
ぶっちゃけ、今でも悩んでますので。

さて、今回はＷｉｔＨを加えて他のなのはｓｓ４作品クロスとなっています。
各作者様、ありがとうございました。
口調など、気をつけましたが、おかしいところが少々あるかと。
その時はお知らせください。

それでは。お楽しみください！

特別企画　『第一夜．交わる道』

「とりあえず、休憩な。アテナはサーチ続けといてくれ」
《えー……。面倒臭い》
「なんという直球」

最近、管理局員が行方不明になる事件が起きている。
そして同時に他の次元世界で度々、変な反応も確認される様になった。

最初こそ、陸の部隊が解決に努めてたらしい。
が、最近になってロストロギアじゃないかと言う案が出てきた。
そこで矛先が向いたのが先日のＪＳ事件を解決に導いた奇跡の部隊、機動六課。

そして今俺は本来の仕事、ロングアーチとしてスターズ、ライトニングと分かれ単独で調査をしている。
因みに分かれ、と言ってもそれは区域単位でなく次元単位だと言うことを言っておく。

《それにしても、久しぶりに二人きりですね》
「あー、そういやそうだな」
《ポ……》
「音声だとドキッともしないな」
《はぅ……！？》

レイラは六課で調整中。原因は不明だが最近調子が悪いらしい。
シャーリーさんによると使用者が変わって負担が掛かったんじゃないか、ということ。

「何も見つからないなら帰っても良いんだけど……この反応がなぁ」

目の前に映し出されているモニターに映る、数箇所ある赤く色づけされた円。
それが意味するのは魔力が安定していない――つまりメッチャ危ない所ってこと。
そんな世界に俺は居ます。

「……そうだ、六課へ帰ろう」
《何『京都へ行こう』見たいなノリで言ってるんですか。駄目ですよ。折角二人きりになれたんですから》
「……」

こんな会話を交しながら、もう一度モニターに目を移す。
と、一つの異変に気づいた。

「……なぁ、ココの範囲大きくなってないか？」
《魔力、次元の揺れ共に上昇中。……ついでに相棒の死亡フラグ

も同時に上昇中？》

俺がモニターに見つけた一箇所の異変。
それは安定していなかった魔力の揺れ幅が、大きくなり始めている事だった。

言うまでも無く危険。且つ、この世界が事件と大きく関係している可能性が出てきた。

「イヤな予感がするけど……行くしかねぇよな」

相棒の言う通りフラグが立ってる気がしないでもないけど、ここで行かなかったら何の為に調査に来たのか分からない。
俺はインビエルノを走らせ、魔力が揺れている場所に向かった。

数分後、例の地点の直ぐ近くから、俺は崖の上から見下ろしていた。
そこで俺の目に映ったものは――……。

「なんなんだよ、アレ……」

黒く蠢（うごめ）く、ドーナッツ型に広がったモノ。
目測で大体１００ｍくらいか、それは地面も見えないほどに集まっていた。

その中心部に不自然に見える地面、そこに二つの影があった。

二つは度々ぶつかり合い、火花を散らしている。

「人間!?　何であんな所で戦りあってんだ!?」
《動きを見るに片方がアレを操っている様ですね。もう片方が押され始めています》
「くそっ。取り合えず助けるぞ!」

インビエルノのエンジンを吹かし、一気に崖を駆け下りる。
本当は怖いけど、そんなことを行ってる場合じゃない。
崖を降りきり、アテナをテクニカルソードに展開。黒の大群に突っ込んだ。

「っ!?　何だコイツら、動物!?」

近くに来たから分かる。黒いモノは全て狼に熊に虎、鳥などの形をしている。

《相棒、これら全て生命反応がありません!》
「はぁ!?」

もう訳が分からない。
コイツらは一体何なのか。経験だけならそれなりに積んできたのに、全く予想が出来ない。

しかし、考えている暇は無い。

俺はインビエルノでナニかを跳ね飛ばし、切り付けながら進み、やがて開けた場所に出た。

「くそっ、新手か！？」

「だあぁぁ！！？」

その場に出た途端俺に向けられた西洋剣。

俺は慌ててアテナで防ぐ。

「待て待て待て！！　時空管理局だ！」

「管理局？　仲間――か！」

喋りながら横から襲ってきたナニかを頭から叩き切った男。

容姿は金髪の髪に緑色の眼。身長は俺より高く、赤い上着に黒のインナー、七分丈の黒いズボンのジャケットを着用している。

そして容姿は何故か高貴なモノを俺に印象付けた。

「なら話は早い！　アイツ倒すのに協力してくれ！」

男が言い、視線を移す。

その先にいるのは、さっきまで戦っていただろうもう一人の人物。

黒い足首まであるコートを前を開けて来ているが、フードを深くが

ぶっている為容姿は分からない。
唯一、体系から男だと予想できるくらいだ。

〈チ……増援が来たか。行け！〉

エコーが掛かった篭った声。
黒尽くめの男の指示と同時、周りにいた黒いナニかが一斉に俺達に襲い掛かってきた。

「いきなりかよ！？」
「弱点は頭だ！　後ろ、任せた！」

俺に最低限の指示をとばし、金髪の男は俺に背を向けた。

「Ｉ　ａｍ　ｔｈｅ　ｂｏｎｅ　ｏｆ　ｍｙ　ｓｗｏｒｄ」
「なっ――……」

声が聞こえた。
俺はそれが気になり、目の前の敵を切り伏せながらも後ろを見る。
そして驚愕する。

男の頭上に、幾数もの剣が浮いていたからだ。
刹那、全ての剣がナニかに向かって雨の様に降り注いだ。

《相棒、前！》
「っ！　シングルカラーズ！！」

迫ってきて居たナニかをなぎ払う。
だが、数が減る様子は無い。

乱戦でテクニカルは不利と思い、俺はアテナをダブルに変更する。
時間の感覚が無くなり始めた頃、急にナニかの動きが止まった。
そして傍観に徹していた黒尽くめの男が口を開いた。

〈さすが騎士王。中々やるではないか〉
「当たり前だ。騎士王の名は伊達じゃない」
〈そっちの灰色の男もな〉
「あ、ありがとう」
《お礼言ってどうするんですか……》

いや、つい……。
だって俺のこと褒めてくれる人って中々居ないから。

〈私も思ったより中身を殺られたようだな。悪いがココで失礼させてもらおう〉
「っさせるか！　エクスカリバー！」

黒尽くめの男が言い残し、宙に浮いたと同時。
横にいた男が急に慌てだし、その手のデバイスを構えた。

《――Ｌｏａｄ（ロード）　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ（カートリッジ）――Ｓｔｒｉｋｅ（ストライク）　Ａｉｒ（エア）――》

男がデバイスを振ると、竜巻が発生し、黒尽くめの男に向かって伸びてゆく。
だが、それは一歩届かずに空を切るだけとなった。

「くそっ……逃がしたか」

男は悔しそうな顔をし、デバイスを下ろした。

「大丈夫か？　何でこんな所に一人で居んだよ？」

俺はその男に近付き、状態を聞く。

「調査任務中にあの男に会って気づいたらここに。少し押されてたから助かった。アンタ、名前は？」
「古代遺物管理部、機動六課所属。神崎ウィズ二等陸尉だ」

名前と所属を言い、手を出す。

「そうか。俺は神藤昶（しんどうあきら）。六課って事は今日から配属にでもなったのか？」

「いやいや、俺はもうかれこれ半年は居るっての」

「は？俺の六課だけどウィズなんか見たこと無いぞ？」

その台詞に少し場の空気が変わる。

なんだかおかしい。

「あー……あれか。六課のバックヤードスタッフ」

「いやいや、俺ロングアーチだから。そっちこそ……」

「俺だって嘱託だけど、前線メンバーだぜ」

「ん？」

「お？」

お互いに首を捻る。

おかしい。

俺達の立場なら絶対に顔合わせはしてる筈だ。

なのに面識が一切ない。

「ここで悩んでも仕方ないな。はや姉にでも聞いてみるか……」

「はや姉？　あぁ、はやて先輩か」

はや姉に魔道師の後輩なんていたっけ？教導隊のなの姉とかならまだ分かるけど……。
とも思ったが、考えてもさっきの繰り返しだろうと思い通信を開いた。

『お、ウィズ。そっちは終わったか？』
「うんまぁ。でさ、六課のメンバーだって人と会ったんだけど……」
「はやて先輩。ウィズって前から六課に居ました？」
『……そっちもなんか？』
「はい？」

俺の報告を聞いたはや姉が頭を抱えだした。
今の抱える様な事は言ってないんだけど……。

『それがな、スターズ、ライトニングの方からも似たような報告があるんや……』
「え？　それって……」
『私達の事を知ってる、私達が知らん六課の隊員を見つけたって』
「……まじで？」

冗談の様に聞こえるが、はや姉の様子を見たらそれが嘘じゃないってことが分かる。

『だから悪いけど、そっちの金髪君の事は知らへんわ』
「ちょ、なに言ってるんですか先輩!?　俺ですよ、神藤昶!」

俺の後ろに居た昶が乗り出して、はや姉を問い詰める。

『……取り合えず、その昶君を連れて帰って来てくれへんか？
話はそれからや』
「うん、分かった」

この後、落ち込む昶を連れ六課に戻った。

そして昶を連れ、部隊長室に入るとはや姉となの姉、フェイ姉の三人に加えて男二人がいた。

黒髪を後ろで結っている人と、髪は顔が隠れる程長い蒼髪の二人。
因みに昶もあの容姿がセットアップの影響だったのか、今は銀髪黒目になっている。
二人とも、と言うか今更だが昶も含めて三人とも六課の制服を着用している。

立ち居地からして黒髪の男がスターズ、蒼髪の方がライトニングに拾われたってとこか？

なんて考えてるとその内の一人、黒毛の男が俺を見るなりこっちに向かってきた。

「ウィズっちに昶先輩もちゃんと居るじゃないかぁ。やっぱおいらを騙そうとしてたな？」

「ウィズ君、知ってるの？」

「いや、全然」

「そっちの君は？」

「俺も知らないっス」

なの姉の質問に俺と昶は二人で首を横に振った。

すると目の前の軽そうな男はよよよと崩れ落ちる。

「酷い！　か弱いおいらを苛めて何が楽しいんだ！！　この豆粒狸！」

「んな！？　初対面でなんちゅーこと言うんや！！」

「ん？　いつもと反応が違うぞ？」

はや姉に恐ろしい暴言を吐いた後、首を傾げ悩んでいる男。

「そういえば、そっちの人は？」

騒がしい向こうの騒がしい人は放って置いて、俺はもう一人、蒼髪の男の方を見る。

見えない顔には、眼鏡がかけられていることだけが確認できた。

「レン・クロフィール一等空尉でしゅ……です」

噛んだな。

黙ってるからクールとか寡黙なタイプだと思ってたけど……。

と言うか俺より地位上かよ!?

「あ！　わかったあぁ！！」

「うお!?」

何となく敗北感を味わっていると、さっきの黒髪の男が大声で叫びだした。

当然ここに居る全員の視線が集まるわけだが、本人は特に気にした様子でもなく、部屋の中心に移動する。

その手には何故か、カレンダー。

「そこの豆粒狸が嘘言ってなければ……」

「まだ言うか!?」

後ろではや姉が大声を出すけど、黒髪の男は一切気にした様子も無く、そのまま続け――。

「平行世界、もしくはパラレルワールドだ！」
「……」
「あ、なら自己紹介とかいるな。阿部隆浩（あべたかひろ）、よろしくな！」

空気を凍らせた。いきなりそんな事を言うんだから。
さすがの本人も少し気にしたようで少しキョドってる。

「な、なら一つ聞かせてもらう。ＪＳ事件っていつ終わった？はい、なのは！」
「私！？　え、えっと……一ヶ月くらい前、かな？」

突然指され、驚いた様子のなの姉だったが、ちゃんと答える。

「え？」
「は？」
「やっぱりなぁ」

その答えに俺たちは頷いたが、昶にレン、そして黒髪の男の反応は違った。
手に持っていたカレンダーを改めて見ながら呟いた。自分で言い出したからか妙に落ち着いている。
そしてその事に気づかないはや姉たちじゃない。

「なんや？　おかしい事あるか？」
「だってＪＳ事件っていったら一年前じゃないですか」
「いや、先輩？ＪＳ事件って六年前じゃないですか……」

昶とレンが同時に言い、さっきとは違う意味でその場の空気が変わった。
二人の言ってることが正しいなら二人は未来から来たって事になる。
だって、ＪＳ事件が終わったのは確かに一ヶ月前なんだから。

「あ、因みにおいらの方は大体一年前ね。最近六課が再建した所～」

まさかの三人目。もう訳がわからない。
俺は話に付いていけずに、早々に脱落した。

コメ返し

ＴＯＵＤＡさん
ウィズとアテナが起こしている騒ぎを第三者から見たら……。
だったんですが、気づけばティアナの苦労話？とヴァイスが可哀想な話に……。
本当は体長陣総出にしようと思ったんですが、ゴチャゴチャするのでシグナムのみでいきました。

ｋｙｏｎｓｉ２２０さん
はじめまして。……と言っても少しですが、ＨＰの方でお話しましたね。
感想を書くために登録してくださったようで、そういう方が居てくださると本当に励みになります。
同じｓｓ作家同士頑張っていきましょうね！

特別企画　『第一夜．交わる道』（後書き）

謹賀新年、あけましておめでとうございます。
ＫＨＢｂＳを予約した八神煌斗です。

さて、三作品との同時クロス。こんなに難しいとは……。
少し無謀だったかな、と後悔したのは内緒。

少しだけ各時間軸の補足しておきますと……。
ウィズは２ｎｄの４話以前。
昶は一部終了後、二部開始前
隆浩は３４話以前。
レンは５話以前。
としております。

各作者様、「この時点ではこんなことしてないぞ」って言う場合は、謝ります。
ごめんなさい。

それでは、明日は『第二夜．重なった道』

初めてのクロスなので不安です。
よければ感想ください。

それでわ！

特別企画　『第二夜・重なる道』

改めて三人は簡単に自己紹介を始めてくれた。

まず俺と接触した男、神藤昶（しんどうあきら）。年は２２ではや姉達の後輩、シグナム姉さんの弟子らしい。

次にスターズと接触した阿部隆浩（あべたかひろ）。年は１７。魔法以外に陰陽術をってのを使うらしい。

最後にライトニングと接触したレン・クロフィール。年は１９、一等空尉だから俺より偉い。

三人共にに共通して言える事は、自分たちの世界で黒いナニかと戦闘中に飛ばされたとのこと。

ただ昶だけはあのコートの男も居たらしいが。

「本当にテスタロッサ執務間が来てくれなかったら危なかったです」

「俺はなのは達が来る前に全部やっつけちまったけどな！」

成る程。

レンはフェイ姉に助けられて、隆浩は全部一人で――って！？

「あの数を一人でやったのか！？」

「あれくらいおいらにとっちゃ朝飯前だね！」

なんちゅーチート。レンもフェイ姉も固まってる。

「あの数のシャドウを一人で……出鱈目なヤツ」

「おいらはか弱い子羊です！　――って、あれ？先輩あの黒いの知ってるんですか？」

「まぁな。話し聞いてるとはやて先輩……コッチの世界じゃ今回が初でしたっけ？」

「そうやな。記録見たけどあんなん見たこと無いわ」

と言う事で昶がそのシャドウとか言うものの説明をしてくれた。

再び、纏めるとこうだ。

『シャドウ』と名づけたのは昶らしい。

シャドウは『ブラックゲート』と言う物質から生み出された兵器みたいな物で、奴等に襲われた人間は体と精神を喰われ、大半は衣服を残して消え去るらしく、この事を『消滅』と呼ぶ。

「え？俺そんなに恐ろしいもの相手にバイクで突っ込んだの？」

「だな。正直かなり運がいいな。下手したら即死だったぜ？」

「ギャアアァァ！！」

「ウィズっちってこっちでもヘタレなのなぁ～」

「そっちにもウィズさんって居るんですか？」

「おう。こっちに負けず劣らずのヘタレだけどな。あの姿見ると安心できる」

「はぁ……」

本当に安心している様な表情をする隆浩にレンは少し困惑気味だった。

暫くして、落ち着いたところで皆イスに座っている。
はや姉はいつもの席で、その前に置いてあるソファーの右側になの姉と隆浩、左側にフェイ姉とレン。
はや姉の向かいに俺と昶と言う形だ。

「そのシャドウって言うのには人を運ぶ力なんて無いんだよね？何で皆飛ばされたんだろ？」
「そうですよね。昶さんは何か心当たりとかありますか？」
「んー。多分コイツだな」

状況がある程度把握出来てきた所で、なぜこうなったのが、原因を知らべることにした。

しかし、シャドウの事を知っているのはこの場で昶だけなので、必然と質問は昶に集まることになる。
当然さっきのフェイ姉とレンの質問も昶の元へ行く事になる。

そして昶はデバイスを操作し、予想できる犯人、あの黒尽くめの男を映し出した。

「誰や？」
「シャドウの変異型融合体、って所っすね。俺もコイツに関しては詳しくわかんないスけど……俺はダークネスって呼んでます」
「胡散苦さそーなヤツ」

隆浩が気だるげに言う。
当事者なのになんでそんなに余裕なのかな？

そんな隆浩の事は気にせず、昶は分かってることを説明し始めた。

ダークネスという存在はシャドウが何体も何体も融合してできた存在だと言うこと。
何体も融合したおかげで知能を持ち、シャドウを操ることが出来る。
そして自身からもシャドウを分離させる事も出来るらしいが、その選択はあまり使わないらしい。

これは昶の予想だが、集まって知能が増しているんだから、減ったら馬鹿になるんじゃないか、と。

それを聞いた隆浩は腹を抱えて大笑いしてた。

「シャドウ操つれるし、レンや隆浩がシャドウと戦闘中に飛ばされたなら……」
「関係してる可能性が高いって事だね」

昶がなの姉に言葉に頷く。

「なら早速調べてみよか。とりあえずなのはちゃんはユーノ君に調査依頼してみて。フェイトちゃんは消失者の分布をお願いしてもええ？」
「解った。早速連絡入れてみるね」
「私も。すぐに調べて見るよ」

はや姉のすばやい対応になの姉達は早速部屋を出て行った。

「動き早いな。世界が違ってもこの辺は一緒って事か」
「そうですね。こっちの高町教導官殿はまだ１０代なのに……」
「少し真面目すぎる気がするけどなー」

三者三様の意見を並べる異世界規模の漂流者さんたち。

「ほんなら、三人は少しここで待っててくれるか？　私は今から部屋空いてるトコ探してくるから」

はや姉がそう言いながら立ち上がる。

「あ、すいません先輩」
「ご迷惑をかけます」
「おいら広い部屋でお願いねー」
「……今、別の世界の私に激しく同情したくなったわ」

最後にその一言だけを残して、はや姉は部屋を出て行った。

結局、その日から昶、隆浩、レンの三人はココに滞在することになった。

と、あの騒がしい出会いから一週間。
俺たち四人はそれなりに仲良くなり、集まって雑談していた。

「それにしても面白いよなぁ。ここに居るのって全員六課所属だろ」
「しかも再建の方のな――ん？　って事はそっちでまたデカイ事件でも置きてんのか？」
「おいらの方はなんでだっけ？忘れた。先輩のほうは？」
「いい加減だな……。俺の方はシャドウが原因だよ。まぁ、一応一段落はしたけど。レンの方は？」
「コッチはテロ対策ですね。機動六課という名前ですけど古代遺物管理部じゃありません」

こう話を聞いてると皆本当に違う世界から来たんだなぁって思うな。
ただ、言えることはやっぱりと言うかなんと言うか……事件は耐えないんだな、と。

「そうだ隆浩。陰陽術とか言ってたけど、見えんのか？幽霊」

少し感傷に浸っているとき、昶の一声で俺は現実に戻された。

「陰陽術ってそんなこともできるんですか？」
「できるし見えるぞ！たとえばウィズっちの後ろとかな」
「……え？」

隆浩がコッチ……正確には俺の後ろを見る。
昶もレンもつられて一緒に見てるけど、俺は怖くて見ることができません。

「……マジ？」
「マジ！」
「ギ――っ！」

反射的に叫びそうになる。
が、それは止められることになる。

「昶。例の件、調べ終わりました」
「思ったより早かったな。サンキュ」
「いえ」

突然女性の声が聞こえ、祖の方を見るといつの間にか、一人の金髪の少女が立っていた。

「で、でたーーー！！　隆浩、除霊しろ、除霊！」
「バカ。あればそんなのじゃない」
「私としても、その様な反応をされると些か引っかかるものがありますね」

腕を組み、むぅと眉を潜める少女。
隆浩の言葉とその人間っぽい行動に俺も少し落ち着きを取り戻す。
あ、よく見たら足もちゃんと有る。

「申し送れました。私、祖のユニゾンデバイスで名をアルトリアと」
「へー。ユニゾンデバイスって事はリィンと同じか。今までどこに居たんだ？」
「私は待機状態としてイヤリングになれますので、そこに」
「待機状態にもなれるユニゾンデバイスってのも珍しいですね」

隆浩とレンは既にアルトリアの存在を受け入れ普通に話している。
これじゃぁ俺がビビリみたいじゃないか。

《実際そうでしょう？》
「……それで、何で急に出てきたんだ？」

《シカト！？》

真面目な話ならまだしも……そんな話、一々相手にしてられるか。

「あぁ、そうだったな。出してくれ。アルトリア」

「はい」

祀がアルトリアに支持を出すと、部屋の中央にモニターが浮かび上がった。

戦況図の様なモノが映し出されているが、そこに細々したものは一切写ってはいない。

「なんだこりゃ？」

「さぁ？　俺に聞かれても……」

隆浩とレンはそれが何か分からず首を傾げている。

だが、俺はアレを上から見たから分かる。

その図には大きな、ドーナツ型の円が映し出されていた。

祀は二人を見た後、簡単に説明を始める。

「この黒いのがシャドウだよ。ココ来てからからアルトリアに索敵を頼んでたんだ」

「普段ならもう少し早くできるのですが……。ヘタに知能が付い

ているだけあって発見が遅れました」
「って事はこれ全部ですか！？」
「おおいなー」

昶の言葉にレンは驚く。
隆浩も軽口を叩いているが、その口は少し釣りあがっている。

「移動速度はかなり速いです。これもいつ気づかれるか……」
「……さっさと叩けってことですか？」

レンの言葉にアルトリアが頷く。
なら俺は、はや姉達に早速連絡しなければと立ち上がるが、昶に止められた。

「そんな時間ないな。今すぐだ」

そして昶を中心に一つの魔方陣が展開された。
このタイミングって事は……まさか、転送系！？

「きっとコイツらが原因だからな。原因究明に遅いって事は無い」
「だな。……よし、おいらも行くぞ！」

さっきまで座っていた隆浩が立ち上がり、陣の中に入る。

気づけばレンまで陣の中に入っている。

「ち、ちょっと待て！　そんな勝手なこと……」
「世界跨いでまで先輩たちに迷惑かける訳には行かないしな」
「そうですね。自分の始末は自分でつけます」
「おいらここにの所属じゃないしー」

止めようとするも、三人とも聞く耳持たず。
それどころか自分たちだけでどうにかしようと決め込んでいる。

《どうするんですか、相棒》
「～～～っ！！　怒られんのは全員でだからな！」

半ばやけくそ気味に陣に飛び込む。

「それは御免だな」
《対象、変異型融合体。固有転移、発動！》

機械的な声が聞こえたと同時、俺の視界は白く染まった。

視界が回復し、始めに眼に映ったのは部屋ではなく、限りなく広がる荒野だった。

そして俺たちの正面、そこにヤツは居た。
無限とも思えるシャドウを背後に従えて。

〈む。何者かと思えば……貴様等か〉
「うわ、本当に居たよ……」

もう嫌になる。
勢いで付いてきたけど、俺って馬鹿なことした？
よく考えたら祀たちが行った後でも、逆探知すればよかったんだし。

「一つ聞かせろ。おいらやレンをコッチに連れてきた理由はなんだ？」

俺が一人、自己嫌悪している間に話は進んでたみたいで、隆浩があのフードに聞いていた。

確かによく考えたら祀がシャドウとコッチに来るのは分かるけど、二人には接点が無い。
いや、その前に俺の世界に来ているのも可笑しい。

〈私が祀（キサマ）を呼んだのは確かだが……その二人は単なる事故だ。私の知る所ではない〉
「はぁ！？　じゃぁおいらがコッチにきたのは偶然？」

隆浩が信じられないとばかりの勢いで……というか、本当に信じられてないんだろう。
知らない世界に来たと思ったら、それが偶然。
俺ならやってられないね。

「で、何でこんな話になってんだ？」
《話くらいちゃんと聞いておいてください……》

アテナの話によると、あのダークネスは仲間の敵討ちの為に昶を倒すつもりだったらしい。
そこで世界移動した理由が、昶の世界では勝ち目が無い。
だから数度世界を移動した後、この俺の世界がＪＳ事件後で一番弱っていたから選んだ、との事。

で、ここからがアテナの考えだが。
その数度移動したときに残していたシャドウも一緒にコッチの世界に飛ばした。
隆浩たちはその移動に巻き込まれたんじゃないか、と。

〈そんなことどうでもいいだろう？　今私たちに必要なのは――〉

ダークネスが静かに中に浮き、片手を天に向け……。

〈コレだけだ〉

振り下ろした。

同時に俺たちに襲い掛かってくる影、シャドウの軍勢。
あまりの数に地面が揺れる。

その数に俺たちに間に緊張が走り、各々構えを取る。
そんな中一人、変わらぬヤツがいた。

「こういう雑魚が集まっても仕方ないんだけどなー」

いつの間にかジャケットを纏っていた隆浩。
その手には一本の太刀が握られている。

「必殺……滅死耐烙剣（メッシタイラクケン）！！」
《Ｙａーーーｈａーーー！！》

その太刀を天高く空に投げ、やがて見えなくなる。

と、次の瞬間。
空の同じ場所から炎を纏った剣が降り注ぎ、眼前の軍団に降り注いだ。

「んな！？」

「無茶苦茶ですね……」

巨大な爆発音が起こり、きのこ雲が天高く昇る。

「んじゃ、目の前のアレはオイラに任せてくれ」

唖然としている俺たちを残し、隆浩は素手のままきのこ雲の下へと走っていった。

コメ返し

去年の最終更新時にキャラで後書きするって言ってたことすっかり忘れてました。

今回から言ってみようと思います。

因みに私からの声は後書きにて。

ウィズ（以後ウ）「と、言う訳で俺たちが引っ張られてきたと」

アテナ（以後ア）《はい。と言っても何をしたらいいか具体的に分かっていないので今回は早速コメ返しに行かせてもらいましょう》

GPSさん

ウ「あけましておめでとう。今年もよろしく！」

ア《シリアス、ドタバタ。それ以前に展開が速すぎてそんなの一切

ありませんでしたね》
ウ「三話に納めようとしたらこうなったらしいな。最初は1～3含めて倍以上在ったらしいぞ？削ったのは主に日常パートだと」
ア《何と言う無計画。その辺はさすが相棒の生みの親ですね》
ウ「お前の生みの親でもあるんだよ！？」
ア《私の生みの親はディズ博士とアリヤさんです》
ウ「屁理屈だ！！」
ア《あ、でもそしたら私と相棒の恋が実らない！？どうしましょう！！》
ウ「知らん！」

二階堂さん
ウ「アルクや志貴はともかく、ネロ・カオスはガチで知らなかったらしいな」
ア《調べたらそっくり……というかまんまで落ち込んでましたね》
ウ「今回説明した通り、くっ付いて出来たもんだからな」
ア《それにしても祖さんはメンタル弱かったんですね。その描写もコッチでは一切ありませんでしたけど》
ウ「その辺にしとけって。結構打たれ弱いんだから」
ア《かばうと？同属にはやさしいんですね》
ウ「同属！？そ、そういえば千華さんとは初対面だな。姉さんには会ったことあったけど」
ア《相棒が新しい獲物を見つけた！？また浮気なんですか！？そうなんですね！？》
ウ「何でそうなるの！？」

特別企画　『第二夜．重なる道』（後書き）

こんにちは、八神煌斗です。

さて、色々端折った感がありますが……これ以上長くなると短編どころじゃないので削りました。
日常パートは……他の三人の作者さんに任せます。
自分で書かないのか？
……声があれば、ね。

で、ウィズたちの後書きですが、あんなのでいいのかな？
あ、それと、読んだ方は分かると思うんですがタイトルが決まってません。
ので、募集します。ネーミングセンスは元々ありませんし。
募集は公平にメッセージにて。

さて、急展開もいいところの今回。
批判同然と思っています。が、出来れば「こいつバッカでー」程度に見ていてください。

それではまた明日、お会いしましょう！

「俺は右をやりましょう」
「なら俺は左だな。ウィズは後ろな」
「はぁ。わかった」

三人同時にジャケットを纏い、決めた方向に眼を向ける。
隆浩が前の敵を倒したが、その時には殆ど囲まれている状況。
走っていった、と言ったがその隆浩だって２０Ｍも離れていない。

「行くぞ、アルトリア！」
「はい！」

俺の右では昶がユニゾンし、初対面時と同じ容姿に変わる。

「エクスカリバー！カートリッジロード！」
《――Ｌｏｄｅ（ロード）　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ（カートリッジ）！――》

カートリッジを一発消費すると同時、昶のデバイスを中心に風が回り始める。

その風はさながら竜巻。
小さな見た目とは裏腹に、途轍もない量の風が込められているのが素人目にも分かる。

「ストライク……エア！！」

昶はその風の塊を目の前のシャドウへ解き放った。
風は封じ込められた力を解放し、巨大な竜巻と成りシャドウたちを切り刻んでいく。

「シャドウ、ライト。ガンフォーム！」

左ではレンが二つの銃形のデバイスを展開する。

シャドウって、あのデバイスの名前か。
だから昶がこの黒いのを『シャドウ』って言ったときにムッとしてたのか。

「クロス・バレット！！」

構えられた銃から打ち出される魔力弾。

だが、打ち出したのを確認したと同時、レンに迫っていた三体のシャドウの腹に穴が開き、消滅した。
視認出来ないほどの速さで打ち出したと言う紛れも無い事実。

見るに、同時に三発までしか撃てないらしい。
が、レンは次弾までの間はデバイスから出した短い刃でやり過ごす。
隆浩を含めてこの三人の魔法には驚かされるが、当人たちには当たり前のこと何だろう。
さして気にもせずに、目の前のテキを倒し続ける。

「……なんか、この世界が選ばれた理由が分かった気がする」
《落ち込むのは六課に戻ってからにしてください》
「分かってるよ！ってか少しは慰めろよな！？」

魔力量の関係で三人のようにバンバン魔法は使えないが、俺だって負けてはいない……筈。
アテナをテクニカルにし、速度強化しつつ、隙あらばシングルカラーズを打ち込んでいる。

ヤツらの強さはそれほどの脅威ではない。
数が脅威だ。

確かに数は減っている。
だが……未だに目の前には黒一色。

嫌になる。

そしてそれは数分後だったか、数時間だったか。

戦闘によって時間の感覚が薄れ始めた時、ようやく数が減ったと思うことが出来た。

あと少し……。

それが油断だった。

《相棒！　後ろ！！》

「――っ！」

後ろを確認せずに、アテナの言葉を信じ、ハイペリオンを展開した。

同時、強い衝撃と共に俺の体が後ろに弾き飛ばされた。

体を捻り、アテナを地面に突き刺し勢いを殺す。

巻き起こる砂埃が晴れ、そこに見えたのは今回の首謀者、ダークネスが立っていた。

その手に足首まである鋭く尖った影を付けて。

そう付いているのだ。肘の辺りから円錐状の影が。

「不意打ちは駄目だって姉さんたちが言ってたぞ」

〈なら正面から行かせてもらおう！〉

「っ！？」

地を穿ち、俺に向かって銃弾よろしく突っ込んでくるダークネス。

〈ハアアァァ！〉

振り下ろされる黒の剣。
俺は防ぐのではなく、横に跳び回避を選ぶ。

弾き飛ばされる訳には行かないと思い、回避を選択したがそれは別の意味で正解だった。
振り下ろされた剣先から衝撃波が発生し、線上にいたシャドウが消し飛ばされた。

「おいおいおい……。こら！　何で俺なんだよ！？　昶だろ普通！！」
「味方売るなよ！？」
「おぉ？」

横から昶が現れる。
多少汚れてはいるが、目立った怪我とかは無い。

すげぇな。

「ウィズっちまだ残してたのか？　遅いぞ」
「ま、仕方ないんじゃないですか？」
〈フン〉

隆浩とレンがダークネスを後ろから切りかかるが、ヤツは簡単に避

けた。

〈不意打ちは駄目らしいぞ？〉
「そんなもの知らん！！」
〈チッ……〉

ダークネスの言葉に耳を貸さず、再び切りかかる隆浩。
だが、そんなものムザムザ受けるヤツでもなく、後ろ飛行しながら回避。
隆浩もそれを追い飛び上がる。
が、ダークネスと入れ替わるようにシャドウが隆浩に襲い掛かる。

「邪魔――……」
「隆浩さん、そのまま行ってください！」
「！　おうよ！」

レンの言葉に速さを取り戻す隆浩。
そのレンは双銃を構える。
それを見て俺もアテナをガンソードにチェンジ、剣先を向ける。

「シングル・バレット！」
「ブランコ・スフィア」

《――ｆｉｒｅ！――》

俺とレンの攻撃は共にシャドウを打ち抜き、ダークネスへの道を開く。
隆浩はそのままの速さを保ったまま、ダークネスへと切りかかる。

〈そんな攻撃が！〉
「コッチにも居るんだぜ！」

いつの間にか、ダークネスの後ろに昶が控えていた。
前と後ろからの攻撃。
さすがに避け切れないはずだ！

〈ぬぅっ！〉

俺の予想は全く覆ることも無く、二つの刃によってヤツは腹部を真っ二つ……三つに切られた。

人間だったら見てられないんだろうが、ヤツはナニか。
まるで布が裂かれたように、切り口からは何も吹き出ない。

だが、どこから見てもそれは即死の傷。

〈チッ。一撃貰ってしまったか……〉

「なっ！？」
「っ！　隆浩、下がれ！！」

ヤツは切られた事など無かったかのように口を開き、傷口から黒いナニかを噴出した。

その事に一瞬身を固めた隆浩。
昶がとっさに声をかけ、正気に戻るが間に合わない。
俺のハイペリオンも発動範囲外。
そう思った。

「あんま……おいらを舐めるなぁーー！！」

だが隆浩はその黒いモノさえ正面から叩ききった。
いやいや、流石にそれは滅茶苦茶だろ。

《ここは殺られて、皆の士気を上げるシーンだと思います》
「名に酷いこと言ってくれてんだ！？」

いつの間に戻ってきてたのか、隣の隆浩がアテナにツッコむ。
俺としては何とも言えないのでスルー。

「ふざけてる場合じゃなさそうですよ」
「だな。お前らちゃんと避けろよ！」
「っ――！？」

レンと昶の声で注意を引き戻す。

目の前にはダークネスから吹き出た黒がうねりを上げ、その量を増やしていた。
まるで蛇が絡み合うような、見ていて気持ちの良いものじゃない。
それが、獲物を見つけたように俺たち四人に襲い掛かってきた。

散るように避ける。

太い上に動きが速い。
ある程度予想して避けねぇと……殺られる！

「先輩、何ですかコレ！？」
「何って、シャドウだよ！　巻き込まれたら助けられないからな！！」
「見れば分かる！！」

とにかく避け、どうしても避けきれないものはヘキサグラムを使用して堪える。

「お前らよく聞け！」
「そんな余裕は無い！」
「お前が一番余裕そうだよな！？」

昶の一言に隆浩が返す。
俺から見てもお前が一番余裕そうだよ。

レンなんかさっきまでの真面目な顔が崩れて呆れてるぞ。

そして昶、というかアルトリアだっけか。
昶に変わって念話で俺たちに伝えてきた。

あの状態のダークネスを見るのは今回で二度目らしい。

その時も、この黒に邪魔され、逃げられている。
だからこそ、この気を逃せばまた持ち越しになるそうだ。
そんなモノたまったもんじゃない！！

「ならコイツごと吹き飛ばせばいいんですね！？」
「お前そんなキャラだっけ！？」

再び一箇所に背中合わせに集まったときに言ったレンの一言。
思わずツッコんだ。

「ま。間違っちゃいねーな。とりあえず、最大火力の技でもぶっ放しときゃ良いか」
「そういうのおいら得意だな。何にも考えずにドッカンと」
「俺そんなでかいの無いぞ……」
「迷ってる暇は無いみたいですよ！」

レンが叫ぶ。

俺たちの目の前には再び黒が、迫ってきていた。

「アテナ！」
《――Ｈｙｐｅｒｉｏｎ（ハイペリオン）　Ｈｅｘａｇｒａｍ（ヘキサグラム）！――》
「よっしゃ！　ウィズっち、そのまま！！」

俺が攻撃を止めると、何を考えてるのか隆浩が前に出ようとする。
その手には、二本の刀が握られていた。

「秋月！　カードリッジロード！」
《Ｙｅｓ　Ｂｏｓｓ！　――Ｌｏｄｅ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ！
ＷｅｌＨａｌ！――》

左右の鍔から二発づつ計四発のカートリッジを消費。体と刀身に魔力を纏い始める。
恐らくそれは肉体強化。

そして、左手を上段に構え右手を前に出しやや半身の体制をとり―
―叫んだ。

「二刀流奥義！　疾風怒涛（しっぷうどとう）！！」

刹那、隆浩が俺の視界から消え、防いでいた黒が何分割にも切り刻まれ消えた。

気づけば、隆浩は消える前に居た位置から少し離れた場所に立っている。
つまり、視認出来ない速さで動いた……！？

「次、行け！！」
「俺が行きます！　シャドウ・ライト！」

デバイスに声をかけ、銃口を開いた空間に向ける。
軽く腰を落とし、まるでこれから襲い掛かる衝撃に備えているようだ。

「デルタフォース・ブレイカー！！」

まさに砲撃。

銃口から放たれた一撃は進行を拒むものをなぎ払い、進み続ける。

途中、横からの攻撃に少し軸がずれたのか、ダークネスに直撃する事は無かった。

だが十分。
大きな道ができ、その先には背を丸め、弱ったダークネスが見えていた。

「コレだけ道が出来てたら十分だ！　下がってろ！」

そう言う祖のデバイスは、鞘に収まっているのに神々しく金色に輝いている。
鞘越しに魔力を溜めているのだろうが、収まりきらずに光となって溢れているのか！？

〈させるかあぁぁ！！〉
「っ！？」

ダークネスも遣られてばかりでは無いと言うことか。
数は少ないが、再び黒を俺たちに向けて飛ばしてくる。

この程度なら――！！

俺はアテナをバスターソードに変え、残っていた三本のカートリッジをずべてロードする。

「サードカラーズ！！」

勢い任せの広域拡散魔法。

密度も少なかったんだろうが、三本も消費したんだ。

黒はすべてなぎ払った。

そして確認と同時、俺は横に飛び道を開く。

「エクス――カリバーー！！」

正に居合い。

鞘からデバイスを抜き、今まで閉じ込められていた金色の魔力が一つの斬激をなってダークネスに迫る。

途中黒が邪魔をするが、俺たち三人が攻撃中も魔力を溜め続けた攻撃。

簡単にはとまらない。

そしてついに――。

〈くそ、クソガアァァァ！！〉

デークネスは金色の光に飲まれていった。

「やったか？」
「多分。周りに残っていたシャドウも消えてますし」
「いや完全に、だな。反応が無い」
「よかったぁ……」

その場に座り込む。

と、直ぐに変化が起こった。

俺以外の三人の体が光りだしたのだ。

「んあ！？　なんだコレ？」

隆浩が驚きの声を上げる。レンも声を上げてはいないが驚いている様子だ。
だが、昶は逆に落ち着いた様子だった。

「お、もしかして元の世界に戻るのか？」
「それ安直過ぎやしませんか？」
「そうでもないぞ」

そして昶が説明をする。

曰く、三人にはそれぞれ、自分の世界とゴムの様なもので繋がっている。

今まではダークネスがこの世界まで引っ張っていたが、居なくなった。

伸びたゴムは戻るが道理。

だから、もとの世界に戻ると言うことだ。

「あ、ウィズも六課に飛ばしてやったほうがいいよな？」

「うん。ここ何処か分かんねぇし」

俺の言葉に苦笑しながら、転送陣を俺の下の展開した。

「それにしてもあっという間の一週間でしたね」

「だなぁ。まさか別の世界に飛ばされて、先輩やウィズっちに会うとは思ってなかった」

軽く言葉を交わす隆浩とレンは姿が既に透け始めている。

「もう直ぐだな。じゃぁな、ウィズっち。楽しかったぜ」

「楽しかったかどうかは分かりませんが、貴重な体験は出来まし

た」

「俺は力の差を思いっきり思い知らされたけど……」

「そう言うなって。お陰で肩の荷が下りたわ。サンキュウな」

それぞれ言葉を紡ぎ、それぞれの言葉を聞いた後、俺の視界は真っ白に染まった。

戻ったのは部隊長室。

そこに居たのは一瞬驚いた顔をしていたが、直ぐに表情は変わった。

「待っとったでぇ～、ウィズぅ」

「ひぃっ!?　は、はや姉……」

「どこに行っとったんか、何をやっとったんか教えてもらおかぁ～」

何で俺はいつもこうなんだろうね。

「さぁ、キリキリ吐けーー！！」

「ひぃーーー！！」

コメ返し

ウ「んじゃ、早速いくぞ」

二階堂さん

ウ「昶のイメージって先輩には弄られてるくせに、後輩には人気がある頼りがいのある人物。って感じだな」
ア《珍しくって事は向こうではそうでもないんでしょうね。あ、あと出演依頼来てますよ?》
ウ「ヤだ、行きたくない。千華さんのあの目、おもちゃ見つけた時のユリアそっくりだし」
ア《でも行かないともっと酷いことが待ち受けてると思いますよ?》
ウ「……行ってきます」

朱さん
コメントありがとうございます!

ア《いいキャラって言うのはいい響きですね。面白いって言うのは些か引っかかりますが。私はいつでも真面目ですよ?》
ウ「……」
ア《どうしました、相棒?》
ウ「俺に対してのコメが無いんだけど……どういうこと?」
ア《まんまでしょう?良いキャラではなく、面白くないから書かなかったと》
ウ「一応主人公ですよ!?」

特別企画　『第三夜．分かれる道』（後書き）

こんにちは、今日体長を崩してグロッキーな八神煌斗です。

今回の終わり方に対しては本当にごめんなさい。
かなり無理やりに幕締めさせてもらいました。
不満タラタラでしょうが、この程度か……、くらいに思っていてください。

さて、今回で特別企画、『道』は終わりです。
ですが！
二階堂さん、ＴＯＵＤＡさんの方でココでは語られなかった日常編を執筆してくださることになりました！
公開に関してはこちらでも連絡させていただきます。
共に楽しみに待っていましょう！

そして、次回更新日は一度空いて、７日からになります。
本編再開でございます。

それでは！

Ｐ．Ｓ．
後書きコーナータイトル、未だに募集中です。
メッセージにて募集しています。

11．不屈の心　ＶＳ　創造者

「なんでこんな事になってんの？」
「な、なんでだろう……」

隣に居るフェイ姉に聞いてみるも、返ってくるのは俺と同じ困惑の声。
俺の前では数羽の灰色の鳥と桃色の魔力球は飛び交っている。
そしてそれを操っている二人は共に空に居る。

「レイジンクハート！」
《――Ａｘｅｌ（アクセル）　Ｓｈｏｏｔｅｒ（シューター）――》
「――ｄｅｐｌｏｙｍｅｎｔ（ちれ）――ｐｌｕｎｇｅ（つっこめ）！――」

互いの攻撃がぶつかり合い、辺りに爆煙が立ち込める。
しかし、ユリアのアヴェは尚も勢いを失わず、なの姉に向かって飛行する。

《――Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ（プロテクション）！――》

だが、そのアヴェ達もシールドに防がれ消えてしまう。

「チッ。やっぱり連チャンじゃ貫けないか」
「凄いね。アクセルシューターを貫いてくるとは思わなかったよ」
「アヴェの貫通能力には自信があるのよ。ま、なのはの魔法が強力だから一回が限界だってけどね」

不適に笑いあう二人の周りには再び、鳥と弾が現れる。
えっと……マジで何でこうなったんだっけ？
たしか昼食ん時に――。

～・～・～・～・～・～・～・～・～・～

「ねぇ、ユリアちゃんってやっぱり遠距離タイプの魔道師なの？」
「んー……そうなるんじゃないかしら。クリエイトなら接近戦も出来るけど、私自身は出すだけだし」

そうだ。この時は二人とも仲良く話してたんだ。
お互い遠距離後方支援型って事もあって、すっかり意気投合。
俺も特に気ににはせず、フェイ姉と飯を食ってたんだけど……。

「えー。でもそんな状況だったら集束系の方がいいと思うなぁ」
「何言ってるのよ。ここは誘導型で一旦追い詰めた方が確実よ」

なんて声が聞こえてきたんだ。
でもこの時はまだ二人の細かい戦闘スタイルの違いだろうって思ってて……。

「なのはって本当に教導官なの？　どこかしらに突撃思考が見え隠れしてるわよ？」
「ユリアちゃんは慎重すぎるよ。好機だと思ったらそこが攻め時だよ」

この辺りで何だか気まずい雰囲気が流れ始めたんだよな。
で、ここからは本当に一瞬。

近くに居た俺とフェイ姉は審判として二人の喧嘩に巻き込まれた、と。

よし、思い出した。

～・～・～・～・～・～・～・～・～・～

「二人とも模擬戦って事忘れてるんじゃね？」

「あはは……。それにしてもユリアは凄いね。なのはと互角だよ」

その事には触れないようにしてたのに……。

今のユリアの姿は言うまでも無い、騎士甲冑だ。

形で言ったらシャマル姉さんのに似ていることも無いな。

違うところを簡単に挙げると色は薄い紫でミニスカ。鎧分もそれなりにある。

本人はドレスアーマーとか言ってたけど。成る程、的を射てる。

でだ。

その甲冑を着るのにはデバイスが必要なんだが、ユリアはその為にしかデバイスを使ってないらしい。

これを聞いたとき宝の持ち腐れだと言ったんだが、当の本人は――。

「デバイスなんか使ったら逆に効率が落ちるわよ」

との事。

それを聞いたときは周りに居た姉さん達の驚いた顔。

母さんが元になっているユリアはその辺りはかなり優れているみたいで、マルチタスクや演算能力が非常に高い。

あの時は何バカな事って思ったけど……嘘じゃなかったのね。

「なの姉ってリミッター付きでＡＡだっけ？　それと互角って事はそれくらいはあるって事か……」

「でもユリアは魔法一つしか使ってないし。もっとあると思うよ」

「マジか……」

フェイ姉がそういうって事はそうなんだろうな……。

そもそもリミッターって魔力を抑えるだけだから技術面に関してはＳ＋のまんまだし。

あれ？　って事はユリア俺よりも強いんじゃね？

うわぁショック……。

「ウィズ。動くよ」

さっきとは違い、真剣な口調になったフェイ姉の言葉に、俺は訓練場に再び視線を戻した。

ユリアｓｉｄｅ――――――――――――――――――――

「中々やるじゃない、なのは」

「ユリアちゃんも。模擬戦、それも遠距離同士でここまで苦戦したのは久しぶり」
「本気出してない人に言われてもね」
「それはユリアちゃんもでしょ」
「まぁね」

とは言ったものの、このままじゃ負けなくても勝てないわよねぇ。
折角やるなら勝ちたいしね。

大物いってみる？

「――ｃｒｅａｔｅ（クリエイト）――」

もう一回、アヴェを創り出す。数は１０。
あと少し創る事も出来るけど、今の私、それもなのは相手じゃそこまで思考を分割できない。

「――ｐｌｕｎｇｅ（つっこめ）！――」
「っ――！！」

なのはが今度はプロテクションも張らずに、回避行動を取った。

それもそうよね。

今の数瞬反応が遅れたなのははには、それしか選択肢が無い。
何せ貫かれる危険性があるんだもの。

実際のところ、なのはのプロテクションを貫くほどの貫通力、アヴェには無い。
それでも私が張った罠。あの二言。それに見事に引っかかってくれたみたいね。

【やっぱり連チャンじゃ貫けないか】
【アヴェの貫通能力には自信があるのよ】

これを聞いた時点で向こうはただ防ぐって言う選択肢は消えたはず。
私の言ったことが嘘だって判断する材料、与えてないからね。

なのはもバカじゃない。なら、迎撃に間に合わなかったら一旦逃げるしかない。
ま、直ぐに打ち落とされるでしょうけど……。

少しでも時間が稼げれば十分！

「――ｃｒｅａｔｅ（クリエイト）！――」

右手を水平に突き出し、左手で手首を掴む。

「っ！」
《――Ａｘｅｌ（アクセル）　Ｓｈｏｏｔｅｒ（シューター）――》

私が何かしようとしている事になのはが気づいた。
こっちに向かってシューターを打ってくる。
でも――。
「ｔｕｒｎ（まわれ）――ｐｉｅｒｃｅ（つらぬけ）！――」
さっきなのはに向かって打ち出していたアヴェすべて動員してシューターを貫かせる。
そして残りの思考をすべてクリエイトに割く！
「かかったね、ユリアちゃん！」
「っ！？」
呼ばれて、なのはの方を見る。
そこには足元に桃色の魔方陣を敷き、デバイスをこっちに向けている。
……あれってどう見ても砲撃よね。
「くっ」
もう一回シューターを撃抜いてるからなのはは絶対にシールドで防

いでくる。
仕方ない！

「――ｄｉｓａｐｐｅａｒ（きえろ）！――」

出していた全てのアヴェを消去。思考全てをクリエイトに割く！

「ディバイーン――……」
「――Ｌｅｏｎ（レオン）！――」

目の前に出現するのは３ｍ程の灰色の獅子。
なんか足元で『ちょ、ライオン！？でか！？』とか間抜けな声が聞こえるけど……。
バカはフェイトに任せておきましょ。

「バスター！！」

襲い掛かってくる桃色の砲撃。
それを私は正面から迎え撃つ！！

「――ｐｉｅｒｃｅ（つらぬけ）――ｂｒｅａｋ（くだけ）！――」

支持を聞くと同時に砲撃に突っ込んで行く私の獅子。
破壊することに関してはこの子が一番！
そして、レオンとディバインがぶつかり合いこの戦いで最大級の爆発を起こした。

side　out――――――――――――――――――――

「二人共、お疲れ様」
「ありがとう、フェイトちゃん」
「おつかれー」

フェイ姉から飲み物を受け取る二人。
ユリアはそのまま座り込み、ジュースのコップを額に当てている。

「頭冷やして何してんだ？　大丈夫か？」
「ん？　少しマルチタスク使いすぎただけ。問題ないわ」

コップを額からどけ、説明をしてくれるユリア。

結局、勝負はなの姉の勝ちだった。
あの爆発の後、二人共まだ健在だったんだけど、ユリアが頭が痛い

とか言って降参した。

「久しく戦闘でクリエイト使ってなかったから。少しオーバーヒートしてんのよ」

あー気持ちー。とか言いながらまた額にコップを当てるユリア。
お前はどこのオッサンか？

「それにしても鈍ってるわね……」
「あれでか？」
「ええ。レオン出すのにあれだけ時間と思考を割くとは思って無かったわ」

なんて事をシレッといいやがった。
これでユリアが全盛期の力を取り戻りたら今のなの姉くらい軽くあしらうんじゃ……。

その本人は「やっぱ訓練って大切なのねぇ」ってシミジミしてる。

「なのは。悪いけどこれからも付き合ってくれない？」
「うん、いいよ。毎日は無理だろうけど……」
「構わないわ。暇なときに相手してくれたらね」

何だか試合前より仲良くなっる気がする。

あぁ、あれか？
殴りあった後の。

「ふ……。やるじぇねぇか」
「お前もな。俺をここまでマジにさせたのはお前が始めてだぜ」

見たいなやつ。

《相棒、相棒》
「んあ？」
《どうせ馬鹿な事を考えてたんでしょうけど……皆さん行きましたよ？》
「え？　マジか！？」

コメ返し

ウ「そろそろ決めねぇとなぁ……タイトル」
ア《募集も一切無いですしね。適当で良いんじゃないですか？》
ウ「じゃぁ、シャマル姉さんの中の人が他でやってんのパクって『ウィズの小部屋』とか」
ア《ハイ、決定。じゃ、コメ返し行きましょう》
ウ「え、そんなに適当！？」

朱さん

ウ「コメ返しのタイトルを募集したらオリキャラが来たんだが？一切コメント無しで。……なんで？」

ア《相棒に魅力を感じないからコイツを使えって事じゃないですか？》

ウ「はいぃ！？却下だ却下！！俺の魅力は隠れてるから分かりにくいだけなのよ！？」

ア《隠れてたら意味ないじゃないですか……。せめて私くらいは出していかないと……》

ウ「お前は出しすぎだろ、自重しろよ」

二階堂さん

ア《向こうはどうでしたか？》

ウ「いや、まだ行ってないんだ。もしかしたら俺は病気なのかもしれない。諦めてもらうしか……」

ア《ならお姉さん達に報告をして病院に――》

ウ「あれ？なんだか元気になってきたよ！？」

ア《……そういえば昶さんが頼りになると言ってくれてありがとうと言ってますね》

ウ「まぁ、イメージだし。実際は俺よりヘタレかもよ？」

ア《そんなこと言ってると向こうで苛められますよ？》

ウ「……！？」

ａｓａｋｕｒａさん

明けましておめでとうございます！

ウ「おめでとう！面白いって俺はいつでも真面目なんだけどな……。コイツが空気を壊すんだよな」

ア《私だっていつも真面目ですよ！？相棒が言い訳やヘタレな事を言わなければ私だって！！》

ウ「馬鹿言うなって。ってかそろそろ自分のＫＹさに気づけよ」

ア《相棒だってＫＹですよ！まあ、私の場合は空気読めるですけどね！》

ウ「ちょっ。それ本編で一回使ってるよ！？」

ア《リサイクルです！！》

ウ「それ違う！」

11．不屈の心　ＶＳ　創造者（後書き）

こんにちは、八神煌斗です。
久しぶりに本編を更新しました。

とは言ってもやっぱりユリアの紹介の回。

物語が進むのは後2～4話挿みます。
理由は簡単。その先の方向性がグラグラしているから。
今のところ三つ候補に挙がっていますが、どれが盛り上がるか検討中。

あと、年齢が分かるからあまり言いたくないのですが、実は私受験生でございます。
ですので一月後半はまた更新が止まるかと。

とは言っても試験は2／1～3なのでそう長期にはなりません。
実際推薦で一つ合格は貰っているので、追い詰められてもいませんし。

まぁ、更新停止の時は一種間もど前に告知させてもらいます。

それでわ！

12．秋の社会見学　午前の部

六課会議室。

普段は隊長陣など六課主要人物のみが集まる場所。
言うまでも無く俺やＦＷメンバーはその会議に参加したこともない。
無い、のだが、今日に限っては俺やユリア、ＦＷメンバー含め会議に呼ばれていた。
隊長陣とＦＷメンバーに左右に分かれて座り、俺とユリアは下座。
はや姉は上座の形。
因みになんで呼ばれたかは一切聞かされてない。

「皆まずはコレを見てほしいんや」

はや姉がそう言って巨大なモニターを全員に見えるように映し出す。
そこに書かれていたのは――……。

「『秋の社会見学』……なにこれ？」

肩肘を突いて呆れた感じのユリア。
俺もそう思ったけどなんでそうバッサリ叩ききるのかね？

「言うとくけど、コレは私達が行くんやないよ」
「え？　それって……」
「そ。この起動六課に社会見学に小学生が見学にくるんよ」

スバルの質問にはや姉が答える。

言うまでも無く、ＦＷと俺は驚いて言葉が出ない。
ユリアは関係ないとばかりに目を閉じて、なの姉たちは知っていたのか苦笑いをしている。

「で、それはいつなのよ？」

何も知らない組の中で唯一平常のユリアが代表して聞く。
にしてもお前どうでも良かったんじゃなかったのか？
もしかして照れ隠し――……。

「あイタあぁ！！？」

足に痛みが走る。
咄嗟のことだったのでつい大声を出してしまう。
犯人は捜すまでも無い。

「何すんだよ！？」
「足踏んだのよ」
「だから何で！？」
「私の心が踏めと訴えかけてきたから」

何と言う勘の良さ……。

「そこの兄妹はほっといて、これなぁ明日なんや」
「あ、明日！？」
「はやて、そんなの聞いてないよ！」
「あれ、そやったっけ？」

なの姉フェイ姉が慌てて講義する。
当の本人はそ知らぬ顔でシレッと答える。

「というか、何でいきなり社会見学なんですか？」

当然の疑問を代表してティアナが質問した。

「ほら、ウチの部隊って出来たばっかりやし海も近くにあるからイメージは凄く良いんよ。それになのはちゃんやフェイトちゃん見たいな有名人も居るし」

成る程。

確かに小学生みたいな小さい子が地上部隊を見学しても何も面白くないだろうな。

魔法の訓練は殆ど無いだろうし、街中だし、少し古いし。

それに比べてココは正反対。

海沿いだし綺麗だし、魔法訓練は……トラウマに成らなきゃ良いけど。

しかもなの姉とフェイ姉、はや姉に加えて今はＪＳ事件解決に貢献した奇跡の部隊。

今この六課以上のところなんて無いだろうな。

「ま、そういう訳で……ウィズ」

「はい？」

「引率よろしく」

「なんで！？　いや、別に引率は良いけど何で俺！？」

俺みたいなヤツより、なの姉とかの方が絶対にいいだろ！？

絶対に【六課の人】位にしか認識されないに決まってる。

あ、ちょっとウルッってきた。

「なのはちゃん達前線メンバーはその日訓練を見せることになってるから駄目や」

「だったらはや姉は!?　こういうのってそこの一番偉い人が案内するもんだろ!?」
「こういう時は皆持ち場に付いてる方がそれっぽいやん」
「ぬぅ……」

確かにその通りだけど……。
それが理屈ならシャマル姉さんとかにも頼めないことになる……って。

「ちょっと待って。俺だって教導あるけど?」
「どうせシグナムとの模擬戦になるやん」
「ぐぅっ」

という会話が昨日あった訳で……。

「……何で私なのよ?」
「お前俺より暇人だろうが」

今現在、俺は隣にユリアを連れ、六課玄関ロビーに待機している。
理由は言うまでも無く小学生待ち。

「暇人は暇人なりに予定組んでるの。そういう訳で……じゃ」
「だから待てって言ってんだよ」

片手を挙げ俺に背を向けるユリアの肩を掴む。

「あのね、それが人に頼む態度なの？」
《そうですね、誠意が全く見えませんね》
《誠意は大切だぞ。さあ、誠意を私たちに見せてみろ！》
「お前らユリアよりも酷い言い草だぞ！？」

百歩譲ってレイラは良しとしよう。
でもなアテナ、お前の口の利き方はおかしいと思うんだマスターの俺は。

「で、どうするの？」
「ぐぬぬぬぬ……。お、お願いします、手伝ってください」
「よろしい」

腕を組んで笑顔で頷く。
何時もならかわいいと思うんだろうが……今はただ小憎たらしいだけだ。

「それで、子供達は何時ごろ来るのよ？」
「んあ？　１０時頃って言ってたからもう直ぐじゃね？」

１０時まであと5分を切っている。
ココは駅から結構離れてるし、予定ではバスで来るとの事。
平日だし時間が狂うなんて事はまず無いだろう。

と、予想していた通り１０時過ぎにバスが二台到着。
それぞれのバスからぞろぞろとヴィヴィオ位の子供が２０人くらい降りてくる。

そして最後に担任らしき先生が二人、多分片方は副担任とかそんなんだろ。
四人共女性だ。
そのうちの一人がこっちに向かって歩いてくる。

「えっと……担任の方ですよね？」
「はい。リンナ、と申します。今日一日よろしくお願いします」
「あ、引率をさせていただきます神崎ウィズです。で、こちらが……」
「神崎ユリアです。よろしくお願いします」

リンナさんが頭を下げたのにつられて俺も慌てて挨拶を返す。
ユリアもさっきまでの態度とは一変、礼儀正しい態度に変わってる。

「それでは早速ですが、お願いできますか？」
「分かりました」

リンナさんの後ろにユリアと二人で付いていく。
と言っても既に子供達はロビーの中に入っているので、１０メートルも移動していない。

俺達はリンナさんの話が終わるまで後ろで待機、その後簡単な自己紹介をして早速案内することになった。

最初に来たのは司令室。

傍からみたらメインに見えるが、小学生はこんな所は興味はそんなに無いだろう。
そういう事でここを始めに持ってきた。

因みに説明はグリフィスさんがやってくれている。
本当は俺がやった方が良いんだろうけど、説明とかはその場で動いてる人のほうがいいと思うからな。
ら、楽したいとかそんなんじゃないぞ！

だから俺は集団の後ろで見ているだけなんだが――……。

「アルトさん、ルキノさん、緊張しすぎ」
「そ、そう言われましても……」
「私達は普段裏方ですので、こういうのは……。」

機器整備士と総理事務員の二人がガチガチに緊張しているのだ。

どれくらいかかっていうと、いつもブラインドタッチなのにキーボードを見ながら人差し指で操作してるくらい。

その点クリフィスさんは平時と変わらず普段とそう変わらずに子供達に説明している。

「あ、グリフィスさんも緊張してますよ」
「え？　本当ですか？」
「ほら。仕切りにメガネの位置直してるでしょ？あれ癖なんですよ」
「へー」

そう言われてみれば手が若干震えているように見える。

「んじゃ、次は……ヴァイスさんの所にでも行ってみるか」
「そうね。訓練は午後に見せる予定なんだったらそこ位でしょ」
「おい、おじさん！」
「おじ！？　……な、何かな？」

クリフィスさんが説明をしている最中、次の行き先をユリアと相談していると、子供に話しかけられた。

《相棒に向かってなんて口を！？　相棒は１８歳ですよ！　地球で言うならピチピチの高校生です！》
《そうだ。夜怖くてトイレに行くとき私達を連れて行くがれっき

とした未成年だぞ！≫

「アテナ、表現がおっさん臭い。レイラ、お前は俺のことが嫌いなのか？」

二人共結構大きい声だったので話しかけてきた子供を始めにユリア、司令室の面々が唖然とするか肩を震わせている。

無性にこの場から立ち去りたい。

「おじさん、トイレ怖いのか？」

「……うるさい。で、なんだよ？」

子供の哀れむような顔がなんとも居た堪れない。

内心恥ずかしくて堪らないんだが、あくまで顔に出さず、冷静に。

見ると話しかけてきた子供は四人。男二人に女二人。

「そうだった。おい、お前はそこの姉ちゃんとどういう関係だ！？」

「……は？」

「私？」

予想の斜め上を行く質問に俺だけじゃなく横にいたユリアも固まる。

「関係って……何になるんだ？　兄妹？」

「それしかないでしょ。それとも親子の方がいい？」
「それは嫌だ」

コイツが親とか在りえない。
悪いやつには育たないだろうが一癖二癖ある子供に成りそうだ。

「恋人じゃないのか？」
「当たり前だろ」
「じゃぁ、お姉ちゃん！」
「ん～？」

俺の言葉を聞き、訳の分からない質問をした後、ユリアに向き直るのは男二人。
当然、話を振られたユリアは面倒くさそうに、しかし邪険にせずに聞き返す。

「俺達と一緒に昼飯でもどうですか！？」
「……はい？」

同じ【はい】でも意味が【なんですか？】の意味から【何言ってんの、コイツ】に変わっている。
同時に目つきも変わっているのだが、男二人は気づかずにユリアを昼飯に誘い続ける。

「あの……お兄さん」
「ん？」

今度は女の子二人が俺に話しかけてきた。
若干顔が赤い。

もしかして……。

「良かったら、お昼ご飯私達と食べてくれませんか？」
「お願いします！」

やっぱり。

先に言っておくが俺はよく小説の主人公が持っている鈍感スキルの類は持っていない。
だからこそ言っている意味も何となくわかるが……。

因みに今更だが小学生の昼食は六課の食堂で特別メニューが出ることになっている。

「別に構わねぇけど……いいのかな？」
「私が知るわけ無いでしょ……はぁ」

隣で未だに誘われているユリアに聞くも、返ってくるのは俺の予想通りの答え。

頷いてやれば良いものを、断り続けるから終わらないんだ。
結局この後ユリアは渋々頷いたのであった。

コメ返し

ウ「あれ?前回『ウィズの小部屋』に決まったんじゃなかったっけ?なんでまた戻ってんの?」
ア《タイトルが決まった直ぐ後に何件か募集かあったから、だそうです》
ウ「マジで!?俺結構気に入ってたのに?何と言うツンデレ!!」
ア《アリサさん並みのツンデレですね》
ウ「いや、あの人デレとか無いし、ツンとかかわいいモンでもないって。ドスとかそんなの。ドスドス」
ア《ただ今のセリフ、ちゃんと送信しておきました》
ウ「……え?と、とにかく!タイトルは小部屋で決定だ!ツンデレなんて大嫌いだぁ!」
ア《続けて送信しておきましょうか?》
ウ「ごめんなさい」

ＴＯＵＤＡさん
お久しぶりです。おめでとうございます!

ウ「あけおめ!言われてみれば結構お気楽キャラだったよな、隆浩」
ア《何でもキャラを扱う為に、特徴を絞った結果らしいです》

ウ「あぁ。昶も絞ってたな。隆浩はお気楽チートキャラ？」
ア「だそうです。後はユリアさんの魔法について。言われてみればそんな気も？どうなんですか？」
ユリア（以後ユ）「その説明に呼ばれたの？」
ウ「そゆこと。で、詳細は？」
ユ「まぁ、紙式って言うのは知らないけど、クリエイトは簡単に言ったらプラモデルみたいなモンね」
ア《プラモデル？》
ユ「そ。アレって形作っても手足とか自分で動かすでしょ？まぁ、オートの術式入れられない事も無いけど、動きが単純になるから滅多に使わないけど」
ウ「随分めんどくさい魔法なんだな。なんでそんなの使うんだよ？」
ア「お母さんと作ったから」

ナイトホークさん

ウ「これまたツンデレの人だな？でも確かに休息部屋は欲しいなぁ。」
ア《懺悔室は要らないのですか？》
ウ「……逆に何で必要なのか言ってもらいたい」
ア《言ってもいいんですか？感想が相棒への中傷で埋まりますよ？》
ウ「……何を言う気か知らんが止めてください」
ア《よろしい》
ウ「あれ？おれマスターだよね？」

秋風さん
初コメありがとうございます

ア《相棒、挑戦状ですよ！私たちと戦ってみたいと！》

ウ「いや、共演、のところを見ような。ほら、国語って言いたい事を後に書くだろ？だから戦うより共演したいんだよ」
ア《競演ですか、いいですね！》
ウ「あれ？発音おかしくない！？競の方使わなかった！？」
ア《私たちは万事ＯＫです！出演しましょう！ＳｔＳの時間軸で待ってますよ！》
ウ「え？無視！？」
ア《あ、でも戦うって事は相棒が敵サイド？一話もったらいいほうですか？》
ウ「なんで話し勝手に進めてんの！？それに模擬戦って選択肢もあるでしょ！？」
ア「模擬戦ならＯＫらしいです！」
ウ《チッガーう！！》

12．秋の社会見学　午前の部（後書き）

こんにちは。胃が痛くなり始めてます八神煌斗です。

受験なんか大嫌いだ！と声を大にして言いたい。
そのおかげで最近小説もかけないし……。
ストック書いておいてよかった、と。

もう、コメント読んでコメ返しするのが唯一の気がまぎれる時間ですよ。
まぁ今更あせっても、と言うのもありますから去年に比べたら勉強量も減ってますけど。

さて、次回は後編。
こんな話は読んだことなんじゃないかな？と思って書きました。
さてさと、評価はいかに。

それでは、二日後にお会いしましょう！

13．秋の社会見学　午後の部

その後、ヴァイスさんの所とシャーリーさんの所を回って、食堂に来ている。
局員には予め言ってあるので、ここには数人しか昼食をとっていない。

で、ココで子供達には嬉しいハプニング。
ヴィータ姉さんとなの姉が昼食を取っていたのだ。

当然子供達だけでなく、先生達も喜んでいた。

話によれば午後の訓練の分を少しだけ午前の訓練に回して、終了時間が早まったらしい。
因みにフェイ姉とシグナム姉さんは火がつき未だに訓練中。
ＦＷ陣は虫の息らしい。

南無。

「こうやって見るとやっぱり人気者なんだなぁ」
「ヴィータの方は友達の感覚で絡まれてる気がしないでもないけどね」
「怒るに怒れなくて困ってるな」

背丈の関係もあってか子供達は若干ヴィータ姉さんの方若干多く集

まっている。

と、いい加減我慢の限界なのか笑ってない目で俺の事を見てきた。

「（……やってもいいか？）」

「（駄目に決まってるでしょ！？）」

「（ならどうにかしやがれ……）」

言っておくが今の会話は念話じゃなくてアイコンタクト。

直接言葉を交したわけじゃないが、間違いなくこう言ったはずだ。

やるが平仮名なのが余計に怖い。

「さ、さぁ皆。お姉さん達とお昼食べましょ、ね？」

流石のユリアもマズイと感じたのか普段なら絶対に言わない口調で子供達を宥める。

普段なら「ほら、さっさと食べなさい」とかそんな感じだろうに。

「お姉さん！　こっちです！」

「あーはいはい……って――」

さっきの男の子だろう。

急かすようにユリアを呼び、めんどくさい雰囲気を微塵も隠さないユリアが視線を移して……固まった。

まぁ理由は分かるが。

「増殖してる……」

「せめて増えた、って言ってやれよ」

そう、増えてるのだ。

司令室で誘ってきたのは二人だった。

だが、今は二つくっ付けたテーブルに文字通り１０人以上は確実にいる男のこ達が居た。

一箇所、一人分の席はキッチリ空けられて。

「……ムリ」

「約束したんだろ。諦めろ」

小刻みに左右に首を振り、行きたくないって駄々をこねるのを後ろから押しながら諦めさせる。

気持ちは分からんでもないけどな。

「二人ならまだしも、なんで私があんな大人数の子供の相手しないといけないのよぉ」

「……お前のほうが年下だろうが」

「あぅ～～」

最後に意味不明な言葉を残して、ユリアは男の子達の元へと歩いていった。
見た目あんなのだから忘れそうになるけど、あの辺を見るとやっぱり子供なんだなって思うな。

「さて、俺も誘われてたよな……どこだ？」
《相棒相棒》
「んあ？　なんだよ？」
《あそこに居るのがそうじゃないですか？》

アテナに言われた方を見ると、確かに俺を司令室で誘った女の子達が居た。

なの姉と一緒に昼食をとりながら。

「何でだろう。悲しいから涙が出てくるよ」
《当たり前のことだな》

結局一人で飯を食った俺。
その後は予定通り訓練場に向かうことになったのだが……。

「やせた？」
「やつれた」
隣でげっそりしてるユリアには今後助力は望めないだろうと思った。

「みんないらっしゃい」
訓練場ではなの姉とフェイ姉が出迎えてくれた。
フェイ姉はところどころ焦げてるけど、無視させてもらう。
この後は特に面白いことも無くＦＷ陣がシグナム姉さんとヴィータ姉さん相手に模擬戦を小学生が見学。
時折説明や、質問に答えるなどと言うやり取りを含めながら時間が過ぎていった。
やがて、模擬戦が終わった頃、一人の男の子が俺に話しかけてきた。

「なぁ兄ちゃん。兄ちゃんも戦えんのか？」
「ん、俺か？　戦えねぇ事も無いぞ。一応教導の資格も持ってるし」
《宝の持ち腐れ》
「ウルせぇな」

ついさっきまで《暇だから》って理由でスリープモードに二人して入ってたくせに何で都合よく起きて来んだよ。

《何かを受信しました》

「……お前なら本当にしてそうで怖いよ」

「じゃぁさ、あそこの姉ちゃんとどっちが強いんだ!?」

「私!?」

指さされたのは何故かスバル。

模擬戦の後、他のＦＷ陣と隅で休んでいて油断していたんだろう、慌ててる。

「あーどうだろうな。タイマンで戦ったことないからわかんねぇなよな?」

「そんな、私も流石に負けちゃいますよー」

こういう風に言ってるが、俺の考えだと悲しいかな結構いい勝負になるような気がする。

勿論戦い方にもよるけど、常にくっ付かれて間合いの中に居られると打つ手が無い。

格闘技はザフィーラ兄さんから少し習ってるけど、体運びの為だったから実戦で使えるレベルじゃないし。

で、残るのは剣技。

接近されるとダブルになるんだが……スバルの拳の重さには負けるだろうなぁ。

あれ？

今上げた中に俺の勝てる要素あったか？

「なら一回戦ってみれば？」

「は？」「え？」

で、五分後。

俺は訓練場にスバルと向かい合って立っていた。

これも皆ユリアとスバルが悪い。

ユリアが戦ってみれば？って言った後、あろうことかスバルの奴も戦ってみたいです、とか言いやがったから。

そのスバルはさっきまで模擬線してたってのに今は元気に屈伸中。

流石元気っ子。

『それじゃ二人共、準備はいい？』

通信が開いてなの姉が最後の確認を取る。

それにスバルはいつもの様に返事をし、俺は頷くだけ。

流れでココに立ったわけだが、戦るからには勝ちたい。
それがスバル、ＦＷ達なら余計にだ。

『それじゃ……はじめ！』

開始の合図と共にスバルがこちらに突っ込んでくる。
そこで俺が選択したのは手数を優先してアテナ、ダブルソード。
正面から迎え撃つ！

「はあぁぁぁぁ！！」
「おおおぉぉ！！」

互いのデバイスがぶつかり合い、火花を散らす。
そしてそのまま、後退せずに攻撃を繰り出し、更に火花を散らせる。

右手一本だと思ってたらスバルのヤツ足まで使ってきやがった。
いや、よく考えたら分かることだったけどな。

１対２の図式にしたかったけど、実際には３対２。
俺に有利なところなんて一つも無い……！

「（ちっ、やっぱりダブルで今のスバル相手はきついな……）」
≪（今の間合いをどうにかしないとヤバイですよ）≫
「（分かってらぁ！）」

少しセコくなるけど……許せ、スバル。

「え、うわぁ！？」

スバルと俺の間が、一瞬光を放った。
その正体はブランコスフィアの暴発の際の発光。
極小のスフィアを形成した瞬間に暴発させる事で突然光りだしたように感じたはずだ。

こんなもん攻撃には何の役にもたたねぇけど、一瞬だけ足を止めるには十分だ！

その場から大きく後退、ハイペリオンを展開させ、上へと逃げ――距離をとる。

「逃がしません！」

予想通り、直ぐに回復したスバルは足元からウイングロードを伸ばし、俺の元へと駆け上がってくる。
だが、その選択こそが敗因になる。

《――Ｇｕｎ（ガン）　Ｓｉｌｈｏｕｅｔｔｅ（シルエット）――ｂｌａｎｃｏ（ブランコ）　Ｓｐｈｅｒｅ（イア）――ｆｉｒｅ！――》

「くっ！」

ダブルだったのをガンソードに変更、総計１０のスフィアを尚も昇り続けながら、こちらに向かってくる蒼い影に向かって打ち出す。

だが、なの姉の訓練を受けているスバルにはこの程度を交すことが造作も無い。

打ち出したスフィアは全て交されてしまう。

――これでいい！

「レイラ！」

《了解！　――Ｓｅａｌ（シール）　Ｓｉｌｈｏｕｅｔｔｅ（シルエット）――》

上空でハイペリオンの上立ち止まり、レイラを例の突撃槍にする。

俺はその場でレイラを槍投げの如く投擲する為構えに入る。

「っ！　マッハキャリバー！」

俺の行動に不信感を抱いただろうスバルは更にスピードを上げ、こちらに向かってくる。

だが――俺の勝ちだ。

「行け、レイラ！！」
《――ｍａｇｉｃ（マジック）　ｃａｎｃｅｌｅｒ（キャンセラー）　！！――》

投擲されたレイラの行く先はスバルではなく、その足元の風の道！

「え？　え？　うわああーー！！？」

キャンセラーを発動したレイラの前に、道は消え去り、足場を失ったスバルは重力に従い真っ直ぐに落ちてゆく。

「アテナ！」
《――Ｔｅｃｈｎｉｃａｌ（テクニカル）　Ｓｉｌｈｏｕｅｔｔｅ（シルエット）！――》

休む間もなくアテナをテクニカルに変更。

ハイペリオンを穿つつもりで蹴り、スバルに向かって跳び出し、同時にスバルの後ろにハイペリオンを新たに出現させる。

勿論スバルはその上に倒れこみ、俺はアテナの剣先をスバルの首元に突きつけた。

「あれ、もしかして六課きてから初勝利じゃね？」
《そうですね。でも教え子に勝って嬉しいですか？》
「……面目ない」

《情けない……》

この後、レイラを回収して、スバルと二人で子供達の所へ戻った。
すると何人もの男の子がこっちに駆け寄ってきた。

「おじさんスゲェな！　見直したぞ！」
「……今までどう見てたかその一言でよーく分かったよ」

興奮気味に話しかけてきているのはユリアをナンパしてた男の子。
俺の勇士を見て認識を改めたみたいで、妙に目がキラキラしてる。

スバルの方をチラッと見ると、男女の違いはあれど俺と似たような状態だ。

まぁ始めの模擬戦と違ってガチのタイマンだったからこの興奮も分からないでもないけど……。

「でもコレで安心して任せられるな！」
「おう！」

さっきの男の子が回りのヤツに声をかけ、周りのやつらも頷いている。

「んあ？　何のことだ？」

「兄ちゃんだったらユリアさんを任せられるってことだ！」
「いや。だからな、俺とユリアは――」

こんな騒ぎもあったが無事、社会見学は終わり子供達は帰っていった。

「疲れたな……」
「私はもう二度とゴメンだからね」

そしてこの日は幕を下ろした。
なんか忘れてる気もするけど……まぁ良いか。

「なぁリイン。もしかして忘れられてる？」
「ハイですぅ～……。リインは悲しいですよ」
「私は泣きたいわ」

その日、部隊長室から一晩中泣き声が聞こえてきたとか何とか。

ウィズの小部屋

ウ「一話でコメントを五人の方から頂いたぞ！！ヒャッホウ！」
ア《結構無理やりな感じでしたが……うれしいですね》
ウ「社会見学ネタって見ないもんなぁ～。それがよかったんだなうん。ヒャッホウ！」
ア《それで相棒、気づいてますか？》
ウ「何がだ？ヒャッホウ！」
ア《私の空気うんぬんはいつも通りとして、相棒がロリコンとか老け顔とか幼女趣味とか言われてますよ？》
ウ「ひゃ……！？って幼女趣味なんて書いてあった！？」

秋風さん

ウ「ほらぁ、お前が適当なこと言うから向こうも競演とか言い出したじゃねぇか……」
ア《その割にはうれしそうですよ？》
ウ「何処が！？」
ア《それより、ユリアさんまで呼ばれてますね。あの人新キャラですからいまのところ何処にも行った事無いですよね》
ユ「そうなのよ。めんどくさいから行きたくないんだけどね」
ウ「なら何で俺の首を鷲掴みにしてるのか教えてくれるかな？」
ユ「呼ばれたんだから行かないわけには行かないでしょう。さ、行くわよ」
ウ「ヤだ！いきたくねぇ！つかテメェ実はワクワクしてるだけ――ゴフッ！？」
ユ「静かになったし、行くわよ」
ア《アイアイサー》

青いタヌキさん

ウ「呼んでくれるのは全然うれしいよ！声がかかるの待ってるな！でも確かに小さいと男女並んでるだけで勘違いしたりするよなぁ」

ア《と言うことは私たちもそう見えるんでしょうか！？》

ウ「何でそうなるの！？」

ア《私たちは常に密着しているんですよ！もう体と体が！！これを夫婦と言わずに何と言う！？》

ウ「え？なんか夫婦まで話が発展してない！？」

ア《それとも相棒は私をこんなに傷物にしておいて捨てるんですか！？あぁ、そうなんですね！さぁ！お捨てなさい！！》

ウ「絡みにくいわ！！」

朧木さん

ウ「やっと俺のことを理解してくれる人が出てきてくれたな。もう涙が止まらないよ」

ア《むむむむ……ＫＫ。空気壊さないでは安直過ぎますし、空気機器……もう意味が分かりませんし》

ウ「どした？」

ア《いえ、私に都合が良いＫＫの訳し方が見つからないんですよ。何かありませんか？》

ウ「そういう所見せるとイメージ変わるぞ？そうだな、空気固定とかは？」

ア《ふむ。意味は？》

ウ「お前が出てくると大抵おんなじ雰囲気になる。空気はいつも同じだから固定」

ア《なんか幼稚くさいですが……それで妥協しましょう。私が出す空気は唯一無二、必要不可欠ですもんね？》

ウ「……おう」
ア《なんですか、今の間は？》

鴇坂カスハさん

ウ「そうだ！もっと言ってやれ！俺はまだ１８、ギリ未成年だって事を！」
ア《でも相棒は老け顔？みたいな事もおっしゃってますよ？》
ウ「むむっ。なんで皆俺のことを老け顔みたいに言うかな！？髪か！？この髪の色のせいなのか！？」
ア《違うでしょうね》
ウ「なんで！？」
ア《ユリアさんが老け顔？って質問がないからです。イラストも載っていないのに！！》
ウ「グスン……」

クロックさん

ウ「本当にあの事件は忙しかったなぁ。いい経験でもあったけど」
ア《そういえばレンさんの特徴は寡黙な秀才。でも意外と面白い？って感じらしいですよ。》
ウ「なんだ、その意外とって？」
ア《ぶっちゃけお話があまり進んでいなかったので絞りづらかったらしいです。つまり勝手に補完したと》
ウ「ほんとにっぶっちゃけたな……。と、とりあえず、俺もまた会いたいな」
ア《生きていればの話ですけどね》
ウ「デバイスがそんなこと言っちゃ駄目だと思うよ！？」

13．秋の社会見学　午後の部（後書き）

こんにちは。コメントをウィズたちに任せて上げるのが結構遅くなりはじめたた八神煌斗です。

コメント回っていないのに、こんなに貰って申し訳ない気持ちで一杯です。
試験が終わり次第、皆様の作品を読みに行かせてもらいますので、本当にごめんなさい！

それにしても、上でも言ってましたが社会見学ネタ、結構ウケがよかったみたいで安心しました。
多分、ウチの六課ならこんな感じになるでしょう。
他の方々の六課はともかく、ウチは大きな動きは無く、クスリとくる程度かと。

ヒロインの筈のはやてはかやの外。
こんなものですよ。ウチでのヒロインの扱いは。

さて、いい加減試験が迫ってきました。
あと2～3回で更新ストップになるかと。

それでわ！

１４．同意の黒

「……何で貴様まで居るのかね？」
「俺が知るか、バカ」

今、俺の目の前には黒髪、黒目の男。アイスマンが透明な板越しに居る。
アイツも俺も、気分は急降下。

「ほら、二人共。もっと仲良くしいや」
「はぁ……」

俺を挟むように居るはや姉とユリア。
はや姉は俺たちお互いの態度を注意し、ユリアは方肘を突いてため息をついている。

さてこの状況、簡単に言えばこのはや姉に嵌められた。

朝。
はや姉に出かけるから付いてきて欲しいと言われ、その話を聞いていたユリアが付いて来たいと言った。

この話を聞いたとき、何で俺なのか気になってたけど……。

やっと納得がいった。

途中……てか、本局の留置所に来た時点で何となく分かってたんだけど、もうその時は手遅れ。

俺はここに座り、目の前にアイスマンが居た。

「考えるまでも無く八神の仕業だろうな」

「いい加減『お姉ちゃん』って言いーや」

いきなり、はや姉が八神と言われた事に対して反論する。

というかまたそれか。最近出会ったヤツ全員に言ってるんじゃね？

「何度も言っているだろう。私と貴様の間にそんな関係は一切ないと」

「でもアンタ、言うなら時間差で生まれたウィズの双子みたいなモンやろ？」

「例えそうであっても呼ぶ理由にはならん！」

アイスマン、お前が不機嫌になる理由も何となく分かるぞ。

と、来て早々はや姉と俺が想像できないような会話をした後、アイスマンがユリアを見た。

「……で、そっちの女。まさかと思うが？」
「流石にアナタには分かるみたいね。始めましてで良いかしら？」
「構わん。貴様の母親は知っているが、貴様は知らんからな」
「そ」

こっちはこっちで最低限の会話だけ。
二人共、お互いの存在はもう分かってるみたいだし。

「はや姉。もしかして今までも何度かココ来てる？」
「来とるよ。今回で5回目位とちゃうかなぁ。シグナム達も来た事あるんよ」
「そんなに……」

なんだか最近、妙に忙しそうだなって思ってたけどそういうことか。

「おい、ウィズ」
「？　何だ急に名前で呼びやがって。気持ち悪い……」
「ウィーズー？」
「……なんだ、アイスマン？」

隣で怖い顔をしているはや姉に脅され、やむなく言い直す。
まさかとは思うが、俺とアイスマンを仲良くさせようとか考えてるんじゃないだろうな？

「トウギだ」
「何が？　……あ、お前の名前か？」
「分かったらそのふざけた名前はもう呼ぶな」
「ハイハイ」

腕を組んで、背もたれに深く座り込むアイス……トウギ。
急に機嫌を悪くしよってからに。

「あ、私はトーギって呼んでるんよ」
「それも止めろと言っている」
「えー、良いやんか。親しみがあって」
「そんなモノいらん！」

なんだかなぁ。
二人共仲が良いように見えるんだけど……。

「あら。ウィズ、もしかしてやきもち焼いてる？」
「ちげぇよ！　……で、トーギ。何なんだよ？」
「貴様まで……っ。もういい」

あれ。もしかして拗ねた？

コイツ表情豊かになったって言うか何て言うか。
元々こんな性格だったのか？

「なぁウィズ。トーギ、変わったって思わへん？」
「ん？　確かに少し愉快な性格になってる気がするけど」
「あははは！　愉快って！　トーギ、アンタ愉快だって！」
「君は黙れ。そして慎みという言葉を知れ」

はや姉と話してると、ユリアが俺の言葉を拾って指差してからかってる。

「やろ？　その辺の説明を……はいトーギ君！」
「む。君が説明したら良いだろう」
「私も全部理解した分けちゃうし、やっぱり張本人が説明すべきやと思わへん？」
「……了解した」

うんざりした様子のトーギ、そしてその姿をみて微笑んでるはや姉。

五回くらい会ってるって言ってたけど、既にはや姉＞トーギの式が出来上がってるっぽいな。
なんだか一気に距離が縮まった気がする。

「なんかお前との溝が急激に埋まった気がするよ」
「何を言っているのだ？そんなことより、私のここに何があったか覚えているか？」
「？」

トーギが指したのは自分の額。
んー……。何かあった気がするんだけど……。
「増幅器？」
「正確にはスカリエッティ作の感情の増幅器なのだが」
「あ、髪留めか？」

話がいきなりぶっ飛んだなぁ。

付いて行けるだろうか、俺。
いや、頑張れ俺。やればできる子、俺。

「付いていけるか？と言う顔をしているな」
「う……」
「簡単に言ってやろう。私は貴様が憎かった、それをスカリエッティの増幅器によって殺意にまで押し上げられたと言うことだ」
「……あれ、それだけ？」
「だから簡単に纏めてやると言っただろう？何ならもう少し細かく言ってやってもいいのだが？」
「余計なお世話だ！」

だけど、言われてみれば確かに。

さっきは愉快ってチャカしたけど、雰囲気はゆりかごで会った時と全く違う。

目つきも違うし。あの時に比べてよっぽど俺に似ている気がする。
性格の捻くれ具合は変わってないみたいだけどな。

「って、ちょっと待て。お前俺を恨んでるって……何でだよ？」
「言う必要が無いな」
「羨ましかったんじゃない？そうでしょ？」

いつの間にか、席を離れ、俺たちの後ろで小さなアヴェを操作していたユリアが言った。
アヴェを消して、乗り出すように、トウギに板越しに顔を近づける。

「……なぜそう思う？」
「そう聞いてる時点で認めてるようなモノだけど……。そうね。私も同じ思いを抱いてたからよ」
「……」
「私の中に記録はあっても記憶は無い。お父さんに会ったことがあるウィズ（コイツ）が酷く恨めしく思ったときもあったわ。
ま、今はそんなこと関係ないくらいお母さんＬＯＶＥだし。ウィズの事も守ってあげたいって思ってるけどね」

二人、いや四人とも口を開かない。

俺とはや姉はユリアの言葉の意味を理解して。
トーギは自分に問いかけた者を睨み、ユリアはただ答えを待つ。

フンッと、トーギが横に視線をずらした。

「案外分かりやすいのね、アナタ」
「……」

どこか満足げなユリア。本当にコイツは容赦が無いと言うか、何と言うか。
事情を知っててあんな聞き方できないぞ、普通。
隣に居るはや姉も知ってた……というか聞き出してたんだろうな。
頭抑えて、ため息を付いている。

「ユリアなぁ。そういうのは本人の口から言わせるもんやで」
「いいじゃない。どうせ自分から話したりするようなヤツじゃないわよ」
「そうやろうけど……」

まだ何処か納得いかない顔のはや姉に、何どこか満足気なユリア。

「な、なぁユリア。今の話……」
「本当の事だけどアンタが気にする事でもないわ。だけど、忘れることは許さないわよ」
「……」

そういって椅子に腰掛けるユリア。

既に話すことは無いのか、さっきのトウギの様に腕と足を組み、目を閉じた。

って言われてもなぁ……。この部屋の空気が重過ぎる。
こうなった張本人は言った通り既に我関せずを決め込んでるし。

はや姉は空気を変えようとトウギに話しかけてるけど、耳に入ってる様子は無い。
変わりに、その目は俺を写している。

「……なんだよ？」
「そこの女の――」
「ユリア、神崎ユリアよ」
「――ユリアと同じように俺にとっても既に過去だ。貴様に気にさせれる筋合いは無い」
「……」
「なんだ？」
「お前、本当にアイツか？」

さっきも思ったけど、初見、そしてその後の面識や行動を考えると、俺に気を使っている事が不自然で仕方ない。

はっきり言うと気持ち悪い。

しかも最後にコイツに会ったのが暴走状態の時だし。
印象が１８０度、全くと言って良いほど違う。

「それは私も思ったなぁ」
「だろ？」
「だから私は【アイスマン】と【トウギ】は別人と思うことにしたんよ」

成る程。そっちの方が俺も良い。

違いを探す所じゃない。同じ所を探す方が難しい。
それならそう考えた方が楽だ。

「それと……」
「ん？」
「その、なんだ……」
「何だよ、言いたいことがあるならさっさと言えよ」

言いたい事を言っていたクセに、急に口ごもる。
視線もかなり泳いでるし……本当になんなんだ？

この表情ははや姉も見たことが無かったみたいで、首をかしげている。
ユリアは……寝てるんじゃねぇか？

「レイラと、話をさせて欲しい……」

ウィズの小部屋

ウ「さてさて、今回は早速コメ返しに行かせて貰うぞ！！」

朧木さん

ウ「外伝の方は全然更新されてないもんなぁ。俺としてはあの黒歴史は見られたくないわけだが……」

ア《情報ではこっちと同時進行が出来ない、からしいです》

ウ「なんで？」

ア《二つの話を同時に考えると自分でも整理が出来なくなるとか》

ウ「さすが俺の生みの親……」

魚崎圭さん
はじめまして！

ウ「こう……何て言うのかなぁ。なんでカッコイイって単語は言われないのかな？」

ア《カッコよくないからでしょう。実際相棒って絞まってるようで絞まってませんし》

ウ「なにその毒舌！？」

ア《しかし私達で勉強ですか……。相棒みたいに育っても責任は取れませんよ？》

ウ「俺みたいって何！？そんなに俺だめ！？」

ア《……》

ウ「その無言が逆につらい！」

ＴＯＵＤＡさん

ウ「（ガクガクガク……）」

ア《どうしました？》

ウ「いや、隆浩が言ったこと想像したら急に震えが……」

ア《何馬鹿なことやってんですか。それより遊びに来たいそうですよ？》

ウ「ココにきたら乗っ取られそうな気がするんのは俺だけ？」

ア《なんとも。あと本編にも出たい、ですか……。ココだけの話この先は一直線に突き進んでいく予定ですからＴＯＵＤＡさんのような感じでは無理じゃないですか？》

ウ「そうなの？俺そんなの全然知らないけど？」

ア《そりゃ教えてませんから。あ、でもどうにかして少しでも出そうかと色々考えてるらしいのでいつか出します、としか言えないようですね。》

ウ「本当にごめんな」

１４．同意の黒（後書き）

こんにちは、一日早くＰＨＡＮＴＯＭ　ＭＩＮＤＡ買いました八神煌斗です。
ずっと聞いてます。

さて、今回はアイスマンの本名を出しました。
名前の意味ですがｔｏｇｅｔｈｅｒから取っています。
理由は……わかりますよね？わからない方はいってください。
次回書きます。

ココだけの話、ウィズになる前の名前がこのトウギでした。
タイトルも『魔法少女リリマルなのは　ＳｔｒｉｋｅｒＳ　ｔｏｇｅｔｈｅｒ』でしたし。

さて、後更新は多く見て二回かな？
二月二日に終わるのでその辺りから暴走予定。
ＫＨｂｂｓも買ったのにあんまり出来てないし。

でわ。
また二日後にお会いしましょう！

15．戦闘開始

あのトウギの爆弾発言から数分。
面会が終わって今は三人で長い廊下を歩いている。
勿論レイラもちゃんと持って帰ってきてる。

面会時間はそう多くない。今回は俺たちと話したから余計だろう。
数分間だけだが、トウギとレイラは何処か満足気だった。

「それにしても、まさかアイツと会わせられるとは……」
「ビックリしたやろ？」
「それはもう盛大に」

正直に言うとトーギが出てくるまでナンバーズの子達が出てくるものだと思ってたし。

……ん？
良く考えたらナンバーズが収容されてるのってここじゃねぇじゃん……。

「これからどうすんの？」
「あ、ハイハイ！　私はお昼を食べに行きたいのです、部隊長殿！」
「お昼も近いし……そやな。そうしよか」
「いやったぁ！」

嬉しさを体全部使って表現しすように、跳んで喜ぶ。
こういうのを見ると年相応なんだけど……コイツの事を大人か子供か、どう見たら良いのかたまに悩む。

そして俺たちはそのまま、出口に向かって歩き出した。

その時、アラートが大きく鳴り響き、視界が一瞬にして赤に点滅した。

「っ！　なんだ!?」
「アラート？　これは……敵襲!?」
「えー。なんでこのタイミングなのよぉ……」

緊迫感が充満し始め、俺たちを含めた周りの局員全てが緊張し始めてる中、コイツだけはマイペースだった。
肩を下ろし、頭を垂れ、本当に落ち込んでる。

「ほらユリア。また連れてったるから。な？」
「う〜〜……」

いや、二人だった。

「あーもう！　さっさと捕まえるわよ！」

ユリアがそう気合を入れると同時。
俺たちの目の前の天井が砕け落ちた。

咄嗟に後ろに跳んで下敷きになるのは逃れた。

「あぁ？　どこにも居ねぇじゃねぇか……」
「ふざけろ。ここはまだ手前だ。地図も読めないのか？」
「あーあーあー！　何にも聞こえねぇ！！」

何時か聞いた声。
それが砂埃充満する中から聞こえてきた。

ユリアの表情もさっきとは全く違う。
前かがみになり、両手にはアヴェを出現させ、ひたすらに目の前を睨んでいる。

「んぁ？　おい、この魔力……こっちか？」

そこから出てきたのは、あの時の赤髪の男だった。

「おうおうおう。こりゃなんの偶然だ、こりゃ？　もしかして俺、

運が向いてきた？」
「逆でしょう？　何でココに気なのか知らないけれど、私が居るんだからね」
「それこそ逆だろ。俺に会った時点でお前は潰れる運命だ」

睨みあったままお互いに動かない。一触即発の雰囲気。
互いが互いに隙を探している。

「（ウィズ、先に言っておくけど動いたらあかんよ）」
「（なんでだよ？　今アイツが見てるのはユリアだ。俺が動いて隙でも作れば……）」
「（あの赤男が出てくる前、話し声は二人分聞こえた。あの男がこっちを見てないんはそういう事や）」

あの数秒でそこまで……。
流石に部隊長やってるだけあるよな、はや姉。

あの煙の中にもう一人、あの白いヤツか？

次第に煙が晴れていく。
そこに立っていたのは、予想通り白髪の男だった。

腕を上げてさえいないが、その目はしっかり俺たちを見ている。
どうしたら……。

「さぁ、いくぜぇ……ユリア！」
「っ！　――ｃｒｅａｔｅ（クリエイト）――ｐｌｕｎｇｅ（つっこめ）！――」
「って、おい！」

こっちがどうしようか考えてる間に、あちらさんは戦闘を始めやがった。

「（ウィズ！　私じゃこの狭い空間、それもリインが居ない状況じゃ魔法が使えへん）」
「（分かってる。俺は援護に回る！）」

アテナをレイラ、二つを同時にセットアップ。
この狭い空間なら、刀身が短いダブルソードが適任。

「ウィズ、右！」
「！？」

後ろからはや姉の指示が飛び、俺は言われるがまま跳ぶ。
数瞬の後、俺の居た場所が爆発を起こした。

「（ウィズ、私が魔力を探って指示を出す。聞き逃さんといてや！）」
「（はや姉……助かる！）」

そして俺は走り出し、赤髪の男に切りかかる！

「はあぁぁ！！」
「ちぃっ」

それに気づいたユリアが一歩後退、入れ替わるように俺が前に出る。
振りかぶる二刀を、赤髪の男は右手に装備した巨大な盾で防ぐ。

おそらく、これがコイツのデバイス。
巨大な盾は肩をも覆いつくすように長い。
色は幾人も葬ったように、鮮血を浴びたような赤。

「おまえな、空気読めよ。俺は別のヤツと戦ってんだぞ？」
「だから……何だってんだ！！」

「ヴィオル、ココはお前に任せる」

白髪の男が短く言い、この場を後にしようとしたその時。
男の周りに数匹のアヴェが、囲むように飛び回った。

「どこに行く気か知らないけどね、行かせる訳無いでしょ」
「ま、分かっていたがな」

腕を振るう。
すると、弾かれた様な動きを見せ、アヴェ達が消える。

「解ってはいたけど、魔力光の色が無いってのは厄介なものね」
「色が……無い？」
「何時までくっ付いてんだ、テメーはよぉ！！」

赤髪、ヴィオルと呼ばれた男が盾を横になぎ払う。
俺は弾かれるように後ろに跳び、ユリアの隣にまで下がる。

「ユリア。色が無いってどういうことなん？」
「言葉通りの意味よ。エストラ……白髪の男は魔力に色が無いのよ」
「は？　色が無いなら色は白じゃないのか？」
「馬鹿言わないで。それは白色よ。どうしても色と言いたいなら、アイツの色は無色」

だから視認が出来ないって、透明だって事か。

厄介極まりないな。
いくら魔力を感知できても、見えないなら避ける事なんて……。

「ほんなら、対策は十分練れるな」

マジかよ？

「（良く聞きや、ウィズ）」

そして、念話で俺に対策を教えてくれた。

「（成る程。確かにそれなら交わし切ることが出来る）」

「（一応私も魔力サーチはしておくけど……頼りにせんといてや）」

「（私が全部叩き落してあげるから、そこまで気を張る必要は無いわよ）」

「（頼りにしてるぜ？）」

「（この戦闘が終わった後で私を称えるが良いわ）」

それは頼りになるお言葉だ。

さて、ココからはおふざけも一切無し。

俺に任された相手、赤髪の男、ヴィオルを睨む。

「ん？　お前が相手か？」

「まぁ……な！」

再び、ダブルで切りかかるも簡単に防がれた。
だがここで攻撃は止めない。

双剣の持ち味。
攻撃力を犠牲にして得る――怒涛の連激！

「はぁ！　中々早ぇじゃねぇか！」
「簡単に受けきってやがるくせにっ」
「それは俺が強ぇからだぁ！」
「ぐっ……！」

弾かれる双剣。
俺の体ががら空きになる。

「ほれ、腹ぁ力入れろ！」
「っ！　……ゴフッ！？」

腹に入るヴィオルの左腕。
立っていられなくなり。その場に膝をつく。

「ウィズ！　っ！」
「ウィ……はやて！　前！」
「君たちの相手は俺だろう！」

ユリアとはや姉が助けに入ってくれようとしたみたいだが、それもエストラに邪魔されたらしい。
目の前には、ヴィオルが俺を見下ろしている。

「こういうの、お前の育った星でこういうんだっけか？　棚から草餅？」
「牡丹餅だ、バカ」
「それは勉強になったぜ、あんがとさん」

右手に装備している盾が、天高く、掲げられる。

「んじゃ、暴れられても面倒だからな。寝てくれや」

振り下ろされる盾。
数秒も経たないうちに、これは俺に振り下ろされ、意識を失う。

逃げたくても既に手遅れ。
仕方ない、か。

覚悟を決めた。

「何！？」

その時、ヴィオルが盾を後ろに振りぬいた。

「ご挨拶だな、テメェ」

「何分、まともな教育を受けていないものでね」

ヴィオルが睨む先そこに立っているのは黒い影。

そいつは、さっきまで俺たちと会っていたヤツ。

「さて、これは何の騒ぎなのか、教えてもらおうか」

トウギだった。

ウィズの小部屋

ウ「さて、前回の話から持ち上がった【トウギはツンデレなのか！？】さて、どうなんだろうな？」

ア《一応情報では【素直になれず捻くれている、口調がアレな相棒】がモデルらしいですよ》

ウ「でも俺への気の使い方とか、最後の一言とか……完全にアレだよな？」

ア《ですねぇ、相棒なら声を大にして言ってくれるのでしょう?》
ウ「あ、それは無い」
ア《殺生な!?》

秋風さん

ア《見ての通りレイラは相棒がちゃんともって帰ってきています。まぁ、何故か今回の最後にまた出てきてますけど……》
ウ「レイラは少し残念そうだったけど……さすがにな。トウギの理由は次回で。ってヤツだな」
ア《というか出てこれないんですか?》
ウ「操られてたっていっても流石に二三ヶ月じゃなぁ。フェイ姉でも半年近くかかってるし」
ア《そうですか。あとトウギさんも出ますか?ときてますよ?》
ウ「こっちは全然構わないけど……。トウギってあんま出てきてないからキャラが定まってないぞ?」
ア《いえ、もうツンデレというかなり確かなものが……》
ウ「あぁ、そういえば」

ナイトホークさん

ウ「この方もトウギがツンデレか?だと」
ア《まぁ、今回の感想は全部これが主ですからねぇ》
ウ「もうそれで言いや。アイツはツンデレ。以上」
ア《そういえばトウギさんとアリサさんが出会ったら》
ウ「それ以上は言わないでくれ」

朧木さん

ウ「まぁ、似るのは仕方が無いよな。とりあえず適当に考えたわけじゃないからご勘弁」

ア《あとはこの方からも出演依頼らしきものが》

ウ「全然かまわねぇぞ。酷い扱いにさえなさなければ」

ア《死ななければ良いそうですよ》

ウ「酷いの定義せま!?え、死ななければ何でもＯＫ!?」

ア《あ、後は私には傷ひとつつけないでください》

ウ「……もういい」

ＴＯＵＤＡさん

ウ「一応アイスマンの命名者は俺な。なかなかイカスだろ?」

ア《小学生でも思いつきそうな名前ですけどね》

ウ「え?マジで?」

ア《ハイ。……あ、はやてさんたちに内緒に言われてたのを忘れてました、テヘ》

ウ「テヘ、って!?絶対に確信犯だよね!?」

ア《あ、隆浩さんがこちらに来るそうですよ。えっと……何かで》

ウ「うん。これなんだろうな。ガチで知らないんだけど……。まぁ、なんとなくロボット系なのは分かるけど」

ア《調べておきましょう、宿題です》

ウ「え、俺が?」

15．戦闘開始（後書き）

こんにちは、八神煌斗です。
とりあえずトウギが出てきている理由は次回で。

今月の更新も後1～2回？
少なく見積もって1回といっておいたほうが良いでしょうか？

とにかく、オリの展開には悩みますねぇ。
原作キャラの出番が減ってるのは自覚してるんですけど……。

話を考える暇も無く、大学も既に決まっているので三月後半には更新遅れそうですし……。
とにかくどうにかせねば……！！

それでわ！

16．怒りの青

「さて、これは何の騒ぎなのか、教えてもらおうか」
「言ったでしょう。今回は君が目的ですよ」

トウギの後ろから、新たな声。

そこに立っているのは、下ろしている青髪以外ヴィオルに瓜二つの男。
来ている蒼黒の服もジャケットなんだろう。ヴィオルと全く同じ形をしていた。

「それはそれは、人気者は辛い……なっ！」

口を開きながら裏拳を繰り出すトウギだが、受けとめられる。
しかし、トウギは別段気にした様子も無く、すぐさまこちらに向かって走り出して来た。

その姿を確認し、ヴィオルは振り返ると同時に手の盾でトウギに殴りかかる。

「おいおい。俺と正面から殴り合おうってかぁ！？」
「ふっ、そんなはず無いだろう」

ヴィオルの攻撃を屈んで交し、俺の首根っこを掴み……って、え？

「おい！　テメェなにし――」

「黙っていろ。舌を噛んでも知らんぞ！」

どこにそんな力が在るのか。

俺を掴んだまま、後ろに待機していたはや姉の元まで連れてきた。

「トーギ、なんでアンタが外に出てるんや？」

「あそこの青いのが出してくれてな。一応顔を知らない中では無いのからな、援護してやっろうというわけだ」

「やっぱアングまで来てたか。トーギが来て助かったわね」

ユリアもアヴェで牽制しつつ、俺たちの元まで後退してくる。

アング、おそらく青髪の男の事だろう。

「トーギ、暇なんでしょ。手伝いなさい」

「暇という訳ではないが……元々のそつもりだ。ウィズ、レイラを渡せ」

そう言って、手を俺に差し出してくる。

ユリアは人手が欲しいからそう言ったみたいだが、俺はまだコイツ

を信用する気なんてない。

確かに性格は変わってるし、少なくとも今は悪いヤツじゃないんだろう。

俺だってトウギの気持ちも分かるつもりだ。

もし立ち居地が逆だったら、トウギと同じことをしていると思う。

だけど、だからといってコイツにされた事を考えるとそう簡単に信用できるはずが無い。

「渡さないのは構わないがな、その時は避難させてもらう。私として命は惜しい」

「……」

「ウィズ、渡して」

「はや姉!?」

どうしていいか悩んでいた時、はや姉が渡してと言って来た。

「トーギなら裏切らんよ。だから、な?」

「……」

《私からも頼む。マスターを信じてやってくれ》

「……」

立ち上がり、無言でトウギにレイラを渡す。

同時に俺の姿はアテナだけ、つい最近までの格好へと戻る。

「いいのかね？」
「ふん。はや姉とレイラを裏切ったら承知しねぇからな」
「精々期待に答えるとしよう。レイラ、セットアップ」
《了解。――ｓｅｔ　ｕｐ――》

黒い光がトウギを包み、次に現れた時には甲冑を纏った姿。
しかし、依然に比べて細部に変化が見られる。

白いカッター、黒のズボン。胸部に鎧。
丈が鳩尾辺りまでの黒のジャケットに、足首までの黒の腰布は右側のみ。
以前のコートが無くなっただけで、随分軽装になったイメージがある。

「足を引っ張ってくれるなよ、ウィズ」
「そりゃ、俺の台詞だ」
「やる気になった所で、良く聞きなさい。はやても」

トウギがセットアップしたのを確かめると、ユリアが言った。
俺とはや姉は頷き、トーギは横目で見るだけだ。

「あの青いの、アングって言うんだけど。近づいちゃだめよ。特にウィズとトーギ」

「……なんでなん？」
「説明してる暇は無いわ。本当は私が相手をしたいんだけど……」

ユリアが見るのは白い男、エストラを睨みつける。

言いたいことは俺でもわかる。

見えない、無色の魔力。
どれだけはや姉のサーチと作戦があっても、見えないものは見えない。

そこで重要になってくるのが経験や慣れ。
それがこの中で一番高いのは言うまでもない、ユリアだ。

「とりあえず乱戦は避けなさい。そうなったらこっちに勝ち目は無いわよ？」
「だろうな。この即興のチームが勝てるはずが無い」
「そういう事。さ、行くわよ！」

「八神、貴様は下がって見ていろ。狭い空間では邪魔なだけだ」
「そやな。私はサーチするだけにしとくわ」
「おい、偉そうだぞ」
「私にとって八神は上司でも何でも無いからな」
「ちっ」

一番前に、ユリア、後ろに並ぶように俺とトウギ。

そして後ろにはや姉。

「ん？　もう良いのか？」

ヴィオルが壁に背を預け座ったまま、顔だけをこっちに向け聞いてくる。
完全に舐められてる。

「ええ。お蔭様で……勝てそうだわ！！　――ｐｌｕｎｇｅ（つっこめ）！――」

いつの間に用意していたのか。
数個のアヴェをやつ等が居る地点に向かって打ち込んだ。

これが開戦の合図。俺たち三人は一斉に走り出す。

だが、直ぐにユリアは横に反れる。

「正面、来るで！！」

数瞬遅れてはや姉の声。
それを聞いて俺とトウギはお互い左右に跳び、飛来して来ていただろうスフィアを避ける。

「貴方の相手は僕がしましょう」
「っ！」
《――Ｈｙｐｅｒｉｏｎ（ハイペリオン）！――》

向かって放たれた魔力刃をハイペリオンで防ぐ。

「アンタが俺の相手、か」
「アングと申します。以後お見知りおきを」

俺の前に現れたのは青髪の男、アング。
こんな状況で自己紹介をしてきやがった。

そこまで余裕てか？

一度相手を弾き、距離を置く。

アイツには近付くなってユリアが言ってた。
それなら、この狭い空間じゃ少し扱いづらいが……。

「アテナ、ガンソード」
《――Ｇｕｎ（ガン）　Ｓｉｌｈｏｕｅｔｔｅ（シルエット）――》

俺に仕える遠距離魔法。ブランコ・スフィアとブランコ・バスター。
流石にバスターはこの狭い場所じゃ使えねぇけど、スフィアなら十分いける。
ガンソードだと１０球まで作ることも出来る。

「アテナ！」
《――ｂｌａｎｃｏ（ブランコ）　Ｓｐｈｅｒｅ（スフィア）――》

造りだすのは俺が作れる最大数の１０。

アングがヴィオルと似通った戦闘力なら一瞬でも気を抜いた瞬間に俺はやられる。
一瞬の油断も、妥協も許されない。
俺が持てる最大の力で迎え撃つ！

《――ｆｉｒｅ！――》

一斉に打ち出す。
この狭い空間、それもこの近距離なら流石に全部とはいかなくても……！

「ふむ。速さは良いですが……密度、構築式が緩いですね」
「なに！？」

だが、俺の期待は裏切られる。
アングは群青色のシールドを張り、俺のスフィアを全て防いだ。

《相棒！》
「っ！」

アテナに呼ばれてハッとする。
目の前には、スフィアの軍勢が迫ってきていた。
慌てて体を捻り、それをかわす。

「不足の自体が起きたからといって、立ち止まることは――」
「！　――しまっ！」

反応が遅れた。
いつの間にか俺の懐に入り込んでいたアングに、アテナを持っている右手を掴まれた。

「――バカのすることですよ！」

空いている手で、俺の頭を握る。

「――ｈａｃｋ！――」
「あ――あああぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！？？」

アングの声が聞こえると同時に、頭に激痛が走った。
何かが、入り込んでくるような痛み。
中のモノが、俺が押し退けられる様な。
言いがたい痛みが、頭から全身に駆け抜ける。

「ウィズ！！」

声が、最後に聞こえた。

ウィズの小部屋

ウ「んじゃ早速コメ返し――……」
ア《相棒！未確認飛行物体接近中！》
ウ「んあ？そんなモン来るわけが……」
？？？「ｂｒｅａｋ！隣のコメント返し！！！」
ウ「ぎゃあぁぁぁあぁあ！！？な、なに！？俺の休息場があぁ！！

？」
ア《屋根がぶち破られて……なんとも悲惨なことに……》
ウ「畜生……。何だよ、この黒いロボット！？責任者出て来いよ！」
？？？「よんだか？」
？？？「兄ちゃん、流石にやり過ぎだと……」
？？？「そんなこと無い！！」
ウ「た……隆浩。と誰だ？」
ア《えーと。なのはＳＳ・ｆｒｅｅｄｏｍで隆浩さんの弟、晶彦さんですね》
隆「紹介ありがとう！という訳で、来てやったぜ！感謝しろ！！」
ウ「何その上から目線！？この参上みてなんか……」
晶「それではコメ返しでーす」
ウ「台詞まで遮られた！？」

ｎａｋｉさん
隆「トーギもとうとう登場したのな～。やっぱツンデレだなアレは」
晶「だよね。僕もそうだと思うよ。あとウィズさん争奪戦が無くなるのは残念だって」
隆「ウィズっちのどこがいいのかねぇ。まぁ、面白いってのは否定しないけどな。どうせならもっと混ぜっ返したらいいんだ」
晶「流石にそれは可哀想だよ……」
ウ「あれ、俺が言うこと残ってる？
ア《いいえ》

朧木さん

ウ「確かにナイスタイミ――」
隆「ナイスタイミングだったな。もしかして影で見てたんじゃないか？」
ウ「そんなにセコイ事――」
晶「そんなにずるい事はしてないと思うよ？ツンデレだし」
隆「確かにツンデレはそんなことしないか」
ウ「いや、ツンデレ関係ないだろ？」
隆「さっきから煩いぞ、ウィズっち！！」
ウ「俺のコーナーだよ！？」
隆「そんなの関係ないわ！さっさと朧木ん所で殺られてこい！！」
ウ「酷い！！」

朧木さん、復学時期など考察ありがとうございます！

隆「さて、十分楽しんだしそろそろ帰るか。ってあれ？晶彦は？」
ア《晶彦さんは既に乗り込んでますよ》
隆「ん、サンキュー。んじゃぁなウィズっち。楽しかったぜ！」
ウ「俺の部屋が……俺のコーナーが……はや姉になんて言い訳すれば……」
隆「？」
ア《あぁ、少しムコウに言っただけなので気にしないでください》
隆「了解。あ、またこっちに顔出して良いぞ？その代わり俺たちも来るけど」
ウ「もうこんでいいわぁ！！」
隆「そう照れるなって。んしゃなぁ」

ア《行きましたね》
ウ「本当に好き勝手するだけして帰っていきやがった……」
ア《コーナーも乗っ取られましたしねぇ。私なんて禄に話してませ

んよ?≫
ウ「チクショー!!もう来んなぁーー!!」

ゲスト情報

阿部隆浩(あべたかひろ)　出演作品：なのはＳＳ・ｆｒｅｅｄｏｍ
少し背が物足りない陰陽術師。本人はか弱い子羊と言っているが実際はかなりアレな人。
良く言えば完全無欠完璧人間。悪く言えばチート。

阿部晶彦(あべあきひこ)　出演作品：なのはＳＳ・ｆｒｅｅｄｏｍ
隆浩の弟で陰陽術師見習い。
所属した部署も署員全員には必ず良い事が起きるらしく、「仏の晶彦」などの二つ名がある。

１６．怒りの青（後書き）

こんにちは、今回は少し短いです八神煌斗です。

今回は特に言うことと言えば短いくらいですかね……。
あぁ、後次回で一旦更新停止です。
次の更新は２／４になると思います。が、あくまで予定です。
一応その週には必ず更新させていただきます。

それでわ。
受験生の皆様、一緒に頑張りましょう。

17．矛盾／不可視創造

トウギｓｉｄｅ――――――――――――――――

「はぁ！　やるじゃねぇか、トウギ！」
「そういう貴様は速さが足りないな」
「言うねぇ。……なら、コイツはどうだ！！」

ヤツの、ヴィオルの攻撃がより速さを増す。

これは空間が狭いからと、二槍にしていて正解だったか。
一本なら、さすがに対処しきれない。

「レイラ！」
《――ｎｅｇｒｏ（ネグロ）　ｓｔａｄ（スタッド）――》

レイラの刃に、漆黒の魔力刃を纏わせ、攻撃力を上乗せする。
元よりレイラのスタイルの中に、速力強化系のスタイルは無い。
それならば少しでも攻撃力を底上げし、当たる一撃の重さを上げ、その一撃に賭ける！

「おおぉぉぉぉ！！」
「はぁっ！」

共に打ち込み、鍔迫り合いの状態へとなる。
接点を中心に、黒と赤の魔力の本流が巻き起こり、風が荒れ狂う。
だが、後退するわけには行かない。

「どうよ、俺の盾と打ち合った感想は？　硬ぇだろ？」
「残念だが、レイラの前には絶対の盾で在ろうとも紙切れ同然だな」
「何だ、最強の矛とでも言いてぇのか？」
「無論！」

ヴィオルごと盾を押し返し、自らも後退。
一度距離を取り、一時の休みを取る。

「お前がそこまで言うなら、矛盾（むじゅん）の答えをココで出してみようや？」
「私も丁度それを考えていた。良いだろう。その話、乗ってやる」

矛盾。以前、見たことのあるあの管理外世界の教訓。

いかなる矛の攻撃も許さない絶対の盾と、いかなる盾の防御も許さない最強の矛。
この話では答えは出ずに終わっていた。

だが、私は信じている。
レイラを信じれば、その時こそレイラは最強の矛と成り得ると。
……正確にはレイラは矛ではなく槍だが、そんなことは些細な事。

「レイラ、解け」
《了解しました――Ｎｏｒｍａｌ（ノーマル）　Ｓｉｌｈｏｕｅｔｔｅ（シルエット）――ｎｅｇｒｏ（ネグロ）　ｓｔａｄ（スタッド）　ｓｅｃｏｎｄ（セカンド）――》

二槍から一本槍へ。

そして本来の刃を遥かに上回る大きさの圧縮魔力刃を生成。
さらに、貫く事に特化させる為に微弱に魔力を振動させる。

攻撃力なら本来、ノーマルより突撃槍のシールやハルバート状のブイオの方が勝っている。

だが、シールは魔力を纏った所で性質上キャンセルされる。
ブイオは穿つと言う概念を削り、切ると言う項目を付加したものだ。
貫くと言うことに関してはノーマルが一番良い。

……へんなプライドだとは思うがな。

「さて、絶対の盾とやらを穿いて見せよう」
「なら俺は、最強の矛を防いでやらぁ」

矛先を敵に向け、敵は構えを俺に向ける。
互いに目を離さず、次に放つ最後の一撃で勝負が決まると知っている。
跳び出す切っ掛けを待つ。
その時だった。
「あ――ああああぁぁぁぁあぁぁぁぁぁ！！！？？」
叫び声が聞こえてきたのは。
ユリアｓｉｄｅ――――――――――――――――――――
「あぁもう！うっとうしい！――ｆｌｏｃｋ（あつまれ）！――ｄｅｆｅｎｄ（ふせげ）！――」

辺りに散らしていたアヴェを引き戻し、私の壁とする。

ほぼ同時、壁になっていたアヴェ達が弾かれる様な動きを見せ、消えていく。

実際は『様』な、では無く本当に見えないもので弾かれている。

見えないモノに反応出来るのは長年の経験と、はやてが提案した策あっての事。

経験は殆ど勘で、この前戦った時も手当たりしだいに避けていたけど、今回は違う。

はやての策。

それは自分を覆うように球体の魔力の膜を作ること。

これは言わば魔力感知器。

スフィアは見えなくてもそこに在る。

なら、私が創った膜が貫通されるはず。

そして穴が開いた方向から、スフィアが飛んで来るという事。

魔力が少なく、マルチタスクが苦手なウィズや、同位体のトーギには絶対に出来ないこと。

これは常に一定量の魔力を、常に同じ形に放出し続けると言う事だから。

だけど、お母さんのコピー体の私になら、この魔力と演算能力が出

来る。

「――ｄｅｐｌｏｙｍｅｎｔ（ちれ）！――ｐｉｅｒｃｅ（つらぬけ）！――」

「効かないと言っている」

攻撃に回したアヴェが全て打ち落とされる。

それなら――！

「――ｃｒｅａｔｅ（クリエイト）……Ｌｅｏｎ（レオン）！――」

創り出すのは灰色の獅子、レオン。

防御用にアヴェは二体だけ残しておく。

……あの時、なのはと模擬戦しておいて正解だったわね。

もし私が鈍っていることにあのまま気づかなかったら、防御用のアヴェなんか創れなかったし、レオンの制御に思考を全部裂いていた事になってた。

とは言っても、レオンの制御は今もギリギリ。

でも、アヴェだとエストラまで届かない。

長引かせるだけこっちが不利。

「――ｐｌｕｎｇｅ（つっこめ）――ｂｒｅａｋ（くだけ）！――」

命令を聞き、真っ直ぐにエストラまで駆ける私の獅子。
エルトラも先ほど同様、その手をレオンに向けるが、私の獅子は止まらない。

「ちっ、鈍い獣だ……」
「せめて頑丈って言ってくれる？」

初めて、エストラが回避行動を取った。
この好機、逃すわけには！

「――ｐｌｕｎｇｅ（つっこめ）！――」

二節ではなく一節での命令行使。
今の私にレオンに二節の指示を出した上に、アヴェに二節の命令はする余裕がない。
それでも、今のエストラには十分すぎる！

「ちぃ！」

体を捻り、無理な体勢で二度目回避行動。

元々エストラは、その希少能力（レア・スキル）に頼りすぎて、接近戦は得意じゃない。

つまり、一度でも懐に入るか、攻撃行動をさせなければ、こっちに勝機がある！！

「アヴェ――ｔｕｒｎ（まわれ）――ｐｉｅｒｃｅ（つらぬけ）！――。レオン――ｂｒｅａｋ（だく）！――」

前からアヴェ、後ろからレオン。

今の無理な状態じゃ避けきれないでしょ！

「あ――あああぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！？？」

「！？」

だけど、この決定的な勝機に私は気をそらしてしまった。

「っ。見せたな、隙を！」

「しま――！」

「遅い！」

体制を立て直したエストラが右手を水平に、体を軸に回転する。

同時に囲んでいたアヴェとレオンが二つに割れ、消えた。
魔力刃で切られたか……。
だけど、今はそんなことより。
エストラに注意を割きつつ、叫び声が聞こえた方を見る。
そこには、予想通り最悪の事態に陥っていた。
ウィズが、アングに捕まっていた。
頭を掴んでいる手は群青色に輝き、ウィズとの接点から、侵食していく。
最悪の事態だ。
あれほど近付くなって言ったのに！
「ウィズ！」
はやての叫び声が響く。
まさかと思ってはやてを見ると、案の定。
ウィズの方に駆け出していた。
アングはそんなはやてを見て、気味の悪い笑みを浮かべた後、ウィズを掴んでいた手を離した。
糸が切れた人形のようにその場に倒れるウィズ。

アングはその場から下がり、それを確認したエストラもまた下がった。

「ウィズ！」

はやてがアングを警戒しながらもウィズの元へと駆け寄る。

でもね、それじゃ駄目なのよはやて！

「トーギ！　はやてを止めなさい！　早く！！」

「むっ！」

叫びながら、はやてへと足を向け駆け出す。

トーギと戦っていたヴィオルも下がってたみたいで、直ぐに反応してくれた。

私とトーギ。出来る限り、最速といって良いほどの早さで私は今の状況を把握した。

でも間に合わない。

ウィズは半身で起き上がり、その手にはアテナと言う刃を握っている。

ここで初めてはやてがウィズの異変に気づいて、足を止めた。
でも、もう遅い。
ウィズがアテナを振り抜いてはやては切られる。

「はやて、しゃがめ！！」
「！」

私でも、トーギでも無い。第三者の声。
はやてはそれに反応し、その場でしゃがみ込んだ。
刹那、その頭上を数多の青いスフィア……いや。アレは刃だ。
数多の魔力刃が通り抜け、ウィズに直撃した。
そしてウィズはゆっくりと前のめりに倒れこむ。

飛来してきた方向を見る。
そこに居たのはトーギよりもさらに黒い格好をした男が、一本の槍を掲げていた。

「クロノ君！？」
「状況を知りたいが……それは後回しだな」

はやての横に立ち、辺りを見回す男、クロノ。

「とりあえず、姉に手を出す愚弟にお仕置きだ」
「残念だがそれは適わない。クロノ提督」
「お前か……」

口を挟んだアング。アングを知っていようなクロノ。
私たちは何も言えずにその場で様子みに回る。
クロノが出すその重圧（プレッシャー）。空気が重過ぎて、この私でも口を挟めない。

「提督様直々に持て成してくれるようで悪いが、俺たちは帰らせてもらうことにする。本来の目的とは違ったが、大きな収穫があったからな」

二人の会話に口を出したのはエストラ。

そして直ぐに三人の体は嘘のように消えうせた。
多分、口を挟んだときには足元に転送用魔方陣を敷いていたのね。
最後に残ったのは、荒れた廊下と、私たちだけだった。

ウィズの半壊部屋

ウ「う、うぅ……」
ア《あー。やっぱり次回には何も無かったように元通り！とはいきませんでしたか……》
ウ「畜生……。はや姉には雷落とされるし踏んだり蹴ったりだ……。こんな時くらい小説の強みを見せろよーー！！」
ア《それは色々と禁句ですよ！？》

？？？「えっと……もう良いかな？」

ア《おや。貴方は……誰ですか？》
直「いや、直人ですよ！？」
ア《あぁ。最近ＳｔＳの時間軸に来たって言う……》
直「そうそう！」
ア《天下御免のフラグメイカー、でしたっけ？》
直「そうそ……え？なにそれ！？そんな印象！？」
ア《感想では何時も秋風さんがそのように書いてますし……実際六人？そして増える感じがムンムンですし……》
直「うん。……作者殺っとこう」
ア《良いじゃないですか。フラグメイカー。相棒のヘタレに比べたらかっこいいですよ？カタカナですし》
直「判断基準そこか！？」

ア《では相棒はショックで立ち直れないようなのでコメ返しお願いします》
直「……そんなのでいいのか？」

秋風さん

直「何が悲しくて自分の作者にコメ返しを……」
ア《でもウチのを見習うのはお勧めしませんよ？》
直「それはどっちの人？」
ア《両方です。あ、そういえば最近自分でも一部で巻いた複線が一つ使い物にならなくなりそう……とかぼやいてましたね》
直「……いいのか、それで？」
ア《まぁ、ブッチャケ一部の過去のところらしいんですけど。本人も書いてて辛かったら早く終らせたかったとか》
直「そんなにメンタル弱いの？」
ア《いえ、ああいう話の時の個人の心情書くときほど自分の心がどれだけ汚れてるか実感できるから、だそうです》
直「一瞬俺の作者が素晴らしく思えたよ」

ＴＯＵＤＡさん

ウ「そうだぞコラァーー！！修繕費きっちり耳そろえてわたさんかーーい！！」
直「うお！？復活した？」
ア《いえ、アレはもう定期的に訪れる発作のようなものです》
直「発作？……あぁ」
ウ「畜生……これで今月の給料パーだよ。俺が何したって言うんだ……」
直「うん、納得した」
ア《いい加減あきらめたら良いのに》
ウ「アテナの強化フレームのまだ先になりそうだし……」
ア《修繕費きっちり耳そろえてわたさんか、ゴルァーー！！》
直「言ってることが違う！？」

mp7a1m9さん

ア《一部含め感想、ありがとうございます》
直「飽きないって言うのは最高の褒め言葉だよな」
ア《ですねぁ。実際口元ニヤけたらしいですし。……銀行で》
直「銀行!?なんで!?」
ア《受験料の振り込みだったらしいですよ。順番待ちの時チェックしたら……》
直「え?親は?」
ア《いやだ、めんどくさい。で一蹴だそうです》
直「なんでウィズが生まれたのか分かった気がするな」

直「さて、終ったことだし帰るかな。これ意外にむずかしいな?」
ア《そうですか?フラグ一本成立させるのに比べたら……あぁ。貴方にはそっちの方が簡単でしたね》
直「おい!?いい加減俺のイメージ崩さないでくれる!?」
ア《崩すも何も、秋風さんが狂ったように公表しまくってるじゃないですか》
直「くる……。いや、まぁ。うん。いいよ。帰ったらお話させてもらうから」
ア《その意気です!あ、あと企画書は楽しみに待っている、とお伝えください》
直「了解……。はぁ。こんなに弄られたのは久しぶりだよ」
ア《私は楽しかったですよ?》
直「……じゃぁね。そこのウィズにも言っといてよ」
ア《ハイそれでわ》

ウ「チクショーーー！！」

ゲスト情報

井上直人（いのうえ なおと）　出演作品：魔法少女リリカルなのは～蒼天に舞う騎士～
魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～
蒼天の騎士伝説～
喧嘩や剣術に長けた性格温厚な好青年君。
だが、実態は人との接触を避けていた筈なのに気づけばフラグを乱立する男の子。
これから先何人を毒牙にかけるのか、色々将来が楽しみな子。

１７．矛盾／不可視創造（後書き）

こんにちは、今月最後の更新になりました八神煌斗です。
前回に続いて今回もゲストさんが来てくれましたね。
こう……本当にうれしいです。実際に面と向かっていえないのが残念です。

さて後書きにも少し書きましたが自分でまいた複線をチェックしなおすために２／４更新はすこし厳しいかも……。
でも必ずその週には更新しますので！！

と言うわけで結構気持ち悪い所で止まっちゃいますが、ゴメンなさい。
実際今日も感想を書いてくださっている人の作品を読みましたが……。
ゴメンなさい、感想かいてません。

本当にすみません。
私は人でなしです。

それでわ……。

18．白赤青の能力

ユリアｓｉｄｅ――――――――――――――――

ウィズがはやてに剣を向けた。

私達は戦闘後、簡単な事情聴取を受け六課に戻った。

そして戻って最初に会議室に集められた身内、ＦＷ陣にウィズの事を伝えた。

当の本人は意識が無くて医務室に寝てるんだけどね。

ウィズに敵意を向けられた事にショックを受けたはやてが気持ちの整理が付くまで待ったから、今はもう日が傾き始めてる。

本局の方も事後処理がある程度終わったみたいで、クロノも通信だけど一緒に話を聞いている。

因みにトーギは自分には関係ないとか言って、レイラを私に手渡した後、管理局員に別の拘置所に送検された。

「アングの能力は、私たちＦＳ（フェオルジャー）計画で作られた者には天敵なのよ」

その事実が告げられた後、私が言った台詞に注目が集まる。

「天敵……それってどういう事なの？」

意気消沈しているはやてに変わって、なのはが質問をしてきた。

１０年間、弟として……だけだと思うけど、見てきた相手に攻撃されたんだもの。

無理ないって言ったら、無いんだけど。

ん～……少しイライラする。

「アングはね、ＦＳ計画で造られた人の頭に介入することが出来るのよ」

右手の人差し指でこめかみをトントンと叩きながら説明する。

「介入？」

「そ。人格の上塗りってやつ。神崎ウィズという元の人格の上から新しい人格を上塗りする――」

「ち、ちょっと待てよ！　って事はウィズは……」

言葉を遮って、机を叩き立ち上がるヴィータ。

私は何も言わずに頷くだけ。

「そんな……」
「ウィズが……死んだ……？」

フェイトの言葉に、俯いていただけのはやての肩がピクリと反応した。

だけど――。

「あぁー違う違う。私が言いたいことはそうじゃないわよ、フェイト」
「……え？」

誰かわからない。
私の言葉に、ショックを受けていた皆の顔に少しだけ明るさが戻る。

「言ったでしょ。上塗りするって。ウィズの意識は下層で眠ってるだけ。それを呼び起こせばいい話よ」
「でも、そんな簡単に……」
「いかないけど、今回は上塗りの途中だったみたいだし、無理な介入を受けてシャットダウンした感じかしら。それに、もし完璧に塗られてても荒療治にはなるけど、起こせないことは無いし」

これ以上ウィズの事で話すことは無い。
どうせ言っても理解できないだろうし、情報なんて何処から漏れる

かなんて分からない。
あ、一応シャマルには後で伝えておいたほうが良いかしら。
手伝えそうなのは彼女くらいだし。

「さて、皆が少し元気になったところで、クロノ。ちょっといい？」
『なんだ？』
「アナタ、アングと知り合い？」

あからさまな話題転換だけど、これはこれで気になってる事。

「そういえば、クロノは何で本局に居たの？」

フェイトも聞く。
するとクロノは苦虫を潰したような顔になり、目をそらした。
クロノって結構強そうなんだけど、アングに負けたってのが気になるわね……。
もしかして……。

「この話はここだけ、外部には漏らさないでくれよ？」

そう断りを入れて皆が頷いたのを確認すると、クロノが改めて口を

開いた。

「つい先日、僕の乗っていたクラウディアが乗っ取られた。その犯人がアング……だったか。そいつだったんだ」

「なっ！？　そんな話、私知らないよ！」

「当たり前だ。これでも僕は管理局でも上位に位置している。それがこの時期に戦艦を奪われたとなると一大事、大混乱は避けられなかったからな。秘匿させてもらった」

ま、その考えは正しいわね。

実際にここに居る私以外、皆信じられなくて混乱してるみたいだし。

これは……もしかしてやられた？

「それで事情聴取のあとはデスクワークだったんだが、暫らく家に帰っていなくてな。家で仕事をしていて、今日持ってきたら……と言う訳だ」

成る程ね。

「それで、アングと戦ったんでしょ？　感想は？」

「いや。確かに二三打ち合ったが、それだけだ。だが……Ｓ２Ｕが破壊されたよ」

「なんだと！？」

「あー……やっぱり？」

あいつと打ち合ったって言ったからもしかしたらって思ったけど……。
予想通りね。

「ユリア。そろそろあいつらも正式な能力を教えてくれないか？」
「いいわよ。近々話そうと思ってたし。皆も揃ってるし丁度良いわ」

椅子から立ち上がり、上座まで移動する。

「先に断りを入れておくけど、三人ともＦＳ計画で造られてるから。先入観は無しにして聞いてよ？そんなはずは無い、って言うのは受け付けないから。ＯＫ？」

ウィズならロストロギアの封印、私は……お母さんの恩恵だけど超高速分割思考。
ＦＳ計画出身はなかなか有能な才能持ちなのよね。
ま、使い勝手が良いかは別だけど。

皆が頷くのを確認してから、部屋をシャマルに頼んで暗くしてもらって、トーギから預かっていたレイラで記録していた映像を映し出す。

「まず、この青髪のはアング。コイツはさっき言った能力以外にもう一つ。電子機器への介入って言うのもあるのよ」
「機器への介入？」
スバルが首を傾げて隣に座っているティアナの方を見る。
それを私に聞くな、と目で訴えるティアナ。
「ま、簡単に言ったら電子回路の暴走とか。ウイルスもあったっけね。それで電子機器を使用不可にするって訳」
この言葉に、場の空気が少し緩む。
これ位なら何とか、って思っているんでしょうね。
だけど、この場に居ないクロノだけが渋い顔をしてる。
そう、それが正解。
「アンタ達、それくらいなら余裕って思ってない？」
「え？　そうじゃないんですか？」
「全然違うわよ。ならエリオはデバイス無しで戦えるって言うのね？」
場の空気がまた変わった。
私の一言に隊長陣と、ティアナは気づいた見たいね。

「アンタ達がどう考えてるか分からないけどね。デバイスだって電子機器よ。それを破壊されるって言ってるの。クロノもそれにやられたんじゃない？」

ディスプレイに映るクロノに問いかける。
私の言葉につられて、皆の視線もクロノに移る。
クロノは静かに首を縦に振った。

『Ｓ２Ｕの内部回路を破壊されて、唯の機械の塊にされた所をな』
「そういうことよ。対策としてはデバイスを使わない事だけど…
…無理でしょ？」

アングの能力、そしてクロノの被害を聞いて、皆信じられないと言う表情をしてる。
だけど、アング程度で意気消沈してもらったら困る。

「驚くのは良いけど、次いくわよ。赤髪の生意気なヤツ。名前はヴィオル。デバイスは盾型。コイツは変換資質を二つ持ってるわ。雷と炎」
「二つ……厄介だな」
「そうでもないわよ。この三人の中じゃ対策が一番とりやすいのがコイツ」

シグナムが呟いた一言を直ぐに否定する。
苦手意識を持って欲しくないって言うのも有るけど、本当にコイツの能力は他の二人に比べて分かりやすいから。

「コイツ、二つも持ってるくせに資質を利用した碌な魔法が使えないの」
「それなら持ってねぇのと同じじゃねぇか」
「そうでもないのよ。コイツがコイツなりにそれを利用してね……ココ、ちょっと見て」

そういって映すのはヴィオルに向かってトーギが攻撃を繰り出すところ。
話ではトーギの速さは六課で最速のフェイトど粗同等らしい。
それを、ヴィオルが全て交し、防ぎきる。

「確かにすげぇけど、これくらい隊長陣なら出来るレベルだぞ？」
「そうなんだけど……良く見なさい。ヴィオルの体に電気が走ってるでしょ？」
「ん？……あぁ、本当だ」

私がその映像を止めて説明する。
そのシーンではヴィオルの体に電気が走ってる。

「これがヴィオルの資質の使い道なんだけど。体に電気を走らせて、身体能力を底上げしてるのよ」

「はぁ！？そんなこと」
「出来るのよ」

ヴィータの言葉を、正面から否定する。
それでヴィータは黙る。
隣ではシグナムがフェイトの方を見て、フェイトが首を横に振る。

「体が動くのは脳が微弱な電気信号があるから。資質をどう利用してるかは知らないけど、それでね。本気の時は体中バチバチ言ってて、まさに脊髄反射レベルよ」

それにこれだけじゃないだろうしね、と付け加えておく。

炎の方も特別な使い方が出来ると思うんだけど、雷含めて私は資質利用の魔法を知らない……。
ヴィオルは私の前ではそれを見せたことが無いからわからないのよ。
馬鹿な分、入れ知恵されやすいし……、二人になんか言われたんだろうけど。
こんなことなら口車に乗せて聞き出しとけば良かったわね。

「ま、これ以外特別なモノ持ってないのは確実だけどね」

そして残っているエストラ。
コイツは戦闘中に説明したことを告げ、はやてが思いついた対策法を一応伝えてく。

「ねぇ、その……エストラ達が何処に居るかとか……分からないの？」
「残念ながらね。私達が潜伏してた所を教えても良いけど、もう移動してるでしょうし」
「だろうな。そこまで気楽な敵ではあるまい」

なのはに答えて、シグナムが頷く。
それでも一応場所ははやてに伝えておいた。
何かの手掛かりがあるかもしてないし。

「これでお開きで良いかしら？」
「そうやな。また何かあったら教えてな」
「いいわよ」

そして各々、表情が暗いけど立ち上がり、部屋を出て行く。
はやてやなのは達はまだクロノと何か話してるけど……私には関係ないわね。

今はやって置かないといけない下準備がある。

見てなさいよ。
守護騎士を名乗ってるのは伊達じゃないって教えてやるんだから。

ウィズの小部屋

ウ「緊急、更新さー！」
ア《取り合えず作者が今日一本桜が咲いたので更新です》
ウ「これで二本目だよな？まぁまだ苗木が二本残ってるらしいけど」
ア《相棒にて単純ですからね。テンションに任せての更新に踏み出したらしいです》
ウ「じゃ、コメ返しだ！……ん？なんかさっき気になるワードが……」
ア《気のせいでしょう》

秋風さん

ア《なんだか秋風さんにシンパシーを感じます》
ウ「……何となく想像できるけど……なんで？」
ア《好きな子は苛めたくなるって言う、小学生特有の……》
ウ「チョイ待ち！……好きな子？」
ア《好きな子、Ｉ　Ｌｏｖｅ　Ｙｏｕ》
ウ「いや、いきなり告られても困るから」
ア《あとは、直人さんの方に既にお邪魔してきたくらいですか？》
ウ「あー、そういえば。あんまり覚えてないけど」
ア《発作おこしてましたもんねぇ》
ウ「取り合えず、これからもよろしく」

翡翠さん

ア《そんな……いきなり告白されても、心の準備が……》
ウ「イヤイヤイヤ！よく読もうね！？可愛くて大好きって言われてるだけで告白じゃないからね！？」
ア《私には告白なんです！》
ウ「自己中！？」
ア《あ、でも安心してください。断りますから》
ウ「なんで？」
ア《私、告白は放課後の体育館裏か夕日が差し込む教室と決めてるんです》
ウ「古！？考え方が古いよ！？」

朧木さん

ウ「お兄ちゃん、だと？」
ア《何ですか？そういうプレイに目覚め》
ウ「この小説全年齢だからね！そういう事言うの禁止！！」
ア《ハッ》
ウ「馬鹿にしてるよな絶対！？」
ア《それで魔法が似てるとか》
ウ「チェックしたよ。確かに形は似てるな」
ア《形だけと？見苦しい言い訳ですね》
ウ「ちゃんと聞けよ！？ユリアが使ったのは唯の膜。それ以上でもそれ以下でもない。
　エストラに対抗するだけに即興で作ったヤツ。だから術式ももろい……だって」
ア《相棒、なぜ右手の平をチラチラみてるんですか？》
ウ「な、なんでもないですよっ！」

ア《カンペ？》
ウ「うぐっ！？」

Ｎａｋｉさん

ウ「ゴメン、素で間違えただけなんだ。そのサイトは知らない……」
ア《ジャケットが変わったのは単にイメージからだそうです》
ウ「イメージ？」
ア《はい。敵が見かたになると妙にスタイリッシュな格好に変わると言う偏見から》
ウ「あ～……。解るような解らないような……。俺はＢＪの構成情報いじったからと思ってたわ」
ア《そんなのでは全くありません》
ウ「単純なんだな」
ア《単純なんです》

灰色の野良猫さん

ウ「応援ありがとーー！俺、負けないよ！」
ア《ハッ！》
ウ「ガラ悪いよ！？お前もなんか言えよ」
ア《私に対するコメが無いのに何故私が。相棒なんかよりまず私でしょうが》
ウ「おい。なんかってなんだよ？」
ア《何か？実際私の方が人気あるんでるからね！！》
ウ「そんな訳……あるかも。お前に対するコメの方が若干多いし」
ア《頭が高いですよ》
ウ「それは調子に乗りすぎな」

ヒノカマさん

ウ「おい、どうするよ？結構褒め倒しだぞ、９０％くらいは褒めてくれてるよ」

ア《ですが、意味間違いや誤字はかなりの痛手ですよ。以前もその指摘があったというのに……》

ウ「うっ……そういや一期の頃にも言われてた気が……」

ア《喉元を過ぎれば、ですね。これからは気をつけましょう》

ウ「はい……。それにしても、感想を書いてくれる為に登録してくれたってよ！ありがとうございます！！」

ア《私たちの影響を受けるととんでも無いことになりそうですけど……。そう思ってくれるのは凄く嬉しいですよね》

ウ「だよな。こっちもここじゃないけど人の影響受けて書き始めたんだし」

ア《もし書くなら教えてくださいね》

ウ「っと、コメ返しが終わったところでお知らせだ」

ア《ブッチャケ試験が月火なんですが……何を思ったのか、ＨＰを移転しやがりました、あの馬鹿》

ウ「まぁ、正確には前々から作っててつい最近終了したところだけどな」

ア《ココに直接リンクが貼れるようになったので公開するらしいです》

ウ「良かったら覗いたりしてやってくれ、向こうでしか書いてない短編とかあるから」

ア《まだ、一本だけですけどね。既にリンクも二件ほどあるそうですよ》

ウ「んじゃ、さいなら」

18．白赤青の能力（後書き）

こんにちは、八神煌斗です。
更新しちゃいました。

今回は自分でも無理有るかな、と思っています。
ＳＳ相当の実力もちにあのチートスキル。
一応対策出来るようにしています。

さて、次回は予告どおり二月四日。

グダグダしてきた気がするけど、何とか軌道修正して突っ走るぜ！
的な感じでがんばります。

それでは。

あ、そういえば『なのは』のゲーム買いましたけど……。
ストーリーは良かったですね。
何とか欠片事件を持ってこれないものか思案中。

19．ウィズ　ｉｎ　ｔｈｅ　ウィズ

――ココは、どこだ……？

地面に立っているっていう感覚は無い。

かと言って、浮いているのかと聞かれればそれはＮＯだ。

視界に写るのは黒一色。

でも暗い訳じゃない。俺の体はしっかりと見ることが出来る。

――ココは、どこだ？

そもそも何で俺はココに居る？

《――ぼう。――ますか、相――》

「……誰だ……？　アテナ？」

声が聞こえた。

一瞬誰か分からなかったけど、これは間違いない。アテナだ。

始めは聞き取りにくかったアテナの声も、アテナの声だと認識すると同時に聞き取れるようになった。

《起きてきだ……はっ！？　いっそこのまま起きなければ私が主

人公に……》

「……」

《いえいえ、流石にそれは……。いえでもこんなチャンス二度と……》

そして聞いた一言目がコレ。

雰囲気なんて俺の自尊心と一緒に一瞬で砕け散ったよ。

「そうか。そんなに俺は認められないか」

《相棒!?　今のは決して私の願いとは本心とか、そんなのじゃないですよ!?》

「自白してるのと一緒だからな、それ」

《はぅ!?》

いつもより1．5倍増しで慌ててるアテナ。

コレで六課とかだったらこのまま楽しく話してられるんだろうけど……。

「それで、お前はどこに居るんだ?」

相棒は今俺の首に掛かっていない。

言うまでも無く剣になって手に治まってる訳でもない。

《そ、それです！　今こんなくだらない話をしてる場合じゃない

んですよ！》
「……それで？」

まだ少し頭がボーッとしてる。
ツッコム気にもなれないので話の流れをアテナに預ける。

《簡単に言いますよ。アナタは今、閉じ込められている状態です》
「どこに？　ってかいつの間に？」
《いつの間にって……あの青いヤツにつかまった時ですよ！覚えてないんですか！？》
「……全然」

青いヤツって何の話だ？
本局にはや姉達と来たってのは覚えてるけど……そこまでだ。
ん？いやまて。

「あぁ、思い出した思い出した」
《まぁ今は過程は重要じゃありませんけど》
「おい。それで、俺はどこにラチられたんだ？」
《その閉じ込められたではなくですね……言うなら【神崎ウィズ】の中、でしょうか》
「……俺の中？」

意味が分からない。

《でしょうね。簡単に説明します。と、言っても私自身よく解って無いので推測でしか在りませんが……》

そしてアテナは説明を始める。

纏めると、俺の体は一度乗っ取られかけたらしい。一瞬だが、別の意識も介入してきたらしいし。

だがまぁそれはアテナが例の如く助けてくれたらしいのだが。

アテナが【俺】が潰されない為に俺の意識をあの時のように刈り取り。

下層に沈めたらしい。だからココは俺の中で、ココに居る俺は意識体だと言うこと。

が、慌ててたせいで思いのほか深く沈めすぎた。

結果だけ見ると閉じ込められたのとそう変わらなくなったらしい。

で、俺への接触に時間がかかったと。

「意識体って何だよ？」

《文脈で予想してください。それ以外適当な表現が思いつきません》

「何故投げやり？」

そういうアテナも本体が乗っ取られかけたらしいのだが、その辺は

しっかり防御（プロテクト）したらしい。

「お前って優秀なの？」

《そうですね。特に人格面のプログラムはディズ博士が人一倍厳重にプロテクトや物理保護と造ってましたから》

そういえば親父はアテナの人格面で俺のパートナーに選んだっけか？

そりゃ厳重になってるのが当然か。

「それで俺はどうしたらいいんだ？　ここから出る方法なんか知らないけど？」

《……今までお世話になりました》

「ぅおおい！！？　そんなに簡単にマスター放棄するなよ！？　何とかしろよ！？」

《最近ユリアとか言うポッと出ばかり構ってく私を無視した罰です。さようなら》

「え……本気じゃないよね？　ねぇ、アテナ？」

《……》

「今までスイマセンデシタあぁぁぁぁ！！」

土下座。

実際何処が地面で、アテナがどこに居るか分からないけど取り合えず土下座。

デバイスに土下座なんて俺が人類初じゃないだろうか？

《まぁ、冗談はここまでにして。取り合えず今相棒に出来ることはありません》
「本当に？　本当に冗談だよな？」
《と言うか今の相棒は寝ているだけと言うか……とにかく暫くしたら出られますよ》

無視か？無視なんだな？

「こんな暗いところに一人にしないでください。怖いんです」
《なんて情けない。少しの間なんですから我慢してください》
「ヤだ。無理。怖い」

最初は意識がハッキリしなかったから気にならなかったけど、良く考えたら回りは真っ暗。
すんげぇ怖い。

《ハァ。じゃぁ私は戻りますね。それでは》
「ちょっ！？　マジで！？　アテナ？　アテナさ～ん」

呼びかけるも返ってくるのは沈黙だけ。
本当にココから出て行った（？）みたいだ。

当然の事ながら辺りからは何も聞こえない。
どこを見ても黒一色。見えるものといったら俺の体くらい。

「寝よう……」

膝を抱え込み、体を丸めて目を瞑る。

昔なの姉やフェイ姉にこの格好を見られたときは『かわいい』とか『子供っぽい』とか言われて恥ずかしくて止めようと思ったけど……。

ガキの頃からこの格好で寝てるので今となってはこの状態でしか眠れない。

《そうだ、言い忘れてましたが――……》

「ぎゃあぁぁーーー!!?」

《ど、どうかしましたか!?》

思わず叫んだ。

だって油断してるところに声かけられたらこんな場所じゃなくても叫ぶだろ?

あー。心臓ってこんなに大きい音だして動くモンなのな。

「な……なんでもない。で? 何を言い忘れてたって?」

《あぁ、そうでした。二度寝だけはしないでくださいね》

「死ねと?」

《そんなこと言ってないですよ!?》

「俺にとったら死活問題なんだよ！俺がどんだけビビリなのか知ってんだろ！？」

《開き直らないでください！！》

唯でさえ意識がハッキリしてきて、この空間が怖いんだ。

それを寝ないで起きてろなんて……どんなイビリだよ。

「で、なんで寝たら駄目なんだよ？　くだらない理由だったらドツキ回すぞ」

《相棒、キャラが変わりすぎです。……強いて言うなら私が起こすのが大変だからです》

「……ほう？」

つまり俺を起こすのが面倒くさいから、俺に地獄を味わえと。

そう言ってるんだな。

《何を勘違いしてるのか分かりませんけど、あなたは今寝てる状態なんですよ？》

「う……」

《それに、縮まったとはいえ、今のような接触をするのは時間が掛かる、とも言いましたよね？》

「……あ」

そういえばそんな事言ってたなぁ。

あぁ、なるほど。

「つまり【起こす】ってのは現実（リアル）での話だな？」
《そういうことです。起きようと思ってたら起きられるでしょうから、がんばって下さい》
「随分アバウトだな、おい」
《そりゃ前例がありませんから》

そりゃそうだ。
俺だってこんなこと初めてだし。

と言うかしょっちゅう有ってたまるか。

《では私は戻ってます。早くしてくださいね？》
「なにさま？」
《神様……いえ、アテナ様です》
「言い直した！？　と言うか神様って何となく古いぞ！？」
《そ、そんなことありません！　私の精一杯のギャグですよ！？》
「……あれで？」
《そんな目で見ないでください！　と、とにかく！　私は行きますからね！！》

と、何となくだがアテナの気配が消えた気がする。
さて……俺もそろそろ起きないと駄目だよな。

「ふぅ。ようやく繋がった。接続にここまで時間が掛かるとは…

…」
「っ！？」

後ろから、声がした。
聞きなれない声。だが、つい最近に聞いた声。

「アング……！」
「そう身構えないでください。僕は伝えに来ただけなんですから」

ウィズの小部屋

ア《早速ですが、相棒。フェイトさんと一稼ぎしませんか？》
ウ「……いきなり何言ってんだお前？」
ア《フェイトさんの笑顔、冗談抜きで高いんですよ。いい小遣い稼ぎになりますよ？》
ウ「そりゃ、局でも人気あるからな、でも高く見ても５０００くらいじゃね？」
ア《フィルムで５３２０００ですね》
ウ「はい？桁ちがうんじゃね？二つほど」
ア《本当です。あるオークションでフェイトさんの笑顔がこの値段で落札されました》
ウ「……」
ア《因みになのはさんの変身（途中）は５３０００です》
ウ「うわぁ……。なの姉脱いだのに負けてるよ」

ア《フェイトさん絡みのフィルムは大抵高値ですね》
ウ「フェイ姉……ってか中の人の人気？うちのも好きらしいし」
ア《それもあるでしょうね。流石に５０万はどうかと思いますけど》
ウ「俺も」

秋風さん

ウ「ありがとうございます。アイツも久しぶりにガッツポーズをしてたな」
ア《しかも配達も手渡しでしたから、配達員さんの笑顔が凄く温かかったですね。色々と》
ウ「で、直人さんがまた来たいってよ？なんで今回来てないんだ？」
ア《もう今回の話書くだけで一杯一杯だったんだんです。本当は一日延期したいくらいらしいですし》
ウ「あぁ、今回は確かに酷いよな。言ってることが結構矛盾してる」
ア《まぁ、その辺は書き直してもらうとして、直人さんは後日来てもらうそうです》

ナイトホークさん

ア《一応特定の組み合わせなら対策うてるように成ってますけど……ねぇ》
ウ「マジ強すぎな。ｓｓって、リミッターどうはずすんだよって話」
ア《その辺は平気ですよ。対多数で行けばその差は簡単に埋まります》
ウ「いやいや、卑怯すぎるだろ」
ア《なに言ってるんですか。戦隊モノなんて基本１対５じゃないですか》

ウ「……」
ア《相棒、いつの時代も勝った方が正義を名乗ることが出来るんですよ》
ウ「なんか黒！？」

Ｎａｋｉさん

ア《フフフフ……》
ウ「……」
ア《あれ？どうしました相棒？ほら、ココ。読んでみてください》
ウ「グ、ググ……『私もどちらかというとウィズよりアテナのほうが好きです！！』」
ア《どうですか相棒？私の方が好きなんですって》
ウ「チクショウ……」
ア《もうこれ私が主人公兼ヒロインでいいですよね？》
ウ「いやいやいや。なんで主人公の座を奪われなきゃいけないんだよ！？」
ア《だって一位ですよ？もう主人公しかないでしょ？》
ウ「それを言われたら言い返せねぇ……」
ア《それでわ、相棒と結ばれる為に今からフラグでも立てないといけませんねぇ》
ウ「お願い！それはやめて！！」

ウ「とりあえず、物語も中盤？」
ア《あと一展開入れたら、ですかね。原作で言うならティアナさんの誤射アタリ？》
ウ「コメントしにくい話数のところなんだな」
ア《予定では、この後一展開入れたら最終決戦！だったらしいです

けど……》
ウ「あれか？補完してたら伸びた」
ア《そうです。しかも補完になってないですしねぇ》
ウ「ま、適当にやってくさ」

19．ウィズ　ｉｎ　ｔｈｅ　ウィズ（後書き）

こんにちは、八神煌斗です。

う～ん……なまってる。
書きたいことが以前にも増して書けなくなってる……。
これはＨＰでリハビリがてら短編でも書こうか悩んでます。

さて、そういえば皆さんに聞きたいことが。
名前ってどうやって決めてます？

実はこの前新キャラたちのデバイスに名前が無いことに気づいて決めようとしたんですけど……ねぇ。
見ての通り私にはセンスが無いですので……。

なにかアドバイスでもあればお願いします。

それでわ！
また二日後にお会いしましょう。

Ｐ．Ｓ．
ゴッドイータ買おうか悩んでます。
皆さん買います？

20．選ばれた理由

俺の睨みもどこ吹く風と言わんばかりに流し、口を開く蒼髪の男アング。
何でコイツがここに居る？
アテナが言うにはここは俺の中。
俺の制御用デバイスであるアテナが入ってくるのは何となく分かるけど、コイツがここに入れる理由が無い。

「僕が居る理由は後にしましょう。少々時間が無い」

考えてることが分かったのか、そんなことを言ってきた。
時間が無い、と言うのが気になったがアングは俺の質問を許さず言葉を続けた。

「十日後、クラナガンのファントム、と言うバーであなたを待っています」
「罠だと分かってて行くと思ってんのか？」

雰囲気に飲まれるわけにはいかない。
今の俺の対抗手段なんてシューティングアーツもどきしかねぇけど、黙りっぱなしって訳じゃない。

「いえ、あなたは来るはずです。きっとね」
「あん？」
「――出生の秘密……知りたくないですか？」
「っ！」

思いもしなかった言葉に、一瞬動揺してしまう。
が、あくまで頭は冷静だった。
まぁ、アテナから何も聞いてなかったら冷静になんていられなかっただろうけど。

「それくらい俺だって知ってる」
「スカリエッティとデバイスが教えてくれましたか？」
「そうだ」

そう言うとアングは声を押し殺しながら笑い始めた。

「何がおかしい？」
「いえ。まさかそれが真実だと信じきっているとは思っていなかったので」
「なっ……」

どういうことだ？

確かにスカリエッティの言うことは嘘だったかもしれない。

だけどそれもアテナから裏づけは取ってる。

アテナが嘘を言う筈はないし、実際俺が生まれてからの事を記録され……て。

まさか……。

「気づいたようですね。そう。貴方が知っているのはデバイスに記録されたことに過ぎません。真実か、どう判断するのですか？」

そうだ。

アテナは自分で言ってたじゃないか。

《やがて、相棒はロストロギアも封印できるロストロギアとして完成しました。――ここまでが、私が情報としてインプットされた情報です》

「インプットされた？　ここまでのは実際に見てきたものではない、と？」

《その通りです。私は相棒より少し遅れての完成でしたからね》

アテナが知ってるのはインプットされた情報。
俺よりも後に作られたアイツが、俺の出生の真実を知っている確証は無い。

いや。ならユリアは？
アイツは母さんの記憶を受け継いでるって。

――なら、何で俺に言わない？

俺の心配をしてる？
まさか。アイツは隠すことが傷つける事だって思ってるやつだ。
隠すわけが無い。

知ってると思ってる？
それこそ無い。俺が知るための情報源なんで無いんだから。

「その真実、知りたくは無いですか？」

混乱している最中、畳み掛けるように声をかけてくるアング。

「お前が真実を知っている理由も無いだろう……！」

渇いた喉で、絞り出す様に言い返した。
……実際、少し心が揺れてる。

ある意味これが最後の壁だ。
これが崩されたら――……。

「僕の事は聞いているんでしょう？管理局から痕跡を残さずに調べることは簡単です」
「残念だな。まったく聞いてねぇよ」

実際俺が聞いてるのはあの白いヤツ、エストラの無色の魔力光だけだ。
それ以外は聞いてない。

するとアングは手を顎に沿え悩むそぶりを見せる。
だけどそれも一瞬。

「ふむ……。では一つだけ教えましょう。貴方は唯のロストロギアではありません」
「……あぁ？」
「貴方はロストロギアを封印できるロストロギア。これは間違い有りません」

コイツは何を言ってんだ？
俺を動揺させようとでも思ってんのか？

あいにく俺は既に自分がロストロギアだという事を認めてる。
今更俺がロストロギアだと言われても何も……。

「ですが、それは力の一端……いえ、使い方でしかありません。貴方はこう聞いているはずです。闇の書を封印する為に作られた、と」

「……」

俺は何も言わない。

だけどアイツが言っていることは本当だ。俺はそう聞いている。

それを肯定と取ったのか、話を続けるアング。

「そして凍結で封印しようと考えた。ここで疑問が生まれます」

「？」

「分からないようですね。……なぜ、凍結どころか変換資質も持っていない貴方が選ばれたんでしょう」

「っ！？」

言われて気づく。

そうだ。

闇の書を封印するなら俺よりアイスマン……トウギの方が何倍も適切だ。

なんでこの事に俺は今まで一切気づかなかった？

「さて、僕から言えるのはこれだけです。それでわ」

そう言うアングの体は透け始めた。

「テメッ。待ちやが――っ！？」

慌てて引き止めようとするが、俺の体も何かに引っ張られ……視界が暗転した。

「んっ……ふぅ」

目を開けると、ココに来てから何度か見た天井。医務室だ。とりあえず体を起こす。

《――チッ。相棒、起きたんですね？》

声がするほう、枕元を見るとアテナが添えられるように置いてあった。

多分、はや姉が置いておいてくれたんだろう。

舌打ち？　そんなの聞こえなかったよ。

「……」

《相棒？》

レイラが居ない。

とりあえず何も喋らずにアテナを掴み、壁代わりのカーテンを開ける。

そこにはシャマル姉さんも居ない。

大方、レイラの記録をみんなで見てるって所か？

ちょうどいい。

「なぁ、アテナ」

《はい？》

近くのソファーに腰掛け、手のひらにアテナを乗せ、話しかける。

俺の様子がおかしい事に気づいたのか、何時もみたいに茶化す事なく素直なアテナ。

「お前が知ってる俺の出生は情報なんだよな？」

《……前に一度言いましたよ？》

「あん時は寝たふりしてたからな。覚えてねぇんだ」

嘘だ。しっかりと覚えてる。

だけど、コイツからもう一度ちゃんと聞きたかった。

《……そうです》

重い口調で、でも確かに答えてくれた。

なら俺もちゃんと答えないとな。

「実はな、お前が戻ってからアングと会った」

《なっ!?　なぜ私を呼ばなかったんですか!?》

「それは方法を教えてから言う台詞な」

《……言ってませんでした?》

「うん」

ん～……。やっぱしまらんなぁ。

仕方ないのかもしれないけど。この方が俺ららしいっちゃらしいけど。

でも今回ばかりはこの雰囲気ではいられない。

「そいつな。俺の出生の真実を知ってるって」

《それで私に確認を?》

「あぁ」

短く返事をする。

これ以上何を言っていいのか分からないから。
いや、言うことは有るんだけど……どういったら良いのか。
ん～……やっぱ突然すぎたか？

《相棒はどうしたいんですか？》

悩んでると、アテナがそう聞いてきてくれた。
その口調はまさに俺の言いたい事が分かってるみたいで……。

「時間と場所を指定されてる。……正直、行きたい」

実際、アングが指摘したことは確かな矛盾だった。
何で凍結魔法を持たない俺が選ばれたのか。
アイツの口ぶりからすると、知ってる筈だ。

《罠かも知れませんよ？》
「それでもだ。馬鹿な事だって事は分かってるんだけどな」

ここで会話が途切れた。
俺の答えに呆れてるのか、何て言って良いのか分からないのか。
とにかく、アテナは何も言わない。

俺も何も言わないでアテナの答えを待つ。

《はぁ、最近はマシになってきたと思ったら……根元は変わってないんですね》

暫くしてアテナが口を開いた。
その口調は何時もと変わらない。

《止めたら私を置いて行きそうですし。相棒の好きにしたらいいと思いますよ？》

「いいのか？」

《だったら一応聞きますけど、止めたら諦めるんですか？》

「いや、置いてく」

《即答!？　ってゆうかやっぱり!？》

手のひらで騒ぐアテナ。
本当に何時も通り。まぁ、俺のことを思ってくれての事なんだろうけど。

《あぁ……予想が当たって嬉しいのか、悲しいのか……私はどうすれば!？》

「騒がしいと思えば、起きていたのか」

そんな時、医務室の扉が開く音と声が聞こえてきた。

「シグナム姉さん、シャマル姉さん。それにフェイ姉も」
「ウィズ、体の具合はどう？」
「え？あぁ、うん。大丈夫大丈夫！」

一歩前に出てきて心配してくれるフェイ姉に俺は返事をする。
実際体はなんとも無いし。

うん。少しモヤモヤしてるけど……大丈夫。

《（お姉さん達にはさっきの事言わないのですか？）》
「（あぁ。言っても止められるのが見えてるし。それを無理やり押し通そうとしたら……）」
《（まぁ、火を見るより明らかですね）》

でしょ？

絶対に部屋に監禁されて２４時間体制で見張られるに決まってる。
それか休憩なしの模擬戦大会。もちろん俺は休憩なし。

……うわぁ。

「ウィズ君。はい、レイラ……震えてるけど本当に大丈夫？」
「ダイジョウブデス」

「……片言だけど？」

レイラを受け取りつつ返事をする。が、どうやら片言になってたらしい。

想像したら誰でもそうなりますって。

しかも俺の場合想像じゃなくて実際にされそうだから余計に震えが止まらない。

イカン。

このままここに居たらボロがでそうだ。

≪（でしょうねぇ。相棒って分かりやすいですから）≫

≪（話が見えんがそれには賛成だ）≫

「（ぐぬぬぬ……好き放題言いやがって……）」

だけど悲しいかな。

自分でもその辺はちゃんと分かってるので言い返せない。

俺は椅子から立ち上がってそのまま医務室を後にする。

「じゃ、じゃぁ目も覚めたし部屋に戻ってるね！」

「あ、ちょっとウィズ君！」

「ちゃんとシャマルに見て貰った方が……」

「ホンットに大丈夫だから！！」

この時俺は慌ててたから気づかなかった。
シグナム姉さんが俺を訝しむような目で見ていたことに……。

ウィズの小部屋

ア《突然ですが相棒。貴方にはカッコよさが足りないと思うんですよ》
ウ「なんだ、いきなり。ってかそれは仕様だがらしゃーねぇだろ」
ア《ですが考えてください。他の方達は例えつよくなくても無い頭絞って頑張ってるんですよ!》
ウ「ぐぬっ」
ア《それが相棒はどうですか。勝ったのは後輩ただ一人。ラスボスにまで負けるってなんですか?》
ウ「いや、だからな。俺はそういうキャラだし……」
ア《言い訳しない!こうなったら相棒修行しましょう、修行!内容は……特に思いつかないので後で》
ウ「え〜〜……」

ナイトホークさん

ウ「反骨できなのは良いことだけどよ。アテナの場合はどうなんだろうな?」
ア《何か不満でも?私のように献身的なデバイスは中々居ませんよ》
ウ「そう言うのは自分で言っちゃ駄目な。評価は人にしてもらって

こそだ」
ア《なら相棒のヘタレは絶対的な存在って事になりますよ？》
ウ「……」

秋風さん

ウ「この人は適当型か……」
ア《正確には適当種、抜粋方ですね》
ウ「何それ？」
ア《思いついたので言ってみようかと。あ、そういえば私も神様の名前なんですよ。知性の神さま》
ウ「確か俺の魔法制御用の知能からだっけ？」
ア《はい。細かい制御は全て私ですからね。少しこじつけっぽいですけど、そこからアテナの名前を》
ウ「なんか直人も大変なことになってるみたいだな」
ア《後で覗いてみましょう。きっと面白いことになってるはずですから》

Ｎａｋｉさん

ウ「ラディとは仲良くやっていけそうな気がする」
ア《私もセラフィムさんをは仲良くやっていけそうな気がします。良い子そうですし》
ウ「どこがよ？思いっきり意図的にマスター眠らせようとしてるぞ？」
ア《もう直ぐデレますよ。私と似た匂いを感じるので絶対にそうです》
ウ「そうかぁ？」

ア《きっとマスターが寝顔などを記録して後々見てるに決まってます。私もそうですから》
ウ「お前そんな事してんの！？」

GPSさん

ウ「あんま褒めちゃ駄目よ。調子乗るから」
ア《それを自覚してるのに叩かれるの駄目な人ですけどね》
ウ「んー。流石俺の生み親」
ア《そういえば原作の人たちは殆ど乗り物関係でしたよね？》
ウ「ヴィヴィオの画像なんか今じゃこっちのが圧倒的に多いな」
ア《さすがアニメ先進国ですね》
ウ「車好きにゃたまらんだろーけどな」

朧木さん

ウ「この人ウチのに似てるよな？」
ア《ですね～。敵さん三人と私はそんな感じで決められてますし》
ウ「そういや俺は？」
ア《オリキャラ介入→原作キャラと一緒→together→with→ウィズ。でしたっけ》
ウ「うわぁ……。正確関係ねぇ」
ア《なら考慮して【ヘタレ】【雑魚】【かませ犬】どれがいいですか？》
ウ「もはや名前でもない！？」

ヒノカマさん

ウ「え、何この人。応援してくれた四行後に上塗りやれ、とか。言ってること矛盾しすぎだろ？」
ア《まぁこのイベントをスルーするつもりはサラサラないので……》
ウ「何それ？俺そんなの聞いてないよ！？」
ア《え？だってこの前……あ。忘れてください相棒。いつものジョークですから》
ウ「忘れられるかぁ！！いま【あ】って言ったよな【あ】って！？」
ア《煩いですねぇ。細かいこと気にしてたら出世できませんよ？》
ウ「このままじゃ生きてらんねぇよ！！いいの？連載終わるよ！？」
ア《いざとならばトウギさんも居ますので安心してください》
ウ「安心できるかあああぁぁぁ！！」

ＴＯＵＤＡさん

ア《ありがとうございます！次回からはＳｔｒｉｋｅｒＳ　ａｔｅｎａが始ま》
ウ「始まるかぁ！！俺起きたから。もう絶好調だから！！」
ア《チッ。それでフェイトさんの笑顔は本当に凄いですよねぇ》
ウ「今居たうちしたよな？絶対にしたよな？本編ではスルーしたけどこっちじゃそうもいかんぞ？」
ア《なんでも綾波レイを抜いているらしいですよ？エヴァ越えしちゃいましたよあの人？》
ウ「どうどうと無視しやがって……。それにしても脱いだなの姉よりうえだモンな。すげぇよ」
ア《皆さんも暇なら除いてみてはどうですか？驚きのお値段ばかりですよ》
ウ「俺ってどれくらいになるのかな？」
ア《お金取られるんじゃないですか？》

ウ「だよなぁ。いくら位……ん？取られる？」
ア《ハイ。見てやったんだから金よこせ、見たいな》
ア「……泣いていい？」

ア《相棒、修行方法思いつきましたよ！！》
ウ「マジで考えてたの！？」
ア《はい！……特に思いつかなかったので募集です！》
ウ「え、ちょ！？それはマジでヤメテ！！感想見ても分かるだろ！？俺結構扱い悪いのよ！？」
ア《そんなの知りません》
ウ「言い切られた！？」
ア《内容は【こんなのどう？】から【ウチで鍛えなおしてやる】など何でもＯＫです》
ウ「……なお、アイツが書ける範囲でお願いします。」
ア《相棒もっと元気よく！なお応募はメッセージのみの受付となります！フルって御応後を！》
ウ「誰も送らないでください。潰れ企画なので」

２０．選ばれた理由（後書き）

こんにちは、八神煌斗です。
自業自得とはいえ、何故同じ作業を二度せにゃならんのだ……。
それはともかく皆さん名前の決め方、本当にありがとうございます。
参考になりました。

上での募集はふざけて考えたので特に意味はありません。

それでは、今回は疲れたのでココまでです。
二日後にお会いしましょう。

P．S．
ゴッドイーター。ネット通信が出来ないらしいですね。
ファンタシースター見たいなの期待してたのに……。
とりあえず様子見。
人気が高いようなら買います。

21．ロストロギア珍事件【前編】

起動六課は古代遺物管理部の機動課だ。
レリックの件が終わっても、大前提は変わらない。

俺は今回、単独でのロストロギア探索任務にあたっていた。
単独といっても今回ははや姉に自分から申し出た。

レジアス中将はＪＳ事件で死んでるからな。
もうあんな無茶な任務はもう無い……筈だ、うん。

シグナム姉さんから聞いたんだが俺が単独で危険な任務にあたっていたのは俺に消えて欲しかったからだそうだ。

任務で俺が死ねば管理局の汚点も消えるからな。
しかも俺が単独で出動してた理由を問い詰められても、直接俺に伝えてきたので何とでも言い訳できる。

まぁ話はこの辺にして、俺は今そのロストロギアを回収、二日ぶりの六課に持ち帰ったところだ。

最初は病み上がりだと言われて止められたんだけど、色々整理したいこともあったから無理に押し通した。

「あ、ウィズ君おかえり」
「今帰ったの？」

六課の入り口前でなの姉とフェイ姉に会った。
二人は朝練の帰りか？
後ろでＦＷ達がぐったりしてる所を見るとそうなんだろうなぁ……。

「その今持ってるのがロストロギア？」
「うん。思ったよりチマかった」

俺の手にはレリックが入ってたようなケースがある。
この中にロストロギアが入っている。
大きさはテニスボールより少し大きいくらい。
俺はそれを見せようとケースの蓋をあけ――。

《あ、相棒危険ですよ！？》
「ん？　ダイジョウブ、ダイジョウ――ってぇ！！？」
《言ってるそばからこれですか！？》

蓋を空けた途端に光を放ちだすロストロギア。

「皆は離れて！」
「ウィズも早く！」

なの姉とフェイ姉は素早くＦＷ陣と周りに居た局員を避難させている。
俺も避難したいが、流石に自分のヘマを姉さん達に尻拭いさせるわけには行かねぇ！

「レイラ、ランスモードだ！」
《駄目だマスター！　疲労した今のマスターの魔力では防ぎきれん！》
《相棒、なぜ私じゃなくてレイラ！？　私のことがキライなんですか！？》
「こんな時に何言ってんの！？」

アテナが馬鹿なことを言っている間にも、光は強さをより増し始める。

「――ちぃ！」
「ウィズ君！」
「ウィズ！」

光に飲み込まれる前に、二人の姿が見えた。

――で。

「コレは何の冗談や？」
「冗談だったらどれだけよかったか……」
「に、にゃはははは……」
「うぅ……」

俺達の体が縮んだ。

その後シャマル先生の身体検査を受けたが今のところ特に悪影響は無いらしい。

今ははや姉と二人、部隊長室でユーノさんに通信でロストロギアの事を調べてもらっている最中だ。

……その際、顔がにやけている様に見えたのは気のせいだと思いたい。

「はやてー。この書類……」

部屋に入ってきたヴィータ姉さんが入ってきた。

「……」

けど直ぐに無表情でまま後退してドアが閉まった。

何とも言えない空気が部屋に漂う。

「本当だって！　ウィズがチッコクなってんだって！」

「だからそれは見間違いだろう。疲れてるんじゃないのか？」

「そんなんじゃねぇよ！！」

あぁ……更なる騒ぎの予感。

結局、あの後ヴィータ姉さんに連れてこられたシグナム姉さんも一度無言でドアを閉めた。

人は処理しきれない事が起きると目を逸らしたくなるらしい。

今はこっちに戻ってきたというかなんと言うか。

シグナム姉さんとヴィータ姉さん、そしてシャマル姉さんの方で検査が終わったなの姉たち二人を加えた六人で部隊長室で雑談している。

「……本当に縮んだのだな」
「にゃはは……。恥ずかしいです」
「ヴィヴィオの服、少し多目に買っておいてよかったです」

なの姉とフェイ姉はシグナム姉さんと三人で花を咲かしている。

「ほれほれ。アタシの方が背が高いぞ」
「ほんまやなぁ」
「ぐぬぬぬ……」

俺は俺ではや姉とヴィータ姉さんと話してるんだけど……。

で、俺は声を大にして言いたい。

「何故俺だけこんなに縮んでるの！？」
《それが相棒クオリティ》
《マスターの持つスキルの中で一番強力なモノだな》
「なんでそんな無駄なものばっか持ってんの俺！？」

なの姉たちに比べて明らかに俺は縮みすぎている。
俺が見るになの姉たちは初めて会った時、９～１０歳くらいだと思う。
だけど俺は？
多分４～５歳。

なんでかって？

だってヴィータ姉さんよりも背が低いもん。

初めて会った時だって身長はトントンだったのに……。

そして当然4～5歳の子が着るような服もある筈も無く、俺の格好はジャケット。

今まで来てたのをそのまま小っさくした感じ。

「ユーノさん、お願いです。一刻も早く元に戻れる方法を……」

《今の格好じゃ会いにいけませんもんねぇ》

「は！？　そういえば……」

アングとの約束の日まで一週間切ってるのに、この格好じゃ会いに行けねぇ！

どうするよ！？

「会いに行くって、誰にや？」

「はい？　……おおぉ！？」

声をかけられると同時に突然の浮遊感。

いや、落ちたんじゃないのよ。

持ち上げられたの。

――って!?

「ははは、はや姉!?　なにをやってるのかな!?」
「何って……抱っこ」
「だからなんで!?」

そんな「なに言ってんの?」見たいな感じで答えられても困ります!
最近はヴィヴィオだって抱っこの回数減ってんの知ってるよ!?

「えぇやんか。居心地悪いか?」
「周りの視線が痛いです」

まぁ、抱っこなんだけどね。
もう少し詳しく言うと前腕の上に座る感じ。

だから周りの人の顔も見渡せるんだけど……ニヤニヤしてるのよ。

っていうかね。

「はや姉もわってるんでしょ?」
「なんのことや?」
「うん。その台詞は緩んだ口で言っても説得力ないと思うんだ」
「……なんのことやら」

目を逸らすな、目を。

《そんなこと言って、本当は嬉しいのではないか？》

《もう、相棒ってばツンデレなんだから》

「お前らは黙ってろ！　ってかアテナ、お前一回フルメンテが必要か！？」

《是非！》

「肯定するなぁー！」

《マスターはメンテナンスを中々してくれないからな。仕方ないだろう。ついでに私も頼む》

「今度は自薦！？」

俺イヤミで言ったんだからな！？

何でそれを捻くって受け取るかな。

それに何て言うか、レイラも良い感じに染まってきたなぁ、と。

で、帰ってきてこれだけ大騒ぎしてたせいか。

俺の腹が盛大になった。

何度経験しても慣れないね、この時間が止まる感じは。

「この子のお腹空いた見たいやし、お昼にしよか」

「時間も調度良いですね。では食堂に行きましょうか」

何事も無かったかのように会話するはや姉とシグナム姉さん。
こんな事なら笑ってくれた方がマシだ。

「ちょっ！？　何で抱いたまま歩いてるのかな！？」
「ん？　もしかしてシグナムの方がええか？」
「……いや、そうじゃなくてね！」
《今変な間があったな》
《葛藤でもしたんでしょう。ここに来て変態のキャラでも狙ってるんですか？》

狙ってません。

でもゴメン、一瞬何とも言えないものが頭を過ぎったんだ。

「……ほな行こか」
「え、はや姉？　だから降ろしてって……」
「イヤや」
「あ、駄目はや姉。その目は駄目」

ハイライトが消えてる。これはマジだ。

え？　なんで？　俺今回に限っては何もしてないって言い切れるけど。

「（今回はお前が悪い）」

既に何も言えなくなった俺に後ろからシグナム姉さんが念話で話しかけてきた。

「（あの、何でしょうか？　ちょっと本当に解らないんだけど……）」

「（……今度私が鍛えなおしてやる。元に戻ったら覚悟しておけ）」

「（なんで！？）」

あ、一方的に念話切られた。

なんか知らない内に死亡フラグだ立ったけど……。

《（私も分かりませんね）》

「（だよなぁ）」

《（やはりマスター達は紛れも無いコンビだな）》

ん～？

とまぁ、こんな会話をしてるうちに食堂に着いたわけで。

どうなったかって？

思い出させないでください。

ウィズの小部屋・特別出張Ｖｅｒ

ア《と言う訳で今回はいつものスタジオを飛び出して訓練場にきています》
ユリア「今回はウィズに変わって私がリポートするわね」
ア《ちなみに相棒はあちらで修行しております》
ユ「そろそろ始まる時間よね？画面、映すわよ」

ウ『おっぱい魔人ーー！ツンデレロリッ子ーー！』
シ『ほぅ？よっぽど模擬戦がしたいと見える』
ヴ『そんなにお望みなら殺してやらあぁぁぁ！！』
ウ『ギャーーーー！！？』

ユ「おー。逃げてる逃げてる」
ア《逃げてバッカリなのもどうですかねぇ》
ユ「なら応援でもしてやりなさいよ。多分喜ぶわよ？」
ア《ですね。バッタービビッてるー！！》
ユ「うん。多分違うわ、それ」

灰色の野良猫さん

ア《ユリアさんと少し似てますか、ソラさん》
ユ「少し違うんじゃない？私はデバイスが足引っ張るから使わないだけだし」
ア《そんな人普通いませんよ。早くデバイスを手に入れて欲しいですねぇ》
ユ「そういえばウィズってデバイスの知識あるんだっけ？」
ア《ありますよ？私たちの整備も出来ますし、インビエルノは自作ですしね》
ユ「へー。少しとはいえ母さんの血が流れてるだけあるってこと？」
ア《ってことはユリアさんも？》
ユ「まぁね。役に立たないから一切公表してないけど」
ア《作っても使わないですもんね》
ユ「まぁね。ま、普通はあって困るもんじゃないから早く猫に作ってもらいなさい」

朧木さん

ユ「コイツは何を言ってるのかしら？ウィズがカッコいいとか。血迷ってんの？」
ア《このコメントを本人が目にしていないのが不憫ですね》
ユ「このコーナー始まってからアイツよりアンタの人気がグングン上がってるものね」
ア《最近で言えば主人公交代を進めるようなコメントも増えてきてます》
ユ「さすがの私でもかわいそうと思うわね、それ」
ア《人気は本人しだいですからねぇ。相棒も頑張ってるとは思うんですけど……》
ユ「普通カッコよく見えるシリアスなシーンもアイツの場合はヘタレてるのが多いし」

ア《というかこの人、私たちのせいでテスト勉強できないとか言ってますよ》
ユ「どんな責任転嫁よ、それ。いい？ちゃんと勉強はしときなさいよ？苦労するわよ？」
ア《頑張ってくださいね》
ユ「応援してるわよ」

Ｎａｋｉさん

ユ「あぁ、この人のアイディアが今回のアレ？」
ア《はい。上げられた三つのうち、即効で二番目に決まったそうです》
ユ「確かにソレが一番殺さず生かさずって感じで良いわね」
ア《でしょ？っというかセラフィムさんは天使ですか。でも残念でしたね》
ユ「？なんで？」
ア《だって私は神ですよ？天使と神じゃ神が上でしょ？そりゃもう超えられない壁をはさんで》
ユ「そこまでは知らないけど」
ア《まぁ、この話は置いておいて。ラディさん？本マスターじゃないのに贅沢ですね》
ユ「それは同感。ここにウィズがいたら庇ってくれたでしょうけど、私はそうはいかないわよ」
ア《むしろ今まで以上に可愛がって、敬いなさい。付き合ってもらってるんですから》
ユ「定期的にメンテも大切よねぇ。デバイスって結構デリケートなのよ？」
ア《そうすればそのうち友達くらいには思ってもらえますよ》

TOUDAさん

ア《あなたはよくわかってらっしゃいます！！そうです。相棒はヘタレでこそ相棒なのです！》

ユ「でも強くならないって……ソレでいいの？」

ア《では想像してみてください。強い相棒を》

ユ「……」

ア《どうですか？》

ユ「ゴメン。私が悪かった」

ア《そうでしょう。ところでシャーマンって死んだら強くなるんですか？》

ユ「さぁ。ていうか、向こう本当に死ぬんじゃない？さっきから動いて無い気がするけど」

ア《何言ってるんですか。ほら、あんなに元気に飛び回ってるじゃですか》

ユ「私には爆風で飛ばされてるようにしか見えないけど？」

ナイトホークさん

ユ「なんていうか……」

ア《さすがにこればっかりは……相棒がいなくてよかったですね》

ユ「全否定だもんねぇ。首つるんじゃない？」

ア《いえ。ヘタレですから無いですね。精々暗くなるまで家出とかでしょう》

ユ「あぁ。お腹が減ったりとかね」

ア《そうですそうです。そんな感じ》

ユ「簡単に想像できるわね」

翡翠さん

ユ「アンタこっちじゃ本当に輝いてるわよねぇ。おっぴろげだし」
ア《こっちは本編とは別ですからね。ユートピアとかネバーランドとかそんなのです》
ユ「それ、伝説級じゃないの……。なに？ココってそんなに凄かったの？」
ア《そうですよ。こっちで起きてる事は本編には持ち越されませんしね。私以外》
ユ「アンタには持ち越されるの！？ん？ちょっと待って」
ア《どうかしました？》
ユ「本編に持ち越されないって事は今アレがやってることって無駄なんじゃ……」
ア《そうですよ？》
ユ「なんでそんなことを？」
ア《だって面白いじゃないですか》

ユ「にしても、アンタの人気本当に凄いわねぇ」
ア《さすがに予想外でしたけどね。このコーナー様様です》
ユ「ウィズがいらないって意見まで来てるし。デバイスに人気取られてるのなんて他には無いわよ？」
ア《というか本当に私が主人公になっても良いと思うんですよ》
ユ「や。さすがに駄目でしょ」
ア《えー。じゃぁせめて短編の一本くらい……》
ユ「知らないわよ。私に言っても何にも出来ないし」
ア《こうなったら直接……え、何ですか、その紙？》
ユ「え？私が読むの？」

ア《早く読んでください。明らかに今の話に関係あるでしょ？》
ユ「えっとね……【声が多かったら書きます、だって】」
ア《マジですか！？本編主人公移行ですか！？》
ユ「違うわよ。短編の話。なんか今シリアスなの書いててギャグが書きたいんだって」
ア《成る程。ネタが無いから私でつなごうと……。皆さん！声を！声を張り上げてください！チャンスなんです！！》
ユ「はぁ。で、アッチはどうなったかしら？」

シ『シャマルー！ウィズが、ウィズが動かん！！』
ヴ『お、おい！息しろ、息！吸え！吸えーーーー』
シ『逝っては行かんぞ！傷はまだ浅い！！』

ユ「……それじゃね」

21．ロストロギア珍事件【前編】（後書き）

こんにちは、八神煌斗です。
今回は過去に上げたのに加筆したものです。

理由はウィズの無茶な任務の理由を明かしてないな。とおもったのと。
シリアスが続きそうなので、少しギャグ分を。

まぁ、この話も実は意味が上記以外にも結構あるんですよ、いや本当に。

にしても、オリジナル二日ペースはきついな……。
でも4月までには簡潔させたいし……。
まぁ、その辺は様子をみて。

ではまた二日後、お会いしましょう。
それでわ！！

22．ロストロギア珍事件【後編】

そして次の日。
俺は久しぶりに教導に参加するため訓練場に向かってるのだが……。

「なぁ、そんなに引っ張らなくて大丈夫だから、手離そうか？」
「だめ！　こけたら危ないんだよ」
「いや、だからな。中身は元のままなんだから……」

何故か昨日からヴィヴィオが俺に対してお姉ちゃんしてる。
昨日の飯時も「残したらだめですよ」とか言ってきたり、今みたいに手を引いたり。

その度に回りから暖かい視線が向けられるんだが……それが痛い。
こうしている間も何人かに向けられたし……。

と、訓練場に付くと既にスバルたちが居た。
この二人、と言うかＦＷの面々は昨日の朝に存分に大騒ぎしたので既に今はいつも通りに接している。

「あ、おはよーございます！ウィズさん！」
「あれ？　ウィズさん制服着てますね？」
「ん？あぁこれか。コレはエリオのを借りてるんだよ」

すこし大きくて悲しくなったのは内緒だ。
だから手足の裾は2～3回折ってある。

「なのはさんはどうしたんですか？　もしかして調子が悪いとか？」

「違う違う。はや姉に呼ばれて部隊長室に行ってるだけだ。そろそろ戻ってくるんじゃないか？」

「ウィーズー！」

ん、はや姉？

俺は声がする方を見てみる。
そこにはやっぱりはや姉が居たのだが、両手で一つずつ引きずっている白い物体はもしかするか？

「はや姉……その両手に持ってるので……」

「うん？　なのはちゃんにフェイトちゃんやで」

あ、ビクッってなった、ビクッて。

それにしても……やっぱりか。
二人とも何故か聖祥小学校の制服を着ている。
ご丁寧に髪型まで当時と同じにしてある。
言うまでもなく顔は真っ赤だ。

フェイ姉なんか本当に赤いから金髪が映える映える。

「うわー、なのはさん可愛いー！」

「ほうと。一度ビデオで見たことあったけど、実際見ると印象違うわねぇ」

「う～……二人ともそんなに見ないでよー」

「は、恥ずかしい……」

「そ、そんな事無いですよ！凄く似合ってますよ！　ね、キャロ？」

「はい！　すっごく可愛いです！　でもエリオ君照れ過ぎだよ……」

「何か言った、キャロ？」

「別にっ」

なの姉とフェイ姉は既にＦＷたちに囲まれてしまっている。

なんだか向こうはもり上がってるなぁ。

一瞬キャロが黒く見えた？

ハハハ、エリオ。将来はお互いに良い酒が飲めそうだよ。

「昨日何か企んでるとは思ってたけど、これ？」

「ちゃうちゃう、コレだけな筈ないやん」

「「え゛！？」」

聞こえたんだろう。
顔を今度は青くして凄い勢いでコッチを見る二人の姉。

「ちょ、はやてちゃん！　まだ何かあるの！？」
「私もう無理だよ！？　限界だよ！？」
「まぁまぁ。落ち着いて二人とも」

必死になって訴えかける二人を、のらりくらりと交わすはや姉。
そんな時、はや姉に通信が着た。

『はやて隊長。お客様がお見えです』
「あ、もう来たんや？　ここまで着てもらえるか？」
『分かりました。そう伝えておきます』

そして通信は終わる。
それにしてもこんな時間に客？
まだ朝の８時だぞ？

「フェイトちゃん、嫌な予感がするのは私だけかな？」
「私も同じ気持ちだよ……」

俺もだ。

そして、さっき言ってたお客様だが……。

「例の件が調べ終わってないのに途中経過を報告しに来いって言われたのか、やっと分かったよ」

「……なんの冗談だい、これ？」

「ユ、ユーノ君！？」

「アルフまで！？」

二人は目をコレでもか、と言うほど開いて驚いた。

そして今度はアルフさんとユーノさんを含めた四人ではや姉を睨む。

さすがにこの迫力にははや姉も押され後ずさりする。

「いや……ほら！　折角縮んだんやし、楽しまないと損やん！？」

必死だな……。

「それで折角やったら当時を再現しようかなぁって……。ダメ？」

「……（コクリ）」

全員が静かに頭を下げる。

「じゃ、じゃぁ私はここら辺で……ほな！」
「あ、逃げた！」
「アルフ」
「ハイよ！」
「ユーノ君も！」
「うん！」

その後、ユーノさんのバインドで捕まったはや姉は狼状態となったアルフさんに咥えられて戻ってきた。

「うぅ……悪ふざけが過ぎました、ゴメンなさい。」

土下座ってのは見る分には中々良い物だな。

《相棒が鬼畜に！？》
《失望した、マスター》
「そんなにか！？」

「あ、そうだ。その体の事だけど、2～3日したら元に戻るみたいだよ」
「そうなんですか？　よかったぁ」

元に戻れないならどうしようかと思った。

「それにしてもこの面子が揃うのひさしぶりだねぇ」
「……だからって何で僕がこの格好に……」

数分後、呑気……懐かしむように言うのはアルフさん。
そして落ち込んでいるのはユーノさん。

因みに二人の格好は大人Ｖｅｒにフェレットバージョンである。
これははや姉でなくてアルフさんが言い出したこと。

なの姉達がせっかくあの頃にの姿に戻ったんだから自分達も戻ろう、とのこと。
それでじゃはや姉に土下座させたのはなんだったのか、と気になるが、ツッコんだら負けなんだろう。

「ねぇ、折角だし少し戦らないかい？」

手のひらに拳を叩きつけながら、楽しそうに言うのはやっぱりアルフさん。
だからはや姉の土下座……え、もういい？　さいですか。

それに対して姉さん達は乗り気じゃない。
まぁ、当然といったら当然だが……。

「いいじゃないかぁ。最近体動かして無いんだよ。ユーノだって

そうだろ？」

「そ、それはそうだけど……。流石にこの姿でやるのは……」

「私もなのはとは……」

特に渋っているのがこの二人だ。

しかもフェイ姉の場合は例の事件が引っかかってるんだから無理そうに見えるけど……。

「ねぇ、フェイトちゃん。折角だしやろうよ？」

「なのは！？」

なの姉の一言に驚いて大声をだすフェイ姉。

声は出さなくても俺やはや姉も結構驚いている。

「で、でも……」

「私はもう元気なんだし。ね？」

「なのは……」

なの姉がフェイ姉の手を取って優しく言う。

そしてしばらくフェイ姉は何かを考えて……。

「うん」

「じゃぁ、試合時間は１０分。相手に降参させるかコッチが戦闘不能ってみなしたら退場。二人とも居なくなったら負け……って事でいいかな？」

『大丈夫だよ』

『わかった』

因みに二人は既に空間シュミレーションを廃郊外に設定してお互いポジションについている。

言うまでも無いと思うがなの姉とユーノさん、フェイ姉とアルフがチームだ。

さらに言うとアルフさんは大人Ｖｅｒでユーノさんはフェレットだ。

これは最後まで抗議していたが、結局女性人に押されユーノさんが折れる形になった。

「それじゃ……はじめ！！」

俺が開始を告げると、なの姉がレイジングハートをフェイ姉に向けた。

それど同時にフェイ姉はバルディッシュを構えた。

しかし、その構えの一瞬。

共に相手に向かい、飛び出す。

デバイスどうしがぶつかり合い、二人の魔力がはじけとぶ。
そしてスグに二人とも後ろに飛び、距離をとった。

《Ａｃｃｅｌ（アクセル）　Ｓｈｏｏｔｅｒ（シューター）》
《Ｐｌａｓｍａ（プラズマ）　Ｌａｎｃｅｒ（ランサー）》

二人の頭上に桜色と金色の魔力球が複数現れ――。

「ファイア！」
「シュート！」

打ち出した。

二色の魔力球は共に操作され、共に操作されぶつかり合う事もなく敵に向かい飛んで行く。

なの姉はそれを体を左右に揺らして交わした。
対してフェイ姉は一度引き、シールドを張って全てを防ぎきり、なの姉に再び視線を向ける。

そこには次発弾を既に準備しているなの姉の姿があった。
フェイ姉はバランスを崩していて対応しきれない。

「シュー――」
「そう何発も撃たせるわけ無いだろ！」
「っ！」

なの姉が撃ちだそうとした瞬間、横からアルフさんが飛び出し、拳を繰り出す。
勿論、なの姉が不意打ちだったとしてもただの拳に当たる筈もなく、横に体をずらして交わす。

しかし、打ち出す瞬間だった為、アクセルシューターは明後日の方向に飛んで行った。

「今だよ、フェイト！」
「っ！？」

だが、アルフの目的は攻撃を当てる事ではなく、なの姉を誘導すること。
なの姉が交わした先には、ハーケンフォームと成ったバルディッシュを振りかざしたフェイ姉が居た。

「私の勝ちだ、なのは！」

そして振り落とされる金色の刃。
だがそれは、翡翠色のシールドは攻撃を防いだ。

「僕を忘れてもらったら困ります！」

ゴメン、忘れてたよ。

それはなの姉の肩に乗ったユーノさんだった。

なの姉はその隙にフェイ姉、アルフさんから距離をとる。

「今のは通ったと思ったんだけどねぇ」

「そう簡単になのはは落とさせません」

「なのはの攻撃、あの二回目のが来てたら落とされてたかもしれないよ」

「私だって、ユーノ君が居なかったら危なかったよ」

お互い言葉を軽く交わしている。

４人とも笑顔だ。……ユーノさんも笑顔のはずだ、うん。

「ところで僕変身魔法解いていいかな？　流石にこの状態で１０分はちょっと……」

「「「だめ！」」」

「え！？　なのはまで！？」

なんだろう。

今ユーノさんをこの上なく身近に感じたよ。

ユーノさんとは今までにも増して仲良くなれそうな気がする。

「勝つのは私たちだよ、フェイトちゃん」
「いや、私たちだ」

そして再びぶつかり合った。

「すご……」

そう誰かが呟いた。
FWたちを見てみると皆身が点になってたり、口をあけて固まっている。

まぁ、そうなるよなぁ。
それになの姉とフェイ姉の模擬戦見ること自体が初めてだもんな。
その上体が小さいのも拍車かけてるだろうし。

それにしても……この勝負終わるのか？
もうスグ5分経つけど、使い魔組みは別として、二人とも疲れるどころか動きがよくなってるように見えるが……。

「……朝練、どうする？」

「どうするも何も……出来ません」

ティアナがげんなりしながら答えた。
他の三人は既に俺の言葉は聞こえていないみたいだ……。

でも朝練をしないわけにもいかねぇしなぁ。
かと言って訓練場をフルに使ってるから、隅っこでって訳にもいかないし。

「あ。あの中に乱入ってのは……どうだ？」
「鬼ですか貴方は！？」

結局その日は朝練中止。
なの姉とフェイ姉は日が変わる頃に戻ってきたというのはヴィヴィオ談。

こんな終わり方でいいのか？

ウィズの小部屋・特別出張Ｖｅｒ

ア《どうも、前回に引き続き訓練場からお送りしております》
ユ「ちなみにウィズはアッチ」

ウ『ちょ、なの姉？なにこの目隠し』
な『今日はこれでシューターを避ける訓練ね』
ウ『ちょ！？なんで！？絶対に無理だから！！』
な『大丈夫だよ。２０手前の魔法少女の性格魔王な私のシューターくらい楽勝なんでしょ？』
ウ『そんなこと言ってませんよ！？』
な『シュート！！』
ウ『ギャーーー！！？』

ユ「お互いの間に変な誤解があるみたいだけど……？」
ア《ふふ》
ア「やっぱり……」

ナイトホークさん

ア《そうですよ、私が主人公ですよ。もうウィズじゃなくて私の小部屋で十分でしょう？》
ユ「毎回おんなじ様なこと言ってるのね」
ア《まぁ、実際この意見に対しては揺るがない絶対的なモノですし、仕方ありませんよ。というか知ってますか？》
ユ「なにを？」
ア《スピンオフやおまけの方が人気が出たり、有名になったりするんですよ？実際『なのは』がそうですし》
ユ「アンタまだ狙ってるの？」
ア《勿論です。諦めたらそこで試合終了ですよ？》

灰色の野良猫さん

ユ「あぁ、今回アイツがやってるのはコレね？」
ア《はい。もう見た瞬間にニヤケが止まりませんでしたよ》
ユ「それで本人が知らないうちに裏で手を打ったと？」
ア《はい。あぁ、そういえば相棒も封印魔法は使えないんですよ》
ユ「今回は本当に死ぬんじゃない？見えないから撃たれっぱなしよ？」
ア《まぁ、大丈夫でしょう。仮にも主人公スキルもってるんですし……》
ユ「それに頼らないと死ぬって事よね？」

月光閃火さん

ア《えーと。突然のオリキャラ投稿なんですが……》
ユ「確か前も違う人で有ったんでしょ？違うのを募集したらオリキャラが来たっていうの」
ア《そうですねぇ。特に今のところキャラに不自由してないんですが》
ユ「それにこれなのは立ちとの進行が結構深いこと前提よね？しかも最強万能キャラ」
ア《ですねぇ。正直こういうのを入れるとゴリ押しで勝てたり、原作キャラ不必要になっちゃうんですよ》
ユ「ま、これは置いときましょ。でおまけみたいに最後につけられた言葉だけど……どうなの？」
ア《どうでしょうねぇ。相棒も見れないことは無いでしょうけど……》
ユ「女っぽい表現なんて書いたこと無いけど……あぁ、アレじゃない？ヘタレを女々しいって取ったとか」
ア《成る程。納得です》

翡翠さん

ア《キターーー。私の短編を望む声！！》
ユ「本当にきたわねぇ。実はメッセージでも何通か来てるみたいよ？」
ア《マジですか！？もうコレは決定でしょう！？》
ユ「それは時を見て、ね。あとは……翡翠ってむっつり？」
ア《いえいえ。隠した無いからスケベでしょう。まぁ、気持ちは分からなくもないですが……》
ユ「あの後ウィズはどうなったのよ？」
ア《夜に一人で悶えてました》
ユ「うわぁ……」

Ｎａｋｉさん

ア《いいでしょう。思う存分様をつけて敬いなさい》
ユ「……ノリノリね」
ア《まぁ、うちの妹は可愛くないですからねぇ。あ、それで相棒との接し方ですが……》
ユ「本当にレクチャーするのね……」
ア《まずは遠慮をしないことです。言いたいことは全部言いましょう》
ユ「あんたたちは本当に好き勝手言い合ってるもんねぇ」
ア《デバイスにもストレスはあるんですよ？それに遠慮し合っていたら信頼関係なんて築けませんよ》
ユ「うわ、まともなこと言ってる」
ア《どういう意味ですかソレ！？》

秋風さん

ア《おっきくなっちゃった！の逆バージョンですね》
ユ「それで、ヴィヴィオにフラグ立ったの？」
ア《どちらかというとヴィヴィオさんに母性が目覚めたと言うべきでしょう。まぁ元に戻らないならフラグになりそうでしょうけど……》
ユ「直ぐに戻るみたいだもんね。残念」
ア《ちなみにシグナムさんには抱かれていません。シャマルさんには抱かれてましたが……》
ユ「……本当に？」
ア《えぇ、ソレはもう発狂しながら抱き上げ六課内を走り回っていました》
ユ「悶えてた理由、そっちじゃない？」

ア《とりあえず今回で私の短編フラグが立ちました。後は皆様の後押しだけです》
ユ「……ちなみに次回からはウィズが復活して通常回にもどるわね」
ア《そういえば噂の相棒はどうなっていますか？》
ユ「ん？見てみましょうか？」

な『シャマルさーーん！！担架、担架ーー！！』
フェイト『ウィズ！？なのは一体なにしたの！！？』
な『シュートイベンションやっただけだよ！……目隠しして』
フェ『それだよ！！？シャマル！早く来てーー！！』
な『ウィズ君も、逝っちゃ駄目だよ！？戻ってきて！！』

ユ「本当にウィズに引き継ぎできるんでしょうね？」

ア《……さぁ》

22．ロストロギア珍事件【後編】（後書き）

こんにちは八神煌斗です。
今回はもう殆ど過去アップです。

理由は色々あるんですが、次回からシリアスに入るって言うのが大きいですね。
基本的にシリアスばっかりになると面白くないので、適度にこういうものを入れておきたかったんです。

それと今回二度目があったのでココで言っておきます。
この先どうなるかは分かりませんが現在はオリキャラを募集しております。
そういうもの場募集しているものだけにしていただきたいです。

とても贅沢で失礼なことだと承知していますが、よろしくお願いします。

それでわ。

23．コントローラー

「えーと……確かこの辺の筈……」

あの日から十日後、俺はクラナガンへと繰り出していた。
勿論誰にも今日の事は言ってないし、出てくる理由もちょっとそこまで、って言って出てきた。

今回、ってか今から俺がすることは見方を変えたら密会だ。
それも少し前までなら何でも無かったかも知れないけど、管理局本部てドンパチやった今となったら言い逃れできない。

もし今回のことがバレて姉さんたちに迷惑をかけたくない。

《マスター、そこを左だ》
「え？　アテナが案内してくれてるのは右……おい、アテナ」
《何でしょう？　私は今デバイスと使用者の恋の成立について考えている途中なのですが》
「そんなの後に……いや、考えるな！」
《私の人権はどこに！？》
「ない！」
《言い切られた！？》

そもそもお前は人じゃないだろうが。
お前は俺の言うことを聞いておけばいいんだ。

《相棒はそういうのがお好みで？》
《尊敬ポイント、マイナス２だな》
「悪い、今のは俺の言い方が悪かった、って言うか尊敬ポイントってなに！？」
《文字通りだが？》
「ちなみに今何ポイント？」
《聞かないほうが良いぞ》
「……うん、そうする」

聞くのが怖い。

レイラの前じゃ特にこれと言った事してねぇからなぁ。
プラスになってる気がしない。

って、そんな話じゃねぇんだよ今は。

「アテナ。お前嘘の案内したな？」
《はい》

コイツ、詫びる気もなく言い切りやがった……。

いや、今日の事を納得してないのも分かってるから強くは言えないけどよ。

それからレイラの案内で目的地に向かい、着いたのだが……。
ファントムは潰れているんじゃ無いかというほどボロボロだった。

「とりあえず二人ともＡＩのプロテクトは確りかけておけよ？
何なら今からしておいた方がいいな」
《その辺は抜かりありません》
《既に下準備はしてきている。１秒あればスリープに入ると同時、
プロテクトがかかる》
《ま、その場合起きるまで時間かかりますけど》
「それ位しておいたほうがいいって」

何にか有ってからじゃ遅いし。
この前もアテナが起こしてくれなかったら多分寝たきりだったろうし。

アテナ達と最終確認を終わらせ、俺はファントムの扉を開いた。

「遅かったですね？」
「少し迷ったんだ。時間通りに来て欲しいならもっとわかりやすい場所にしろ」
「それもそうですね」

中に入ればカウンターにアングが座っていた。
店の中にコイツ以外誰も居ないのを見ると本当にこの店は潰れているらしい。

俺は一つ席を空け、カウンター席に腰を下ろす。

「警戒心が強いんですね」

「話に来たんじゃねぇんだ。さっさと教えてもらおうか？」

相手のペースに嵌らない。

これは何事にも大事なことだ。

それが自分より上に居るヤツなら特にだ。

するとアングは鼻で軽く笑った後、口を開いた。

「なら早速ですが……。貴方は闇の書を封印する為に作られたのではない、と言うのは言いましたね？」

俺は無言で頷く。

「貴方が作られた理由は、【マジック・ホール】の制御の為です」

「マジック・ホール？」

直訳で魔法の穴……ん？

そういえばユリアがそれらしいこと言ってたな……。

「そのマジック・ホールってのは何なんだ？」

「簡単に言えば魔力の集まる穴です。名前の通りですね」

そしてアングは詳しく説明をしだす。

マジックホール、魔力の集まる穴。
この穴はその性質上発見されたモノ……ってもまだ数は１０にも満たないらしいが、全て管理局が管理しているらしい。

危険なのだ。
傍から聞いた限りでは魔力関連の色々な研究に役立つだろう。
だが魔力は強大であればあるほど危険なのも確かだ。

俺が知ってる限りでも一つ。
聞いただけだけど……。大きな魔力のせいで微弱ながら次元震が起きている。

ジュエルシード。
いくらなの姉とフェイ姉の魔力量が多くても子供。

その二人の魔力で次元震が起きるんだ。
魔力が集まる、なんて臨界点なんて解んねぇけど……超えたら危険なのは俺でも解る。

「ですが、管理局が管理している理由はそれだけでは有りません」
「まだあんのかよ？」
「えぇ。それも見方によってはこっちの方が危険とも言えます」

勘弁してくれ。ユリアの口調から考えてもこんなに危険なモノなんて考えもしなかったぞ？

「……ロストロギアを引き寄せるのです」
「はぁ！？」

ロストロギアを集める？
そんなの見かた云々以前に危険じゃねぇか。

……いや、落ち着いて考えたら当たり前だ。
こんなの説明されなくても解る。

ロストロギアは大なり小なり魔力に引き寄せられる。
自身を発動させるものは魔力なら尚更。

そこに魔力の溜まり場があればどうだ？

「穴の事は大まかに解った。だけどそれと俺の何の関係があるんだ？」
「貴方は、この穴を制御する為に作られたんですよ」
「そりゃ唐突だな」

どういうことだよ！？

何とか動揺を見せないようには出来たけど、内心は穏やかじゃない。

俺の力は封印の力。
それはアテナと、そして何より母さんの記憶を継いでいるユリアがそういってたんだ。
間違いじゃない。

「では聞きますが、スカリエッティが貴方を欲した理由は何でしたか？」
「それはっ……ちっ」

ゆりかごの制御装置。

「言わば貴方は万能コントローラーなんですよ」
「コントローラー？」
「はい。ゲームの主人公はコントローラーによって好きに操作されます。が、逆を言えば操作しなければ動くことも特別な能力を使うことも出来ない。どうですか？これは封印されているのと同意でしょう？」

言われて納得した。

テレビがついていても見なかったらそれはテレビを消しているのと同じだ。
見てないんだから。

だけど、まだ納得する訳にはいかない。

「じゃぁ、俺が海鳴に呼ばれた理由はどうなんだよ？」

そうだ。

俺が今のポジションに居るのは海鳴に居たからだ。

そして居た理由もはや姉が、闇の書がそこにあったからだ。

「もし俺がその穴の制御装置として作られたなら、行く理由が無い」

「いえ、貴方は行く必要があった。それこそ、本来行く筈だった者を押しのけてでも」

「本来行く筈……そんなヤツ……」

「居るでしょう一人だけ。貴方と同じ存在で、凍結の変換資質持ちの彼が」

「っ！」

……トウギ。

思わず顔を伏せた。

そうだ。俺の前じゃ一回しか使ってなかったから忘れかけてた。

この前あった時も考えたばかりじゃねぇか！

俺とトウギが逆の可能性もあったって。

なんで、十日前、目の前のコイツに言われたときに気づかなかった

!?

凍結魔法で封印を考えてたなら……トウギが適任だ。

……まて。

なら俺が海鳴に居た理由は？

トウギを押しのけてまで俺が居た理由は……。

まさか……？

俺は動揺しながらも顔を上げ、アングを見る。

「気づいたようですね。そうです。海鳴にも一つ。穴があります」

やっぱり。

「研究者たちが貴方を地球に送る直前、グレアムが別の手段の方法を模索中を言うことを知ったんです。だから、切られるのを前提で貴方を地球、穴の近くに送った」

もっとも、ディズ博士たちは知らなかったようですけどね、と付け加え、笑みをこぼすアング。

「穴にはピークになる周期があります。それが大体十年」
「十年……」
「はい。まぁ、大体の話ですので1~2年の差は有りますけれどね」

言われて納得した。

10年と言う期間で3つのロストロギアが地球に落ちてる。
いや詳しくは地球の日本の海鳴市にだ。

特にジュエルシード。

地球上で落としたならまだ説明はつく。

だがあれは次元航行中に落とされたものだ。
21個全てがあんな狭い範囲に落ちることがおかしいじゃないか。

つまり、夜天の魔道書が今から約20年前のピーク時に。そしてジュエルシードが10年前。
そして今年の初めのスライムみたいなモノ。

確かに多少のズレはあっても約十年の周期だ。

穴に引き寄せられてたんだな。

これで、説明がついた。
親父たちがはや姉と接触出来ないのに地球に呼ばれた理由。
そして俺を求めるヤツ全員が封印機じゃなく、制御装置をして欲してたこと。

そしてこれが最後。

「その情報、どこで手に入れた？」
「言ったじゃないですか。管理局のコンピューターに……」
「それにしては知りすぎてるよな？」

マジック・ホール云々の本当だろう。

管理局が管理しているんだから俺でも直ぐに調べられる。

でも俺がトウギを差し置いて海鳴に行ったとか、その海鳴に穴が有るなんて。
その情報はどこから手に入れた？
管理外世界だから、なんて理由にならない。そんな危険なモノなら少しでも関わっている筈だ。

でもそんなのリンディさんからも聞いた事が無い。

「感がいいんですね」
「そんな事は良いから、早く言え」

睨み付ける。
答えないつもりならそれでも良い。

どの道、俺はこの問答を最後にここから出るつもりだ。

俺たちにはユーノさんという頭脳が付いてるからな。
また徹夜してもらう事になるかもしんねぇけど。

そして数秒。
アングが軽く微笑み口を開いた。

「僕が、ＦＳ計画にかかわっていたからです」

ウィズの小部屋

ウ「なんかこの部屋に戻ってくるのも久しぶりだなぁ……」
ア《この数日間は色々濃かったですからねぇ。》
ウ「その件なんだけど、俺全然記憶ないんだわ。何かあった?」
ア《ソレはもう楽しかったですよ。私としても映像記録に残していなかったことが唯一の悔やみです》
ウ「え、そんなに!?ちょ、他に誰か知ってるヤツいねぇの!?」
ア《知ってる人はそれなりに居ますが……おそらく皆さん何も語らないですよ?》
ウ「なんで!?あ、そういえばシグナム姉さんとさっき目が会った

んだけど、すっごい優しい目でよかったな、って言われた」
ア《そういう事ですよ》
ウ「どういう事!?」

ナイトホークさん

ウ「だよなぁ。普通は一本は立っててもおかしくねぇってのに……ある意味ユーノさんと同じ感じ?」
ア《でしょうねぇ。家族と言う設定が大きな壁に成っていますね。というか相棒。少し御幣があります》
ウ「なに?」
ア《相棒はフラグをちゃんと立ててますよ。それはもう揺ぎ無いものが一つ》
ウ「お前ってのは無しだからな」
ア《私です!!》
ウ「話聞いてた!?」
ア《聞いてません!!》
ウ「開き直るなぁぁ!!」

灰色の野良猫さん

ウ「気になる言葉だらけなんだけど……まず修行って何?」
ア《え!?あー……ソラさんが修行するらしいので私がアイディアを出したんですよっ!》
ウ「ふーん。じゃ、死なない程度に頑張れ。で、後半の短編フラグって?」
ア《文字通りですが何か?》
ウ「はぁ!?お前いつの間にそんな話になってんの!?俺聞いてね

ぇよ！！」
ア《言ってませんから》
ウ「俺、マスターだよね……？」
ア《猫にくわえられるですかぁ。そんな趣味をお持ちで？》
ウ「いや、猫ってこの人のことじゃないから。動物の方だから」
ア《そうですかねぇ。私のほうが正しいと思いますけど……》
ウ「一回お前の頭の中見てみたいよ」

TOUDAさん

ウ「あの時は本当に恥ずかしかったなぁ……」
ア《作中では語られていませんがあの後も大変でしたモンねぇ。私もライバル出現かと焦りましたよ》
ウ「【食べさせてあげる】ってアーンしてきたり【怖くない？】とか言って一緒に寝ようとしたり」
ア《あとはお風呂にお昼寝に、お遊びでしたっけ？》
ウ「パッと思いつく限りのお姉ちゃん全てを遣りつくした間があったよな」
ア《あとはその間はやてさんの機嫌が妙に悪かったのを覚えてます》
ウ「あぁ、そういやぁそうだな。アレなんで？」
ア《さぁ。私にも分かりかねます》
ウ「ん～～」

翡翠さん

ウ「いやもう変われるなら変わってあげるよ、本当に」
ア《な！？相棒私を捨てるのですか！？》
ウ「いや、そうは言ってないけどよ。ここまで堂々と言われたら少

しは……なぁ？」
ア《あぁ。もうドスケベって言い切ってますモンねぇ。私一筋とか言いながらフェイトさんにニヤニヤしたそうですし……》
ウ「って言うかデバイス一筋ってどうなのよ？色々危ない気がすんだけど？」
ア《何を言ってるんですか！？相棒も見習ってください！特に私一筋という所を！！》
ウ「なんで！？いや、理由は分かるけどなんで！？」
ア《だから相棒は人気が無いんですよ！！》
ウ「はぅ！？」
ア《こう一途な思いを無碍にしてるから！少しは答えてくださいよ！！》
ウ「いや、だからな……もういいや」

ウ「にしても短編って本当かよ？」
ア《みたいですよ？今色々構成中らしいです》
ウ「どれくらいに公開されんの？次回？」
ア《少し先でしょうか。いま少し大変なことに成っているみたいですし……。重に肉体的に》
ウ「肉体的！？何があったの！？」
ア《親知らずを抜いたらしいんですけど、穴が大きすぎたらしく中を縫い、痛みが消えないそうです》
ウ「へ、へぇ～。それは大変だ」
ア《相棒？声裏返ってますよ？しかも痛くても食いしばることも出来ないとか》
ウ「わかった！分かったからもうやめて！！」
ア《ハイハイ。ですのでよかったら少しネタを募集です。私にこんなことをやって見て欲しい、と言うのを》
ウ「考える余裕もあんまり無いみたいだから、よろしくな」

23．コントローラー（後書き）

こんにちは、八神煌斗です。
上で述べたとおりです。もう痛みとそのせいの寝不足、イライラでまともに頭が動きません。

今回も内容も矛盾点はあると思いますが、修正は後日にさせていただきます。
ごめんなさい。

後はアテナ短編のネタ募集です。

あぁ、あと先日サウンドステージX聞きました。
ｖｉｖｉｄで眠っていたままの少女の正体とか、ジェイルの意外な素顔とか、色々とつっかえが取れたりして面白かったです。

アレで書くものいいかと思ったんですが……アレはオリキャラを入れる隙間が無いなぁ、と思ったのが率直な感想。
いや、入れることは出来るんですけど、個人的にはティアナの活躍を潰したくいなぁ、と。

それでは、次回も暗いですが、よろしくお願いします。

それでわ！

24．道の妨げ・家族の重み

「どういう、ことだ？」
「そう睨まないでください。正確にはかかわっていた者のクローンですよ」

……成る程。
コイツもユリアと同じ記憶を継いでるって事か。

嘘かどうか解んねぇけど、これだけ情報が貰えれば言うこと無しだ。
俺は椅子から立ち上がり、アングに背を向け、出口へ歩き出す。

「どこに行くんですか？」
「帰るんだよ。十分情報は引き出せたからな」

答えながらも俺は歩くことを止めない。

正直慣れない事をしたせいで精神的に結構キてる。
この場から早く逃げ出したいんです。はい。

「それが、起動六課……いえ、八神はやての苦労に繋がるとしてもですか？」

そう言われて、俺は思わず足を止めた。
振り向くといつの間にか立ち上がったアングが俺の方を見ていた。

「どういう意味だ、テメェ？」
「八神はやてが管理局でどのような立場に居るのか、ご存知の筈ですよね？」

はや姉の立ち位置。
ロストロギア、夜天の魔道書の最後の主。

それだけ聞いたら凄いが、実際はそれだけじゃない。

夜天の魔道書が闇の書だった頃の犠牲者の憎しみをその一身に受けてる。
俺からしたら逆恨みもいい所だけど、そうも行かないのが現実。

今じゃ減ったらしいけど、今でも少なからず居る。
これはシグナム姉さん達も同じだけど……。

そしてその憎しみを持つのが管理局内にも居る。
しかもそれは世代的に今の管理局の上に位置している人物が多いと言うこと。

だからこそ、危うい。

だけど……。

「テメェには関係ないだろ」
「ですが、貴方には関係がある。まさか知らないんですか？　八神はやての今の状態を」
「今の？」
その言い回しが俺に引っかかった。
さっきまで顔だけだったのを体ごと振り向き、アングに再び向き直る。
「いい加減にしろよ。それ以上適当な事言いやがったら――……」
「適当ではありませんよ。八神はやては今、貴方のせいで再び管理局に睨まれています」
「なっ、なに……？」
一瞬、動揺する。
「俺のせい？　出鱈目――」
「ではありません。彼女はロストロギアの不正所持として事件後また睨まれ始めています」
「不正所持？　そん、な……の」
……俺？
気づいたら当たり前の事だった。

ロストロギアは管理局の厳しい審査の末に所持が許させる。
それは既知未知の差は有っても魔道士という立場なら、何らかの罰がある事には変わらない。

姉さん達も１０年前闇の書事件が終わった時、管理局任務への従事と言う形で罪滅ぼしをし、はや姉は名目上の監視下に置かれることになった。

姉さんたちがこの程度で済んだのはクロノやリンディさんが結構な無茶を通してくれてたからしい。
そう。無茶をしてくれて監視下なんだ。

「解りましたか？貴方が八神はやての元に返るだけで、そばに居るだけで迷惑がかかる」
「……だからって」

俺の帰る場所は……。

「その場所が、この先、八神はやてが歩む道の妨げに成ったとしても、帰りますか？」
「っ……」
「貴方が壁に成りたいのなら止めませんが……オススメはしませんね」

そして静かに、その右手を俺に向けて差し出してくる。
その顔には、薄い笑みが張り付いている。

「……なんだよ？」

「貴方は僕たちを同じ造られたモノです。普通とは根本的に違う生まれ方をした。分かっているのでしょう？　自分が居るだけで、迷惑が掛かると言うことは」

苦しい。息が荒くなってるのが、相手のペースに飲まれてるのが分かる。

いつもならこういう時、アテナが助けてくれるんだけど……。

今回に限っては無い。

どういう動きを取るか分からないからだ。

「貴方がどう願おうと、世界は優しくありません。世界は私たちを拒絶する」

洗脳されかかってる。

分かってるけど……アイツの言葉が俺に突き刺さる。

きっと、俺が気づいてないところで、俺のトラウマになってたんだ。

《（相棒、駄目です！　その手を受け取ったら、戻れなくなります！）》

《（マスター！　落ち着け、その手を戻すんだ！）》

二人の声が頭に響く。

あれだけ言ったのにコイツらは……。そう頭の隅で考える余裕があることに驚いた。

けど、二人に言われて自分の手が少しずつアングに向かって伸びてることに気づいた。

「貴方は同じ生まれの僕たちと来るべきだ。貴方の居場所は私たちの所だ」

「違う！」

「っ！？」

その声は誰の声か。

突然店内に響いた凛とした声に、俺の手が止まった。

「轟炎（ごうえん）！！」

「ちぃっ！」

アングが後ろにステップを踏み、俺から距離を取った。

と同時。

さっきまでアングが居た場所に一つの火球は降り注いだ。

「万が一を考えてアギトを連れて来たが……正解だったな」

足音が後ろから聞こえた。

「例え世界に拒絶されても、待っていてくれる人が居れば、そこが居場所だ」

そして俺の左肩に手が触れる感触がした。

「ましてや、居場所は他人に決められるものではない。自分で決めるものだ」

振り向くとそこに居たのは――……。

「シグナム、姉さん？」

「言いたいことは山と有るが、後回しだ」

そう言って俺の方を後ろに引き、前に出た姉さん。

その格好は既に甲冑を着用、手にはレヴァンティンを握っている。

「貴様がアングだな？」
「烈火の騎士ですか。また厄介な……」
悪態をつくアング。
「良いのですか？　ここか仮にも都市内です。こんなところで戦闘すれば貴方の地位は直ぐに――」
「構わん」
アングの言葉を遮ったシグナム姉さん。
その声は誰でも分かるほどに怒りが込められてた。
「家族一人と我が地位。天秤にかけるまでもない」
「ほぅ？　因みにそれはどちらで？」
無言でレヴァンティンをアングに向けた。
それはつまり……俺を選んでくれたと言うこと。
「一人で何が出来ると？」
「一人じゃねぇ！」
「なにっ！？　くっ」
再び声がする。

同時、俺たちをアングを遮るように火が壁のように燃え盛った。

「よくやった、アギト」
「へッ。くれくらい朝飯前だぜ」

降りてきたのはリインサイズの赤い悪魔のような格好をした女の子。
シグナム姉さんから話にだけは聞いていた。
姉さんを歩むことを決めたユニゾンデバイス。
烈火の剣精、アギト。

「チィ。ユニゾンデバイス持ちですか。流石にこの狭い空間では……」

燃え盛る炎の奥に揺らいで見えるアングの顔は少しだが歪んでいた。
これも話から聞いている。
シグナム姉さんはアギトとのユニゾン適正がリイン以上に高いって。
アングの能力がどれだけ凄くても、姉さんのデバイスに近づけなかったら破壊は出来ないだろう。

それに俺にだってわかる。
ユニゾンしなくてもこの狭い空間、炎が降り注ぐ中ならいくらアングでもまともに戦闘にならない。

だからこその舌打ちだろう。

「今回は出直しましょう。ですがウィズ。貴方もよく考えることですね」

そういい残し、アングは姿をけした。

「機動六課所属、フェイト・T・ハラオウンです。市街地で火災が……。はい。場所は――」

その後、俺はシグナム姉さんに引っ張られるように店の外に出た。
店の外にはフェイ姉の車が置いてあって、フェイ姉も待機していた。
今はフェイ姉が店の参上に驚きながらも、近くの地上部隊に連絡を入れてくれてる。
まぁ、原因は俺の隣に居る人なんだけどね。

「ウィズ」
「……？　なに――づっ！？」

シグナム姉さんに呼ばれて、そっちを向こうとしたら、頬に強い衝撃を感じた。
そして俺は店の向かいの壁際に叩きつけられた。
口の中には鉄の味が広がり始める。

「シグナム！？」

通信が終わっていたフェイ姉が慌てて俺のほうに駆け寄ってくる。
シグナム姉さんは何も言わずに右手で作った拳を胸元まで持ち上げている。

「私の分はこの一発で許してやる。後は主やテスタロッサに絞ってもらえ」

そう言って車に乗り込むシグナム姉さん。
その声は店内に居たときよりも、酷く重く聞こえた。

「大丈夫？」
「うん……」

心配してくれながら、ハンカチで俺の口元を拭いてくれる。
多分、そこから血が出てるんだろう。

もたれ掛っていた壁から背を離し、少しふら付きながらも確りと立つ。

「ウィズ」

俺の両肩に手を置いて俺の視線を合わせて屈んだフェイ姉。
そして俺の名前を呼ぶ。

だけど俺は目を合わすことが出来ずに、横に逸らしてしまう。

「ウィズ。こっち向いて」
「……」

恐る恐る、フェイ姉に目を合わせる。

「何で今回の事を話してくれなかったのかは今は聞かない」
「……」
「でも、六課に帰ったらちゃんと話して。いい？」
「……わかった」

ウィズの小部屋

ア《相棒相棒。メッセージで面白い？と言うか変わった質問が》
ウ「へぇ。誰からなんて？」
ア《タイトルに匿名希望と書いてあったので名前は言えません。で内容ですが、私たちのＣＶは誰？と》
ウ「ＣＶ？」
ア《キャラクターボイスの事です。一時期流行ったみたいですね。オリキャラにボイス当てるの》
ウ「ふーん。で、誰なの？」
ア《決めてませんよそんなの、恐れ多い》
ウ「でも質問にあったんだろ？何て返したんだよ？」
ア《普通にまた考えておきます。と》
ウ「……なんかいい加減な政治家の逃げ方と同じだな」
ア《はう！？》

秋風さん

ウ「そういえばコラボするって言ってたなぁ。直人って俺より強いんだろ？」
ア《そうですよ。というか相棒より弱い方って数えるほどしか居ませんよ》
ウ「うるせぇ。とりあえずスッゴイ楽しみに待ってる！」
ア《この人半端ない更新速度の中書いてるんですよね？身体大丈夫なんでしょうか。何なら私が癒して差し上げたいですが……相棒がやきもちを焼きますので。ごめんなさい》
ウ「あ、全然いいよ。行ってらっしゃい」
ア《相棒！！？》

ナイトホーク

ア《また誤字ですか……。頭のレベルがよく分かりますね》
ウ「まぁ、うん。何とも言ってやれないな」
ア《あと尊敬ポイント。アイディアは私なんですよ》
ウ「お前だったの!?っていうか最近レイラがいい感じにステキになってるのも……」
ア《えぇ。コツコツ頑張ったかいがありました》
ウ「やっぱりか!!?」

Ｎａｋｉさん

ア《ター○ネーター……。やっちゃいましたね》
ウ「あぁ、ちゃっちゃったな。あ、先言っとくけどＮａｋｉさんが悪いんじゃないから。悪いのはウチのだ」
ア《ネタバレですからあまり言えませんが、似たようなネタで書き始めてたんですよね》
ウ「いつまでもクダクダ書いてるから悪いんだ。という訳でＮａｋｉさんのアイディア採用」
ア《セラフィムさん、次回からゲスト召喚始める予定ですので、三話後？》
ウ「次回からかわかんねぇけど、言ってる間に始めるから、楽しみに待ってるな」
ア《共に大騒ぎしましょう！リミッター解除です！！》
ウ「お願い、それだけはやめて！！」

灰色の野良猫さん

ア《私と話してみたいなんて……また一人私の魅力にかかってしまいましたか》
ウ「いや、違うと思う。社交辞令だろ」
ア《なんて罪作りな女なんでしょう……》
ウ「話聞いてた!!?」
ア《聞いてましたよ。ネタも考えてくれたようで本当にありがたいですね》
ウ「だな。複雑に成ってきたのはちょっとやりすぎた感あるけど」
ア《ブッチャケ読者を置き去りにしてますしねぇ》
ウ「何とか軌道修正しねぇと……」

翡翠さん

ウ「最近はこの人相手にどうやって俺を認めさせるか、ソレが課題になってきた」
ア《無理でしょう》
ウ「即答!?」
ア《だって私と相棒の間には越えられない壁が何枚とあるんですよ》
ウ「そんなに!?しかも俺後ろ!?」
ア《なにを今更。もしかして相棒気づいてなかったんですか?》
ウ「え、なにこの感じ?俺が間違ってたの?」
ア《なんだか最近は翡翠さんの方が私の事をよく分かってくれている気がします》
ウ「あの、そ、その……ごめんなさい」

ア《にしても、今回の話は私から見てもイライラさせられますね》
ウ「面目ない……」
ア《あの人もこの話と次回の話ほど書いててイライラしたことはな

いと》
ウ「アイツが考えてるんだよね！？俺が悪いんじゃないよね！？」
ア《……まぁ、それは置いておいて》
ウ「お前から言い出したんだよな！？」
ア《相棒の謎も大方で尽くしましたし、この先の展開はどうなるんですか？》
ウ「さぁ。俺もまだ台本もらってないからわかんない」
ア《マンネリに成らなければいいですけど》
ウ「本当にな」

２４．道の妨げ・家族の重み（後書き）

こんにちは、八神煌斗です。

今回のお話はイライラしたことでしょう。そうでしょう。
私もイライラしました。

ウィズが何故こんなヘタレ、というのを主題にしたかは次回書かせていただきます。
なにも思いつきでは無いんですよ？

まぁ、あとは最近これが終わったらどうしようなかなぁと。

もう後は書いていくだけなので、間を空けないならそろそろプロットを練り始めないと、なんですけど……。
まぁ、これは時間があるのでゆっくり考えて生きます。

それではまた二日後お会いしましょう！！

25．涙しない夜

「成る程、な……」

俺は今部隊長室にいる。
いつもの様にはや姉はデスクに座っていて俺はその前に立っている。
でもそれ以外は全く違う。
はや姉を挟む様になの姉とフェイ姉も立ってるし、空気は比べるまでも無く重い。

はじめはヴィータ姉さんも居たんだけど、シグナム姉さんが引きずっていった。
ヴィータ姉さんには後で何か言われるだろうけど、シグナム姉さんは本当に言うことはないらしい。

アテナ達も今回は流石に怒ってるみたいで一切口を開かない。

「で、報告はそれで全部か？」
「……はい」

お互いにいつもの様になぁなぁなんかじゃない、仕事モード。

「ほな、その件は後で私らが調べとく」

「はい」

頷く事しかできない。

いや、もう俺から言うことは無いんだから頷く以外ない、が正しいか。

「もう下がってええで。って言いたいところやけど……私らが個人的に聞き無い事はまだや」

喋り方が普段の感じに戻った。

けど、雰囲気は相変わらず変わらない。

どっちらかというと重くなってるような気もする。

「ここに居場所が無いって言われて向こうの手を取ろうとしたらしいな？」

何も言わずに、気づいたら顔を横に逸らしていた。

シグナム姉さん、いつから聞いてたんだよ。

俺が何も言わずに居ると、なの姉がよって来た。

「ウィズ君、何でそんな風になったのかな？ここ、そんなに居づらかった？」

「違う！　そんなこと……ない」

その一言に、俺は直ぐに否定した。

ここは凄く居心地が良い。

毎日が楽しいし、不自由なことなんて何一つない。

それ以上に、はや姉……みんなが居ることが凄く嬉しい。

「ならなんで……」

「俺が……はや姉の首を絞めてる」

「どういうこと？」

俺は全部話した。

俺がはや姉の夢への道を塞いでいること、足を引っ張っていること。

気づかない内に自分の存在がトラウマになってたってこと。

そして……アングに言われた時、何も言い返せないどころか、受け入れたこと。

全部言い終わると、目の前のなの姉が、本当に悲しそうな顔をしていた。

「そんなことないよ。ウィズ君は……」

「でも！　アイツの言ってることは全部本当の事だ……」

「本当じゃないよ！」

声を上げたのは、フェイ姉。
怒った顔で俺の方に寄ってきて、俺の視線に合わせる為に身を屈めた。

「ウィズは殺すために生まれたんでも、迷惑も掛からない。生まれなんて関係ないんだ」
「違う！　実際俺は皆の負担になってる……。だって……」
「いい加減にしぃや」

俺の言葉を遮ったのは、はや姉。
座っていた椅子から立ち上がり、俺の方にゆっくり歩いてくる。
怒ってる。確実に。
それははや姉の顔を見ても分かる。

「私が、いつ、迷惑やって言った？」
「言ってねぇよ。でも……気づいてないだけだ」

目の前にいるはや姉の方を見ないように、再び視線を横に逸らして答える。

「本当に、そう思ってんのか？」

「……」
「舐めんといてや」
「っ！」

言葉の重みが一層増した。

いつものおふざけの重みじゃない。

心のそこから、本当に溢れ出しそうなナニカを押さえ込んでいるような。

そんな重み、その溢れ出しそうになっている原因を作ってるのが俺だからか、余計に感じるのかもしれない。

「壁の一枚や二枚、今まで何度も越えてきたわ。それはこれからも変わらへん」
「でも！　俺は……俺の存在は今までのモノとは比べ物にならねぇだろ！？」
「それでもや。そもそも私は壁や思ってないし、壁やとしても越えたるわ。私一人で無理なら、なのはちゃんたちに手伝ってもらう」
「そうだよ。私たちも手伝う！」
「だから、大丈夫だよ」

はや姉の言葉に続くように、なの姉とフェイ姉が声を掛けてくれる。

嬉しい。

嬉しいけど……駄目だ。

「ウィズ？」

疑問の声を上げたのはフェイ姉。

それはきっと俺が体を後ろに引いたから。

「俺は手伝うことが、助けることが出来ない……。俺がいたらはや姉の夢の邪魔になる！」

だって、俺は越える壁そのものなんだから。

「夢？　夢って……」

「誰にももう泣かない夜が来ないこと。助けるどころか……」

邪魔にしかならない……。

六課に来てから、俺は何をした？

トウギに肩ぶち抜かれて、生まれの事を知って八つ当たりして、今回の独断行動。

極めつけ、はや姉の道を塞いでる。

助ける？

邪魔しかしてない……。
やっぱり、俺はここに来ないほうが……。

「ウィズ」

声の主ははや姉。
俺が離れた分、こっちに寄ってくる。
直ぐにでも走り出したい。
でも、その声が……優しくて、足が動かなかった。

「その誰にも、って言う中にはウィズも入ってるねんで？」

言葉が出なかった。
いや、驚きの言葉さえ、出てこなかった。
言われた言葉の意味は分かるのに、理解できなかった。

「はや姉……」

やっと出た言葉は、はや姉の名前。
名前を呼びながらはや姉の顔を見る。

笑っていた。

「そもそもな。私らは守ってもらう程弱くないわ。強いんよ、私ら」

両腰に手を当てて、悪戯っぽく。
でも、嫌味な感じは一切無く。
なの姉とフェイ姉も笑顔で頷く。

「まぁあれやな。十年早いっちゅうやっちゃ。……でもまぁ――」

自分より高い位置にある、俺の頭に手を置く。

「本当に助けて欲しくなったら言わせてもらうから、そのときは助けてや？」
「――っ！」

体が震えた。
震えて、動かなくなった。

「焦らんで良いんよ。ゆっくり歩けばええんや」
「そうだよ。今は私たちが守ってあげる」

「だから、ウィズも私たちを守ってね」

はや姉となの姉、フェイ姉が声を掛けてくれる。

正直情けない。

今の俺は弱いって、そういう意味だから。

だけど、同時に嬉しい。

俺に期待してくれてるから。いつか並ぶこと、俺が皆に追いつくことを信じてくれてるから。

「……はや姉」

「なんや？」

震える声で、名前を呼ぶ。

俺は、はや姉の両肩に手を置いて、俯く。

「ゴメン。隠して」

「りょーかいや」

単純だなんて分かってる。

だけど、皆が掛けてくれた言葉が、信じてくれていることが、本当に嬉しくて。

皆を信じれてなかった自分が恥ずかしくて。
これで、今日で最後にしようと心に決めて。
はや姉の腕の中で泣いた。

「ウィズ、もしかして涙もろくなったんちゃう？」
「……そんなことない」
《可愛かったぞ、マスター》
「うるせぇ」

まぁ、例の如くおもいっきり泣かせてもらいました。
今は部隊長室にある長椅子に二人並んで座ってます。

なの姉とフェイ姉はヴィータ姉さんとシグナム姉さんの所に向かった。
二人とも心配してくれてたし。
何よりヴィータ姉さんには一拍置かないと問答無用で肉体言語になりそうだ。

いや、それくらい心配してくれてるのも分かるんだけどね。
アレだけはどうしても無理なの、うん。

「とりあえず少し早いけど、でも食べにいこか？」

「今食べたら絶対に夜食とか言ってもう一回食いそうなんだけど？」
「私もそう思うわ。そんときは一緒にまた食べよな？」
《太るな》
「……やっぱ一人で食べてな」
「う、うん……」

エストラside――――――――――――――――

「それで、接触はしたが連れ帰れなかったと？」
「はい。そうなりますね」

俺が睨みをきかせて問いかけるも、目の前に立つアングは飄々と受け流す。
やはりコイツは気に食わん。
今の計画が無ければ、一緒に居たくないタイプだな。

「チッ。それで、計画の方はどうなっている？ヤツはが居なければ成就しないのだろう？」
「そこは大丈夫です。下準備は全て終えています。ですが……あと一つ、欲しいものがあるんですよ」

「一つ？」

何だ？

俺たちに必要なのはあの人間紛いさえ居ればいいのではなかったのか？

「演算装置ですね。数度接触して分かりましたが、製作途中だったせいかその部分が決定的に欠如しています。現にマルチタスクが苦手らしいですし」

そういえばデーターにも魔法の同時行使は苦手とあったな……。

そういうことか。

だから変わりの演算装置、か。

しかし、そんな直ぐに換わりに成り得るモノなど――……。

あぁ、なるほど。

「だが、あそこは文字通り鉄壁だぞ？今回貴様のミスのおかげでより厚くなっているだろうな」

「問題ありません。時間と、貴方たちの協力さえあれば決行できます」

「時間……。どのくらい必要だ？」

「そうですね……１０日程あれば」

12月の始め頃、か。

「遅いな。一週間でやれ」
「やれやれ、人使いが荒いですね。分かりました」

そうしてアングは踵を返し、闇に染まりつつ姿を消した。

ウィズの小部屋

ア《行き成りですが今回はゲストさんが来てくださっています。フラグ王です》
フラグ王「ちょっと待って！俺直人だから！前の時よりなんかレベルアップしてるし！」
ア《現にしてるじゃないですか。何ですか、重婚って》
フラグ王「その言い方やめて！なんかすっごい悪いことしてるみたいだから！！」
ア《まぁ、根性はありますよね。相棒に比べたらまだアッパリです》
フラグ王「そういえばウィズは？」
ウ「んぁ？呼んだか？」
フラグ王「うぉ！？どうしたウィズ？凄くヤツれてるけど……」
ア《コメントを見てかはずっとこの調子ですよ。全く自業自得なんですけどね》
ウ「はぅ！？」
フラグ王「容赦ないんだな」

ア《うちは甘やかさない方針なんです。それではコメ返しに行きましょうか》
フラグ王「ん、そうだな。――っていい加減フラグ王って辞めてくれないかな!?」

翡翠さん

直「確かに、普通はあそこで切りかかる場面だよな」
ア《それがあろうことか、敵の手を取り、あまつさえシグナムさんに殴られると言う》
ウ「うぅ……。ごめんなさい」
直「暗い過去を敵に付かれて負ける。ならまだ主人公っぽいけど」
ア《手を取るとか、ザコキャラのする事ですね》
直「敵に回って説得されて、間違いだと気づいたら、主人公を庇って死ぬ。ってヤツだろ?」
ア《直人さん。貴方は分かってます。サイコーです。と言うわけで相棒。私は翡翠さんの所へ行きます》
ウ「なんで!?お願いだから行かないでくれるかな!!」
ア《まぁ、考えときます》
直「……デバイスに主導権握られてる」

ＴＯＵＤＡさん

直「なのは達からは結局何もなかったんだな」
ア《この後ヴィータさんに文字通りボコボコにされてましたけどね》
ウ「自分が悪いとは言え、あれはやり過ぎだと思うんだ」
ア《まだそんな口を叩きますか。直人さん》
直「了解。通信繋げばいいんだな?」

ウ「あ、ちょ！ヤメテ！って言うか隆浩も忘れないって、俺死ぬ前提！？」
ア《死ぬとまで行かなくても、主人公降格くらいは思われてたんじゃないですか？》
直「だよなぁ。もうアテナで良いじゃん」
ウ「直人まで！？頼むよ、二対一じゃ勝てる気しねぇんだよ！」

Ｎａｋｉ

ウ「ヒイィィ！何コレ！？何コレ！？」
ア《セラフィムたちが送ってくれた企画書（笑い）ですね》
直「（笑い）って口に出して言った！？」
ウ「うぅ……。ラディ、ありがとう。養護してくれてるのはお前だけだよ……」
ア《もの好きも居たものです》
直「正直前回みたいな話がもう一本あったら完全に見捨てられるな。俺自身あるもん」
ア《私としてはそうなってくれた方が良いですけどねぇ。主人公期待ナンバーワンですから》
ウ「……チクショウ」

朧木さん

ウ「なんでもシグナム姉さんの演出は少し考えたらしいから、こう言ってもらえて嬉しいらしい」
ア《なに、目逸らしてるんですか。ちゃんと現実を直視してください》
直「尊敬ポイント？よく分からないけど、もうマイナス言ってるね、

コレは」
ウ「うぐ！？」
ア《今まで何があっても期待してくれていたのに……どうするんですか？》
ウ「いや、本当にごめんなさい。これからの俺を見てくださいとしか言い様がありません」
直「もう裏切るなよ」
ア《重に私を》
ウ「うん……って、アテナ！！このタイミングでそれは違うんじゃないかな！？」

ラモンさん
初コメ、ありがとうございます！

直「確かに、そのアングってヤツ、本当に敵のお手本と言うかなんと言うか」
ウ「王道？」
直「そうそうそれそれ。持ち出してくるモンもだけど、言動とかもうお決まりと言うか……」
ア《王道は外れが無いから王道ですから。どう見られてるか知りませんが、うちのはそれをどう上手く表現できるかって言うのに拘ってます》
直「へー。でもヘタレって言うのも王道？」
ア《いえ。確かに相棒もとある主人公の王道を元につくられてますが……》
ウ「せめて生まれたって言ってくれないかな！！？」
ア《まぁ、その辺も次回あたり分かるかと》
直「次回？」
ア《えぇ。実は今回の騒動は次回まで続きます》

ウ「うん。言うなら今回のは中篇なの」
直「大丈夫なのか？」
ウ「……多分」

ア《お疲れ様でした》
直「こう見ると基本ウィズのヘタレっぷりにガッカリした、って内容ばっかりだね」
ア《まぁ、実は計画通りだったりもします》
直「ん？そうなの？」
ウ「うん。まぁ、今回の話の感想とか、前回の話呼んで見限られてるのを除いてだけど」
ア《先ほども言いましたが今回の一件は次回まで続きますので。一回落として盛り上げようと言うことです》
直「へぇ。でもそんなのココで言っていいの？」
ア《……あ》
直「やっぱ駄目だったのか！？」
ア《あああ、相棒！どうしましょう！！？》
ウ「落ち着け、後でカットすれば何とでも……」
直「これ生放送」
ウ「どうすんだよーーー！！？」
ア《あ、あれです。今回で打ち切りにすれば！》
ウ「それは駄目！」
ア《ちっ》
ウ「確信犯！？」
ア《まぁ、あれです。直人さん、今回はありがとうございました》
直「何か適当に閉められた！？」

井上直人（いのうえ なおと）　出演作品：魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～

蒼天を愛した混沌～　他

剣や戦闘の腕前だけでなく、フラグを立てるもの超一流。
最近ではフラグを立てた子と付き合うと言うプロセスを飛ばし、三人と結婚した。
人生の勝ち組

25．涙しない夜（後書き）

最近後ろ髪を結っています、八神煌斗です。

上で言ったとおり、ウィズの株が大暴落して少し嬉しかったりします。

ただ、感想を見る限り効果有りすぎた様で少し怖かったりします。

もう少しだけ、お付き合いください。

さてさて、最近はメタギアの体験版をやってます。

もうＣＱＣだけで行ける様に成りました。

あとはＦａｔｅの発売延期を今日知りました。

何故だ……。

さてさて、次回の話は台詞の一言一句まで考えて製作しています。

もしかしたらアップするのが遅くなるかも。

でも二日後には絶対にアップしますので！

それでは！

26．これからの為に……

「悪いな、レイラ」
《構わん。マスターの愛がそれ程強いと言うことだろう》
「いやそれ違うから！　……いや、どうなんだろうな」
《知らん。が、好きにすればいい》
「――あぁ。そうする」

そして俺はレイラを机に置いたまま、部屋を出た。
昨日から全く口を聞いてくれなくなった相棒を持って。

「はぁっ！　――らあぁ！！」

まだ太陽が昇りきっていない時間、薄暗い空の下、俺はアテナを振っていた。
聞こえるのは風を切る音と、俺自身の鼓動のみ。

昨日は本当に情けなかった。
俺が間違っていたことに気づかせてもらった。

だから――。

「こんな早くから、何のようだ？」

俺はシグナム姉さんを呼んだ。

「俺に、一閃を教えてください」

頭を下げた。

こう言ったら安くなるかもしれないけど、ほぼ９０度まで腰を曲げている。

姉さんは何も言わない。でも、動く様子も無い。

俺も何も言わないで頭を下げ続けた。

――そして数分後、姉さんが口を開いた。

「……何故だ？　お前にはカラーズがあるだろう」

「あれじゃ、駄目なんだ。アング達には勝てない。俺は強くなりたい」

頭を上げて、姉さんの目を見てハッキリと答える。

「強くなりたい、か。月並みな答えだな」
「俺もそう思う」
「なら私もあえて聞く。何故強くなりたい？」

姉さんも俺の目を見て、もう一度問い返してくる。

嘘を付くつもりなんて全く無いけど、嘘を言わせない。そんな目だ。
昨日の……いや、昨日までの俺だったら目を逸らしてたと思う。

だけど、大丈夫。

「変わりたいんだ。もう……逃げたくない」
「今までの自分を否定するか」
「違う！」

その言葉に俺は今の時間を忘れて大声を出していた。

「今までの自分を、認めた上で変わりたいんだ。……今までの自分を否定したら、それはもう俺じゃない」

記憶を失ったあの日から今日まで、逃げたことも、弱いところも、全部含めて俺なんだ。

その過去の俺を否定したら、今までの俺を認めてくれてた人たちも否定することになる。

それだけは絶対にイヤだ。

弱い自分をもう否定しない。

今までの弱い部分が居て、過去の俺が居るから、今の俺なんだ。

「だから俺は、今までの自分を否定しないし、前だけを見ることもしない。ヘタレ？　上等だよ。過去を振り切れないことが、振り返る事がヘタレって言うなら、俺は一生ヘタレのままで良い――ぁ……」

口に出して初めて気づいた。

俺は強くなりたい訳じゃないんだ。

「ゴメン姉さん。強くなりたいって、やっぱ無し」

「なに？」

「俺は、成長したいんだ」

自分の気持ちに初めて、１８年間生きてきて初めて自分が分かった気がした。

全部、言いたいこと、自分の今まで気づかなかった本音を全て吐き出して、なんだかスッキリした。

「成長したい、か。随分大きな口を叩くようになったじゃないか。……決意は結構だが、それでもお前は道に迷わないと言い切れるのか？」

今までずっと黙って聞いていた姉さんが口を開いた。
その質問はきっと今の俺、そしてこれからの俺に対しての質問。
だけど俺は、答えになんて詰まらない。

「もう迷わない。なんて言わない。それでも必ず、待っていてくれる人が居る場所に帰ってくる」

なの姉にフェイ姉、はや姉にシグナム姉さん達。
分かってる。
皆が居る場所が俺の帰る場所なんだ。

「だから、俺は遠くに行ける！　今日が、その一歩なんだ！」

言った。
全部言った。

どうなるかなんて分からない。

情けないことばっか言ってんのも分かる。
過去を振り返り続ける。とか、道に迷わないなんていえません。とか。
でも全部本心。
だから、姉さんに見限られても、それでいい。
姉さんは腕を組んで目を閉じている。
その顔から感情を読み取ることは俺には出来ない。
と、思ったその矢先。
姉さんの口が緩んで、目を開いた。
「と、言うことらしいです。主はやて」
「……へ？」
そして微笑みながら言ってくれた一言がそれ。
え、なに？　主はやて？
何ではや姉の名前が出てくんの？
頭が追いつかない。
状況を理解しようとしている時、シグナム姉さんの横にモニターが開いた。

そこに映ってるのは……はや姉。
モニター越しだったけど、目が合った瞬間、俺の混乱は消えていった。

「こんな早くに態々呼び出したのだ。昨日の事に関係あることだと思ってな。音声通信を繋いでおいた」

あー……なんだろ、これ。
すっごいデジャブ。

こんなこと思ってるのもデジャブだし……。

『ウィズ』

なんか違う意味で頭が痛くなって頭を抱えているとはや姉から声がかけられた。

俺は改めてはや姉を見る。

『今何時やと思ってるんや？』
「え？　あーっと……ごめんなさい」

少し不機嫌そうなはや姉の声に、咄嗟に謝ってしまう。

まぁ、ＦＷの訓練が始まるまで一時間程有るし、そう言われると少し辛いです。

ヘタレ？

いいの。俺はヘタレで行くって決めたから。

『まぁ、ええわ。……ちゃんと答え、見つけたんやな？』

そして今度はとても穏やかな、俺の好きな表情のはや姉。

「……うん。これだけは、この気持ちだけは……間違いじゃない。俺の、俺だけの心の底からの本心」

『小難しい言い方せんでええわ』

「うぇ？」

そんな言い方しなくても……。

そりゃ少しは考えて発言したけどさ、いいじゃない。

こんな時くらい。

『ウィズのここにある気持ちを、そのまま言葉にして』

そういいながらはや姉の右手は、胸元へと添えられる。

……だから俺も、右手を胸に添えて、ありのままに答える。

「俺はきっと、これからも逃げるし迷うと思う」

――さっき吐き出した、俺の気持ち。

「でも、どれだけ時間が経っても必ず帰ってくる」

――嘘偽りない、気づいた気持ち。

「はや姉が、皆が居る場所が、俺の居場所だから」

――もう二度と忘れない。俺の進む力になる気持ち。

俺の言葉を聞いて、はや姉は……笑ってくれた。

『合格、って言うのはちょっとちゃうね。でも……安心したよ』

はや姉の目が潤んで来ている気がする。

『ほんならシグナム。後は任せるわ』

「はい。主はやて」

その言葉を最後に通信が切れ、モニターが閉じた。

最後の言葉、少し震えてた気がする。

本当に心配かけちゃったな。

「ウィズ」

少し自己嫌悪してると、シグナム姉さんから声が掛かった。

姉さんを見る。

――甲冑を着ていた。

「私に教えを請うと言う意味、分かっているな」

「当たり前だろ。俺は姉さんの一番弟子だよ？」

姉さんは教える人間じゃない。

そんなの、周知の事実だ。

ならどうする。

「私は言葉を簡単に信じる気は無い」
「うん。知ってる」

つまり、さっきまでの俺の決意を姉さんは鵜呑みにしてないって事。

でもそれも分かってる。
コレでも１０年、姉さんの弟をやってるんだ。

ならどう信じてもらう。

二つの問いの答えは同じ。
簡単だ。

レヴァンティンの剣先が俺に向けられる。

「だから、行動で示せ。そして――」
「一閃を学びたければ、勝手に盗め。だよな？」

姉さんの言葉を遮って俺が答えると、静かに笑った。
口で言われなくても分かる。

わかってるじゃないか。

「準備はいいよな？」
《遅いんですよ。私は待ちくたびれました》
「悪かったな。もう絶対に待たせねぇよ」
《その言葉、信じて良いんですよね？》
「当たり前だ。俺は出来ない約束はしねぇ」
《そうでしたね》

あぁ。
絶対に立ち止まらない。

俺とお前は最高のパートナーだ。
二人で一緒に、歩いて行こう！

「アテナ！　行くぞ！」
《はい！》

ウィズの小部屋

ア《……》
ウ「……」
ア《……最終回？》
ウ「ちがあぁぁぁぁう！！」
ア《いやでもこの終わり方は……ねぇ？》
隆「どう見ても最終回、打ち切りの類だな。だから終われ」

ウ「だから!?何始めから居ました、見たいな雰囲気出して酷いこと言ってんの!?」
隆「うるさいな。でも流石のおいらも驚いてトラップしかけるの忘れてたし」
ウ「トラップ!?そんなの駄目に決まってんだろ!」
ア《私が許可しました》
ウ「アテナアァァァ!!」

ナイトホークさん

隆「よかったな。どう見てもはやてとかにプラスされそうなのにウィズっちにだってよ」
ア《むむむ……ツンデレで相棒の気を引くつもりでしょうか?ライバルですかね?》
ウ「いや、どう見ても違うだろ。ってかライバルって何だよ」
ア《勿論攻略ヒロインとしてですよ。まさか少し靡いてます?》
隆「うわ~……。作中ならともかく他の作者に心引かれたの?引くわ~……」
ア《あ、隆浩さん。座布団一枚です》
隆「ありがとー」
ウ「なにやってんの!?」

Ｎａｋｉさん

ア《確かに姉弟愛と言う面では私は勝てる気がしませんねぇ》
隆「って言うかそもそもこれ恋愛対象に入ってんの?入ってないでしょ?入ってないだろ?」
ウ「え?隆浩?どうしたのかな?目が怖いよ?」

ア《それは仕方ないかと。だって隆浩さんは――ムグ！？》
隆「はい黙ってよーな。じゃないとこのまま握りつぶす」
ウ「その笑顔が逆に怖いから！なっ！アテナ離してあげて！！」
隆「ちっ」
ア《ふぅ……。とりあえずセラフィムさんたちは次回来訪予定ですので色々纏めておきませんと……》
ウ「あ、そうなの？ようやく苦労を分かち合える友と会えるのか……」
隆「ウィズっちが遠い目を……」

ＴＯＵＤＡさん

隆「そうだよ。コレがやりたかった」
ウ「こんなこと使用としてたの！？ってかアテナ！お前これ許可したの！？」
ア《はい！当然です！！》
ウ「何が当然なのかな！？元気良く返事しても流さないよ！？」
隆「まぁ、正直自分にコメ返しなんてしたくないから次！」
ウ「適当！？」
ア《そういえば晶彦さんはどうしました？》
隆「熱出して寝込んでる」
ウ「あー。お大事に」

灰色の野良猫さん

ア《ソラさんは逞しいですねぇ。その自信が素晴らしいです》
隆「おいらもそれくらいは出来るけどな。何なら辺り一面焦土化させる自信もある！」

ウ「いや、確かに凄いけど、胸張れないからな、それ」
隆「なにおぅ？出来るものは出来るんだから仕方ないだろう！！」
ウ「逆切れ！？いや、そんな要素あった！？」
ア《それにしてもこの方の書き方だと私がＳみたいな言い方ですね……》
ウ「いや、現にそうじゃん」
ア《まぁ、好きな子を苛めたくなるという意味では……》
隆「あれって小学校低学年男子によくあるんだよな～」
ア《！！？》

翡翠さん

ア《泣いた、まで言われてますよ。相棒の情けなさに》
ウ「いや違うだろ！？文脈の流れ的にそれは違う！！」
隆「ウィズっち。自分で自分を養護するほど痛いものはないぞ？」
ウ「え？隆浩まで！？いや、そうだよな。お前はそういうやつだよな……」
ア《なに落ち込んでるんですか？本当に向こう行きますよ？》
ウ「ごめんなさい！！」
ア《それにしても、今回も最後の少しだけしか出番がありませんでしたね……》
ウ「あ、それならさっき手紙が来てたぞ？」
ア《マジですか！？おそらくあの件ですね！！》

秋風さん

ア《お疲れ様でした、直人さん。私も楽しませていただきました》
ウ「うん。お疲れ。……それにしてもオンラインなぁ。いいよなぁ」

ア《まぁ、3が無いので出来ませんけどね》
ウ「うん……。パソコン買ったら残り二万弱になったの」
隆「少ないな。ヘタレで貧乏なのか。救いようが無いな」
ウ「ごふっ！？」

シルフさん

ウ「えっと……どゆこと？」
ア《つまり【僕が考えてたネタと被っって、ショック受けてます。慰謝料ください】と言う意味かと》
ウ「マジで！？いやそんな事言われても俺どうしたらいいの！？」
隆「とりあえず謝れ」
ウ「とりあえずで行き成り謝罪！！？」
ア《ならとりあえず土下座とかですか？》
ウ「もっと重くなってるから！！？」
ア《まぁ実際、コレだけ小説があるんですから逐一ネタが被ったからって気にしてもしょうがないかと》
ウ「会話の内容がまんまだったら問題あるけどな」
ア《だから気にする必要はないと思います》

サボテンさん

ウ「主人公だから俺！主人公！！」
ア《らしく見えない主人公ですけどね》
隆「ヘタレだもんなぁ。今回は本文でも認めちゃったし」
ウ「う、うぅ……。チクショウ……。一回でいいから俺が一番って言ってくれる人……」
隆「居ないな」

ア《居ませんね》
ウ「ハモられた!?」

ア《とりあえず相棒は一枚皮を破りましたね》
ウ「うん。長かった……」
隆「そのクセ、ヘタレ宣言してるけど?」
ウ「もう良いんじゃないかな!?後になって言われるとスッゴク恥ずかしいの!!」
隆「わざわざ言われんでも分かってる!!」
ウ「いばるなぁぁ!!」
ア《あ、隆浩さん。晶彦さんからメールですよ。シャマルさんが料理を作り出しそうらしいです》
隆「なに!?それはまずい!!おいらは帰る!じゃぁな!!」
ウ「……嵐みてぇなやつ」
ア《いえ、あれは嵐そのものでしょう》

ゲスト情報

阿部隆浩（あべたかひろ）　出演作品：なのはＳＳ・ｆｒｅｅｄｏｍ
少し背が物足りない陰陽術師。本人はか弱い子羊と言っているが実際は子狐になった人。
連載当初からチート、チートと言われ続けている。
最近ではさらみ磨きが掛かったキングオブチート。

26．これからの為に……（後書き）

ついったー、始めました。八神煌斗です。

本来はココで補足はしたくないのですが、あえてさせていただきます。

私は連載前の主人公像として《相応の男の子》を掲げていました。
【相応】と言うのは、強さと精神年齢のことです。

強すぎると、最終的にごり押しになるのが怖かったからです。
最強にすると敵に苦戦するのがおかしくなりますし、原作キャラの居場所がなくなってしまいます。

そしてコッチが重要。精神年齢。
なのはは基本的に高すぎると思います。ですのであえて年相応にしました。
感情論で動いたり、うたれ弱かったり。
まぁ、ソレを前に出しすぎるとただの暗い話になりそうだったので【ヘタレ】にしました。
まぁ、少しヘタレが先行しすぎた気もしますが……。

とりあえず、今回の話でウィズを色々な意味でスタート地点に経たせることが出来ました。
上手く纏められませんが、これがウィズに求めていたものです。
ここまで書けたのもこれも皆様のおかげです。

あ、最終回じゃ有りませんからね！！

P．S．

ついったー始めました。

よければ絡んでやってください。

それでは！

……今回の話、蛇足になっていなかったらいいのですけど……。

27．アナザーフレーム【前編】

「それじゃぁ、アテナを借りていくですよ？」
「おー」
《行って来ます相棒。寂しいからって泣かないでくださいね？》
「誰が泣くか」

夜、アテナはリィンが持って行った。
最近はずっとこうだ。

何故マスターの俺に理由を言わないのか分からないが、ほぼ毎日暇があればシャーリーさんの所に行ってる。
いや、暇が無くても行くんだが……。
そして今日も仕事は終わって寝るだけ、ってなった時にアレだ。

普通なら俺とレイラを二人きりになるだけで大騒ぎするくせに。
一度気になって聞いてみたんだがのらりくらりを流されてしまった。

「レイラはなにか聞いてんのか？」
《さぁな》
「……」

寝よ。

昨日アテナは帰ってこなかった。
いつもリィンが持って来てくれてるけど、偶には迎えに行ってやろうと思い、俺は廊下を歩いてる。

因みにレイラは部屋。
なんか誰かと念話してたみたいだけど……誰とだ？

「あ、おはようございます相棒」
「はい、おはよー……ん？」

今俺を横切ったのってリィンだよな？
チッサかったし、浮いてたし。

でも相棒って言ってた気が……。

振り向くとそこに居るのはリィンサイズの小人。

「酷いです」

両手を腰に当て、怒ったような素振りを見せてる。

「あ！　こんな所にいたですか？」
「リィンさん。さっき完成した飛行ユニットの調整目的です」
「本体と繋ぐコードも取れたみたいですね？　感度はどうです？」
「あぁ。接続コードはこのベルトなんですよ。感度については良好です。ラグも最大０．１を切ってますし」

あー……。
誰と何の話をしているのかな、リィンは。

「リィン、誰？　誰かのユニゾンデバイス？」
「そういえばウィズには内緒にしてたですね。アテナですよ！」
「そうですよ。というか相棒は姿かたちが変わると分かってくれないんですか……」
「は、はあぁぁぁぁぁ！！？」

「つまり、ふざけて話した内容が回りまわっていつの間にか実現してたと」
「そうなりますね。アウトフレームならぬ、アナザーフレームというところですね」
「色々大変だったですよ」

その後、俺とアテナは談話室へ移動。
俺は椅子に座り、二人はテーブルの上に座っている。

リィンはまだ仕事が残ってるとかでそのまま分かれた

「にしても、おふざけでこんなもん完成させるのか、六課開発陣は……」

「あ、今回関わったのはシャーリーさんとユリアさんだけですね。因みにお二人とも飛行ユニットを徹夜で完成させた後、死んだようにその場で眠りました」

何やってんだ、あの二人……特にシャーリーさん。
そういうキャラじゃないでしょうに。

「それで相棒、どうですか、今の私は」

「ん？　あぁ……」

俺の目の前まで浮かび上がるアテナ。

俺よりも若干青い膝下まである長い髪。
薄い藍色ノースリーブの服に黒のスカートにニーソックス。
そしてまだ未完成なのが伺える左胸部分や耳の部分など細かい部分に外付けパーツらしきものもある。
手足の先に緑と赤の光輪が有るけど、これがさっき言ってた飛行ユニットだろ。
腰の辺りにベルトが巻いてあって、一緒に指輪のアテナが結ばれてる。

「どうって……リィンに少し似てる？」
「まぁ、少なからずリィンさんを元にしてますし……ってそういう意味じゃないですよ！！」
「へぶしっ！？」

アテナが俺の顎に思いっきり蹴りをかましてくれやがった。

「で、どうですか？」
「スゴクカワイイデスヨ」
「本当ですか？　ありがとうございます！」

半ば言わされた感があるが、アテナはそんなこと気にしてないようで笑顔で俺の周りを飛び回る。
と、一通り回り終えた後俺の肩の上に座った。

「相棒。ご飯にしましょう。私はお腹が空きました」
「お前飯食えんの？」
「言ったでしょう、リィンさんを元にしていると。さすがにユニゾンやアウトフレーム機能はありませんが、生活面ではほとんど変わりません」
「無駄な機能……へぶっ！？」
「いいから食べましょう」

頬にパンチをくれたアテナは素敵な笑顔です。

コイツ、手足が出来たからって暴力的になりすぎじゃないか？
結局その後、俺は適当に飯を買った。
え？　アテナはさっきのテーブルに座ったまんまでしたよ？

「相棒、から揚げ貰います」
「ちょ！　それ俺が取っといたヤツ！」
「早い者勝ちです。相棒はバランでも食べてなさい」
「食べられないから！　バラン食べられないから！！」

まぁ、始終こんな感じで飯は終了した。

「それで相棒。どうですか？私を攻略したくなりましたか？」
「……はい？」
「私の方は大丈夫ですよ！フラグは十分過ぎるほど立っていますし、何より体を手に入れました！」
「おい。ちょっとまて～」

何自然な流れでヤバい発言してるんですか！？
この小説は全年齢対象だからね！？

「さぁ、相棒！　今こそ私たちで甘ったるい絶対的不可侵領域を

作り出しましょう！！」

いや、そんな拳を作りながら力説されても……。
なんか背後に炎が見えるよ。ほら煙も……。ん、煙？

「アテナ、煙……出てないか？」
「はい？　……は！？　興奮しすぎました！！　相棒！　氷、氷を！！」
「はぁ！？　お前どんだけ興奮してんだよ！！？　おばちゃーん、氷頂戴！　ありったけ　！！」

「た、助かりました相棒。ありがとうございます……」
「別にいいけどよ。発熱許容量こえるってどんだけよ？」
「１０年越しの思いがかなうんです。仕方ないですよ」
「……どんだけ～」

今のアテナは氷の入った袋に背中を預けて、またまた氷袋を抱いている。
どれだけ興奮したんだよ、本当に。

「で、相棒」
「ん～？」
「私のルートに入るつもりはないんですか？」

「ない」
「言い切られた！！？」

いや、なんだよルートって。
そんな現実と創作物を一緒にすんなよな。

「相棒、その台詞は私たちにとって禁句です」
「ん？　まぁ、それは置いといて、そもそもお前どっからそんな知識手に入れてくんだよ？

俺も男だ。
ルートとかって言葉を使うゲームもしたこと無いことは無い。
だけど一日もやってないんだぞ？

せっかく勇気だしてダチから借りたのに、ゲーム機に入れっぱなしなの忘れてて、次の日姉さん達に問い詰められた。
弁償代で財布が空っぽになったのはいい思い出。

「その辺はほら。私の交友関係をフルに活用して……」
「お前の交友関係どうなってんの！！？」

いや、冗談抜きマジで。
そもそも俺が知らない友達が居ることが驚きだよ！？
浮遊機能なんか無かったよな！？

「女には秘密の一つや二つや三つ、あるものなんですよ」
「……うん。まぁ、お前が普通じゃないって事は重々承知してるつもりだよ」

もう諦めよう。
アテナはアテナ。それでいいじゃないか。
もう考えるのにも疲れたし。

「それで相棒。一つ頼みがあるのですが」
「頼み？」

改まって、なんじゃい？

「今日一日お暇を貰いたいんですよ。せっかく体を手に入れたので」
「あぁ、そういうことな。良いんじゃないか？　一日くらい休んでも」
「本当ですか相棒!?　大好きです!!」

歓喜の声を上げつつ、俺の顔に抱きついてくるアテナ。
コイツ、体あったらこんなに行動に出るタイプなのな。

「なら相棒。相棒も今日はお休みと言う事でいいですよね」
「あぁ、いいんじゃ……なに？」

聞こえなかったから、って意味じゃないのよ。
意味が分からないから聞き返してんの。

「だって私と相棒はニコイチじゃないですか。私が休みなら相棒も休みと言う事ですよ」
「何その勝手な理屈!?」

そもそもニコイチって何だよ!?

「二人で一つ、と言う意味ですが？」
「そういう意味じゃねぇぇ!!　意味は分かってるから！　分かってるからそんな目で見ないで！」
「本当に分かってるんでしょうね？」
「分かってるよ!!」

コイツ、表情が付いたから俺をバカにしてることが完全に丸分かりだぞ、この野郎。

「とにかく、相棒には私と共に休んで貰うんです。何のためにレイラを説得したと思ってるんですか」
「あの念話の相手お前か!?」

「当たり前でしょう！　さぁ、休みなさい！例えお仕置きが待っていようとも！！」
「できるかあぁぁ！！」

まぁこの先もこんな言い合いを暫くした。
結局、レイラを部屋に放置した上で俺にべったりくっついている、と言う条件で折れてもらった。

「それで、今日はこんな感じに……」
「何をやってんだ、あのバカどもは……」
「私は感謝感激ですけどね」

頭を抱えているヴィータ姉さんにアテナが答える。

「それでヴィータさん、一つお聞きしたいんですが……よろしいですか？」
「なんだよ？」

さっきまでの浮かれた雰囲気はどこに言ったのか、と言うくらい、思い口調になったアテナ。
姉さんも目が真剣になった。

一体なんだよ？

そう思った瞬間、アテナが俺の顔……頬に抱きついた。

「今の私達、絶対的不可侵領域創れていますか？　主に甘ったるい、ラブラブと言う意味で」

「真面目な顔して何バカな事言ってんだ！？」

「バカな事！？　ヴィータさん、それはどういう意味ですか！？」

俺から離れ、姉さんの目の前まで移動するアテナ。

「そのままの意味だよ！　お前は何を考えてるんだ！？」

「相棒との愛の成就です！！」

スッゴク楽だ。

俺の役割を変わってもらえただけで、こんなに負担が減るもんなんだな。

でもなぁ……。何故だろう、少し物足りない。

まさかコレが……恋！？

いや、無いな。

マジでない。

「ウィズ。ここにいたか？」

「ん？　あぁ、シグナム姉さん。ゴメンね」

時間を見ると俺の訓練まであと少しだった。
いつもコレくらい時間だったらアップしてるから探しに来てくれたんだろ。

「別にまだ時間には成ってないから構わんが……」

視線を横にずらして未だに言い争っている二人を見る。
まぁそうだよな。

「あのヴィータと言い争っているのは、誰かのユニゾンデバイスか？」
「ちがうちがう。アテナだよ」
「ふむ。そうかアテナか……なに？」

首を傾げてるシグナム姉さんを置いて俺は二人に近づいて、アテナの首元を掴む。

「そもそもヴィータさんはですね――っておぉ！？」

掴んだアテナをそのまま俺の肩に乗せる。

「いい加減にしろって。姉さんも。俺そろそろ訓練の時間だから――」
「ん？　あぁ、ウィズ悪い。もう少し待ってくれ」
「まだ続けるの！？」

ヴィータ姉さん、目が据わってるよ！？
いや、何でその目で俺を見るのかな！？　アテナだよね？　アテナと喧嘩してたんだよね！？

「そ、それでアテナ。お前ちゃんとテクニカルとかになれるのかよ？」

とにかく目を逸らしたかったのでアテナに話を振る。
いや、この空気を変えるには睨み合ってるどっちかに話しかけるしか無いじゃんか。
ヴィータ姉さんに話しかけるとか本当に無理です。

「一応コード無しでも稼動出来るので出来ますが、これ（アナザー）稼働中は補助が一切出来なくなります」
「そっちに回路を回してるからか？」
「はい。後はシルエットの変更も口頭で伝えてもらえれば……」
「……そのフレーム必要か？」
「当たり前です！！」

だよな。
お前だったらそう答えるよな。

ま、今シグナム姉さんと訓練してるのは魔法に頼りきらないってのが前提でもあるから特に困るって事はないけどな。

「ならどうするよ？　俺は今からシグナム姉さんと訓練だけど」
「相棒の勇士を外から見ると言うのもゾクゾクしますが――……」
「ゾクゾク言うな」
「折角の休暇です。私は六課の中をブラブラさせて貰いますよ」
「ん、了解」

そしてアテナは俺の肩から浮かび上がり、隊舎の方へ戻っていった。
さて、俺も頑張りますか。

ウィズの小部屋

ア《と言うわけで今回は私、アナザーフレームで登場です》
ウ「カッコが同じだと分かりにくいだろうと言うから、それはいつも通りな。確かアイディア提供して貰ったんだよな？」
ア「はい。私の可愛い後輩ですね。この方です！」
？1《ダダッダッダダ――弾！！》
ウ「ギャーーー！！？」

？2「ウィズーー！」
？1《全段命中。目標沈黙しました》
ア《グッジョブです。と言うわけで御紹介します。セラフィムさん（ＴＮ．Ｖｅｒ）と付き人のラディさんです》
セ《ようやく、ようやく会えました……！》
ラ「ちょっと待て！俺の方が付き人！？」
ア・セ《そうでしょう？》
ラ「既に息ぴったり！？初対面だよな！？」
ウ「諦めろラディ。こういうタイプは深く考えるだけ疲れる」
ラ「なんか言葉に重みがあるな……」
ア《進行形苦労人ですからねぇ》
ウ「お前が原因だからな！？」

ナイトホークさん

ウ「流石に一日でヘタレ卒業は、ね……」
ア《基本相棒はヘタレと書いてウィズと読む。これからもこの位の感じで読んでください》
セ《それよりアテナさん。ウィズがカッコいいとか書いていますが良いのですか？》
ラ「行き成り呼び捨て！？良いじゃん、カッコ良かったぜ！」
ウ「ありがとう。本当にありがとう……」
ア《ヘタレ通し手を組みました》
セ《別の意味で眩しいです》
ウ・ラ「うるさいよ！！？」

秋風さん

ア《敵はデカくても俺は超える！くらい言えないのですか？》
ウ「無理。俺一人でどれだけ頑張っても無理」
セ《ここでもヘタレなんですね。折角読者様の評価が毛ほどとは言え上がっていますのに》
ラ「いやいや。少し言いすぎだろ！」
セ《大丈夫です。コレは遠まわしに貴方にも言っていますので》
ラ「……え？」
ウ「時間が経つ事にラディとの距離が急速に近くなってる気がする」
ア《奇遇ですね。私もセラフィムさんと同じ感覚が》
ウ「あ、ちなみに俺たちが言ってた３はＰＳ３の方な。ＭＧＳ３はちゃんとやってるよ」
ア《まぁ、オンラインソフトは少し興味がありますね……》

灰色の野良猫さん

ウ「盗めると良いんだけどなぁ……」
セ《無理でしょう。アナタでは》
ウ「他人のデバイスに言われた！！？」
ア《む……。私の台詞を先読みするとは……》
セ《フフフ。どうでしょう？というよりアテナさん。恥ずかしがりやなんですか？》
ウ「あ、それは無い。ってかコイツに無縁の言葉だし」
ア《相棒！それは行き過ぎた表現だと主張します！！》
ウ「……」
ア《何ですか、その目！？》
ラ「……あれ？俺喋ってない？」

ＴＯＵＤＡさん

ウ「まぁ、毎回毎回暴れてるイメージはあるよなぁ」
ア《現に以前ココに来たときは部屋を半壊させられましたし……あ》
ラ「お、おい。どうした？ウィズがブツブツ言い始めたけど……」
ア《トラウマ、というヤツですよ。まぁ、あの時は本当に酷かったですからねぇ》
セ《それよりちゃんと成長できるんですかね？》
ア《まぁ……一応は信じていますので……》
ラ「ツンデレ？」

ディムRPさん

ウ「初めての人からのこういうコメントは本当に嬉しいな」
ア《はい。私もまだまだ捨てたものではないな、と》
ウ「あれ？そこは私たち、だろ！？」
ラ《何を言ってるんですか？並ぶなんておこがましい》
ウ「また酷いこと言われた！？ラディ！」
ラ「いや。俺は巻き込まれたくないから」
ウ「見捨てられた！！？」

サボテンさん

ウ「……え～と……」
ア《相棒、見損ないました》
ウ「お前まで！？何でそんな事言うのかな！？」
ア《ノリです》
セ《ノリは大事なんですよ》
ラ「……まぁ、皆一番なんだし良いじゃないか、うん」

ウ「チクショウ。ガンバレの一言は嬉しいけど……納得いかねぇ」

Ｎａｋｉさん

セ《そういえば忘れていました。――よいしょっと》
ウ「……何かな、それ？」
セ《歯医者さんセットです。ちなみにヤれます》
ウ「え、ちょ。ヤれるって所が凄く怖かったんだけど……いや、大丈夫。俺虫歯無いから！」
ア《右上五番》
セ《了解しました～。行きます！！》
ウ「ぎ――ギャアアァァァ！！」
ラ「本当にやりやがった……。って、相棒を見捨てていいのかよ？」
ア《何を言うんですか。コレも相棒と私の暇つぶしの為です》
ラ「ぶっちゃけちゃった！？」

シルフさん

ウ「いや、あの。そんなつもりでいったんでは無くてな……」
ア《私が主人公！いいですね。最高です》
ラ「言葉遮っちゃった！？」
セ《関係有りません。アテナさんの言葉のほうが何倍も重要です》
ラ「それも違うと思うぞ！？」
ア《いいえ。セラフィムさんは正しいです。流石です》
セ《いえいえ。そんなこと……》
ウ「なぁんか。俺より分かり合ってね？」
ラ「俺もそう思う」

ラモンさん

ア《この小説は主人公補正とギャグ補正、王道の三つで出来ています》

ウ「……その通りでございます」

ラ「ウィズ、もっと喜べよ！＋１００だぜ！？」

セ《あぁ、それは無理でしょう》

ラ「なんでだよ？」

ア《相棒は元々褒められなれていないので逆に目を逸らしてしまっています》

ラ「うわぁ。ヘタレだ……」

ア《ふぅ。セラフィムさん。今日は楽しかったですよ》

セ《私もです。アテナさん。有意義な時間が過ごせました》

ウ「なんかスッゲー仲良くなってんな？」

ア《当たり前です。私たちは既に作品の枠を飛び越えた友情を育みました》

セ《これで私も色々な知識が増えましたので……フフッ》

ラ「こわっ！？ちょっとやめてくれるかな！？」

ウ「まぁ、無理だろ。諦めたほうがコレから楽。覚えとき」

ラ「……おう」

ゲスト情報

ラディオン・メイフィルス　出演作品：魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～償いの槍～

主人公！何だけれどもデバイスに振り回され気味な人。どこかの誰

かに似てる。
が、ヘタレと言う訳ではなく、むしろ強い部類。
極度の甘党。リンディ茶が飲める。

セラフィム　出演作品：魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ
～償いの槍～
ラディのデバイス。現在のところハルバート状に変形できることが
目撃されている。
普段ラディラディより立場が上に見えてしまう時もしばしば……。
ラディの理解者。

27．アナザーフレーム【前編】（後書き）

１ｓｔの文字数を超えました。八神煌斗です。

まさか、ココまで書くことになるなんて……これも皆さんのおかげです。

ありがとうございます。

あとは、前回の話、皆さんも最終回とおもってしまっとようで……。

実は終わり方、あの後ウィズとアテナが同時にセットアップを叫ぶ、という終わり方でした。

が、流石にこれは……と思ったんですが。関係なかったようです（＾＾；）

あ、あと一応アナザーのイラストも描いております。

次回貼ろうかと思っているんですが、どうでしょうか？

それでわ！

28．アナザーフレーム【後編】（前書き）

今回は最下部にイラストが張って有ります。
イメージを崩されたくない方は予め挿絵表示をオフしにてご覧ください。

28．アナザーフレーム【後編】

アテナｓｉｄｅ――――――――――――――――

そういう訳でテンションに任せて相棒と別れたは良いのですが……。

「どうしましょう」

今までも休みというものは貰ってきていましたが、一人でって事は無かったですし。

そもそもこう……今までとは違う意味で自由ですからねぇ。

何をして良いのか分かりません。

現に今も廊下を適当に飛び回ってるだけですし……。

「ん？」

なにやら視線を感じます。

これは……後ろ？

「ヴィヴィオさんではありませんか。どうしました？」

後ろにはヴィヴィオさんが居ました。
凄く不思議なモノを見る目で首を傾げてますが……。

まぁ、初対面ですしね。

「アテナ？」
「おや、私がわかるので？」
「だってその話し方、アテナだもん」

あぁ、成る程。
確かに私の様な話し方をする人は居ませんし、大方予想は付きますよね。

というより、相棒は何故気づかなかったんでしょう……。
やはり私の愛が足りないんでしょうか。

コレでも結構尽くしてると思うんですけどねぇ。
相棒ルート突入はまだまだ通そうです。

……攻略本でも売ってないのでしょうか？
大きな所なら売っていそうな気も……。

「どうしたの？」
「え？　あ、スミマセン。少し考え事を。ヴィヴィオさんこそ一

人でどうしましたか？」
「皆忙しそうだから遊んでたの」
「ザフィーラさんは？」
「知らない」

何があったんですかザフィーラさん。
喧嘩の類では無いことはヴィヴィオさんの表情と口調を見れば分かりますが……。
バッサリ切られましたよ？

「それなら私と遊びますか？　偶然今日は相棒からお休みを頂いてますし」
「ほんとう！？」
「えぇ。何なら私が大人の恋愛事情でもお教えしますよ？」
「れんあいじじょう？」
「はい。それはもうお昼から夜の付き合い方まで――」
「何を教えるつもりだーー！！」
「はい？」

コレは相棒の声ではありませんね。もちろんヴィヴィオさんの声ではありません。
と考えていたら私の前にその人物は現れました。

「お前は、こんな小さい子に何教えようとしてるんだよ！？」

えーと……あぁ、そうですそうです。たしかアギトさんでしたか。
顔を真っ赤にしています。純情ですねぇ。

「何って文字通り大人の恋愛事情ですが……何か？」
「何か？　じゃねぇよ！　そんなのまだ早ぇよ！　まだガキだぞ！！」
「女は子供扱いさせる事が一番の屈辱ですよ！！」
「しるかぁーー！！」

なんだかノリが相棒に似てますねぇ。
こういう方は意外と口車に乗りやすかったり、弄ったりすると面白いんですよ。

「アギトさん、何を想像してるのか知りませんが私は食事やその他諸々を教えようとしただけですよ」
「なぁ？！」

嘘ですけど。

顔ってこんなに赤くなるものなんですねぇ。
先日のフェイトさんも中々でしたが、コッチも負けていません。

「ベベベ、別にそれくらい分かってたさ！　アア、アタシはただ、アレだ。ノリだ！」
「……」

「何だよその目は！？」
「別に何でもありませんよ」

もしかして相棒よりも耐性無いんじゃないでしょうか。
まぁ、面白そうなので良いですけど。

「なんならアギトさんにも教えてあげましょうか？　大人の付き合い方」
「はぁ！？　アタシは別にそんなモン教えていらねぇよ」

空中で胡坐を組み私に背を向けるアギトさん。

「ですが、アナタにも意中の相手は居るのでしょう？」
「……居ねぇ！」
「居なくても将来役に立つかも知れませんよ？　その辺私は相棒をもう直ぐ攻略ですからね。色々テクニックもあります」
「……本当？」
「本当」

とりあえず今出来る最高の笑顔で返事をしておきました。

で、私たちは今談話室に来ています。

ヴィヴィオさんが椅子に座り、アギトさんがテーブルの上。
私はお二人を向かい合うようにテーブルの上に立っています。

「第一条、相手に主導権を握らすべからず！！」
「……」
「どうしました？　復唱してください。リピートアフターミーですよ」
「復唱すんのかよ！？」
「だいいちじょう――」
「ヴィヴィオもしなくていいって！！」

声に出したほうが覚えやすいですのに……。
まぁ、良いでしょう。時間を無駄にするのは好きではないですしね。

「コレは基本中の基本です。絶対に覚えて置いてください」
「何でだよ。女は男の三歩下がって歩くんじゃねぇのかよ？」
「……アナタはどこの大和撫子を目指してるんですか？」

そもそもミッドにそういう知識があることが驚きですけれど。
もしかしてアギトさんは尽くすタイプでしょうか？

早急に手を打たなければ！！

「アギトさん、いけません！！」

私は近づいてアギトさんの両肩を掴みます。

「うぁ！？　な、なにがだよ！！？」

「アギトさん程ツンデレの素質を持っている人を、私はティアナさん以外知りません！！」

「他に居るのかよ！？」

まぁ、ティアナさんは六課で唯一のツンデレ素質持ちですし。

アリサさん？　あの人は正真正銘本物ですから、素質以前の話です。

「ツリ目、ツインテール、素直になれないその口調！　完璧です！」

「ちょ！　落ち着け！！」

「アナタはアナタのままで居てくれたらいいんです！！」

「良い言葉なのにスゲームカつくんだけど！！」

「ねーヴィヴィオは？」

「ヴィヴィオさんもそのままで居て下さい。……その純粋な目が少し痛いのは何故でしょう？」

なんと言いましょうか、私の良心に訴えかけるというか突き刺さるというか……。

なんだかムズムズするのです。

ま、これは置いておきましょう。
きっとシステムの不具合でしょうし、後で見て貰う事にします。

「とにかく、今の時代は男は大人の女に惹かれるのですよ」

とまぁ、こんな具合で私の恋愛講義は問題なく進んでいきました。

「こんな感じでしょうか。今私が言ったことを全てマスターすれば完璧です」
「本当かよ」
「はい。現に相棒は私にメロメロで――アイタッ」

最後まで言い切る前に頭を小突かれました。
アギトさんとヴィヴィオさんでは有りません。だって目の前に居ますし。

「誰がお前にメロメロだって？」
「相棒！？」
「せめて顔を確認してから呼べよ」

何を言いますか。
私くらいになれば臭いで相棒を認識できます。

「それ凄く変態くさい」
「実は私も言ってから少し思いました」

まぁ、臭いは流石に言いすぎでしたか。
気配とか、その辺が無難でしたね。相棒はともかく私は変態キャラなんて狙ってませんし。

――っと。

「そういえば相棒。どうしました？」
「ん？　訓練が終わったから迎えに来たんだよ」

言われてみれば肩にタオルをかけてますし、髪も少し濡れていますね。
お風呂上りですか。

「なぜ私を呼ばなかったんですか？　もう背中を流してあげることも出来るんですよ？」
「無理」
「否定された！？」
「で、お前はココで何やってなんだよ。ヴィヴィオとアギトまで連れて」

私ではなく、お二人を見ながら質問してくる相棒。

「私の今までの経験をふんだんに持ち込んだ恋愛術をご教授していました」

「今までの経験？」

「今までの」

何ですか、その目は。

既に相棒は私にメロメロでしょう。

あ、恥ずかしいんですね。分かります。

「違うからね！？　何勝手に自分に都合良い様に解釈しちゃってるの！？」

「それが私のいいところです。アイム・ポジティブ！」

「何か違うから！」

「まぁ、そういうことにしておきましょう」

「なんで偉そう！？」

私が偉いからに決まってるじゃないですか。

何を言ってるんでしょう。

先日から少しは成長したと思ってましたが、未だに上下関係は理解できていないようで。

「お前今変なこと考えてなかったか？」
「まさか。それで迎えに来てくれたんですよね。行きましょう」

私は再び浮かび上がり、相棒の肩に座ります。
いつもの胸元も中々良いですが、コッチのほうが良いですね。
最後にアギトさんのヴィヴィオさんに挨拶をして私たちはその場を去りました。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ――――――――――――――――

「それでは相棒、行って来ますね」
「ん？　また行くのか？」
「えぇ、細かい調整も残っていますので」

夜、アテナがそんな事を言って部屋から出て行った。
てっきり完成したモンだと思ってたけど、微調整でもあんのかな？
まぁ、デバイスに身体を持たせるんだからそれなりにあるんだろうなぁ。
ま、俺にはそんなに関係ねぇか。

寝よ。

《あいぼーーーーーー！！！》
「っ！！？　なに！？　地震！？雷！？火事！？親父！？」
《やっと起きましたか、相棒》
「アテナ？」

目が覚めると、目の前にリィンに担がれたアテナが居た。
因みにリィンはちゃっかり耳栓を付けてる。

ってあれ？

「お前フレームはどうしたんだよ？」
《調整すると言ったでしょう？　そう毎日毎日つけていられませんよ》
「それだけが原因じゃないですよ」
《リィンさん！？》

聞けばアナザーフレームの回路が焼けていたらしい。

しかもその回路が結構手間のかかるモノで、修理まで時間が掛かるとの事。
そしてその回路はシャーリーさんたちの自信作だったらしく、意気消沈。
後日直してくれるそうな。

……焼ききれたって、もしかしなくても食事ん時が原因なんだろうなぁ。
ってか回路が切れるって……。

《ゴホン。と言うわけで、また暫くは相棒にぶら下がって居ることになります》
「はいはい。りょーかい」

まぁ、俺たちにはコッチのスタイルの方があってんだろ。な？

ウィズの小部屋

ア《うぅ……なんで、何で壊れてしまうのでしょう？》
ウ「まぁ、短編ネタだったからなぁ。好評だったら又出るんじゃね？」
ア《なら安心ですね。相棒より人気有りますし！》
ウ「まだそのネタ引っ張るの！？……ソレより、今日もゲストが来

るんじゃなかったっけ？」
ア《ソレは次回ですね。今回は久しぶりに相棒と二人きりになりたかったので》
ウ「……へぇ」
ア《何ですかその目！今の会話におかしい所は流石に無かったですよね！？》
ウ「いや、ノリで。後はお前を慌てさせてみたかった」
ア《また感想で叩かれても知りませんからね。皆私のファンなんですから》
ウ「！！？」

翡翠さん

ア《とりあえず下に張っておきました私のプロマイドです。拝みなさい》
ウ「いやいやいや！流石にそこまではいかねぇだろ！ってか所々おかしいし」
ア《まぁ、そこは同意しますけど……。後日ちゃんと修正してくれるそうなので大目にみます》
ウ「それにしてもイチャイチャねぇ。アテナが俺に纏わり付いてただけじゃね？」
ア《何を言うんですか！？ソレが愛じゃないですか！！》
ウ「その認識おかしいからね！？」

ナイトホークさん

ウ「いや、俺フラグ立てないからね！？デバイスに立てるってドンだけ鬼畜！？」

ア《鬼畜と言うより飢えてるんでしょう？それならいくらでも私のからだ――》
ウ「だあぁぁぁ！！この小説全年齢版だからね！！？」
ア《知ってます！！……なにか？》
ウ「なにか？じゃねぇぇぇぇ！」

樟葉櫂さん

ウ「やばいよ、褒め倒しだよ」
ア《主に私を》
ウ「こんなの慣れてないから調子に乗っちゃいそうだよ」
ア《乗って堕落するんですね、分かります》
ウ「お前さっきから何言ってんの！？」
ア《まぁ、なのはの世界で成長の片鱗を見せたのはティアナさんくらいですからねぇ》
ウ「無視！？」
ア《そちらの作品には必ず顔を出させていただきますので！》
ウ「話聞いてくれるかな！？」

秋風さん

ウ「来るって言ってくれたのに、本当にスミマセン」
ア《私のイラスト準備で少し時間を取ってしまったので……。ゲストの回の後書きは時間が掛かるんですよ》
ウ「必ず呼ばせてもらいますので！！」
ア《そういえばあの人コネを使って引越しのバイトをしようとしてるらしいですよ？》
ウ「マジで？アイツそんな事できんの？」

ア《出来そうにないから悩んでるそうです》
ウ「……ノーコメントで」

ディムRPさん

ア《そうでしょう。全ての可愛さを抱擁した私ですから、小動物の可愛さなんて朝飯まえですね》
ウ「どれだけ自画自賛すれば気が済むんだ？」
ア《自画自賛とは失礼な。私は事実を述べただけですよ》
ウ「それがそうだから！お願い、自覚して！！マスターとして恥ずかしいから！」
ア《だからいいのです！！》
ウ「テメェ確信犯か、コラ！？」
ア《あとは夫婦漫才みたいに見えると言うのは見間違いですね。私たちは夫婦ですから！》
ウ「なに自信満々に言ってくれてるのかな！？」

Ｎａｋｉさん

ア《そうですよ。弱みを見逃さ無ければ相手はメロメロです》
ウ「ちがう！それ違うから！ってかラディは大丈夫なの！？」
ア《あれくらいでどうにかなるならセラフィムを持つ資格なんて有りません》
ウ「何気に俺より酷いこと言われてる！？」
ア《当たり前でしょう。相棒だからこそあの程度で済ませているのに》
ウ「……あの程度？」
ア《あの程度》

ウ「……ラディ、頑張ろう」

サボテンさん

ア《乗せましたよ。どうですか？可愛いでしょう？》

ウ「……俺への酷い言われようは何なんだ？」

ア《そうですか？皆さんが言いたいことを全て代弁してくれているのでしょう？》

ウ「マジで！？そんな認識！！？」

ア《まぁ、最近は変態フラグは確かにたってますもんね？》

ウ「立ってない！立ってないから！！」

ウ「やっぱり皆アテナのアナザーに興味深々だな」

ア《それだけ私の人気が高いという事です。ユリアさんより早く公開ですよ！流石私！》

ウ「そのフレームも今は使えないけどな～」

ア《うぐぅ！？》

ウ「まぁ、なるべく早く治してもらえるように頼んでおいてやるよ」

ア《本当ですか！？ありがとうございます相棒！！》

ウ「んじゃ、また好評だったらフレームは復活すっから」

ア《皆さん、よろしくお願いします！！》

＞ｉ４６３４―４０７＜

28．アナザーフレーム【後編】（後書き）

今日は少し忙しかった、八神煌斗です。

と言うわけでゲストの召喚が出来ていません。ごめんなさい。

アテナも修正するつもりだったんですが、間に合わずアップしました。

後日修正します。

にしても私はえを描くのがやっぱり好きみたいです。

一応アテナに関しても感想待ってます。

さて、次回の更新ですが、一回お休みをいただいて四日後、か三日後になります。

まぁ、アテナを描いていたら時間が無くなったからなんですけど……。

本当にごめんなさい。

それでは！！

29．開戦、機動六課

「それじゃ最後。シュートイベンションやるよ」
「はい！」

恒例になった朝練の仕上げを今からやるところ。
最近はＦＷ陣も力を上げてきたからなの姉だけじゃなくてヴィータ姉さんも一緒になってる。

俺？
俺はなの姉のチームだと足引っ張るし、ＦＷチームだと過剰戦力になるから訓練場外から見学。
ハブられてる？そんなはず無いじゃないか。

ハハハハハ……はぁ。

「なら私と戦るか？テスタロッサが居なくて退屈なのだ」

いつの間にか横に立っていたシグナム姉さんが、イヤは提案を申し出てきた。

ってか、ついさっきまで一閃の為の模擬戦したばっかりでしょう。
俺としても機会が増えるのは嬉しいけど、限界を普段から超えるつもりは無いんです。

「遠慮しときます。って、フェイ姉居ないの？」
「ハラオウン提督に呼び出されて、主はやてと共に本局の方にな」
「クロノが？」

フェイ姉が本局に出向するのは珍しいことじゃないけど、クロノが呼び出したってのが気になる。
この前の件の事ならはや姉だけで良いし……。

俺が考えてもしゃーねぇか。

「そういえばウィズ。お前は決めたのか？」
「何を？」
「解散後の事だ。もう１２月。ほとんど者が進路を決めているぞ」
「あぁ、そういえば……」

顎に手を当てて考える。

全く考えてなかった訳じゃないけど、固まってないのも確かだし。
このままだちょ地上部隊に戻ることに成るんだろうけど、殆どレジアス中将の直属みたいな感じだったしなぁ。
現にどこの部隊に所属してたって訳じゃないし。

「なんなら私の元に付くか？」
「姉さんの？姉さん航空部隊でしょ？俺飛べないし」

「そうか。これで模擬戦相手に困らないと思ったんだが……」
「頼むからそういう理由で誘うのはやめて」
「冗談だ」

絶対に嘘だ。
だって本当に残念そうだったモン。

にしても本当に考えておかねぇとなぁ。

パッと思いつくので１０８かねぇ。正直はや姉とスバルって言うコネもあるし。

「まぁ、焦って決めることも無いだろう。ゆっくり決めることだ」

最後にそういい残し、シグナム姉さんは俺に背を向け隊舎に戻ろうとしたとき、それは起きた。

「え、何これ！？」
「どうなってんだよ！！」

俺がシグナム姉さんを見送っていると後ろ――訓練場からそんな叫びにも似た声が聞こえた。

それはシグナム姉さんにも聞こえたようで俺より少し早く振り返っていた。

そこに、訓練場はなかった。あるのは――……。

「――箱？」

そう箱だった。

正確にはビル郡が隙間無く建っている状態なんだが、なの姉たちが出てこないのを見ると、上も何かで塞がってるんだろう。

「システムの不具合か？　こんなプログラム無かったはずだが……」

「どうだろ、調べてみる」

俺の隣に戻ってきたシグナム姉さん。

俺は操作パネルを開き、プログラムの状況確認を急ぐ。

と、その時だった。

「っ！　この音って――」

「アラート？　いや……非常ベル……火災？」

隊舎から鳴り響く、非常ベルの音。
アラートじゃない分、まだ安心できるが、このタイミングで？
そんな事を思ったのも束の間。
防火シャッターが降り始めた。
何故外に居てわかったか。
それはずべてのシャッターが閉まったからだ。
ここから窓越しに見ても廊下を刻むようにシャッターが下りはじめている。

「おいおいおい。どうなってるんだよ……」
「お前はここに居ろ。私が確かめてくる」
「その必要はありません」

シグナム姉さんが一歩踏み出したとき、上空から声が聞こえた。
この声、忘れるはずが無い。

「アング……！」
「お久しぶりです。ウィズさん」

そこに居たのはやっぱりアング。そして白髪の男、エストラ。
アングはあの気味の悪い笑みを浮かべ、エストラは腕を組んで目を閉じている。

「そうか、これは貴様の仕業だな？」
「正解です」

シグナム姉さんの問いに答えるエストラ。

そういえば言ってたな。電子機器への介入が出来るヤツだって。

ここのプログラムにアクセスでもしやがったか。
それで訓練場と隊舎をこんな風にってか。

訓練場を見る限り閉じ込めるのが原因か？なら隊舎の入り口にもシャッターが落ちてる可能性が高い……。

「なぜこんな真似をする？」
「決まっているだろう。そこに居る男と、ユリアを連れ戻しに来た」
「ユリア？」

何でユリアを？
確かにアイツは裏切り者になるんだろうけど……連れ戻す？

「なんでユリアを――っ！？」

連れ戻すんだ？
駄目元でそう聞こうとしたとき、隊舎の一角が爆発を起こした。
必然的にその場にいる全員の視線がそこに集まる。

「へぇ。ならお帰り願いましょうか」

煙が充満する中、聞こえてきた声。
そして晴れていくと同時に見えてくる人物の影。
ドレスアーマーのユリア。

「そろそろ来る頃だと思ってたけど……やっぱり私も狙うんだ？」
「そうだな。お前が必要だ。戻って来いユリア」

お互いに睨みあってるけど、口調は穏やか。
だけど、その間には紛れも無い殺気がぶつかり合っている。

「イヤよ。私戻る気ないし」

右手中指を立て、べっと舌を出すユリア。

「それに――私、友達と遊んでるところを邪魔されるのが一番キライなのよねぇ」

「同感だ！！」

返事をしたのはエストラでもアングでも、俺たちでも無い第三者。
その第三者は未だユリアの足元に充満していた所から、煙の尾を引きつつ飛び出した。

「ザフィーラ！？」

ザフィーラ兄さんは飛び掛る途中、狼から人間へと姿を変え、アングに襲い掛かる。

「成る程そういうことですか。ですが、それくらい読めない僕ではありませんよ」
「それはコッチの台詞よ！」

兄さんの影から飛び出したのは数羽のアヴェ。
そのアヴェが次々に消滅していく。

「ちっ」

舌打ちをしたのはエストラ。
きっと例の見えない魔力球を全てアヴェに防がれたからだろう。

「ておらぁぁぁ！！」
「くっ――！」

ザフィーラ兄さんの攻撃にアングはシールドを張り対処した。
だが、張っただけでは攻撃の勢いまでは殺せず、後ろにはじかれる様に後退した。

そして兄さんとユリアが近くに集まってくる。

「やっぱ、プログラム直接には働きかけないみたいね」
「……」
「やっぱ図星ね」
「……これだから貴方は嫌いです」
「私もよ。初めて意見があったわね」

二人言葉を交わすが、俺たちは全く会話に付いていけない。
そんな俺たちに気づいてか、視線はそのままにユリアが説明を始める。

「アイツは機器を通さないと、プログラムは弄れないのよ」
「……ゴメン、もっと詳しく」

あ、一瞬こっち向いた。
やめてくれ、その可愛そうな者を見る感じは。

「例えば、パソコン用ウイルスを造るでしょ？それを他人に流そうと思ったらメールに添付したらいいでしょ？」
「おう」
「でもアイツはメールが使えないのよ。だからウイルスを直接、他人のパソコンにインストールしないといけないの」
んん？
何となく分かった気がしないでもないけど……ん～～？
「つまり、プログラムを弄りたければそれがインストールされている機器を触らなければいけない、ということだな」
「正解」
あぁ、やっと分かった。
ってかはじめからそっちを言ってくれりゃいいのによ。
「分かった？　貴方たちヴォルケンリッターは体はプログラムだし、ザッフィーなんかはデバイスも使わないからね。アングの天敵なのよ……ね！」
言葉を言い切ると同時、１０はあるだろうアヴェがユリアの頭上に展開。
さらに上に居るアング、エストラたちに向かって飛来する。

シールドに阻まれたのか、直撃したのか、二人は爆煙に包まれ、姿が見えなくなる。

「さぁて。あとは……シグナム。アンタ弓使えるんでしょ？」
「なぜそのことを？」
「言ったでしょ？　そろそろ来ると思ってたって。色々対策練ってたのよ。別に情報もらしたりしてないんだからそんな目で見ないでよ」

まぁ、警戒されても文句は言えないって。
姉さんも本気じゃないだろうけど、自分のこと調べられていい気はしないだろうし。

「まぁいいだろう」
「良かった。許してもらえたところで、ザッフィーと組んで頂戴。お互いやり易いでしょ？」
「そうだな。二対一と言うのは気に入らないが……仕方ないだろう」

「ならお望み通り、一対一で戦らせてやろう」

煙が晴れ、そこに居た二人は全くの無傷。
シールドで防いだんだろう。

その事も予想済みだっただろうユリアは同様しない。

「アンタバカでしょ？　なんでアンタたちの許可を貰わないといけないのよ」

「確かに不満は有るが、ここで貴様らを逃がすわけには行かないのだ。ここは絶対策をとらせて貰う」

ユリアに続いてシグナム姉さんが口を開く。

っていうかやっぱり不満なんだ。

まぁうん。何となく分かってたし、深く考えたら駄目だろう。

俺はアテナをレイラをセットアップ、テクニカルソードを握り、戦闘に備える。

「まぁ、そう言わないでください。さっきも戦いがっていましたし、手助けしますよ」

そう言ってアングは右手を顔の辺りまで上げ、何かを呟きだした。

「――っ！？」

同時、誰かに握り潰される様な、そんな痛みが頭に走った。

「あ、が――あぁぁぁああ！！」

「ウィズ！？」

「っ！　しまった！」

立てなくなり、膝をつく。
割れそうとはまた違う痛みに耐え、飛びそうになる意識を無理やり引き止める。

「アテナ！　レイラ！　その形態で良いから今すぐにロックを掛けなさい！」
《は！？　何を言ってるので――！！》
「早くなさい！！」

誰かが何かを言ってるのは分かる。
だけど、ダレがナニを言ってるのか分からない。

「ユリア！　ウィズはどうしたのだ！？」
「黙ってて！　ウィズ、聞きなさい。私の声が聞こえる！？　いや聞きなさい！」

聞こえてる。
聞こえてるけど、理解できない。

そんな余裕、俺には……。

「あ」

そして俺の視界は暗転し、意識は落ちた。

ユリアｓｉｄｅ――――――――――――――――――――

ウィズがその場に倒れた瞬間、シグナムが駆け寄り、膝をつく。

「――っ！　シグナム、離れなさい！」
「なに――っ！？」

とっさに反応したシグナムは弾くように後ろに飛んだ。
刹那、さっきまで居たところにアテナが振るわれる。

「ちっ。外れたか……。トロいんじゃね？　この体」

起き上がったウィズはアテナで肩を叩きながらそんな事を言う。
そして前髪をかき上げる。

「第二人格……遣ってくれるわね、アング」

以前ウィズに接触した時のは失敗に終わったと思ってたけど……成功してたって訳ね。

上塗りされた新しい人格、第二人格。

そいつが表に出てきた。

「いえ、彼は第二人格などではありませんよ」

「なんですって？」

「本人に聞いてみたらどうですか？」

「ん？　俺？」

そして視線は暢気に屈伸や肩を回していたウィズに集まる。

「そんなに見るなよ。照れるだろ？」

「無駄話は良いから、アンタ、何なの？」

「【何なの？】そう聞かれるのってなんか辛いねぇ。いいぜ、教えてやる。俺はな」

ふざけていた口調が変わりまじめな物に変わった。

そして、ヤツのクチから出た言葉は、私たちを少なからず動揺させることになった。

「正真正銘、本物の神埼ウィズだ」

ウィズの小部屋

ア《早速ご紹介します。ゲストのマリカさんです》
マリカ「こんにちは～。始めまして、アテナさん」
ア《そうですね。それで私と語り合いたいとか？》
マ「そうなんです！主をどうすれば自分のモノに出来ると思いますか！？」
ア《弱み握るか、監禁でしょう。首輪とかも良いかも知れませんね》
ウ「おまっ！？何スゴイこと言ってんの？！」
ア《おや相棒、本編で死んだのでは？》
ウ「死んでない！……いや、どうか解んないけど、とりあえずココに居るよ！？」
マ「ＫＹと言うのを始めて見ました」
ウ「初対面なのに酷いこと言われた！？」

ナイトホークさん

ウ「なに！？俺がなに！？」
マ「きっとあれですよ。大人な世界」
ア《又は相棒の暴走（１８禁的な意味で）》
ウ「マジで！？え、じゃぁ『むふふ』って所って――」
ア《ピー。の差し替えかと》

ウ「俺どんな目で見られてんの！！？」

灰色の野良猫さん

ア《そうでしょう、可愛いでしょう。それなりに頑張って貰いましたので》
マ「リィンさんを元にと言ってましたが、あまり似てませんよね？」
ア《そうですか？まぁ、そこは私の魅力が――》
ウ「ちょっと待てーー！猫の暴走はスルー！？スルーなのか！？」
ア《暴走？まさか。私の魅力を全世界に向けて配信してるだけですよ》
ウ「なんという自画自賛！？」
マ「それにしても、猫さんは生きてるのでしょうか……」

月光閃火さん

ア《とりあえず私の魂と体は相棒のものなので、彼女というのはお断りさせていただきます》
マ「ウィズさん！アテナさんにそんな事をしてるんですか！？」
ウ「してない！してないから！！」
ア《でも応援してくれるのはありがとうございます。私、頑張ります！》
ウ「あ、あとこの前の事はむしろ嬉しかったんだよ、迷惑じゃないんだ」
ア《ただ、折角考えていただいたキャラもここでは使う予定が無いのが凄く勿体無いと思いまして》
ウ「本当に迷惑じゃない！そこだけは分かって置いてください」
ア《ちなみに、二つのパイは後でスタッフが美味しくいただきまし

た》

ＴＯＵＤＡさん

ア《何を言いますか、私はただ実態を教えようと思っただけです。ねぇ、マリカさん》
マ「はい。私もアテナさんの判断は正しかったかと」
ウ「違う！違うよ二人とも！ヴィヴィオ位の子にはコウノトリが子供と連れてくる、とか言っとけばいいの！」
マ「サイテーですね」
ア《はい。相棒は年下の子にウソを教えると今全世界に向けて発信しました》
ウ「え……。そんなに？」
マ「はい」
ア《あぁ、それとイラストの件ですが、お一人受けると次々に着そうなので今回はお断りして欲しいです》
ウ「これからバイトで忙しくもなるし。本当にゴメンな」
ア《まぁ、もしかしたら募集するかも知れませんので、その時にでもお願いします》
ウ「悪魔で『かも』だけどな」

翡翠さん

ア《待ちうけですか？全然構いませんよ。むしろ望むところです》
ウ「ってかアテナなんかで癒されんのか？」
マ「勿論ですとも！私から見ても可愛いと思いましたもの！」
ウ「……裏方（打ってる人）を考えると凄く痛い気がする」
ア《相棒、それは言っちゃだめです……》

サボテンさん

ウ「出さない！どれだけ飢えても出さないから！」
ア《酷い！相棒に喜んで貰おうと思ってフレームを造ったのに……》
マ「あぁ、アテナさん。ウィズさん、謝ってください！」
ウ「え、マジで！？」
ア《何ですか相棒！はやてさんならまだ分かります！ですがもしかしてシグナムさんですか！？それともヴィヴィオさんですか！？》
ウ「なんで！？流石に犯罪だろ！」
マ「その発言は犯罪でなければ手を出している、という風に聞こえます」
ア《相棒のアホー！！》
ウ「話を聞けー！！」

Ｎａｋｉさん

ア《まぁ、本編で言ったこと以外ですと今日言った弱みを握る、監禁とかでしょうか》
ウ「それ愛仕方間違ってるから！それは愛って言わないの！」
マ「そうでしょうか？ライバルが多いのなら中々の有効打だと思いますけど……」
ア《最後には何を言っても頭をたれる様になります》
ウ「危ない！それは本当に危ない！ってかマリカもアテナに毒されちゃ駄目！」
ア《まぁ、他にも語りたいですが、流石に時間がありませんので……また後日》
ウ「ラディ……頑張れ！」

樟葉櫂さん

ウ「いや～、楽しかったよなぁ」
ア《途中相棒のベッドインの光景の話にもなりましたよね》
ウ「ぶふっ！？」
マ「アテナさん、その辺を詳しく！！」
ア《えぇ、いいですとも、確かあれは相棒ったーで相棒を診断したことから始まり――》
ウ「だあぁ！！言わなくていい！言わなくていいから！！」
ア《そうですか？それは残念……。あの時会話してた皆さんも全員納得の内容でしたのに……》
ウ「お願い、忘れさせて……」

ア《こう全体を見ると私への感想がダントツですね！》
ウ「まぁ、お前の短編だったからなぁ。当然じゃね？」
マ「皆さんアテナさんが可愛いとおっしゃってますね」
ア《また短編を読みたいと言う事もありますし……期待しましょうか》
ウ「いや。もう無理だろ」
マ「分かりませんよ？お声が多ければ私にもチャンスが……」
ウ「自分！？そっちは自分の作者に直接交渉してくれるかな！？」
ア《ではそろそろマリカさん。お帰りの時間です》
マ「そうですか？マテナさん。今日は楽しかったです」
ア《私もです》
ウ「あれ？俺には？」
マ「それでわ」
ウ「おいいいいぃぃ！！」

マリカ　出演作品：魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～蒼天を愛した混沌～他

古代ベルカの融合機。直人のデバイス。
とある事情で直人と共に行動することになったが、今では正式なデバイス。
直人には泣きじゃくって抱きついたことも。
多く居るｓｓキャラの中で結構好き内の一人。

29．開戦、機動六課（後書き）

なんとか上げれた、八神煌斗です。

今回は本当にスピード作業でした。
ですのでブッチャケ誤字確認をしていません。

なので誤字が有ったり、表現が可笑しかったり、会話が成立してないところが有るかもしれません。
その時は報告してもらえると幸いです。

さて、アテナのイラストが好評な様で、とても嬉しいです。
上でも言いましたが、今リアルが妙に忙しく、時間があまり取れていません。

なので今はイラストはお引き受けできません。
本当にゴメンナサイ。

それでは！

30．アブソリュート

ティアナｓｉｄｅ――――――――――――――――

「どうだ、なのは。分かったか？」
「駄目。システムに不具合が有るのは確かなんだけど……操作を受け付けない」
「ちっ。外に居るウィズに任せるしかないって事か」

ジャケットを解除したなのはさんとヴィータ副隊長がそんな会話をする。

ホンの2、3分前、私たちは朝練の仕上げに入ろうとしていた。
その瞬間にこれだ。
訓練場の誤作動で完全に外から隔離された。

森林のステージを使ってたのに、ご丁寧に廃墟の設定にまで変わって。

「でもちゃんとチェックしてたのに、おかしいよね？」

そう言うのは私の隣に居るスバル。
確かにそう。

今日の準備は私とスバルの担当だったから確信がある。
あの時はおかしいところなんて一つもなかった。

「アンタ、変に弄ったんじゃないでしょうね？」
「そんな事してないよー！」

まぁ、分かってるけどね。
場を和ませる為にいった冗談よ、冗談。
そのつもりで私は言ったんだけど……。

「おー。譲ちゃん感が良いなぁ。だけど惜しいっ。弄ったのは俺なんだわ」
「っ！？」

突然男の声が聞こえた。
エリオの声じゃない。
なら誰――？

「あーこっちこっち」

そして視線が集まるのは廃ビルの壁が崩れ落ちている一角。
そこに居たのは赤髪の男。
記録でしか見てなかったけど、名前は確か……。

「ヴィオル！？」
「せーかーい」

手を振りながらそういうヴィオルに、無償に腹が立つ。

「テメェ、どういうつもりでこんな事しやがる！？」

怒鳴りつけるのは副隊長。
既にセットアップして、手にはアイゼンが握られてる。

「あぁ？　生意気なガキンチョだな」
「アタシはガキじゃねぇ！！」
「ガキは皆そう言うんだよ」

何でかしら。
私でも分かるくらいの殺気なにのどこか微笑ましく思っちゃうのよ。

「改めて聞きます。どうしてこんな事を？」
「あぁん？」

睨み合ってる二人の間になのはさんが入った。
セットアップはしてないけど、その手には確りレイジングハートが握られてる。

「目的は何ですか？」
「目的？　あー。まぁ、言ってやってもいいか。ってか、目星はついてんだろ、エースさんよ」
「という事はウィズ君を狙っている、という事で良いんですね？　そしてアナタは足止めですか？」
「正解だぁ。いや、流石だねぇ。尊敬しちゃう」

腕を組んで何度もうなずくヴィオル。
記録とは少し印象が違うけれど……コッチが普段の性格って所かしら。

「（ティア）」

スバル？

「（私がウィングロード近づいてどうにか……）」
「（何バカな事言ってんのよ。なのはさんたちでも様子見してる

のよ。私たちが出しゃばっても足手まといになるだけ）」

ユリアから聞いた限りだと、ランクもＳＳ前後あるらしいし。
訓練後の私たちが出て行っても足手まといになるだけだ。

「それで、テメェはアタシたちを閉じ込めてどうするつもりだ？」
「は？　どうするもこうするも。何もしねぇよ」
「は、はぁ？」

何もしないって……そういうことよね？

「ほれ、これなんだと思う？」

そう言って私たちに見せたのは手のひらサイズの四角い箱の様な者に丸いボタンが付いたモノ。
どっからどう見てもスイッチだけど……何のスイッチか分からない。

「なんだよ、それ」
「なんだ、もう答え聞くのか？　しゃーねぇな。これはな……あー、と……アレだ、アレ」

急に歯切れが悪くなって開いている左手を小刻みに振る。

何をしてるのかと思ったら次にその左手をポッケに入れて一枚の紙を取り出した。

「えーと……。お前、らのデバイスに組み……込まれてる……」
「カンペ!?」
「何で地球語なんかで書いてんだよアングのヤロウ!!」
「しかも読めてない!!?」

ちょっと……ユリア。
本当にアイツＳＳランクなんでしょうね?

なんだか空気もおかしい事になってきてるし。

「だぁーーー!!　もういい!　テメェらで勝手に読んでろ!!」

持っていた紙を丸めて私たちの方に投げたヴィオル。
投げた後はその場に膝に肘を付いて座り込んだ。

一瞬気を取られたけど、その紙をなのはさんが拾い上げ、広げ始めた。

「本当だ。これ、地球の日本語で書いてある」
「それで内容は?　なんて書いてあんだ?」

「……少し、厄介なこと」

厄介なこと？
それが気になって私たちはなのはさんたちの方に寄っていった。

「簡単に言うとね、ＦＷにＡＭＦを最大レベルで発動させるって」
「私たち、だけにですか？　そんなこと出来るんですか？」

なのはさんの台詞にキャロが疑問を口にした。
ヴィータ副隊長は納得した顔をしてるけど、私たちには何のことか分からない。

「六課（ここ）に来た時に少しだけ説明したでしょ？　キャロたちのデバイスに少し細工して擬似ＡＭＦを体験出来るって」
「あ、そういえば……」

確か初めての訓練の時だっけ。
スバルのウィングロードが消されて、ビルに突っ込んだ時。

あの時は精一杯であんまり聞いてなかったけど、そんな事言ってた気がする。

でもそうなると少しどころじゃない。
そうとう厄介。

結果だけいうと私たち４人は足手まとい以外なんでもなくなる。
デバイスが無いと魔法が使えないって訳じゃないけど……時間はや

っぱり掛かるし、使えても制度が落ちる。
スバルの戦闘機人モードでも、デバイスに直接細工されてる訳だからあんまり意味ないし。
つまり、なのはさんとヴィータ副体長は私たちをいつも以上に気にかけながら、ＳＳランクを戦わないといけない。
「運よく向こうは私たちが手を出さない限りは何もしてこないみたいだし、長くは無理だけど、考える時間はあるよ」
ヴィオルは今、余裕なのか、油断してるのか。
足を垂らす形で、寝転がってる。
「何もしないって言ってたけど、ここから出るためにはやっぱり戦わないと」
「だな、だけどなのは。お前はＦＷ達の護衛だ」
「ヴィータちゃん！？」
カートリッジを確認しながらそういうヴィータ副隊長の発言になのはさんが驚きの声を上げた。
私だって驚いてる。
確かに一人を護衛に回したほうが戦いやすいのかも知れないけど。
私たちだって力を付けた。自分の身は自分で守れる自身もある。

わざわざなのはさんを護衛に回してまで、一人で行くメリットが無い。

「知ってんだぞ。お前ブラスター使って体調が完全じゃないだろ」

「……」

その一言になのはさんが押し黙った。

「そういうことだ。WF共、なのはと一緒にどっか隠れてろ」

そしてヴィータ副隊長の足元に魔法陣は現れ、同時、ヴィオルの方へと飛んでいった。

「そりゃ来るとは思ってたけどよ……ガキが相手かよ？　エースさんは？」

「テメェなんかアタシだけで十分なんだよ」

デバイス、アイゼンをヴィオルに向ける。

「まぁ、戦えるってならそれだけで構わねぇか……強ぇんだろうな、ガキ？」

ヴィオルの雰囲気が変わった。
顔も恐怖を覚えるような笑みを浮かべて、ユラリと立ち上がる。

「十分なんてデカい口叩きやがったんだ……。……出番だ、アブソリュート」

ヴィオルの右手に強大な鮮血色の盾型デバイスが表れた。

「精々……満足させろやあぁぁぁ！！」
「はあぁぁぁぁ！！」

二人は、私たちの目の前で、ぶつかり合った。

だけど、数分後――。

まずい……。それは私の目で見ても明白だった。

「どうしたガキィ！！　ぜんっぜんモノ足んねぇぞ！！」
「っ。ウルせぇ！　ギガント、ハンマー！！」
「効かねぇってんだろぉ！！」

ヴィータ副隊長の攻撃もヴィオルの突き出したデバイス、アブソリュートの前に防がれてしまう。

「アクセルシューター……シュート！！」

「っとぉ、危ねぇな、この野郎！」

ヴィオルの背後、真後ろから撃たれたなのはさんの攻撃も危ないとか言いながらも簡単に交わす。

なのはさんがついさっき、状況を見かねて戦闘に参加しても、あまり戦況は変わらなかった。

「ねぇ、ティア……」

「なによ？」

返事をしながらスバルの方を見ると、不安じゃなくて首をかしげた表情をしてた。

「さっきエリオとも話してたんだけど……」

「あーもう！　良いから言ってみなさいよ！！」

こういう時は大体が言いたいことを我慢してる時だ。

もう長い付き合い。いつもだったら普通に聞き返せてたんだけど、

何も出来ない事にイライラしてたせいで怒鳴ってしまった。

「う、うん。あのヴィオルって人だけどさ……」

「なに？　ヴィオルがどうかしたの？」

この後、スバルの一言に私は頭を抱えることになった。

ウィズの小部屋

ア《相棒、相棒》

ウ「何？」

ア《レイジングハートさんの名前の意味、知ってますか？》

ウ「不屈の心、じゃなかったっけ？」

ア《まぁ正解ですね。相棒のクセに》

ウ「相棒のクセに！？」

ア《ｒａｉｓｉｎｇの原型、ｒａｉｓｅは奮い立たせる、蘇らせるなどの意味がありますからね。間違ってはいません》

ウ「間違いじゃないって……他に意味あんのかよ？」

ア《いえね。相棒が言ってるのはｒａｉｓｉｎｇの方ですよね？もしｒａｇｉｎｇだったらどうだと思います？》

ウ「それも読み方は一緒なんだろ？同じ様な意味じゃねぇの？」

ア《【猛烈な】【並外れた】【激怒した】などの意味があります》

ウ「……もしかして初期からＳｔＳでなの姉があなるのを予想してたのか？」

ア《私はそう考えます》
ウ「おそろしぃ……」

ナイトホークさん

ウ「今回は俺サイドは完全に放置だったな」
ア《私がスリープに入ってるので仕方ないですよ》
ウ「え、そんな理由!?ってか俺のことサヨナラって!」
ア《良かったですね。覚えておいてくれるそうですよ》
ウ「そっち!?」

秋風さん

ウ「分かるの龍騎くらいだけど……一杯あんのな」
ア《まぁ、出尽くしたネタではありますからね。仕方ないですよ》
ウ「ん～……。まぁ、似た感じになる、のか？」
ア《とりあえずネタバレと言う言葉を壁に、秘匿させてもらいます》
ウ「スッゲー言い訳くさい」
ア《……ウィズ菌に掛かったのでしょうか？》
ウ「菌!!?」

月光閃火さん

ア《相棒とツーショット……良いですねぇ。というか何で別々なんですか？》
ウ「知るか、俺に聞いても仕方ねぇだろうが」
ア《まぁ、いいでしょう。それでは相棒、早速写真を撮りに行きま

しょう！！》
ウ「え、今から!?俺本編で大変なことになってるんですよ!?」
ア《相棒の都合なんて知っちゃ事ないです！》
ウ「俺マスターだよ!?」
ア《知っちゃ事じゃないです！》
ウ「おい!?」

翡翠さん

ウ「待ちうけ。もうお前にどっぷり?」
ア《なんて罪作りなんでしょう。で、話題を変えて考えて見ましょう。シグナムさんルート！》
ウ「……駄目、毎日どっか怪我して寝込んでるとこしか想像できない」
ア《まぁ、妥当なところでしょうか。それでは一番希望の多い私、アテナルート！》
ウ「……特に今とかわらねぇんじゃねぇ?」
ア《既に延滞期!?》
ウ「何で既婚前提!?」

ＴＯＵＤＡさん

ア《相棒がシスター?執事じゃくて?……アリです！》
ウ「無しだから!何で納得してる!?」
ア《でも実際盲点ではありましたよね。聖王教会は》
ウ「まぁな。でも俺シャッハさんとは会ったことすらないんだよなぁ」
ア《何なら一度ボコボコにされればいいんです》

ウ「お前本当に俺の事好きなんだよな！？」
ア《勿論です！》
ウ「……」

サボテンさん

ア《相棒、偽者疑惑の末納得されちゃいましたよ？》
ウ「うん。分かってる。いいんだいいんだ。王道通り復活してガッカリさせてやるから」
ア《できるんですかぁ？》
ウ「出来るよ！？ってかお前は俺を信じろよ！？」
ア《ワタシハアイボウヲシンジテマスヨ》
ウ「片言！？」

ＺＥＲＯさん

ウ「とりあえず、返信はしておいた。けど返信がない」
ア《参加は難しいです、見たいな事を書きましたからね。当然でしょう》
ウ「実際難しいからなぁ。以前のクロスモノも失敗感があるし」
ア《あれは酷かったですね。出演を許可してくれた方々にとても申し訳なかったですね》
ウ「まぁ、こんなところ？」
ア《これからもお暇なときにでも顔を出していただけると嬉しいです》

Ｎａｋｉさん

ア《成る程。このまま行けば私が主人公……それもかなり感動的なストーリーに……》
ウ「なっ……成るけど、成るけど俺はそんなの認めないよ!?」
ア《えー。別に良いじゃないですか》
ウ「いいよ!良いんだけど責めて俺は生存させて!」
ア《だが断る!》
ウ「なんで!?」

灰色の野良猫さん

ウ「おぉ。良かった生きてた」
ア《つくづく生き汚いですねぇ》
ウ「そんな事言っちゃう!?」
ア《で、この先はどうなるんですか?》
ウ「え?確か台本には……ってぇ!何言わせようとしてんの!?」
ア《ノリが悪いですねぇ》
ウ「そういう問題!?」

ラモンさん

ア《相棒いつグレたんですか!?》
ウ「グレてない!グレてないから!」
ア《そんなこと言って、何時までも強くなれない自分に嫌気が指したんじゃないですか?》
ウ「自分に嫌気が指すって、俺ドンだけ腐ってんだよ!?流石に自分のことは好きですよ!?」
ア《今度はナルシスト!?》

ウ「そっから離れろーー！！」

樟葉櫂さん

ウ「そういえば外伝の方、書いてないよなぁ。どうなってんの？」
ア《なんだか未だに瞑想しているらしいです。相棒を本編に組み込む方法について》
ウ「あー……。あの時は何も出来ないからなぁ。アリサさんサイドが有力？」
ア《ですね。何も知らずに結界に巻き込まれる、それがいいのでは？》
ウ「ってかこんなネタバレ言っちゃって良いの？」
ア《いいのでは？どうせまだ暫くはコッチに掛かりっきりらしいですし》
ウ「はぁ……」

ア《やっぱり今回の感想の殆どは本物の相棒に集中してますね》
ウ「だな。まぁ、期待を裏切らないように、少しドキドキしてるけど」
ア《大丈夫ですよ。今更相棒が期待を裏切ってもやっぱりか、程度しか思われませんから》
ウ「ソレはそれでイヤなんですけど？！」

30．アブソリュート（後書き）

レイジングハートの綴りはSの方ですよね？八神煌斗です。

何て言うか、バトルは基本グダグダ続けたくないので纏めようとしたら一話の文章量が結構すごい事に……。

まぁ、他の人から見たら普通なんでしょうけど……私から見たら中凄いんです。

そしてスゴイと言えば感想。

本当にありがとうございます！最近少し低空飛行中だった中、凄く励まされました。

それでは次回お会いしましょう。さようなら！

31．一糸の希望／FWの意地

ユリアｓｉｄｅ――――――――――――――――

「うらぁぁ！！」

ウィズの連撃が容赦なくシグナムを襲う。

「ウィズ！　いい加減目を覚ませ！」
「目はバッチリ、パッチリ覚めてんだよぉ！！」
「――ぬぅっ！！」
「シグナム！！」

シグナムが鍔競り合ったその瞬間に必死に訴えかけるけれど、それは届かない。
そのまま押し返されるような形で後ろに弾き飛ばされた。

「よそ見している暇があるのか？」
「――っ！　アヴェ！　――ｆｌｏｃｋ（あつまれ）！――ｄｅｆｅｎｄ（ふせげ）！――」

直ぐにアヴェを作り出し、壁にする。

けれど、それもあまり役に立たない。
一羽づつなんてモノじゃない。ほぼ一斉に全てのアヴェが弾き消された。
だけど、私がアヴェを壁に隠れたことで一瞬だけどエストラの視界から逃れる。
その間に私はシグナムの近くに寄る。

「大丈夫？」
「肉体面はな。だが……闘争心が全く沸いてこない」
「無理ないわよ。私だってそうだもの」

正直、今の構図はマズい。
始めの二対一は崩されて、タイマンの勝負になっちゃってる。
ちらりと横を見る。

――ザッフィーにはここに参戦する前に一つだけお願いをしてる。
それはアングとぶつかり合う構図になったら私たちの方に寄ってこないこと。
アングに接近されたらデバイス持ちは接近できない。それはＦＳ計画で生まれた私にも言える事。
ザッフィーは守りが自慢みたいだから何とか耐えてられてるみたい

だけど、時間の問題なのは明白よね。
それが崩されたら少しヤバそう。

――でも、今の問題はそっちじゃない。

私は自慢のマルチタスク使って混乱を最小限に押さえ込んでるけど、それでも少しキてる。

その現況は今エストラと一緒に一定の距離を保ったまま同じ高さにハイペリオンを作って立ったウィズにある。

「どうした、烈火の将？　いや、姉ちゃんって呼んだほうか良いのか？」
「姉と呼ぶな。虫唾が走る」
「おいおい。弟にそんな事言っちゃう訳？」

アテナの峰を肩に乗せて、呆れたように言うウィズ。

「俺は本物だって、何回言えば信じてくれるんだよ？」
「そんな話信じられるか！」

そう、ウィズが自分が本物だって言い始めた。

「だから。俺は記憶を消されたんじゃ無くて、封印されたの。この体にな。で、アングがそれを解いた。わかった?」
「……」
「信じられるわけ無いでしょう。そんなの」

何も答えないシグナムに変わって私が答える。

ウィズの記憶の事は、私の記録にもお母さんまさもちゃんと聞いてる。
その作業はウィズの能力封印の時のようにお父さんに完全に任せてた訳じゃなくて、ちゃんと参加してた。

だけどあのウィズが嘘を言ってる証拠が無い。
だからこそ、厄介。

アレが偽者って分かったら直ぐにでもあの奥の手を出せるんだけど……。
本物なら……。

「まぁ良いや。力ずくで信じてもらうってモノ悪くはねぇか。なぁ?」
「ふぅ。良いんじゃないか?俺は関わらんが」
「薄い反応。んじゃ、許可が出たことだし、いっちょやるか」

最後の言葉を呟く様に言って、目を閉じたウィズ。
何をするつもり?

「管理者権限発動。第三、第四拘束、解除」
「なに！？」

刹那、ウィズから莫大な魔力が吹く出した。

って、あのバカ……！
第三までならまだしも四番まで！！

「おースゲェなぁ。これ。こんなに魔力あんのかぁ」

「シグナム！！」
「分かっている！！」

私の怒号にシグナムが駆ける。

四番拘束はウィズの体が持たない。
一秒でも早く……閉じさせないと――！！

「はあぁぁぁぁ！！」
「っとぉ。やる――なぁ！！」

レヴァンティンの一線を最低限の動きで交わし、切りかかるウィズ。
そのまま、二人は自身の魔力光を残像に、光の線を残しながら何度もぶつかり合う。

「――っ！」

視線を外した一瞬の隙、私の張っていたフィールド・センスに反応があり、私は急いで体をずらす。

「――ッチ」
「――ｃｒｅａｔｅ（クリエイト）・ａｖｅ（アヴェ）――ｄｅｐｌｏｙｍｅｎｔ・ｐｌｕ（ちれ）ｎｇｅ（つっこめ）――」

分割思考をザッフィーとシグナムに少しだけ割いたまま、作り出せる限りのアヴェを作り出し、一斉に突っ込ませる。

まぁ、全部叩き落されたんだけど……。

「どういうつもりよ。私はともかく、ウィズが居ないと穴を手に入れる事なんてできないでしょ？」

多分、私が必要とされる理由はウィズに欠落してる演算能力の為。
だからこそ、私だけを手に入れても仕方が無い。
部品が有っても、本体が無かったら意味が無いんだから。

「アレが死のうと関係ない。体さえあれば能力の解析は出来る。生きてた方が楽なのは確かだけどな」
「へぇ。そんな死体相手に解析できる設備が有るって言うの？」
「設備は無いが、ヤツが居る」

はぁ。あの蒼髪野郎か……。

視線を移す。

そこでは純白の魔力光で作り出された幾つもの軛（くびき）が突き出している。
全ての目標はおつもの笑みを浮かべてるアング。

ザッフィーも付かず離れずで戦ってるみたいだけど……そろそろ厳しいかしら。

アングはああ見えて近〜中距離タイプ。もろ接近型じゃぁ……ねぇ。

さて、どうしたもんか。
せめて戦闘要員がもう少し居てくれたらなぁ……。

そう考えていた時、その会話が聞こえてきた。

「だぁかぁら！　いい加減信じろって！　元々、この体の所有者は俺なの！」

「信じられるか！記憶の故意的な封印など、出来るはずが――」
「今日日脳みそだけで生きられる時代よ？　出来ても可笑しくないっしょぉ！！」
「くっ！」

思うように体が動かないのか、シグナムがまた後ろに弾き飛ばされた。
だから、私は距離の開いた今のうちに念話を繋ぐ。

「（シグナム。脳みそで生きられるって言うのは本当？）」
「（管理局にそういう者が居たらしい。とは言っても私も最近噂で聞いただけだがな……）」
「（それは最近聞いたのね？　それも噂で）」
「（あぁ。そうだが……戦闘中に聞いてくることではないだろう？何を考えている）」

普通はそうかも知れない。
だけど……ようやく活路が見出せたわ。
その情報は……絶対の証拠になる！

「（聞きなさい。そのウィズは元々の主人格なんかじゃないわ。アングの作り出した第二人格）」
「（なっ！？　何を根拠に……）」
「（説明してる時間は無いの。私の合図でウィズから離れなさい。良いわね？）」
「（……信じるぞ？）」

信じなさい。そういい残して私はシグナムと念話を切り、別の人物に念話を繋ぐ。

……よし、幸い近くに居る見たいね。ならお願い。合図はコッチで出すから。

「作戦は決まったか？」

「えぇ、もちろん。さぁ、行くわよ！　――ｃｒｅａｔｅ（クリエイト）！！――」

ティアナｓｉｄｅ――――――――――――――――

「スイッチ押してたっけ？」

……はい？

私の呆れた目を見て、スバルが慌てながら両手を振る。

「だ、だって私たちにスイッチは見せたけど、直ぐに副隊長と戦い始めたから……！！」

「……」

そういえば見せられただけで押してるところなんて見てないわね。
いやでも、こんなバカな話あるの？

「クロスミラージュ？」
《調べてみましたが、装置は機能してませんでした》
「……つまり？」
《いつも通りに魔法が使えます》
「はあぁぁぁ！！？」

思わず大声を出しちゃったけど、許して欲しい。
だって、どれだけマヌケなのよアイツ。
見せるだけ見せておいて、それを使わないなんて。

「まぁ、いいわ。コレで私たちにもどうにか出来そうだし」

額に流れた汗を拭い、気合を入れなおす。

私たちが攻撃を当てる事、もっと言ったら戦闘に参加する必要は全く無い。
今必要なのは、なのはさんか副隊長が攻撃を当てる隙を作り出すこと。

「（今の作戦で行くわよ。――いけるわね？）」

念話で確認を取る。
それから私たちは即興で作戦を考えて、それぞれ配置に付いた。

私たちが動いてる間もヴィオルが反応しなかったのがびっくりだけど……。
やっぱりバカなのかしら？

いえ、今は考えるのをよそう。
だって一瞬のタイミングのズレも失敗も許されない、一度きりの作戦。

失敗したら完全に負ける、賭博性の高い作戦だけど――。

「（はい。いけます）」
「（私たちなら大丈夫だよ！）」
「（ココに来てからの日々を無駄にするわけには行きません！）」

三人から心強い言葉が帰ってきた。
うん。私たちなら絶対に出来る！

「（なのはさん、ヴィータ副隊長！　下がってください！！）」

私の言葉になのはさんたちは一瞬驚いたようだったけど、直ぐに後退した。
刹那、蒼い翼の道がヴィオルを包み込み、視界を埋め尽くす。

「あぁ！？　んだこりゃ！？」

様子は見えないけど、驚いて立ち止まってるのが分かる。
上下に飽いた逃げ道からも出てこない。

予想通り！

だから次は――！

「フリード！　ブラストフレア！！」
「一閃必中……メッサー・アングリフ！！」
「――っ！？　っのヤロオォォがぁ！！」

上下からのライトニングコンビ同時攻撃！
ヴィオルの叫び声も、爆発音にかき消され、爆煙は立ち込める。

当たったのは確実！
でも、コレで終わりじゃないのはさっきまでの戦闘を見てて明らか！

「ウゼエェェ！！」

そう、あまり攻撃を食らって叫ばないような事を叫びながらヴィオルが爆煙の中から飛び出した。

「クロスミラージュ！　クロスファイア――シューート！！」

空中に作り出しておいた六つのスフィアを一斉に打ち出す。

「ちっ。まだ来やがるか！」

だけど、私のスフィアはヴィオルに察知されだ。
でもね……コレだけじゃないのよ！！

「スバル！！」
「うん！」
「なっ――！？」

物陰に隠れてたスバルが、私の合図と同時に飛び出してくる。
その右手には青いスフィアが形成されている。
でもそれは私のスフィアとは用途が違う。

「ディバイーーーン……」

スフィアを左手に持ち替え、右手を大きく振りかぶる。

「そんなバンバンバンバン、撃たせると思ってんのかぁ！！」

――ヴィオルの体に電気が走った。

しまった！？

タイミングがズレた訳じゃない。

ただ、私の計算がズレた。

ヴィオルは私の攻撃を防いだデバイスをそのまま攻撃を繰り出そうとしてるスバルに向ける。

どう見てもカウンター。

でも技を出す直前だったズバルに避ける手段が無い！

「スバル、そのまま！！」

「！　はい！」

私の声じゃない。

その声は――なのはさん

「アクセル――シューート！！」

私たちが攻撃中、こうなることを予想してたのか、偶然近くに居たのか分からない。
けれどなのはさんはスバルとは間逆、私が打ち込んだ所にスフィアを打ち込んだ。

「バスターーー！！」

同時、スバルの攻撃も襲い掛かる。

「思い通りに――いくかあぁぁぁ！！」

ヴィオルは両手でそれぞれ二人の攻撃を防いだ。

でも、すこし違うけど、それは私の作戦通り！
必然と、ヴィオルは両手が塞がることになる！

だから――

「ラケーテン……ハンマーーー！！」

「づぅぅ――！！」

私が合図を送る必要は無かった。

ヴィータ副隊長がその一瞬の隙を突いて、ヴィオルに攻撃を繰り出した。

攻撃はヴィオルに当たる。

そのまま私たちを隔離してるビル郡に直撃、滑り落ちる。

「――やった？」

不意に口から言葉が出た。

と、突然ビル郡が溶けるように消えていった。

何で？

そう思うとコツンと私の後ろで音が鳴った。

振り向くとそこにあったのはヴィオルが持っていたスイッチ。

まぁ、ボロボロになって火花ふいてるんだけどさ。

とにかく、脱出することは出来たみたいだった。

ウィズの小部屋

ア《相棒ー。大変ですよ》
ウ「また突然だな。なんだよ？」
ア《冒頭でも書きましたが今回データが吹き飛んだらしいです》
ウ「……はい？」
ア《ですから、今回の話のデータが本当についさっき吹き飛んだらしいです》
ウ「え？じゃぁ、今回の話は？ちゃんと乗ってるけど」
ア《一時間程度で記憶を頼りに書き上げたモノです》
ウ「……マジ？」
ア《えぇ。ですから見直しも何もせずに掲載しています》
ウ「本当にゴメンナサイ」

ナイトホークさん

ウ「はい。頑張らせていただきます！」
ア《毎回更新して直ぐに感想をいただけますから。本当に嬉しいですよ》
ウ「ありがとうございます！」

翡翠さん

ウ「俺も少しびっくりした。ってかフェイ姉のも少し怖いんだっけ？」
ア《バルディッシュさんですよ。Ａｓｓａｕｌｔ（アサルト）、とは暴行、強襲、加害などそういう意味です》
ウ「フェイ姉は真逆の性格なのにな。やっぱモデルの問題？確か死神だろ？」
ア《それを言うならなのはさんは天使、はやてさんは悪魔ですよ？》
ウ「あー……うん。あくまでコンセプトって意味だな。人格には影響なし、と」
ア《あとで今の会話送っておきましょうか？》
ウ「あ、ゴメッ！ゴメンナサイ！！」
ア《まぁ、いいでしょう》
ウ「チクショゥ……」

秋風さん

ア《確かにあれくらい相棒でも覚えられますよ》
ウ「そうそう、俺でも……って、その【犬でも】的な言い方止めてくれないかな！？」
ア《分かってて言いました！！》
ウ「だからそれを止めろって言ってんの！！」
ア《まぁ、それは置いといて……新連載ですって》
ウ「最近アッチが忙しくてどこにも顔出してないもんなぁ」
ア《本当。うちのがスミマセン。近々読みに生かせて貰いますので》

ａｓａｋｕｒａさん

ウ「誤字訂正ありがとうございます」
ア《早速治しておきます》

シルフさん

ウ「今回俺なにもやってないのにヘタレ！？」
ア《まぁ、相棒ですし……それにしてもイラストですか》
ウ「うん。悪いんだけどやっぱり時間がないし、前言ったとおり芋蔓式に人が出てきそうだし。ゴメンナサイ」
ア《基本的に絵を描くのは好きなヤツなんですけどねぇ。コッチを優先しているそうですから》
ウ「本当にゴメンナサイ！」

Ｎａｋｉさん

ア《今回は炎を使わず終いでしたね》
ウ「雷は最後の方にちょこっと使ってたけどな。それにしても、流浪の侍って、あの引退抜刀斎？」
ア《と思いますよ。ただアイツは錬金の方しか読んでないんですよね》
ウ「うん。だからもしその予想が当たってても、答えられません！どうだ！？」
ア《いえ、全然威張れませんから。むしろ無知が知れたので恥ずかしがる所です》
ウ「……ゴメンナサイ」

サボテンさん

ウ「うぉ！？叫んでるなぁ……」
ア《なんなんだぁ！と言われれば……バカ？》
ウ「まぁ、カンペ出してるくらいだし。コイツもよく居るキャラだな。戦闘バカ」
ア《あ、シグナムさんに言いつけてやる》
ウ「なんで！？」
ア《ならフェイトさんがいいですか？》
ウ「どっちも駄目！」

樟葉櫂さん

ウ「だよな。sで有ってるよな？」
ア《というか主人公魔法少女がgの方の意味でもどこか納得できると言う時点でおかしいと思います》
ウ「まぁ、俺も勢いで前に立ったけどあの目が本気でマズかった」
ア《というわけでヒロイン一人脱落ですね》
ウ「脱落って……」
ア《まぁ、とにかく、これで私ルートへの可能性が――》
ウ「あ、ないない」
ア《酷い！！》

31．一糸の希望／FWの意地（後書き）

データが吹き飛んだ……八神煌斗です。

という訳で今回はかなり変だと思います。

もう複線も隠れてないですし……。

スミマセン。

少し疲れたので今回は特になし、で。

それでわ。

32．決着

ユリアｓｉｄｅ――――――――――――――――

「つっこめ！」

もう碓り節を踏む余裕なんか無い。
思考に少しの余力を残して割いた上でアヴェを出せる限りだして、飛ばす。
避けられてもいい。
とにかく今は時間を稼ぎたい。

割いた思考の一つでシグナムの事を横見見る。
実力的にはザッフィーの方が不味いけど……防御に徹すれば耐えられるって言ってた。

だから私は信じる。
別にシグナムを信じてないわけじゃない。けど、今のシグナムは……相手が悪い。

「ウィズ！」
「はいはい。なんでしょうかぁ！？」

シグナムの呼びかけに、斬撃で答えるウィズ。
ウィズの攻撃は拘束を外しているから、重い。でも普段のシグナムなら避けられるはず。
だけど、シグナムは攻撃を受け止めた。
明らかに鈍ってる。
早く決着をつけないと……不味い。

「ぐぁっ……！」
「シグナム！」

シグナムがウィズに押し負けて、六課の壁まで吹き飛ばされた。
少しの粉塵は巻き起こったけど姿はハッキリと見える。
だけど、ウィズの攻撃は休まなかった。
まっすぐ、壁に埋まっているシグナム向けて跳びこむ。

「まずっ……」
「行かせない！！」
「っ！　しつっこい！！」

シグナムを助けようとするけど、それもエストラに阻まれた。
とにかくアヴェを打ち出すけれど、エストラには届かない。
全てのアヴェは弾かれ、その場で消滅する。

でもエルトラの意識が一瞬でもそれればそれで十分！
私は体の負担を無視して、直角に動き、エストラの横を突っ切る。

「ちっ。いかせん――！」
「――ｃｒｅａｔｅ（クリエイト）・ａｖｅ（アヴェ）！――ｄｅｆｅｎｄ（ふせげ）・ｔｕｒｎ（まわれ）！！」

今度はちゃんと詠唱を踏む。
増援は来てないけど……今がウィズに接近できるチャンス。
この機会を逃すわけには行かないのよ！

私の目録どおりエストラの攻撃を防ぐ。
だけど今回はｔｕｎｅの節も踏んでるから、エルトラの周りを旋回して、動きを封じる。

今のうちに――！！

次に私の見た風景に、少しだけ私は衝撃を受けた。
それは決してウィズがシグナムを斬っていた、とかじゃない。
むしろ逆。
ウィズの刃が……止まっていたから。

side　out――――――――――――――――

映像は、ずっと見えていた。

「ウィズ！　いい加減目を覚ませ！」
「目はバッチリ覚めてんだよぉ！！」
「――ぬぅっ！！」
「シグナム！！」

うん、目は覚めてる。
でも動けない。

まるで人がプレイしてるゲームを眺めてるみたいだ。

――やめてくれ……。

俺の意思には関係なく、俺は口を開く。

――やめろ……。

俺の意思に関係なく、姉さんと斬りあっていく。

でも俺の体は全く言うことを聞かなくて……ついにシグナム姉さんが六課の壁まで弾き飛ばされた。

やばい。このままじゃ姉さんが……。

踏ん張る。けど身体は言う事を聞かずに姉さんに向かって走り出す。

――駄目だ……ヤメロ！！

ここで踏ん張らなくて、何の誓いだ！

俺はヘタレでも良いって思ったけど……負けても良いなんて、思ってねぇ！！

いい加減……言う事を聞きやがれ！！

「とまれ！！」

口が言う事を聞いたことに一瞬驚く。

だけど驚いてる暇なんてねぇ。もう腕は、刃はシグナム姉さんに振

り下ろされてる。

「づっ――！！」

ギリギリ、腕を止めることは出来だ。
けど安心は出来なかった。

今でも腕はまともに言う事を聞かないから一瞬でも力を抜いたら姉さんに切りかかる事になる。

そうはいかねぇ！！

「――ウィズ？」
「ねぇ……さん。…にげ――」

逃げて。そう言おうとした言葉も別の声にかき消された。

「シグナム！　シュランゲで拘束しなさい！！」

顔を声のする方に向けると、予想通りユリアだった。

コッチに凄い勢いで飛んできている。
そしてシグナム姉さんもユリアの声を聞いてシュランゲで俺を拘束した。

刃が身体に刺さる。……え？
体の自由が利き易くなった。なんで？
その疑問は、自分で答えることになった。

「いってぇ！　何しやがる！！？」

俺じゃない。けど、俺の口から出た言葉。
成る程。コイツも痛いのは勘弁ってことか。
必死な状態な時、頭のどこかでそう考えた。
その時だった。

「ユリア……」

絞り声は小さかったけど、ユリアにちゃんと聞こえたみたいだった。

「起きなさい、ベガ！！」

叫んだユリアの右手が、灰色の鈍い、それでも眩しい光を放つ。
そして光が収まった時、ユリアの手には指だしの紫色のグローブ…
…って。

アイツ、デバイスは使わないんじゃ……。

「ウィズ！　痛くても我慢しなさい！」
「な、に……言って……っ！　後ろだ……！」

ユリアの後ろから、エストラが見えた。
なんだか分からないが、ユリアはそっちを一切見ない。気づいてる筈なのに……。

ヤバイ。
俺は気を抜いたらまた自由奪われそうだし、シグナム姉さんは獲物が無い。

「シグナム、これっ！」

そう言ってユリアが作り出したのは一つの魔力で作り出した剣。
その形はまさに、レヴァンティンと同じだった。

シグナム姉さんはユリアと互いの剣の柄を持ち替え、エストラに切りかかる。
が、エストラはその攻撃を体を左右に振るなり、見えないシールドを張り全てかわす。

そして最後には後ろに大きく後退して、その右手を俺たちに向ける。

――っ、まずい！

「大丈夫」

ユリアがそう呟くと、俺たちをエストラを隔離するように緑のシールドが張られた。
これの色は――シャマル姉さん！？

「いくわよ！」
「つぅっ！！？」

俺の考えを遮った声の主もユリア。
そう言って俺の頭をユリアがガッチリ掴みやがったと思った次の瞬間、再び光出したユリアのデバイス。

「づっ……」
「あ、あぁぁぁぁぁぁ！！？」

言っていた通り、少しだが頭痛がし始める。

自分から叫び声が聞こえてるのに……そこまでの痛みでも苦しみでもなかった。

なら、苦しんでるのは……コイツかっ。

「穿(うが)て、ブラッディダガー！！」

その途中、はや姉の声が聞こえた。
ユリアの指の隙間から、見えた光景は、エストラに次々に地上から襲い掛かる緑の軛と、鮮血の刃。
そして、耳から入る音は電気が弾ける音と……。

「へぇ、嬉しい誤算ってヤツ？」
「……向こうも脱出できたみたいだな」

二人のそんな会話だった。

そして、俺の体は凄い勢いで急速に楽になって行った。

ユリアの手が離れる。

「……どう、調子、は？」

息絶え絶えになりながらも、ユリアは俺に確認を取ってきた。
俺もまだ違和感は残ってるけど、答える。

「多分、いける」
「そ、そう……。シグナム」

さっきの間にコッチに来ていたシグネム姉さんにレヴァンティンを渡すユリア。
姉さんの手に戻ると同時、レヴァンティンの拘束が解けた。

「って、おい！」

それを確認したと同時、ユリアの体から力が抜け、地上に落ちそうになった。
まぁ、シグナム姉さんが受け止めたけど……ゴメン。俺もなんだか限界……。

「ウィズ。肩」
「……フェイ姉？ありがと……」

いつの間に帰ってきてたのか、俺の隣に来たフェイ姉に肩を貸してもらう。
ん……？　今……。

「あーあ、失敗しましたか……」
「アング……ッ」

フェイ姉がそう呟いた。

「お、俺のせいじゃねぇからな！！　違うよな、エストラ！」
「いや。間違い無くお前のミスが一番大きい」
「そうですね。あのエースさんたちさえ出てこなければまだ手は有りました」

さっきまで姿が見えなかったヴィオルまで出てきた。
会話の内容からしてヴィオルは訓練場に居たってところだろ。
ん？　という事はなの姉たち……脱出できたんだな。

そう確信したのは、俺たちの前になの姉とヴィータ姉さんが壁に成るように間に入ったからだ。
俺たちの後ろにもはや姉とシャマル姉さんとザフィーラ兄さんが居るのも魔力で分かる。

「まぁ、手は無いわけでは無いので、今日の所は下がるとしましょうか」
「逃がすと思ってんのか？」

ヴィータ姉さんがアイゼンを構え直しながら言う。

確かに、この状況はコッチは断然有利。
この場で倒すのが定石なのは素人でも分かる。

「ま、そうでしょうが……」

アングがそこまで言ったとき、六課から警報が鳴った。

最初の火災警報みたいなモノじゃない、第一級警戒態勢のアラート。

アングの仕業だって言うのも、分かってる。

だけどここに居る全員、体に染み付いたモノで一瞬そっちに気が行ってしまった。

「それでは、さようなら」

「てめっ！　待ちやがれ！！」

ヴィータ姉さんが慌てて攻撃する。が、アングたちは一歩早く、その場から消え去った。

「え？　ウ、ウィズ！？」

そして、居なくなったのを確認したと同時、俺の意識は……遠退いていった。

ウィズの小部屋。

ア《相棒、最近ココで話すネタもなくなって来ました》
ウ「うん。それは一言目に言う台詞じゃないと思うんだ」
ア《では相棒、何か面白いネタを一つ言ってください》
ウ「何そのキラーパス！？」
ア《はい。３、２、１――》
ウ「え、マジで！？え、あ……ありません！」
ア《死んでください相棒》
ウ「死んで！？言いすぎだろ！？怪我するよりマシじゃん！」
ア《保身に走って詰まらないどころかガッカリさせられました。読者は満場一致で死ねを思っているでしょう》
ウ「ゴメンナサイ！」

ナイトホークさん

ア《誤字報告ありがとうございました。良かったですね相棒》
ウ「うん。後一話遅れてたらトウギのヤツに居場所取られてた……」
ア《まぁ、今回も色々な意味でギリギリですけどね。最後には気絶オチ。これ何度目ですか？》
ウ「面目ない……。で、でもコレで主人公滞留だよな！？」
ア《さぁ～》
ウ「え？何その反応？」

翡翠さん

ア《確かに相棒よりもバカですよね》
ウ「だから何で俺を引き合いに出す！？」
ア《一番身近に居た比較対象だったからです！》
ウ「お前そんな目で見てたの！？」
ア《なにか？》
ウ「……。あ、アイツだけど早速ＵＳＢを買いに言って保存したらしいよ。ありがとう」
ア《バックアップ何も取っていませんでしたからねぇ。今回の話も結構ギリギリに書きあがったらしいですし》
ウ「ギリギリってか遅れてるよな」

サボテンさん

ウ「どうだ！？一切予想通りじゃなかっただろう？ガッカリしたか！？」
ア《今回の話読んで舌打ちしてますね、きっと》
ウ「なんかそれ逆恨みの臭いがしますけど！？」
ア《相棒のヘタレが見たい人の様ですからね。当たり前でしょう》
ウ「そんな期待されるのイヤだ！」

樟葉櫂さん

ウ「うわぁ、怖いもの知らずだなこの人」
ア《絶対に向こうでボコボコにされてますよ。見たいですねぇ》
ウ「俺は巻き込まれそうだからパス」
ア《面白そうですのに。あ、一応気づいているとは思いますが次回、

ユリアの理由を語る予定です》
ウ「とりあえず、今回の騒動は一段落と言う事で」

秋風さん

ウ「復活した！復活したからシャマル姉さんの料理は送ってこないで！」
ア《ならば例の技でココを破壊してもらいましょうか？》
ウ「それもイヤだ！！」
ア《あ、でもシャマルさんにさっきの台詞送っておきました》
ウ「……え？」

Ｎａｋｉさん

ウ「戻ったよ、我が心の友よ……」
ア《戻りやがりましたよ、我が姉妹よ》
ウ「戻りやがった！？お前そんな事考えてたの！？」
ア《当然でしょう！！》
ウ「俺の事好きなんだよな！？」
ア《それとこれとは無関係です！いい加減私に主人公の座を譲りなさい！》
ウ「お前印象悪いよ！？」

32．決着（後書き）

はい。今回もなんとか仕上げることが出来ました。

いつもはいくつかストックを残しているので。

それが無いというのはかなり厳しいですね、精神的に。

とりあえず次回からはまた暫く日常パートなにでストックできそうです。

それでわ！

33．本物と偽者

「っ……」

目が覚めて、同時に起きた頭痛に目を細めた。

「目が覚めたんですか、相棒」

《グーテルモルゲン、マスター》

「……なんでアナザー？」

《私は無視なのか？》

次に見たのは俺の視界に入った何故かアナザー装備でレイラをその手に抱えてるアテナだった。

「あぁ、コレはシャーリーさんが直して――って、開口一言目がそれですか……」

いや、だって。

事の次第は一応全部覚えてるし、ココだって医務室だろ？

――ん？

「なぁ、ココ六課じゃないよな？」
「はい。ここはアースラです」
「は――はあぁぁぁぁ！！？」
「うるっさい！」
「へぶ！？」

叫んだその瞬間、俺の顔に強い衝撃。
その場にうずくまる。

「見事に決まりましたね」
《人間の首はあんな角度に曲がるものだったのだな》
「いえ、あれは相棒だけですよ。まだまだですね」
《む、むぅ……》

こらこら、そんな会話してないで俺の心配をしてくれないのか？
メッチャ痛いんですけど……。

「コッチは頭痛が酷いんだから、静かにしてくれない」

シャッ、と音が鳴ってカーテンが開いた。
そこに居たのは頭を抑えた不機嫌な顔をしたユリア。
成る程、さっきのはアヴェか……。

「……俺だって病人だぞ、コラ」
「知るか」
「ゴメンナサイ」

え？　何か凄く怖いんですけど……？
俺そんなに変なこと言ったかな？別にいつも通りだったと思うけど。

「はぁ、もう良いわよ。どうせ様子見に来ただけだし。ほら行くわよ」

暫く俺を睨んだ後、ため息を付きいつもの感じに戻ったユリア。

「行くって、どこにだよ？」
「ブリッジ。アンタの目が覚めてたらつれて来いってクロノに言われてたのよ。状況説明もしないと駄目だしね」
「あぁ、そういうことな」

アヴェで攻撃されて忘れてたけど、ここって六課じゃなくてアースラなんだよな。

一応映像は見えてたから分かるけど、六課はＪＳ事件の時みたいに大破した訳でもない。
それに、クロノまで居るみたいだし……俺だけじゃ予想も出来ないし、予想した所で意味も無い、か。

「分かった。直ぐに行く」
「了解、って言いたい所なんだけどね……」

そのまま医務室を出て行くとばかり思っていたユリアは表情を引き締め俺の方によってくる。
そして腰を曲げてベッドに座っている俺の視線に合わせて、こう言った。

「今から右手でアンタの右頬を殴るわ。受け止めなさい。3、2、1――」
「へ？　――づっ！？」
《マスター！？》
「ナイスヒット！」

ユリアはその言葉の通り、俺の右頬をカウントを取った後殴った。

俺は何も言えない。いや、アテナがいい感じに壊れてるからとかそういう意味じゃなく。
それは状況が理解できなかったからでも、ユリアの行動の意味が分からなかったからでもない。

震える自分の右手をじっと見つめる。

――反応が……遅かった。

「ちっ……やっぱり、ね」

殴った本人は俺の状態を予想してたみたいで、腕を組んで苦い表情をしてる。

「おい、これ……」

「どうなの？　ズレはどれくらい？」

言葉を遮り質問してくる。

俺はベッドの上で軽く体を動かして、確認を始める。

手、腕、肩、首、腰、足。

が、異常は特に見当たらなかった。

そのことをユリアに伝えると、少しホッとした表情になった。

「つまり、反射的行動が鈍るって事か……。良かった。それなら修復できる」

「ユリアさん。教えてください。どういうことですか？」

「俺も同意見。自分だけで納得してないで教えてくれ」

アテナと俺の質問にユリアは少し考えるそぶりを見せる。

が、それも本当に一瞬。
手を腰に当てて説明を始めた。

「簡単よ。第四拘束を長時間解いてたからその反動でしょ。ショートしてるのと同じ」
「ショートって……元通りに戻るのかよ？」

それが問題だ。
これからのことも有るけど、そもそも今回の事件だってまだ片が付いてない。
ここで離脱だけは、イヤだ。

「それは大丈夫。絶対に治してあげるから」

だけどユリアは俺の不安をよそに、いつも通りの軽口で帰してきた。

「ま、方法とかはまた今度。今はブリッジ」

ブリッジの扉が開き、俺をユリアは中に入る。
アテナはずっと肩の上。

「つれてきたわよ～」

中にはクロノとはや姉。そしてシグナム姉さんが居た。

ユリアは階級とか関係ないと思ってるだろう、あの態度。

俺は一応皆の前だから敬礼をしておく。

が、クロノが直ぐにいつも通りで良い、と言ったので直ぐに崩す。

「なら……早速だけど、何でアースラ？」

「それなんだが、先日例の襲撃事件、僕が受け持つことになった」

「アングたちの目的は海鳴のホールやから、アースラで次元移動することになったんよ」

クロノに続いてはや姉が説明をしてくれる。

まぁ、アースラの理由は分かった。

襲撃事件、って事はつまりアングたちを追うことだろ？

そしてつい最近、クラウディアを地球の近くで見かけたらしい。

その部隊は長期航行中だったから単に見ただけだったらしいけど……。

で、追いたかったんだけど、クラウディアはアングたちがパクったまんまだし足が無かったと。

アースラなら稼動も十分出来るし、直ぐに動かせたってところか。

……うん？

「ちょっと待って。なら何で俺たちまで？クラウディアスタッフで十分だろ？」

なんで俺たち六課メンバーまで出て来てんの？
担当はクラウディアスタッフだろ？

ココから見ても何人かのスタッフは六課隊員だし……。

「クラウディアの武装隊も優秀やけど……流石に心持たない、というのが本局も考えらしいんよ」
「まぁ、恥ずかしながら僕も同意見なんだが……」
「あ、成る程」
「それに、六課も例のウイルスのせいでまともに稼動できないしな」

成るほどね。それでに六課の一部だけアースラに搭乗、残りは六課の普及作業中ってとこか。
ん～。大体見る限り、前線メンバーと管制室メンバー数人ってとこだな。

「あと、ココには居ないがユーノも後で合流予定だ」
「ユーノさん？　なんで？」

聞くとマジックホールはあまり知られておらず、クロノでさえ知らなかったらしい。
となるともしもの時の為に知識がある人物が必要。
で、無限書庫員に矛先が向いたらしいんだけど……デスクワークが中心の人ばっかり。
ユーノさんを除いて既知人は全員拒否したらしい。

よって、本局はしぶしぶユーノさんをこっちに遣したらしい。
……今頃他の部隊はてんてこ舞いになるだろうなぁ。
いや。ユーノさんも合流する為に走り回ってるだろうけど。

「あ、ならアースラが向う所ってもしかして……海鳴？」

俺が聞くと三人とも頷いた。
やっぱり。

「明日、ミッドを発つ予定だ。それまでは体を休めておけ。先も色々あったみたいだしな」
「あ、その事なんだけど、私から一つ」

クロノに続いて発言したのはユリア。

「少し医務室貸して欲しいのよ。コイツ、厄介なことになってるから」
「厄介？」
「ユリア！？」

つい大声を出してしまった。
ココで普通にしていたら何も無かっただろうけど、俺の大声で皆いぶかしんだ表情になる。

「あのね、私よ家族してるはやてには言っておいた方が良いでしょうが」
「そういう問題じゃねぇ！」

何を言うのかと思ったら……。
コイツ、一番言って欲しくないことを一番知られたくない相手に言いやがった。

「ウィズ、どういうことや？」
「教えてもらおうか。現状の戦力を把握しておくのも、私たち上の仕事だ」
「ぬ、ぬぅ……」

二人の威圧が凄い。特にはや姉。

向こうサイドのクロノさんまで震えてますよ！？

結局、威圧に負け全てを話したのでした。

――で。

例の如く俺たちの周りの空気が重くなりました。

だからイヤだったんだ。

「大丈夫よ。この程度だったら私が治せるから」

「本当か！？」

この空気の中、ユリアが言った。

さっきも言ってた気がするけど、俺は思いっきり食いつきました。

「コレくらい出来なくて守護騎士なんて名乗らないわよ。……コレを使えば、治せるわ。ベガ」

短くそう呟いて、ユリアの右手が灰色に輝きだす。

そして俺は思い出していた。俺が体を取り戻す際にも、ユリアの手はこうやって光っていた。

光が収まって、ユリアの右手には指だしの黒いグローブが付けられていた。

あれ？　でもユリアってデバイスは足引っ張るから使わないって言ってただろ？

「あぁ、あれウソ。どれだけ分割思考できても、補助が有る事に越したことないし」

なんてシレッと手を振りながら言いやがった。

「なら何で使わへんかったん？襲われてた時とか」

「ベガ……私のデバイスはあるデータが9割以上を占めてるのよ。元々ベガはお母さんが地球にいた時に万が一を考えて作ったデバイスだし。だから」

「デバイスとしての役目を果たさない、ということか。成る程。ユリアにしろ母にしろ、その子拘束分割思考（ハイスピードマルチタスク）が有れば不自由ではないからな」

「正解」

シグナム姉さんに軽く微笑んで返すユリア。

「で、そのデータの正体が――」

「ウィズを治す、治療魔法、ってことだな？」

「まぁ、魔法って言うよりプログラムだけどね」

と、フィンガーグローブを付けている右手を開いたり閉じたりしながら答えるユリア。
別にいいけどよ、プログラムって言うな。

「で、医務室は借りていいの？」
「構わない。好きなだけ使え」
「ありがと。あ、シャマルも借りるわよ？手伝えそうなの彼女だけだし。じゃ」

そして俺とユリアはブリッジを出て早速医務室へ向かう。

「そういえば俺のはどうやって治すんだよ？」
「覚えてる？　私がコレで頭掴んだの」

そういえば頭の隅に残ってたのを思い出し、俺は素直に頷く。

「そういうこと。あれで体を調整する」
「ふーん。まぁ、俺には良く分からねぇから任せる」
「あたりまえ――」
「待て」

軽く方法を聞きながら歩いていると後ろから声をかけられた。
声の主はシグナム姉さんだった。
その声にユリアも足を止め、姉さんの方を見る。

「なに？」
「私はまだ理由を聞かせてもらっていない。教えてもらおうか？」
「……理由って、あのウィズが偽者って話？」

シグナム姉さんは無言で頷く。
これでまた少し、この場の雰囲気が重くなった。

「簡単な話よ。ウィズ、アンタ脳みそだけで生きられるって知ってた？」
「そういえばアイツがそんな事言ってたなぁ……ん？　どうしたの？」

俺が答えるとシグネム姉さんが少し驚いたような、納得したような、複雑な顔をしていた。
ユリアはユリアで、こういうことよ、とか言ってるし。

「ウィズが知らない情報を、持ってる訳無いでしょう？　そもそもシグナムだって噂程度なのに言い切ってたしね」
「……それだけで偽者と判断したのか？」
「まさか。他にも肉体が追い付かない程の運動能力とか、シグナ

ムの事を烈火の将って呼んだり色々あったけど……それでも良く見て7：3って所でしょ。情報に限っては色んな所から入って来るんだし」

「なら何故？　アイツが本物だったら――」

「関係ないわね」

何度も食いつくシグナム姉さんに、ユリアは尚も軽く返す。

「私はコッチのウィズを守るって決めたの。あのままだったらコイツが押しつぶされてもおかしくなかったし」

「……ならあのウィズは――」

「消したわ。今からする治療もアイツを消す作業じゃなくて、ウィズの体の為だし」

まぁ、目が覚めたのは少し意外だったけど。といって俺の方を見るユリア。

「それに、シグナムも覚悟は決めてたんでしょう？」

「……あぁ」

今度はあの目を細めた挑発的は目でシグナムを見る。

その問いに姉さんは頷いた。

「あれが本物だったとしても、私にとっての本物はそちらだから

な。……迷いが無かったと言えば嘘になるが」
「それが正しいわよ。私だって最初は消して良いか悩んでたし」
お互いため息と付く。
「ま、そういうことよ。納得した？」
あぁ、とシグナム姉さんは頷き、そのまま戻っていった。
「よかったわね？」
「……あぁ」
ウィズの小部屋
ア《相棒、復活したのにまたハンデ持ちですか？》
ウ「やっぱり全部良しで終わらなかったみたいで……」
ア《まぁ何となく予測はしてましたけどね。こういう時に完全復活は中々しないですもんね》
ウ「それにしても、次回からミッドから海鳴にステージが変わるんだよな？」
ア《元々穴が海鳴に有りましたから。コレは皆さん予想通りだったかと》

ウ「もう少し上手く複線を引けないもんかねぇ」
ア《無理でしょう。出来るなら既にやってますでしょうし》
ウ「だよなぁ」

ナイトホークさん

ア《私は出番が増えていいですけどね》
ウ「うぉい！？」
ア《ココにある一枚の紙に寄りますと、レイラを相棒に持たせたのはトウギに使わせるため、だそうです》
ウ「留置所に入れられてたらデバイスなんか持ってる筈ないもんな」
ア《その後は日常パートのシンボル予定だったようですが……何分日常パートが少ないですし》
ウ「つまり計算ミス、と？」
ア《はい。とりあえずこれからどうにかして行くそうです》

秋風さん

ウ「やーいやーい。適当に撃ったからコッチには当たってないぞ。どうだ、参ったか？」
ア《相棒威張れません。というかそんな風に言ってたら今度は直撃されますよ》
ウ「いいの。不思議な力でアッチからの一方的な攻撃は受け付けないから」
ア《凄い技術を無駄にしている気がします》
ウ「……それ言うなら今回復活したアナザーの方がよっぽどだろ？」
ア《何を言ってるのですか！？あれほどこの作品に必要なモノは無いですよ！？》

ウ「何でそんなに自信満々!?」
ア《仮に無駄だとしても、読者が望んでいるのは指輪姿ではなくアナザーの私です》
ウ「いや、まぁ……それはそう思う。ゴメンナサイ」
ア《よろしい》

灰色の野良猫さん

ア《何を言ってますか。私の半分はやさしさで出来ています》
ウ「どっかの風邪薬がそんなキャッチコピーだったな」
ア《言いえて妙ですね。それは暗に私が相棒の薬だということですか?常備薬みないな》
ウ「違うから!何で俺中毒者みないな扱いになってんの!?」
ア《?相棒は私が居なくては禁断の症状がでる――》
ウ「でないから!俺にまた変なイメージ出来ちゃうからやめて!!」
ア《今更でしょ……》
ウ「その目やめて!!」

翡翠さん

ア《あれま。そっちも被害を受けましたか》
ウ「もうコッチはあれから無駄に頻繁にバックアップしてるらしいな」
ア《ま、翡翠さんのショックも私の笑顔に癒されたそうですけどねっ》
ウ「本当に好きなんだな。……って、俺ついで!?」
ア《仕方ないですよ。私に比べれば全てが下になります》
ウ「凄い自信だな、おい!?」

Ｎａｋｉさん

ウ「ラディーーーー！！」
ア《グッジョブ！》
ウ「グッジョブじゃねぇよ！あれ絶対に死んでるって！大丈夫なの！？」
ア《まぁ、我が妹ですし加減は弁えてると思います。多分》
ウ「……そういえば妹って、お前にはレイラが居るだろ？」
ア《あんな姉の恋人を狙っているようなのは妹では有りません》
ウ「恋人！？俺そんなんじゃないよ！？」
ア《私は従順な妹が欲しかったのです》
ウ「従順って……言い方悪いよ」
ア《そうですか？》

サボテンさん

ウ「もうイヤだ。今回の俺の何にガッカリしなんだよ。死ななかった事か？」
ア《ディムＲＰさんも言ってくれてますが、流石に死ねと言うのは言いすぎかと……》
ウ「そりゃ俺はヘタレがウリだし、二次キャラだけど……グサッときたよ」
ア《感想を下さるのは嬉しいですが……言葉は本当に選んで欲しいです》
ウ「お願いします」

ディムRPさん

ウ「うわぁ、凄い読み込んでくれてる。嬉しいな」
ア《まぁ、少し深読みしすぎでしょうか。私が主導権を握っているのは相棒に上下関係を覚えさせるためです》
ウ「何それ!?……あ、照れてるな？」
ア《なぁ!?そんな訳ないでしょう!相棒は常に私より下なんです!》
ウ「照れ隠しにスゴイこと言いやがった!?」
ア《まぁ、それは置いておいて。確かに言われてみれば博士と相棒は話し方とか似てましたね》
ウ「そうなの？」
ア《まぁ、意識してないんでしょうが……そっくりです》

樟葉櫂さん

ア《本当に少し、ですけどねぇ。卒業にはまだまだですね》
ウ「ぐ、ぐぅ……。言い返せねぇ……」
ア《ま、主人公復活、戦況好転は王道ですからね。ま、その後直ぐに気を失ってましたけどね》
ウ「……面目ない」
ア《とりあえず、今後の活躍に期待します》
ウ「はい……って、良く考えたら何でお前にそんな事言われてんの!?」

33．本物と偽者（後書き）

腰痛に悩まされてます、八神煌斗です。

また十代なのに腰痛とか、大丈夫なんでしょうか？

とりあえず、次回からステージがミッドから海鳴に移ります。

深い意味はあまり無いんですけどね。

ようやくストックが一本たまり心に余裕が出来ました。

とりあえず後は一直線なので内容にもこまりません。

まぁ、それが文章に纏まらないので少しピンチでは有りますけど……。

それにしても最近コラボ小説が増えましたねぇ。

私も余裕が有ればどこかに参加したいんですが……。

ＮＯ打ち合わせだけはどうしても……。

あ、とりあえずこのＷｉｔＨの続編も構想中です。

まぁ、４月からは確実に更新速度が落ちるでしょうが……。

ある程度構成が固まったらまたお知らせします。

それでわ！

34．ハイペリオン・幼き記憶

「ハイペリオンを教えてほしい？」
「うん。お願いできないかな？」
「ん～……」

目が覚めて次の日、海鳴に到着予定の日。
到着は夕方頃になるらしく、俺たちはアースラの訓練場で訓練してた。
で、朝の訓練が終わって、治療に戻ろうとした時なの姉にそう言われた。

「別に構わねぇけど……なんで？」

とりあえず理由を聞く。

いや、別に教えるのは良いんだよ？
今日だって体がまだ不調だから外から言ってるだけだったし。
だけど何でハイペリオン？

ってか、一応なの姉も使えた筈だけど……。

「私、ティアナをチームの核に育てようと思ってるのは知ってる

よね？」
「うん。分析能力とか戦術立案がメチャクチャ早いから、だったっけ？」
「まぁそんな感じ。それでね。そうなって来ると戦場を色んな場所から見渡せるようになったらなって」
「それだと簡単な足場を作る魔法の方が良くない？」

確かに俺のハイペリオンは足場とシールド二つの効果があるけど、その分少しだけ複雑だし。

「それは大丈夫。ティアナなら朝飯前だよ」
「……」
「あ、ウィズ君！？　私が悪かった。悪かったから泣かないで！！」
「まぁ事実ですし、なのはさんが謝る必要は無いと思いますよ」
《と言うよりマスターが謝れ》
「なんで！？」
「主に私に」
「黙っててくれるかな！？」
《では私に……》
「それも違うから！」

最近レイラも良い感じに毒されてきてるよなぁ。
この前トウギに返したときは普通だったみたいだけど、いつかちゃんと返した時どんな顔されることやら……。

そういやこの前シャーリーさんに自分にもアナザーを作ってくれっ

て頼み込んだらしいし。

「それで、エリオは……まぁ、何となく分かるけど」

この前少し映像を見せてもらったから分かる。

ガリュー、だっけ。あのライダーもどきの虫人間みたいなの。

あれとの戦闘見る限り、年のせいもあるんだろうけど、まだストライダに引っ張られてる感があるんだよなぁ。

市街戦……というかビル郡の中では壁蹴りを応用して迫ってたけど……。

無かったらどうしても直線的な動きになる。

それでと言うことか。

「でもなの姉も一応使えたよね？」

「そこはほら、年季の差」

人差し指を立てて、可愛く言うなの姉でした。

早速その日の午後、俺はティアナとエリオの二人の前に立っていた。

「と、言うことで今日から少しだけ時間を貰って教えることになったから」
「はい！」「はいっ！」

いつも思うけど本当に良い返事するね。
何となくティアナが二割り増しくらいで元気に見えるけど何でかな？

「以前から一度聞いてみたかったので」
「そうなのか？なら調度良かったな」
「はい！　……それで、ハイペリオンって詳しくはどんな魔法なんですか？」
「あぁ。それからはじめた方がいいか？」

俺としては少し恥ずかしいから教えたくないんだけど……。

だが二人は同時に頷いた。
しゃーない、なら教えるか。

「ハイペリオンは、二人が知ってる通り足場とシールド、二つの性質を持った魔法だ」
「あの、一つついいですか？」

そこまで話して早速ティアナが手を上げた。

「ウィズさんってマルチタスクが苦手って聞いてるんですけど…
…なんでそんな複雑な魔法を？」

凄く申し訳なさそうに聞いてくる。隣のエリオは目を泳がせてるし。
別に良いんだけどな。事実だし。

「この人二つが限界なんですよ。スフィアだって五つまでは作れますけど、飛ばすだけですし……だから多少複雑になっても一つに纏めた方が良い、と言ってましたね」

隣で飛んでいたアナザー装備のアテナが口を開く。
良いんだよ、事実だし。でも言いすぎだと思うんだ俺は。

ティアナの疑問は当然の事だ。
なら何でそんな魔法を俺が習得しているか。

「元々ハイペリオンは俺が飛行魔法を習得したくて、四苦八苦してる時にな――」
「飛行魔法？」

エリオが首をかしげる。
普通は結びつかないよな。飛行魔法と、ハイペリオンなんて。

「練習しても練習しても成功しなくて拗ねてた時、俺を不憫に思った姉さんが作ってくれたんだ」

今思ったらコレくらい先のことも見越してたんだろうな。
あん時はなんで複雑にする上に選んだ付加効果がシールドなのか不思議だったけど。

「お姉さん……はやて部隊長ですか？」
「あぁ、違う違う」

そういえば二人は知らないんだっけか。
八神家の長女、俺のもう一人の姉さん……アインス姉さんの事。

「ま、それは置いといて、コレはその姉さんが造ってくれた魔法なんだよ。これだけは覚えといてくれ」
「はい！」「はい！」

二人共何かを感じてくれたのか、元気良く返事を返してくれた。
俺は早速二人のデバイスにハイペリオンのデータを送る。

「結構クセがあるから気をつけろよ？」

――「この魔法は少しクセがあるからな。そこを掴む所から始めたらいい」

俺も結構苦労したもんなぁ。
はや姉とかに見せたときも始めは苦戦してたし。
まぁ、その後直ぐに使えてたけど……。

そして案の定、二人は苦戦していた。

「えっと……あ、あれ？　固まらない……」
「僕は発動しません……」

ティアナは点滅はしてるモノの、オレンジのハイペリオンがほぼ出来上がってる。
が、なぜかエリオは発動すらしない。

コレはおかしいな。
俺でも失敗はしても発動はしてたのに……。

何が原因だ？

「アテナ、分かるか？」
「そういえばアインスさんがそれっぽい事を言ってた気がしますが……」
「お、マジで？」

「はい。ちょっと行って来ます」

俺の肩に座っているアテナには心当たりがあるようだ。
アテナは浮かび上がり、エリオの方に飛んでいく。
なら俺はティアナの方にでも行くか、と思い歩み寄る。

「どうだ？」
「術式は確かに簡単なんですが……クセが強くて力加減が難しいです」
「へぇ。ティアナもそう感じんだな？」
「私もってことはウィズさんもですか？」
「まぁな。力加減が上手く出来ない上に、術式が合わさらないんだよな」

あの時は本当にイライラしたなぁ。
術式はキッチリしてんのに、上手くできねぇし。
まぁ、今では片手間で出来るくらいにはなったけど。

「あの、コツとか教えてくれませんか？」
「コツなぁ……。たしか……」

――「一度に全体に魔力を通そうとするから溢れるんだ」

「……慣れるまでは、少しづつ流し込む、固める感じ、か？」
「流し込む、ですか？」

俺のアドバイスにティアナが首をかしげる。

「分かんねぇよな。俺もそうだったし」
「そんなアドバイスしたんですか！？」

苦笑いで返す俺にティアナの鋭い突っ込みが入る。
さすがスバルで鍛えられてるだけあるな。

でも最初は本当に分からなかったんだぜ？

そんな８歳の子供にそんな感覚的なアドバイスされても、なぁ。
いや、哲学的に言われたらもっと分かんなかっただろうけどさ。

「でも今のも大事だぞ？　ハイペリオンは単純だからこそ使いやすいけど、壊れやすくもあるからな」
「それは……何となくわかります」

それは良かった、俺は頷く。

この後も俺の講習は続いた。

が、悲しいかな。

やっぱりティアナも、あっという間に展開、上に乗る位のことは出来るようになった。

「跳び回ったり、シールドとしての硬さは期待できねぇけど、足場としては合格点、だな」

「ありがとうございます！」

俺より少し高い位置で、オレンジに光るハイペリオンに立つティアナに声をかける。

ティアナは返事をすると俺の位置まで降りてきた。

「この魔法は術式が単純だから、ティアナが他の性質を組み込むのも良いかもな」

「組み込む……ですか？」

「あいぼーー！」

会話の途中で声。

まぁ、アテナなんだけど。

そういえばエリオをまかせっきりだったな。

デバイスとマンツーマンとか、エリオに少し悪いことしたな、と思いつつそっちを見る。

「見てください。こんなんなっちゃいました」
「あ、アハハ……」

そこには妙に興奮気味のアテナと、困った表情のエリオ。
そして――。

「差し詰め【ハイペリオン・ブリッツ】と言った所でしょうか」

金色に光り、バチバチと特有の音と一緒に放電しているハイペリオンがあった。

「……私、六課に来てすぐの頃ならグレてたと思います」
「俺は今すぐにでグレたい気分だよ」

いやいや、コレが才能の差ってヤツなんだろうね。
って言うかさ。

「アテナ。お前どんなアドバイスしたんだよ？」
「私はアインスさんがフェイトさんやシグナムさんに言ってたアドバイスをしただけですよ」

そういやフェイ姉とスグナム姉さんも皆に比べて少し苦戦してたなぁ。

変換資質持ちの人には合わないのか？

「元々相棒専用に作られたモノですし、資質は邪魔になるらしいですよ」

ってか知らなかった。俺専用だったんだ。

……たしかにアインス姉さんも頭抱えてたなぁ。

あれ、俺の出来が悪いからだと思ってたけど、専用に作った俺が使えなかったからだったのか。

ん？

出来が悪いって意味じゃ一緒じゃね？

まぁ、いいや。

この後も俺の講習は続いていき、二時間経つ頃には二人共ほぼ完璧にマスターしていた。

……悲しくなんて無いぞ！

「ありがとうございました！」

そして特に大きな騒ぎも無く講習は終わり、二人を置いて俺は訓練スペースを出た。

「それにしても、ハイペリオンってそんなに色々考えてもらってたんだな」

「そうですよ。私にも何度も相棒のクセなどを聞きに来ていましたし」

「……全然知らんかった」

「だからこそ習得できない相棒を見ているのはつらかったものです」

「ゴメンナサイ……」

この後、六課に来てまともに教導したのが初めてだと気づいて、何とも言い難い心境になったのは、また別の話。

ウィズの小部屋

ア《相棒相棒。今回も私があまり出番がないことについて何か言い訳は？》

ウ「一言目がそれ！？ってか俺が言い訳すんの！？」

ア《当然でしょう。折角アナザーフレームが治ったのに……なぜ私が主人公ではないのですか？》

ウ「だから俺に言われても困るからね！？そもそも主人公は俺だし！」

ア《あ、第二の主人公ですね。分かります》
ウ「違う！第一！第一の主人公だから！そもそもお前はヒロイン目指してたんじゃないの！？」
ア《主人公、兼ヒロインです。なにか？》
ウ「欲張りすぎな。どっちかにしなさい」
ア《人間諦めたら試合終了ですよ？》
ウ「いい言葉なのに、前の会話からするとふざけてる様にしか聞こえない……」

ナイトホークさん

ウ「とりあえずそれもありだなぁ。と思ったらしく今回の冒頭に組み込んだらしいです」
ア《私は認めませんけどねっ。このフレームは私だけの特権なのに……》
ウ「あぁ、レイラのファンも居るって事だし。でも書くのはまだ先さしいけど」
ア《六課に戻らないと作れませんし、そもそも容姿も決めないといけませんものね》
ウ「それもだけど……レイラがどんな動きすんのか俺にも想像できねぇ」
ア《ある意味凄く不安定なキャラですからねぇ……》

銀吟さん

ア《誤字が多いのは自覚済みですし、そんな謝る事柄でもないですよ》
ウ「ま、そうだよな。って、俺は死ぬなよ宣言だけ！？」

ア《あぁ。また私の魅力に掛かった人が増えてしまいました……》
ウ「大明……ひろってのが特に好いてるみてぇだな」
ア《まぁ、私は相棒のモノですけど……。あとは相棒は犠牲になって皆さんを守るんで？》
ウ「いや。俺はとにかく生き残る事を考えるっ！」
ア《情けない……》

秋風さん

ウ「ゴメンナサイ。スイマセンでした」
ア《向こうがイライラしていたお陰で外れましたが……次はどうなるか分かりませんよ》
ウ「はい。もう乗り込んでこられても俺どうしていいのか分かりません」
ア《まぁ、あまり直人さんとは絡みがあるようでないですからねぇ》
ウ「いや。コッチに良く顔を出してはくれてるけどね。基本俺が暴走してるときに来るから話したことは実は少ないんだよなぁ」
ア《コッチに着てる回数は一番多いんですけどね》
ウ「それにしても翼の無い鳥、か。なんかカッコイイな」
ア《具体的に無能って事ですけどね》
ウ「ぐふぅっ！？」

翡翠さん

ウ「うん。分かった。全然ＯＫ、残しておいて上げる」
ア《相棒！？照れ隠しにしてはいささか度が過ぎた発言かと！？》
ウ「うん。照れ隠しじゃないもん。ってか俺そんなに鬼畜になるつもりないからね！」

ア《いいじゃないですか、鬼畜でも！自分に素直にならないと人生損しますよ！》
ウ「損どころか捨てる覚悟がいるよ！？」
ア《ならその覚悟を手に入れてください！》
ウ「意味がちげえぇぇ！！」

ＴＯＵＤＡさん

ア《なるほど、ユニットですか……。その手がありましたか》
ウ「いや、ないだろ。何で行き成り歌？」
ア《良いじゃないですか。最近やたらと無駄にＣＤ出してるとこ多いんですから。今更私一人だしても――》
ウ「その言い方禁止！なんか色んな所敵に回しちゃいそう！！」
ア《ま、一発屋と自覚して出しますのでショックは無いので大丈夫です》
ウ「違う！そういう意味じゃない！」
ア《まずは個人個人イメージソングから……》
ウ「俺の話聞いて！？」
ア《うるさいですねぇ。ほら。向こうで鍛えなおしてくれるそうですから行って来なさい》
ウ「いやだ！絶対にいきたくねぇ！！何か企んでるの見え見えじゃねぇか！」

サボテンさん

ア《そうですね、暫くはアナザーだと思います》
ウ「ハンデ持ちはやっぱつらいよなぁ」
ア《まぁ、大丈夫でしょう？主人公属性あるんですから》

ウ「サァ、サスガニサキノコトマデハワカリマセン」
ア《カタカナ！？》

ＧＰＳさん

ウ「いえ。こちらこそ感想を書けず仕舞いでスミマセン」
ア《向こうにも本編に一度出演まで させていただいているのに……
ウチのがすみません》
ウ「なんでお母さん風！？」
ア《それは置いておいて、そのスタンスは全然構いませんよ》
ウ「……まぁ、ケチ付ける理由もないしな」
ア《にしてもこの人も私の虜になりましたね》
ウ「本当にヒロインがお前みたいな感じに……」
ア《大自然の摂理ですね》
ウ「そんなに！？」

Ｎａｋｉさん

ア《やっぱりシグナムさんが出てくると引き締まりますよね》
ウ「うん。俺もそう思う」
ア《あとは……この人もレイラですか……》
ウ「まぁ、流石に俺もグーテルモルゲンはどうかと思うけど……絶
対にトウギに文句言われると思う」
ア《その時に文句を言われるのは相棒ですけどね》
ウ「なんで！？原因の殆どはお前だろ！？」
ア《１００歩譲って――》
ウ「譲らなくてもお前だよ！？」
ア《例えそうだとしてもあの人がデバイスに語りかけることは無い

かと》
ウ「うっ……俺もそんな気がする」
ア《と言う事で相棒がうるさく言われてください》
ウ「納得いかねぇー！」

３４．ハイペリオン・幼き記憶（後書き）

庭の梅が花を咲かせていました。八神煌斗です。

さて、今回はハイペリオンの秘密と、ほんの少しだけ過去のお話でした。

ＰＳＰのなのはが出てから時間軸はコッチにしようと決めていたのですが、導入するタイミングが無かった。今回導入できてよかったです。

いや、ゲーム出る前から個人的に結構好きなんです、アインス。

さてもう少しだけ続くのかな？

一応今戦闘シーンを書いているんですが……もしかしたら一回くらいお休みするかもしれません。

その時はまた連絡させていただきます。

それでわ！

35．束の間の休息【ウィズ編】

海鳴に付いて三日。

姉さん達は毎日少しずつだがサーチャーを設置しに艦を降りてる。
で、今日中にサーチャーを設置を終える予定らしい。

俺は艦内待機なんだけどな。

言うまでも無く、安全を考えてだ。
なの姉なんか笑って居てくれたけど、凄く申し訳ない気持ちで一杯だった。

そんな事を考えつつ、俺は何となくブリッジも扉を開けた

「ねぇ～、いいでしょ～？」
「駄目だ」
「ケチー！　だから出番が減るのよ！」
「なっ！？　人が地味に気にしてることを！」

「……なにやってんだ？」

ユリアとクロノが言い合いをしてた。
パッと見る限りはユリアがクロノにくいついてる感じだけど。

「あ、ウィズやんか。どないしたん？」
「いや、特に用事が有った訳じゃねぇけど……なにやってんの？」
「あぁ、アレなぁ」

そしてはや姉が説明をしてくれた。

「つまり、ユリアが町に降りたいって駄々を捏ねてる、と？」
「そういうことやな。私は別にええと思うねんけどなぁ」

頭を掻きながら言うはや姉。
まぁ、ユリアも言い分も分からんでもないけど……。

「はいはい。二人共そこまでにしぃや」

いい加減見かねたはや姉が二人の手を叩きながら仲裁に入る。

「別にええんちゃうかなぁ、クロノ君」
「はやてまで！？」
「さっすが、分かってる！」

はや姉の言葉にクロノは驚き、ユリアは指を鳴らす。

因みに俺ははや姉支持派。

だって……なぁ。
折角だから降りたいじゃん？

「なのはちゃんを付き添わせる、とかやったら別にええんちゃう？」
「そうよ！　それなら安全でしょ！！」

はや姉という味方を手に入れて、猛反撃と言わんばかりに畳み掛けるユリア。
対してクロノは不利になって後ろにたじろいでる。
俺なんかはもう慣れたモンだけど、女二人を敵に回すと威圧凄いからなぁ。

「私も外には出てみたいですねぇ」
「そん時はフレーム置いてけよ」
「何故ですか！？」

肩に座っていたアテナが大声をだした。
耳がキーンッって……。イタイ……。

「当たり前だろ。それともアウトフレームにでも成れるのかよ？」
「ぐ、ぐぅ……。相棒のクセに生意気です！！」
「何か理不尽に怒られた！？」

「……またジャレあってるんか？」

アテナと二人で騒いでると、何時の間にコッチに来たのかはや姉が俺の目の前に居た。

「え？　あ、あぁ、はや姉。なに？」

「クロノ君からは許可とれたよ。ウィズも出たいやろ？」

……本当に取ったんだ。

さりげなくクロノを見る。

うな垂れてた。そして隣には満足げな表情のユリア。

何言われたんだろう。

それが凄く気になった。

その後、俺ははや姉と一緒に行動すると言う事で艦を降りる許可を貰った。

「あれ？　はや姉だけ？」

予め決めておいた時間、昼過ぎに、転送ポート前に来るとはや姉しか居なかった。
当然、シグナム姉さん達も一緒だと思ってたんだけど……。

「そっちこそ、レイラはともかくアテナはどないしたんや？」

アテナはさっきアナザーにアウトフレーム機能を付けるとか行ってレイラと一緒にデバイスルームに篭った。
今回はレイラも連れて行ったところを見るとちゃっかりしてやがる。
その事を伝えるとはや姉は苦笑いをしてた。

因みにシグナム姉さん達だが――。

シグネム姉さんは、ルーテシアだっけ？
その子に会うためにミッド残ったアギトと連絡を取った後、訓練をするといって訓練質に篭っているらしい。
ヴィータ姉さんはなの姉たちと先に降りたらしい。
シャマル姉さんとザフィーラ兄さんは単純に居残りで、リィンはブリッジで辺りの監視だそうな。

「いつまでもココに居てもしゃーないし。行こか？」
「え、あ、うん」

そして二人で転送ポートに並んで、光りに包まれ始めたとき、ふと思った。

――はや姉と二人で出かけるの、何年ぶりだろ？

「うわ、さむっ！　なにこれ！？」
「湖沿いやからなぁ。この時期はちょっと辛いなぁ」

転送されたのは例のコテージ。
行ったとおり湖沿いだからメッチャさむい。
着込んできておいてよかった。

「寒いし早よ行こ。サーチャーの設置もせなあかんし」
「サーチャー？」
「クロノ君に頼まれたんよ。責めてコレくらいはしろーって」
「あぁ」

ただでは起き上がらないって事ね。

「にしてもクロノ君も結構な範囲指定してくれてなぁ。これ全部回ってると日が暮れてしまいそうや」
「え、マジ？」

「マジやマジ。ほら」

そう言ってはや姉が開いたモニターを横から覗き込む。
確かにコレは……きついな。

ってかコレ、順番間違えたら夜になるぞ……。
ただで起きないどころか確り仕返しまでしてきやがったあの野郎……。

ゆっくり町を歩きながらって思ってたんだけどな。
……仕方ない、か。

「はや姉。インビエルノ出すよ」
「持って来てんの？」
「うん。てか一応いつも身には付けてるんだけどね。あ、後ろ乗って」

はや姉と話しながらインビエルノを展開させる。
来るときは少し迷ったけど、持ってきておいてよかったな、なんて思いながら俺はインビエルノに跨る。

「あれ、どうしたのはや姉？」
「え！？　いや、何でもないんよ、なんでも」
「ん？」

何故かはや姉が乗ってこなかった。
さっき居た場所から動かないで、ブツブツ言ってた。
もしかして二人乗りに抵抗あんのかな？
乗ってない人には怖いらしいし。

「なんだったら歩いても良い……」
「大丈夫や！　バイクで行こ！」
「う、うん……」

なんか言葉を遮られた。
はや姉はそのまま、正直良く分からないテンションのまま後ろに乗った。
そしてはや姉のが手を俺の腰に――。
――って、ちょっと待て！はや姉、そういうことか！？
うわ、意識したらなんかドキドキしてきた……。

「どないしたん？」
「な、何でもありません！　サー！」
「ん？」

と、とにかく、バレねぇ様にしとかねぇと。

姉ちゃんにドキドキしてるって……マズイ、よなぁ。

なんて考えながら俺はぎこちない事を自覚しながら、インビエルノを走らせた。

そしてその後は本当に何も無く順調に進んだ。

クロノに指定されたポイントを順番に回る。本当にそれだけ。

途中昼飯でも食べようかと思ったけど、時間を取るし、コンビニで軽くだったし。

折角帰ってきたのに、本当に仕事だけで終わりそうだ。

「よし、設置完了！」

「おつかれ～」

で、日も傾き始めた今サーチャーの設置が全部終わったところ。

時計を見ると四時半を回ったところだった。

「何時頃までに戻ればいいんだっけ？」

「クロノ君は六時には戻って来いって言ってたわ。コテージに戻る時間考えると一時間も無い、なぁ」

「はぁ。中途半端に残ったもんだ」

ってかインビエルノ使ってコレだけ時間掛かるって……。
徒歩だったら間違いなく終わってねぇぞ。

「ならどうしよ？　帰る？」

非常に不満だけど、本当に時間が中途半端しか残ってないからやることが無い。
むぅ。
折角はや姉と出かけられたのに……覚えとけよクロノ。

「それやったら行きたい所あるねんけど、ええ？」
「ん？　それは全然構わないけど……どこ？」
「……丘」

「ん～……やっぱ寒いなぁ」
「まぁ日も暮れ始めてるしな。冬だし夜だし……本当に温暖化してんの、地球？」

俺たちが来たのは海鳴の町が一望できるあの丘。

……アインス姉さんが逝ったあの丘。

今から十年前に起こった事件、闇の書事件。
俺はその事件は外野に居たから詳しく内容とか、細かく知らないんだけどな。

事件後、俺には一人、姉さんが増えた。
その姉さんがアインス姉さん。

だけど、出会ったその時から姉さんと一緒に居られる時間は限られていた。

防衛システムの切り離し、解き放たれた闇の書の闇との戦闘。
システム切り離しの際に引きちぎられたアインス姉さんの根幹部分は回復しようの無いダメージを負った。

システム再生の不能、融合能力の喪失。
そして……緩やかな自己崩壊。

本来なら、アインス姉さんは自ら死を選ぶ筈だったと聞いた。

その身に宿した自己再生能力、それによって再び闇の書の闇を再生してしまう危険から、はや姉たちを守るために。

だけど、なんとも皮肉な事に、あまりに失い、無力になりすぎたから……。
数ヶ月程度で死を迎えるという現実と引き換えに、アインス姉さん

は、生きることを許されてしまった。
アインス姉さんは当時の俺にそう語っていた。
あの頃は難しい言葉ばっかで言ってる意味が殆ど分からなかったけど、な。

そうしてアインス姉さんは、残り僅かな時間を俺たちと一緒に過ごした。
わずかばかりの時間の中、たとえ、共に戦うことが出来なくても。
――強くなれ。騎士たちと共に並び、主を守れる程にな。

その頃だったな。
こう言って俺にハイペリオンを作ってくれたの。

数ヵ月後……時が来た。

アインス姉さんは最後に今を過ごしたこの町、海鳴が見たいといって、ココに来た。
皆を連れて。

そして……姉さんはココで逝った。

特に墓がある訳でもない。
だけど、アインス姉さんに会いに来るならココになっていた。

「（ただいま、アインス姉さん）」

空を見上げながら心の中で呟く。

「（まだまだ姉さん達の隣は遠いけど、ようやく形は、背中は見えるようになったよ）」

ふと、風が吹いた。

俺はそれが、姉さんが笑ってくれてるような気がした。

それから暫くしてふと時計を見るとそろそろココを出ないとまずい時間になっていた。

俺より少し離れた所で空を見上げてるはや姉に近づく。

「はや姉、そろそろ」

「ん？　もうそんな時間か？」

俺は頷く。

「ほな、戻ろか」

はや姉が俺の横に並んで歩き出す。

その時、それは起こった。

視界が一瞬他の色に染まり、元に戻る。

「なっ、結界!?」

「なんで……」

咄嗟に俺とはや姉は背中を合わせて辺りを警戒する。

結界。

結界を張れる魔道士なんて今の海鳴には俺たち位しか居ない。

「一体、誰が……っ!」

ココまで口に出して気づいた。

俺たちがココに来た理由。
ココに用があるヤツ。

アング……。

『はやて、ウィズ！　聞こえるか！』
「クロノ君！　何が起きてるんや！？」

俺とはや姉の通信が開く。
そこに写るのは慌てた様子のクロノ。

『直ぐに戻ってきてくれ！　ヤツ等が、動き出した』

ウィズの小部屋

ウ「と、今回はタイトルの通り。休日みたいな感じでした」
ア《私の出番が無いのがヒジョーに気になります》
ウ「まぁ、いくら人気があっても毎回出番が貰える訳じゃないって事だな」
ア《理不尽です！意味が分かりません！何ですか、私一言も話してませんでしたよ！？》
ウ「イヤ、だから俺の話聞いてた！？」

ア《そんなモノよりこっちの方が大事なんですよ！》
ウ「そんなモノ呼ばわりされた！？」
ア《もういいです！こうなったら署名活動を――！！》
ウ「お願いだからヤメテーー！」

二階堂さん

ア《立たせるなんてイヤです。勿体無い》
ウ「勿体無い！？」
ア《そうです。前回はまだ話に関係ありましたが、それ以外の話で相棒が立つのは無理があります》
ウ「無理まで言われた！？」
ア《だって、ねぇ？相棒だけで一話持たせるのは無理がありますよ》
ウ「ぐっ、ぬぅ……。いいよいいよ。昶は俺の味方みたいだし」
ア《社交辞令でしょう》
ウ「！！？」

ナイトホークさん

ウ「本当にエリオのアレにはビックリしたなぁ」
ア《アレから練習で普通の状態のも使えるようにもなっていましたし。既に性能面のみで見れば相棒より上ですね》
ウ「……ま、まぁそれでも俺のが頑丈で使い勝手がいいけどなっ！」
ア《見本のような強がりですね》
ウ「……」

秋風さん

ア《そうなんですよね。なのはさんたちも使う意味が無いので使いませんモンねぇ》
ウ「ってかクロロフォルムってあの眠らせる薬だっけ？」
ア《さぁ？雰囲気的に間違ってないと思いますけど》
ウ「なに考えてんの！？しかも鞭に針って……マリカさん俺のことどんな目で見てんの！？」
ア《そのままでしょう？というより相棒とユリアさんの図はなんだかエロいです》
ウ「……俺もそう思いました」
ア《変態》
ウ「お前がフッたんだよ！？」

灰色の野良猫さん

ア《そうですねぇ。結構苦労はしていましたねぇ。細かいところまで術式を構築しなおしていましたし》
ウ「え？そうなの？」
ア《えぇ。それは勿論。さすがは同一人物。苦労が分かるようですね》
ウ「だな。もう少しデキがよければ……」
ア《そんな無いものネダリを……》
ウ「うるさいよ！？」

翡翠さん

ア《スミマセン。こんな鬼畜でも私のマスターなんです》
ウ「鬼畜って所を認めちゃった？！」

ア《大丈夫ですよ相棒。私は許容量が大きいですので》
ウ「そういう意味じゃない！俺が鬼畜って所を否定して！？」
ア《ではなんと言えばいいのですか！？》
ウ「なんで逆切れしてるのかな！？」

サボテンさん

ア《接近攻撃を防ぐ時に役立つくらいでしょうかねぇ》
ウ「いやまぁ、それだけでも凄いんだけどな」
ア《というかやっぱり普通の人はアレは簡単にマスターできるみたいですね》
ウ「それは……うん。そうなんだと思う。まぁ飛行魔法が使える人は必要ないけど」
ア《陸戦でも相棒のような使い方できる人はそうそうは居ないですし。やっぱり相棒専用なんですねぇ》
ウ「だな」

ＴＯＵＤＡさん

ウ「まぁ、その辺にこだわりは無いからなぁ」
ア《実際、お姉さんたちも使えますからねぇ。使わないだけで》
ウ「ま、俺専用っていうのは初めてしったけど。それにしてもティアナもあの後やる気に割り増しくらいだったなぁ」
ア《何だかんだで悔しかったんでしょうね》
ウ「それにしても某最強の弟子ってなに？正反対の語句が繋がってるけど」
ア《さぁ？私もさすがに知りません》
ウ「ん～……」

GPSさん

ウ「どっちかって言うとヒントを出す教え方って感じだったな」
ア《ですね。答えを言わずに相手に考えさせる感じでしたね》
ウ「まぁ、その分笑顔のプレッシャーは妙に迫力あったけど……」
ア《それは相棒のデキがあまりにだったからでしょう。何度も作り直していたようですし》
ウ「本当に申し訳ないです、ハイ……」

Nakiさん

ウ「いいよ、使う？データ送っておくけど。ただクセが強いからマスターした人が近くに居ないと難しいかも。俺も最初は製作者のアインス姉さんに教えてもらったし」
ア《それにしても物好きですねぇ。しかし加速して突っ込めばいくらハイペリオンでもトマトになりますよ？》
ウ「大丈夫じゃね？何だかんだで凄いヤツっぽいし」
ア《ま、私としてはそれでセラフィムさんが主人公になれる様なので良いですけどね》
ウ「よくないよ！？」

35．束の間の休息【ウィズ編】（後書き）

最近つまり気味です、八神煌斗です。

今回の最後を見てくれれば分かると思いますが、最終決戦前の休息みたいな感じです。
もうお決まりのパターンですよね。

あ、今回のあのアインスの説明？見たいなのはＰＳＰ版から粗抜粋です。

で今その先の戦闘シーンを書いてるんですが……なにこれ？
今まで一対一しか書いたことないのに多対多に持っていってしまったがばかりに大変なことになってます。

ま、次回ではないんですけどね……多分。

後は前回のアインスが製作者という事について少し補足を。
元々アテナに入ってる魔法はスフィア系とアーラのみです。
それ以外は基本後付です。

アインスが製作者なのはＰＳＰ版が出る前から一応決めてました。
まぁ、本来は覚醒前から、シグナムたちの感情が流れてきていて消えるまでの少しの間につくった、という感じでしたが。

それでは。
また二日後にお会いしましょう。

36．束の間の休息【ユリア編】

「なぁにやってんのかしらね」
「アタシはゼッテー認めねぇからな」
「にゃはは……」

ウィズ達から少し遅れること数分。
転送ポートではのはとヴィータと地球に下りて直ぐ、その光景に出くわした。
それを隠れて覗いてるって訳。

「ね。やっぱり覗くのは駄目かなぁって思うんだけど……」
「それ、目を離して言わないと説得力無いわよ」
「……うぅ」

まぁ、色恋沙汰には縁が無いみたいだし、興味があるのは分かるけどね。

「え、縁が無いって……そういう訳じゃないよ！？」
「あれ？　なのはそういう相手居たの？」

意外。
そういうの全く関心がないものだと思ってたけど……。

「そ、そういう訳じゃないけど……」

「……本当に居ないの？」

「アイツからしたら居ないんじゃないか？」

「なにそれ？」

目を逸らしたなのはが気になってヴィータにこっそり聞いてみた。
けど返ってきたのはこんな感じの言葉。

含んだ言い方なのが気になるけど……全く分からないわ。

と、こんな感じで覗いてたら二人はバイクに跨って走り出した。

「さて、私たちも行こうか。サーチャーも仕掛けておかないといけないしね」

「それなんだけどさ。なのは、これ見てくれねぇか？」

なのはにモニターを開いて見せるヴィータ。
それをなのはが横から覗いて、表情に疑問が浮かんだ。

「あれ？　こんなに範囲狭かったっけ？」

「だよな？　アタシたちの担当はもう少しあった筈だけど……」

「あ、それ私」

手を上げる。
そういえば二人には言ってなかったっけ。

「私がこっそり弄ってね。殆ど押し付けちゃった」
「押し付けたって……まさかウィズ君たちに？」
「だからさっきマップみて固まってたのか、アイツ」

頭を抱える二人。

「だって、あんなにあったら町回れないじゃないのよ」
「回れないって……私たちの仕事……」
「ま、いいんじゃねぇか？」

腕を組みながら、ニヤニヤしてるヴィータ。

「ヴィータちゃんまでぇ」
「ま、良いじゃないの。私たちは残りの分チャッチャと済ませちゃいましょ」
「でもこれ、二箇所だけだよ？」

いいのよ。

毎日ウィズの治療で疲れてるんだし、コレくらい報酬報酬。
さて、それじゃぁ――って。

「ねぇ。私たち何で行くの？」
「なにって歩いてに決まってんだろ？」
「えーー！？」

歩いてって、いくら二箇所でも時間掛かるじゃないのよ……。
なんでもっと近い所を残しておかなかったのかしら……。

「いつまでも落ち込んでないで行くぞ」
「……はぁ。わかったわよ」
「あれ？ちょっと待って」
「ん？」

イヤになる気持ちを抑えて、歩き出そうと思った時になのはがストップをかけた。
私は足を止める。

と、私たちの目の前に一台の車が止まった。

「やっぱり！　来てたんだ」
「アリサちゃん！」

車から降りてきた短髪金髪の女性。
その女性になのはが駆け寄る。

「どうしてココに居るの？」
「さっきはやてとウィズっぽいのを見かけた気がしたからもしかしたらって思ってね。一声掛けてくれたら良かったのに」

名前は、アリサって言うみたいだけど……。
随分仲が良いみたいね。

「あ、ユリアちゃん。紹介するね」
「アリサ・バニングスよ。よろしく」

そう言って私に握手を求めてくる。

……そう言えばさっきウィズを見かけたって言ってたわね。
良い事考えた。

「始めまして。神崎ユリアです」
「……神崎？」

私の苗字を聞いて首を傾げたユリア。
なのは達の時もそうだったけど、やっぱりこういう表情っていいわよねぇ。

じゃ、最後に……。

「妹です」
「へぇー。アイツの妹……妹！！？　はあぁぁぁ！！？」
「あ、アリサちゃん！　落ち着いて！！」

「良いわねぇ、こういうの」
「お前、分かっててやっただろ？」
「まぁね」

「ふーん。生き別れ、ねぇ」

結局１０分程モメた後、つい最近ミッドで再開した妹、そんな感じで落ち着いた。
ま、本当の事をいう訳にはいかないし、嘘でも無いから良いんだけどね。

それでなのはが今の状況を説明する。
すると――。

「そう言う事なら。乗ってく？」
「あ、良いの！？　やったね！」

「でも良いの？アリサちゃん大学は？」
「時期を考えなさいよ。冬休みってやつよ」

冬休み？
あぁ、冬季長期休暇のことか。

それなら遠慮することは無いわね。

途中なのはが「友達って言っても民間人に手伝わせちゃったけど…
…良いのかな？」とか言ってたけど、私には関係ないない。

「っと、設置完了」
「終わったーー！」

と、そんな感じで一時間程で設置は終わった。

よしっ。
思いの他早く終わったし、良好良好。それじゃぁ――……。

「なのは、この辺にお菓子屋さんってある？」
「お菓子屋さんって、家がお菓子屋さんだけど……ユリアちゃん
どうするつもり？」
「どうするって、買い食いに決まってるじゃない」

何言ってるのかしら？
それ以外にやる事なんてないでしょ。

「クロノにも元々は艦を降りる許可を貰っただけで、サーチャーの設置はそのついでだしね」
「ついでって……」
「だって本当だもーん」

「あのいい加減な所みると、ウィズの妹って本当なのね」
「まぁいい加減は別として、似てるところは多いな」
「ふーん――……」

向こうでも何か言ってるけど……。

外見はともかく、中身はそんなに似てるところなんて無いでしょ。
私あんなにヘタレなんかじゃないし。

「とにかく！　用事も済んだんだし、戻って来いって言われた時間までまだあるんだし良いでしょ？」
「ん～～……」

手を顎に沿えて悩むなのは。
ま、この後結局折れたんだけどね。

で、なのはの実家……翠屋に向かう。
その途中に翠屋がどんな所か聞いたんだけど……。

「……洋菓子？」
「あれ？　ユリアちゃんどうしたの？」
「ん～。個人的には和菓子を予想してたんだけどねぇ」
「和菓子？」

私の頭の中にあるお母さんの記録。
その中に何故か強く残ってる記録がその和菓子。
どの和菓子って訳じゃない。和菓子全般。

どうにもお母さんは和菓子が大好きだった見たいなのよねぇ。
ただお母さんと一緒に居る頃は研究施設から出たこと無かったし、、
アング達と居てもそれは殆ど一緒。
というかそのそもミッドに和菓子自体がそんなに売ってないし。
六課に来てから少し探してみたんだけどね。

今回降りたかった理由もそれ。
地球の日本発らしいから、本場のが食べれるとおもったんだけど……。

「ま、コッチの話。それより、美味しいんでしょうね？」
「それは大丈夫よ。翠屋って凄く評判良いんだから」

なるべく気落ちしてるのを悟られないように返事を返して、車に乗り込み、翠屋へと向かった。
なんだあんだで少し気になってたしね。

なんだけど

「……なにこれ？」
「そう言えば時期的にそうだったわねぇ」
「すっかり忘れてた……」

翠屋の前で四人で立ち尽くす。
理由は簡単。
扉の前に張られた紙が原因。

【12／17～12／22までの間、お休みをいただきます】

なのはが言うには地球にはクリスマスっていうモノがあって、その間は特に忙しくなる。
だから少しだげ時期をずらして店を休みにしてるらしい。

「多分、温泉にでも行ってるんじゃないかな」
「ならここも却下？」
「ううん。鍵はあるし、私が作ろうか？」
「……へ？」

そして場所は変わって翠屋の中のキッチン。
エプロンをしたなのはは冷蔵庫の中身を確認してる。
因みにヴィータとアリサは出来るまでって、公園の方に行った。
なんだっけ。ゲート何とか仲間を見つけたとか何とか。

「何か作れそう？」
「一応ケーキ位なら……。果物とかはやっぱり無かったけど、スポンジとクリームがあったから簡単なのは」
「へぇ～」

そう言って取り出したスポンジをクリームを見て感心する。
だってこういうむき出しのスポンジって見たことないし。
というか本当にこんなのがケーキになるの？
私が興味で見てるとなのはが何かを混ぜだした。

「何やってんの？　ジュース？」
「フフ。違うよ。これ生クリーム作ってるの」
「これが？　はぇ～」

私がそう聞くとなのはは苦笑いをして答えてくれた。
こんな液体があれになるの？

全然知らなかった。

「どうせならユリアちゃんやってみる？」

「はい？　私？」

そして渡されたボール。

なのははなのはでもう一つボールを取り出して生クリームを作り始める。

なんでも一回分を私となのはで分けたみたいだけど……。

ま、いっか。

私はなのはの真似をして、生クリームを作り始める。

「ユリアちゃん、出来……た？」

「な、なによ？」

ひたすら混ぜ続けた生クリームは、もはや生と言えないほど、硬くなってた。

そりゃ、確かに段々固まってくのが面白くて途中から混ぜまくってたけど……。

「だ、大丈夫！　これはこれで美味しい……筈！」
「筈ってなによ！？」
「ご、ゴメン！」

サイドポニーが凄い勢いで揺れる程の勢いで頭を下げるなのは。

「や、そこまで謝ること無いけどさ……」

なんか恥ずかしいから言わないけど、多分コレ私が悪いし。
自分の作ったクリームに目を移す。

……うん。
こんなクリーム私だったら食べたくない。

「それで、この次はどうするの？」
「あ、うん。この後は……」

で、この後はさすがに私も学習したから失敗することなく、順調に作業は進んだ。
ウィズとは違うのよ、ウィズとは。

……ん？
何か変なこと言った気がする……。

「ユリアちゃん凄いね。初めての人はこんなに綺麗に出来ないよ」

ちなみに今はスポンジの周りにクリームを塗ってるところ。
私が思いの他綺麗にできて驚いてるみたい。

「まぁ、クリエイトも言ったら細かい作業だしね。それでかも」
「違うと思うよ？」
「そう？」

ま、こんな感じで完成。
あとは特に面白いことも無く、戻ってきたヴィータたちと食べて終わり。

さすがにスポンジとクリームだけだから味気ないと思ってたけど、意外と美味しかった。
人気店の娘って言うのも伊達じゃないってことね。

そして、一時間後。私たちは再びコテージの前に来ていた。
まだ言われた時間までは十分あるんだけど、することないしね。

「艦に戻らないでも私の家に来ればいいのに」
「そうにもいかないよ。色々あるし」

「分かってるわよ。言ってみただけ」
なのははアリサと分かれの話をしてる。
「ユリアも。また来なさいよ？」
「当然。まだ和菓子食べてないし」
そういうと皆が笑う。
なによ？　変なこと言った？
「それじゃ私たち戻るね」
なのはが最後にそう言って、私たちは艦に戻った。
この一時間後、事件が起きることも知らないで。
ウィズの小部屋
ア《突然ですが相棒、嫌いな食べ物は？》
ウ「なんだよやぶから棒に……。苦いもの全般だけど？」

ア《苦くなければ意外と野菜とは食べれますよね。で、その野菜が嫌いな人が居るの知ってます》
ウ「知らない。誰？」
ア《スカリエッティです》
ウ「ぶふっ！？え、マジ？」
ア《マジです。何でもセロリとか。まぁ、食べないで残すらしいですけど》
ウ「……うらやましぃ」
ア《相棒は食べるまで見張られますモンね。２４時間体制で》
ウ「向こうは交代もありだからな……。スバルたちが見張りのときは本当に気まずかった」
ア《私は楽しかったですよ？あ、記録映像見ます？》
ア「録画してたの！！？」

秋風さん

ウ「本当になぁ。最近何も無く終わった回あったっけ？」
ア《特に何の関係も無かった回の最後はあの社会見学の時ですね》
ウ「そんなに！？いい加減ゆっくりしたい……」
ア《見る限りまだ暫くは無理でしょうねぇ》
ウ「ちくしょう……」

ナイトホークさん

ウ「いや、レイラは全然使えないんだ。だから付け焼刃程度に戦闘に少し組み込むくらい」
ア《分かりやすくいうとスバルさんと戦ったときみたいな感じでしょうか》

ウ「まぁ、さすがに一年程度で戦闘レベルまではな。二束草履も履くつもりないし」
ア《履くつもりが無いのではなく、履けないの間違いでしょう？》
ウ「うぐっ……」

Ｎａｋｉさん

ア《私の居ないところで浮気しちゃってるんですか！？》
ウ「浮気じゃないから！なんで浮気になるのかな！？」
ア《……まぁ、いいでしょう》
ウ「んぁ？なんかいつもより大人しいな？」
ア《最後は私を選んでくれるのでしょう？》
ウ「え？選ばないけど？」
ア《相棒のボケーーー！！》
ウ「ボケ！？初めてそんなこと言われた！？」

翡翠さん

ウ「インビエルノは本当に久しぶりの登場だったなぁ」
ア《元々移動手段としてのデバイスですし。まぁ、最初はライドバトルも予定してたそうですが》
ウ「あ、そうなの？」
ア《はい。どう頑張ってもあのスピード感を表現できなかったから断念したそうです》
ウ「へぇ～。ってことは予定はあるってこと？」
ア《今のところは全く無いそうです》
ウ「……」

GPSさん

ウ「本当に良い姉さんだったよ」
ア《確かに何となくですけど、人生悟ったような人でしたからね》
ウ「うん。今の姉さんズにはない落ち着きがあった気がする」
ア《にしても相棒も前回はカッコつけてますね。ナルシルト全開ですか？》
ウ「お前はなんでそういう風にしか取れないかなぁ」
ア「相棒がそういう態度しか取ってないからです」
ウ《俺主人公よ！？》

樟葉櫂さん

ア《クロノさんとユリアさんは性格は真逆ですからねぇ。真面目といい加減。根っこは似てる気もしますけど》
ウ「そんなことよりだ。さすがに量がおかしいと思ってたけど……アイツが原因か」
ア《さすがユリアさんと言ったところでしょうか？》
ウ「まぁ、そう言い方されるとなんか納得モンだけど……納得できねぇ」
ア《ま、すんだ事ですし。いいじゃないですか。ね？》
ウ「む、むぅ……」

36．束の間の休息【ユリア編】（後書き）

途中からヴィータが空気に……八神煌斗です。
やっぱり私は大人数ご一度に動かすのはヘタみたいです。
実力も無いのに、むやみに人数を増やすもんじゃないなぁ……と。
空気になるキャラが絶対に出てくる。
皆さんも、増やしすぎにはご注意を。
そしてそう言えばフラグっぽいのを始めて出したんですね、前回。
まぁ、簡単な理由でフラグは立てたくないのである意味理想通りですけど。
だって、ねぇ？そう簡単に人を好きになるのかよ？って話ですし。
いや、ハーレムを否定しているわけじゃないですよ？
ただ私はそれなりの理由が欲しい人なので。
ま、はやてとは姉弟の壁があるだろ！といわれたら言い返せませんけど……。
あれ？はやてがヒロインのはずだったんだけどなぁ。
自分でつくった設定が一番の壁に……。
なんとか崩さないと……。
あ、あともしかしたら次回は更新が無いかもしれません。
出来るだけ頑張りますが、決戦なのである程度完成してから上げたいんです。

長くなりましたが、それでわ！

37．開戦

通信後、俺とはや姉は二人でブリッジに駆け込んだ。

「クロノ！」

ブリッジにはもう全員集まっていた。
どうやら俺たちが最後だったらしい。

「相棒、遅いですよ！」
《うむ。二人でイチャイチャしてたのか？》
「んな！？」

フワフワと飛んできたアテナが、レイラのＫＹな発言に一言に反応した。
うん。お前らは空気を読もうな。

「本当ですか相棒！？　ハッ！？　まさか二人で乳繰――」
「それ以上言っちゃ駄目！　そんな事してない！　してないから！」
「そ、そうや！　さすがに外でそんな事せえへん！！」
《その言い方だと、外でなければ言い様に聞こえるな》

「相棒ーーー！！？」
「違うから！　本当に違うから！！」

「話を進めるぞ」
「ゴメンナサイ」

とりあえず直ぐに謝っておきました。
だって本当に怖かったんだもん。後ろで姉さん達とＦＷも呆れた顔してたんだもん。

さすがにアテナとレイラも思うところがあったのか大人しくなり、アテナはレイラを抱いたまま俺の肩に座った。

「ふぅ。回りくどいのは無しだ。……ヤツらが動き出した」

その一言に、俺たちの間に衝撃が走った。
やっぱり、あの結界はアングだちだったのか。

「リィン、頼む」
「はいです」

クロノが指示をだし、アースラのブリッジのモニターに夜の空が映し出された。

雲一つ無い星も月も光る海鳴の海上、そこに三つの影があった。

言うまでもない、アング達だ。

「この場所……」
「何をやってるのかな？」

シグナム姉さんは映った場所に思い当たるのか、小さく呟いていた。
そして続くようになの姉がモニターに写るアング達を見て疑問の声を上げる。
その理由は良く分かる。

三人がそれぞれ三角形の作るようにアング達は海上の上に浮いている。

そしてその中心には、白い、細長い楕円形のメカメカしいモノが浮いている。
あちこちに走るラインが薄翠色に発光しているのが余計にそう感じさせる。

「詳細は不明ですが、あれを基点に魔力が乱れ始めてるですよ」
「おそらく、アソコに例の渦があるんだろう」

つまりあの機械がマジック・ホールに何らかの形で干渉してるってことか。
いや、可能性があるってところか。

「なんにしてもこのまま見ている理由は無いな」
「あぁ。直ぐに行ってあいつ等をブチ倒しゃ良いってことだろ？」

既にシグナム姉さんとヴィータ姉さんはやる気満々らしい。
俺が言うのもアレだけど、二人のあのやる気は俺を酷い目にあわせたとかそういうかんじなんだろうなぁ。

「今回は空戦になるから、ＦＷの皆はここで待機。いいね？」

なの姉の指示に、ＦＷ達はいつのも元気は無いが返事を返した。
不満はあるけど仕方なく返事をしたって感じだ。

まぁ、分かるけど。
さすがに今回は下も海だし、今回は厳しいからな。

「アースラに指揮官が不在はマズイ。はやて。現場指揮は君に任せる」
「了解や」

クロノがはや姉に指示を出す。
コレで最低限の指示は行き渡った。

「それじゃ、行こう」

「あ、チョイ待ち」

俺が声を出すとユリアが止めた。
なんだ、と思っているとユリアが俺の方に寄ってきてアテナが座っていない肩に手を置き口を開いた。

「私とコイツ、今回出撃は無理だから」
「はぁ！？」

そんな事を言いやがった。
当然俺はやる気満々だったから度肝を抜かれた感じだ。
俺は当然だけど、姉さん達も目を見開いて驚いている。

「どういうことなの、ユリアちゃん？」

なの姉が一歩前に出る。

「どうも何も、コイツ。戦闘にまだ出られる体じゃないのよ」

……そういやそうだった。

俺の体、まだ反応鈍いまんまだったな。

ある程度元に戻ってっけど、まだ若干おかしい。

ユリアの話じゃ後１０回程ベガ使えば鈍り以外は元通りに成るって言ってるから焦っちゃいねぇけど……。

くそ。

今となったらその１０回がこれ以上無いほど多い……っ。

「え、えぇ！？　ど、どういうことそれ！？」

だけどなの姉はかなり慌てだした。

って、良く見りゃはや姉とシグナム姉さん以外の姉さん達とＦＷ達も驚いている。

「あ……」

そういやあのメンバー以外に言ってねぇ……。

ユリアは何となく予想してたのか特に慌てず皆に説明し始めた。

皆の反応は得にはや姉たちと違いはなかった。

それも治るって聞いたら皆ホッとしてた。

「でも、それはらユリアは？　正直あのエストラに対抗出来るの、ユリアくらいだけど」

フェイ姉が言うのも最もだ。
俺は参加できないけど、ユリアまで残る意味は無い。

「あぁ。コイツが納得出来てない様だからさ、ギリギリまで踏ん張ってみようと思うの」
「は？　――ってマジか!?」
「マジよ。だから参加できないの」

両手を腰に当てて答える。

「それ、間に合うんか？」
「はやて達しだいでしょ」

確かにそうだ。
俺が出る前に全部終わってる可能性だってある。

もう焦らないって決めたけど……イヤだ。
俺も、隣で戦いたい。

俺がそう考えてるのが分かったのか、ユリアは俺の顔をみてため息をつく。
そして言う。

「……まぁ、間に合わせるわよ。私を誰だと思ってんの？」

はや姉の言葉にユリアが自信満々に答える。
暫しの沈黙、二人の視線が交わる。

「分かった。ほな任せるよ」
「ま、全部がチャチャッと終わるのが良いんだけどね。……任された」

はや姉が歩き出し、二人がすれ違う時、ハイタッチの様に手を叩き合った。

そして他の姉さん達ははや姉に続き、転送ポートへ向かうためブリッジを出て行く。

その際、みんなは俺に何も言わなかった。

けれど目が言っていた。

言ってくれていた。

――待っている、と。

その後、俺とユリアは医務室に来た。
因みにＷＦメンバーも一緒に来ている。

「ほら、そこに座りなさい」

ベッドを指差すユリア。
その手にはベガが既にセットアップされている。

「先に言っておくわよ。１０回分を１回に纏めるの。その意味分かるわよね？」
「キツイ、か？」
「当然」

うわぁ。なにその顔。スッゴイ素敵なんですけど……。
絶対に「キツイって言葉なんて生ぬるいわね」くらいに思ってるだろ。

「ユリア。私たちは何で呼んだのよ？」

ここで後ろに居たティアナがユリアに聞く。

「アンタたちはコイツの体抑えといて。もしかしたら暴れるかも

しれないし」
「あ、暴れる？」
「やっぱりそんなにキツイのか！？」

ってか暴れるって、俺の予想以上なんですけど！？
そんな暴れるほどの痛みなんて経験したことないんですのよ！？

「相棒、無意味に女言葉になってます」
《とうとうそんな症状まで……》
「二人してそんな目で見ないでくれるかな！？　いや、レイラは目が無いけど絶対に哀れむ感じで見てるよな！？」
《良く分かったな》
「やっぱりか！！？」

「ほらソコ。バカやってないでさっさと準備しなさい」
「はいはい」

呆れてるユリアに即され俺はベッドに横になる。
コレがいつものスタイル。

寝転んでいる状態の俺にユリアが頭を掴んで治療。
アテナはレイラを持ち俺から離れる。

「さぁて、それじゃぁ行くわよ。チィト痛いけど……我慢できるわね？」

右手のベガを改めて締めなおしながら俺に聞いてくるユリア。

「我慢するしかねぇんだろ？」

「分かってるじゃない。ほら、スバル達も位置につきなさい」

「え？　う、うん！」

スバルとティアナがそれぞれ足元と手元に着く。

ライトニングの二人はユリアの後ろで待機。

……まさかチビッコには抑えきれないくらい暴れるのか？

「アテナ、レイラ。お前達はブリッジに行ってろ」

「何故ですか？」

「俺が戻ったときに状況を早く知りたい」

《別にクロノからでもいいと思うが……まぁいいだろう》

「仕方ありませんねぇ。了解です」

アテナはレイラをつれて医務室から出て行った。

そしてそんな会話をしている間に、ベガがいつも通りの灰色に光りだす。

だがその輝きはいつもと比べ物にならない。

少し、目を開けてるのがつらい。

「さぁ、行くわよ！！」

そして、俺の最後の治療が始まった。

クロノｓｉｄｅ――――――――――――――――

はやてたちがアング達に接触した。
それをモニター越しに確認する。

『そこまでや！』

『おや。ここまで追ってきましたか、しつこいですね』

ゆっくり背を向けていたアングがはやてたちに向き直る。
数では見るからに劣勢なのに、余裕の表情を崩さない。

『大人しくしろ。ここで自主るすなら……一発で許してやる』

その余裕にシグナムは気に入らないらしい。

だけど一発ってなんだ？　自首したら拘束だけで十分だ。

『この戦力差だ。その方が賢いというのは貴方たちも分かるはずです』

フェイトが言う。

だが、やはりアングはその表情を変えなかった。

それどころか、さっきよりも口元の歪みが大きくなっている気がする。

『海鳴市。ここに穴が有ると分かって調べましたが……中々面白かった。特に、闇の欠片事件でしたか』

「なっ！？」

一瞬虚を疲れて驚いたが、納得は出来る。

アングはコンピューターにアクセス出来るとも言っていたし、クラウディアもその手中にある。

『闇の書に取り込まれたデータとその土地の記憶を元に作られた実体を持った虚像。とても興味深かった』

そして片手を広げ、なのは建ちに向ける。

攻撃かと思い構えるなのはたちだが攻撃は来ない。
代わりに右指のすべての間に小さな球体の何かを挟んでいる。

『僕なりそれを研究してみたのですが……難しくてコレだけしか作れませんでした』
『作れなかった……まさか！』

なのはが声を上げる。

『そのまさかです。――さぁ、行きなさい！』

アングが手を振り、その球体を前に投げた。

刹那、それぞれが眩い光を放ち始め、モニターが白一色に染まった。
モニター越しにも眩しいと感じる強い光。

僕も一瞬だが目を閉じてしまった。

そして次に目を開けたとき、僕は信じられないモノを見た。

ウィズの小部屋

ア《とうとう最終章突入、ですね》
ウ「章ってか決戦って言うか……とにかく一区切りには違いねぇけど」
ア《相棒は参加してませんけどね》
ウ「ぐっ……」
ア《最終決戦で主人公不在って何ですか？しかも五体満足なのに》
ウ「ゴメンナサイ。それ以上言わないでください」

秋風さん

ア《そうですね。何故私編が無いのか問いただしたいところです》
ウ「そりゃ、特に思いつかなかったからだろ」
ア《まぁ、確かにこれと言った事は無かったと思いますが……》
ウ「いや、お前の無かったは信用ないけどな」
ア《……それにしてもまた何か送ってくるらしいですよ》
ウ「送られても何もしないからね！？」
ア《えーー……》
ウ「何で残念そう！！？」

灰色の野良猫さん

ウ「おうっ。頑張りま――ハヤト！？」

ア《どうやら人違いのようですね。まぁ、相棒は他に比べて若干目立たないですし仕方ないでしょう》
ウ「え、マジで？俺別の意味で結構目立ってると思うけど……」
ア《それが自信過剰ってやつですよ。よかったですね》
ウ「何が！？」

翡翠さん

ウ「好物は和菓子。ま、母さんの記憶の影響らしいけど」
ア《言われてみれば確かにアリヤさんは粗毎日のように食べてましたねぇ》
ウ「そこまで？」
ア《はい。羊羹やどら焼きなど、餡子が得に気に入っているように思えます》
ウ「後は……ライドバトルか」
ア《暫くは無理でしょうねぇ……。バイクに乗れる相手が居ませんし》
ウ「取り合えずティアナは？」
ア《戦う理由が無いですし。そもそもヴァイスさんのバイクはゆりかご戦で大破してますし》
ウ「あぁ。そういえば……」

青いタヌキさん

ウ「みやげ？何それ？」
ア《今確認取りました。ユリアさんが貰ってきたそうですが……全部食べたそうです》
ウ「マジか！？ってそう言えば今までここに持って帰ってきたって

言うのあった？」
ア《ありませんね。ここでは何かを送ってもらっても出すことはありません》
ウ「まぁ、貰ってもおいしい、とか辛い、とかしか言えないもんなぁ」
ア《いっその事死んでみる、というのは？》
ウ「のは？って、絶対にしないよ！？」

Ｎａｋｉさん

ウ「ラディィィィー！！？」
ア《いいですねぇ、もっとやりなさい》
ウ「駄目っ！ってか凄いなセラフィム！対人用！！？」
ア《まぁ、いいじゃないですか。私も出番が無かったのはヒジョーに》
ウ「……あ、俺とユリアはやっぱり兄妹だってよ」
ア《露骨に話題変改しましたね……。まぁ、言いでしょう。私も確かにそう思いますし》
ウ「やっぱり？」
ア《あい。どことは言いませんが……何となくですけど》
ウ「なんじゃそりゃ？」

37．開戦（後書き）

結構無理やり？八神煌斗です。
アテナをブリッジにやったのは特に意味はありません。
状況を伝えるためだけです。

あとは、次回から少しの間三人称になるかもです。
多対多なのでどうしてもそれじゃないと文章量が半端なくなっちゃうので……。

とりあえずウィズ復帰まではなるべく早めに。と考えてます。

あとは、なぜ主人公居ないのか？
簡単に原作キャラを踏み台にしたくない。これだけです。

個人的に原作キャラの出番を減らしたくは無い、けれど私にはそれが難しい。
となると少しの間離脱しかないだろう。と。だから六課戦でも敵に回ってもらいました。

結局最後には活躍してもらう訳ですし。

それでは。

38．海鳴海上戦

アテナ　ｓｉｄｅ――――――――――――――――

私はブリッジに入って、モニターに写る状況に一瞬理解が追いつきませんでした。
はやてさんたちの目の前にあるアング達以外の三つの影。
なのはさんに似た短髪の赤と黒の服を纏った女性。
フェイトさんに似た蒼髪の青い装飾の多い服を纏った女性。
はやてさんに似た漆黒衣服を纏った女性。

「ま、マテリアルだと……？」

クロノさんかがそう呟きました。
疑問系に成っていますが……その理由は良く分かります。
なぜなら彼女達の記憶にあるマテリアルは９歳の自分達を模していた筈ですから。
今、あそこに居る三人は明らかに今のはやてさんたちと同じ年齢、１０台後半でしょう。

『驚くことはありません。コレは、僕が欠片事件を元に作った模

造品でしかありませんので』

解説するようにアングが口を開きました。
そして……アング以外の二人とマテリアルたちが構え――

『ですが……能力は本物以上ですよ！！』

爆ぜた。

先行を取ったのはマテリアル。星光の殲滅者。
爆ぜた次の瞬間、自信に急ブレーキを掛け、自身を停止させた。

『っ！　みんな、下がって！』

迎え撃つのはなのはさん。
号令を掛け、他の皆さんが下がる前にレイジングハートさんを構えました。

『パイロ――……』
『アクセルシューター　――……』

二人の頭上に無数モノ桃色のスフィアが生み出された。

『シューター！』
『シュート！！』

同時に打ち出される二つのスフィア。
それは共にぶつかり合い、爆煙を上げ消滅します。

『ははははは！　僕は強いぞーー！』
『っ！』

そんな少しバカな声が聞こえたと同時、爆煙から尾を引いて青い陰が飛び出す。
それに反応したのはフェイトさんでした。

少し下がっていた場所から一番に飛び出して互いにぶつかり合いました。
だけど一瞬、フェイトさんと雷刃の襲撃者は直ぐにお互い間を取り合った。

『電刃衝（でんじんしょう）！！』
『ブラズマランサー　――ファイア！！』

なのはさんたちと同じように、二人は互いに射撃魔法を打ち出し、相殺しあいます。
ですがココからは違います。

『凄いぞ強いぞカッコイイ～！』
『くっ！』

二人は再びぶつかりあい、互いの体から出る電撃を残して戦闘を開始しました。

『私は、貴方を超える……！』
『っ！』

そしてなのはさんの方もフェイトさんたちのように戦闘を開始しました。

『ふん。久しぶりだな塵芥共』

そんな中、他の二人と違う雰囲気のマテリアル。闇統べる王。
先の二人の様に戦闘を仕掛けるのではなく、はやてさんたちに話しかけました。

『久しぶり……記憶があるのか？』

シグナムさんが聞きます。

『勿論だ。うぬらの事は一瞬たりとも忘れたことは無かったわ！』
『ま、本当はアングのヤツが土地の記憶を頼りに複製したヤツだからな。その当時の記憶も一緒に複製したんだろう』
『む。違うぞ。我が記憶を持ったままなのは我が強いからだ』
『ふっ。そうか』

隣に居たエストラさんが詳しく説明をします。
私たちは納得しました。が、闇統べる王は納得しなかったようですね。

『んなこたぁどうでも良いんだよ』

会話を遮り前に出てきたのはヴィオル。
その視線に写っているのは……ヴィータさん。

『よぅ。久しぶりだな。譲ちゃん』
『私はもうそんな年じゃねぇって言ってんだろ！！』
『そりゃ悪かった』

悪びれも無い様子で謝るヴィオルの右手にはデバイスが既にセットアップされています。
ヴィオルは後ろに居るエストラに顔だけ振り向く。

『もう良いか？　トウギだっけか？アイツとは無理だったからな。あの譲ちゃんとは決着決めてぇんだよ』
『我はアイツさえ残しておけば文句は無い』

闇総べる王が見るのははやてさんです。
どうやらマテリアルたちは少なからず元となった皆さんにう恨みの様なものが有るみたいですね。

『俺も。コッチにも用事があるヤツが居るみたいだからな』
『気づいていたか』
『それだけ殺気を向けられて気づかないわけが無いだろう』

会話を交わすのはエストラとシグナムさん。

『お前が用事があるのはアングじゃないのか？』
『貴様を倒すと、約束したからな』
『それは、ユリアか？』
『あぁ』

フッとお互いに笑う。
けれど、その視線は決して相手を逃しません。

『主』
『はやて』

二人ははやてさんに声を掛けました。
その意味は間違いなく、行って良いのかの確認の意味。

『ええよ。二人共行って』

そして同時。

シグナムさんとヴィータさん。エストラとヴィオルはそれぞれの魔力光を残してその場から消えました。

『シャマル、ザフィーラ。二人もシグナムたちの援護に行って』
『はやてちゃん!?』

はやてさんの発言にシャマルさんが驚きの声を上げました。

当然です。こちらでもクロノさんが声にならない声を上げました。
はやてさんの言ってる事は、一人でマテリアルを相手にすると言っているのですから。

『大丈夫や。向こうも私と同じ魔法しか使えへんねんから条件は一緒や。いや、リィンも居るからこっちの方が有利やな』
『はいです！』

そう言ってシャマルさんたちに微笑みかけるはやてさん。

はやてさんの言葉を聞いてシャマルさんたちも状況が分かったようでした。

確かに使う魔法さえ間違わなければ、マテリアルとはやてさんの条件は同じ。
対してシグナムさんたちは今の自分たちよりランクの高いＳＳランクの相手。

はやてさんは悪く言えば固定砲台。
なのはさんたちみたいに飛び回って魔法の打ち合いをする様な魔道士ではありません。

だからこそ取れる手。

確かに、ここはシグナムさんたちの援護に回ったほうが良いかも知れません。

『な？　うちは大丈夫やよ』

『直ぐに戻ってきます……』

『それまで、持ちこたえてください』

少しの間はありましたが、シャマルさんとザフィーラさんも私と同じ答えに行きついたようです。
非常に渋い顔をしていましたが、お二人の援護に回りました。

そして、なのはさんやフェイトさんの戦闘も、激化して言っているようでした。

another side――――――――――――――――

「随分余裕なのだな塵芥」
「さっきから人を塵芥塵芥って……少しバカにしすぎちゃうんか？」

残った二人が言葉を交わす。
二人の周りには何色もの魔力光が飛び交い、輝く。

そんな中で全く同じ容姿をした二人が向かい合う様子は、酷く幻想的だった。

「塵芥に塵芥と言ってなにが悪い。ふん。うぬが我のモデルと思

うとヘドがでる」

そう吐き捨て、マテリアルはその手に持つエルシニアクロイツの切っ先をはやてに向ける。

「構えよ。その軟弱な精神ごと、我が滅ぼしてくれる」

「軟弱って……言ってくれるなぁ。これでも平均くらいはあるつもりやよ――リィン」

「ハイです！」

「ユニゾン――イン！」

はやてとリィンの声が重なり、眩く輝きだす。

光りが収まったとき、そこにリィンの姿は無く、代わりに髪がクリーム色に変わったはやてが居た。

そして再び睨み合う。

「他の者の力を借りる。やはりうぬは軟弱者だ」

「……もうええ。ほなアンタに勝って証明したる」

マテルアルと同じようにシュベルトクロイツを向けるはやて。

一瞬の沈黙。

そして――。

「バルムンク！」
「ドゥームブリンガー！」

戦闘が開始した。

互いに打ち出された剣のスフィアはぶつかり、砕けあう。
瞬間、二人はスフィアが砕けた場所を基点に回りだす。

「破壊の剣（つるぎ）、アロンダイト！」
「っ！　はやい――っ！」

マテリアルから打ち出されたのは構えから発射までほぼタイムラグ無しの砲撃魔法。
はやてはその速度に驚きつつも砲撃を急上昇して交わす。

「穿（うが）て！　ブラッディダガー！！」
「遅いわ！」

通常、視認すら難しい速度のダガー。
それを視覚から撃たれた筈なのに、マテリアルは避けるでもなく、シールドを張り防ぎった。

そして再び訪れた沈黙。

「くくくっ。うぬの力はその程度か？」

「くっ……」

見下げるマテリアルに、歯を食いしばるはやて。

たった数度の攻撃。お互いに傷を受けていない。

だが――それでも実力の差は歴然だった……。

――同時刻

「パイロ……シューター！」

「アクセルシューター……シュート！！」

共に射撃戦となっている戦場。

なのはも、そのマテリアルも交わすのは本当に最低限。

その殆どは打ち落とす事で対処していた。

「くっ――！」

そんな時、一瞬なのはさんの肩に一発のスフィアが掠った。
その隙をマテリアルが見逃す筈なかった。

「ルベライト！」
「っ！」

一瞬の隙を付き、マテリアルはなのはにバインドを仕掛ける。
が、いくら体制を崩しても、そんなものに掛かるなのはではない。
その場から体を引く形で交わす。
――が、それこそが罠だった。
マテリアルは自身のデバイス、ルシフェリオンを砲撃モードに変え構えていた。

「ブラスト――」
「っ！　レイジングハート！」
《Ｂｕｓｔｅｒ（バスター）　Ｍｏｄｅ（モード）》

すぐさま反応をしてレイジングハートのモードを変えるなのは。

「ディバイーン――……」

「ファイアァァーー！！」
「バスタァァーー！！」

同時に打ち出された桃色の砲撃は、ぶつかり合い、拮抗する。
が、それも徐々になのはさんが押され始めた。

当然といえば当然だった。
打ち出すまでのチャージ時間はなのはが断然下回っていた。

序所に押し返され始めるなのはの砲撃。

だが、なのははその程度の逆行はいつも打ち破ってきた。

「はあぁぁぁぁ！！」

ディバインバスターに更に力が入り、押し戻されていた砲撃が再び拮抗する。
と思った瞬間。

二つの砲撃の接点を中心に爆発が起きる。

煙から尾を引き飛び出してくる二人。

二人共構えずそこに飛んでいる。が、なのはは肩で息をしていた。

「何とか耐えた、という所ですか？」
「ま、まだまだだよ。ね？なんでこんな事をするのかな？」

自分の呼吸を整える為……いや。
なのははそんな風に考えてはいないのだろう。

ただ単純に、お話がしたいだけ。
分かり合えるのなら、例え相手が誰だとしても分かり合おうとする。

それがなのはだった。

「なぜ、と問われれば簡単です。貴方を超えたい。ただそれだけです」
「私を……超える？」

首をかしげるなのは。

「これでも、私はオリジナルである貴方に敬意を示しているつもりです」
「そ、それなら――」
「ですが」

何かを言おうとしたなのはを遮り、更に口を開くマテリアル。

「だからこそ、私は貴方を超えたい。貴方を超えて、自身の存在をより確固たるものにしたい」
「そんな事しなくても！　貴方は！」
「そうでしょう、貴方はそう言ってくれるのでしょうね」

目を閉じて軽く頷くマテリアル。
そして静かに目を開け、再び構える。

「これは私の我侭なのでしょう。その我侭に……付き合ってもらいます！！」
「――っ！」

そして再び、二人はぶつかり合う。

――夜はまだ、始まったばかりだった。

ウィズの小部屋

ア《相棒、一つ面白いお話を見つけました》
ウ「なんか碌なのじゃない気がするけど……なに？」
ア《碌なのじゃないって失礼な。レイジングハートさんの事ですよ》

ウ「レイジングハートの？なに、また名前？」
ア《いえ。実はレイジングハートさん、ロストロギア説があるの知ってました？》
ウ「え、マジで！？」
ア《まぁ、一つの説ですけどね。ユーノさんが持っていたから、という所から始まり――》
ウ「それだけ？」
ア《いえいえ。デバイスモードをなのはさんが咄嗟にイメージしたものというのもありますし、自らを砲撃特化デバイスに調整したというのもありますし》
ウ「あー。確かにデバイスモードってちゃんとプログラミングしないと駄目だもんなぁ」
ア《あとは設定としては消えたそうですが、ジュエルシードを取り込むことでパワーアップするとか》
ウ「……本当にロストロギアなんじゃね？」
ア《さぁ？》

ナイトホークさん

ア《……なんか怖いです》
ウ「すっごいレイラ好きなんだな。奴隷とか言っちゃってる……」
ア《なぜ私ではないのですか！！？》
ウ「そこ！？」
ア《ココ意外に何があるというのですか！？》
ウ「いや、決戦楽しみにしていてください、とかさ」
ア《関係ありません！！》
ウ「言い切っちゃった！？」

灰色の野良猫さん

ア《とりあえず予想を裏切らない結果でした、って感じですか？》
ウ「ま、当然だけどな。あそこでマテリアル意外何が出てくるのかって話しだし」
ア《サラリーマンとかはどうでしょう？意外性抜群かと思いますけど》
ウ「意外すぎるからね！？ってか出てきて何するの！？」
ア《……営業？》
ウ「営業！？魔法少女相手に！？」
ア《駄目ですか？》
ウ「何でそんなに意外そう？！」

秋風さん

ウ「え！？何考えてんのマリカさん！？」
ア《なにって、どう見ても相棒を殺ろうとしてるんじゃないですか》
ウ「当然のように言い切った！？」
ア《まぁ、相棒が使わないからですし》
ウ「いや、そうだろ。そんな一方的に送られてきても困るし。俺自分苛める趣味ないし」
ア《え……無いんですか？嘘でしょ？》
ウ「何でそうなる！？」

ラグナシアさん

ウ「ありがとうございます！これからもそう思ってもらえるように頑張ります！」

ア《あちらも書いているそうですよ？》
ウ「正直アイツが妙に忙しいらしくてコッチに手一杯らしい」
ア《だけど、必ず暇を見つけて顔を出させていただきます！》
ウ「これからもよろしくお願いします」

翡翠さん

ア《なんと、二通投稿ですか》
ウ「いや、そっちもビックリだけどコッチだろ。俺の絵描いてくれたって！」
ア《へぇ～。私には関係ないですけどねぇ》
ウ「うわ、柄悪っ！」
ア《だって私のイラストは無いみたいですし。相棒はヘタレて無いみたいですし》
ウ「なんでそんなにひねくれてる！？……こんなヤツはほっといて、俺は見てみたいです」
ア《こんなヤツ！？こんなヤツにこんなヤツって言われた！？》
ウ「酷くない！？」

TOUDAさん

ウ「うぁ～。本当に技きちゃった。と言うか一個目も何かの技っぽいな」
ア《そもそも相棒がフィンガー！とかいって叫んでる姿が想像できません》
ウ「いや。俺も出来ないから安心しろ。と言うかウサギのウィズ？」
ア《あぁ、もしかしてドキドキして変身！ってヤツじゃないですか？》

ウ「あれな。言われてみて『そう言えば……』って思ったらしいな」
ア《相棒もアレくらい可愛かったらいいのに》
ウ「いや、逆に気持ち悪いだろ」
ア《まぁそうですけどね》

GPSさん

ウ「あぁ、また一人俺の苦労を分かってくれる人が……」
ア《私にも仲間が出来ました。それにしてもシグナムさんのハイペリオンで、とは中々……》
ウ「確かに。お肉とかこんがり美味しくなるかな？」
ア《その前に全力で拒否されそうですけどね。そもそも出来るんですか、微調整》
ウ「あ……。ならやっぱり最大出力一気！みたいな？」
ア《なんだかもう恐ろしいですね。上手に殺けましたー。みたいな？実際は出来たですけど》
ウ「俺もうシグナム姉さんには逆らいません」

Ｎａｋｉさん

ウ「なに！？なに見たのラディは！？そして何をみせたセラフィム！？」
ア《まぁ、良いじゃないですか。きっと面白くなること間違いなしですよ》
ウ「そうなるのお前だけだろ！？結婚式とか言っちゃってるよ！？」
ア《不束モノですが、よろしくお願いします》
ウ「え、相手お前！？イヤだ！！」
ア《正面から否定された！！？》

沫乃憂谷さん

ア《始めまして。よろしくお願いします》
ウ「なに!?なんかアテナ以上の理不尽で殺されそうになってんだけど!?」
ア《だから、それが相棒クオリティだとなんど言ってると思うんですか?》
ウ「なんで初対面の人からも恨み買ってんの俺!?しかも砲撃って!!」
ア《ま、それは置いといて。ゲストでこちらに来たいとか》
ウ「あ~、今すぐに!ってのは無理かも……」
ア《妙に忙しいらしいですからねぇ。こういうときは前向きに検討しておきます。とかで良いのでは?》
ウ「……なんか政治家みたい」

38．海鳴海上戦（後書き）

三人称、難しっ！八神煌斗です。

やはり多対多ではどうしても一人称では無理でした。

ゴメンナサイ。

さてとうとう戦闘開始ですが如何だってでしょうか？

マテリアルは予想どおりだったと思いますが……とりあえず大人Ｖｅｒにしてみました。

完全な私の趣味（？）です。

あとは少しスピード感を意識してみました。

いかがだったでしょうか？

オリ主モノなのに居ないという。

原作キャラにはもう暫く活躍してもらおうと思います。

それでわ。

39．それぞれの戦い・窮地（前書き）

今回、少し設定を弄っています。
後書きにて説明させていただきます。ゴメンナサイ。
それでは。

39．それぞれの戦い・窮地

another side――――――――――――――――

バチンッと、電気がぶつかり合った時の様な音が漆黒の空に鳴り響いた。
その音源は二閃の雷光がぶつかり合っていた音だった。
いや、それは電光などではなく、フェイトとそのマテリアルだった。
互いのデバイス、バルデッシュとバルニフィカスで鍔迫り合いになる。
二人の体からは電気が弾け合い、弾ける様な音が鳴り続く。

「お前、凄いな強いな！」
「なんでこんな事を……まだ闇の書を復活させたいの！？」

そんな中でフェイトはマテリアルに声を掛ける。

「そんなの関係ないっ！」
「え――？」

瞬間、マテリアルがフェイトを弾き、共に距離を取った。

「光翼斬（こうよくざん）！」

「くっ――！　ハーケン、セイバー！」

同時に打ち出された二つの雷を纏った光輪。

そては互いに刻み合い、その場で弾けるようにその場で消滅する。

「関係ないって……なら何で戦うの！？」

「イライラするからだ！」

「……へ？」

あまりに単純で簡単な、意味の分からない答えにフェイトは一瞬呆ける。

だがマテリアルはそんなのお構いなしにエッヘンと胸を張っている。

自分と同じ容姿のマテリアルがとるそのポーズに少し恥ずかしくなったのは秘密。

「ど、どういうこと？」

「何だ分からないのか？　君はアホだな」

「む……」

何故か分からないが、マテリアルの一言にカチンと来たフェイトは

顔をしかめた。
そしてマテリアルは説明してやる、と言ってバルニフィカスを下げた。

それは絶好の反撃のチャンス。

だがフェイトは攻撃をせずに、その言葉に耳を傾ける。

「何故か分からない。けど、君を見ていると酷くイライラする。それも白い魔道士以上に」
「白い魔道士……なのはのこと？」
「上手くは言えないけど……僕の魂がこう叫ぶんだっ！」

一言、そう叫び再びバルニフィカスを構え――……。

「君を殺して我が糧とすればこの不快感も消えるはず、と！」
「――っ！」

まさに弾丸。
フェイトに向かって飛び掛った。

「僕はあの暖かな闇へ帰るんだ！　君は落ちろ！　僕は――飛ぶんだ！」
「そういう訳には――行かない！」

そして二閃の雷光は再び交差する。

・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～

「でりゃあぁぁぁ！！」
「まだまだあぁぁぁ！！」

二色の赤がぶつかり合い、鮮血と真紅の魔力が本流する。
一方は破壊の為、一方は迎え撃つため。

迎え撃つ盾は何度も破壊を防ぎきっていた。

だが、それは何の皮肉だったのか。
その盾、鮮血の盾こそが本当の破壊、そして破壊の鉄槌こそが守る為にぶつかり合っていた。

「どうしたガキ！　そんな力じゃ俺には勝てねぇって……わかってんだろぉがぁ！」
「んな事、関係あるかぁ！」

鉄槌の所持者、ヴィータは、鮮血の盾ごとヴィオルを弾き飛ばす。

「ておらあぁぁぁ！！」
「遅えぇ！！」

弾き飛ばされた先に待ち構えていたザフィーラがカウンターの要領で自身の拳を繰り出す。

常人では反応不可能と思える絶好のカウンター。

だが――ヴィオルの反射速度は、雷に寄って底上げされる。
回避負荷のカウンター、それさえもヴィオル雷を体に走らせながら手で受け止めた。

「――づ！？」
「んぁ？　どぉした？」
「くっ！」

刹那、ザフィーラの顔が歪み、ヴィオルから距離を開いた。

「ザフィーラ！？」

その様子をおかしく思ったヴィータがザフィーラに近寄る。
そしてその表情が驚きに染まった。

ザフィーラの拳が焼けていたから。

焦げてるんじゃない……焼けていたのだ。

ヴィータは幼き見かけとは裏腹らに歴戦の騎士である。
だからこそ判断が出来た。

これは雷などではなく、炎や熱系統の焼け方だと。

「テメェ！　何しやがった！」
「何しやがったって……そっちが飛び込んできただけだろぉが」

デバイスの持っていない左手を顔の辺りに持ってくる。
手の周りは揺らいでいた。
その意味を、二人は直ぐに理解した。

「――熱……。変換資質っ」

ユリアが言っていた事をヴィータ、ザフィーラと思い出していた。

ヴィオルは雷と炎、二つの変換資質を持っていると。
だが碌な魔法も使えないという事も。

考えてみれば予想できたことだった。
雷と自身の体に作用する使い方をするなら、炎もそれに準じる何かだということは。

つまり、炎の使いからは自身の体温の底上げ、又は体からの尋常じゃない程の発熱を起こすという事。

「さぁて……休憩は終わりだぁ！！」
「っ！　アイゼン！」
《――Ｒａｋｅｔｅｎ（ラケーテン）　ｆｏｒｍ（フォーム）――》
「ラケーテン……ハンマァァァー！」

蒼の魔力光を残し、再び鮮血と真紅の赤がぶつかり合う。

・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～

ヴィータたちと少しはなれた場所。
そこでも二人、烈火の騎士と湖の騎士は戦っていた。

「シグナム！　前から五発！」
「っ！　レヴァンティン！」

シグナムが叫ぶと、レヴァンティンからカートリッジが一発吐き出される。

「はあぁぁぁ！！」

シュランゲとなったレバンティンを前方に、壁のように連結刃を巡らせる。
と、巡らせた連結刃のあちこちで爆発が起こった。

「ほぉ。防いだか。幕を張っている訳でも無いな……」

シグナムたちに向けていた手を下げながら、関心するエストラ。

「正確に場所を把握……。どうやった？」
「ネタばらしをする気は無い」
「それもそうだな」

実際、シグナム一人ではエストラの無色の魔力を感知は出来ても、正確に防ぎきる事など出来なかっただろう。
それが出来ているのは、一重にシャマルの活躍のお陰だった。

シャマルの風の力。
常に戦闘区域（フィールド）に微弱な風を張り巡らせる。
そして風が断ち切られればそこから魔力弾が襲い掛かってくるとい

うこと。

つまりはユリアの専用感知魔法、フィールド・センスの風バージョンと言う事だ。

だが……この方法がフィールド・センスに比べ、かなり劣るものであった。

普段使う風の足枷や風の護盾のように一瞬や、一箇所に留めるならそれ程でもない。
が、戦闘区域（フィールド）全域に常に魔力を一定に維持、測定し続けなければならない。

シャマルにはそれ程の高レベル分割思考（マルチタスク）は持っていない。
それは彼女が戦闘に不参加することと同義だった。

それに加え、シグナムは常にシャマルに意識を傾けていなければならない。
これがヴィータやザフィーラ、又は普段のシャマルなら影響は無かっただろう。

今のシャマルは悪く言えば的だった。

動けはするが、どうしても普段に比べ反応が鈍る。
たとえどこから攻撃が来ると分かっていたとしても……。

「それなら――俺自らネタを探るまで！　精々、ボロを出さない

ように気をつけろ！」
「やれるのもなら！」

アテナ　ｓｉｄｅ――――――――――――――――

「まずい……」

私の隣でクロノさんが呟きました。

見るからに劣勢。
確かに現状、見る限りでは互角の勝負でしょう。
ですが、時間の問題なのも明らかでした。

それも当然といえば当然なのでしょう。

なぜなら、はやてさん達にはリミッターが掛かっているのですから。

「クロノさん、みなさんのリミッターを――」
「駄目だ……。僕に、その権限は既に無い……」

奥歯をかみ締めながら答えるクロノさん。

聞けば既になのはさん達はクロノさんの分のリミッターを解除して

いたそうです。

リミッター解除の権限を持つ後見人、カリムさんも分も既に解除しています。

ここで本局に申請していては時間が足りません。

「あれ？　提督、六課からメッセージが……」

「六課から？　こんな時に？」

私も首を傾げます。

確かに六課は私たちが今戦闘中だと言う事は知らないでしょう。

ですが、今はアングのウイルスでまともに機能していない筈。

話ではそんなに簡単なものでは無かったはず。

どのような経緯で感染するかも知れませんのに……まさかっ！？

「駄目だ！　そのメッセージを開くな！」

クロノさんも私と同じ答えに行きついたようでした。

「……え？」

ですが……既に手遅れでした。

普段ならこんなミス、誰もしなかったでしょう。
管理局のエースたちが押されている。
それが僅かなミスを引き寄せてしまったのでしょう。

メールが開かれると同時、一つのモニターに写った人物。

――アング。

『メッセージを受け取ってくれたようで、ありがとうございます』
「やはりお前か……」

アングの背景は夜空。そして背後には例の白い細長い楕円形のモノ。
それだけで、今映る映像がライブ映像と言う事が分かります。

『提督のあなたの事です。このメッセージが何なのか、分かりますよね？』
「……」

モニター越しに睨み合う二人。
いえ、実際に睨んでいるのはクロノさんだけで、アンウはあの不気味な笑顔を浮かべていました。

『本当はもう少し話したいんですけれどね。僕にも準備があります。ここで――』

「ま、待て！！」

『さようなら、クロノ提督』

クロノさんの抑止も全くの意味を待ちませんでした。

アングは笑いながら手を振り、モニターは切られました。

そして艦内は赤く点滅し、鳴り響くアラームの音。

ダンッ、とクロノさんが目の前のデスクに拳を振り下ろしました。

「ウイスル……アングっ！　直ぐにプロテクト強化！　艦のコントロールを奪われるな！」

「駄目です！　感染速度が速すぎて……対処仕切れません！」

「くそっ！」

デスクに振り下ろされた拳が更に強く握り締められる。

まさに絶対絶命。

なのはさんたちの劣勢。アースラのウイルス感染。

この状況からの逆転は厳しい。

それはデバイスである私にも明確でした。

「くそっ……どうすれば……」

「なに、暗い顔してるのよ？」
「艦長がそんな顔してたら駄目だよ」

「……え？」

いつの間にか、ブリッジの扉の前に二つの人影がありました。

ウィズの小部屋

ウ「昨日、3月15日はなの姉の誕生日でした。そう言う小説上がったのかな？」
ア《さぁ？というかなのはさんの誕生日はその日じゃありませんよ？》
ウ「え、うそ！？」
ア《それは元ネタの方の設定ですからねぇ。リリカルの方は年齢を考えると4～5月らしいです》
ウ「あ～……確かにそうか。確か9歳から始まってたし。ん？となるとはや姉だけか、ちゃんとした設定あるの」
ア《そうなりますね。あ、そう言えば相棒はどうなってるんですか

？》
ウ「俺？はや姉と同じ日だけど？ってかお前も知ってるだろぉが」
ア《そうなんですけどね。流れ的にそう聞かないといけない気がして。で、なぜ同じ日なんですか？》
ウ「殆どノリだったな。同じ日の方がええやん！みたいな感じで」
ア《あぁ、そう言えばそうでしたねぇ……》

秋風さん

ウ「そうなの、こっちは三人なの」
ア《なんだか言いたげな感じですが……なんでしょう？》
ウ「【うちのところだと娘なんですけど……】確かに。なんだろ？」
ア《アレじゃないですか？そっちも娘にしろよ！アレは子供だからいいんだ！みたいな》
ウ「なにそのロリコン宣言！？そんな目で見ちゃ駄目！」
ア《あとは小説の宣伝ですね》
ウ「また暇が出来たら行かせていただきます」
ア《決戦シーンは色々しんどいですからねぇ》

翡翠さん

ア《そうですね。思いっきりゲームネタです》
ウ「始めは出すつもり無かったらしいけど、ゲームやってたら……こう」
ア《スキルも三人分ありますからね、使いやすいし強いです》
ウ「そして、なんか雰囲気的に見せてくれるっぽいぞ！？」
ア《まぁ、私が居るならいいでしょう。で、どうしましょう？》
ウ「始めはＨＰのメール添付も思ったけど……あれ出来たっけ？」

ア《さぁあとは【みてみん】ですかね？ただあそこは登録がありますし》
ウ「他は【斧】とか」
ア《正確にはＡｘｆｃ　Ｕｐｌｏａｄｅｒっと言いますけどね。この場合ＵＲＬとパスをメッセージ添付ですかね？》
ウ「ここは登録が無いから一番マシかも」
ア《手間を取らせてゴメンナサイです》

ＺＥＲＯさん

ウ「いやいや、コッチが断る感じに送ったし、アレで完結したみたいな書き方だったから」
ア《戦闘シーンに対する感想ですね。面白い、と》
ウ「中々意味深な感想だな」
ア《どこがですか。何カッコつけてるんですか？》
ウ「ゴメンナサイ」
ア《とりあえず楽しんでいただけてるようでなによりです》
ウ「ありがとうございます」

Ｎａｋｉさん

ウ「セラフィムゥゥゥ～～～！！？」
ア《相棒！？私が居ない間にそんな事してたんですか！？１８禁ですか、大人の世界なんですか！？》
ウ「してない！そんなことしてないから！！」
ア《あとは相棒が戦闘に参加してないことに不満？が》
ウ「あ～、その辺に関しては何とも……。ゴメンナサイとしか」
ア《とりあえず謝るんですね》

ウ「まぁ、とりあえず。これ生きていくうえで大事よ？あとは人任せにするとか」
ア《は？》
ウ「という訳でラディ。セラフィムに一言言っといてくれ」

シルフさん

ウ「俺そんなに出てない？出てないのここ二話だけだけど」
ア《一人称で主人公、という面で見たら少ないんじゃないですか？ま、見る限り暫く出なさそうですけど》
ウ「トウギは始めから出すつもり無かったらしいけどな。これ以上キャラ増やすと原作キャラ埋まるし」
ア《現時点でも埋まってる感ありますもんねぇ。主人公蹂躙小説じゃないのに》
ウ「それ防ぐ為の俺離脱らしいけどな。あとは……はや姉のマテリアルだって」
ア《あれは声を当てないとまんまですもんね。見下し上から目線なとことか》
ウ「後は一人称が我だもんな。読み方はオレじゃなくてワレだけど」
ア《あとは二人称は基本【うぬ】ですけどね。こっちは少し塵芥って言い過ぎたかも》
ウ「そのせいなのかぁ。ま面白いって言ってもらえてるからいいか」
ア《良い……んですかねぇ》

39．それぞれの戦い・窮地（後書き）

読みにくかったでしょう、ゴメンナサイ。八神煌斗です。
こう目まぐるしく視点移動すると疲れますよね？ゴメンナサイ。
あと少しだけお付き合いください。

それで前書きでも言った弄った設定ですが、リミッターです。
リミッターを解除できるのは後見人の二人が一回だけ、と言う事でした。
が、コッチではクロノの一回がなのはたちにも引っかかってることにしています。

実際クロノの時ははやてだけで、その辺に関しては深く追求されていなかったので分かりませんでした。
なのではやてしか解除してないけど、もう権限は無い。と言う事にさせていただきました。

さて、そろそろウィズサイドかな？
まだ分かりませんけど。

いくら蹂躙小説じゃないといっても出さなさすぎ、というのもアレですし。

それでわ！

40．主人公、治療中

「さぁ、いくわよ！！」

ユリアがそう言い、俺の頭をベガをつけている手で鷲掴んだ。

「――ａｃｃｅｓｓ（アクセス）！！――」

「ずぅっ！！？」

その瞬間、体中を痛みが駆け抜ける感覚が走り抜けた。

あくまで感覚、実際に痛んでいる訳じゃないのに……！！

だけど、そんな中でも何故かどこか俺の頭は冷静だった。

「づっ――づあぁあぁぁあ！！？」

「少しは我慢しなさいよ！　スバル、足しっかり押さえなさい！！」

「う、うん！」

スバルが俺の足を掴む力を強めた。

我慢しろって言われても……コレは、無理っ！！

掴まれてる所、頭から全身に向けて痛みが走ってる感覚。
この激痛は頭だけの筈なのに……どうしても暴れてしまう。

「がぁぁぁぁぁ！！」

どうしても叫んでしまう。

「あぁもう、うっとうしい！　エリオ、来なさい！！」
「は、はい！」

俺が動きまくってイライラしているのか、後ろで大人しくしていたエリオを怒鳴りつけ、自分の隣に呼んだ。

「あ、あの……なんでしょうか？」
「コイツ、眠らせて。大丈夫、５００Ｖ位あれば良いから」
「えええ！？」
「大丈夫って、ユリアあんた何言ってんの！！？」

エリオが驚きの声を上げ、ティアナが突っ込みを入れる。
その５００Ｖがどれ位かわかんねぇけど、何となく三桁いってる時点でマズイと思うわけですよ。

「そうですよ。さすがにその方法は……」

キャロ。その言い方だと違う方法なら良いって言い方に俺は聞こえるよ。
でも俺を庇ってくれてるんだよな。ありがと――。

「大丈夫よ。首元に一瞬バチッてやるくらいだから」
「あ、それでしたら……」

キャローーーー!!?

それでしたらって何!?　大自然を少しとはいえ一人で生き抜いた精神力は並じゃないって事!?
コレくらい日常茶飯事だったの!!?

「ほら、早くやりなさい。いい加減二人もキツそうだし」

確かに、二人共だが特にティアナの消耗が激しいっぽい。
さっきから手は結構動くから。

「で、では……。ウィズさん、行きます!」

そして俺の首元にエリオの手が添えられ――。

「アバババババババ！！？」

し、死ぬ！　これなら死ねる！
エリオ君！？　君は何をやってるのかな！！？
ワザとやったりしてないよね！！？

「こらエリオ！　電圧弱い！　それだとただの拷問よ！」
「あ！　ス、スミマセン！」

あぁやっぱりか。
今のはかなり辛かったよ……。

そんな事を考えながら俺の意識は次の瞬間、刈り取られた。

「――で、なんなんだよ。これ？」

気づいたら俺は、どこか廃れた所に立っていた。

雰囲気的には古城とか、そんなのがあってる。
そう考えるとここは……エントランスとか、そんな所だろう。
円形の部屋は壁もあちこち崩れ落ちているが、崩れた隣の空間が何も見えない。
遥か高い天井も同じ。抜けているクセに空が見えない。

「こういうのって精神の中～って流れなんだろうけど……コレは？」

なんで城とかはもう突っ込まない。前は何も無い空間だったとかいうツッコミもなし。
どうせ俺がいくら考えてもわかんねぇし、アテナも居ないんじゃそれが正解かもわからない。
だけど、どうしても気になるものが俺の目の前に一つ。

「どう見ても……扉、だよな」

そう扉。でもその扉は鎖で硬く閉ざされている。
いくつもの数え切れないほどの切れた鎖。
だが、それ以上に目立っているのが比べるまでも無い巨大な五本の鎖。
下から数えて切れた鎖が二本、三本目はあちこち切れていて何とか繋げているって表現がピッタリだ。

そして残りの二本の鎖で封じられている。
ここまで確認して、何となく分かった。

「それがなんなのか気になるか？」
「――っ！？」

背後から声。
俺は前方に跳びながら振り向く。

「……オレ？」
「よう、俺」

右手で作ったチョキを動かしながら、ヘラヘラ笑うオレがいた。
違うところと言えば髪型を掻き上げている、と言う事だろう。

「あー……そう身構えるなって。そんなオレに勝ったらココから出してやる～、なんてお決まりパターンじゃねぇから」
「アホか。それならこの状況がまずお決まりだろぉが」

よくあったら堪ったモンじゃねぇけど、良く見るシュチュエーションだし。
と言うか、俺自身でも二度目だからなぁ。

「それもそうだな。ま、手は出さぇから安心しろや」

手をヒラヒラさせながら近くにあった瓦礫に腰を下ろすオレ。

「俺に手を出さない？　ならワザワザ出てきやがった？」

コイツの口調、掻き上げた髪。
その様子を見ながら俺は考える。

コイツはあの六課での時にアングが俺の中に創りだしたオレだろう。
ユリアは消したって言ってたの筈だけど……。

「だから身構えるなって。そうだな……単純に話がしたかった」
「話？」
「あぁ。今までは話したくても、話せなかったからな」
「今まで？」

その言い回しに少し引っかかった。
コイツが俺の体に創られたのは一週間程前。
だけど今の言い回しはもっと長い期間みたいな……そんな感じだ。

「そう突っ立ってないで座れや」

「……いやだ」
「はぁ……。あっそ」

座らない俺に対して、オレはため息をついて膝に肘を付いた。

「まずは……そうだな、オレって言うのも面倒だし、ダミーとでも呼んでくれれば良いや」
「ダミ？」
「おいこら、それだと駄目みたいな発音になるだろうが。ちゃんと伸ばせ。ダミー」

呆れたように言うダミー。
……確かに今のは悪かったかも。

「ったく。……でよ、早速だが、お前の後ろにある扉。何か分かるよな？」
「……俺に掛けられた封印、だな？」
「へぇ。だとしたら、その先にあるんだ？」

多分、小さい鎖が補助封印。
デカイのが拘束封印ってところだろう。
なら、この奥にあるのが俺の本来の魔力、そして――。

「封印の能力」
「ご名答」

ゆっくりとした拍手をしながらいうダミー。

「俺からも一つ聞かせろ」
「聞かせろって、どっちかってーと今のも俺が答えてやったと思うんだけど？」

うるさい。
俺も言ってから気が付いたんだ。

「テメェが何でココに居る？」
「しかも行き成り確信かよ。ツマンネェ」
「いいから答えろよ」

ゲンナリし、頭を垂れるダミーに俺は答えを急かす。

はっきり言う。
感覚なんてものは無ぇけど、他の人格が俺の中に居るなんて気持ち悪い。

それに……ユリアはコイツを消したって言ってた筈だ。

「はぁ。んなの一つしかねぇだろぉが。消えてなかったんだよ」
「な――っ!?」
「ま、ユリア……だっけ？　アイツも最初は驚いただろうけど」

驚きが隠せない。
最初はってことは、ユリアはもう気づいてたって事だ。

「俺の想像だけどよ、ユリアが消したのはアングが俺に注ぎ込んだ部分だけだったんだろ」

まただ。コイツの言い回しが頭に引っかかる。
信用なんか出来ねぇし、してねぇけど……この言い方はまるで……。

「あ、ついでにお前の不調もオレのせいね」
「はあぁぁ!!?」
「色々させてもらいました」

あっけらかんと、コイツある意味今回一番の問題をサラッと言いやがった！
ってか、お前が原因か!?

「なんでそんな事を!?」
「だから話がしたかったからって言ってんだろ。オレの合図にユリアも気づいたみたいだし」

合図。

俺の体の不調は俺をココに呼ぶための合図？
なら、ユリアはダミーの存在に気づいてて……それで嘘を付いた？

「そう睨むなって。ほれ、コレ見ろ」
「あん？　――っ！？」

そうしてダミーが俺に見せたのは――消えかかって、透けた右足。
その異様な光景に、俺はさっきまでとは別の驚きを覚えていた。

「安心したか？オレはもう直ぐ消える」
「なん……で……」
「外から俺を消しに掛かってるんだろ」

外から……ユリア！？

「だから時間がねぇ。率直に言うぞ。その鎖、断つ勇気がお前にあるか？」

無意識に俺の後ろにある例の扉を見る。
鎖を断つ。

その意味はただ、封印の能力を使用可能になるだけじゃない。
トウギと戦った時の……あの溢れそうな魔力をこの身に受け続けるということ。

「簡単に言ってやる。この空間はテメェの魔力許容量と思え」
「ここが……」
「そしてその扉の向こうにはココに納まり切らないほどの水が溜まっている。分かるな？」

収まりきらない水が、ここに流れ込んでくる。
それは溢れ出すなんて生ぬるいものじゃない。
ココが……俺が、内側から壊される。

「もしその度胸が無いなら……テメェが消えろ」
「――っ！」

ダミーのその言葉の重み、その威圧に怯んでしまった。
今の一言だけで分かる。

コイツには……その覚悟がある。
はや姉の為になら、いつでも死ねるっていう覚悟が……。

「おら、どうなんだ。度胸、あんのか？」

ダミーが動かない。
動かないけど……俺に近づいてきている気がする。
それだけアイツに押されている。

「お、俺は――……」

――まて。思い出せ。
俺は、この空気を、この感じを一度味わってるじゃないか。

「俺にそんな度胸はない。そんな覚悟、いらない！」
「……なに？」

そうだ。
ここで、怖気づく訳にはいかない！！

ウィズの小部屋

ア《という訳で、またまた王道お決まりパターン》
ウ「まぁ、今回はヘタレて終わり～、じゃないけどな」
ア《予定では区切るところは威圧されているところだったらしいですが、さすがにしつこいと思ったそうです》
ウ「こういうときはヘタレて次回へ、が俺たちゃ普通だったもんな」
ア《一緒にしないでください。相棒だけです、ヘタレてたのは》

ウ「……そこは別に流しても良かったんじゃないのか？」
ア《イヤです。ソコのところは確りしておかないと相棒と同類に見られてしまいます》
ウ「そんなにイヤですか！？」
ア《当たり前です！！》
ウ「……泣きたい」

灰色の野良猫さん

ウ「おぉ、俺との戦闘だって！」
ア《相棒がボコスカボコスカやられるんでしょうねぇ。何で嬉しそうなんですか？》
ウ「……そう言う言われかたされると悲しくなってくるよ」
ア《だから何で喜んで……まさか、Ｍ！？相棒Ｍだったんですか！？》
ウ「違うよ！？何でそうなるのかな！！？」
ア《ハッ！？まさかお姉さんたちのお仕置きに耐えるために苦行の中から喜びを見出したんですか！？》
ウ「だから違う！！そうやって話を飛躍させないでくれるかな！！？」
ア《イヤです！》
ウ「確信犯か、この野郎！！？」

Ｎａｋｉさん

ア《セラフィムゥゥゥ！！？》
ウ「うゎ～……。返り討ちになると思ってたけど、徹底的にやっちゃった……」

ア《まぁ、いつか何倍返しにでもされているんでしょうけど》
ウ「うん。俺もそう思う」
ア《で、それは置いといて……臨場感があってよかったと》
ウ「あー。良かった。ブッチャケ書いた本人、少し説明不足だと思ってたらしいから」
ア《あとは……活躍しましたか？》
ウ「正直胸を張って頷けないです、ハイ」
ア《前半はエリオに苛められてましたけど……どうでした？》
ウ「ある意味今までに無いくらいリアルに死身近に感じました」

ＺＥＲＯさん

ア《少し調べなおしたところ温かな闇、が正解でした。ゴメンナサイ》
ウ「うろ覚えだったからなぁ。いや、何言っても言い訳にしかならないけど」
ア《ちなみに元ネタはＰＳＰなのはの【なのはＶＳ雷刃】の雷刃の台詞です。雷刃が唯一、カッコよく見えなくもない会話ですね》
ウ「逆に面白いのは……シャマル姉さんとの時とか？」
ア《個人的な意見ですけどね。あの声で【あーーっ！】っていった時は噴出してましたし》
ウ「まぁ、コレも少し表現は違ってるかもだけど……」
ア《記憶力低下中～》
ウ「くふっ？！」

翡翠さん

ウ「記念ＳＳなぁ。あるといいなぁ」

ア《でもはやてさんの誕生日って6月4日ですから、六課解散してますね》
ウ「もう暫く先ってことかぁ」。いや、あるのか？
ア《ですね。後は最終手段として……【今までお祝いできてなかったから！】という理由で行き成り》
ウ「突然すぎて意味が分からないな。後は、過去番外編か」
ア《それが一番妥当ですね。あとイラスト》
ウ「ＵＲＬ、楽しみに待ってます！！」

樟葉櫂さん

ウ「みな……ん？」
ア《そういうアニメがあるらしいです。ちゃんと調べました》
ウ「さすがに声は分からなかったけど、それなりに変わるんじゃないか？フェイ姉とかくらいの変化だろうけど」
ア《元々低いので変わらない可能性もありそうですけどね》
ウ「で、戦いだけど、今回はインタルードって感じ？または閑話？」
ア《主人公が閑話って……そうなんでしょうけども……》
ウ「わかってるよ？おかしいことくらい」
ア《まぁ後々、気に食いませんがどうせ活躍するんでしょうけど》
ウ「気に食わないってなに！！？」

秋風さん

ウ「ん～、子供は無いんじゃないかなぁ」
ア《人様がやっているネタを読んだ以上あまりやりたくないですからねぇ。どれだけ面白そうでも》
ウ「その人が考えたネタだからなぁ。あとはプライド。設定を少し

弄ったとしても書いて、面白かった！とか言われても褒められてるの自分じゃないし」

ア《特に仲良くさせていただいている方のだと、本編によっぽど影響が出ない限り変更させていただいています》

ウ「まぁ、ストックがかぶった！てのもあるけど……これも結局信じてもらえるかわからんし」

ア《で、話ですね。戦闘の激化》

ウ「激しくしすぎて訳が分からなくならないように気をつけます。実際今そうなりそうだしな」

ア《いえ、もう既になっているでしょう。かなりへこんでました》

ウ「あ～……やっぱり多対多は難しいんだよ」

ア《自分で自分を養護ですか？》

ウ「うぐっ」

４０．主人公、治療中（後書き）

今回は閑話的な扱い。八神煌斗です。

とりあえずシリアスが続くのは個人的にイヤなので少しだけギャグ分を追加しました。

今回の話は本当はもう少し先、ウィズが復帰して回想的な扱いにする予定でしたが……ウィズは？という声が多かったので出しました。

で、少しだけ予告、と言うか裏話。

実は決戦直前に複線を引いたことに気づいていましたでしょうか？

ある意味ウィズの強化フラグです。

気づいた方は「あぁ、アレか」と思うでしょうね。

とりあえずヒント。ヒントと言う名のほぼ答えの３ワード。

思い出、核、不具合。

多分一つ目で大方予想できる人は予想できるはず。

二つ目と三つ目はソレがどんな感じで回収するか、です。

まぁ、二つ目はその単語がまだ本編に出てませんけど。

これで逃げ場は無くなった。

予想してもらって、それでも面白いといわれるように頑張ります！

それでわ！

41．リミッター解除（前書き）

今回も独自の設定が入っています。
大きく外れてはいませんが……不快になられたら、ゴメンナサイ。

41．リミッター解除

アテナ　ｓｉｄｅ――――――――――――――――

「くそっ……どうすれば……」

「なに、暗い顔してるのよ？」
「艦長がそんな顔してたら駄目だよ」

「……え？」

いつの間にか、ブリッジの扉の前に二つの人影がありました。

「母さん、エイミィ！？」
「急に広域結界が展開されたから、もしかしたらと思ったけど……やっぱりね」

クロノさんが慌てて二人に駆け寄ります。

「な、なんでこんな所に！？」

「何でって……私が休暇中なのはこの前帰ってきたときに言ったでしょう？」
「いや、そうじゃなくて。そもそもどうやって……」
「私が何年ここの艦長やってたと思うの？　それくらいチョロいわよ」

グッと親指を立てて言うリンディさんは恐ろしく今のこの場に似つかわしくありません。
さすがのクロノさんも少し呆れています。
というかリンディさん、法に触れるようなことしてないですよね？

「さてさてクロノ君。もしかして今って例のウイルスに感染してるっぽい？」
「あ……あぁ」

そして今度はエイミィさん。

手の運動をしながら向かうのはオペレーターの席の一角。
そこに座っていた人に変わって座ります。

「まてまて！　エイミィ、君は何をするつもり――」

そこまで言ってエイミィさんは手を歩み寄ってきたクロノさんの方に向けます。
その手の指の間には一つのメモリが挟まれていました。

そのメモリを見てクロノさんの表情が変わりました。

「……完成、したのか？」

「私を舐めてもらっちゃぁー困りますなぁ」

エイミィさんは堂々と言いますが、それでもクロノさんは信じられないようです。

「あれだけ難しいって言ってたじゃないか……」

「だから舐めないで欲しいって。これでも元アースラのナンバー3だったのよ？」

それだけ言ってエイミィさんはメモリを差込ます。

手の運動を改めて少し。

そしてキーボードに手を置き――。

「さぁて、いきますか！」

目にも止まらぬ速さで叩き始めました。

その様子を、ココに居る全員が唖然と見ています。

「ぼーっとしないで！　簡単なの回すよ！　対処して！」
「は、はい！」

他のオペレーター席に座っていた人たちもその剣幕に負け返事を返します。
そしてそれぞれの目の前にモニターが表示され、各々操作を始めます。

「アナタがＳ２Ｕを持ってきてからエイミィ、徹夜で頑張ってたのよ？」
「それは……でもこんな短期間で抗ウイルスデータを作ってくるなんて……」
「ま、未完成で私が大本は直接操作しないと動かないんだけどね」

相変わらず手の動きは衰えないまま、いつもの軽い口調で返すエイミィさん。
……もしかして凄いマルチタスク持ちなのでは？

「あと、増援も来てるわよ？」
「増援……コッチも間に合ったのか」
「転送ポートは暫く前から使えなかったみたいでね。私たちの家の方に来たのよ。そろそろ向こうも付く頃じゃない？　……さて、私もここに来た仕事をしないとね」

今度はリンディさんが肩を回しながら言います。
そして立った場所は、クロノさんがさっきまで居た艦長席。

「か、母さん!?　なにを……」
「何って、リミッターを外すのよ」
「リミッター……そうか！」

なるほど。

六課のメンバーのリミッターを外す権限を持つのは六課の後見人の人たちのみ。
そして後見人はクロノさんとカリムさん。そしてリンディさんです。

気軽……とは少し違いますが、ミッドで直ぐに連絡が取れたのはクロノさんとカリムさんの二人でした。
だから必然と外せる回数は二回、と思っていました。

たしかに、ある種盲点でした。

「さて、通信開くわよ？」

ａｎｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ――――――――――――――――

『ここ、リンディ・ハラオウン提督が後見人権限として、六課隊員に掛かったリミッターを解除を許可します。繰り返します――』

「え――？」

それは突然戦闘区域に流れた言葉だった。
その言葉を聞いて、敵味方問わずほんの数瞬動きが止まった。
そして、その一瞬さえあれば十分だと、全員が思った。
当然、なのはも。

「パイロ――」
「――っ！」

だがそれは選択の違い。
本来なのはは十分な戦闘が出来る体ではなかった。
それはゆりかご戦での後遺症。未だにリンカーコアは万全ではなかったのだ。
だからこそ、焦ってしまった。
選択を間違えてしまったがゆえに、なのはは絶好の的えとなった。

「シューター！！」

打ち出される１０以上ものスフィアはまっすぐになのはを打ち抜く為に加速する。
避ける術はない。隙を付かれたのが痛かった。
なのはは次に来る痛みや衝撃に備えようとして目を閉じた。

――だが、痛みは一向にやってこない。

恐る恐る目を開ける。

その目が映したのは翡翠色のシールドと、金髪の華奢な男だった。

「ユーノ、君？」
「なのは、今のうちに！」
「っ！　うん！」

お互いに言葉は交わさない。

「っ。させません！」

未だに打ち込まれるいくつものスフィア。
だがそれもすべてユーノによって阻まれる。
――だからこそ、なのはは無防備になれるのだ。

「エクシード……ドライブ！」

一瞬の光耀（こうよう）。

次の刹那、バリアジャケットが姿を変える。
これこそが、なのはとレイジングハートのリミッター解除、フルドライブモード。

大きな違いはミニスカートがロングスカートへ。
まさにそれは、少女時代の彼女の衣装を思わせた。

「いくよ、レイジングハート！」

相棒に声をかけ、足元に桃色の魔法陣が展開される。
その上になのはは足を下ろし、レイジングハートを構える。

そしてレイジングハートを基点に少しづつ、少々の魔力が集まりだす。

「なるほど……それでは、私も全力で応じます。――集え、明星（あかぼし）」

マテリアルも同じ構えをとる。

それは異様で、目を奪われる光景。

お互いのデバイスに少しづつだが集まる魔力。

まさにその共にその名を冠するに相応しい光景だった。

「私は今、あなたを超えます……」

「そうはいかない……私は超えられる訳にはいかないの……っ」

デバイスに魔力が集まり、桃色の球体にが出来上がり始める。

「スターライト――ブレイカー！」

「ルシフェリオン――ブレイカー！」

二つの極光が放たれた。

・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜

同時刻、ヴィータの元にも放送は届いていた。

――だが。

「解除できても――このペースじゃっ！」

悪態付きつつ、何度目になるか分からない攻撃を繰り出す。
が、それもやはり受け止められてしまう。

「どしたぁ？　リミッター……解除しねぇのか？」
「うっせぇ！」
「下がれ！　ヴィータ！！」

ザフィーラの声が響き、ヴィータが後退する。
同時、ヴィオルに向かっていくつモノ軛が打ち込まれる。

「きかねぇって言ってんだろぉがぁ！！」

自身を包むように、球体のシールドを張り、自身が貫かれる事を防ぐヴィオル。
そのシールドの前に軛は無残にも折れてしまう。

「ヴィータ！！」
「わかってらあぁぁぁ！！」

「あぁ？」

上空。

この時を待っていたかのように、逆落としのように襲い掛かるヴィータ。

《――Ｒａｋｅｔｅｎ　ｆｏｒｍ――》

「ラケーテン……ハンマアァーー！！」

そして、今夜何度目なのか分からない二色の魔力の本流。

そして再び距離を開く。

「あと一押しだってのに……」

ヴィータは奥歯をかみ締めた。

そう。あと一押しだった。

リミッターは外した。これであの盾は貫けると思っていた。

だが違った。

あと一押し足りない。

「一押しくらいなら、私に任せなよ」

声がした。
声のする方、自分たちの後ろに視線を移す。

「アルフ!?」

そこに居たのはフェイトの使い魔、アルフだった。
だが、その容姿はヴィータたちの記憶と少しの差異があった。

「なんで……大人?」
「後押しや補助は、使い魔の役目だし――ねぇ……ザフィーラ!!」
「守護獣だ!!」

ヴィータの言葉は聞こえているだろう。が、アルフは無視をしてヴィオルに突っ込む。
ザフィーラも律儀に突っ込み入れつつ、再び鋼の軛をヴィオルに打ち込む。

「一人増えた程度で、俺の盾を破れれるつもりかよぉ!!」

今回もまた、防がれた。

だが、今回は違った。

「バリアー――ブレイクーー！」

ヴィオルの視界の隅、そこからアルフの攻撃が決まる。

所詮使い魔。あのチビにさえ気をつけて置けば。ヴィルはそう思っていた。

だがそれは、アルフの拳が、自身のシールドに触れた時に間違いだったと感じさせられた。

「っ、なに!?」

ヴィータには劣る。だが、予想していた以上の威力がアルフの拳にはあった。

――ヴィオルは知らない。

アルフのこの攻撃は、少し時を遡れば、ヴィータのシールドをも破る威力があると言う事を。

そして本当に、この一押しさえあれば――。

この暫くの隙があれば――。

《――Ｇｉｇａｎｔ（ギガント）　ｆｏｒｍ（フォルム）――》

既にカートリッジ、魔力共に無かったからツェアシュテールングスフォルムは無理だったが、関係はない。
その程度で、この千載一遇のチャンスをヴィータが潰すはずが無かった。

「ギガント……ハンマアァァ！！」

繰り出された、己に残る全魔力を込めた一撃。

再び巻き起こる魔力の本流。
しかしその規模は比べ物にならない。

ヴィオルとヴィータ。
共に魔力に飛ばされそうななりながら、本流に耐える。

そして――シールドに亀裂が入った。

「はあぁぁぁぁぁ！！」
「クソクソクソ……クソガアァァァァ！！！」

シールドがガラスのように砕け、ヴィオルにアイゼンが直撃した。

「ぐふっ！？」

「沈めーーー！！」

そのまま振り抜き、ヴィオルは海面に叩きつけられた。

ここに――鉄槌と盾の勝負は決した。

・～・～・～・～・～・～・～・～・～

アースラからの全戦域放送が聞こえたとき、既にシグナムの元には援軍が到着していた。

「……アギト、どうやってココに来た？　お前が来るのは明日の筈だろう？」

「アタシもそのつもりだったけど、ルールーがイヤな予感がするって言ってこいって言うから来たんだよ」

「そうか。感謝せねばな……」

実際、シャマルの感知も少しずつズレが生じ始めていた。

無理もない。

風とは例え微量でもあたり続けていれば体力が削られていく。
それを防ぐ為にはシグナムに当たらない程度の距離で展開させるしかなく、必然的に広域になった。

広域捜査が、負担にならない筈は無かった。

そして視線を移せば、そこに居るのはこちらをただ見ているだけのエストラ。
正直、シグナムはアングよりエストラの方が気味が悪かった。

六課に攻め込んできた時もそうだった。自分から仕掛けてくることは、殆どと言ってないのだ。
何がしたいのか分からない。

「アギト。早速だが、行けるか？」
「当たり前だ！！」

そして、二人はユニゾンする。
上着は消え、下に来ていた服は紫、髪はオレンジへ変色し、背中に小さな炎翼が現れる。

その姿を確認すると、エストラは再び動きを開始する。
手をシグナムへ向ける。

これは魔力弾を打ち出す構え。

――魔力を探れば、魔力弾が来る方角は分かる。今のシグナムなら、そこから更に詳細な場所を知ることが出来る。

「はあぁぁぁ！！」

レヴァンティンを持っていない左手を剣を模した炎を作り出す。
そして、大きく横になぎ払う。

現れるのは紅蓮の炎壁。
シグナムはその壁を前に立ち止まり、レヴァンティンを構える。

そして――炎壁に三つの穴があいた。

刹那、シグナムが駆ける。

エストラも接近を許さない。右手の平を向ける。

だが――。

「なにっ！？」

シグナムが残像を左右に広げ、エストラの視界から消えうせる。
エストラも一瞬動きが止まる。が、直ぐに左右に気を配る。

「こちらだ！」

残像を残すほどの速さで上空からエストラの目の前。
攻撃をせずに、目の前まで降りてくる。

「剣閃烈火（けんせん）！」

左手に剣を模した剣を携えたまま――。

任意空間をなぎ払う中距離魔法。

その任意空間を一点に集中、零距離攻撃――！！

「火龍――　一閃！！」
「――づぅっ！！」

エストラはシールドが間に合わず、紅蓮の炎に飲み込まれ、魔法独特の爆発を起こした。

ウィズの小部屋

ア《相棒相棒、貴方はどこ行ったんですか？》
ウ「……さぁ？」
ア《まぁ、相棒が出ないことに私は何の不満も無いですけどね》
ウ「！！！？」
ア《ほら、早く進めてください》
ウ「……という訳で、反撃開始」
ア《増援、大逆転！これまたお決まりです》
ウ「なんでもＳｔＳで消えた使い魔組みは大好きらしいな。だから書いた、とかなんとか」
ア《あまり影響はありませんでしたが、ロストロギア珍事件の時に二人を出したのは軽く今回の理由でした》
ウ「まぁ、例の如くお決まり王道ありきたりの話だったけど……」
ア《次回もこんな感じになるんでしょうかねぇ？》

ナイトホークさん

ウ「まぁ、多分俺だけ……かはわかんねぇけど、珍しいとは思う」
ア《大抵はあそこで俺もある！見たいなことを言いそうですもんね》
ウ「ああ言った理由は後日また言うとして、俺にはそんな度胸は無いってことだな」

灰色の野良猫さん

ウ「うん。アレは本当に死ぬかと思った……。とんだ先がお花畑じゃなくて良かった」
ア《それはそれで面白かった気がしますけどねぇ～》

ウ「俺は微塵も笑えないからね！？」
ア《ま、本当はアレくらいでは気絶はしないんですけどね、本当は。あれは裸で相棒の抵抗値が３０ｋΩ程度の場合なので》
ウ「……おう！」
ア《本当に分かってるんですか？》
ウ「……お話、完成楽しみにしてます！！」
ア《逃げましたね……》

ＺＥＲＯさん

ウ「覚醒！……とはいかないでまた溜めちゃいました」
ア《そして今回はお決まりの展開、という訳ですね。……本当に覚醒するんですかぁ？》
ウ「さぁ。と言うかゼロは覚醒予定だって。凄いな」
ア《これぞ主人公！ですよね。しかも軽くチート予定だとか》
ウ「すごいなぁ。って、旅ルート！？」
ア《相棒の進路にまた新たな可能性が出てきましたね！》
ウ「俺個人としてはそれはヤだなぁ……」
ア《結局ヘタレ宣言ですか……》

翡翠さん

ウ「ざまぁ！！？そこ凄く余計だと思うな！！？」
ア《いいじゃないですか。言ってる事は間違ってないですし。コレくらい受け取っておきましょうよ》
ウ「くぅ……。チクショウ」
ア《ざまぁ。あ、ＵＲＬは届きましたよ。またＵＰしたら教えてくださいね》

ウ「お前にまで言われた!!?」

Ｎａｋｉさん

ウ「あ～……やっぱり仕返しはするのか」
ア《それでこそです!あ、顔は駄目ですよ。目立ちますから。やるなら体です、体》
ウ「なに言ってんの!?しかもそれスッゴイ古いイメージあるよ!!?」
ア《何ですか?相棒はラディの肩を持つんですか?》
ウ「そや、セラフィムは俺の事お前より下に見てる節があるし」
ア《正当な評価でしょう?》
ウ「えええ!!?」
ア《で、複線ですが……まぁ、答えが分かっても面白いと思ってもらえるように頑張ります》
ウ「頑張ります!」

ＧＰＳさん

ア《いやいやいや、いくら俺でもさすがに無理だろ》
ウ「俺の台詞取られた!!?」
ア《ちんたらしてるからですよ。で、ハイペリオン要請ですよ?》
ウ「あーうん。全然使ってくれていいよ。データ送るから」
ア《ただ本編でも言ったとおりクセが強いですからね。回りに使える人が居ないと苦労するかもですね》
ウ「逆に習得できたら。術式自体は簡単だから能力負荷できるけどな」
ア《まぁ、相棒より習得が遅いなどは無いでしょうから、直ぐに覚

えられますよ》

ウ「悔しいけど、俺もそう思う。ミオさん、頑張って」

41．リミッター解除（後書き）

何だかんだでもう２０日!?八神煌斗です。

早いですね、時が過ぎるのは。

で、行き成りですが、今回はご都合主義満載です。
本当にゴメンナサイ。

個人的にもこういうのはどうかなぁ、と思いましたが、もっと深く書くと文章量が半端なくなりそうな上に、自分でも書ききる自信が無かったのでこんな形になりました。

そして始めに目標に上げていた3月完結。
無理！

いえ、おそらくこの戦闘は終結します。

でもいうなら1～3月分は絶対にかけません。
もう事件を起こす気はサラサラありませんが、閑話?は4月に食い込みそうだなぁって。

あとこれが完結したら私はどうしたらいいのか。
これも瞑想中だったりします。

ん～……どうしたらいいのかなぁ。
原作（四期、Ｖｉｖｉｄ）は完結してないし、サウンドステージは入れたら何も出来ないか、いいとこ取りになりそうだし……。

オリジナルは暫く無理だとおもう。
……ＷｉｔＨのクロス行こうか？
それでわ！

42．一時の終結

another side――――――――――――――――

依然として、二閃の雷光は何度も交差し続けていた。
リミッターは解除できた。だが、それだけ。

フェイトは攻撃力で勝負する魔道士ではない。
そしてマテリアルもまた、速力重視の魔道士だ。

速さは互角。
フェイトが先に行くためには、真ソニックフォーム、そしてライオットザンバーを取り出すしかなかった。

だが……。

「やっぱり、僕は強い！」
「くっ……」

マテリアルの速度は今のフェイトと同位。
隙が無い訳じゃない。でも、ライオットに変える程の時間は無かった。

援軍も期待は出来ない。

さっきアルフからの援軍も断り、ヴィータ……ヴィオルの元へと向かわせた。

アルフはある意味ではなのは以上に連帯を取りやすい間柄ではある。

だが、だからこそ、それ故に分かる。

元々暫く戦闘から離れていたと言うのもあるが、この高速戦闘にアルフは付いて来れない。

だからこそ、サポートできそうなヴィータの元へと向かわせた。

「それでも――っ！」

負けるわけには行かない。

フェイトはバルディッシュを強く握りなおした。

「電刃衝（でんじんしょう）ーー！！」

避ける。

ソニック、ライオットの事を考えると一寸の魔力も無駄に出来ない。

だから避ける。

「やっぱり、そう来たな！！」

「――っ！？」

だが、その行動はマテリアルに読まれていた。
マテリアル自身は直感に頼っただけなのだろう。

しかし、実際フェイトはその通りに動いてしまった。
それ程にもマテリアルの戦闘センスは高かった。

当然、フェイトにはもう交わす術はない。
振りかざされる金色の刃。それを体に受けて海に叩き付けられるだろう。
バリアジャケットがあれど、すべての衝撃を受け流してくれるわけじゃない。

「動きを止めるな！！」

目は閉じていなかった。
だから、一瞬分からなかった。

フェイトとマテリアルの間に青い剣型のスフィアが通過しても。

だが直ぐに理解し、後退しマテリアルから距離を取る。

「まて！　逃げるなっ！」
「選手交代だ！！」

上空からマテリアルの追撃を阻止する黒い影、クロノ。

何故艦に居るはずのクロノが？

クロノがリンディに艦を任せて飛び出してきていることを知らないフェイトの頭にそう過ぎった。

だが今聞いているときじゃない、と直ぐに頭を切り変えた。

「バルディッシュ……真・ソニックフォーム――！」

ジャケットを真・ソニックに変え、バルディッシュもライオットザンバー・スティンガー、二刀形態へと姿を変える。

「グッー―」

クロノのうめき声のようなものが聞こえ、視線を戻す。

と、クロノが右肩を切られていた。

「クロノッ――！」

フェイトが叫ぶと、クロノはマテリアルと後退をして距離を取る。

そして入れ替わりにフェイトが突っ込み、メテリアルに攻撃を繰り

出す。

「くっ。変形なんて……ズルイっ！」
「はあぁぁぁ！！」

マテリアルが言う言葉もフェイトは一切耳を貸さない。
二刀の魔力刃で幾度も切りかかる。

「くっ――そおぉぉ！！」

やがて、マテリアルが大きく距離を開いた。

「スティンガーブレイド！！」

クロノが援護射撃……マテリアルに追い討ちをかける。
が、それはすべて叩き落とされてしまった。
――マテリアルのザンバーフォームによって。

「この力で、僕は飛ぶ！！」

「バルディッシュ！」
《――Ｒｉｏｔ（ラオット）　Ｚａｍｂｅｒ（ザンバー）　Ｃａｌａｍｉｔｙ（カラミティ）――》

マテリアルの使用としていること、繰り出そうとしている魔法に気づき、フェイトも両手に持っていたバルディッシュを一つに連結、大剣と成す。

「いくよ、バルディッシュ」
《ｙｅｓ　ｓｉｒ》

「撃ち抜け、雷神――！」
「雷神滅殺――！」

フェイト、マテリアル共に、大剣となった己がデバイスを振りかぶる。

《――ｊｅｔ（ジェット）　ｚａｍｂｅｒ（ザンバー）――》
「はあぁぁぁぁぁ！！」

「極光斬（きょっこうざん）ーー！」

共に雷を纏った金色の刃がぶつかり合い、あたりの空気を振るわせた。

・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～

「エルシニアダガー！！」
「っ――！」

襲い掛かる刃の雨。それをはやては確実に避けて避ける。
だが――反撃は許されない。

「アロンダイト！！」

シュベルトクロイツを構えるどころか、体制を整える暇さえない。
白色の砲撃魔法がはやてを襲う。

「つっ――！！」

体制を整える事を捨て、無茶な状態でシールドを張り、攻撃を防ぎ、
爆発を起こす。

「クラウ・ソラス！！」

爆煙の中から放たれた砲撃魔法。
相手の視界から少しとは言え外れた中からの攻撃。

だというのに、マテリアルはそれを簡単にかわす。
爆煙が晴れ、そこに居るのは肩で息をしているはやて。

「どうした塵芥。鈍ってきているぞ？」
「うるさいわ。手を抜いてるんや」

前屈みになっているはやてを見下ろす――見下すようにいうマテリアル。

「ほぅ。余裕なのだな」

そう言う顔は明らかにあざ笑っている。
実際、はやての一言は強がりではある。
確かにはやては強大な魔力持ちであり、そのレアスキルによって魔法の種類も豊富ではある。
コレだけ聞いたら今のように苦戦しているのが不思議だろう。
だが、はやてには今回の様に一対一の経験が著しく欠落していた。
はやての戦闘スタイル。一言で言うと固定砲台である。
だからこその苦戦であった。

「ならば……そろそろ本気を出してもらおうか！　――アロンダイト！！」

「くっ――。クラウ・ソラス！！」

再び砲撃魔法がぶつかり合い、爆煙が巻き起こる。

一瞬、二人の視界からお互いの姿が消える。

――このままやったら、ジリ貧や……。

攻撃を交わし、攻撃を繰り出しながらはやては考える。

今のままでは落とされるのは時間の問題だった。

だからと言って、はやてには接近戦で使える攻撃魔法は限りなく少ない。

例えそれがリィンをユニゾンしていても。

――リィン……。！　その手があったか！

頭を過ぎった好転の機会。だがそれは、分の悪い賭けでもあった。

だが、考えている暇も無いのは事実。

だったら悩んでいる暇は無かった。

艦で頑張っているだろう弟の為にも、自分がココでへこたれる訳にはいかなかった。

「刃以て、血に染めよ。穿て、ブラッディダガー！！」

打ち出すのは鮮血色の自動誘導型高速射撃魔法。
予想通りにそれは全て防がれる。着弾時爆裂し、爆煙に包まれたにも拘らず、マテリアルはそこに存在し続けた。

だが、それは予想通りだった。

「闇に沈め――……」
「っ！？」

はやてがこの戦闘で出す初めての詠唱。それに一瞬マテリアルの動きが止まる。

「ブルーティガードルヒ！！」

打ち出されたのは……ただのブラッディダガー。

当然。
今の詠唱、魔法の名称は闇の書が使っていたドイツ語になっただけ

の、ブラッディダガーなのだから。

「そんな小細工が我に効くか！！」

その攻撃すら、真正面からアロンダイトで打ち消された。
そしてアロンダイトは真っ直ぐはやてに襲い掛かる。
が、万全の状態だったにも関わらずはやては防ぐことを選択した。
砲撃魔法が直撃し、大きな爆煙にはやての姿が消える。

「所詮塵芥。精神すら軟弱だったモノか」

爆煙を見ながらマテリアルはそう呟いた。
あんな弱いものが自分のモデルとなった事にもだが、自分に傷つけることすら出来なかった事にも、妙な焦燥にも駆られていた。
次第に爆煙が晴れていく。
影は一つある。どう見てもはやてだ。
留めの一撃を繰り出そうと、その手に持つエルシニアクロイツを静かに向ける。
――と、マテリアルの体が強張り、視線を自身の上空に向ける。

そこにあるのは数多の短剣。ブラッディダガーに凍結効果が付与された、リィンの魔法だった。
当然使えるのは――リィンしか居ない。

「くっ――つっ!?」

マテリアルはソコから避けようとするが、それは叶わなかった。
マテリアルの周りを囲む様にフリジットダガーより多くのブラッディダガーだ仕掛けられていた。

「――塵芥、キサマァ!!」

そして再び視線をはやてに戻すと髪の色が茶色に戻ったはやてがシュベルトクロイツを構えている。
その隣にはリィンも居る。

「ブラッディダガーはな、遠隔設置も可能なんや。知らんかったやろ?」

それこそがはやての賭け。
マテリアルがブラッディダガーの特性を知っているかどうか、ユニゾンアウトが気づかれないか。

そしてはやてはその賭けに勝ったのだ。

「リィン！」
「はいです！！」

「ブラッディダガー！！」
「フリジットダガー！！」

「この……塵芥がああぁぁぁ！！」

マテリアルはその叫び声を残し、爆煙に包まれた。

「や、やったか……？」
「分からないですぅ」

手を膝に沿え、息を整えつつも前の爆煙に包まれたマテリアルを見る。
さっきとは真逆の状況。

だが、はやては油断しない。

そして――煙が晴れ、そこに居たのはボロボロになったマテリアルだった。

はやてｓｉｄｅ――――――――――――――――

「ち、塵芥が……生意気な真似を……」

言葉も絶え絶え。
ブラッディダガー系統魔法の集中砲火。
さすがに効いたみたいやな。

「小癪な真似を……こうなれば――っ！？」

「？　どうしたんや？」

言葉を自分で止めて、胸元を掴み苦しみ始めた。
時間差があったから私の攻撃のせいじゃないとは思うけど……。

「がぁぁぁああ――！！」

更に苦しむマテリアル。額にも脂汗が浮き上がってき始める。

「え、どうしたの！？」

「大丈夫!?」

他からそんな声が聞こえてきた。
声の方を見ると、予想通り、なのはちゃんとフェイトちゃんだった。
二人共、戦っていたマテリアルが苦しみ始めたのを見て慌ててる。
マテリアルだけが苦しんでるんか……っ。

――エストラたちは、どこにいったんや?

「がぁぁぁぁぁ!!」
「――っ!?」

そんな叫ぶ声が聞こえて私は視線を戻して――言葉を失った。
その胸元から……あの丸い塊、マテリアルの核を捕らえた手が生えていたから。

手の正体はアング。

「ご苦労様でした。お陰で効率よく経験値を蓄えさえることだ出来ました」
「経験値……やて?」
「はい。――フッ」

「がぁぁ！！？」

私に返事をして、その手を引き抜く。確りと核も収められてる。

「……どうやらアッチも終わったようですね」

アングの視線を追うと、なのはちゃんとフェイトちゃん似のマテリアルもヴィオル、エストラに核を引き抜かれた所やった。

ウィズの小部屋

ア《相棒～。皆さんが言っている通り私たちの出番が無さ過ぎると思います》
ウ「いいじゃないの。お前はブリッジに居るだけだろ？俺なんて苦しんでんだぞ。誰も見てないのに」
ア《そんなの私の知ったことじゃ無いです》
ウ「うぉい！？」
ア《とりあえず予定では次回復帰、との事ですけど》
ウ「マジで！？」
ア《あ。相棒は知りませんよ？私自分の台本しか確認してませんから》
ウ「なんで！？そこは俺の分も確認しておこうよ？！」
ア《イヤです、めんどくさい》

ウ「そんなにですか！！？」

翡翠さん

ウ「だよなぁ、俺もクロノと違ってユーノさんやアルフさんは好きだ」

ア《アイツはアルフさん＞ユーノさんらしいですけどね。相棒は？》

ウ「ん～。俺もかなぁ。ユーノさんは既に無限書庫に掛かり始めてたし」

ア《ですよねぇ。で、そろそろ佳境！まぁ、今もある意味佳境ですけどね》

ウ「俺が居ない時点でもう人展開あるのは見え見えだからだろ？」

ア《あとイラスト見せてもらいましたよ》

ウ「今のジャケットに較べてシグナム姉さんよりだったな」

ア《お姉さんにしごかれている時、という設定でしたからね》

ウ「ありがとうございました！」

ナイトホークさん

ウ「うん。俺主人公」

ア《まぁ、出てないですからねぇ、最近》

ウ「でも俺が出てないのって今回の入れて３８．３９．４１の三つだけなんだけど……」

ア《ですから、以前にも言いましたけど、オリ主一人称モノだと少ないんでしょうね》

ウ「そう言うものなのかねぇ」

ア《魔道士ランクも微妙ですし》

ウ「お前まで言うか！！？」

灰色の野良猫さん

ア《ご都合主義万歳！》
ウ「とりあえずもう直ぐ復帰なので見捨てないでください！！」

ＺＥＲＯさん

ウ「一歩歩くだけで次元震！？なんちゅぅ……」
ア《まさかとは思いますが自分の一存とかでは……。それはら軽くでは無く完全チートでしょう？》
ウ「怖いなぁ。俺もうゼロを怒らせないようにするよ」
ア《怒らせない通常時でも相棒は手も足も出ないと思いますけどねぇ》
ウ「酷くない！！？」

Ｎａｋｉさん

ウ「ラディ……どうなるの！？」
ア《精神的苦痛とは、いいモノをチョイスしましたね。ナイスです！》
ウ「なにがナイスなの！！？」
ア《それにしても、机にもならないとは、相棒よりももろいですね……》
ウ「それを補って余りある槍の才能があるみたいだけどなぁ。うらやましい」
ア《相棒も封印説いたらいいじゃないですか》

ウ「俺解いただけでボロボロになるからね！！？」

沫乃憂谷さん

ウ「劇中でクロノが【リミッター解除できるのは後見人の僕と～～】なんて言ってたのがはじめだっけ？」

ア《あれ、リンディさんは？って思ったらしいですから。でもこれ、完全独自設定なんですよねぇ》

ウ「でさ、このロキ？なにノリで凄そうなの撃ってきてんの！！？」

ア《それを受け止めるのが相棒クオリティ》

ウ「ない！そんなスキル俺には無いから！！」

42．一時の終結（後書き）

クロノ、艦放棄、八神煌斗です。

一応、次回あたりウィズ君を復活させようかな？って思ってます。
思ってますが……どれくらい出せるかな？とも思ってます。

今回おかしな終わり方させてしまいましたしね。

う～ん……なんだか泥沼に嵌って行ってるような気が……。

とりあえず次回、またお会いしましょう！

43．裏切り。そして……

はやてｓｉｄｅ――――――――――――――――

三人の核を抜いたアング達はまたあの機械のところに集まった。

「どうですか？」

「あぁ、確かに経験は十分だろう。これなら核になりうるだろうな」

聞くアングに答えたんはエストラ。

エストラとヴィオルの手中にも、核が握られてる。

「大丈夫！？」

聞こえた声はなのはちゃん。

見ると、核を抜かれたなのはちゃんのマテリアルが足元から崩れ始めていた。

さらに視線を動かす。

フェイトちゃんと戦ってた子も、足元から崩れ始めてる。

私はハッとして、自分のマテリアルを見た。
……やっぱり崩れ始めてた。

「主！」
「はやて！！」

シグナムたちもコッチに戻ってきてくれた。
けど私はマテリアルに近づく。

「大丈夫か？」
「……我を誰と思うての言葉か。ゴフッ」

吐血をしても強がってる。

シャマルに治療を、とも考えたけどこの子らを作ってた元が無くなってるんやから無理や。
アレを取り戻すにしても……。

「貴様、よもや我を助けようと考えてるのではあるまいな？」
「……」

口元の血を拭きながら、まだ捻くれた事をいう。
何を考えてるんや。

「あまり我を貶めるな……。死に際くらい弁えている……っ」

もう腰まで消えてきてる。
手に持ってたデバイスはもうあらへん。

「またも闇の書の復活は叶わなかった、か……」

そう言えばこの子らはそれを目的に生まれてきたんやっけ？
記憶もそのままやって言うんなら、今回もそれが目的でもおかしくはない……か？

そしてとうとう胸元まで消えた。
もう時間はあらへんやろうと思う。

「覚えておけ塵芥。いつか、再び我はお前の前に現れる」
「……何度来ても一緒や。返り討ちにしたる」

私がそういうと鼻で笑ったあと、完全に消えた。

なんや最後はえらい穏やかに逝きよったな。
まぁ、恨み言垂らしながら逝かれるよりかは全然マシやったけど。

私が再び見るのはアング達。

すでにあの子らの核はあの機械の側面にはめ込めれて一部になっていた。
なのはちゃんとフェイトちゃんの魔力が近づいてきた。
多分私の後ろに居る。

「貴様らの負けだ。大人しく投降しろ」

言うたのはシグナム。

マテリアルは全員消えたし、アング以外の二人もシグナム達にやられた筈や。
私も含めてみんな結構消耗してるみたいやけど、この人数差や。
絶対に勝てる。
自身はある。

「確かに……随分やられていたみたいですね」
「ふん」

アングの言葉にヴィオルは大きく鼻を鳴らしてそっぽを向いた。

ハッキリいって、戦闘に参加してた二人は結構ダメージを負ってるように見える。
シグナム達との戦いには手を抜いてた、演技って訳じゃないみたいやな。

「確かにこの感じはマズイですが……方法が無い訳じゃありません」

「なに言ってやがる？」

今度はヴィータ。

確かに今のはどう聞いても強がりや。

今の状態からの逆転なんて――。

それに、エストラも一瞬やけど、疑問を浮かべてたのを私は見逃さへんかった。

「おい、何かあんのかよ？」

なんとなく予想通り。

ヴィオルがアングに向き直って聞いた。

何がかんだでエストラも気になるみたいでアングの方を見てる。

私たちは直ぐにでも攻撃して、捕縛しないていけへんのに……アングのその自信が妙に気味悪くて動けないでいた。

「えぇ。知りたいですか？」

「当たり前だろぉが。さっさと言いやがれ」

「それはですね――……」

「――あ？」

消えるような声は誰の声だったか。
その消えそうな声が聞こえるほど……あたりは静かになった。
なぜなら――。

「て、テメエエエェェ！！？」

アングの腕が、ヴィオルを貫いていたから。

「アング！　貴様何を――グフッ！？」
「煩いんですよ」

その事にエストラがアングに向き直った瞬間、今度はエストラをもう片方の手が貫く。
あまりの急展開に私は動くことが出来ない。

「き、貴様……何を考えて……」
「何を考えて？　そんな事ずっと言っているでしょう？経験を積

んだ核が欲しいと」

「なに、を……ガフッ！？」

腕を抜き取る。

既にヴィオルは意識が飛びかけてるのか、自分で飛ぶことも出来ないみたいだった。

エストラも傷ついてる筈やのに、ヴィオルを抱えた。

そんな力があることにも驚いたけど、私はそれ以上にアングの手に納まっているモノにも驚いていた。

その手にあったのは……マテリアルに使われていたあの核があった。

「な、何故それが……」

エストラが信じられないと言う口調や。

「簡単な話です。ユリアが裏切る可能性もありましたからね。予め保険を掛けておいたまでですよ」

つまり、アング以外の二人はあの核を元に作り出した偽者だった？

でも記憶があるってことは元の素体が居た筈や……。

まさか、死んだ仲間の中から選んだちゅうんか？
なんて考えてる間にも二人の体は消え始めてる。

「……そういうことか」

エストラは特に声を張り上げることも無く、そのままを受け入れたように静かに頷いた。

「覚えていろ。このままでは、終わらない……」
「覚えておきましょう。それでは――」

アングはエストラたちに背を向けた。
その行動に、一切の後悔なんて無かった。

そしてその手に持った二つの核を構えて――……。

「さようなら」

機械に組み込んだ。
瞬間、エストラとヴィオルがその場から弾けるように……消えた。

この場に相応しい言葉は、静寂しかない。
皆がその光景に言葉を無くしてた。
そんな中、アングだけが私たちに背を向けたまま機械を弄ってる。

「テメェ!!　何考えてやがるんだ!!」
「はい？」

そんな時、ヴィータが怒鳴り上げた。
それでもアングは、何を怒っているのか分からない様子でコッチを向いた。

「テメェの味方だろ!!　何で殺した!!」
「味方？　殺す？　何を言ってるんですか？所詮、プログラムでしょう」
「なっ――」

ヴィータだけじゃなかった。皆声が詰まった。

やけど、一人……。
シグナムだけが、一人飛び出していた。

「レヴァンティン!!」

ユニゾンした状態でレヴァンティンに炎を纏う。

「紫電――　一閃！！」

上から切り伏せるように、レヴァンティンを振り下ろした。

……けれど――――……。

「なに！？」

レヴァンティンの刃は、何も無い空間でその刃を止めていた。

「くっ――――」

直ぐに後ろに引いて距離を取ろうとするシグナム。
でも今度は背中から何かにぶつかった様な動きを取ってその場に留まった。

「シグナム！」
「動いちゃ駄目だ！」

ヴィータが前に出ようとすると、それをユーノ君が大声を出して止めた。
日頃大声を出さないユーノ君が大声を聞いてヴィータの動きが止まる。

「ユーノ君!?」
「ユーノテメェ、何言って――」

なのはちゃんとヴィータ、二人が疑問の声を上げた。

「違うんだ。僕らはもう……囲まれてる」

重苦しい口調でそう言うた。
私はシグナムの動きを思い出して、ゆっくりデバイスで目の前の空間に――触れた。
他のみんなも私と似たような事して、同じ結果になっていた。

「どういうことだい、これ?」

まるでノックをするように横の空間を叩いて、みんなを代表して聞いた。

「僕にも分からない。なんだか、一瞬目の前が歪んだ気がして……」

「さすが、と言った所ですか？　僕も気をつけたつもりだったんですが……」

私たちの方を見たまんま、手をあの機械に伸ばして何かのスイッチを押した。

すると目の前が薄くやけど、青く染まった。

いや、目の前だけやない。私を囲むように四角く青いモノに囲まれてる。

色のせいでわからんけど、様子を見るに皆もそう見たいや。

全員を一つに囲んでるんやない。一人一人別々に囲まれてる。

なんでこんな手間の掛かることを。

「言っておきますけれど、ただのクリスタルケージではありませんよ」

余裕の表情を更に強めて笑うエストラ。

確かに術式も半端やないくらいに複雑や。しかも硬いし……。

「空間干渉魔法の応用、と言いましょうか。さすがに大きなものは無理でしたが、貴方たちを囲むように少しずらせばそれだけで完

成します」

……つまり私たちとアングが居る場所は同じ。
やけど、その間の空間がズレてるってことかい。

こんな魔法、リミッター外した今なら高レベル魔法で吹き飛ばせれるけど、狭すぎる。
魔法を発動させたら私にまでダメージが来る。

そしたら……その隙に攻撃されてゲームオーバーや。

にしても、こんな高レベル魔法、あんな短時間で発動させられるんかい。

「腑に落ちない、という顔をしていますね。ではタネ明かしをしましょうか」

少しの間が空いた。

その間も私はアングを睨み続ける。
けれどアングはどこ吹く風で、再び口を開いた。

「この機械は、いわば分割思考（マルチタスク）そのものです。僕の代わりに、複雑な事を変わってくれます。まぁ、それでもそのケージの生成にはかなり時間を使いましたが……」

……だからさっきの核って訳かい。

経験を積ませた核。

核の一つ一つが、エストラたちの分割思考を持ってるとしたら、ユリアなんか比べモンにならないくらいなんちゃうか。

「待ちな。それだけのモノ、簡単に操作できるとは思わないよ」

言うたのはアルフ。

でもアルフは知らないんや。

アングの能力を。

「僕の能力は機械機器への干渉。事実上、僕ももう一つの思考、と言ったところですね。」

「それでも、戦闘中に片手間で制御出来るとは思わないが?」

今度はシグナム。

確かにそうや。話を聞いただけで分かる。

いくら能力があっても、そんな簡単に操作できるもんやない筈や。

「……鋭いですね。これに干渉し続けてる限り、他の機器には干

涉できません」
「それは、ええ事聞いたなぁ」

強がりや。アングも気づいてるんやろう。
だから自分から弱点を言った。

今の私らは、どうする事もできへん。

「まぁ、そう言う事です。このまま貴方たちを始末してもいいんですが……先客のようです」
「先客？」

アングが視線を上に向けた。
私もつられて上を見る。

「――っ！」

単純に驚いた。
と同時に思った。

あの時、助けて欲しいと思ったら助けてって言った。
それがこんな早く、助けてもらうことになるなんて……って。

side　out――――――――――――――――

《こっちを見ていますね。気づかれた……んでしょうねぇ》
「そりゃそうだろ。俺、魔力隠すとかそんなの出来ねぇし」
《それを開き直りと言うのだ。情けない》
「こんな時までお小言ですか！？」

チクショウ。
どっからどう見ても今以上に俺がカッコイイシーンなんて無かっただろうに。

少しくらいかっこよくさせて下さい。

「とにかく、空戦になるな。アテナ」
《了解です。――blanco（ブランコ） ala（アーラ）――》

背中に生やすビーム状の白い翼。
10秒と無いが、コレで俺も飛ぶことが出来る。

《見る限り相棒しか戦えなさそうです。助力は望めませんね》
「構わねぇ。元々、俺は姉さん達を助けたいと思って管理局入りしたんだ。それじゃぁ、行くか……」

そして俺は自分が立っていたハイペリオンから跳び下り、姉さん達と同じ高さまで降りる。
そして直ぐにハイペリオンを再び展開。
姉さんたちを背に、アングと向かい合う。

「ウィズ!?」
「ゴメン、はや姉。待たせた」

ウィズの小部屋

ア《相棒～。ようやく復帰なのはいいですが、言いたいことが少し》
ウ「あんまり聞きたくないけど……なに?」
ア《この際私がそんなに喋ってないことは置いておきましょう》
ウ「いや、俺のせいじゃないし。それ」
ア《本編、あんなの相棒じゃないです。なんですか、自分に酔ってるんですか?》
ウ「そんな言われよう!!?」
ア《当たり前でしょう。あそこは、「援護なし?あ、じゃぁ無理。」くらい言わないと》
ウ「そんなに!?俺ソコまで落ちてないからね!?」
ア《当たり前です。そんな事を言っていたら私が殺ってます》
ウ「……結局何が言いたいの?」
ア《……さぁ?》

鴇坂カスハさん

ア《あれま。この先の展開が読めたらしいです》
ウ「痛いなぁ。いや、予想はしてたんだけど……」
ア《相棒の動きはお決まり過ぎるんですよ。もっとこう、オリジナル感を出さないと》
ウ「ほうほう。例えば？」
ア《戦場にかっこよく登場したは良いものの、何も出来ずに迎撃》
ウ「かませ犬！！？」

翡翠さん

ア《始めはカッコよく援護！だったらしいですが……》
ウ「艦を放棄までしたのに……本当にただの時間稼ぎだったなぁ。いい気味だ」
ア《と言うか相棒。私狙われてますよ諦められてませんよ。どうしたらいいですか？》
ウ「良いジャン別に。そんな熱狂的ファン俺には居ないぞ。……主人公なのに」
ア《それは自然の摂理でしょう？》
ウ「……俺マスターなのに……」

ＺＥＲＯさん

ウ「なんかよくわかんない」
ア《簡単に言えば、リミッター外したらアルカンシェル級のチートだそうですよ》
ウ「もう俺の周りそんな人ばっかり……なんだよ。もっとこう、普

通の人いないの？」
ア《相棒も普通じゃないでしょう？ヘタレとか》
ウ「そういう意味じゃない！そういうのじゃないの！！」
ア《まさか自分がヘタレじゃないとでも！！？》
ウ「なんで声張り上げてんの！！？」

Ｎａｋｉさん

ウ「本編の方も見てきたけど……ラディ、頑張れ」
ア《甘いです。そんなの一生モノのトラウマになりえません》
ウ「そこまですること無いと思うよ！！？」
ア《私も色々溜まってるんです。折角本編復帰したのに……アレだけですか！？》
ウ「だから俺に言わないで！！」
ア《まったく……。それにしてもランさん？はハイペリオンを使えていましたねぇ》
ウ「あれだ、もう一人の自分の方が強いって言うヤツ」
ア《コレもお決まりなんですか？》

ＧＰＳさん

ウ「そう言えば向こうにも俺いたなぁ」
ア《しかも相棒より位が高いうえにかなり頼りがいがありましたよね？》
ウ「うぐっ。……で、でもその分ちゃんとミオさんに教えて上げれるよ！？」
ア《相棒！？まさかミオさんにエロい事をするつもりじゃ！！》
ウ「お前俺の事どんな目でみてんの！！？」

43．裏切り。そして……（後書き）

とうとう復活！八神煌斗です。

いよいよ、次回からウィズにはめい一杯活躍してもらいます。
あんなヤツでも今まで待っていてくれた皆さん、ありがとうございました！

ウィズとアングの戦闘。
極力淡々と進めないで、少しでも驚いてもらえたりしてもらえるように頑張りたいと思います。

そして実は……ネタが無い！
いえ、この戦闘後。日常パートの事です。

そりあえず時系列として正月やバレンタインなんか書けたらいいなぁ、とは思っていますが。
意外と1～3月って、イベント多いような少ないような。
逆に王道ネタばっかりなんですよねぇ。

何とかせねば。

それでわ。

４４．復活、夜天の騎士見習い

俺の目の前に居る蒼髪の男、アング。
状況はもうアテナとレイラから聞いてる。
第三拘束も解除してる。
もう話す必要はねぇ。
コイツは――俺が倒す！！

「アテナ！テクニカルソード！！」
《――Ｔｅｃｈｎｉｃａｌ（テクニカル）　Ｓｉｌｈｏｕｅｔｔｅ（シルエット）――》

先手必勝！
俺はハイペリオンを蹴り、アングに向かって跳び出す。
姉さん達を閉じ込めてる魔法は、時間を食うって言ったやがった。
あの魔法、いや。
反撃させる暇すら与えねぇ！

「はあぁぁ！！」

振り下ろす刃。
それは確実にアングに反撃の隙も与えない、自分でも出来すぎたタイミング。
だが、それは単純なシールド魔法に止められてしまう。

《マスター！！》
「――っ！」
「遅い！」

奇襲とも言える俺の特攻が簡単に止められたことに俺は一瞬固まってしまった。
その隙をアングが見逃すはずも無かった。

「しまっ――！」
《――Ｈｙｐｅｒｉｏｎ（ハイペリオン）！――》

アテナの独自判断で展開されたハイペリオン。
それによってアングの攻撃は防ぐことが出来た。

俺は展開されたハイペリオンを壁蹴りの感覚で蹴り、アングから距離を取る。

「アテナ、消せ！」

俺の一言でハイペリオンが消える。

《――Ｌｏｄｅ（ロード）　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ（カートリッジ）！――》

「シングル……カラーズ！！」

その瞬間、俺は体を回転させ遠心力を利用、更にカートリッジを一本の魔力を注ぎ込んだ特大の一撃をくれてやる。

斬撃は迷わずアングに向かい、注ぎ込んだ魔力に比例した爆発を起こした。

俺は新たに展開したハイペリオンの上に降り立つ。

《仕留めては……いないのだろうな》

「だろうな。アレくらいで倒せてりゃ、ココまで事件は大きくなってねぇ」

《カートリッジを一本使ったシングルなんて久しぶりですよ》

そりゃそうだ。シングルは基本俺の魔力、術式を全部俺で行使する魔法だからな。

だけどカートリッジを使えば威力が上がるのは言うまでもない。

ならなんで多用しないのか。

理由は簡単。
俺の持ってる他の魔法が基本カートリッジを使用するからだ。
だから使わなくて良い魔法は使わないようにしてる。
だけど今回は別。
俺の腰に十字に巻いた二本のベルト。それに隙間無く付けられたカートリッジ。
出る前に、ユリアが渡してくれた。
なんでも戦闘では治療魔法の影響で出られないのは目に見えてたから予め作っておいたらしい。
血が繋がっていて、魔力の性質が似た俺とユリアだから出来る方法。
実際、この方法は昔シャマル姉さんがシグナム姉さんたちにやっていや方法でもあるらしい。
そう考えてるうちに、煙が晴れる。
予想通り、アングは立っていた。
どこかで見たことある様な群青の盾型デバイスを自身の前に展開させて。
「その盾、ヴィオルのだろ。なんでテメェが？」
「元々コレは僕のですよ。貸していただけです。そしてコレが――……」

デバイスがバラけはじめた。
そしてそのバラけた盾は、ただの部品になってアングの周りに停滞し始める。

「コレこそが、本当の姿。」

見る限り、ただの鉄塊にしか見えない。
だけど、このタイミングで出してきたってことは、それだけじゃないって事だろう。

下手に近づく訳にはいかねぇ……。

なら――！

《――Ｇｕｎ（ガン）　Ｓｉｌｈｏｕｅｔｔｅ（シルエット）！――》
「ソードダンス……」

剣（つるぎ）の舞、四つ目のバリエーション。

《――Ｌｏｄｅ（ロード）　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ（カートリッジ）――》

１ｓｔが連撃、２ｎｄが奇襲、３ｒｄが破壊力なら、
４ｔｈの真髄は、絶対的な攻撃範囲！！

「フォース……カラーズ！！」

技名を叫び、ガンソードのトリガーを引く。
同時、剣先から打ち出される砲撃。

それは真っ直ぐにアングへと伸びる。

が、それは交わされてしまった。

――それでも良い！

「はあぁぁ！！」
「なにっ？」

アテナを振る。
すると打ち出された砲撃は、さながら鞭の様に剣先に引っ張られ、アングを追う。

さすがのアングも普通は描かない砲撃の軌道に驚いたのか、一瞬動きが止まる。

「ですが、この程度で！！」
「なっ――！」

次は俺が驚く番だった。

アングは避けることが叶わないと分かると、再びバレけていたパーツが剣へとへ構成されで正面からフォースを切り伏せた。

フォースは四散し消えていった。

「正面から切られるとは思ってなかったな……」

《それよりも、あのデバイスは厄介ですね》

《可変型多機能デバイス、と言ったところか。私たちとは比べものにならないな》

確かにアテナやレイラも同じような機能持ちだ。

だけど、アレはそんなレベルじゃない。

剣や槍、杖だけのレベルじゃない。

前は盾で今は剣。明らかにその二つだけじゃないだろう……。

「さすがに驚きはしましたけどね」

「それだけかよ……」

俺にとってカラーズは一応なの姉でいうディバインバスターに当たると思うんだけどなぁ。

それを驚いただけって……マジでヘコむぞ。

――でも。

「攻撃の手を休めるって訳にはいかねぇんだよな。アテナ」

《――Ｔｅｃｈｎｉｃａｌ（テクニカル）　Ｓｉｌｈｏｕｅｔｔｅ（シルエット）――》

アテナをテクニカルに戻して構える。

本当はエクタランテ辺りを使いてぇけど、さすがに無理だ。

あれはカートリッジの消費が激しすぎる。そこで勝負が決められなかったら……。

「攻められてばかりと言うのも気に入りません」

「――っ！」

いつの間にかアングが握っているのは剣では無く、杖。

「僕も、攻めに転じさせてもらいましょうか」

杖の先を俺に向けてくる。

そして直ぐに、杖に魔力が収束し始める。

深い、深い群青色の魔力。

《相棒！　砲撃魔法、きます！！》
「見れば分かる！！」
《親切で教えたのに！！？》
《マスターは人でなしだ》
「お願い！　こういう時はマジメにしてて！！」

って、こんなツッコミ入れてる場合じゃねぇ！

「ハイペリオン！！　アテナ！」
《――Ｌｏｄｅ（ロード）　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ（カートリッジ）――Ｈｙｐｅｒｉｏｎ（ハイペリオン）　Ｈｅｘａｇｒａｍ（ヘキサグラム）！！――》

目の前に展開する、ハイペリオンと、上下に向いた剣十時三角形を合わせた形のヘキサグラム型ハイペリオン。

二つまでなら俺は魔法を同時展開できる。足場と、防ぐ為のシールド。

ハオペリオンは俺でも自分ひとりで展開できる。そしてヘキサグラムはアテナに単独で展開。
これまた普段は消費魔力が多いから滅多に使えねぇ魔法。

俺自身避わす方が多いし。

だけど、今回はアイツの砲撃スキルがどの程度かわからねぇなら、下手に避けるより守りを固めた方がいい。
ハイペリオンとヘキサグラム。この二重展開（デュアルオープン）の防御力はかなり自信

がある。
いや、なの姉のＳＬＢ見たいな能力が無かったら、だけど。

「受けなさい」

そして撃ち出される群青の砲撃魔法。
真っ直ぐに俺の方へと向かい、ハイペリオンに直撃した。

「ぐぅっ……！」

何とか耐える、が、衝撃は半端じゃない。
添えている左手がぶれそうになるのを必死に右手で抑える。

しかし、俺の展開したハイペリオンはガラスのように砕け、ヘキサグラムに到達する。
だが、それは暫く耐えるとヘキサグラムに亀裂が入った。

「チィッ……！　アテナ、もう一発使え！！」
《了解です！　――Ｌｏｄｅ（ロード）　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ（カートリッジ）――》

更にもう一発、カートリッジを消費してヘキサグラムを強固にする。

「はあぁぁぁぁ！！」

唐突に、バンッ！という音と同時に砲撃が止む。

「はぁはぁはぁ……っ」

危なかった。
あそこでカートリッジを使ってなかったら、破られてただろう。
本当に危なかった。

息を整えて、アングを見る。

「強引に魔力任せの防御。単純ですが、故に強かった、ということですかね」
「うるせぇ。達観しやがって……」
《ま、言ってることは間違ってませんけどね》
「お前どっちの味方？」
《勿論相棒です》

なんだろうね。
分かってるけど余所余所しく感じるよ？

「ですが……それだけではありませんね？」
「……っ」

気づきやがったか……。

「何を……したんですか？」

何をした、か。
別に俺が何をしたって訳じゃないんだけどな。

・～・～・～・～・～・～・～・～・～

「俺に、そんな度胸はねぇ！」
「……なに？」

立ち上がりながら答える俺。聞き返すダミー。
その威圧は相変わらずだが、俺はもう怖気づかない。

いや、コレがコイツと初対面だったら……押されていて俺は消えていたと思う。

だけど……アングのときにこの感じは味わった。
もう、押されねぇ！

「自分を犠牲に全員救う度胸はねぇ、って言ったんだよ」
「ほぉ……」
腕を組み、聞いてやる、という態度をとるダミー。
「命あっての勝利だ。刺し違えるとか、この身を犠牲にとかは考えねぇ！」
「今のお前じゃ負けるぞ？」
そうだろう。
今の俺はＦＷに勝つのが精々だ。
だけど――。
「一人で戦う必要は無ぇ。姉さんたちと一緒に戦えば勝てる」
隊長室で掛けてもらった言葉。そして朝焼けの中での誓い。
あの言葉を裏切る訳にはいかない。
「そもそもなぁ、俺が出しゃばるまでもなく、姉さん達は強いんだよ。負ける前提で話すんな」
言い切った。

死んで姉さんを守ったとか、自己満足もいい所だってのも分かりきってるしな。

「クックク……クククククッ」
「んだよ、気持ちワリィな」

俺が言い切ると、ダミーが声を殺して笑い始めた。
なんか急に恥ずかしくなってきた。
これからは勢いで喋るのはやめよう……。

「いいぜ。テメェの覚悟、しかと聞いた」

そして次は、清々しいほどの笑顔でそんな事を言ってきやがった。

「今のお前になら預けられる。姉さんも……この体も」
「お前……やっぱり」
「あーー！　それ以上言うな。言ったら消すぞ？」
「ゴメンナサイ」

とりあえず謝っていきました。

なんかさっきとは違う種類の威圧が来たんです。
言うなら怒った時の姉さん達みたいな。

「んじゃ、お前は戻れ。俺は消えっから」
「っ！　おい！　お前……消える必要ねぇんじゃ……」

コイツが今消えようとしているのは、俺の体の反応を鈍くしてるから。
それがコイツの故意的にやっていたものなら、やめられるはずだ。
なら、消える事ない。

「アホか。一つの体に二つの人格。それだけで体には負担が掛かるんだよ」
「……そうなのか？」
「そうなんだよ。……なんか急に不安になってきたぞ」

そんな可愛そうな目で見ないでください。
俺と同じ顔にそんな目でみられると姉さん達よりダメージ大きいです。

「とりあえず、三番を解除した時の上昇率っての？　は上がると思うぜ？」
「そうなのか？」
「今までは俺も拘束の役割、その一端を担ってたからな。それがなくなるなら……」

三番と解いただけで余計にパワーアップするって事か。
それは嬉しいな。
正直強くて困ることなんて、そうそう無いからな。

「んじゃ、そろそろ行けや」

鎖に絡まれた扉とは真逆の扉。
人一人が通れそうな扉。
いくら小さいとはいえ、なぜ気づかなかったのか不思議だが……今はどうでもいい。
俺はダミーに声を掛けず、扉に向かって歩き出す。

「はやて……お姉ちゃんによろしく頼むな」

その一言を最後に聞き――俺は扉をくぐった。

・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜

「主人公は、こういうとき強くなるモンなんだよ」
《主人公は私ですよ!?》
《いや、私だ》
「こんな時まで!?　しかもレイラまで加わっちゃった!!」

拝啓、トウギ殿。
レイラはアテナ色に完全に染まってしまったようです。
コレに関しては素直に謝れそうです。

「そうですか。それでは――」

再び杖を剣に戻り、構えるアング。

「続きといきましょう!!」

ウィズの小部屋

ア《相棒！なんだか凄いの見つけちゃいました！》
ウ「なに？また変なのじゃねぇだろうな？」
ア《失礼な。私はいつでも大真面目ですよ》
ウ「だから問題なんだけどな。で、なんなの？」
ア《あぁ、そうでした。実はですね四期コミックのあとがきを読ん

でたんですよ》
ウ「それで？」
ア《今の四期コミック、今やっている話は第一部らしいのですよ》
ウ「……ん？」
ア《第二部もあると言う事ですよ。つまり、かなり長い期間四期は展開されると予想します。つまり、アニメ化も夢ではないと！》
ウ「いや、それお前の妄想だろ。それを偽情報として文句言われても知らねぇからな」
ア《えー。その時は相棒が責任取ってくださいよ》
ウ「何で俺！！？」

秋風さん

ウ「え、俺言ってるよ。【はや姉、ゴメン。待たせた】って」
ア《あれですよ。その前の会話が無駄だって言われてるんですよ。だから自分の小説の主人公と比べられるんです》
ウ「いや、そんな事言われても。直人が助けに入るとか、俺知らないし」
ア《でも実際言われてますしねぇ。ま、自分の小説の主人公と比べられても困るって言うのは事実ですけど》
ウ「ま、直人は皆にモテモテだからな。それくらい出来るんじゃない？」
ア《相棒はフラグ一本だけですもんね》
ウ「お前には立ててないからね！？」

ナイトホークさん

ウ「本当に、今までご心配おかけしました」

ア《相棒、逆に何話主人公不在で出来るかやってみましょう！》
ウ「やっと復帰したのにその提案！？」
ア《勿論相棒だけでお願いします。その間は私がメインを勤めさせて頂きますので》
ウ「お前それが本音だろ！！？」
ア《バレました？》
ウ「逆に隠す気あったの！？」

ＺＥＲＯさん

ウ「おー味方だ。普通の人だ、よろしく祐輔さん！」
ア《向こうは相棒と味方と思われたくないと思ってますよ、きっと》
ウ「マジで！？そんな事無いきっと！」
ア《でも物づくりはエキスパートらしいですし、料理もかなりお上手とか。相棒はどうでしたか》
ウ「お、おつまみくらいなら直ぐに……」
ア《味は？》
ウ「……普通です」
ア《何か言う事は？》
ウ「祐輔さん、味方なんていってごめんなさい」
ア《よろしい》
ウ「……あれ？」

翡翠さん

ウ「偽者じゃない！偽者じゃありません！」
ア《アングには悪役がやりそうな事を全部やらせるつもりです。それはもうアイスマン改めトウギさん以上に》

ウ「というか、お前本当に想われてんな。もうくっついちゃえば？」
ア《……いつも思うんですが、相棒は私に対してＳっ気でもあるんですか？》
ウ「は？」
ア《いつも私はどこに行ってもいいって、あれですか？私が苦しむのを見て萌えてるんですか？》
ウ「いや、それはない」
ア《これ以上無いくらい冷めたく言われた！！？》

Ｎａｋｉさん

ア《そういえば相棒って実戦での勝利経験って無いんですよね》
ウ「でもトウギの時はいいとこいったぞ？」
ア《でもあそこでスバルさんが来てくれなかったらどうなってたか分からないじゃないですか》
ウ「……あれだ、なの姉との時」
ア《アレは実戦じゃないですが……なのはさん、スフィア展開してましたよ》
ウ「え、マジ？」
ア《えぇ。相棒の首元をロックオンしていました。あのままだと意識刈り取られて負けてましたね》
ウ「裏設定でも負けるのか俺は！！？」
ア《何をいまさら》
ウ「！！？」

灰色の野良猫さん

ウ「単独でも破れるのか、ソラは」

ア《一応聞きますげど、ちなみに相棒はどうなんですか？》
ウ「ん？なにか言った？」
ア《いえ、その答えだけで十分伝わりました》
ウ「チクショウ。なにか俺にも才能ください」
ア《あるじゃないですか。逃げ足》
ウ「そんな才能いりません！！」

４４．復活、夜天の騎士見習い（後書き）

ウィズパワーＵＰ！八神煌斗です。

という訳で今回はウィズの強化＋フォースの初披露でした。
あとはハイペリオンの二重展開とかかな？

とりあえずウィズが押していた理由としては突然のレベルＵＰが理由です。
後半それを見破ってましたけどね。

ギャグ分も少し。
シリアスはキライなんです。

それでは次回また！

Ｐ．Ｓ．
ユリア、未完成版ですがみてみんにＵＰしました。
よろしければ見て、感想をください。

45．剣と槍の力

「ぐぅ――っ！」

アングに押し返され、後ろに弾き飛ばされた。
どれだけ、底力が上がっても、さすがに飛行スキルの差は――……。

「ゴメンなの姉！」
『へ？』

飛ばされた先には閉じ込められたなの姉が。
俺はその上に着地する。

目の前には追撃しようとこっちに飛来してくるアング。

「なの姉、もっかいゴメン！　アテナ！！」
『へ？　へ？』
《――Ｂｕｓｔｅｒ（バスター）　Ｓｉｌｈｏｕｅｔｔｅ（シルエット）――》
「サード……カラーズ！！」
『にゃあぁぁ！？』

ケージにバスターソードを叩きつけ、サードを発動する。
苦手な射撃砲撃より、力任せのコッチの方がマシだ。

だが案の定、それも例の盾で防がれてしまう。

『う、ウィズ君、一言言って……。凄く響いたよ……』

「あ～、いや……ゴメン」

耳を押さえながら、恨めしい声のなの姉。

だけど、直ぐに引き締まった顔つきに変わった。

『……ねぇ、ウィズ君。一つ頼まれてくれないかな？』

「頼み？」

思わず聞き返した。

『うん。私は近づくことが出来ないから、代わりに聞いて欲しいことがあるんだ』

頷いてなの姉は俺に言った。

そして俺は、納得した。

確かに、いや。

逆に今まで知らなかったことが不思議なことだった。

……まぁ、何となく予想は出来ることでもあるんだけど。

「わかった。聞いてみる」
『お願い』

そして俺は再び、アテナをテクニカルに変更しアングに切りかかる。

「はあああぁぁ！！」

かん高い金属音が鳴り響き、俺とアングは鍔迫り合いにある。

「おい……一つ聞かせろ」
「イヤです」
「んなぁ！？」

再び押し返される。
――が、今度はケージの上ではなくハイペリオンの上に着地する。

《真正面から否定されましたね》
「うるせぇ。この際、許可なんているか！！」
《開き直りだな》

うるさい。

「アング！　テメェ、何でこんなことしやがる！？」
「……今更聞きますか？　というより、大よそ、予想は付いているのでしょう？」
「……」
俺は何も言わずにアングを見るだけ。
だけど、それだけでアングには伝わったらしい。
「管理局への報復。理由は分かりますね？」
分かるに決まってる。
これはトウギの話にも似たような話はあった。
まぁ、アイツはその前に俺への恨みがあったけど。
自分を勝手に作っておいて、道具のように扱う。
それはこの上ない屈辱だろう。
そんな気持ち、俺にも理解は出来るけど……分かるはずが無い。
俺は、生まれてから本当に楽しかったんだから。
「この町の穴さえ確保できれば、兵士にも、魔力にもここを抑えれば困ることはありません」

兵士はヴィオルやマテリアルを構成していたモノで、魔力は言うまでもない。
確かにココを抑えれば、こいつなら……。
くそっ。
理由が単純、それで深いから厄介だ。
俺が一言二言言ったところで、何にもならない……。

「さて、ここでもう少し貴方と戦うのも良いですが……あまり遊んで、足元を掬われても厄介ですし……」

再び杖に変わる。

「なっ――……」

俺の目に映るのは、数え切れないほどのスフィア。
あの装置のマルチタスクを使ってってことか……！

「精々、避けきりなさい」

俺に向かって、アブソリュートを持っていない手が向けられた。

「アテナァ！」

《――Ｌｏｄｅ（ロード）　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ（カートリッジ）――Ｈｙｐｅｒｉｏｎ（ハイペリオン）　Ｈｅｘａｇｒａｍ（ヘキサグラム）！！――》

それをシールドに襲い掛かってくるスフィアを防ぐ。

「――っ！」

《相棒！》

だけど厳しい。

直射射撃って事が救いだけど……一撃一撃の攻撃力はそれなりにある。

いくらヘキサグラムでも……カートリッジを何発か使わねぇと……。

それなら――っ！！

「レイラ、シールランス！！」

《――Ｓｅａｌ（シール）　Ｓｉｌｈｏｕｅｔｔｅ（シルエット）！――》

テクニカルを維持したまま、アテナを腰のベルトに差込む。

これで速力強化は消えない。

そして同時、レイラをシールに展開させる。

ヘキサグラムを残したまま、後退。

《――Ｌｏｄｅ（ロード）　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ（カートリッジ）――ｍａｇｉｃ（マジック）　ｃａｎｃ（キャン）ｅｌ（セル）……ｗａｖｅ（ウェイブ）！！――》

元々レイラはアテナの姉妹機だ。

カートリッジの口径も合う。

レイラを両手で持ち、横になぎ払う。

それによって生じた衝撃波は、マジックキャンセラーと同じ性質を持っている。

言うなら３ｒｄにキャンセラー付与したようなもの。

衝撃波は俺が展開したヘキサグラムごと、俺の正面に迫ってきていたスフィアを消し去る。

だが、無理だった。

あれだけの広域キャンセル魔法を使ったのに、スフィアはまだ残っている。

「速力付与、最大展開！！」

レイラを待機モードに戻し、アテナを腰にさしたまま、テクニカルの速力強化を最大強化。
さっきの技は万能で高能力な分、連発できないのが欠点だ。
だからこそ、俺が次に取れる選択肢は交わすことしかない。

《相棒、右から三発接近中です！》
「くっ――っ！」

アテナの指示を聞いて右からのスフィアを交わす。

《マスター、今度は後方だ！》

交わす。

が、今度は肩に掠ってしまった。

魔力はカートリッジのお陰でまだまだ余裕がある。
だが問題は……体力。

コレばっかりはどうしようもない。

《相棒、左です！》
《マスター、前方だ！》
「お……おぉぅ！？」

む、無理っ！

「くっ！　ハイペリオン！」

アーラで体制を維持しながら、アテナを再び腰に挿す。
そして自由になった両手で右と前にハイペリオンを展開、何とかやり過ごす。

「〜〜っ！」

響くなぁ、この野郎っ。

《いけません、相棒！》
「戦場て動きを止めるとは……バカですか！？」
「っ！　しまっ――！！」

上空。
そこから剣を持ったアングが俺に向かって降下してくる。
直ぐにアテナを抜き取り、迎え撃とうとする。
が――。

「しまっ！？」

普段しないことをしたせいで、アテナがベルトに引っかかってしまった。
待機モードに……駄目だ、間に合わねぇ！

《マスター！！》
「っ！　レイラ！　ダブル・ランス！」
《――Ｄｏｕｂｕｌ（ダブル）　Ｓｉｌｈｏｕｅｔｔｅ（シルエット）！――》

アテナの柄から手を離し、レイラをダブルで展開する。
レイラの中でコレが俺の一番使いやすいシルエット。長さがアテナのダブルと殆ど変わらないからだ。

「はあぁぁ！！」
「ぐぅっ！！」

二本ほ槍をクロスさせ、アングの刃を防いだ。
高い金属音が響いた。

その瞬間、レイラから火花が飛び散った。

「レイラ！？」

「また余所見ですか！」
「ごふっ？！」

しかし、防いだと思ったと同時、アングが俺の横腹に蹴りをお見舞いしてくれやがった。
俺は両手が塞がっていたため、モロにくらって弾き飛ばされる。

馬鹿か俺は！
戦場で動きを止めるのは命取りだって、ヴィータ姉さんに言われたじゃねぇか……。

……姉さんに言われた？

アレなら……いけるか！？

「レイラ、戻れ！！　アテナ！」

空中で体制を整えつつ、レイラを待機モードに戻してアテナをベルトから引き抜く。

そのままハイペリオンを展開、強く蹴り、再びアングに向かって全力で突っ込む。

「ソードダンス――……」
「そんなもの――！」

アングは俺にカウンターを仕掛ける為、剣を構える。
――だけど！
《――Ｈｙｐｅｒｉｏｎ（ハイペリオン）！――》
「なに！？」
俺とアングの間にハイペリオンを展開、ヤツの攻撃を防ぐ。
そして俺はそのハイペリオンを蹴りアングの後ろに回りこむよういい跳び――。
「シングル……カラーズ！！」
後ろからではなく、真上から、ほぼゼロ距離でお見舞いしてやる。
アングの姿が爆煙に消え、俺は後退、シグナム姉さんの上に着地する。
いや、魔力を少しでも温存しておきたいのよ。
『ウィズ、今の組み合わせは……』
「あ、やっぱり分かった？」
下に居たシグナム姉さんが話しかけてきた。

そう。

今のシングルまでの流れは俺が六課に来て最初にシグナム姉さんと戦った時に出したやつ。

あの時は後ろに回りこむ間に防ぐ隙を作ったみたいだったから、今回は直ぐに撃った。

さすがに今のは防げなかったはずだ。

防げなかった……筈！

筈なのに……。

「中々……今のは危なかったですよ」

『あれを防ぐのか……』

「少しは期待してたんだけどなぁ……」

煙が晴れると、アングは何食わぬ顔で立っていた。

盾で防いだ。それはヤツのデバイスを見れば一目瞭然だ。

だけど、今のは絶対に反応出来ていなかった。

なんで……。

「腑に落ちないですか？」

「――っ！　……あぁ」

素直に頷く。

「確かに、僕は反応できませんでした。僕には徹底的に戦闘経験が欠落していますから」

「ならなんで……」

「アレのお陰ですよ」

そう言って指差したのはまたもやあの機械。

今はアングの無限魔力供給機。そしてマルチタスク。

いくらマルチタスクが優れていても、考えなかったら意味はねぇだろ……。

《なるほど、そういう訳ですか》

「分かるのか？」

目を離さないで、呟いたアテナに聞く。

俺には全く予想が付かない。

《ええ。おそらくですが、例のマテリアル、そしてエストラたちとして積ませた経験かと》

「経験？」

《足りない経験をあの核が積み重ねさせ、それで補う。機器と繋

がっている今のアングなら。アングが反応できなくても、別の思考が反応した、と言う事でしょう》

「……つまり何か？　アレはマルチタスクでもあって、ついでに独立思考でもあるって言うのかよ？」

「正解です」

アテナがソコまで説明したところでアングが口を開いた。

「それでも、独立思考は最低限だけですけどね。あまり僕から離れられても困りますから」

「――っ！！」

アングの野郎……。

言ってる事が全く関係ないタイミングで……。

「そろそろ、おしまいです」

アングの回りには、さっきまでとは比べ物にならない程のスフィアの壁。

もう壁以外に現しようがないほど、その数がある。

『ウィズ！　逃げろ！』

「言われなくても！！」

《言われなくても！？　なんだかカッコ悪いですよ！？》

「知るかぁ！」

姉さん達は空間で閉じ込められてるから被害は無い。

「アテナ！！」

《速力付与、最大展開！！》

再び速力を挙げ、ソコから飛びのく。

そして同時、俺に向かって一斉に打ち出されたスフィア。

「くぅっ！！」

避ける、避ける。

とにかく何も考えずに避ける。

今だけは姉さん達を助けることも考えない！

自分が生き残ることだけを考えろ！！

《相棒！！》

突然、アテナが叫んだ。

「遅い！」
「っ！　しまっ――――！！」

気づいたときには手遅れ。
目の前にアングの姿があって――背景が物凄い勢いで前に流れた。
次に思ったことはただ、冷たい。と言う事だった。

はやてｓｉｄｅ――――――――――――――――――

「ウィズーー！！」

ウィズが後ろから切られて、高い水柱を立てて海に落ちた。

「ふぅ……思いの他、手こずってしまいましたね」

夜の空に浮かぶアングは静かに、ウィズが落ちた場所を見てる。

「では回収……いや、ユリアが出てきていない事を考えると、逃げる前に向こうの確保が先……。そうですね。あちらは死んでいても体さえあれば良い訳ですし……」

『アング、貴様！！』

そんな時、叫んだのはシグナム。
レヴァンティには紅蓮の炎が灯っとる。

「いいのですか？そんな狭い空間で、魔法、それもそんな大きな魔法を使えば自身の身に返ってきますよ」
「構わん！」

シュベルトクロイツを握りなおす。
このケージを破壊するには、半端な攻撃やったら意味あらへん。
大規模魔法位やないと……。

それが返ってくる？
構わん。死なへんかったらそれでええ！

「まったく……ソコまでして守るものでもないでしょう？　本来の目的とはいえ、元々、貴方たちを殺す為のモノですよ？」
「ちゃう！　……ウィズは、家族や！！」

考える暇も無く叫んだ。

でも、間違ってへん。
あの子を、道具扱いなんかさせるかい！

「……家族、ですか。なら」

冷めた目つきで、淡々と言いながら杖を私の方へ向けてきたアング。

「その家族が死んだら……彼は壊れますかね？」
「そんな訳あるかい。ウィズは強いんやで」
「そうですか。それでは……」
「……え？」

突然、目の前がガラスのように砕けた。

なんでそんな事を……？

そう思ったけど、次の瞬間、目に映ってきたものを見て納得した。

魔力が杖に収束し始めてた。
構える。

今が最後のチャンスや。

それを逃すわけにはいかへん。
私一人でも、倒したる。

そう覚悟して構えた。

その時やった。

私とアングの間に高い水柱が立ったんは。

「テメェ……誰に手、出そうとしてやがんだ？」

「っちぃ、しぶとい」

水柱が降りて、そこに居たのは大きな白翼と黒翼を背中に生やして、どこかで見た事のある深い紺色のジャケットを羽織った、ウィズやった。

「ゴメン、はや姉。大丈夫？」

そう言ってコッチを向いたウィズの目は、赤かった。

ウィズの小部屋

ア《相棒、今月のコンプエース知ってますか？中々凄いらしいですよ？》

ウ「あぁ、そういやアイツも初めて買ったとか言ってたな。何かあんの？」

ア《【なのは】と【Ｆａｔｅ】の公式コラボです！公式ですよ、公式！》

ウ「……マジ？」
ア《ハイ！武内さんと都築さんの対談とかコラボ漫画とか、ファン必見の内容でした》
ウ「二次では良く見たけど。まさか公式化するとはなぁ。すげぇ」
ア《まぁ、ページが少し少ないという見方もありますが、それでも興奮の内容かと》
ウ「もし見てない人は書店へいそげ！」
ア《……なんか宣伝みたいになっちゃいましたね》
ウ「ま、実際そうだし？」

ナイトホークさん

ア《相棒、ユリアさんってペチャなんですか？》
ウ「いや、何で俺？」
ア《気にしないでください。で、どうなんですか？》
ウ「……それなりには有るんじゃね？さすがにフェイ姉とかには負けてっけど」
ア《はやてさん以上なのは知ってましたけどね。ジャケット着ると小さくなってる気がします》
ウ「あいつ、胸部に鎧付けてっからな。それでかも」
ア《へぇ。知りませんでした》
ウ「いや、お前いつも見てるだろ」

Ｎａｋｉさん

ウ「元々ハイペリオンは飛べない俺が空戦できる様に創られた魔法だからな。なんとか」
ア《それでも魔力切れ起こしたら真っ逆さまですからね。普段アン

ナ状況で使わないですけどね》
ウ「落ちたら助からねぇのみえてるしな」
ア《後は……４ｔｈの話ですね》
ウ「４ｔｈは確かに強力だけど、あんまり使えないんだけどな」
ア《あれは私は勿論相棒もマルチタスク使いますからねぇ。私もパンクしそうでした》
ウ「お前アーラの維持もしてたからな」

翡翠さん

ウ「ほれみろ。お前のせいで余裕っぽく見えるとか言われたじゃねぇか」
ア《私のせいですか！？あれはレイラが原因でしょう！？》
ウ「レイラをあんな感じに染めたのはお前だからね！！？」
ア《……まさかぁ。そんなバカな》
ウ「自覚なし！！？」
ア《と言うか相棒、私の彼氏として翡翠さんにビシっと言ってください》
ウ「自分で何とかしなさい」
ア「そんな感じですか？！」

ＺＥＲＯさん

ウ「裕輔さん、そんな会があるんですか！？」
ア《調度いいじゃないですか相棒。この際入会しましょう》
ウ「え～。でも自分をヘタレとか認めたくねぇ……」
ア《本編でヘタレ上等とか言ったのは誰ですか？》
ウ「うぐっ。あ、アレはだな……その場の雰囲気と言うかなんと言

うか……」
ア《そういう態度がヘタレなんですよ》
ウ「ぐぅっ！？」

青いタヌキさん

ウ「かっこいいだって？ありがとう！」
ア《この人の目は節穴ですね》
ウ「俺マスターよ？！」
ア《まぁまぁ、それで、ゲストらしいですよ》
ウ「ゲスト出演は無理だな」
ア《出すとなると色々考えないといけないですからね。今は本編で手一杯です》

45．剣と槍の力（後書き）

ウィズが○○！八神煌斗です。

とりあえず、ウィズがどんな状況か。
分からないでしょ？分らないよね？

……皆さんも分かっても隠してくださいね。
それが私への優しさです。

実は今詰まってます。
凄くシリアスなところ。

中々筆が進まない……。
元々シリアス大キライなんです。馬鹿やっていたいんです。

あ、ユリアは閲覧数が凄く伸びてました。
コッチではまだ乗せるわけにはいきませんが、みてみんでどうぞ。

携帯の人。
アテナの画像をクリック。次の画像？見たいなのをクリックすれば
ユリアの下書き、色付け済みのが見れるはずです。

そして最後に。
四月からは今のような更新は多分無理です。
二日に一回も無理っぽいのですが、この日が変わって直ぐが絶対に
無理です。

四月二日が大学の入学式なんです。

片道二時間以上掛かるんです。
許してください。

それでは次回、二日後にお会いしましょう！

４６．ユニゾン／姉弟共闘（前書き）

一番下に挿絵を挿入しています。
イメージを崩されたくない方は予め挿絵表示をＯＦＦにしてご覧ください。

46．ユニゾン／姉弟共闘

勢い良く叩き付けられたせいでどっちが上かも分からない。
多分相当深くまで来てるだろうとは思う。

息はアテナが咄嗟に顔の辺りだけに魔力の膜を張ってくれたから何とかなってるけど。
アレだ。見た感じ宇宙服のアレ。

この酸素だって無限じゃない。急がねぇと。

「（アテナ、海面は……上で良いか？）」
《（はい。早くしてください、相当深くまで叩き込まれました）》
「（分かってる……っ！？）」

上がろうとしたとき、何かに右足を引っ張られた。
見ると、右足に海草が絡まっていた。

こんな時にっ――。

《（っ。マスター。アレを見ろ！）》

中々海草が解けないで焦ってる中、アテナで切れば良いと思いついた時にレイラが話しかけてきた。
レイラが言う方を見る。

そこにはマテリアルに使われていた核だった。

「（なんで……アレは全部組み込まれたはずじゃ……）」

《（いえ、アングは始め４つの核を持っていました。おそらくアレはそれでしょう）》

――その通りだ。

「っ！！」

突然、頭に声が響いた。

咄嗟に構えた。

そして一瞬、核が光だし……人影が生まれた。

その影に俺は、見覚えがあった。

「（……ア、アインス姉さん？）」

声が震えてるのが自分でも分かった。

そう。そこに居たのは体が透けてはいたが、確かにアインス姉さんだった。

だけど、感動ばかりしていられなかった。

アングに創られたものだ。アインス姉さんの姿をしているからって味方とは限らない。

俺はアテナを握る手を強めた。

「（待て待て。ウィズ、私がわからないのか？）」

「（俺の名前……ってことはそこから記憶が！？）」

姉さんは何も言わずに頷いた。

「（でも、それなら何ではや姉たちを助けてくれなかったんだよ！？）」

「（私の核は壊れていたみたいでな。魔力供給が受けられていない。この状態が精一杯なんだ）」

両手を広げて、自嘲気味にいう姉さん。

確かに体は透けている。

見る限り核が映し出してるって感じだし……。

「（だからウィズ、私に魔力を分けてくれ）」

「（俺の魔力を……？　でも、俺は姉さんを存在させる程の魔力なんて持ってない）」

カートリッジをフルで使えば何とかなるかもしれないけど、それじゃ時間が足りない。
本当は今この瞬間にでも早く海上にあがりたい。
そもそも、あのマテリアルたちだってあの穴から魔力を吸い上げてたんだろうし、必要量なんて、想像がつかない。

「（大丈夫だ。私の機能を、一つだけ使えるようにしてくれれば良い）」
≪（機能？　……まさか！？）≫
「（あぁ、ユニゾン機能だ）」

アテナの言葉にアインス姉さんが頷いた。

「（でも、姉さんはユリゾン機能は失われてる筈じゃ……！）」
「（この体が、当時のモノならな）」

そう言って姉さんは、右手をそっと胸に持っていった。

「（この体はお前と時を過ごした時の体ではない。それよりも遥か以前の体だ）」
「（遥か……以前？）」
「（闇の欠片事件では、私の過去のマテリアルも出たのだ。その時のを模したのだろう）」

記憶は、お前と過ごした時の事も収められてはいるがな。と言って微笑んだ姉さん。

多分、それもあの核の故障が原因か？
いや……故障してるのは再現機能だけって言ってたし。

考えてもしかたねぇな。

とにかく、はや姉とユニゾン出来ればアングに勝てる！
そう思った。

だがそれは、他でもない姉さんの口から否定された。

「（この時の体は主は別人。主はやてとの繋がりがなければ、融合は出来ない）」
「（そんな……なら、なんでユニゾン機能を復活なんて……）」
≪（相棒と、ですよね？）≫
「（アテナ！？）」

そんな筈が無い。
俺にはユニゾン適性が無い。姉さんとのそう言う繋がりは無い。
それに、もし適正があってもそれを確かめる術はない。

そんなブッツケ本番なんて、ヘタをしたら共倒れだ。

「（いや、私とお前の繋がりはある。……いや、今から出来るんだ）」

「（今から？）」

姉さんが頷く。

「（私がユニゾン機能を取りもどる為にお前から魔力を借り受ける。一時、短時間だけならそれで十分だ）」

《（そして、相棒とユニゾンすれば渡した魔力とは比べ物にならない程の魔力が返ってくる）》

姉さんが頷く。

……俺が、姉さんとユニゾン？

それで融合事故がおきたら……

――いや、迷ってる暇はねぇ！

「（分かった。やろう、姉さん！）」

そして、俺は再びアングと相対した。

その時の俺は、軽くユニゾンして変わった自分に混乱していた。

インナーとズボン、腰の鎧はそのまま。
上着と腰布はアインス姉さんの甲冑そのまま。
靴も手袋も変わって、足には赤いヒモが巻きついている。
……なんとなくだけど髪も伸びてるような伸びてないような……。

そして一番の違いが背中に生えた四枚の翼。
上の二枚が白く、下の二枚は少し小さい黒翼。

――ウィズ、長時間のユニゾンは無理だ。手早く済ませよう――
「あ、わかった」

場違いな事を考えてたのがバレたのか、若干低い声の姉さん。
アインス姉さんはあの頃と変わっていませんでした。

「ウィズ、その格好……」
「ゴメンはや姉、後で詳しく話す。今は……」

そして見るのは目の前に居るアング。
もう何も語らない。

俺は、アングを倒す――！！

――いくぞ、ウィズ！――
「（ああ！）」

四枚の翼を羽ばたかせ、アングに突っ込む。
手に納まっているのはテクニカルのアテナ。
速力付与は言うまでも無く最大。
そして今は、姉さんとのユニゾンで更に上昇。
それに加えて……。

「飛行スキルまで、手に入れましたか！！」
「当たりまえだろぉが！！」
「ちぃっ」

アテナを正面から振り下ろすも既にアングは盾を構えている。
だが、この攻撃は囮！
アテナを盾ギリギリで止めその場から引く。

「何を……っ！」
「バルムンク！！」

俺の影に隠れていたはや姉からの攻撃魔法。
それを無茶な軌道を描いてアングは交わした。
だけど！

「シングル……カラーズ！」
「しまっ――」

アングの死角からシングルを叩き込む。
シングルは直撃。アングは爆煙の中に消えた。

だが直ぐにアングは煙の尾とバラバラになっているアブソリュートを引きつれ、爆煙の中から飛び出してきた。

「逃がすか！　アテナ！」
《――Ｇｕｎ（ガン）　Ｓｉｌｈｏｕｅｔｔｅ（シルエット）――》
「ブランコ……バスタアァァーー！！」

ガンソードの剣先をアングに向け、俺の唯一の砲撃魔法を打ち出す。

そして同時。

「クラウ・ソラス！」

はや姉も砲撃を打ち出した。

二つの砲撃は真っ直ぐ、アングに吸い込まれるように直撃、
アングは再び爆煙の中に姿を消した。

俺はその間にはや姉の隣に移動する。

「やったか？」

「分からない。当たったのは確かだけど……」

《三段構えのコンビネーション。そして最後に砲撃の挟み撃ち。よく即席で出来ましたね……》

「まぁ、何となくはや姉ならそうするだろうなって」

「私も何となくやったけどな」

爆煙から目を離さず、会話を交わす。

確かに今のは直撃した。

したけど……何に直撃したかは分からない。

爆煙が晴れてきた頃には、少しだけ傷を負ったアングが居た。

傷は思ったより少なく、俺を焦らせるには十分だったが、もう一つ。

アングの回りに漂っていたパーツの量が、明らかに増えていた。

そして、右手から肩にかけて鎧のようなものが装着されていた。

「これまで使用させられる羽目になるとは……正直予想外でした」

「……例の機械やな？」

はや姉が言って、俺は気づいた、

さっきまで穴の中心に立てられていたあの機械が無くなっていた。

「あれ、デバイスだったのか……？」
「やはりこっちの方がしっくりきますね。タイムラグもゼロだ」
――自身に接続、直接操作することによってラグを削ったか――
「しかもデバイスとしてもパワーアップってか？　ちっ」

思わず舌を鳴らした。
さっきまででもあいつの思考速度に負けてたのに、それを上回って、その上デバイス強化。
いくらはや姉が戦線復帰してくれたからって……いけるか？

《いえ、相棒。コレで私たちに勝機が見えました》
「っ！　本当かアテナ？」
《簡単な話です。独立思考が無くなった今、アング一人が全てを制御しています。ならば……》

「（それを上回る、処理しきれない攻撃を繰り出したらええっちゅうことやな？）」

アテナの声を遮って、はや姉が念話を繋いできた。

「（だけど方法が見えただけやろ？　シグナムやフェイトちゃんならともかく、私はそんなバンバン出来へんで）」

《それは……何か無いんですか？　ブラッディダガーとか》
「（何も考えてへんかったんか！！？　……あれは早いだけでそんな連続で撃てへん。それに、いくら何でもそっちが反応できへんやろ）」

確かにそうだ。
来ると分かっていて避けることくらいは俺にも出来る。
だけど今のアングに剣を交えて、そっちにまで気を回す余裕は無い。
なにか……なにか無いか。
連撃、追いつかないほどの、休まない攻、げき、が……。

「（一つ、あるじゃねぇか）」
「（ほんまか！？）」
「（あぁ。っても、賭けの要素が強くなるけど、ね）」

そう。一つだけある。

俺の……アテナの、フルドライブ。

コネクションが。

ウィズの小部屋

ア《今回は随分詰め込んだ内容でしたねぇ》
ウ「まずはアインス姉さんの復活、ユニゾン。はや姉との初共闘」
ア《と言うかユニゾン理論、アレで良いんですか？》
ウ「さぁ。色々調べたけど適性って言葉以外出てこなかったらしいから、適当だって」
ア《またいい加減ですねぇ》
ウ「俺もそう思う。あとは……」
ア《そう！私のフルドライブがついに解禁です！》
ウ「あぁ、そうそう」
ア《１ｓｔから数えて９１話。ようやく、ようやく私の真の力を見せるときが！！》
ウ「ってかそんなに続いてた方が驚きだよ」
ア《実は私も数えてみてビックリしました》

翡翠さん

ウ「いや。あの時はもう逃げることしか頭になかったから……」
ア《でもアレは私もどうかと思いますよ。逃げろと言ったシグナムお姉さんでさえ一瞬固まってましたよ？》
ウ「うっ……。ってか浮気者ってなに！！？俺そんな事してないよ！？しかも変態！？」
ア《そうですね。これは許しがたい問題です！》
ウ「おぉ。アテナ……」
ア《変態はまだ許しましょう。ですが……浮気ってどういうことですか！！？》

ウ「え、矛先おれ!!?」

Ｎａｋｉさん

ウ「やっぱ空戦ってなるとなぁ。３６０度上下左右全部に気を回さないと行けないから、苦手だ」
ア《コレばっかりは私でも補助の使用がありませんからねぇ》
ウ「あ、目が赤いのはユニゾンの影響な。アインス姉さん目が赤かったから」
ア《相棒はかなり影響を受けてますよね、お姉さん方に比べて》
ウ「アギトとユニゾンしたシグナム姉さんよりは変わってないと思うけど……」
ア《いえいえ、良い勝負だと思いますよ。そしてセラフィム、私はやりますよ!……次回ですけど》
ウ「ある意味アテナの全力全開、だな」

ＺＥＲＯさん

ウ「ギャーー!!ばれてたーー!?」
ア《他の皆さんが会えて触れなかっただけで、気づいていたと思いますよ?》
ウ「まじでか!?」
ア《大マジです。あ、それと相棒。打ち上げのお誘いが》
ウ「ん～……いいのかなぁ?」
ア《何がです?》
ウ「いや。俺たち自分に手一杯で向こうに顔出してないんだよねぇ。それで御呼ばれするのって、おこがましくない?」
ア《……まぁ、呼んでいただいているのでいいのではないですか?》

ウ「そう言う事なら……お邪魔したい、かな？」

鴇坂カスハさん

ウ「実はちゃんと写真撮ってはいるんだよな。ただ……顔映りが悪いんだよなぁ」
ア《元からでしょう？》
ウ「そう言う意味じゃないの！…前に取ったヤツと比べるとどうもバランスがおかしいんだよ」
ア《まぁ私から見ても何かおかしかったですからねぇ》
ウ「とりあえず次回更新時にでも声が多かったらあげてみるよ」

＞ｉ１５９０３―４０７＜

46．ユニゾン／姉弟共闘（後書き）

ついに姉弟共闘！八神煌斗です。

連載開始時からいつかやりたいと思ってたことです。

……とは言ってもそんなにガッチリとした連携は組んでないんですけどね。

そしていよいよ、戦闘は次回で終了！……予定！

来週はかなり詰め込みそうな予感。

アテナのフルドライブ開始したらスムーズに読めるように試行錯誤中。

というか予定では今日戦闘終了予定だったんだけどなぁ。

なぜこうなったんだろう。

とりあえず、また次回！

47．コネクション

レイラが俺のところに来て直ぐの頃だった。

自分よりスペックの高いレイラに対して、アテナが何とか劣っている所を探しだろうとしていたときだ。

その時、レイラが言った一言。

それが事の始まり。

《私には姉さんのような、シルエットの同時展開など出来ないぞ？》

その言葉に俺もアテナも少なからず驚いた。

レイラはアテナの後継機。

当然アテナより若干だがスペックは高いし、各シルエットの能力は比べるまでもない。

シールの能力なんかいい例だし、短距離なら空間跳躍も可能らしい。

そんなレイラに、同時展開が無い。

あの機能は普段の俺でも十分使えるし、何より使い勝手が良い。

その機能が無い。

始めはただオミットされただけかと思ってたけど、つい最近違うっ

て事が分かった。

それはアテナがアナザーを作る時に自身を色々調整してた時だった。
アテナの中に、別にある未完成プログラムが見つかったんだ。

それがフルドライブ、コネクション。

それは各シルエットの能力を同時に発動させる機能だった。

見つけた時、一番驚いていたのはアテナだった。
自分の知らない機能、そんなモノがあるなんて思ってなかったらしい。

それからは二人でコネクションの扱い方を研究した。
各シルエットの能力を同時に発動できるって事は、その可能性はグンと大きくなる。

始めはまったくと言って良いほど使いこなせなかった。
それは魔力が足りないとか、そんな理由じゃなく単純に……組み合わせられなかった。

コネクション機能は未完成だったが故に俺が組み合わせを考えなければいけなかった。
二つの組み合わせでも、バランスよく組み合わせないと機能を上げるどころか下げてしまう。

今でも、四つしか作れてない上に、戦闘訓練はまったくと言って良いほど無い。

……それでも、今はそれに賭けるしかない。
コネクションなら、ヤツの思考にも対抗できる。

幸い、カートリッジにはまだ余裕がある。
コネクションを連続発動する分には困らない。

「（そうやな。今の状況で安全策なんて取ってられへんな。私は援護に徹する、でええな？）」
「（うん。お願い）」

それを最後に俺ははや姉も前に移動して、アングを睨む。

「いくぞ、アテナ！　バスター、ガンソード！！」
《――Lode（ロード） Cartridge（カートリッジ）――Buster（バスター） Sil（シ）houette（ルエット） and（アンド） Gun（ガン） Silhouette（シルエット）――co（コ）nnection（ネクション）！――》

二発のカートリッジを消費し、アテナがその姿を変える。

持ち手はガンソード、だが刀身部分は新しく出来た銃口の下部に取り付き、バスターの様に強大化している。

攻撃力強化プラス射撃！

そのアテナをライフルの様に両手構え、銃口をアングに向ける。

《――Ｌｏｄｅ（ロード）　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ（カートリッジ）――ｂｌａｎｃｏ（ブランコ）　ａｒｇ（アル）ｅｎｔａｔｏ（ジェンタート）　Ｂｕｓｔｅｒ（バスター）！！》

カートリッジを二発吐き出し、打ち出したのは白銀に輝く砲撃。

反動で体が後ろに持っていかれそうになるが、気合で踏ん張る。

「――っ。これは！？」

盾を作り出し、砲撃を防ぐアング。

だが直ぐに盾を残し自身の体を横にスライドさせた。

刹那、盾を分解させ、砲撃をやり過ごす。

「バスター、ダブルソード！」

《――Ｌｏｄｅ（ロード）　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ（カートリッジ）――Ｂｕｓｔｅｒ（バスター）　Ｓｉｌｈｏｕｅｔｔｅ（シルエット）　ａｎｄ（アンド）　Ｄｏｕｂｕｌ（ダブル）　Ｓｉｌｈｏｕｅｔｔｅ（シルエット）－ｃｏｎｎｅｃｔｉｏｎ（コネクション）！――》

再び発光。
そして出てくるのはバスターより一回り小さい、厚い刃を持った二刀。
攻撃力プラス連撃！

「はあああぁぁ！！」
「っ！」

切りかかる。
アングは一瞬虚を突かれた表情をしたが、剣を手に取り俺の攻撃を防いだ。
だが、攻撃は一度じゃねぇ！
右が防がれれば左、それでもなら再び右。
とにかく攻撃の手を休めない！！

「ちぃっ！　小細工を――！！」

悪態をついて下がるアング。
だが、その先には。

「刃以(も)て、血に染めよ！　穿(うが)て、ブラッディダガー！！」

襲い掛かる鮮血色の刃。

アングが気を取られてる間に！！

「ダブル、テクニカルソード！！」

《――Ｌｏｄｅ（ロード）　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ（カートリッジ）――Ｄｏｕｂｕｌ（ダブル）　Ｓｉｌｈｏｕｅｔｔｅ（シルエット）　ａｎｄ（アンド）　Ｔｅｃｈｎｉｃａｌ（テクニカル）　Ｓｉｌｈｏｕｅｔｔｅ（シルエット）　ｃｏｎｎｅｃｔｉｏｎ（コネクション）！――》

テクニカルより少しだけ短い、薄い刃を持った二刀。

連撃と速度。

この組み合わせで俺は、更に上の連撃を繰り出せる！

「これで！！」

「っ、しつこい！！」

今度はアングも二刀を取り出し応戦してきた。

「そんな付け焼刃で！！」

「――つぅ！！」

俺だって今の状態は殆ど初めてだけど、それでも二刀の戦闘経験は俺の方が上だ！
その状態で押されるわけが無い。

「ウィズ、下がり！！」
「っ。はや姉！！」

後ろに下がる。
こう言ったら何だが、はや姉はもう自分のやる事、そして今の俺の弱点を既に分かってくれてる。

今の所、コネクションの弱点は多いが、目立つものは二つ。
一つはカートリッジの消費が激しいと言う事。

コネクション一回につき二発を消費するくせに、エクタランテと同じように一度発動をやめたら少しの間発動できない。。。
これは今回、ユリアが用意してくれた山のようなカートリッジで埋められる。

そしてもう一つ。
それは同じ組み合わせを長時間展開出来ない上に、変える際には俺は隙だらけになる。

どうしても二つを展開する上にカートリッジを消費するせいで大きな隙が出来る。
それがアングなら、見逃すはずの無いほど大きな隙になる。

だからこそ、はや姉はその時間を稼ぐことに徹してくれてる。

「逃がしません！」

「こっちのセリフや！　クラウ・ソラス！」

追ってくるアングの進路を、はや姉の砲撃が拒む。

だからこそ、俺は安心してコネクションを発動できる！

「テクニカル、エクタランテソード！！」

≪――Ｌｏｄｅ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ――Ｔｅｃｈｎｉｃａｌ　Ｓｉｌｈｏｕｅｔｔｅ　ａｎｄ　Ｅｃｌａｔａｎｔｅ　Ｓｉｌｈｏｕｅｔｔｅ――ｃｏｎｎｅｃｔｉｏｎ！――≫

両手に持っていた剣が、再び一つになる。

見た目はテクニカルが少し細長くなったよう。

そして、大きな違いは常に発光していることだ。

身体能力の上昇、その上からテクニカルの速力上昇。

これで……――

「――決める！　アング！！」

「ぐぅっ――！！」

結局、俺が一番使ってたのはテクニカルだ。
基盤がテクニカルのコイツを使って、弱ったアング相手なら――！！

しかし、アングも引かない。
顔には苦しそうな表情を浮かべてるが、まだ付いてくる。

これだけ連続で攻撃方法、対応の仕方を変えたのに……まだ分割思考が残ってるって言うのか！？

――だが、残りは少ないのは明確だ。時間を与えるな。今のうちに叩け！――

姉さんの一押しで一瞬焦った気持ちを落ち着かせる。

「この程度で――！」
「っ！」

アングが横になぎ払った剣で、アテナを握る手が大きく横に弾かれた。
俺の腹は完全に無防備。

「これで――おしまいです！」
「――これ、くらいっ！　アテナァ！！」

《――connection（コネクション） out（アウト）！――》

アテナがテクニカルとエクタランテに戻り、両手に納まった。

「――なっ……」

「はあぁぁ！！」

弾かれていない左手、そこに納まったテクニカルで、アングを切る！

苦しみの声を漏らしながら、後退するアング。

「逃がさねぇ！！　アテナ！！」

《――Normal（ノーマル） Silhouette（シルエット）――》

唯一残ったノーマルシルエット。

コイツでも、出来ることはある。

アテナの剣先を横に広げ、姿勢を低く構える。

カートリッジを二発ロード。

今の俺に龍は無理でも……その牙なら！

――Ｈｙｐｅｒｉｏｎ（ハイペリオン）――
「っ！？」

突然、背後に展開されたハイペリオン。
一瞬アテナかと思ったが、その色、漆黒の色を見て誰かわかった。

――踏み込みが甘い。それを使え！――
「（姉さん……。ありがとう！！）」

背後に縦に展開されているハイペリオンに足をかけ、穿つつもりで強く蹴る。

「龍牙……――」
「くっ！　アブソリュート！」

アングにももう思考は残っていないらしい。
慌てた様子でアブソリュートを集め、盾の形を形成しはじめる。

……今から俺が出すのは、斜め上からのカラーズに比べて単純な斬撃。

だが、コレこそ……今の俺のありったけ！！

「――　一閃！！」
「なっ――に！？」

俺の斬撃は……届いた。
アブソリュートが盾を形成する前に、俺はアングを切った。
アングはそのまま気を失ったらしく、海面へと落ちていく。

「あ、やば……」

その様子を見て気が抜けたのか、全身から力が抜けていくのを感じた。

――限界か。ウィズ、ユニゾンを解除するぞ――
「駄目。姉さん、今解除したらまた海に落ちるじゃん」

責めてアースラまではこのままで居るつもりだ。
コレは融合の影響なんかじゃない。
ただ慣れないことしたから疲れただけ、筋肉痛みたいなもんだ。

それに……。

「ウィズ！　大丈夫か！？」
「はや姉……ゴメン、正直しんどい」

こうやって肩を貸してくれる人が、俺には居る。

「ウィズ君！」
「ウィズ！」

ふと後ろから声が聞こえて振り向いた。
なの姉たちだった。

アングが気絶したからケージも消えたんだろう。

「大丈夫！？」
「うん。なんとか……。でも直ぐに休みたいかも……」

皆俺の事を心配してくれて、声をかけてきてくれる。
シャマル姉さんは俺とはや姉に治療魔法をかけてくれてるし、クロノたちは海に落ちたアングを探してる。

まぁ、そんな中この人だけは少し違ったけどね。

「龍牙一閃……一閃を名乗るにはまだまだだな」
「ア、アハハハハ……」
「ウィズ、今のその姿……」
その時、はや姉がそこまで言って言葉を区切った。
他の姉さんズも俺を見てる。
ま、そうだよな。
「うん。俺は今アインス姉さんとユニゾンしてる」
姉さんたち、海中であったことを全部話す。
皆驚いてたけど、最後は納得してくれた。
「ほんなら、アースラに戻ったら直ぐにシステムを調べへんとな」
「ありがとう、だって」
ユニゾン中は外と話せないみたいで俺が通訳みたいな形で言葉を伝えてる。
これで、今回の事件は終わりだ。
そう思ってたんだけど……。

「こ、これで終わってたまるものですか……！」
「アングっ！」

夜の空、そこに、ボロボロになり、肩で息をしているアングが居た。

既に姉さん達はアングを囲んでいる。
俺もはや姉に肩を借りているが、一緒に囲んでいる。

ハッキリ言って、もうお終いだろう。
アブソリュートも無いでこの戦力差。

「もう抵抗するな。ここでお前の計画は終わりだ」
「……そう言う訳にはいかないんですよ！」
「なっ！？」

そう叫んでアングは自身の左手首を掴み……引き抜いた。

その傷跡から出たのは真っ赤な血なんかじゃく……火花だった。

「戦闘機人、だったのか……」

確かに、よく考えたら生身の人間が機器と感覚を共有できるなんておかしい。

FS計画で生まれたからって、考えが浅かった！

「こうなれば、この世界ごと消して見せます！」
「……駄目だ！クロノ、今すぐ彼を止めろ！！」
「おそい――！」

ユーノさんが叫ぶも、既に遅かった。
アングは引きちぎった左腕を握りつぶし、その場で自爆した。

皆が言葉を失う。
ここで自爆なんて方法を取るなんて思ってなかった。

しかし、それだけではなかった。
アングが自爆をした場所、そこから今までとは比べ物にならない程の魔力が噴出し、辺りに荒れ狂った。

「やられた！」
「ユーノ君！　どう言う事！？」
「彼は……マジック・ホールをこじ開けたんだ。このまま放っていたら……」
「どうなる、ユーノ！？」

クロノが叫ぶ。
それ程、今の状況がヤバイってことだ。

「……貯蔵した魔力が尽きるまで暴走し続けて、対には地球だけじゃない。次元世界を取り込む。いわばブラックホールになるんだ」
「貯蔵って……でもアングが無駄遣いをしていたんだろう！？」
「それでも、１０年間魔力を貯蔵し続けてたんだ。コレでも減ったほうだ」

辺りに再び重い空気が漂う。
当たり前だ。敵はブラックホールだと、そういわれたも当然なんだから。

「……それで、それ以外の方法は？」

そんな中、クロノがユーノさんに聞く、
けれど……ユーノさんは静かに首を横に振った。

「……どの文献にも対処方法は載ってなかった。そもそも発見すらあまりされてないんだ、暴走状態のことがあっただけでも、凄いほうなんだよ」
「そんな……」

もう思い空気どころじゃない。
絶望。

その二文字がぴったりだ。

どうしようもない。
みんなそう思ってる。

……俺以外は。

「ユーノさん。一つだけ、方法あります」
「本当かい!?」

俺の一言にユーノさんが食いついてきた。
ほかのみんなの視線が俺に集まってるのが分かる。

「あかん……」

はや姉が、俺にしか聞こえないくらいの声でそういったのが聞こえた。

だけど……ゴメン。

俺は、言うよ。

「俺を……俺が、封印する」

ウィズの小部屋

ウ「今回は特に語らず、コネクションについてだけ」
ア《作中でも言った通り、シルエットを二つ掛け合わせる技です》
ウ「ただ掛け合わせの割合の調整が凄く難しいんだよな」
ア《例えばバスターとダブルを掛け合わせると、攻撃力＋連撃ですが、かなり重量があるので片手で持つのは厳しいとかですね》
ウ「あれの掛け合わせは苦労したなぁ。上手くいかなかったら逆に使いづらくなるだけだし」
ア《カートリッジも1コネクションで二発使いますし、あまり乱用できないのが痛いですね》
ウ「メリットはあるんだけど、今の所はデメリットの方が目立ってるなぁ……」

ナイトホークさん

ア《涙まで流していただいて……ありがとうございます！》
ウ「とりあえずあんな感じ。満足してもらえたらいいなぁ」

秋風さん

ア《おそらく普段時ではそうだったでしょうが……非常事態ですか

らねぇ。仕方ありません》
ウ「え、なにその本当は不満なんです。見たいなの」
ア《あぁ、不満ですし》
ウ「やっぱりか！！？」
ア《と言うかリインフォースさんの正式名称ってアインスでは無かったですか？》
ウ「ＰＳＰ、闇の欠片事件ルートだったらそう名乗ってるけどな。ルートが違うんじゃね？」
ア《あぁ、成る程。納得しました》

ＧＰＳさん

ア《ミオさん、はやてさんと同じ臭いがしますね……》
ウ「ん？例えば？」
ア《ん～～。耳年増なところ、ですかね？》
ウ「耳年増って……お前意味分かってんの？」
ア《私みたいな人のことでしょう？》
ウ「……いや、間違ってはいねぇけど……なんか違う気が……」
ア《そうですか。まぁ、なんにしても、そんなピンクい空気私が許しません》
ウ「あ、やっぱソコはスルー無しなのね？」

翡翠さん

ウ「何気にはや姉とは初共闘だったんだよなぁ。何か感慨深いな」
ア《その分私の出番が減りましたけどね。これは許しがたい事態です》
ウ「いや、それは仕方ねぇじゃん。それにほら。今日は活躍できた

だろ？」
ア《む、むぅ……。それを言われると……タイミングを間違えましたかね？》
ウ「で、俺が浮気者どうこうは置いといて、またコクられてるけど？」
ア《私はあと何度断れば諦めてもらえるんでしょう？》
ウ「さぁ？」

ＺＥＲＯさん

ウ「なんか始終叫んでるな……」
ア《中々大変みたいですねぇ》
ウ「ってか俺はコレに対してなんて返したらいいんだよ」
ア《まぁ、ゼロさんがバラした云々の追及は置いておいて次回も楽しみにして置いてください、ですかね》
ウ「まぁ、そうだな」

Ｎａｋｉさん

ウ「なぁ、アテナ」
ア《何でしょう、相棒》
ウ「あの窓から見える黒い陰は何かな？蠢いてるけど」
ア《……そうですね、コネクションには繋がり。あとは接続なと、そう言う意味を多く含んでいます。使用方法のままですね》
ウ「え、見ないフリ！！？」
ア《煩いですねぇ。セラフィム、私の勇士、確り見ましたか？》
ウ「マジで触れないの！？……え？もしかして俺だけ見えてるとかじゃ無いよね！？」

ア《ですから相棒。何叫んでるんですか？》
ウ「！！？」

47．コネクション（後書き）

必殺技オンパレード、八神煌斗でした。

コネクション、そして龍牙一閃。
ウィズの新しい力です。おそらくユニゾンした今のウィズならシグナムたちともいい勝負が出来るはず！
分かりませんけど。

とりあえず、アング戦決着。
アング勢力全滅という終わり方でした。誰も生き残っていません。

最後のウィズのセリフには色々言いたいことがあるでしょうが……、見守っておいてください。

そして、次回から更新が不定期になるかも知れません。
少なくともこの荷が変わった途端更新は無理になると思います。
なぜか。
明日４／２が大学の入学式なんです。大学が始まるんです。
片道二時間以上。睡眠を確り取りたいんです。

極力努力します。
今の章は一応完結はさせていますのでアップ時間は別として二日更新は出来ます。

１～からの話は不定期になるかなぁ。

それでは！

48. 封印

「そ、それって……」
「あかん！！」

皆が俺の言葉に驚いてる時に、今度は当たり一杯に聞こえる大声で、はや姉が叫んだ。
そして俺の胸倉を掴むように移動する。

「あかんで！　絶対にそんな案は却下や！」
「はや姉……でも」

こんなはや姉、俺は始めてみる。

「ウィズ君、私も反対。そんなの駄目だよ」
「何か他に手があるはずだよ。軽々しくそんな事を言わないで」

なの姉にフェイ姉が近くに寄ってきた。
本当に別の方法があるって、思ってる。

……いや、思いたいのか。

「でも、もうコレくらいしかないよ。俺は元々その為に生まれてきたんだから」
「そんなん関係ない！　他に何か方法がある筈や！　そやろ、ユーノ君！！」
「そ、それは……」

顔を横にそらすユーノさん。
他のみんなの顔も曇る。

皆分かってるんだ。
無限書庫に無かったと言う事は、可能性が殆どゼロって言う事が。

それに、闇の書の闇、だっけ？

話に聞いた限りじゃアレとも違う。
言うなら、今回の相手は自然現象の様なものだ。

どれだけ技術が進んだ管理局でも、自然現象相手だとどうしようもない。

「だから、俺がやるしかないんだ」
「あかん言うてるやろ！　他に方法が――」
「あるのかよ！？」
「っ――」

あ、って思ったときにはもう大声を出していた。

はや姉が息を呑むのが分かった。

「他に方法が無いから、皆こうやってるんだろ!?　俺に強く言って来れないんだろ!?」

「そ、そんなこと……」

はや姉の両肩を持って、目を見て言う。

でも、それでもはや姉は納得できないらしい。

「はや姉だって気づいてる筈でしょ？　それしか、もう無いんだよ」

「でもっ……でも、何か……」

必死に言葉を探してる。

はや姉だって分かってる筈だ。

でも、それをどうにかしたくて、でもどうにも出来なくて苦しんでる。

だから、言う。

「はや姉。俺、前に言ったよね？」

「……」

俯いて、俺の言葉に反応してくれない。

掴んでる肩が揺れて、小さく嗚咽が聞こえるから、多分泣くのを我慢してる。

俺は構わず言葉を続ける。

「どれだけ時間がたっても、みんなの、はや姉の所に帰ってくるって」

肩が少し揺れた。

「絶対に帰ってくる。約束する」

「……あかん」

顔を上げたはや姉。

目に一杯の涙を溜めて……。

「やっぱりアカン！　そんなウィズ一人が頑張る事あらへん！」

「はや姉……」

「なに言うても許さんで！　やっと、やっとホンマの自由やんか！！　なんでまたウィズがそんな目に合わないかんねん！」

「っ。それって……」

多分今の台詞、俺の二年間の事を言ってるんだと、直感的に悟った。

シグナム姉さんには言わないでって頼んだから、はや姉、調べてたな。
実際調べたのはクロノ辺りだろうけど。

……ま、考えたらそれが自然だよな。
この二年間は本当に自分の意思なんて関係なかったし、特に今年なんかは色々と自分に苦しめられたし。
そう考えたら自分の所属する部隊で悩んでたのって、スゲェ贅沢な事なのかも。

――でも、今はそう言う事は関係ないんだ。

「俺、ウィズからも頼まれてるし、何より俺もそうしたいんだ」
「なに言って……」
「ゴメン、はや姉」

最後にはや姉に謝って、レイラを首にかける

「ちょ、なにしてるん……っ！　ウィズ――！！」

その言葉を最後にはや姉は姿を消した。
レイラでアースラに転送した。

もともとレイラには個人転送システムはあったらしい。
トウギはそれで、次元転送までしてたらしいからな。あのＪＳ事件中の単独任務の時とか。

俺じゃそんな次元レベルは無理だけど、アースラに飛ばすことくらいは出来る。

「クロノ、早く戻ってはや姉を抑えておいて」
「……あぁ。……フェイト、なのは。二人も付いてきてくれ」

クロノは何も言わなかった。
なの姉とフェイ姉も、俺の方を少し見たが何も言わなかった。
ユーノさんとアルフさんも、二人についていった。

ここに残ったのは、俺と、夜天の守護騎士の皆。
皆俺の前に並ぶような形だ。

「本当に、やるのか？」
「うん。これ以外に方法はないしね」

シグナム姉さんが代表して聞いてきた。
俺も何度目になるか分からない言葉を返した。

「本当はアインス姉さんも一緒に言って欲しいんだけど……」
――絶対にユニゾンアイトしないからな――

「って言って聞かないんだよ」

苦笑いで言う。

アインス姉さんはさっきからそう言ってユニゾンを解除しようとしない。

最初は俺の体に負担が掛かるとか言って自分で解除しようとしてたのにな。

――それとコレとは別だ――

そうですか。

俺は心の中でそう呟いてマジックホールを見る。

マジックホールは既に、その大きさをサッカーボール程までにしていた。

当然、辺りを吹き荒れる魔力とかも始めとは比べ物にならない。

限界かどうかは分かんねぇけど、早くしたほうがいいのは明白だ。

「って訳で、姉さん達も速くアースラに……っ！？」

そこまで言って、俺は言葉に詰まった。

……シャマル姉さんが、抱きついてきたから。

「シ、シャマル姉さん？」
「絶対……絶対に戻ってきて。そしたら、私が治してあげられるから」
「……うん」
「戻ってこなかったら、アタシが一発くれてやる」
「ヴィータ姉さん！？」

アイゼンを肩に担いだまま、半目のヴィータ姉さんが、シャマル姉さんの肩越しに見えた。
スッゴク物騒なことを言いながら。
いやまぁ、照れ隠しって事は十二分に理解してますけどね。

「それがイヤなら絶対に戻って来い、と言う事だ」
「ザフィーラ兄さん」

ヴィータ姉さんの後ろ。
そこで腕を組んで静かに言う兄さん。
俺はそれに何も言わずに頷いた。

そして、皆はアースラに戻っていった。

俺は今、マジックホールに向かって立っている。

「ってカッコつけたのは良いんだけどよ、どうやったらいいんだ？」

《……どうせそんな事だろうと思ってましたよ》

――まったく成長していないのだな、お前は――

《相棒、なんでいつも最後でこけるんですか？》

「俺だって知りたよ！？　ってかそのほとんど、お前が原因だからね！？」

《濡れ衣です！》

「どこが！！？」

いやはや、緊張感ないね本当に。

こうしてる間にも魔力の流れが強くなってきてるってのに、なにやってんだか、マジで。

《相棒、本当に良いんですね》

なのにコイツは、この土壇場になってそんな事を言ってきやがった。

「良いんだよ。何度も言うけど死ぬ気はサラッさらないし。少しキツイ事をやる。それくらいだろ？」

《……そうですね》

少し間があったけど、一応納得してくれたみたいだ。

《良く聞いてくださいね、相棒。今から説明させてもらいますので》

「了解。姉さんも聞こえるよね？」

――勿論だ――

《では……》

アテナの説明ではこうだ。

俺が出来ることはたった一つ。

魔力の流れを乱さない……一定に保つこと。

だけどそれは常日頃から心得てることだ。難しいことじゃない。

それに対してアテナのすることは多い。

その代表が俺の中にある４番、そして五番拘束を解くこと。

元々俺は俺の事を知らなかったんだから、俺が何をしなくても封印……マジックホールの操作は出来るも当然か。

《そして相棒。魔力の流れの話はしましたが、それは二の次でいいです》
「二の次って、それ以上に大事なこと……あるんだろうけど、なに？」
《自分を保つことです》

自分を保つ。
それはある意味魔力の流れ以上に簡単なことだ。
だけど俺は覚える。

「保つって……出来るのかよ。五番解いたら人じゃなくなる、とか言ってなかったか？」
《はい。普段の相棒ならそうだったでしょう。ですが、今の相棒なら何とかなるかもしれないんです》
「ん？」

――私、だな？――

俺が何が違うのか首を傾げていると、姉さんが口を開いた。
そして成る程、と納得した。

「内側から手助けしてくれる、って事か」
《あくまで可能性の話です。お姉さんに聞いてみなくては》
――やって見よう。いや、違うな――

そこで一拍空いて……。

――任せろ。必ずお前の意識を繋ぎとめてやる――

力強い、頼もしいセリフを言ってくれた。

「よし。アテナ、やるぞ」

《はいっ！》

アテナを右手中指に嵌めながら、気合を入れる。

俺は芽を閉じ、自分の中へ入り込んでいく。

そして、呟く様に、機械的に、口を開く。

「拘束封印魔術、解除申請。……第四、五拘束、解除」

《……承諾しました。第四、五拘束、解除します》

「――ぐっ……ガハッ！？」

途端、目の前が一瞬白くなる。

体の至る所から溢れそうになる魔力を、体中に力を入れて何とか押さえ込む。
喉元に何か詰まったような感覚を胸元を掴んで誤魔化す。

まだ、ここで終わりじゃない。

《全拘束解除……確認》
「続いて、魔力流動をアテナへ譲渡」

《……魔力流動、譲受確認》

コレで俺の魔力をアテナが操作してくれる。
これで魔力に関しては乱さなければ……いいけど、無理かもっ。

《相棒、魔力の乱れが大きすぎます！　これでは私でもっ》
「んなこと……言っても、俺だって……」

俺だって精一杯だ。
本来、ここは俺の意識は切り離して魔力の流れだけを徹底する場所。
それを意識を繋ぎとめることに大半を使ってるんだ。

魔力が乱れたってしょうがない。

けど、これで封印が失敗したら……っ！

《っ！？　……魔力流動安定を確認しました》
「なん……で」

どれだけ苦しくても、その疑問を口に出した。
俺は何もしていない。

でも確かに、魔力の流れは安定し始めていた。

――私だ。ウィズが思いのほか自身で意識を繋ぎとめていたからな。こちらに回れた――

どうも俺の変わりに姉さんが魔力の流れを安定させてくれたみたいだ。

だけど喜んでばかりいられない。
これで意識を繋ぎとめる補助が減ったと言う事だ。

更にきつくなるかもしれない。

でも、ここで負けるわけにはいかない。

俺は……帰るんだ。

コレで……最後……。

「……」

《相棒？》

途端に、怖くなった。

一つ。そんな話じゃない。

一歩。そんなに大きくない。

目の前は自分の手さえ見えない真っ暗な闇。

そんな中を、足を下ろす場所を一箇所間違えば……俺は死ぬ。

……イヤだ。死にたくない。

ここでヤメテも、誰も責めないんじゃないのか？

「……ダメだ」

自分に言い聞かすように、呟いた。

《相棒、どうしたんです――……》

「対古代遺失物操作機能（ロストロギア・コントロール）――」

ここで俺が、怖くなって逃げ出したら……

「始動キー　――」

俺が、俺を許せねぇ！

「――”ＷｉｔＨ”」

途端、さっきまでとは比べ物にならない、魔力の爆発。

既に俺の操作範疇を超えてる。

もう意識が殆ど飛び始めている。

目も殆ど霞んで見えない。

辺りに吹き荒れていた魔力も、もう今は肌に感じられない。

人としての機能が無くなって来てるんだと、自分でも分かった。

《始動キー、確認》

意識が遠退いていく。

《魔力量、流動、共に安定を確認》

そんな時、俺の頭を過ぎった言葉はただ……

《対古代遺失物操作機能（ロストロギア・コントロール）、稼動開始》

死にたくねぇなぁ……

ウィズの小部屋

ユリア「今回はウィズに変わって私に任されました～っと」
レイラ《何だそのやる気が無い感じは？》
ユ「だって本編じゃないからねぇ、ここ最近本編にも出てないし。そりゃやる気も下がるっての」
レ《それを私に言われても困るのだが……私たちではそんなに話も無いのでさっさと行こうか》
ユ「え、ちょっ。もう少し話しても良いんじゃない！？」
レ《却下だ》

ＺＥＲＯさん

ユ「なんか能力が一杯書いてあるわねぇ……で？」
レ《いやいや、ちゃんと感想も書いてくれてるではないか》
ユ「最後の行でしょ？でも私が出てない時の感想なんて嬉しくとも何とも……」
レ《それを言ったら残りの感想全てになるが？》
ユ「だから面倒なのよねぇ～……。レイラ一人でやっておいてよ」
レ《本当に気だるそうだな》
ユ「そうじゃなくて本当に気だるいのよ。ったく……」

翡翠さん

ユ「あぁ、私戦闘機人ってのには驚いたわね。まぁ、それだけだけど」
レ《それにしても姉さんにあんな機能があった事も私も知らなかったのだが？》
ユ「私は頭の隅にあるわね、一応。言われないと忘れてたくらいだけど」
レ《ならばアレにはアリヤ殿も関わっていたのか》
ユ「見たいねぇ。ま、本当に軽く見たいだけど。和菓子の記憶の方が全然濃いいし」
レ《……未だにアリヤ殿の性格が分からないな》
ユ「意外といい加減な感じだったわよ」

Ｎａｋｉさん

ユ「確かにカートリッジの生成には疲れたわ。もう二度とやらない」
レ《言い切るところがまらしいな》
ユ「そう？」
レ《あとは、ラディがハイペリオンをマスターしたらしいぞ？》
ユ「使っても良いんじゃない？私は知らないけど」
レ《と言うか一つ気になるんだが……障壁機能が無ければただの足場魔法ではないのか？》
ユ「ん～。それがそうでもない見たいなのよねぇ。」
レ《そうなのか？》
ユ「あれってウィズ用にアインス？が作った魔法だからクセさえ無かったら術式が簡単なクセにかなり強固に出来てるのよ」

レ《つまり足場だけでもかなり使い勝手がいいと言う事か》
ユ「正～解」

ナイトホークさん

ユ「とりあえずウィズの件については次回！としか言いようが無いわね」
レ《雰囲気？を守るために私たちが出てきたわけだからな》
ユ「って言うより今回のだけ見たら思いっきり自己犠牲してるけどね」
レ《だな》

GPSさん

ユ「耳年増って言われて嬉しいなんて、変わってるわねぇ」
レ《感性は人それぞれだからな。そこは仕方ないだろう》
ユ「私は逆に子ども扱いされてる気がするわね」
レ《大人に見られたい、という考えは子供の考えだぞ？》
ユ「うるさい。で、ココに来たいって、もの好きねぇ……」
レ《とりあえず暫くは無理、としか言えないな》
ユ「アイツが妙に忙しくなるからねぇ。昨日でしょ、入学式」
レ《人様を招待するのには色々時間を食うからな。本当にすまない……》

灰色の野良猫さん

レ《あの戦闘、と言う事はコネクションバトルの事か》

ユ「アインスが出なくてアテナを活躍。ウィズは良いとして……私は？」
レ《まだ言うのか？そんなに出番が欲しいのか？》
ユ「当たり前でしょ。ウィズとかアテナに比べて私の方がよっぽど主人公らしいじゃないの」
レ《その辺は分からないが。そう言う事を言うと向こうに負担をかけるからやめた方が良い》
ユ「分かってるわよ。私も適当に言っただけだから」
レ《本当にネタだけら一切気にしないでくれ。本当にネタだから》
ユ「気分を害したら、ゴメンね～」

48．封印（後書き）

一切見直してません、八神煌斗です。

今回の後書きは雰囲気に合わせてウィズとアテナを外しました。
ユリアを書くのは久しぶり。
こんなに性格悪かったっけなぁ？って思いながら書きました。

あの子口は悪いんです。

で、今回とりあえず上げることを先頭に考えました。
おそらく、日が変わった瞬間の更新は今回が最後です。

明日の準備して寝ます。
あれ？
大学ってこんなに忙しいの？
まだオリエンテーションなのに……。

二日後にアップは確実ですので。
それでわ！

49．WitH

ユリアｓｉｄｅ――――――――――――――――

回りくどいのはキライ。だから結果だけ、言うわね。

結果だけ言うと、マジックホールは閉じた。

暴走の影響も、海鳴に突発的な暴風が吹き荒れたって程度。

海鳴の古い何本かの木が折れたり、屋根の瓦が飛んだって話を聞いたくらい。

大きな問題にはならなかった。

――全体的に見たら。

事件から五日。地球時刻で１２月２５日。日本はクリスマスっっていう年に一度の聖なる日。

ウィズは、まだ帰ってこない。

この五日間、私達は交代でウィズを探してる。

本局にはクロノが艦の修理に梃子摺っているって言って何とか期間を先延ばしにしてるってクロノが言ってた。
本局からは期間命令が何度か来てたみたいだけど、ね。

でも、明日が限界。

本局が、明日中に治らなかったら迎えを寄越すみたい。
本当は治ってるから、遅くても明日にはココを発たないとダメ。

昨日までは皆やっけになって町を探し回った。
でもウィズの魔力の残滓すら見つからなかった。

その反動からか、今日は皆、アースラに残っていた。

回りくどくなったわね。……ハッキリ言いましょう。

みんな、どこかで諦めちゃったのよね。
各言う私も、正直あの魔法を使って無事に済むなんて思ってなかったし。
ある意味、私の想像通りの結果になった。

ふと、思い出すのはあの日の白の極光と、はやて。

あの日は本当に大変だった。

はやては戻って来た途端飛び出そうとした。

・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜

「ええ加減、どいたらどうや」
「何度言われようと、そんな気サラサラないわね」
「どけって言ってるのが、分からんか？」
「分からないわね」

転送ポートの前で、睨み合う。
少し離れた所ではなのはたちがどうしていいのか分からないって言った表情でコッチを見てる。

ま、なのは達も感情論だけで言ったら直ぐに飛び出したいんだろうし。
自分を制御できてるだけで良しとしましょうか。

「部隊長命令や、そこをどけ」
「無理。私、管理局員じゃないから」

まさかココで部隊長権限を出してくるとは思わなかった。
相当頭に血が昇ってるわね。

本当は私だって直ぐに飛び出してあのバカに一発くれてやりたい。

でもそれはしない。
アイツがそれを望んでないっていうのが分かるから。

はやてだって、それが分からない筈がない。

……ここは少し説得でもしてみようかしら。
そういうの苦手なんだけどなぁ。

「ウィズが何を考えてあんな事をしようとしてるか。はやてこそ分からないの？」
「分かってる。分かってるけど、そんなん関係あれへん！」

叫びはまで、悲鳴にも似ていた。
その時だった。私の後ろに、シグナム達が現れたのは。

「ウィズが死ぬことあらへん！　なんであの子一人が全部背負わないかんねや！？」
「背負うんじゃ無いでしょうが。アイツが自分で、アンタを守ろうと……」
「わかってる！　分かってるけど……私はイヤなんや！」

分かってはいたけど、私の言葉ははやてには届かなかった。

私もお母さんと離れ離れになってるから、そう言う気持ちは分からないでもない。
だけど本当に意味で理解は出来ない。
私はお母さんの死体を確認した訳じゃないから。
まだ希望が持てる。

「どうしてもどかへんってなら……」

途端、はやて目が据わった。

「はやてちゃん！」
「主！」

はやてが取った行動に、ブリッジが凍りついた。
なのはとシグナムが叫んでるけど、はやてはそんな事お構いなし。
はやては……シュベルトクロイツを私に向けた。

「力づくで、どかしたる」
「大分錯乱してるわね」

私達を中心に、空気が凍っていくのが分かった。
けど、私は目の前のはやてから目を放さない。

はやては本気。
後ろにシグナム達が居るのに、私の隙を伺ってる。
言うなら一触即発の空気。
ここで隙を見せたらヤられる。

ここは、無理しないといけないか。
そう思ったときだった。
モニターが、真っ白に染まったのは。

「――っ。ウィズ!?」

はやてが視線をモニターに移した。

「主、スミマセン」

その瞬間を狙って、シグナムが賭け、はやての意識を刈り取った。

・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜

それから意識を取り戻りたはやては、私に一度謝りに来た後、部屋に篭った。

碌に食事も取ってない。

交代で皆が食事を持って行ってるけど、一、二口食べただけで、まったく食べてないに等しい。

で、今日は私の番。

はやての部屋の前まで食事を片手に来た。

「はやて、食事よ。……はやて？」

返事が無い。

篭ってるって言っても、いつもは返事もするし招き入れてもくれる。

私も何度か話をした。

……見え見えの空元気で。

「あけるわよ」

鍵が掛かってる訳でも無かったから扉を開けて中に入る。

中もぬけのカラだった。

こりゃぁ……外に出かけたわね。
机の上に立ち上げっぱなしになったディスプレイを見て確信した。

はやてｓｉｄｅ――――――――――――――――

【ウィズを探してくる。】

それだけ打って私は海鳴に降りた。

「……なにやってんねやろ、私」

自嘲気味に、一人呟いた。

朝、クロノ君から食事を持ってきてくれた時に、明日帰るって事を聞いて上着だけを持って飛び出した。

今更焦って探して、どうするって言うんや。
五日間、無駄に過ごしたくせに、何今更……。

「……さむ」

羽織っていたコートの前を全部止めなおす。
もうお昼過ぎてるし、時間的には温かくてもおかしくないと思うけど。

なんて考えてると、不意におなかが鳴った。

こんな時でもおなかは空くらしい。
最近食べてなかったのに加えて、ずっと歩いてるって言うのもあるんやと思う。

とりあえず、商店街にでも行っみよか。
何かあるやろ。

そう思って商店街まで来て、私は失敗した、と思った。

「今日、クリスマスなんや……」

あちこち綺麗に装飾された店の看板が並んでる。
ケーキを街頭販売してる店も有るし、ツリーを飾ってる店もある。

そう言えば、サーチャー設置してるときにも数は少なかったけど、
飾ってる店が多かったことを思い出した。

「――っ！」

ふと目に入ったんは、一軒のコンビニ。
五日前、ウィズとお昼を買ったコンビニ。

私は居た堪れなくなって、商店街を後にした。

それからはまた海鳴の町を虱潰しに歩き回った。
けど、なんの手がかりも見つからへん。

……当然やな。
今まで、シグナム達が必死になって探し回って見つからへんかったのに、たかが5、6時間程度で見つかる訳あらへん。

もう辺りも暗くなってきた。
そろそろ、潮時かも知れへんな。

そう思ったとき、私の目の前に白いモノが映った。

「雪……か」

これでホワイトクリスマスや。

けど、実を言うと私はあんまり雪は好きやあらへん。

アインスが言った日に降ってたから。
なのはちゃんが墜ちた時、降っていたから。
そして……今、降ってきたから。

「帰ろ」

足を転送ポートのあるコテージに向けた。
その時やった。通信機が鳴ったのは。

『はやて、聞こえるか？』
「クロノくん？」

出るとクロノ君やった。

通信言うても、携帯電話をそう変わらない端末。
音声しか伝わってこうへん。

『ついさっき、微弱だが魔力を感知した』
「……それくらい珍しいことやないやろ」

管理外世界言うても、魔力を持ってる人が居ないとは限らへん。

私やなのはちゃんが良い例や。
それが微弱で一瞬なんやったらそれこそワザワザ通信してくる意味があらへん。

――っ。

フと、頭をよぎった。

「まさか、その魔力ウィズか!?」
『……いや、残念だが違う』

ある意味最後の望みやった。
それが目の前で音を立てて崩れ始めた。

「……なら、なんやねん?」

もう気力が一気にそがれた感じの私は、半ば八つ当たりのように返した。

『その魔力……リィンフォース、アインスの魔力なんだ』
「場所は!?」

反射的に叫んでた。
崩れた先に見えた光。
この光りを、消すわけにはいかへんねや！

『場所は――』

「はぁはぁはぁ……よりによって、ココかい……」

乱れた息を整えながら呟いた。

クロノ君から場所を聞いて、直ぐに走り出した。
ボタンを全部止めてたコートも、今は全開や。
それくらい熱い。

「ホンマにココやねんね？」
『あぁ、その辺りのはずだ。フェイトたちもソコに向かっている』
「先に調べ始めとく。じゃ、切るで」

繋いでた通信を切って、私は反応のあった地点……あの丘への道を登り始めた。

「……あった」

それは直ぐに見つかった。

私はそっと、各を拾い上げて、胸の辺りまで持ってくる。

コレがアインスの核の筈や。

――だけど、ウィズの姿は無かった。

「あかんな」

頭によぎった悪い考えを振り払うように首を振る。

アインスがココに居たんや。

きっと近くに居るはずや。

切り替えてかな。

……足音が聞こえた。

「ウィズ！？」

「あ……」

振り向いた先に居たんは……なのはちゃんやった。

「ごめん」

「ううん。謝ること無いよ。……それが？」

「うん。アインスの核やと思う」

そっとなのはちゃんに渡す。

「アースラに連れて行ってあげてくれへん？　私はもう少し探すから」

「……わかった」

最後に、フェイトちゃんたちもこの辺りを捜索し始めてるって事を私に伝えてなんはちゃんはアースラに戻っていった。

私も早く探さな。

手がかりは見つかったけど、残り時間ももう見えてる。

急がな。

もう街灯も点きはじめてる。

「って、ここはもう少し街灯増やしたほうがええやろ」

とりあえず、コレくらい軽口を叩けるほどには元気になった、つもり。

にしても、本当にコレは街灯いるやろ。
いくら山道やからって、先が殆ど見えへんやんか。

本当は走って降りたいのに、危なくてそんな事できへん。

次の街灯まで結構距離あるしなぁ。

「ん？」

人影が見えた。
って言っても、当たり前か。

背丈からしてもなのはちゃんなんは見て明らかやし。
なのはちゃん、こういうの無理な人やからなぁ。

ホンマにゆっくり、一歩ずつ、確かめる様に歩いてる。
ってコッチに向かって歩いてきてへん？

「……え」

私は足を止めた。
その近づいてきたから分かった。
なのはちゃんじゃ無い。
なのはちゃんは、あんなに髪は短くない。
あの髪型をしてるんは……。
人影が、街灯の下に来て、光りに照らされた。

「あ、はや姉……」

声を聞いた途端に、私は走り出して、目の前の男の子、ウィズに抱きついた。

「と、とぉーー!?」

その勢いにウィズが負けて二人一緒にその場に倒れこんだ。

「テテテ……。大丈夫――」
「ウィズ!ホンマにウィズやねんな!?」

痛がってるけど関係あらへん。
跨ってる状態で、上半身だけ起こして、ウィズの顔を見て聞く。

すると、ウィズは小さく微笑んだ。

「うん。ただいま。はや姉」

ウィズの小部屋

ユリア「残念だけど、今回も私よ。どうだ、参ったか」
レイラ《参っては居ないだろうな。それで、何故また私たちなんだ？》
ユ「それがね、本編で見たとおりウィズがボロボロだから」
レ《最後のシーンで押し倒されていたな、簡単に》
ユ「普通は抱きとめるシーンだと思うのは私だけ？違うわよね？」
レ《スマナイが、私に聞かれても何とも言えんな。姉さんではあるまいし》
ユ「そう言えばアンタはそう言うの興味ないの？」
レ《うむ。特にないな。マスターも取り合うのも姉さんが独り占め使用とするからだしな》
ユ「ふーん。ま、いいや、さっさとコメ返し行きましょ」

ＺＥＲＯさん

ユ「ウィズに限ってはもう一歩踏み出してる気がするけどねぇ」
レ《私が知る限りでもほぼ毎日誰かに一撃くわえられていたな。日

常で》
ユ「それさ、気になってたんだけど誰が一番多いの？」
レ《やはりヴィータ殿ではないか？素手やデバイスでよく叩かれている》
ユ「やっぱりアレだけ殴られてるから妙に打たれ強いのかしら」
レ《おそらくそうだろうな》

Ｎａｋｉさん

レ《そう言えば戻っては来たが……姉さんが一言も喋っていなかったな》
ユ「あぁ、言われてみればそうねぇ。なに、不満なの？」
レ《別に何とも……。いや、あそこは姉さんが喋らないでよかったかも知れんな》
ユ「なんでよ？」
レ《間違いなく空気を壊していただろうからな。姉さんは空気を読まなさ過ぎる》
ユ「まぁ、分からないでもないけど……。あ、それとハイペリオンの件、返事曖昧でゴメンね」
レ《使用許可、だ》
ユ「なんか偉そう」

ＴＯＵＤＡさん

ユ「随分叫んでるわねぇ……」
レ《敬礼までして、凄いテンションだな》
ユ「まぁ、喜んでくれるのは嬉しいんだけどさぁ、未成年に飲ませようとするな」

レ《む？意外とソコはキッチリしているのだな》
ユ「さすがに線引きくらいは弁えてるわよ。……アンタどんな眼で私見てたのよ？」

ナイトホークさん

レ《そう言えばマスターは出てないな》
ユ「でも出てきても意味わかんないじゃないの。人員不足だからって服役中のヤツだすって意味わかんないし」
レ《まぁ、そうだかな。フェイト殿でも半年間は裁判だったらしいしな》
ユ「そうそう。それにアイツはこの事件には一切無関係だし。もう出てこないんじゃない？閑話くらいでしか」

49．WitH（後書き）

とりあえず、こんな感じでした。八神煌斗です。

やっぱり大学は忙しいですね。

帰ってきて直ぐに書いた分を軽くチェック、掲載。

した筈なのに気づいたらこんな時間でした。

ん～～……。

あ、とりあえず次回で定期更新は終わりです。

次々回からは不定期更新になります。

そして次回で、エピローグ！

いえ、終わりじゃないですよ？イベント一杯の三学期を書かないわけ無いじゃないですか。

マジックホール編、終了って事ですね。

まぁ、書いた感想などは次回。

後書きやキャラクターステータス掲載（予定）の時に一緒に書かせていただきます。

まだ書いてないけど、リクエストはレイラのアナザーだっけ？

まぁ、それでわ！

次回お会いしましょう！

50．第二部、エピローグ

「体重い～、頭いたい～……」
《相棒、そのうめき声やめてくれません？　なんだか呪われそうです……》

ベッド横の机に置いてあるアテナがそんな事を言ってきやがった。
因みにレイラはデバイス調整ルーム。
アングとの戦闘中に負傷、それが結構重要な部分だったらしく昨日から預けっぱなし。

「マスターを心配しないヤツなんか呪われちまえ」
《してますよ、毛ほどには》
「それだけ！！？　あ、叫んだらまた頭痛が……」

そして起こしていた体をベッドに沈める。
俺は今、六課の自室で静かに療養中でございます。

二日前……って、コッチじゃ一週間前か。
アングとの戦闘でコレでもかって程体を酷使した上に、封印魔法まで使った俺の体は色々ボロボロだった。

まぁ、言ってもアングにやられた時みたいに酷くはない。
既にユリアに調整はしてもらったから、今苦しんでるのは言うなら

魔力の筋肉痛ってヤツだ。

《まぁ、生きてただけで良しとしましょう。その痛みは代償と言う事で》

「お前……いい気味だ、とか思ってねぇか？」

《……今だから思えることですよ》

「やっぱり思ってんの！！？」

あの時、死にたくないって思った瞬間から俺の記憶は一度とんでいる。

次の記憶って言ったら、あの丘の森の中に居た。

すぐにはや姉の魔力を感じて丘を登ってはや姉に会った。

そんな感じ。

「でさ、俺が助かった理由って……本当にわかんねぇのか？」

《何度も言いましたが全て私の予想でしかありませんからね》

「だよなぁ……」

俺が助かった理由。

それは単にアインス姉さんのお陰、と言うのがアテナの予想。

俺の意識が壊れる一番の原因は、俺自身が耐えることの出来ないその魔力量。

それはあのウィズ（ダミー）も言っていたことだ。俺にもわかってる。

しかし俺は実際にココに居るし、記憶も確りある。
ここでアインス姉さんが関わってくる。

俺が受け止め切れない自分の魔力、そして奔流がアインス姉さんの中に流れ込んだ。
それはあの核が俺の魔力を吸い込み始めた、との事。

もともとアインス姉さんのユニゾン機能を復活させたのも俺の魔力だったからそれはあってもおかしくない、らしい。

その結果、流れ込んだ魔力を姉さんが調整してアテナが必要とする分を姉さんが随時吐き出し、俺が自壊することが無かった。

……ココまでは予想できる。だけどこの先が予想できない。
俺を含めアテナ、姉さんも五日間の記憶が無い。

一番に目が覚めたのは姉さんだったらしく、魔力を吐き出し、居場所を伝えたとか。
色々謎は残るんだけどな。

聞いたらはや姉は俺が倒れてた近くを通ったって言うし。

あぁ、そうだ。
噂のアインス姉さんだけど……。

「外まで声が聞こえていたぞ。もう少し病人らしく出来ないのか

？」

扉が開いて、そこに立っていたのはアインス姉さん。
この通り、確り存在していたりします。

コレも俺の魔力を吸い取ったお陰らしい。
まぁ、存在できているってだけで、戦闘は出来ないらしいけど。

「あぁ、いやコレはアテナが――」
《そうなんです。アインスさんからも何か言ってやってください》
「えぇ！？　そこれ俺！？　……あぁ、頭が」
「……なんだか二日酔いのようだな」

あぁ、言われちゃったよ。
それだけは考えないようにしてたのに……。

「なんなら水もいるかぁ？」
「いりません……」

アインス姉さんの後ろからひょっこり顔を出してからかって来たのははや姉。
その手には本当に水の入ったコップを持ってるところが確りしてる。

《その水を貰う相棒もチャッカリしてると思いますよ》

「同感だ」
「姉さんまで!?　ってかチャッカリ!?　確りじゃ無くて!?」
「それだけ声出せ取ったら、もう大丈夫やな」

両手を腰に当てて頷くはや姉。
いや、声出してるんじゃなくて出させられてるんだけどね。

特にアテナに。

《私ですか!?》
「やっぱ自覚無しかこの野郎!!」

「あー。それくらい元気やったら大丈夫やな」
「そうですね」

「ん?」

アテナと言い合ってるときに、はや姉とアインス姉さんが頷き合ってた。
あぁ、そうそう。

アインス姉さんはそのまま皆にアインスって呼ばれてて、アインス姉さんもはや姉の事を主って呼んでる。
呼び方についてはなんか色々有ったらしいけど、俺は知らなかったりする。
聞いても教えてくれないんだ。

って、そうじゃなかった。

「アインス」
「はい。主はやて」

はや姉が合図すると、アインス姉さんが俺に松葉杖を渡してきた。
俺は松葉杖と使って立ち上がる。

まぁこれなかったら少ししんどいだけで、歩けないって事は無いんだけどな。

「さ、キリキリ付いといで！」
「いやあの、俺まだ松葉杖馴れてないんですけど！？　置いてかないでくれませんか！？」
《相棒、それ私のセリフです！！》

あぁ、悪い悪い。

で、俺が連れてこられたのははや姉の部屋。

「……なに、これ？」

はや姉の部屋ではあったんだが、姉さんズは全員勢ぞろいしてるし、ＦＷ達も揃ってる。

だけどそれだけじゃない。

なんかずっごくキラキラしてるし、モミの木とか飾ってあるし、豪華な食事が一杯並んでるし。

うん。簡単な話、パーティー的な何か。

ってか確実にクリスマス会とかだ。ツリーあるもん。

てっぺんにサンタ坊かぶってるもん。

「あ、ウィズさん！」

両手に骨付き肉を持ったスバルが俺に気づいて声を上げた。

当然、そこに居たみんなの視線は俺に集まる。

「あー、スバル。色々言いたいことはあるけど……とりあえず行儀悪い」

「えへへ。だって美味しいんですよ？」

言われなくてもその幸せそうな顔だけで十分分かるよ。

分かるからスバル。

今は俺じゃなくて後ろに居るティアナに気づこうな。

「スーバールー？」
「うひゃぁ！？　テ、ティア！？」
「ちょっと来なさい！」
「え、え？　なんで？なんでえぇぇぇ！！？」

ティアナに耳を引っ張られながら、部屋の隅に連行されていったスバル。

多分お説教させるんだと思うよ。
仮にも上司二人の前にそんな格好で出てきたんだから。

「まったく、騒がしい奴らだな」
「ヴィータちゃん、口も周りに一杯ついてる」
「マジか！？」

ヴィータ姉さんとなの姉。

「もう歩いて大丈夫なの？」
「テスタロッサ、私がそんな柔な鍛え方すると思っているのか？」
「あ、それは……思わないです」

フェイ姉とシグナム姉さん。

「私がちゃんと面倒みてるから健康面は大丈夫ですよ」
「……俺が確り料理を作らせないようにしているから大丈夫だ」
「ザフィーラそれどういう意味！？」

シャマル姉さんとザフィーラ兄さん。

皆が俺の方に寄って来た。

「酒持ってこーい！！」
「バッテンチビ！　また一本開いたぞ！！」
「ユリアさん飲みすぎですー」

……向こうで顔を真っ赤にしてどっかり椅子に座ってる酔っ払いは別。
足元に転がってるビン、缶は数えない方向で。

つーかお前飲めたのか……。
いや、どっちかって言うと……飲まれてる？

「体は一応一人でも歩けるくらいには回復してるんだけど……なにこれ？」
「なにって、パーティーや。クリスマスパーティー」
「いや、だから……なんでこの時期に？」

今日は確か２７日だろ。
時期的には正月準備の方が大事だと思うんだけど……。

「そやな。最初は餅つき大会も候補にあがってたんけどなぁ。今年は買って済ますことにしたんや」
「まぁ、イベントがどっちだったかはこの際いいんだけどさ」

俺が聞きたいのは何でイベントを開きたくなったか。
そっちなんだよなぁ。

いや、はや姉も分かっててそう答えたんだろうけどね。
だっていつものニヤニヤした表情だもの。

「ホンマの事を言うと……ウィズ、アンタのせいや」
「……俺？」

指差されて、つい聞き返した。
他の姉さんたちを見ても何も言わないで頷いただけ。

えー。
なにこの疎外感。

「ウィズ、コッチに来る前言ってたよね。ミッド（こっち）でも

パーティーしたいって」

そんな時、口を開いたのはフェイ姉だった。

「あー……そう言えば」

これは姉さん達が全員ミッドに渡ったときだ。
俺だけ一つ違うお陰で一年間ミッドに来るのが遅れた。

まぁ、それでも、姉さん達は入局一年目だったから忙しかったけど、時間はあった。
だからイベント事の度に地球に戻ってきてくれていた。

確かそん時に言った気がする。
それも俺が入局直ぐにあの二年間に入ったからそれも叶わなかったけど。

……あ。

「もしかして、それで？」

また皆頷いた。

「今では皆忙しいからな。今年逃したら出来るか分からないと言

うのが本音だがな」
「昨日帰ってきてはやてやなのは達が頑張って作ったんだからな」

シグナム姉さんにヴィータ姉さん。
ヴィータ姉さんは最後に「アタシも手伝った」とか言って腕組んで何度も頷いている。

「ありがとう」

素直にお礼を言う。

だって、嬉しいじゃん。
ソコまで捻くれてないつもりよ？

そして暫く皆と話して、皆はまた各々散っていった。
まぁ、散って行ったって言っても部屋の中だからそんなに離れてないけど。

ちなみにアテナもシャーリーさんがレイラと一緒に持ってきたアナザーで飛んでいった。
何でもレイラも前で旨そうに食べてやる、とか言ってた。

いい性格してるよ、本当に。

「ウィズは椅子とか有ったほうがええよな？」
「あ、うん。ありがとう」

はや姉が椅子を持って来てくれた。
正直歩けるだけで体は本調子じゃないからマジで助かりました。
俺は持ってきてくれた椅子に座って、ため息を一つ。

「疲れたか？」
「ん？　まぁ……そう言う訳じゃないけど……」

俺のため息が聞こえてたのかはや姉がそう聞いてきた。

「去年まではこんな事出来るなんて思ってなかったからさ。なんて言うか、信じられない。みたいな」

あの二年間は殆ど毎死ぬか生きるかの中で戦ってたからなぁ。
実際自分で言ったことも忘れてたくらいだし。

「……ウィズ。その事やねんけどな」

はや姉の口調が少し変わった。

「六課解散したら、私の部下に付かへんか？」
「……は？」

なんて事を言ってきた。

「私な、特別捜査官に戻ろうと思ってんのよ。それで、捜査官補佐って形でどや？」
「いや……どや？　って言われても……。嬉しいんだけどさ、何で俺？」

俺なんかよりもっと良い人材なんて腐るほど……とはいかなくても居る。
そもそも、この六課。
巷じゃ奇跡の部隊なんて言われてるんだ。

多分はや姉が一声かければ、何人も募集してくるだろう。
それも俺より優秀な人が。

「ん～。まぁ私の我侭、くらいに思っておいてくれたらええわ」
「我侭、ねぇ」

背もたれに深く背を預けて考える。

シグナム姉さんに言われたときから進路については考えていた。

正直に言って、はや姉の下に付くことも考えてた。
俺にとっても凄く魅力的な提案。
でも……。
なんでか分からねぇけど、心のどこかでそれでいいのかって思ってる。

「ゴメン。少し考えてもいいかな？」
「謝ることあらへん。むしろ即答しなかった分逆に安心したわ」
笑って、俺の頭の上に手を乗せて言ってくれたはや姉。

「で、コッチは即答して欲しい事やねんけど……」

手を退けて俺の前まで移動、椅子に座って低い視線を合わせる為にしゃがんだ。

「無茶するのは良え。でも、一人命賭けるんはもうせんといて」

かなり真剣な声、そして表情。
回りの賑やかな声も一瞬聞こえなかった。

「ええか？」

「……うん。分かってるよ」

俺だってあんな思い二度としたくない。
あの意識が薄れていった時の事を思い出しただけでも背筋はゾッとするし、まず思い出したくも無い。

あの二年間より、もっと恐ろしかった。

それに……。

「よし、ええ返事や！　ほんなら、ご飯食べに行くで！」
「ちょっ、俺まだ上手く動けないんですよ！？」
「関係あらへん！」
「マジですか！！？」

俺は、まだはや姉の横に立っていたいから……。

ウィズの小部屋

ＺＥＲＯさん

ウ「いや、まぁ……姿を眩ませたのはゴメンなさい」
ア《おや？珍しく素直ですね？》

ウ「さすがにコレ言われたら何にも言い返せねぇからなぁ」
ア《確かにそうですけどね。とりあえず、おめでとうの言葉、ありがとうございます》
ウ「これからは何とか頑張っていきます」

Ｎａｋｉさん

ウ「正直ボロボロにはなったけど……帰ってきた実感はあんまりないんだよなぁ」
ア《私もそうですが記憶がすっ飛んでいますからねぇ》
ウ「だよなぁ。アースラに戻ったときのみんなの驚いた顔が忘れられない」
ア《にしてもランさんは強いですね》
ウ「アレ強いのか？いや、確かに眠らせてるけどよ、アレは不意打ち……」
ア《まさかぁ、アレは手が滑っただけでしょう。私もよく手が滑って相棒の寝顔を配信しています》
ウ「配信！？姉さん達じゃなくて！！？」

沫乃憂谷さん

ウ「おぉ！？なんかカッコイイぞ！」
ア《確かに字余りですが……で、相棒は何で喜んですんですか？》
ウ「ん？だってカッコイイ五七五が着たんだぞ？」
ア《何言ってるんですか。あれは私へのメッセージですよ。ほら主人公って》
ウ「ココに来てまでそんな事言うか！！？」
ア《あ、出演の方は全然ＯＫですよ》

ウ「話きいて！？」

翡翠さん

ウ「久しぶり」
ア《心配かけたことに対してはちゃんと謝るべきですね。頭地面にこすり付けて》
ウ「え、ソコまでしないとダメですか！？」

ＴＯＵＤＡさん

ウ「うぁ、メッチャ酔ってる」
ア《相棒相棒、私もお酒というのを飲んでみたいです》
ウ「いや、お前デバイスだろ。味なんてわからんだろうが」
ア《いえいえ、アナザーならちゃんと味覚機能付いてるんですよ》
ウ「まじで！？何でそんなにアナザー無駄な機能が多いの！？瞬時武装変更システム削ってまで！！」
ア《必要だからです！》
ウ「どこがですか！！？」

ウ「と、いう訳でお陰さまで第二章、完結いたしました」
ア《本当にありがとうございました》
ウ「思えば俺も強くなったもんだ」
ア《ま、最後には元に戻ってましたけどね》
ウ「……チクショウ、アレくらい強かったら姉さんとも良い勝負できただろうに」
ア《無理でしょう。威圧されただけですくみ上がるのがアチですよ》

ウ「ぐっ、ぐぅ……」
ア《それでは皆さん、次回からは不定期更新になりますが、ゴメンなさい》
ウ「これからも応援してくれな！第二章は完結したけど、この小説はまだ続くから。それじゃ！！」

50．第二部、エピローグ（後書き）

次の後書きにて書かせていただきます。

後書き

こんにちは、八神煌斗です。

番外編除いて全５０話。
大体一話は５０００前後だったので一週間で１５０００は最低でも書いていた計算です。
……なにやってでしょうね。

そして、一部を合わせるとなんと、９９話。
自分でもよくこれだけ続けられたな、と驚くばかりです。

これも全部、皆さんのお陰です。
感想を呼んだり、お気に入り登録が増えたりするのが嬉しくって。
本当にありがとうございました。

※ウィズとアテナについて

ウィズとアテナが生まれたのは【他の小説に無さそうな感じ】で行きたい、という考えからでした。
そこで上げた点が

主人公
1．中々勝てない（強くない）
2．頼りない
3．物語本編イベントに全て首を突っ込む訳じゃない

4．フラグ乱立しない

デバイス

1．マスターを敬わない（立てない）

2．表情豊か

3．マスターにかなりの頻度で自身をアピールする

と、こんな感じでしょうか。

主人公、ウィズに対しては呼んだとおりです。

最近は特にですが、私がここに顔を出した頃から【主人公最強！】【ハーレム】モノが多かったです。

イベントに関しても何故か達観していて、全て首を突っ込む。

ハッキリ言って「何で違うものを書かないで同じもの書くの？」見たいな感じです。

なぜ回りと差別化しないのか。不思議で仕方ありませんでした。

ソレが悪いわけではないです。貶しているつもりもありません。

しかし、正史ではオレ主が居なくてもなのは達は事件を解決できます。

なのになのはたちを弱体化させて、主人公の見所を！と言うのが少しあれだったんです。

気づいていますか？

ウィズが一期で本格的な介入したシーンって、アグスタと「頭ひやそうか」辺り、聖王教会、六課襲撃、ゆりかご周辺戦、だけです。

リニアでは全部終わっていましたし、ティアナが無茶する理由も知

らなければ朝練を手伝っても、止めても居ません。
ヴィヴィオとは六課に来て初めて会いましたし、聖王ヴィヴィオとは戦っていません。

個人的には適度な感じに出来たかな、と。

因みにフラグも二期ではやてにその片鱗を見せただけですし。

【世話の掛かる】主人公。
こんな感じで構成していく内に今のウィズが完成しました。

因みにアテナは説明するまでもない……ですよね？
まぁ、あんなに人気が出たのは自分でも想定外でしたけど。

で、一期とは別に二期でウィズを中心に話を広げました。
なので言うまでも無く、活躍するシーンや葛藤、成長などがメチャクチャ多いです。

特に成長、精神面では一回り二回り大きくしたつもりです。

フェイトでも自分の生まれを１０年経っても、スカリエッティに指摘されて動揺したんです。
そんな数ヶ月で自分の事に整理できるわけ無いだろう、と思って混乱もさせました。

それでも、なのは達だけが戦っているところもありますけどね。

不評だったのが少し残念。

さて、それでは今まで付き合ってくれた皆さんありがとうございました。

いえいえ、まだ終わりませんよ、六課解散までは続けます。
定期更新でなくなるだけです。

それでは皆さん、本当にありがとうございました！
そして、これからもよろしくお願いします！

51．大晦日、かくし芸大会

「……出遅れた」
《今回は特にヘタレが影響しましたね》
《……ハァ》
「……」
《重症ですね》

ただいま俺は自室にて頭を抱えている。
それはもう俺人生最大の危機だ。

ごめん、それは言いすぎた。

行き成りだが俺の抱えている問題。それは今日と言う一日に要約される。

今日は地球で言う大晦日。
こんな特別な日をはや姉が放っておくはずも無く、案の定開かれたイベント。

その名も【大晦日・大かくし芸大会！ポロリは自己責任】
後半は意味が分からないが、名前のとおりかくし芸を疲労しなければならない。

条件は一つ。
二人一組であること。

ここまで言ったら分かるだろう。
組む相手が居ない！
因みに参加しない、と言う選択肢は無い。
「参加しない人は……フフッ」

ムリムリムリ！！

《あぁ、相棒の首がすごい事に……》
《何かが降りたか？》
「お前ら、少し黙ってろ」
《あ。相棒ダメ。その眼はダメ》
《む……むぅ》

俺のことを考えずにペチャクチャ喋るデバイスに注意をして再び考える。
そ、その時部屋をノックする音が聞こえた。

こんな時にいったい誰だよ、と思いながらも姉さんズだったら後が怖いので直ぐに扉を開ける。
そこに居たのはやっぱり姉さんズだったんだけど……。

「どうしたの、フェイ姉？」
「ウィズ～～……」

なぜか居たのは涙目のフェイ姉でした。

「俺と組んで欲しい？」

「うん。お願い！」

何故か。

皆もそうだと思うが、元々なの姉と組む気だったらしいのだが。
少しビックリ。ヴィヴィオと組んだらしい。
確かに言われたらその組み合わせも有るけど……予想ＧＵＹです。

そしてフェイ姉は俺と同じく出遅れ、シグナム姉さんを筆頭にパートナーが居るので断られた。
俺が最後の砦だったらしい。

最後、と言うのが少し気になるけど……正直助かりました。
俺も自分の状況を話し、自分でも予想してなかったフェイ姉と組むことになった。

「で、何にする？　かくし芸だから一発芸とかはしなくても良いと思うけど……」

「そもそも俺たちが一緒にできそうな事がそんなに無いような……」

「ん～……剣舞？」
「ごめんなさい、勘弁してください」
「土下座……そこまで？」

絶対に模擬戦になります、はい。
五体満足で新年を迎えたいんです。

その後も特に案は出ずに時間だけが過ぎていく。
この二年そういう事からは離れてたから俺は特に出てこない。

そんな時突破口を開いたのは、アテナだった。

《そういえばフェイトさんは歌が得意ではなかったですか？》
「え？　私そんな得意じゃ……」
《でも１０年前のお花見では歌を披露してましたよね？》
「う……」

ああ、そういえば。
フェイ姉達と出会って最初の春、全員集合でお花見をした。
その時に確か歌ってた。

ふむ。方向性が見えてきましたよ？

そして時は進み――六課食堂。

立食パーティーの様に各テーブルに料理が乗っていて、各々好きなようにしている。
そして一番の上座には特設ステージと【大晦日・大かくし芸大会！ポロリは自己責任】と何となく滑った感じの幕。

さて、好きなようにしていると言ったが、殆どが二人一組。
かくし芸のネタ合わせをしているんだろう。

こうしてみると誰が誰と組んでるか大体わかる。

WFはスターズとライトニングに分かれてるし、シグナム姉さんはヴィータ姉さんと。
はや姉はリィンでシャマル姉さんはザフィーラ兄さん。

で、俺のパートナーのフェイ姉だが……今はここに居ない。

もう予想も付いているだろうから言うが、舞台衣装を急ピッチでレイラとバルディッシュとで構成中。
なんでレイラかって？
あいつ黒が好きだからその辺のデザインは上手いんだ。
逆に白ならアテナだけど。

『さて、みんな！　楽しんでるかー？』

はや姉はいつの間にか舞台に上がっていて、マイクを握っていた。

『さて、そろそろエエ頃やしかくし芸大会、はじめるでーー！！』

「おーーー！！」

六課の皆もいい感じに出来上がってるな。
こんな時に襲撃されたら――いや、大丈夫だろうな。
逆に怒りに任せていつも以上の戦績をあげそうだ……。

「お、トップバッターは行き成りライトニング組か」
《何でも漫才をするらしいですよ》

……はや姉の入れ知恵だろうな、絶対。
なんて考えている内に、漫才は始まった。

「この書類ホントに重いわー」

……関西弁？

「あ、キャロ。重そうだね。僕が持ってあげるよ」
「そんなええですよ」
「そんな事言わないで。ほら」
「あ、ありがとう」
「いいよ。キャロの為に何かしてあげたかっただけだから」

それを聞いたキャロは少しエリオから離れ……

「ほれてまうやろーーーーー！！」

キャローーーー！！？
なんてネタやってんだ、アイツ！
フェイ姉がいたら確実に泣くか何処かに行っちゃうよ！？
はや姉……あぁ！　ニヤニヤしてる！？　犯人だな絶対！！
地球出身組みは唖然としてますよ！？

《一枚殻を破った見たいでしたね》
「俺はキャロが元ネタを知らないことを願うばかりだな……。で、次は？」
《暫くは相棒と関係が薄い……あ、二組空いてスターズ組の二人ですね》
「ならそれまでは飯でも食ってるか」
《私も食べたいですー》
「無理だろ」
《アナザーと取りに行きましょう！》
「イヤだ、メンドクサイ」
《バッサリですね！！？》

そんな事を話してる内に、スターズ組の番になったんだが……。

「なんで怪獣？」
《しかもスバルさんが別に居るということは……》
ティアナか。
何でアイツが怪獣のきぐるみなんか……あ。恥ずかしいから顔まで隠してるのか。
アイツの事だからスバルに押し切られた、とかその辺だろ。
「出たな怪獣！　このスバルーマンが退治してやる！」
「ガオーー」
……ティアナ棒読み。絶対に中で顔真っ赤にしてるんだろうなぁ。
あとスバル。【マン】だと男だからな。
「食らえ！　ロケットパーンチ！！」
そう叫んで突き出した右手はスバルから離れ……って！？
「ギャーー！！？」
文字通りロケットパンチは怪獣の頭部に直撃。
マジっぽい悲鳴を残してその場に倒れた。

でもそんな事より……。

「何で手が飛んだの!?」
《相棒。よく見てください》
「ん？」

アテナに即されて改めてステージを見る。
そこにあったのはスバルの手……もとい、リボルバーナックルが一つ。

母さんの形見だったんじゃ？

と言うかティアナがさっきから打ち上げられた魚みたいにピクピクしてるんだが……。

大丈夫なの……あ！　シャマル姉さんが動いた！
担架まで来た!?

《なかなか楽しい宴会ですね》
「俺はもう先を見るのが怖くて仕方が無いけど？」

とまぁ結局、俺の予想は大きく外れることは無く――。

――なの姉ヴィヴィオペアでは緊張したヴィヴィオを笑った局員を

桃色の砲撃が襲い

――シグナム姉さんとヴィータ姉さんペアは演舞が戦闘に移行。隅で正座。

――はや姉リィンペアはアウトフレームで出てきたリィンに向かってはや姉が「大きくなっちゃった！」と言ってその場を冷却

――シャマル姉さんとザフィーラ兄さんは、火の輪潜りで兄さんに引火。

《ザフィーラさん。人間形態になったとき、ハ――》

「それ以上いうな」

さっきすれ違ったけど、あんな眼をした兄さんは始めてみた。

シャマル姉さんが後ろで必死に誤ってたけど一切聞こえてないみたいだったしな。

「ん？　そういやユリア見てねぇな……。アインス姉さんも」

《あぁ、それなら向こうに居ますよ》

アテナに言われた方を見る。

「ほらぁ、アインスも飲みなさいよぉ～～」

「いや、私は遠慮しておこう。それよりそろそろ私たちの番だが

？」
「んなの関係ないわよ！　私はまだまだ飲み足りないんじゃーー！！」
「……はぁ」

……絡み酒。
しかも酒癖ワリィなアイツ。

ん？
アイツこの前も飲んでばっかでべべれけになってなかったか？

いや、気にしたら負けなんだろ、うん。

『ウィズ……』
「あ、フェイ姉」

ユリアから目を逸らして、音楽データの確認をしていると、通信が入った。
モニターに映っているフェイ姉は顔が真っ赤です。

「どしたの？　……まぁ、何となく予想できるけど」
『そっち行くの恥ずかしいから、出てきてくれない？』
「……後で全員の前に立つんですけど？」
『うぅ～～……』

あ、通信切れた。

「大丈夫なのかよ？」

《とりあえず迎えに行きましょう。そろそろ順番なんですから》

「だな」

そして食堂から少し離れ、フェイ姉が居るはずの部屋に入る。

……まぁ、言葉をなくしましたよ。

いつもストレートに下ろして先の方で纏めている髪はボニーテイルにしている。

バルディッシュとレイラの合作だろう黒が基本色のカジュアルと言うかワイルドと言うか……。

袖なしヘソだしの上着に、ミニパンツ。

ニーソクッスに手袋。

……うん、やっぱりワイルドって方が似合ってんな。

「ってか良く着たね、それ」

「……バルディッシュとレイラがこれ以外作らないって」

デバイスに脅されたと。

いや、俺が言えたことじゃないんだろうけどね。

「じゃぁ最後に合わせとこうよ。一回しか合わせてないからさ」

「うん。そうだね」

俯いていたフェイ姉も気持ちを切り替えて、両頬を軽く叩いた。
俺はこの為にアテナにプログラミングしたソフトを起動させようとして……。

《お二人さん？　やる気になったところで本番ですよ？》
「マジか！！？」

時間が来たようでした。

「うおおおおぉぉぉぉ！！！」

うん。上の誰かの叫び声。
それを何倍にもしてくれ。それくらい、男共が叫んでる。
六課にこんなに男が居たのかってくらい叫んでる。筆頭はヴァイスさん。

それに加え女性局員もキャーキャー言ってるもんだからフェイ姉の顔がまた真っ赤になったんだよ。

《……とりあえずプログラム起動しておきますよ》

「……うん。よろしく」

元に戻るのを待ってたら新年迎えそうなのでアテナの音楽プログラムを起動。
俺の脇辺りの高さに俺を囲むように半透明の鍵盤が現れる。

コレがさっき急遽組んだプログラム。
って言っても元々あの二年間に数少ない俺の娯楽として作ってたから大きなプログラミングはしてねぇけどな。

……誰だ、プログラミングが娯楽なヤツは根暗って言ったの。

《私です》
《私は思っただけだ》
「お前らか！！？」

チクショウ。最近はそうでもないんだぞ。
昔は色々あったんだよ、色々。

多少気分は落とされたが、逆に会場はフェイ姉のお陰で最高潮。
俺は鍵盤に手を添える。

「フェイ姉。始めようか」
「う、うん」

フェイ姉も多少顔は赤いままだが、マイクを握って深呼吸。
俺はそれを確認して、音楽をかなで始めた。

始めは前奏。
そして……フェイ姉の歌が重なる。

フェイ姉の唄は優しく、激しい。
俺は演奏についていくだけで精一杯だ。

何とかしてフェイ姉にあわせる。

だけど次第に焦りが出てくる。

フェイ姉の唄についていけてるのか。
あの優しさに、そして激しさに俺は付いていけてるのか。

そのときだった。
視線を感る。その先を見るとフェイ姉が俺の方を見て微笑んでくれた。

あぁ、何だ。
急に方から力が抜けた。

そして、演奏が終わる。

一瞬の間。
そして爆発するような歓声が沸きあがった。

その後、当たり前のようにアンコール。

二曲ほど歌った後、ステージを降りた。

「やったね、ウィズ」

「うん。フェイ姉もお疲れ様」

結果、俺とフェイ姉ペアは見事優秀賞を獲得した。

したのはいいんだけど……。

はや姉に声をかけられて六課の隊舎から出たときだった。

ここは都市から少し離れてるお陰で星が良く見える。

寒い風に晒されながら、はや姉から聞かされた言葉は俺を拍子抜けさせた。

「え？　もう年変わってるの？」

「そやで？　フェイトちゃんが歌ってる……二曲目のときやったかな？」

はや姉から既に年が変わって事を聞かされました。

「うわぁ……。なんかイヤだ」

気づいたら年が変わってるとか、寝て年を越すのと変わんねぇし……。

「そんな事いわへんの。ウィズ。あけましておめでとう」

笑いながら手を差し出してきたはや姉。
新年の挨拶で握手もなんだか編だなって思いながらも俺は……。

「あ、うん。おめでとう」

はや姉の手を握り返した。

ウィズの小部屋

ウ「お久しぶりです、始まりました六課解散編」
ア《とは言っても大きな事件なんかは無いと思うので日常編と言っても間違いじゃないですけどね》
ウ「まぁ、間違ってねぇけど……。とりあえず今回はあんまり話す内容も無いからコメ返し！」

ＺＥＲＯさん

ア《確かに頼りないですよねぇ。クリスさん?にも勝てないんでしょう?》
ウ「いや、その前に戦う気なんてサラサラないし。なんで戦ったらなんてなってんの?」
ア《さぁ?とにかくクリスさんには負けるそうですよ》
ウ「負ける負ける言うな。戦わないんだから関係ないし」
ア《……なんかヤケになってません?》
ウ「……なってません!」
ア《なんですか今の間は?》

秋風さん

ウ「第三部は話聞かねぇなぁ」
ア《書きたいとは言ってるらしいですけど、ネタが無いらしいですからねぇ》
ウ「ま、暫くは解散編だから焦る必要は無いんだろうけどな」
ア《そう言ってるうちに時間は過ぎていくんですよ?》
ウ「なんで俺に言うかな!!?」

Ｎａｋｉさん

ウ「あ……ラディアル中になったのか。ご臨終です」
ア《ご冥福をお祈りします》
ウ「……俺までこんなノリでいいのか?」
ア《いいんですよ。で、ユリアさんは本当に飲みますよねぇ》
ウ「そのクセ次の日にはケロッてしてるけどな。意外な一面ではあった」

ア《そうですか？私は何となくイメージ通りでしたけど》
ウ「これからも飲み続けるんだろうなぁ……」

翡翠さん

ア《あー、事件を期待してますね。どうします相棒。死にます？》
ウ「行き成りソコからですか！！？」
ア《だってやり尽くした感ありますし。あとは相棒が死んで私が摩り替わって……》
ウ「イヤだよ！絶対に死なないからね！！」
ア《えー……》
ウ「そんなにかこの野郎！？」

灰色の野良猫さん

ウ「あの話？何のことだ？」
ア《……さぁ？私のデータバンクにも記録はありませんし……》
ウ「むぅ。謎だ……。気になる」
ア《私たちは干渉できませんからねぇ。気になる方は向こうに顔を出してみてください》
ウ「でも何だろう。無性にお礼が言いたい」
ア《奇遇ですね。私もです》
ウ「ありがとうございました」

51．大晦日、かくし芸大会（後書き）

お久しぶりです、八神煌斗です。
思ったより文章がかけません。
忙しすぎる……。

ま、言い訳はさておき、今回は特に間を空けず大晦日の話です。
フェイトあたりは完全に声優ネタ。
一回どこかでやってみたかったんです。

ウィズのプログラミングはあの二年間で娯楽がアテナくらいだったのでそれに適当に作ったプログラムを保存してた、って所ですかね。

ユリアは……何も語るまい。
こういうキャラなんですよ。

こんな感じですかね、今回の話は。
あ、キャロはＣＭとラジオネタです。

それでは次回は正月ネタかなぁ……。
出来るだけ早く更新したいと思います。

それでわ！

52．ユリア・過去と今

ユリアｓｉｄｅ――――――――――――――――

私は直感的にこれは夢なんだと理解した。

その夢を見れた事に嬉しさ半分、悲しさ半分ってところ。
だから見たくないってのも少しあったんだけど……見たくて見れるものでもないし。

私は見る事にした。

……意識は、気づいたらあったって感じだった。

でも私は、それが意識って事にも気づかないで、ただユラユラと映るものを見ていた。
本当にそれだけ。

私に自我が芽生えた時の事は今でもハッキリ覚えてる。
突然、私を常に囲んでいた液体が水位を下げて、生態ポットから出だ時。

肺に溜まった水を吐き出すため、地面にへたり込んで咳き込んでいたとき。

私にコートをかけてくれた女性研究員が一人いた。

「大丈夫？」

その顔を見て走馬灯のように、私に自我と記録が目覚めた。

「――っ！」
「え……つっ！」

ソコからの行動は早かった。
私はその局員に飛び掛り、馬乗りになって両手で首を絞め始めた。

「アナタ……どういうつもり？」

それが、私がお母さんに始めて口を聞いた言葉だった。

「どういう……って……」

アリヤは苦しそうな表情をしながらも私の問いに答えようとする。
幸い、ココにはコイツ以外誰もいない。

私にある記録が本当なら、ココから逃げることは簡単だし、目の前

の局員を殺すことも分けない。

でも直ぐには殺さない。

せめて、言い訳位は聞かせてもらわないと割に合わない。

謝る？　……殺す。

命乞い？　……殺す。

逆切れ？　……殺す。

私の頭の中にはコイツを殺すことしかない。

生まれたことに感謝？

ふざけんじゃないわよ。そんなのはね、純粋な生まれ方をしたヤツが言えるセリフよ。

クローン、しかも記憶まで受け継がせて……生まれたその瞬間から背負わされるなんて真っ平ゴメンだわ。

「なにか言いなさいよ。私の気が変わるかもしれないわよ？」

そんなつもり一切無いのに、言った。

今思ったら私は、命乞いしてくるのを期待していたのかもしれない。

それで少しは自分の方が優れているって思えると思ったから。

でも、それは……。

「私を殺すのは構わないけど……。むざむざヤられるつもりは無いのよ」
「っ！　バインド！？」

お母さん、アリヤの首を掴んでいた両手が引き剥がされて宙に固定された。
その隙にアリヤは抜け出し私から距離を開く。

「……こんな、もの！」

だけど、結局は【私が作った】バインド。
私はバインドを解き、両手の自由を得た。

……けれど。

「そういかせるモノですか！　ってね」
「！？　またっ……」

だけど再び、今度は両足にもバインドが仕掛けられて身動きが取れなくなる。

「くっ……」

「あら、もう終わりなの？」

睨む私に、右手を向けて聞いてくるアリヤ。
聞いてきてるけど、意味は真逆……よね。

私がさっき両手分のバインドを解除している間に両手足分のバインドを作り出した。
最初のバインドにしたってそう。
私の手を捕まえた後で、バインドごと場所を移動させた。

私とアリヤは同じ辞書を持ってる。
けれどその辞書を使ったことが無い私には使い方が分からない。

今のままじゃ、勝てない。

「ふぅ。私、戦闘は苦手なんだけどな……」
「よく言うわよ。コレだけの事をしておきながら」

手を下げて深く息を吐いたアリヤに私はまた皮肉を言った。

「それとこれとは別よ。大体、あなたの方が若干だけど私よりも優秀なのよ？」
「ウソね」
「ウソじゃないわよ。私をもう一人作るより少しでも有能な方が……あ」

言葉の途中、目線を逸らして気まずそうな表情になったアリヤ。
私に向けていた手も宙を泳いでる。……今なら簡単に逃げられる気がする。

「もしかしなくても、気を悪くしたわよね？　今の、聞かなかったことにしてくれない？」

多分私の方が優秀だって事も機密だったんでしょうし、私が聞きたくないこともポロッと言っちゃったみたいだけど。
それをいっぺんに言うのはどうかと思うわよ。

「……アナタ、結構マヌケ？」
「うぐ……」

悔しそうな顔。
私はその顔を見て、笑った。
理由なんて分からなかったけど、なんだか面白かったから。

その次の日からだった。

アリヤは毎日私の所に顔を出して、私が襲い掛かる。
まぁその度に返り討ちにあってたんだけど……。

それからよ。

気がついたら私はアリヤが来るのを今か今かと待ちわびるようになって。
これまた気がついたらお母さんなんて呼んじゃって。
お母さんの事が凄く好きになってた。

「ねぇ、もっとマシな服は無かったの？」
「え？　そ、そんなにダメかな？　結構良いと思ったんだけど……」

でよ。
お母さんの服のセンスは私には合わなかった。

それはもう白と黒くらいまったくの逆方向で。

記録にある……ウィズ？の服装もダサくは無いんだけど……私なら着せない服ね。
あんな白が基本なんかじゃなくて紫とか黒とか。

そっちの方がイカスでしょ？

「ま、いいけどね。それで今日はなに？　服を渡すために着たんじゃないんでしょ？」
「あ、やっぱり分かる？」
「当たり前でしょ。私はお母さんなんだから」

「……その言い方あんまり好きじゃないんだけど？」
「良いじゃない。私は良い意味で使ってるんだから」

今はお母さんを殺そうなんて思ってない。
もうお母さんＬＯＶＥ。お母さん命。
自他共に認めるマザコンだからね、私は。

「じゃ、早速。ユリアちゃん？　その喋り方、やめない？」
「……は？」

私の予想の斜め上の用件。
また実験やら何やらだと思ってたんだけど……喋り方？

「なに？　実験に不備でもでるの？」
「そう言う訳じゃないんだけど……ユリアちゃん、自分の外見年齢知ってる？」
「１２歳でしょ？」

そう。私がいくらお母さんの複製品だからって全てが一緒な訳じゃない。
見るからに違うのがその見た目。
お母さんは……詳しくは知らないけど２０代前半位。
でも私は何でかこんな子供の体をしてる。

「しかたないでしょ。中身は十分すぎるほど記録もってるんだし」
「私が落ち着かないの。ねぇ、２０歳に成るまででいいから、ね？」
「ね？って言われても……」

８年間もそんな喋り方したらそれが普通に成っちゃうじゃないの……。

でもねぇ……。
そんな眼で見られたらスッゴク断りにくいんだけど。
ん～……。

「わ、私。お母さんの事、大好きだよ！」

「ゴメンなさいユリアちゃん」
「そんなに！！？」

お母さんが遠い眼をして私の肩に手を置いてそう言った。

「喋り方はユリアちゃんの好きにして良いからね？」
「だから！　私そんなに似合わなかった！？　地味に傷ついたんだけど！？」

そりゃ可愛いって言われても嬉しくないけど、似合わないって言われるのも凄くイヤよ！
遠い眼って……そんなに似合わないの！？
……頑張ったのに。

「あ、ユリアちゃん！？　落ち込まないで！　私が悪かったから！！」

もういいわよ。
絶対に、二度としないから。

「ゴメンね！　本当にゴメンね！！？」

「……そーいえばあんな事もあったっけねぇ」

ベッドに寝転んだまま、呟いた。
あの少し後に反乱が起きてウィズを守って、見たいな事を言われた

んだっけね。

今の生活も楽しいけど、あの頃はあの頃で楽しかったわよね。
服の趣味は最後まで平行線だったけれど。

……にしても。

「頭痛い……」

さすがにココ最近は飲みすぎた気がするけど……。

お母さんはそれなりに飲めた筈なんだけどなぁ。
やっぱりこの辺も慣れなのかしらねぇ。

フラフラする頭を抱えながらベッドから出て鏡を見る。
……酷い顔。

って言っても私化粧品なんて一つも持ってないし。
どうやって誤魔化すかなぁ……。

仕方ない。
悩んでも仕方ないから魔力で残ったアルコールを魔力で洗い流す事にした。

「うん。少しマシになった」

少し強引だったけど、結果オーライって事ね。
後は服に着替えて……。

「は？」

クローゼットを開けて、柄にも無く私は思考を停止させてしまった。
だって、クローゼットにしまってた筈の私の服がはやてから貰った制服も入れて全部消えてたから。

もしかして私酔って捨てちゃった？

……いやいや。私はどれだけ酔っても記憶は跳ばない。
実際機能はちゃんと自分で寝巻きに着替えて布団に……って昨日私が脱ぎ捨てた分までなくなってるじゃない！！？

「今あるのはこの寝巻きだけって……ん？　ナニコレ」

自分の着てる寝巻きを見て視線を下に動かしたとき、大きな何かを包んだ紙と一枚の手紙を発見。

紙の方は広げてみると鮮やかな紫色の布が入ってた。
コレが何なのか気になるけど、一端置いておいて手紙の方の中身を見る。

【やっぱ正月と言えばコレやろ！　着方が分かれへんかったら呼

んでな！】

「……はぁ」

はやて、普通に考えて来れって不法進入よ。分かってるのかしら？
訴えても全然大丈夫よね？

「で、そもそもこの布切れなんなのよ。随分上物っぽいけど……」

このタイミングだと服なのかしら？
いやでも袖は大きいし、長い別の布はあるし……。
ん？　コレは同じ……いや、ちょっと違うわね。

色々広げてみたけど、逆に謎が増えただけだった。
多分私にはコレの謎は分からない。

だから素直に呼ぶことにした。

「ユリアちゃん、どうしたの？」

そう。私が呼んだのはなのは。
この前一緒にケーキを作った辺りから仲良くなってるのよね。

はやてよ呼ぶのはなんだかシャクだった、って言うのもあるけれど。

「それがね、はやてが私の服全部持って行っちゃったのよ」
「そ、それはまたはやてちゃんも大胆だね……」
「本当よ。それでね。変わりにソレが入ってたんだけど……」

そう言って私はベッドに広げた布切れを指差した。

「わっ！　ユリアちゃん、着物をそんな風に扱っちゃダメだよ！」

布切れを見た途端、慌てて布切れを広げなおすなのは。
そしてシワが出来ていないかとか、調べてる。

「着物？　着物ってなに？」
「ユリアちゃん、知らないの？」

とりあえず頷いておいた。

説明を聞いたんだけど、纏めると日本で正月に着る服、って感じだったかしら。
日本独特の文化、ね。
そりゃ知らない訳だわ。

で、今はなのはに着付けって言うの？
それをやって貰ってる。

「えっと、確か右が前……だっけ？」
「そんなのも関係あるの？」
「うん。和服は大体そうなんだ」
「へぇ～……」

そんなのどっちでもいいと思うんだけどねぇ。
日本人も変な事にこだわるのね。

その後もなのはは所々忘れてたみたいだけど、何とか私は着物を着ることが出来た。
帯？　を少しキツメに結んでるから少しキツいし、歩きにく事に眼を瞑ればそんなに悪くは無い。

「ねぇなのは。裾、切り落としたらダメ？　動き難いんだけど」
「ダメだよ！？」
「……膝下まででいいから」
「だからダメだよ！　どこまで切るつもりだったの！！？　今でも十分似合ってるから！　ほら、鏡見てみよう！」

似合ってる似合わないの問題じゃないんだけど。

焦った様子で私の背中を押して鏡の前まで押してきたなのは。
……鏡を見たとき少し嬉しくなったのは内緒。

髪はジャケットを着てないけど、三つ編みにした。

着物は紫色がベースの、少しクラデーションされた着物。
ハデさもそんなに無いし、うん。
私好みだ。

「じゃ、ユリアちゃん。私は行くね？」
「え！？　あ、あぁ。うん。ありがとね、なのは」

なのはは笑顔で手を振りながら部屋から出て行った。
聞いたらなのはの方も着物をはやてから渡されてたみたい。
さすがに私みたいに服が全部無くなってる、ってことは無かった見たいだけど。
そんな時に私の方に来てくれたんだから、本当にいいヤツよ。
そして私はまた部屋に一人になった。
もう一度鏡を見る。
そこには見慣れない格好をした私。

「ふふっ」

それから少しの間、色んなポーズを取って楽しんだのはしょうがないことだと思う。

ウィズの小部屋

ウ「え～……今回久しぶりなのに出番が無かった主人公――」
ア《アテナです》
ウ「そうそう。アテナ……違うよ！？何でそこで言葉を遮るかな！！？」
ア《何が違うんですか。主人公は私です。ボケたんですか？》
ウ「久しぶりなのに相変わらずですね！！？」
ア《そうですか？ありがとうございます》
ウ「褒めてないからね！！？」

灰色の野良猫さん

ウ「ホント。はや姉はなんであの芸のやったんだろうな」
ア《さすがのはやてさんも挙動不審になってましたもんね》
ウ「ってかリィンも小さいうちからテンション低いって思ってたけど」
ア《きっとああなることを予想していたんでしょう》
ウ「あの時ほどリィンに同情したことはなかったな」
ア《私もです》

Ｎａｋｉさん

ウ「セラフィムなんて大嫌いだーー！！」
ア《はぁ？》

ウ「なんでお前がそんな口調になるのかな！？」
ア《まぁ、それはともかく、プログラミングが趣味なのはどうかと思いますよ》
ウ「いやだからね。ソレはあの二年間の話であって今はまったく……」
ア《というか相棒。私の中に保存したままのデータは消して良いんですか？妙に要領があるんで》
ウ「あー……まだパソコンに写してないから……」
ア《やっぱり趣味じゃないですか》
ウ「うぐっ……」

ＺＥＲＯさん

ア《キャロさんはお腹から大声を出してましたよねぇ》
ウ「ホントになぁ。ってかアレスバルも叫んでたよな？」
ア《あぁそういえば。ラジオの方で叫んでましたね》
ウ「元ネタを知らなかったら面白いフレーズなんだろうな」
ア《私も相棒に惚れてまいそうです》
ウ「もう聞き飽きた」
ア《うんざりされた！？》

翡翠さん

ア《幸せな生活は送らせません。以上、次》
ウ「はや！？もう少し何かコメント送ろうよ！！？」
ア《いりません。相棒ははやてさんとでは無く、私と幸せになるんですから》
ウ「それこそ無いだろ！？いい加減このネタ止めない！！？」

ア《イヤです。一生やり続けます》
ウ「それはそれでプレッシャーよ！？」

死の恐怖さん

ウ「恋の抑止力は本当にいい歌だな。もうドンピシャだった」
ア《フェイトさんは歌い終わった後、頭抱えてましたね》
ウ「あぁ。後半テンション上がって踊ってたもんなぁ」
ア《アンコールが掛かったときも相棒やなのはさんが必死に説得したくらいですもんね》
ウ「バルディッシュをレイラもジャケットを解除しなかったよな」
ア《レイラにあんな面があるなんて驚きました》
ウ「俺はどっちかって言うとバルディッシュの方に驚いたけど？？」

ＴＯＵＤＡさん

ウ「あの衣装はビックリした。始めは眼のやり場に困ったからなぁ」
ア《私としてはフェイトさんがあの格好で人前に出られたことに驚きでしたけどね》
ウ「あとはイベントとしては皆ハッチャけてたなぁ」
ア《ティアナさんはどうなったのか、ソレが私は気になにますね》
ウ「マジっぽかったからなぁ。結局忘年会には戻ってこなかったし」
ア《あとは……確かに私の主人公になるチャンスが！！？》
ウ「結局そこか！！？」

52．ユリア・過去と今（後書き）

お久しぶりです、八神煌斗です。
思っていた以上に毎日が忙しくて書けませんでした。

今回はユリアの過去とアリヤを少しだけ登場させました。
ウィズが言葉に詰まったときに言うセリフはアリヤ譲りでした。
こういう特に意味の無い過去を書くのとか、好きだったりします。

あとは……ユリアに少しだけ年相応な部分を。
着物を着てテンション上がるのは仕方が無いことなのです。

次回は今回みたいに遅くならなかったらいいなぁ、と思う今日この頃。
それでは皆さんまた次回、お会いしましょう。

53．謹賀新年（前書き）

今回は最下部にイラストが載っています。
イメージを崩されたくない方は予め挿絵表示をｏｆｆにしてご覧ください。

53．謹賀新年

「んぁ……もう朝か……」

体を起こしてベッドから出る。

アテナとレイラは……まだ寝てる。

デバイスに寝てるって表現はどうかと自分でも思うけど、あながち間違ってないんだな、これが。

特にアテナに関しては――。

《あ、相棒。本当に私でいいんですか……？　……むにゃむにゃ》

「……」

この通り、スリープモードのクセに寝言を言いやがるんだ、コイツ。

コレはレイラにも言えることなんだけど、本当にコイツらはデバイスなのか本当に疑わしい時がある。

って。

「お前は何の夢を見てんだよ、コラ」

《はぅ！！？》

《……む？　もう朝か》

アテナにデコピンを一発。
それでアテナの声が大きかったせいで、レイラも起きた。

「起きたか？」
《……おや？相棒、いつ服を着たんですか？　というよりアナザーフレームはどこへ？》
「……本当に何の夢を見てたんだ、この色欲デバイス」

新年一発目に見る夢じゃないのは確かだな。
年が変わってもコイツは変わらなかった、って訳だな。

いや、もう諦めてるからいいんだけどよ。

《あ、忘れてました。相棒、明けましておめでとう御座います》
「はい、おめでとー」

昨日のドンちゃん騒ぎから一夜。
年は変わって1月1日。つまり新年だ。

正月休みなんて管理局には無いが、はや姉の意向で皆全体的に三が日は仕事の量が多少減らされている上に、自宅に持ち帰りＯＫ。
なので昨日帰った局員も多い。

現にスバルは家族で日を合わせたみたいで自宅に帰ってるし、ティ

アナやエリオ、キャロもついていった。
エリオたちはスバルに誘われて断りきれなかったらしい。
因みにシグナム姉さんたち守護騎士の皆も少し古巣に顔を出すとか言ってたのを覚えてる。

《マスター、なぜ挨拶がおめでとうなのだ？》
「ん？　レイラ正月知らねぇのか？」
《いや。知識としてはバンクに入っているが……。単純に気になっただけだ》
「ゴメン、それは俺にはわからねぇよ」

まさかそっちの疑問なんて思ってなかった。
少し【ん？　俺が答えてやるから言ってみ？】見たいな雰囲気を出した自分が恥ずかしい。

「あ、そだ。レイラ。お前にお年玉があるんだよ」
《私にか？　しかしそんなモノを貰っても私は使い道が無い》
《まぁ、そういわずに受け取っておいても損はありませんよ》
《む？》

自分にはお年玉がないと言われているアテナが何も言わないことが疑問なのか、首を貸しが多様な声を出したレイラ。

ま、無理もないよ。
いつもならまた一人で大騒ぎしてるだろうし。

その光景を想像して苦笑いをしながら俺は昨日の晩にシャーリーさんから預かったものを机の引き出しから取り出す。

《む！？　ま、まさかそれは……》

珍しく戦闘以外でレイラが声を荒げた。
まぁ、それも仕方ないことだろうな。

いつもは冷静にしてたっぽいけど、本当に欲しかったみたいだからな。

「そだよ。お前のアナザーフレームだ」
《お、おぉ……。ようやく完成したのか》
「ほれ。とりあえず接続してやるよ」

机の上に置いてあったレイラを手に取り、アナザーのベルトに接続する。

二、三秒程してアナザーの眼が開いた。

「どうだ？」
「ふむ……」

見るからにニヤケルのを我慢しながら、体を動かし始めるレイラ。

……

……

……

……

「もういいだろ！！？」

「……異常は見当たらないな。ラグも０．０５をきっている」

《な！？　また私より性能が上ですか！！？　なぜ！？》

アテナが叫んでるが、それを無視して俺とレイラは最後の微調整を始める。

レイラのアナザーは見た目アテナと真逆だ。

赤み掛かった肩辺りまでの黒髪に、オレンジの瞳。

若干だが釣り上がった眼は、強気で冷静なイメージだ。

……本当にアテナのとは真逆だな。

《なぜ!?　相棒！　私のフレームもバージョンアップを要求します！！》

うるさい。

「むぅ……。結局バージョンアップは無しですか」
「当たり前だろ」
「ではせめてパッチを……」
「……そこまでか？」

と、いう訳で今はレイラとアテナ。二人が俺の左右の肩に座っている。
いうまでも無く、レイラが座るときにアテナが大騒ぎしたんだが、忘れさせてください。

「マスター。今はどこに向かっているのだ？」
「ん？　食堂だよ食堂。はや姉からメールが届いててよ」

いつもの如く詳しくは書いてなかったけどな。
ただ食堂に来い、って感じの無いようだった。

まぁ、今日は正月だし。
昨日までとはいかなくても、また何かやるんだろ。

「それよかアテナ。お前その着物どしたんだよ。俺つくってねぇぞ？」
「さぁ？　私も良く分かりません。気がついたら目の前に置いてあったので」

今のアテナは見覚えの無い着物を着ている。
黒地に白い斑点……雪か？　そんなのがあしらってある。

「色的に私のモノだと思ったのだが、姉さん宛と書いてあったのだ」
「私も普段は黒はそうでもないんですけどねぇ」
「なら私に着させてくれ」
「イヤです」

即答かよ。
まぁ、白い髪が黒地のお陰で逆に映えて良いんじゃないか？

とは絶対に言わない。
調子に乗るのが見え見えだから。

「それで相棒。私の着物姿、どうですか？」
「……やっぱり聞くのか？」

当然です。と胸を張るアテナ。
さっき言ったとおり似合ってるとは思う。
上手いこと露出してる機械部分も隠れてるし。……肩以外は。

「私の方が似合うはずだ」
「レイラ。あなた最近生意気ですよ？」
「姉さんに似たのだろう」
「なんですとーー！？」

また始めやがった。

仲いいのは良いけどね、俺の両側で喧嘩するのはやめて欲しいんですよ、ほんと。
耳が悪くなったらどうしてくれるつもりだこの野郎。

「あれ？　相棒何か歌声が聞こえてきませんか？」

そんな時、アテナが突然そんな事を言い出した。
俺も耳をすます。

すると確かにかすかだが何か聞こえてくる。

「あぁ、確かに聞こえるけど……英語？　誰だ？」

俺の周りにこんなに流暢に英語喋れる人いたっけか？
俺やはや姉だって少しは話す事はできるけど……。
いやでも歌と会話は発音結構違うしなぁ……。
そもそもこの声誰だよ？

「おや？　この声、まさか……」
「ん？　心当たりあんのか？」
「確証は無いので何ともいえませんが。おそらく間違ってないかと」

首を傾げてるアテナ。
予想ついてるお前が首傾げてたら俺はもっとわからねぇよ。

ま、この歌も食堂の方から聞こえてくるし。
誰か歌ってるとか分かるだろ。

そう思って俺は特に気にも留めずに食堂に足を向けた。

「え～……これは予想外だわ……」
「私は予想通りでしたが……驚いてはいます」

食堂にはやっぱり歌の主が居たんだが……。

「まさかのレイジングハート……」

「ふむ。こんなにも歌が上手かったのだな。意外だ」

そんなの俺の方が意外だっての。

一応十年来の付き合いになんのにこんなに歌が上手い何て思いもしなかった……。

「お、ようやく来たなぁ、寝坊介」

「あ。はや、ねぇ……」

「ん？　どないした？」

首を傾げるはや姉。

いや、しょうがないじゃないですか

正月だからまた何かすると思ってたけど、まさか着物を着てるなんて思ってなかったし。

いや、着る事に関しては普通なんだろうけどさ、どっから調達したのよ、それ。

にしても水色ですか。

正直イメージには無かったけど……あると思います。

「い、いや。なんでもないよ、なんでも」

むぅ……。最近どうもはや姉を意識しちまうな。
どうしたもんかね。

「っと、それよりはやてさん。何故レイジングハートさんが？」

アテナがはや姉に聞いた。
まぁ、俺もソレは気になってたから聞いてくれてありがとうって感じだ。

「それがなぁ、この前のウィズのフェイトちゃんのライブに感化されたらしいんよ」
「……レイジングハートが？」
「レイジングハートが」

これまた意外だな。そんなキャラ？じゃ無いでしょうに……。

「あら？　ウィズじゃない。どしたのこんなに早く」
「あん？　……ユリアか」
「シメるわよ？」

笑顔でそんな事言わないでください。怖いです。

「ってお前も着物かよ？」
「取ってつけたような言い方ありがとう。でもね、私たちだけじゃないのよ？」

そう言って目配せしたユリアの視線を追うと、何故今まで気づかなかったのか。

なの姉とフェイ姉を見つけた。
なの姉は桃色と赤、フェイ姉は薄紫と青の着物を着てる。

二人はテーブルに向かい合うようにして座って、何か喋ってる。
……二人とも普通にしてるって事はレイジングハートがああなのは周知の事実だったのか？

少し寂しくなったが、気を取り直してユリアに向き直る。

「で、なんでお前も着物なんだよ？　そんなのメンドクサイとか言って着なさそうなのに」
「私だって自発的に来たわけじゃないわよ。……どこかの誰かが私の服を全部持っていったからコレしかなかったの」

棘の有る言い方をして睨むのは俺じゃなくてはや姉。
睨まれたはや姉は乾いた笑いを出しながら顔ごと視線を動かす。
ってかどれだけ強攻策なんだよ。

「ま、いいけどね。なのはの方に行ってくるわ」

あ、照れ隠しだったのか。今分かった。
だって振り向く際の動きが軽かったし、今も若干スキップしたもん。

ふふふ……しっかり見たからな。

「まぁ、アレなら結果オーライやな」
「……本当だよ」

俺の隣で両腰に手を当てて何度も頷くはや姉。
なんでそこまで自信に満ち溢れてるのか聞きたい。

「ほれ、ウィズもいくで」
「っと!?　行くってどこに？」

突然手を引っ張られコケそうになりながらも、何とか体制を整える。

「どこって決まってるやろ。炊事場や？」
「……なぜに？」

なんで朝から炊事場？
いやそもそもはや姉は着物を着てるじゃないですか。

え？　俺が作るの？
朝には遅いし昼には早いですよ？

「それがな、おせちがまだ完成してへんねや。だから手伝ってもらおう思てな」
「あぁ。そういう事か。いいけど珍しいね？」
「いや……私も昨日悪乗りしすぎて忘れとったんや」

昨日って言えば……あぁ。あの【おっきくなっちゃった】事件か。
確かにアレは落ち込んでもしょうがな……ん？

今はや姉悪乗りって言ってなかったか！？
まさか俺が寝てからまだ何か……いや考えるのはよそう。

「ほらウィズなら作るの早いし、ちゃちゃっと出来るやろ？」

まぁ、確かに。
俺は量の少ない、ってかつまみみたいな軽く食えるのは得意だけど……。
得意っても作る速さだけであって味が旨くないの知ってるよな？
普通なのよ？

「それは知ってるから一緒に作るんやろ？」
「そう言う事？」

その後もアテナとレイラが手伝いたいと言って参加したり。
ユリアが突然現れて俺の自信作を一人で食ったり。
餅をつまみ食いしたアテナが喉に詰まらせてお騒ぎしたり。
気づいたら同じものを永遠と作ってたり。

そんなハプニングが色々あったが最後にはそれなりに見れるものが出来上がった。

よく正月にしたことはその一年し続ける、とか起こり続ける、とか言うけど。
ソレを考えると少し嬉しくもあり、何故か泣きたくもなった年の始めでした。

ウィズの小部屋

ユリア「って言いながらも今回は私の出番よ」
レイラ《前回はユリア殿が主役だったからな。しょうがないことだろう》
ユ「で、今回の話だけど……やる意味あった？」
レ《あるだろう！？私のアナザーが登場したのだぞ？》
ユ「あぁ、そういえばそうだったわねぇ。これと言った事してなかったから忘れてたわ」
レ《今後の為に出したらしいからな、今回は仕方あるまい》
ユ「ふーん。で、後は……レイジングハートかしら」

レ《これも声優ネタだな。さすがの私も驚いたが……》
ユ「私もよ。気づいたときには驚いたわねぇ……」

バルディッシュさん

レ《応援ありがとう。これからもよろしく頼む》
ユ「それにしても無駄無しの弓？なにそれ」
レ《いつもバッサリ切るな……。名前の通りではないか？》
ユ「弓ねぇ……誰か使える人……シグナムくらいよねぇ。でもシグナムは使わないしねぇ」
レ《とりあえず貰って置いたらいいではないか。損は無いぞ？》
ユ「アンタ物捨てられないタイプでしょ？」
レ《そっちは何でも捨てるタイプだろう？》

翡翠さん

ユ「お？私に萌えたって？嬉しいけど私、テンションは上がってないわよ」
レ《いや、アレはどう見ても上がっていただろう？》
ユ「……うるさい。アレはただ……似合ってるか見てただけよ。歩きづらいしもう着ないわね、きっと」
レ《むぅ。私としては一度着てみたいものだな。今回は姉さんしか着なかったからな》
ユ「アンタたちは飛べるから動きづらいとか関係ないものねぇ」
レ《うむ。あとは……姉さんだけズルイではないか》
ユ「アナタ、意外と子供っぽいのね？」
レ《その言葉、そのまま打ち返そう》

ＺＥＲＯさん

ユ「そうかしらねぇ。着物なんて動きにくくて肩コルだけだと思うけど」
レ《まだ言うのか？そろそろ素直に認めたらどうだ？》
ユ「だぁかぁら、認めるも何も、私は思ったことしか言ってないわよ」
レ《では着物を返さずに自分のロッカーの隅に畳んで置いているのはどこの誰だ？》
ユ「っ！？……アナタ、どこでそれを……」
レ《む。やはりそうだったのか？》
ユ「なっ！？カマかけたわね！！？」

Ｎａｋｉさん

ユ「年相応って……そんなモノなのかしらねぇ」
レ《それより、ちゃんと受け取ったのか？》
ユ「ん？一応ね。ちゃんと仕舞ってあるわよ。いつ着ようか悩んでるところ」
レ《……着るのか？》
ユ「……そのうち、ね。っていうより遠い眼って何よ！？そんなに似合わなかった！？」
レ《私に言われても困る。まぁ、キャラクターで無かったのは確かだろうが……》
ユ「くっ……。デバイス記録って殴れば消えたかしら？」
レ《何を言っているのだ！！？》

>i9065_407<

53．謹賀新年（後書き）

声優ネタ再び。八神煌斗です。

今回はレイハさんの声優ネタとレイラのアナザー。そしてウィズが若干自分のはやてに対する行動に疑問を抱く回でした。
正直正月関係ないですね、はい。

上で記述した歌詞ですが、恋の抑止力と一緒に収録されているＨＥＡＶＥＮＳ　ＤＩＶＩＤＥでございます。
皆さんは気づいてましたか？私は最近気づきました。

で、今度はレイラ・アナザー（以後Ｌ・アナザー）。
イラストは描いてません、ゴメンなさい！
とりあえずアテナの時のように一本構想中でございます。
期待せずにお待ちください。

さて次回ですが……どんな話にしようか考え中です。
バレンタインに跳ぶには期間が開きすぎな気がしますし……。
ま、まぁ、何か考えておきます。多分。

実はユリアは結構動かしやすいのでネタで何か書くのもありかと考えていますし。

それではまた次回お会いしましょう！

Ｐ．Ｓ．
レイラの指輪は右腰にちゃんと付いています。

54．誕生日と……

「もう2月かぁ。早いな」
「おや？　そう言えば調度四ヶ月ですかね？」

カレンダーを見て呟いた俺に、肩に座ってたアテナが口を開いた。
ちなみにアナザー。

半年？

半年前っつったら6月だよな？
6月……6月……。

「あ、はや姉の誕生日か。ってどうでもいい事に気づくな」
「相棒の誕生日でもありますけど……何となく日付が一緒なら気になりません？」

今日は二月四日。
アテナが言うとおり四ヵ月後、つまり6月4日は俺とはや姉の誕生日だ。

「なんだ、二人は同じ誕生日だったのか？」

思い出してすっきりした時に、アテナとは逆の肩に座ってたレイラが俺に聞いてきた。
ちなみに言うまでも無くレイラもアナザーだったりする。

「まぁな。俺の誕生日なんて誰にもわかんねぇし、はや姉がどうせならって……」
「そういえばマスターは記憶を消されていたのだったな」

きっかけが何だったのかは忘れちまったけど、昔なんかの拍子に誕生日の話になった。
そん時にはや姉は折角なら同じ誕生日に！　見たいな事を言ってそうなったんだっけ。

まぁ、自分の誕生日が気にならないっつたら嘘になるけど、どうしても、って程じゃないし。

と、ソコまで考えてレイラが顎に手を沿えて何か考えていることに気づく。

「どうした、レイラ」
「マスター。一ついいか？」
「んぁ？　なんだ、改まって？」
「マスターの誕生日だが、ユリア殿なら知っているのではないか？」

「冬」
「……それだけか？」

思い立ったが吉日。
俺は早速談話室で一人、ダレていたユリアを見つけ、誕生日を聞いた。
一瞬友達居ないのかってからかってやろうかと思ったけど、後が怖いからやめた。
で、聞き出したんたけど……それは生まれた季節だよな？？

「当たり前でしょ。そんな正確に生まれた日や時間がわかる訳無いでしょう？」
「なんでだよ？　まさか元がスライムみたいに徐々に出来上がったとか……うぇ」
「自分で言って気持ち悪くなってどうすんのよ」

いや本当に。
自分がそんな感じに生まれたとか思いたくない。

「確かに生まれは人工授精、だったっけ？　そこから色々調整していくの。ココまでは分かるわね？」
「さすがに馬鹿にしすぎだろ？」

俺がそう言うとユリアは「へぇ？」って言って例の眼を細めて挑発的な表情になった。

……もしかしてやっちまった？

ってか今のどこが気に入らなかったんですか！！？

とまぁ、俺の予想は外れることなく、ユリアはわざと難しい言葉を並べたりしてきやがった。

それも一時間以上こってりと。

「ふぅ。気も済んだし、簡単に言うとね、お母さんもアンタと面識を持ったのはアンタが生まれてからって事ね。つまり知らないだけ」

「今までの説明はなんだったんだよ！！？」

「私を不機嫌にさせたアンタが悪い」

どこのガキ大将ですか、それ！！？

と、ひとしきり俺で遊んで満足したのか、ユリアは「ん～……」と唸りながら眼を瞑り、右手人差し指でこめかみをトントンと叩き始めた。

そして暫くしない眼を開き、指はそのままで俺を見た。

「今記録を思い返して見たけど、多分お母さんがアンタと確り面識を持ったのは、アンタが生態ポットを出てからね」

「そうなのか？」

さっきまでの行動はユリアの中にあるアリヤ……母さんの記憶を見返していたらしい。

ユリアは母さん自体は好きだが、その記憶を見るのは好いていない。本人が前に「私生活を覗き見してるみたいでいい気がしない」とのこと。

普段はマルチタスク使って不必要なのは隅に追いやってるってのも言ってたな。

だけど、俺が今回みたいに聞いたら、自分から覗いてくれる。

「多分、だってば。アンタもう普通に歩いてるし喋ってるし。出たばっかりじゃこうもいかない筈でしょうし」

実況中継をしている様に、だけど淡々と当時の記録を口にするユリア。

「あっ」

「ん？　なんだよ？」

突然、ユリアが動きを止めた。

再び眼を瞑った。が今回は様子がおかしい。

眉間にシワを寄せて、まるで思えていない事を必死に思い出そうとするように、唸っている。
顔も徐々に俯いている。

「おい。大丈夫――」
「静かにして、気が散る」

ピシャリ、と有無を言わさずに言いくるめられた。
かなり深厚そうな顔をしてる。
そして時計で五分ほど経った事を確認したこと、ユリアが眼を開けた。

「どうしたんだよ、急に」

コイツが回りくどいことが好きじゃないのは分かってるから、俺も率直に聞く。

「少しお母さんの記録が前に出てきただけよ。今はまた仕舞っておいたから大丈夫」
「なら良いけど」

もう表情も元に戻ってるし、そんなに難しいことがあった訳じゃなさそうだしな。

大丈夫って言ってるヤツを心配するのは、それはそれで失礼だ。

「そんなことより」

コイツ、仮にも心配してやったことに対してそんなことだと？
なんていう理不尽。

少し悲しくなったぞチクショウ。

「急に誕生日なんてどうしたのよ？」
「ただの気まぐれ。ユリアなら知ってるかと思ってよ」

ま、その予想も外れたけどな。とは言わない。
言ってまた永遠と説明を受けるのもダルすぎる。

「ふーん。あれ？　じゃぁアンタ今までどうしてたのよ？はやてがそう言うイベント放っておく訳無いでしょうし」
「ん？　はや姉と同じだな、一応。６月４日」
「あー……確かにしそうね」

座っていたソファーに深く背を預け、苦笑いで宙を見上げるユリア。
……よくよく考えたらコイツも六課（ここ）に来てまだ半年も経ってないんだよなぁ。

すっげぇ馴染んでるから忘れちまいそうになるけど。

「もしかしたらお前も誕生日一緒にされるかもな」
「あ、ソレ無いわね。私はちゃんと自分の誕生日知ってるもの」
「……それもそうか」

右手をヒラヒラと、宙を仰いだまま返すユリア。
言われてみたらそうだよなぁ。コイツ、母さんの記憶は記録としてちゃんとあるし。

そもそも生態ポットから出たときには確りを自我もあったみたいだしな
逆に知らないほうがおかしいのか。

「因みにいつなんだ、それ？」
「ん～？　６月１６。何の冗談か、アンタ……と言うより、はやてと近いわね」
「へぇ～」

確かに月だけだけど、一緒だとなんか縁を感じるよなぁ。
大体二週間後くらいか。

そんな事を考えてたとき、後ろから聞きなれた声が気味悪く聞こえてきた。

「それは良い事聞いたなぁ」
「うげ……」

その声を聞いて、さっきまで気の抜けた表情だったユリアの顔が歪んだ。
そして首が錆びたような動きを見せて、自身の後ろを見る。

「はやて……」
「折角やからお祝いしたろか？　誕生日＋８ヶ月ってことで」
「や、意味わかんないし」

楽しそうに提案しながら、俺の隣まで来るはや姉。
そして疲れたように返すユリア。

正直俺はユリアの意見に賛成。
なんだよ、【＋８ヶ月】って、意味わかんねぇよ。

「ええやんか。妹の誕生日をお祝いするものお姉ちゃんの役目や」
「だから私ははやての妹じゃ――」
「あ、シグナム？　帰りにケーキ買って来れるか？」
「話聞いてくれないかしら！！？」

ユリアの話を余所に出かけていたシグナム姉さんに通信でお使いを頼む。
モニターの向こうの姉さんも困惑した様子で俺に視線を移してくる。

――何のことだ？

念話じゃない。コレはアイコンタクト。

――まぁ、はや姉の思いつき？

俺の意思も通じたようで、モニターの向こうでシグナム姉さんが小さくため息をついた。

「ん？　どないしたんや？」

『いえ。それで主、どれ程買って帰れば良いのですか？』

「そやなぁ――……」

「はやて！？　私の話――」

モニター越しだか、はや姉とシグナム姉さん、そしてユリアが話初めていつの間にかロンリーな俺。

別に寂しくなんてないし。

「寂しい人程そうやって意地を張るものだ」

「相棒。私が慰めてあげましょう！！」

左右の上着ポッケから顔を出す姉妹デバイス（アナザー装備）。
アテナもそうだけど、アナザーをプレゼントしてからレイラもコッチの姿が多くなった。

しかもその時は大抵俺の両肩か両ポケット。
因みに右がアテナで左がレイラのポジション。

「む。何を言う。姉さんだと傷口に塩を塗りたくるの間違いではないのか？」
「んなぁ！？　レイラ、それはどういう意味ですか！！？」
「言葉の通りだ」
「ムキーーー！！」

こう……なんて言うのかな。
アテナは前からこうだったとして、レイラだ。

コイツもいつかトウギの野郎に返しさねぇとダメなんだけど……。
絶対に何か言われる。しかも俺が悪いのが眼に見えてっから言い返せねぇし。

コッチに来たときはかなりの真面目デバイスだったのに。

「ウィズ」

頭を痛ませていると、話が終わったのかはや姉が俺の方に向き直っていた。

後ろでグッタリしている人？　そんなのは見えません。

「予定も大まかに決まったし。私らは料理でも作りに行こか」
「料理って……はや姉仕事は？」
「……人間、休養って大切やと思うんよ」

サボりか！！？
いや、はや姉……てか姉さん達は確かに休んだほうがいいと思うけど丸投げはどうかと思うよ！！？

そして俺を巻き込まないで！！
仕事結構溜まってるんです、お願いします！！

と、悲願にも似た思いでユリアを見る。

「……」

もう手を振るとか、睨むとか、そんなの一切無し。
コッチを見てくれさえしませんでした。

「……」
「はや姉」
「なんや？」

声色が変わった事に気づいてくれたのか、足を止め俺の方を見る。
俺は何も言わずにユリアを顎で指す。
ユリアはダレている様に見えるけど、また眼を瞑り、眉間にシワを寄せていた。

「まぁ、ユリアも色々あるんやろ」
「そんなもん？」

そりゃ、アイツが悩みとは無縁な性格だとは思わねぇけど、アレは少し違う気がする。
俺が気づいてるくらいだからはや姉も絶対に気づいてると思うんだけど……。
わざと気づかないフリしてるって事か。

「ほら。いくで！」
「うぉ！？　ちょ、急に引っ張らないでほしいな！！？」

この後、はや姉も宣言どおりユリアの誕生日会は開かれた。
その時にはユリアもいつもの感じに戻ってたから、気にしないことにした。
したんだけど……どうもその辺りから記憶が無い。
ただ言える事は起きたとき、さながら地獄絵図の様で、あちこちに

空になった酒瓶が転がっていた。

――そして三日後。
ユリアが姿を消した。

ウィズの小部屋

ウ「久しぶり！ウィズです！」
ア《大体一ヶ月ぶりですかね？最後の更新が４月末でしたから》
ウ「月だけ見たら二ヶ月ぶりだな。待っていた人、もし居たらゴメンなさい」
ア《まぁ、それはさておき……また事件を一つ起こす気らしいですね》
ウ「どうも最後に一つ、書きたくなったらしいな」
ア《それこそ蛇足でしょうに……》
ウ「結構酷いよね、それ！！？」
ア《まぁ、中篇予定らしいですから、良しとしましょうか》
ウ「……そうですね」

ＺＥＲＯさん

ウ「アナザーのアウトフレーム、ねぇ……」
ア《相棒、何故今回の話にソレが出てないのでしょうか？断固意義

も申し立てます》
ウ「いや、俺に言うなよ。ってかそう言う裏事情はお前の方が詳しいだろうが」
ア《……まぁ実際はそんな事になったら収集が付けられない、とか何とか。何故!!?》
ウ「え～……自分で言ってて全く気づいてねぇよコイツ……」
ア《とにかく!本編に出してください!!》
ウ「前向きに検討しておきます」
ア《出す気ないですよね!!?》

バルディッシュさん

ウ「レイジングハートが歌ったなぁ、そういえば」
ア《あの頃は名前、どっかで見たことあると思って検索したらそうでしたからね。私も少なからず驚きました》
ウ「で、武器だが……普通にチート武器だったんだな」
ア《テイルズはレジェンディアを除いたアビスまでしか分かりませんねぇ。最近のは手をつけてませんね》
ウ「昔はよかった。シンプルでよかった……」
ア《おっさんくさいです》
ウ「はぅ!!?」

翡翠さん

ウ「まぁ、大体の人はデバイスの声優さんまで覚えてないよなぁ」
ア《コッチも殆ど偶然でしたからね。結構マニアネタのような気がしますね》
ウ「結構ってか、まんまマニアネタだろ」

Ｎａｋｉさん、改めＮＫさん

ア《そうですよ～。私のイメージカラーは白ですよ》
ウ「自分でイメージカラーとか言ってたら世話ねぇな」
ア《むっ……イメージカラーも無い人に言われたくありませんね》
ウ「え？俺イメージカラー無いの？」
ア《……着物ありがとうございました。黒、アレはアレで中々よかったですよ》
ウ「え、ちょっ。俺の話聞いて！！」

灰色の野良猫さん

ウ「レイラのアナザー公開、忘れてた……。まだ描いてねぇらしい」
ア《私としては載せないで良いと思いますけどね》
ウ「お前ちょくちょく黒いのな」
ア《んなぁ！？私のどこを持ってそんな意見が出てくるのですか！！？》
ウ「……全部？」
ア《相棒なんて、爆発すればいいんです！！》
ウ「爆発！？」

ＴＯＵＤＡさん

ア《私はヒロイン兼、主人公です。そこを間違えないでください》
ウ「……」
ア《おや？相棒、今日はツッコミは無しですか？》

ウ「いや、もういちいちツッコムのに疲れた。主人公が俺なのは変わらないし」
ア《何気にちゃんと突っ込んでるじゃないですか？》
ウ「……あ」

５４．誕生日と……（後書き）

本当にお久しぶりです。八神煌斗です。
長い間離れていたので少し書き方を忘れていました。

今回の誕生日は特に意味は有りません。
いや、はやての誕生日にあわせて何か書こうかと思ったのは事実ですが、そこから何も思いつきませんでした。

さて、そして……六課最後の仕事を一本書きます。
内容は見ての通り、ユリアが中心のつもりです。

とは言っても長編でもなんでもなく中篇。

それでは皆さん、近いうちに合えることを信じて、また次回！

55．ユリアの行方

ユリア　ｓｉｄｅ――――――――――――――――

「っ……」

まさか、まだ稼動していたなんて……ミスった。
抜け出す事はできたけど……ココから出てもアイツは追いかけてくる。

……巻き込みたくない。
コレは私たち兄妹……いえ。

私、親子の問題。

「――っ！？　ここも時間の問題かしら……ね」

後ろから魔力を感じた。

ココにいい場所だと思ってたんだけど。
そろそろ、本気で脱出しましょうか。

私は疲労が溜まった体に鞭を打ち、再び立ち上がった。

ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ　――――――――――――――――

一週間前、ユリアが姿を消した。
始めはただ一人でフラッと出かけただけかと思ってたが、こうも長期間だと違うだろう。
そもそもあのユリアの誕生日会の日、様子がどうもおかしかった。

俺たちはユリアの捜索を始めた。

一週間。
それだけ経っていたらもうミッドに居ない可能性もあった。
一般市民にも転送ポートの使用許可を取るには十分すぎる時間だったからだ。

だけど、その心配も杞憂だった。

目撃情報は思いのほか早く、被害情報や苦情と共に向こうからやってきた。

「ここですね」
「だな。……っつかアイツはこんな所で何やってんだよ」

バイクから降り、辺りを見回す。

目撃情報が集中しているのは今俺が居るここ。
ミッド郊外の廃墟街。
街としての機能はほぼゼロ。概観は保っているけど、壁も床もあちこち砕け落ちているビル。
多分まともに機能してるものって言ったら今俺が立っている高速道路だろうな。

ま、この道路も通行止めになってるから、使われてはいねぇんだけどな。

「ユリア、大丈夫かなぁ」
「その辺りも含めて聞き出せばいいでしょ」

俺の隣でティアナとスバルが会話を交わす。

この二人を連れてきたのははや姉の指示。
まぁ、それはこの場所と、ユリアと一緒に来た苦情も関係してるんだけど。

ここでは日頃から俗に言う暴走族がレースをやっているらしい。
郊外って事もあったし、何故か騒音も……最低限しか出さないヤツらだったから管理局も注意はするけど、大目に見てた。

だけど最近、それがどうも違うらしい。全てが逆。
典型的な暴走族に成り下がった。

それがユリアの目撃情報と重なってだ。

それにもう一つ。
その族の中に魔道士落ちが居るとの報告もあった。

そいつはバイクに乗りながら魔法行使なんて意図も簡単にやってのけるらしい。
俺が言うのもなんだけど、ソレって結構難しい。
事実俺も、そんな大きい動きは出来なくなるし、魔法もアテナの負担が大きくなる。

陸士部隊でそんな事をする機会なんてまず無いから翻弄されまくり。
空や海が出しゃばることもなし。

そこで俺たちに矛先が向いてきた。
その情報の中にユリアらしき人物が見えたのは本当に偶然。

現場の状況を考慮した結果、選抜されたのが俺とティアナ、スバルの三人だった。
眼には眼を、って感じで俺が一番に選ばれた。

ティアナたちは自分から申し出た。
なの姉たちが最初は出ようか、って話になってたんだけど、調度いい経験だろうってことでＯＫサイン。

俺たち三人でこの事件を調査することになった。

「さて、たまり場まであと五分もねぇな。ちゃちゃっと行くか」
「はい」「はい」

休憩終わり。

俺はインビエルノに跨り、ティアナももう一台のバイクに跨り、スバルはその後ろ。
因みにこのバイクはヴァイスさんが最近買ったやつ。
一番に乗ったのはティアナになっちまったけどな。

さて……何か情報が掴めるといいけどな……。

道路に設けられたパーキングエリアの一箇所をたまり場にしているらしい。

そのパーキングエリアは他の所に比べ駐車場も少し狭く、コンビニを2~3倍した程の建物が一件、建つだけ、との事。

俺たちは情報通りにソコにたどり着いたんだが……。
で、たまり場に付いたんだが……。

「管理局員が一体なんのようだ？」

正面から乗り込んだお陰で、族に囲まれてしまいました。

《（どうします？　シメちゃいますか？）》

首にかかっているアテナが念話で物騒なことを聞いてきた。
スバルとティアナにも聞こえたのが、フキ出した。

「（アホか。ユリアの事も聞かねぇとダメだし。そもそも一般人への攻撃は許可されてねぇよ）」

《（黙ってれば分かりませんって）》

コイツ、いつか捕まると思う。
最近あまりにしつこいからアウトをリィンと構想してたけど……本気で破棄しようか悩む。
絶対に俺の見てないところで何か事件起こす。

「おい。黙ってねぇで何かいったらどうだ！？」

ずっと念話をしてたせいで向こうが痺れを切らして声を荒げてきた。

一瞬スバルの肩が跳ね上がる。
お前の方が全然強いからビビることねぇのに。

「なら率直に聞くぞ？　最近コイツを見なかったか？　ユリアってんだけど」

制服からユリアの写真を一枚取り出してリーダーだろう男に見せる。

なの姉が俺に渡してくれたやつだ。

撮ったのは多分クリスマスパーティーの時だと思う。

ついでに言うとユリアは酔ってないっぽいから最初の方に撮ったんだろう。

なの姉がユリアの後ろから両肩を持って笑ってて、ユリアは驚いた顔。

多分なの姉が行き成り撮ったんだろうなぁ。

《（相棒相棒。そんな簡単にそれ見せちゃってよかったんですか？）》

「（あ？　なんで？）」

と、答えを聞く間もなく、次の瞬間にその意味を俺は理解した。

「おい！　これ高町なのはじゃねぇか！！？」

「本当だ！　……って、この隅に写ってるのって……」

「あぁ、間違いねぇ、フェイト・Ｔ・ハラオウン！」

「おいおい、プライベート写真かよ」

俺たちそっちのけでその写真に群がる族共。
そりゃリーダーの近くに居なかったヤツはその場に留まってっけど、
その眼はチラチラそっちを見てる。

そういやなの姉たちのプライベート写真なんて、その手のやつらから
らしたらこれ以上無いレアアイテムか……。

さっきまでの殺伐とした空気はもうねぇけど……今度は緩みすぎだ。
手に持った写真もどうしていいか悩むし……。

どうしたもんか。
そう考えてた時だった。

《相棒！！》
「――っ！？」

アテナの声を荒げた瞬間、俺でもハッキリ感じれる程の魔力を察知した。
ティアナたちも感じたようで、俺達はその場から後ろに跳ぶ。

刹那、俺の居た場所にいくつもの魔力スフィアが打ち込まれた。
逃げ遅れた族の何人かにもそのスフィアは当たる。

「ちっ――。上か！」

俺たちの目の前に経つ建造物、その屋上を見上げる。

ソコには１０は有るだろう人影。
そしてその中の一人、白髪、眼帯の２０代後半に見え体つきの良い男がコッチに杖を向けていた。

「おいテメェ！　何しやがる！！？」

俺たちを囲んで居たうちの一人が声を荒げた。
既にコイツらの標的は俺たちからあの集団へと変わっている。

「――何をする？」

静かに、その眼帯の男は口を開いた。
それだけなのに、辺りに緊張が走った。

アイツはマズイ。
ソレだけが分かった。

「面白いことを言うじゃないか？　管理局にココを感づかれた無能共はどこのドイツだ？」
「ぐっ……」

一瞬、俺たちを一瞥し、再び回りの俗に視線を戻す。

「（ウィズさん）」
「（テイアナか？）」

これからどうするか、そう考えてるときにティアナから念話が来た。

「（報告にあった魔道士落ち、それが……）」
「（アイツ……いや。上に立ってる奴ら全員って考えたほうが良いかもな）」
「（私もそう思います）」

現状を見るに、このグループは二つに分かれている。
あの上に立ってる奴らと、俺らを囲んで居た奴ら。
魔道士落ちが眼帯のアイツだけじゃない、そう考えるのが自然だろう。

「契約忘れたわけじゃぁ、無いだろう？　なら、テメェらに与えた仕事、ソレくらい全うしろや」

契約？　仕事？

気になる単語がいくつか出てきたが、俺が口を挟む間もなく、上に立っていた奴らは位置を変えたんだろう。
俺たちの視界から消えた。

「ち、チクショウガァァ！！」
「――っ！？」

途端、一人の男が叫んだ。
その手には……ナイフ。

そのナイフを構え、一直線に俺に向かって走り出してくる。

「――ちぃっ！」
《ダメです、相棒！》
「あん？　――！？」

迎え撃とうと構えた時、アテナが叫んだ。
そして俺は気づく。

後ろからも、別の男が……質量兵器、名前なんてわかんねぇ。
銃を構えていた。

どうする！？
一瞬の隙が出来た。二人を同時に撃退は出来ない。

「ウィズさん！」

横から声が聞こえ、青い光耀が眼の端に見えた。

――取る行動は決まった。

俺は身を屈めつつ、反転。アテナをノーマルソードで展開した。

《――ｂｌａｎｃｏ（ブランコ）　Ｓｐｈｅｒｅ（スフィア）！！――》

そして剣先を向け標準を定める。

刹那、頭の上を、一つの、スバルの拳が通り過ぎ、ナイフの男に吸い込まれるように直撃した。

《――ｆｉｒｅ！――》

そして俺は目の前の銃の男にスフィアを打ち込んだ。

《相棒、一般人への攻撃は認められてはいないのではなかったですか？》

「……黙ってたらバレねぇよ」

《いつか捕まりますよ？》

お前が言うな、お前が。

……んまぁ、正当防衛だし大丈夫だろう。多分。

「ぐはぁ？！」
「あん？　……うわぁ」

なんて暢気に考えてる間に、俺たちを囲んで居た族たちは倒れ苦しんでいた。
そして俺の後ろで小さく息を吐き出した二人。

仕事が速いのね。

「ウィズさん。どうしますか？」

直ぐに俺に指示を仰ぐティアナ。
後ろでスバルもコッチを見ている。

「とりあえず中に入るぞ。あの魔道士落ちを捕まえる」
「はい！」「はい！」

そして三人で向き直った。

――その時だった。

なんだこの音は……？

何か重い、腹に響くような音。
聞きなれた気もするが、壁に遮られているのか分からない。
二人も気づいてるみたいで耳を澄ましている。

「はっはぁーーー！！」
「っ！！？」

刹那、不愉快な叫び声と共に壁を砕く音。
そして、バイクのエンジン音。

さっきの眼帯の男と、その部下たち。
そいつらが漆黒のバイクに跨り、飛び出してきた。

タイヤ部分から火花を撒き散らし、真っ直ぐコッチに向かってくる。

「このまま逃げるきか！？」
「させない！」

声を上げたのはティアナ。
俺の横に立ち、クロスミラージュを構える。

「クロスファイア……」
「テメェ等、撃てぇ！！」

しかし、一瞬。
一瞬向こうの方が早かった。
後ろについていた部下のような男たち。
そいつ等が一斉に魔力スフィアを撃って来た。
なの姉たちに比べれば術式も緩いし威力も無い。
だが、コッチが驚いていた、その隙を付かれたのも事実。

《――Ｈｙｐｅｒｉｏｎ（ハイペリオン）――》

防ぐしか手は残されていなかった。
俺が一つ、自分に。アテナがティアナとスバルを守るように一つ。
二つを張り、全てを防ぎきる。
だが――。

「じゃぁなぁ～！！」

防ぎきることがやっとだった俺は、真横を笑いながら通り過ぎる男たちを全員逃してしまった。

「くそっ！」

ハイペリオンを消し、後ろを向くが既に姿は見えず、音が遠ざかっていくのみ。
あいつ等を今すぐ追いかける事はできる。
出来るが、ティアナたちは？

ライドバトルは普通の戦闘とは違う。
少しのミスが命取りだ。
ここは二人を置いて、俺だけで――。

だけど、二人は違った。

俺を見ている。
指示を、次に自分たちがするべきことを聞く為の。
ソレを必ずやり遂げるという、強い眼差しで。

「……乗れ！　直ぐに追いかけるぞ！」
「はい！」「はい！」

ウィズの小部屋

ウ「お久しぶりです、ウィズです」

ア《今回は動き始めた、というところですかね。以前ユリアさんは行方不明、と》
ウ「本当は戦闘シーンまで行くつもりだったらしいけど、無理だったらしいな」
ア《相棒と一緒で計画性が無いんですよ。全く……》
ウ「だなぁ……って、なんで俺まで貶されてるの!!?」
ア《気のせいですよ》
ウ「あ、そうなの……ん?」

バルディッシュさん

ウ「その意見は賛成します」
ア《イメージ以上に騒がしいのが大好きですからねぇ》
ウ「別に構わないけどな。被害にあうのって基本はや姉だし」
ア《ですねぇ。と、それはそれとして、なんか届いてますよ》
ウ「トンファーと学ラン?リング?なんじゃこりゃ?」
ア《さぁ?とりあえず着てみたらどうです?》
ウ「……ただの不良じゃね?」

ＺＥＲＯさん

ウ「ギャー!?まさかの脅し!?」
ア《そんな高いもの貰い訳にはいきませんし、返しちゃいましょうか》
ウ「でも出さないと、なんか技するみたいだぞ?」
ア《今までココにそう言うのが届いた経験がありましたか?》
ウ「……あぁ、そう言えば」
ア《と、馬鹿な話は置いといて……結局ユリアさんは行方不明まま

ですね》
ウ「多分次回分かるはずだな」

NKさん

ウ「本編見る限りだと、自分で消えたって感じだなぁ」
ア《その後何かに巻き込まれた、と》
ウ「期待を裏切らないように頑張ります！」
ア《頑張るの私ですけどね》
ウ「うおおぉぉい！！？」

ナイトホークさん

ウ「えと、確かに名前一緒だったな……だけど何で今更そんな指摘が？」
ア《きっと最近読んだんでしょう。それでパクッんじゃね？こういうことでしょう》
ウ「あ～……成る程。でもコッチはその作品読んでねぇからなぁ」
ア「ユリアさんは私がギリシャの神に対して似たような感じを探してる時に見つけたものですからね」
ウ「古代ローマのユリウス氏族の女性の名前、な」
ア《まぁ、これ名前っぽくね？と思って深く考えなかったのが落ち度なのでしょうが……》
ウ「とりあえず、どうしたら良いのか教えてくれ」

リトラさん

ウ「始めまして、だな」
ア《えぇ、始めまして……エロエロ！！？》
ウ「何驚いてんだよ？間違ってねぇじゃん」
ア《そんな事言って！相棒だってユリアさんフラグ希望見ないな事書かれてますよ》
ウ「……うぉ！！？マジでか！？ってかどっち転んでも悪い意味じゃねぇか！！」
ア《そうです！相棒は私のモノです》
ウ「俺モノ！！！？」

サンドラガルさん

ウ「真剣な感想ありがとうございます」
ア《こういう感想はとても嬉しいですし、ために成りますからね》
ウ「とりあえず今までの誤字は時間が有れば直していきたいと思います」
ア《これからもよろしくお願いしますね》

元樹

ウ「ヘタレ肯定されちゃった！！？」
ア《自分でも肯定してたじゃないですか》
ウ「そ、それはそうだけど……改めて言われるとなんて言うか……」
ア《それがヘタレですよ》
ウ「はぅ！？」

55．ユリアの行方（後書き）

こんにちは、八神煌斗です。
今回はこんな感じでしたが……どうでしょうか？

最後のウィズの見せ場なので少々ウィズを魅せているところが有りますが……気にしない気にしない。

そして連れですが、アインスにしようか悩んでたのですが成長と言う面ではこの二人のほうが適任だろうと、この二人にしました。

さて、次回は私が初期から構想していたライドバトルです。
よければ次回も呼んでください。

それでは！！

56．ライドバトル

ユリア　ｓｉｄｅ――――――――――――――――

「しつ……っこい！――ｃｒｅａｔｅ（クリエイト）・ａｖｅ（アヴェ）　！――」

作り出すアヴェは小さく、数も少ない。
あくまで攻撃目的じゃなく、足止め、牽制目的。
だけどそれも、いとも簡単に、全て切り伏せられてしまった。
ただの魔力へと四散していくアヴェを見て、私は舌を鳴らした。

「分かってても、ムカつくわねぇ……！」

どれだけの窮地に立たされても、口調だけはいつも通りに。
自分で決めた最後の壁。
これだけは絶対に壊さない。

「何よその眼は。私一人なのがそんなに不満？」

そう言うけれどヤツの眼に写ってるのが不満じゃ無いことくらい分

かる。
ヤツの眼に映ってるのは羨望。そして絶望。
今の私の状況に対する、がつてのヤツが望んだはずの未来に対する羨望の眼差し。

……一瞬、一瞬だけどここに来る前、なのはには一言、強力を求めようか悩んだ。
けれど、私はソレをしなかった。
なのはに……いえ。
六課の連中に言ったら、絶対に引き止めるか、一緒に来たでしょうから。

でもコレも表面上の理由に過ぎないのよね。
だって私にも話さなかった本当の理由が分からないから。

唯一分かるること。
今対峙しているコレはお母さん(私)の最後の鎖。

コレは、私が切らないと、意味が無いということよ!!

「はあああぁぁぁぁ!!」

side Out ――――――――――――――――――――

「邪魔だアァァ！！」

目の前から襲い掛かってきた奴らを全てなぎ払い、更に前へと進む。

――風景が後ろに、凄い勢いで流れていく。

普段からバイクに乗っている俺でも、多少の恐怖を覚える速さ。
一瞬のハンドル操作が、俺の一瞬先の運命を左右する。
だが、それでもスピードを緩める訳にはいかない。

緩めでもしたら、目の前のヤツらを見逃してしまう。
見逃せば、奴らは姿を眩ますのは確実だ。
そうなれば事件は解決したことにはならないし、何より……。
ユリアの手がかりが無くなる。

「そうは……させねぇ！」

アクセルを絞り、更に速度を上げる。

《相棒！　速度を上げすぎです！》
「んなこと言ったって、あいつ等の速度を考えろよ！？」

実際、アテナの言う事は正しかった。

俺はインビエルノで今のような速度は出したことが無い。
だが、それと同等に奴らは速かった。
今アクセルを絞り、ようやく速度が並ぶか、それほどの速さ。
テクニックがある訳じゃない。客観的に見ても俺の方が上だろう。
なら今のこの差は何か。
経験だ。
あいつ等は最近毎日、この道を走っていた。
当然、この道の走り方を熟知している。
それが、明白な差だった。

《そうは言ってもです！　この綱渡りは危険すぎます！》
「なら一体どうしろって言う――っ！」

言葉を飲み込み、ほぼ反射的にハンドルをきる。
瞬間、俺の頬をかすめる様に数個のスフィアが通り過ぎた。
後ろで爆発音がする。
スバルとティアナがどうなったのか。そもそも付いて来ているのか。
気になったが今の俺には後ろを見る余裕が一切無い。
それほどまで、俺は経験したことの無い速度で今走っている。

《第二射、来ます！》
「――っ！」

後ろに意識を割いていたせいで一瞬反応が遅れた。

「ちぃっ！　アテナ！」

《――Ｈｙｐｅｒｉｏｎ（ハイペリオン）！――》

避けることができないなら防ぐ。

衝撃でバイクが揺れる事に備え、重心を低くし、備える。

しかしその予想は大きく外れることになった。

「なっ――」

二度目に撃たれたスフィアは俺の俺たちの間に着弾、爆煙を巻き上げた。

俺を狙うんじゃなく、前？

――眼くらましか！

《相棒、罠です！》

「分かってるけど……でも！！」

旋回……ダメだ！　スリップして転ぶのがオチだ。
なら迂回……くそっ！
元高速道路だけあって、早々道が分かれてる訳でもねぇか！

《私を接続してください！》
「駄目だ！　奴らが待ち構えてたら対抗できねぇ！」

レイラは今、六課で調整中で持ってきていない。
アング戦での負傷がシステムの根幹付近まで来ていたらしく、ランスへと可変が出来なくなっていた。
だからこそ、六課に置いてきたんだが……！

「ウイング・ロード！」
「っ！」

声と同時、俺の右手に蒼い道が、砂埃を迂回するように大きな曲線を描く。
それは、第二の道として存在した。

《驚いている場合じゃありませんよ！》
「――だな！」

ハンドルをハンドルを右に切り、体も傾ける。
進路方向を変え、俺は青い道を滑走する。

「いた！」

迂回した青い道の上で下を見る。

そこに見たのは案の定、俺を討つ為に待ち構えていただろう二人の影。

現れた第二の道を走る俺を唖然と見上げている。

「だからお前たちは駄目なんだよ」

《相棒もまだまだ人の事を言えた義理じゃないでしょうに》

「うるせぇ」

《ま、言う事ま間違ってませんけどね》

更にアクセルを絞る。

あの二人は既に俺の眼中には無い。

なぜなら――。

「スバル！」

「うん！」

俺とは逆、左側に再び現れる蒼い道。

そしてソコを滑走する二つの影。
その見ていない、気づいていない影こそが、お前たちを討つ相手だ！

「クロスファイア……シュート！」
「うごっ！？」

影の一つ……ティアナが撃つオレンジのスフィアは真っ直ぐ待ち構えていたうちの一人に直撃した。
当然、もう一人はそのうめき声に反応してそっちを見る。
だが既に遅い。
その男の上に、一撃くれてやるためにもう一人。
俺の仲間が頭上から攻撃を仕掛けている。

「はあぁぁぁ！」
「なっ――ぐふぅっ！？」

スバルに殴り飛ばされ、バイクから転げ降ちる男。
俺はソレを横目で確認しながら、再び高速道路に降り立つ。

ハンドルをひねり、横向きになるように停止させる。
直ぐに、ヴァイスさんのバイクに乗ったティアナ。
自身のデバイス、マッハキャリバーで走るスバルが俺に並ぶ。

「スバル、ティアナ。助かった！」
「いえ！　それより早く、先頭を追いかけましょう！」
「あぁ……！」

視界の隅に、見えた。
スバルが殴り倒した男。
その男が身を起こしながら、その手にスフィアを形成しているのが。

「スバル、避けろ！！」
「え――っ！？」

刹那、間に合わなかった。
スバルは体をヒネルように避けようとしたのだが、右肩にかする。

「くっ！」

直ぐにティアナがスフィアを打ち込み男は今度こそ気絶した。

「スバル、大丈夫か！？」
「はい。掠っただけですから、任務に支障はありません」

そう言うスバルだが、見るからに顔をゆがめている。

左手で右肩も抑えてるし、いくら掠っただけ、とは言っても痛みは有るんだろう。

本当はココで休ませておきたいけど、言う事聞くようなヤツじゃないってのは分かってるし。

「あんまり、無理すんなよ」

とだけ言っておく。

大丈夫。

いざとなったら俺が守ればいいだけだ。

絶対に、守りきればいい。

「ウィズさん！　あそこ！」

ティアナに急かされ、前を見る。

そこには俺たちはソコで討たれるだろうと、傍観に徹して、止まっていた奴らが慌ててバイクを走らせていた。

「逃がさねぇ！　スバル、もう一発ウイングロードだ！」

「え？　……っ！　はい！」

無理をさせてるのは分かる。

でも、今はソレしか思いつかなかった。

一瞬、俺の言う意味が分からなかったようだが、直ぐに理解し、再びスバルが一本の蒼い道を空に向かって伸ばす。

俺はその道のが終着点へとたどり着く前にアクセルを吹かし、道を走り出す。

「……見えた！」

相手より上の位置を確保した俺は簡単に奴らを視認することが出来た。

そして同時に、この先の道路がどの様なつくりになっているのかを確認する。

そう。この先の道は大きなカーブだった。

だからこそ、スバルの作った道は大きなショートカットになる！

頭の中では次にどう動き、二人（スバルとティアナ）をどう動かすかを考える。

《って相棒！　前、前！！》

「んぁ？　なんだ……とぅ！！？」

《マヌケな声出してる場合じゃありませんよ！！》

「わかってるよ！！」

俺の目の前に広がるのは一面の青い空に眼下に広がる廃郊外。
まぁ、人間イザとなると冷静になるもんだなぁ……て！

「んな訳あるかぁ！！」
《だから私はスピード出し過ぎって言ったんですよぉ！！》

そう。俺の目の前には一つ足りない。

ウィングロードだ。
俺がそれだけスピードを出したなんて事は無い。

原因はスバルが負った右肩の怪我だろう。
いくら掠っただけでも、それで魔法の効率が悪くなることだってある。

スバルが悪いんじゃない。

でも……。
このままだと落ちる。
絶対痛い。

「ズバル！　ウィングロード！　早くぅぅ！！」
《聞こえるはず無いでしょう！！　あぁ！　こう言ってる間にぃぃ！！》
「ぎゃあぁぁぁぁっ！」

なんて馬鹿言ってる間にウィングロードは無くなり、俺は宙へと飛び出した。

「だあぁぁぁぁ！！？　アテナお願い、何とかして！　メンテしてあげるから！！」

《いつでもメンテで釣られると思わないでください！》

「じゃぁメンテ無しでいいんだな！？」

《……とりあえずウイング展開したらどうですか？》

「それだ！！」

やっぱり単純だなぁ、と思いつつ、アテナを直ぐに待機モードへ変更。

指輪となったアテナをハンドルの間に差し込む。

《接続を確認。ウイングソード、展開準備ＯＫです》

「よっしゃ！　ウィングソード、展開！」

《了解。ウィングソード展開します！》

イングエルノの両側部が変形し、そのから白銀の圧縮魔力刃を展開させる。

これでも飛ぶことは出来ない。

元々ちょっとやそっとの事で壊れるようなインビエルノじゃない。

なら後は俺の問題だ。

ウィングを展開したおかげで俺は多少の空中での移動手段を手に入

れた！

《空中ではバランサーは機能しません！　お願いします！》
「おうよ！　お前はウィングの形成に集中してろ！」

そして俺は座席に片足を乗せ、半身を取る。
要領はスケボー。
体の重心で左右に動き、残りのヤツラまで追いつく！！

「――って、スピード速ええぇぇぇぇ！！」
《喋ってると舌噛みますよ！》

いくらウィングを羽代わりにしたからと言ってもインビエルノには飛行機能は無い。

つまり落下速度がほんの少し遅くなっただけで、落ちる事には変わりない。
いや、逆に羽が出来た分角度をミスったらそれは凄い勢いで落ちるだろう。

「くそ、後悔今更ってことかよ！」

悪い予想を首を振って、消し払う。
ココまで来て後戻りは出来ねぇ！！

覚悟を決め、前傾姿勢に体制を変え更にスピードを上げる。
スピードは更に上がるが、前傾姿勢を取った分姿勢制御が取りやすくなった。
これでヤツ等に追いつける。

だがリーダー各の眼帯の男も逃げ切れないと観念したのか。
その場で急制動をかけ、片足を軸に火花と砂埃を上げながら半回転。
先ほど持っていた杖を取り出し俺に向けてきた。

《相棒！》
「大丈夫だ！」

更に重心を前へ。
このタイミングで落ちました、じゃ笑い話にもならねぇ。

だが、その間にも、眼帯の男は杖を中心に魔力スフィアを作り始める。
数は驚くほどではないが、確実に平均よりは作っている。

そしてそれは、主の命令を受け、俺に向かい飛来する。

俺と眼帯の距離は目測で５０メートル弱。

あのスフィアを交わせば俺の勝ち。
交わせなければ負け。

簡単な構図だ。

「ハイペリオン！」

展開したのはアテナではなく、俺自身。
前に展開して飛来して来るスフィアを防ぎきる。

それを見てか、再びエンジンをふかし始める残りの二人。

「これ以上逃がすか！　アテナ、いくぞ！」
《デバイス使いが荒いですよ！？》
「うるせぇ！」

同時、俺はアテナをハンドルから抜き取り、テクニカルに展開する。
ウィングは勿論消えるが問題は無い。

「っ――！？　なに！」

驚きは眼帯野郎の声。
俺はインビエルノを踏み台に、ヤツラに向かって突貫したのだ。

勿論、インビエルノを待機状態にして腕に戻すものも忘れない。

「ちぃ！」

覚悟を決めたのか、コレがチャンスだと思ったのか。
再び俺に打ち出されたスフィア群。

だが、ソレに誘導性が無い事はさっきので確認済みだ。
だからこそ、俺はインビエルノから降りた。

「アテナ！」
《――Ｈｙｐｅｒｉｏｎ（ハイペリオン）！――》

左右に縦に作り出される足場（ハイペリオン）。
俺はソレを蹴り、左右に体を振ることで全て交わす。

ヤツとの間に遮蔽物……邪魔なものなもうねぇ！！

《――ｓｗｏｒｄ（ソード）　ｄａｎｃｅ（ダンス）――》
「シングル・カラーズ……特盛りぃ！！」

打ち出す。
特大サイズのシングルカラーズ。
それは二人巻き込み、爆発を起こした。

そして俺は、自分の足で道路に立った。

ウィズの小部屋

ウ「遅れてスミマセンでしたぁ！！」
ア《いや本当に。今回は謝罪させてください》
ウ「もうなに言っても言い訳だからね」
ア《今後、こんなに遅くならないようにしますので》
ウ「で、散々待たせた今回の話だか……」
ア《ぶっちゃけ悲惨ですよねぇ。疾走感まるでなし》
ウ「……まぁ、今後精進するって事で」
ア《そうしてください》
ウ「うん。本当にスミマセンでした。んじゃ、さっそくコメ返し！」

ナイトホークさん

ウ「まぁ、正直名前がかぶってるって言われても困るからなぁ」
ア《知ってたら一緒にはしないですからねぇ》
ウ「っつかキャラなんて星の数ほどいんのにそんな事いわれてもな……」
ア《今後はこんな事言われないように下調べしましょう》

バルディッシュさん

ア《いやまぁ、こういうのを送ってくれるのは嬉しいのですけどね》
ウ「技と武器のクロスってのはしない様にしてるんだ。ゴメンな」
ア《まぁ、オリジナル武器を送られてもあまり使わないですけどね》

ウ「色々送ってくれるのは嬉しいけどそういうのって大抵チートだからな……」
ア《本当に申し訳ありません》

麗×零さん

ウ「いやいやいや！ルール破るためにあるとかどんだけ！？」
ア《相棒だって八神家のルール壊してるじゃないですか》
ウ「うぐっ！？……いやでも駄目だろこれ！壊すなら自分の所の壊してね！？」
ア《あとはユリアさんですね。まぁ、次回辺り終わればいいかなぁ、なんて思ってるそうですよ》
ウ「地味に長くなったからなぁ。プロットもいい加減だったし……」

NKさん

ウ「あ～……ラディ、お疲れ様」
ア《そしてセラフィム、グッジョブです！》
ウ「にしても、ユリアが居なくて助かったな」
ア《もしここに居たらキレて八つ当たりしそうですよね。主に相棒に》
ウ「だよなぁ。取り合えず名前は適当でも由来はちゃんと有るってことで」

翡翠さん

ウ「お久しぶりです！」

ア《おそらく期待に全く添えない内容になってしまったことでしょう》

ウ「ぶっちゃけバイク関係なかったもんなぁ……」

56．ライドバトル（後書き）

本当にお久しぶりです。八神煌斗です。

まぁ、ライドバトルの事は謝らせてください。
正直どうやったらいいのか分からず手探りで書いてました。
これを今後に生かせていけたら、と思います。

次回もいつになるか分かりませんが、完結は必ずさせます。
途中で放り出したりはしません。

それではまた次回、お会いしましょう。

57．24番

「ここ……か」

《罠の類は無いと思いますが、注意はして置いてくださいね》

「分かってるって」

例のヤツらを全員捕まえた後、俺は廃施設に来ていた。

ユリアがあいつ等の前に現れたのは一週間前。俺たちの前から姿を消した日と重なる。

なんでも突然現れ、我が物顔でやつ等の拠点を寝床にしていたらしい。

そして朝早くに姿を消して夜にフラリを戻ってくる。

その繰り返しだったらしい。

そんなある日、メンバーの一人がユリアを見かけ後を付けた際、この施設を見つけたらしい。

尾行に気づかなかったのか、放っておいたのか。

ユリアの場合どっちの可能性もあつから何とも言えねぇけど。

「にしても、ここって……」

《管理局が保持していた施設ですね。現在は別所に移設しているので破棄されているはずです》

「だよなぁ」

そんな所になんの用があったのか。
全く予想できない訳じゃねぇけど、どっちにしろ本人に聞かなきゃわかんねぇか。

「よし、入るか」

因みにスバルとティアナにはヤツ等の見張りを頼んでおいた。
スバルの怪我のこともあるしな。

施設の中は妙に暖かかった。
っても、そとよりは寒くないって程度だけどな。
暖房が効いている様子もないし、考えられる事っつったらどっかで機械が稼動してるってところか。

警戒を一層強め、一歩踏み出した時だった。
大きな爆発音と共に、俺の目の前の壁が崩れたのは。

「っ！？　なんだ！？」
≪――！　相棒！　この魔力、ユリアさんのものです！≫
「はぁ！？　マジかよ！」

こんな所で何やってるんだ。という考えと同時にヤバイ状況なのも分かった。
俺は急いでセットアップをし、未だ爆煙が充満するソコに進入した。

「――ユリア！？」

暫く進む、なんて所じゃなかった。
崩れた壁を跨いだ瞬間、俺はユリアの姿を確認した。

「……ん？　あぁ、ウィズじゃない。どうしたの？」
「そりゃこっちのセリフだよ！　一体何があったんだよ！？」

当の本人は疲労してる様子はあったがいつも通り俺に話しかけてきた。
だがいつも通りなのはその口調だけ。
ジャケットはもうボロボロだし、疲れが前面に出ている。

「大声出さないの。そうね、とりあえず外に連れてってくれない？」

俺に対する言葉遣いもどこか弱々しい。
とりあえず言われたとおり、ユリアの肩を担ぎ施設外まで連れ出す。

「おもっ……」
「アンタ、覚えてなさいよ……」
「いや……さすがに全体重を任かされるとだな……」

いくら軽くってもソレはキツイって。
コレでも戦闘後なんだぞ？

《ユリアさん、微力ながら私も……》
「お前まで！？」

《女性に体重の話は禁句ですよ！　それが例え身内でもです！！》

あ～……そう言えばはや姉とかそんな事言ってたなぁ。

いつだっけ。
アリサさんに体重聞いたとき……だったなぁ。
いやはや、あの時はこの上なくリアルに死を感じたなぁ……。

って、そうじゃねぇって！

「で、お前は六課飛び出して今まで……つかここで何してたんだよ？」

そう聞くとユリアは口を閉ざした。
だんまり……って訳じゃなさそうだな。
何から話していいか考えてるって所か？

施設に入ってすぐの所だったから特に時間も掛からなかった。
外に出てとりあえず壁にユリアをもたれさせる。

「あんたの誕生日聞かれたときに、お母さんの記憶を覗いたでしょ？」
「ん？　あぁ、そうだったな」

唐突に説明を始めたユリア。
呼吸は落ち着いたみたいだし、話をゆっくり聞くことにする。
にしても……なんだ、この不快感。
ユリアに対するもんじゃねぇし……なんかムカムカする。

「あの時に少し見えたのよ、ココがね」
「ココって、この施設のことだよな？んでも何でそんなにボロボロになってんだよ？」
「今から話すから少し待ちなさいよ」

いつもの嫌味にも全く覇気がない。
こりゃ相当まいってるな。

「ここね、アンタが生まれた……ううん、作られた場所なのよ」
「……は？」
「あぁでも勘違いしないでよ。誕生日調べるために来たんじゃないから」
「ちょ、チョイ待ち！」

急に饒舌になったユリアに静止をかける。
話がぶっ飛びすぎて付いていけない。
だがユリアは話をやめない。

「時間ないんだから黙って聞きなさい。生まれた場所って言ってもアンタの元が生まれた場所よ」
「俺の元……？」
「そ。実験体番号２４番。そいつが出来たからアンタやトウギが生まれたの」

俺は黙ってユリアの話を聞く。
時間が無いって言うのも気になるけど、ウソは言わないやつだ。
本当に時間が無いんだろう。

「つまり、ここにお母さんも居たのよ。だから何かお母さんの品でもあるかと思ったら居ても立っても居られなくてね」
「それで飛び出したのか……。でもなんで何日も帰ってこなかったんだよ？」
「電気が生きてたのよ。だからもしかしたらお母さんが今でもココに顔を出してるんじゃないと思って……」

その言葉を聞いてハッとした。

そうだ。コイツはその見かけと性格で忘れそうになるけど、まだ１

0になってない子供なんだ。
それが母さんの手がかりがあればこんな無茶をして当たり前だ。

「それで入り浸ってたんだけど……その時に厄介なのを起こしちゃってねぇ」
「厄介なの？」

と、ユリアが言うと同時。俺が首をかしげた瞬間に施設の壁の一部が吹き飛んだ。

「ちっ。もう少し持つと思ったのに……」
「あ、おいっ！」

フラフラの体に鞭打つように、壁に手をかけながら立ち上がるユリア。
俺にはもう入ってくる情報が多すぎて展開が速すぎて付いていけていない。
ただ、さっきまでの不快感は増すばかりだった。

壁に開いた穴から煙が湧き上がる。
そしてその中からゆっくりとした動きで現れたのは……一つの人型だった。
それは煙で見えないのではなく、姿を確り見ての表現だった。

例えるなら服を着ていないマネキンがピッタリくる。
ただ色は紛れも無い銀色だけどな。

「――ｃｒｅａｔｅ（クリエイト）　ａｖｅ（アヴェ）！――」

ユリアが叫び、作られたアヴェが次々に人型に攻撃に掛かる。

「おい！　何なんだよ、アイツ！」

「さっき言ってでしょ！　実験体番号２４。アンタの設計図の基盤になったモノよ！」

「はぁ！？」

あんなのが、俺の元！？

俺はてっきり普通の人間だと思ってたぞ！？

「元々、２４番は実験の過程で偶然で出来たものなのよ」

俺の動揺が伝わったのか、再びユリアが説明を始めた。

「だから生物とは言わない。ただ動くモノって意味では動物ってのがしっくりくるかもね」

くるかもね。じゃねぇよ。

目の前にはユリアのアヴェを食らったのに、何事も無かったように立つ２４番。
眼はないはずなのに、俺たちを捕らえていると、何故か確信があった。

「私が変に弄ったせいで、眠ってたのを起こしちゃってね。今日ようやく逃げ出したのよ」
「今日……ようやく？」

さっきから頭に引っかかるナニか。
それが何か分からないが、今は目の前のヤツに集中するしかない。

「本当は私一人でカタをつけるつもりだったんだけど……」
「あぁ。アイツを野放しすんのはよくねぇって事くらいは俺でも分かる。――アテナ！」
《――Ｔｅｃｈｎｉｃａｌ（テクニカル）　Ｓｉｌｈｏｕｅｔｔｅ（シルエット）――》

アテナをテクニカルに変え、ユリアの一歩前に出る。

「もう大分弱らせてると思うけど……油断はしないでよ」
「おうよ」
「ついでに、足引っ張らないでね」
「おう……おぉう！？」

ついに嫌味が出ましたか！？

このタイミングで！！？

「――っ！　来るわよ！！」
「あー！！　ちくしょう！！」

そして俺は２４番に向かって走り出し、ユリアは一歩後ろに跳ぶ。

「――ｃｒｅａｔｅ（クリエイト）　ａｖｅ（アヴェ）　――ｐｌｕｎｇｅ（つっこめ）！――」

走る俺の横を数羽のアヴェが通り抜け、再び２４番に突っ込んだ。
だが、結果は違った。
２４番が手を横になぎ払うだけで、アヴェは真っ二つに切られ、爆発することも無く消滅した。

「止まらない！」
「――っ！」

ユリアの渇で止まりそうになった足に力を入れなおす。

「はあぁあぁぁぁ！！」
「――ｃｒｅａｔｅ（クリエイト）　ａｖｅ（アヴェ）――」

再び紡がれるユリアの呪文。

そのアヴェはやつからは死角、俺の影に潜ませていたものだろう。
その速度は今まで俺が見た中でもトップクラス。
だがそのアヴェでさえも、２４番は体制を崩すとまではいかなかった。

アテナのグリップを握りなおす。

やつの体の硬さはアヴェを見て確認済みだ。
貫通力が自慢のアヴェでさえも、通用しない。

今展開しているのはテクニカル。
ノーマルにさえ若干攻撃力が落ちるシルエット。

――なら！

「アテナ、バスターソード！！」
《相棒！？》
「いいから！！」

バスターにするメリットが無いと踏んだのか、アテナは驚きの声を上げた。
説明してる暇は無い。
声を荒げて無理やり説得し、バスターソードに変形させた。

「カートリッジ！」

一発、カートリッジが排出される。
その間に俺は２４番の懐に入り込み、体がずれない様に確り踏み込む。

「ソードダンス……サードカラーズ！！」

剣は地面でなくヤツの体に直接叩き込む。

「あああぁぁぁぁ！！」

後ろに飛ばされそうになるのを必死に堪え、アテナを振りぬく。
さすがに体全体に掛かる衝撃には堪えられなかったようで、２４番はハデに吹っ飛ぶ。
そのまま施設の壁にぶつかり、砂埃と瓦礫の中に姿を消した。

「づっ！　――ととっ」

そして俺の手を襲った軽い痺れと痛みにアテナを落としそうになる。

《そりゃそうなりますよ》
「アテナ？」
若干声のトーンが落ちてるいがしないでもないが、そこはスルーさせてもらう。
「もともと、その攻撃は下から上に衝撃が来るんでしょ？」
「ん？　まぁ、そうだな」
次にふら付きながらもユリアもコッチに近づいてくる。
「自分に掛かる衝撃の向きは違うから、腕の負担も違ったんでしょ」
《その通りです。少しは私の方でも抑えられますが、筋肉への負担は前もって言ってもらわないとどうしようもありませんね》
「ぬっ……」
なんで行き成り俺は二人に責められてんだ？
いやそりゃねぇ、自分でも少し無茶かとは思ったけどさ……。
俺頑張ったんだよ？
褒めてとはいわないから責めないでくださいホント。
「ま、一応は良くやった、って所かしらね」

と、表情が一遍し柔らかく笑うユリア。
まだ若干砂埃が舞うソコを見ればどれだけココが使われてなかったか安易に想像できる。

「トドメ……刺さないとね」

消えそうな声が、俺の耳に入った。
それに俺は何も答えない、答えることが出来ない。
トドメを刺す……ソレは文字通りの意味。
あんな見てくれとは言え、殺すという事に抵抗が無い訳じゃない。
いや、どっちかってと抵抗が大半をしめている。
だけどアイツはこのままだと危険だ。
割り切らないといけない……。

「いいわよ別に。アンタは向こう行ってなさい」

俺の考えてることが分かったのかユリアが静かに言った。
まぁ、それだけ顔に出てたって事なんだろうなぁ。

「お前、気を使うこととか出来たんだな」

「ちぎるわよ？」
「ゴメンなさい！！」

直ぐに後ろを向く。

いや、シリアスな空気過ぎたから少しふざけただけじゃないですか。
思った万倍は怖かった。

ってかちぎるってなんだよ、ちぎるって。
よくそんな表現出てきたな。

《私としては相棒のＫＹさに驚きですよ》
「……お前に言われると立ち直れなくなりそう」
《そのセリフに私が立ち直れません。慰めてください》
「嫌だ」
《見捨てすぎですよ！！？》

なんて、いつもの会話をしながらユリアが終わるのを待っているつもりだった。
だけど……――。

「――え？」

俺の横を何かが通り過ぎた。

その何かは数メートル先まで地面を滑り、土ぼこりを巻き上げながら止まる。
それは紛れもなく、ユリアだった。
髪に隠れて表情は分からないが、ピクリとも動かない。

「っ――！！」

踵を返し、ユリアをやった本人に対峙しようとして……俺は弾き飛ばされた。

「ぐ……かはっ」

肺の中の空気が全て外に押し出された。
だが、押し出された分の空気を補充できない。

《相棒！　早く立ってください！！》

声が聞こえるが、何を言ってるか分からない。
視界も触れて、意識が朦朧とする。

おそらく顎に攻撃を受けて脳震盪を起こしてるんだろう。
意識が切れるまで時間の問題なのは明白だ。

立ち上がろうと手に力を入れても震えるだけで、体制は一向に変わらない。

ヤバイ。

頭に最悪の結果が、俺の結末がよぎる。

――視界に影が掛かった。

「ゴメンなさい。これは私の役割（しごと）なのに……」

言う事を聞かない体に鞭打って顔を上げる。

「後は私に任せてね」

かすれた視界に映ったのは紫の髪。

そして俺の意識はそこれ落ちることになった。

ウィズの小部屋

ウ「って訳で今回はココで終わり」

ア《また中途半端なところで終わりましたねぇ》

ウ「まぁ、キリがいい所を探すとココまでだったんだよ」
ア《へぇ～》
ウ「今日見なさそうですね」

コメ返し

バルディッシュさん

ウ「この人はいつもなにか送ってくれるなぁ……」
ア《では飲んでみます？女性になれるそうですよ》
ウ「いやいやいや、ここで飲んだとしても特に面白くないだろ？」
ア《まぁ他に人がいないようでは特に変わりませんかね》
ウ「なら飲む必要ないだろ」
ア《ならやめておきますか》
ウ「ふぅ……」
ア《本編まで大切に保存しておきましょう》
ウ「……え？」
ア《ま、未定ですがね》

NKさん

ウ「ポックリは行ってません」
ア《まぁ、死にかけていた事は確かですけどね》
ウ「とりあえずスピードの出しすぎには気をつけます、はい」
ア《主に私のためにですね》
ウ「はい……はい？」

麗×零さん

ウ「いや、アテナと作っても最大３つだし……」
ア《相棒がこちらに思考を割くとと戦闘なんてできませんものねぇ》
ウ「つかそんな器用なこと俺には出来ない」
ア《因みにレイラは今六課でシャーリーさんが直してくれている最中ですので、お気遣い無く》
ウ「アナザーは本当に小ネタでしかないからなぁ」
ア《私としては別にレイラなら魔改造してくれても……》
ウ「駄目だからね！！？」

57．24番（後書き）

お久しぶりです、八神煌斗です。

ここで一つお知らせ、というかお願いです。
本編に影響するようなコメは遠慮していただきたいです。
『〇〇を送ります』『俺が〇〇してやる』などの一言はこちらとしては非常に困ります。
というより、私はそう言うものを本編に入れるつもりは一切ございません。
そう言うときはちゃんと前もって連絡させていただきますので、お控えください。

以前出していた、という意見は、その方との交流があり、その為出したもので有ります。

今後多いようならばキャラコメを止めさせていただきます。

それでは次回お会いしましょう。

58．家族三人

「――っ」

頭に電気が走って、重いまぶたを開いた。
まだ少し霞む視界に映ったのは、灰色。
それが天井の色だと気づくのにはそう時間は掛からなかった。

体を起こして周りを見るが、全く知らない部屋だ。

ここがどこなのか、それを考えようとして、目の前に有った扉が開いた。

「あ、起きたんだ？」
「ユリア？」

そこに居たのは紛れも無くユリアだった。
しかしその格好はバトルドレスを着ているわけでもなく、普段着。
頭には真新しい包帯が巻かれている。

「あれから、どうなったんだ？」
「倒したわよ。……まぁ、私も気づいた時には終わってたんだけど」

右手で頭をかきながら、何故か気まずそうに答えるユリア。
と、手首にも包帯が見えた。
この調子だと服の下にも包帯が巻いてあるんだろう。

そういえば心なしかユリアの眼が赤い。
元々どこか赤みのある紫だったが、今は特に赤い。

「お前、眼も怪我したのか？」
「は？　何でそうなるのよ」
「いや、だって赤い――へぶぅ？！」

額に衝撃と激痛に俺は再ベッドへ沈む。

「お、おおぉおおぉ……」
「寝ぼけてるんじゃない？」

そんな訳があるか。
何よりお前が攻撃してきたのが何よりの証拠だ。

ってちょっと待て。
さっき聞き流しそうになったけど――。

額をさすりながら体を再び起こす。

「なぁ、さっき終わってたって言ったか？」

「言ったわよ」

ふむ、と手を顎に当て考える。

終わってたって事はユリアがやった訳じゃない。

勿論言うまでも無く俺でもない。

ならはや姉たちでも増援に来てくれたのか？

スバルたちが連絡入れてたらソレが一番自然だけど……。

「ま、来たら分かるわよ」

ここ六課じゃねぇし、そのユリアの一言でその可能性は無いんだろう。

だけど、気絶する前に見たのは間違いなくユリアだったし……。

「早く来なさいよ」

「あ、ちょっと待てよ」

ユリアは最後に言い残し部屋を出て行った。

俺は慌ててベッドから抜け出し、ユリアを追いかけた。

「ってアイツ、どこに言ったんだよ……」

完全に見失った。
アイツが部屋を出てから直ぐだったのに、もう姿が見えなかった。

とは言っても、あいつの魔力を辿れば迷う事なんてない。
俺は真っ直ぐ魔力を辿りながらひとつの部屋の扉をくぐった。

何かの研究室だったんだろう。
部屋の隅々に、何なのか想像も付かない装置があるし、大小様々なコードやパイプが乱雑に置かれている。
中央には嫌でも目に付く程大きなモニターも設置してある。
色は白で統一してあるくせに清潔感を感じさせないもの研究室らしさを感じさせる。

そんな部屋の隅、そこにユリアがパネルを叩いていた。

「おいユリア。来いって言っときながら置いてくなよな」

俺の声が聞こえたんだろう。
ユリアは大きく肩を揺らし、顔を背けた。

「あん?」

おかしい。

普段のアイツなら――

「さっさと動かないアンタが悪いんでしょ」

――くらい言ってきそうなものを……。

不信に思って俺はユリアに近づく。

「お前、やっぱどっか怪我してたのか？」

「な、なんで？」

顔をそらしたまま、俺の質問に大人しく答えた。

……やっぱおかしい。

つか気持ち悪い。

「おい、こっち向けっ……て……？」

半ば強引にユリアの肩を掴み、俺の方を向かせる。

そして俺は、言葉を失った。

眼の色が、翡翠色だった。

ユリアの眼の色は紫。それも結構深い、そのくせ澄んだ色をしていた。

だけど、目の前に居るユリアの眼の色は、翡翠色……。

良く見たらユリアとは髪の長さも少し違う。ユリアは膝辺りまで髪があるけど、目の前の人は腰に掛かる程度。
いや、これでも十分長いけど。

お互い言葉を失い、ユリアだと思っていた目の前の女は顔をそらす。
信じられない。
一瞬で、俺の眼の前に居るのが誰か、予想が付いた。
でも、それが信じられないんだ。

「ひ、久しぶり、ウィズ君。大きくなったわね……」

遠慮がちに、顔を背けたまま。
それでも視線だけはコッチをチラチラと盗み見ながら、言った。

「……母さん？」

気づけば、俺はそう言っていた。
自分で言って、確証は無いのに確信した。

今、俺の目の前に立っているのはユリアじゃなくて、アリヤ……俺の母さんだ。

だけど、そこからお互い何も言えずに、ただ気まずい空気が流れる。

――話したい。

母さんが俺を捨てたんじゃないことも分かってるし、本当に恨んでいる訳でもない。
でも何を話していいか分からない。
多分だけど、母さんも俺と同じ気持ちなんだろう。

「ったく、やっぱりこうなったのね」

後ろから声がして振り向く。
そこに居たのは開いた扉に肩を預けるように寄りかかり、呆れた顔をしているユリア。
瞳の色が紫だから間違いない。

《アリヤさん、なんの為に私たちが気を使ったと思ってるんですか？》
「だ、だって何を話したらいいのか分からないし……」

ユリアの首に掛かっていたアテナの一言に、また視線をそらす母さん。

「言い訳しない！」

《言い訳しない！》
「うぇ！！？」

二人に怒鳴られ、動揺しだす母さん。
そして俺は、母さんの口から出だ言葉を聞いて、思わず噴出してしまった。

――うぇ！？――

これは俺も良く使う口癖だった。

「ちょっと！　なんでウィズ君まで笑うかな！？」
「ご、ゴメン。でも……プッ」

なんか、緊張してた自分が馬鹿らしくなってきた。

で、それから暫くもしないうちに俺たちは改めて机をはさんで向かい合って座っていた。
なお、母さんたちが俺を捨てた理由はアテナ達に聞いていたので特に話すことも無かった。
母さんが謝ってきたけど、俺も普通に許したし。
それに今は問題はコッチじゃなくて――。

「で、お母さんは何で私に連絡しなかったのかしら？」

俺の隣に座ってるユリアだ。

さっきから俺でも滅多に見た事の無い射殺さんばかりの眼でジトッと母さんを睨んでいる。

「だ、だから連絡手段が――」

「私たち、殆ど同位体なんだから感応伝達くらい出来たでしょう？」

「……忘れて――」

「た訳ないわよねぇ？　教えてくれたのお母さんなんだから」

「うっ……」

たじろぐ母さん。そしてズイッと身を乗り出すユリア。

「（おいアテナ。お前何とかしろって）」

≪（私に単独で死地に赴けと？　この人でなし）≫

「（……いや、今回は俺が悪い）」

確かにあの二人の間に入るのは相当な覚悟が要る。

暫くは知らんぷりでも――。

「ウィズ君ー！　ユリアちゃんが苛めるー！」

「って、考えてるそばからか！！？」

半泣きになりながら俺の陰に隠れるように移動する母さん。
必然的に俺が間に挟まれる形になるわけで、んでもってコレはかなりマズイ。

「へぇ……。ウィズはお母さんの味方なんだぁ。へぇ～」

ユラリと、顔だけをゆっくりと俺に向ける。
前髪が眼にかかってる上に半眼なもんだからメッチャ怖い！

「い、いや！　ユリア、違うぞ！　コレは――」
「ウィズはユリアちゃんの味方なんだ？」
「ひぎぃ！？」

今ミシっていった！　つか、母さん握力つよ！！

「ウィ～ズ～？」
「だから、俺の話を聞けーー！！」
《あ。相棒がキれた》

その後ユリアが落ち着いて、全員が元の位置に戻るまで３０分かか

った。

「だから、さすがに接触は出来なかったのよ。接触したらユリアちゃんに危険があると思って……」

「本当は？」

「会い辛かっただけです」

ユリアに頭下げてるのはほっといて。

母さんの話を纏めると――。

俺をはや姉の所に預けてから母さんは管理局に戻り、ユリアを生み出した。

その時には親父は行方をくらまし、母さんも連絡は取れないらしい。

でだ。ユリアと別れた後も母さんは管理局に残った。

管理局に俺は入隊すると言う話を聞いたからしい。

ヘタに姿を消すより、局に居るほうが俺の情報も入りやすいし安全と考えたらしい。

ただ、それでも俺の前に現れ辛くて、本当に見守っているだけだったらしい。

あ、でもレジアスの方には何かしらの圧力をかけていたらしく、俺でもギリギリ死なないレベルの任務を回していたとか。

しかしソレが局の上層部にバレて母さんは本局から別の場所に移される事になった。

時期的にも任務の危険度が上がった時と重なる。

本来なら無人惑星に飛ばされても文句は言えない状況。
でも母さんは魔法想像者（マジック・クリエイター）と呼ばれる程の有望な人物。
よって母さんは研究責任者って階級に上げられ、去年の始まりにここじゃないミッドの研究室に回された。
表面上は昇給だが、結局は左遷って事だ。

ここでユリアに連絡云々の話だが、元々ＦＳ計画で生まれた者たちは反乱を起こした。
管理局としてはそいつ等を野放しに出来るはずも無く、何度も母さんに居場所を聞いたらしい。
もっとも母さんはマジで知らなかったから答えなかったらしいけど。

「ユリアちゃんが起動六課に居るって分かったときも大変だったのよ」
「大変って、ユリアの存在の話し？」
「そうなのよね。情報操作も矛盾が出ないように色々考えたし」

困った顔でペロって下を出す母さん。
いや、可愛いんだけど、母さんの実年齢って考えるとギリギリアウトだろ。

「それに……」

笑顔から反転。急に表情が暗くなった。

「会うつもりも無かったから。私には会う資格なんて……」

膝に置いていた手を握り締め、震えた声で搾り出すように言った。
俯いて表情は見えないけど……俺はソレを気の毒に思う事は無かった。

それはユリアも同じだったらしく――。

「ふざっけんじゃないわよ！！」
「っ！？」

机に足を置き、片手で母さんの胸倉を掴んだ。
当然母さんの顔には困惑の表情が浮かんでいる。

「私に危険がとか、資格とか、さっきから言い訳ばっかりして……！」

ギリッと、歯を食いしばる音が聞こえた。
ユリアは今までに見たことも無いほど、アング達と対面していたときでさえ見なかったほどの怒りに震えている。

「結局、アンタが言ってるのは全部自分勝手な自己満足でしかないじゃないの！」
「ち、違う！　私は本当にユリアちゃん達の事を――」

「違わないでしょ！　仮にも母親なら、子供にとって母親がどんな存在か分かってるでしょう！？」

ユリアは感情を爆発させているのか止まる気配が無い。

「私はね、会いたくてしょうがなかった。一秒でも忘れたこと無かった。それでも、会えなかった！　手掛かりなんて一つも無いんだから同然よね！？　でもアンタは、私達が……私がココに居るって分かってたくせに、無視してたんだ！」

「……」

「結局、母親なんて名乗ってるけど……名乗ってるけど……」

次第に最初の勢いは消えていき、目頭に涙がにじみ始めた。

声も、途切れ途切れ、嗚咽も出てき始めている。

「わ、わたっ……私は……ずっと……」

限界だったんだろう。

瞳からは涙が溢れ、もう上手く喋れてもいない。

「なっ、なんで……会いに来てくれっ、くれなかったのよ……」

糸が切れたように、ユリアの手はほどけ、そのまま母さんの胸へ顔

を沈め、泣きはじめた。
いつも気丈に振舞っていたユリアの、その姿に俺は言葉を失った。
母さんはそっと、その両手でユリアの事を抱きしめた。
俺はその光景を、二人の気がすむまでずっと見ていた。

「アンタの前で泣くなんて……不覚だわ」
「開口一番それか、この野郎」

その後、調子を取り戻したマイシスターはジト眼でそんな事を抜かしてくれやがりました。
切り替えが早い事はいい事ばかりじゃないって事かね。
因みに座ってる位置も母さんの隣に変わっている。

《皆さん、口を挟むようで悪いのですが……》
「あ、どうかしたか？」

首元でアテナが控えめに声を出した。

《相棒を含め、これからどうするのですか？》
「どうするって何がよ？」
《接触したこともありますが……これからお互いにどういう距離感を持っていくのかと言う事です》

言われて見れば確かに問題だよなぁ。
俺もだけどそれ以上にユリアは反乱者とかってなっちまってるんだろうし。
なのに――。

「何言ってるのよ。私はお母さんと暮らすわよ。あ、下につくってのもありよね」

シレッと、問題発言のユリアさん。
母さんも満足げに微笑まないでくれませんか？

「理由なんて後でもでっち上げられるわよ。お母さん、仮にも責任者なんだし、クロノやはやてっていうコネもあるしねぇ～」
「私も上にはいくつかコネはあるわね。情報操作は簡単だしね」

両手を組んで頭に回し、深くソファーにもたれるユリア。
それに対して母さんも怖いことを言う始末。
なんかアホらしくなってきた。

「ウィズ君？　頭痛いの？」
「いや、大丈夫」

心配してくれる母さん。この原因のひとつは母さんだからね？

「それより、アンタはどうするのよ？」
「……なにが？」

ユリアは俺を心配することもなく、いつも通りに接してくる。

「だから、アンタもお母さんと暮らしたり、下に付くの？調度六課は解散するんだしいい機会じゃない？」
「あぁ、そう言う事か」

確かにいい機会だ。
コレを逃したら簡単に移転なんて出来ないだろうし。
さて……どうすっかなぁ～。

「直ぐには決めなくていいわ」
「母さん？」
「まだ解散するまでは少しあるんでしょ？」
「あぁ、うん」

まだ二月だし、正確な日程は忘れたけど一ヶ月あるのは確かだ。
今の時点でどこに行くか決まってないのは俺だけだけど……。

「ソレまでに申請してくれれば大丈夫だから。そんなことより…」
「？」「？」
突然いい顔になった母さんに、俺とユリアは顔を見合わせる。
「ウィズ君達がお世話になったはやてちゃん達に挨拶に行きましょう」
ウィズの小部屋
ウ「と、いう訳で２４号を倒したのは母さんでした」
ア《これ相棒の活躍の場だったのではないでしたか？》
ウ「……俺だってそう聞いてたよ？聞いてたけど……」
ア《大方強くしすぎて相棒じゃ勝てないと判断されましたか？》
ウ「うぐっ！？」
ア《あ、図星でした？》
ウ「そうだよ！ここで俺が４番解除とかアインス姉さんの助力無し、ユリアも負けたのに勝つと中途半端なパワハラが起こるとか言って、無しになったんだよ！！」
ア《あ～、それはご愁傷様です》
ウ「チクショーーー！！」

NKさん

ウ「新キャラって言ったら新キャラ？」
ア《まぁ、そうですねぇ。ちゃんと登場したのは今回が初めてですし》
ウ「にしても２４番ってなんであんなに強かったの？」
ア《脳が身体へのリミットを掛けていなかったのでしょう。それに相棒の原型なら５番解除状態と言う事でしょうし》
ウ「つまり、俺一人じゃ勝てるわけが無いってことか……」
ア《そうですね。絶対に勝てません》
ウ「絶対って付けられた！！？」

麗×零さん

ウ「ユリア見つかったなぁ。以外にあっさり」
ア《まぁ、元々本人も隠れている訳ではありませんでしたからね》
ウ「母さんの手掛かりを探すためだったのに、本人に邂逅しちまったんだよな」
ア《相棒も会えたんですし、よかったじゃないですか》
ウ「ま、そりゃそうなんだけどな」
ア《あとは相棒では２４番には勝てませんでした。理由は上に》
ウ「でもバスター聞かないし、フルドライブはカートリッジが使えなかったし。そりゃ無理だって」
ア《結局最後はヘタレ発言なんですね？》
ウ「……」

翡翠さん

ア《お久しぶりです～》
ウ「見事に見破られたな……」
ア《相棒が無能って事がですか？》
ウ「違うよ！？出番が無いって……あれ、同じか？」
ア《同じでしょう？そのうち相棒は消えていくんですね、分かります》
ウ「マジで！！？」

58．家族三人（後書き）

お久しぶりです、八神煌斗です。
ウィズと２４番を戦わせるつもりだったのですが、上記でも述べたように可能性が限りなくゼロになる為に急遽変更しました。
実はこの辺で掲載時期が延びてしまいました、すみません。

アリヤと共同戦線って手も考えましたが、ウィズが足引っ張るだけだろうし、感情的になって戦闘にならないだろう、と言う事で却下。
そして最後にはアリヤ最強になりました。

まぁ、個人的にはパワハラや主人公無意味覚醒！よりマシだと割り切っています。

皆さんも言いたい事は色々在るでしょう。
言っていただいて結構です。それを糧に今後更なる精進をするつもりですので。
登録していない方でも感想を書けるようにしていますので、お気軽にご指摘ください。

さて、いよいよ架橋に入ってきました。
ってか終わりが見えてきました。最後まで息切れしないように頑張らせていただきます。

そして最後に。
今年も年末、年始企画なるものを考えています。
以下に考えてるものを上げておくのでどれか選んでメッセージなり、感想なりで選んでいただきたいです。

ゼロの場合は私が勝手に選びますw

・他作者様とのウィズ、又ユリア中心クロス（この場合クロス作品ではなく、単なる二次作品のみ）
・ウィズ、又はユリアの多作品介入（『なのは』では無く別のアニメ、マンガ等）
・ウィズ、又はユリア空白期（一話の可能性あり）

こんなところでしょうか。
他にもこんなのは？っという意見も受け付けます。
実行するかは不明。

締め切りは来週の金曜日、１１月１２日までにさせていただきます。
あ、あと活動報告にも眼を通していただけると幸いです。
それでは！！

幕間．母は強し

アリアが研究所に戻ってきたとき、その惨状に言葉を失った。

銀色のマネキンの様な物体に、倒れている男女が一組。

どれだけ時が経っても、見間違えることの無い、愛する我が子達。

そのうちの一人、気を失っているんだろう。

脳を揺さぶられたウィズは必死に起き上がろうとするが、体が言う事を聞かない。

その隙にゆっくりを２４番が近づく。

――いけない！

そう思ったときには体は動いていた。

「目、覚めちゃったんだね」

ウィズを守るように、アリヤは二人の間に立った。

２４番には既にウィズしか見えておらず、ユリアは眼中にすらない。

何か引かれるものがあるのだろう。

ユリアはそう思いつつ、頭の中で術式を構築し始める。

ウィズが完全に気を失ったのが気配で感じ取れた。
そしてその瞬間、アリヤは下がると言う選択肢が自然と、当然消えた。

下がればウィズの身に危険が及ぶ。
そうなれば何の為に出てきたのか分からない。

この選択は、当然の選択だった。

「子供の喧嘩には手を出さない教育方針のつもりだったんだけれど――……」

静にその右手が横に上げられ、指先に灰色のスフィアが形成され始める。

「今さらよね。だって母親らしいことなんて何も出来てないんだから。……だから！」

悲しみを含んだ静かな呟き。
しかしその声は、どこまでも聞こえるような透き通った、決意の声。
その間にもスフィアは人の顔の大きさほどの大きさになる。

「これは、私の一方的な攻撃と、思ってちょうだいね！！――S

ｅｔ！　ｈａｌｃｏｎ（アルコン）――」

その叫びに呼応する様に、一瞬でスフィアは鷹の姿を模し、右手の甲にとまる。
ユリアのアヴェに比べるまでも無い強大な鷹（アルコン）。

「さぁ、受けてみなさい。成り損ないの母の愛ってヤツをね！」

左足を前に踏み出し、右手を大きく振りかぶる。
オーバーアクションにも見えなくない、その動きには一切の無駄をなくしている。

本能的に目の前のモノは敵だと感じたのか。
２４番は互いの距離を縮めようと走り出す。

だがその時点で既に手遅れ。なぜなら――。

――その行動を取った時点で、アリヤの思惑どうりなのだから。

「――ｂｒｅａｋ（ブレイク）！――」

一小節の短い詠唱と同時に、右手を振り下ろし、アルコンを打ち出す。

その速度はまたもアヴェとは比べ物にならず。

それはまるで電光の様。

アルコンは目の前の獲物へと、２４番の胸元へ接触する。

刹那、空気が爆発によって震える。
２４番の回りには爆煙が巻き起こり、砂埃さえ立ち込める。
視界は最悪。姿も確認出来るはずもない。

しかしアリヤは間を置かず、次弾を左手に創り上げる。
そのまま、流れる様に前傾姿勢のまま、アンダースローの様に振り切り２発目を打ち出す。

衝突。爆発。

姿が見えない癖に、見えているかのように更に撃ち込む。
その度、爆煙が巻き起こる。

５発目を打ち出したところでアリヤは打ち止めた。

魔力切れではなく、様子見。
その証拠にアリヤの右手にはアルコンが待機している。

先程までの騒音が嘘の様。
辺りには呼吸の音が聞こえてきそうな程の静寂。
だが、その静寂も長くは続かない。

「――きたっ！」

叫んだその瞬間、半透明の白いスフィアが打ち出され、数瞬遅れて漂っていた爆煙に穴が空く。
横に跳び込む形で回避。
同時に左手を付き、天地逆転したままアリヤは　打ち出す。
アルコンは吸い込まれる様に、開いた穴へと向かい――６度目の爆発。
だが今回は爆発と同時に２４番爆煙から煙りの尾を引いて跳びだしてくる。
直ぐさま体制を戻す。
今は立つ時間さえ惜しい。
膝を付いたまま両手を左右に広げ小さく唱える。
「――ｓｅｔ（セット）――Ｅｓｐａｄａ（エスパーダ）！――」

現れるのは獣ではなく、鋭く尖る半楕円形。
長さは１メートル強。

その直線部分の片端に小さな穴が空き、グリップが完成。左右に一本ずつ握る。

――そう、それは見間違う事なく、剣だった。

姿勢は低いまま、自身を弾丸の様に打ち出す。
さながら、左右に広げたままの対の剣は小さな双翼。

「フッ――――！！」

右で切り掛かる。
その速さ自体は遅い部類に入るだろう。
しかし、それは通常での事。

弾丸となったアリヤから放たれる斬撃は限りなく速かった。

だからこそ――

「え――――？」

その刃が素手で受け止められた時、アリヤの動きは一瞬止まった。

その隙を２４番が見逃す筈もない。
刃を受け止めた手とは逆の手で拳を作り、構えた。

「しまっ――ｓｅｔ（セット）！」

自分のミスを後悔するより先に、自身を再起動させ、新しい構築式を組み立て上げる。

受け止められた剣を破棄。右手に再度同じモノを生成。

「――Ｅｓｃｕｄｏ（エスクード）！――」

そして左右の直線部分を結合させ、盾を作り上げだ。

一瞬遅れて、拳が盾を襲う。
その衝撃にアリヤの体は少し後退し、顔は苦渋に染まる。
それほど、２４番の拳は重い。

「（けれど、受け止めきれた）」

そう。
一発目は。

――けれども

再度構えられる拳。

――シールドがどれだけ強硬でも

振り下ろされ、受け止める。

――アリヤ自身が、受けきれない。

「キャァ！」

後退ではない。

体に浮遊感を感じる間もなく、アリヤは飛ばされた。

「Ｓｅｔ（セット）――ぐぅっ！」

ガスン、と鈍い音を起ててアリヤは自分が今作り上げた壁に背中からぶつかる。

アリヤは体を犠牲にして、後ろに飛ばされない様にした。
自分の後ろには気絶したウィズとユリアがいる。
今の距離は１０ｍもない。

つまりこれは距離との戦い。
この１０ｍが０になったとき、アリヤの負けと同義だった。

（この距離をどれだけ保って……いいえ。どれだけ早く倒せるか）

表情には決して出さず、アリヤは分割思考を使って考える。
けれども結果は全て良いモノではなかった。

手がない訳ではない。
しかし、方法がなかった。

その方法を取れば必ず２４番はウィズに襲い掛かり、アリヤ自身も守りきる自信がなかった。

ズキリと、背中に痛みが走り、ついそれを表情に出してしまった。
それを今の２４番が見逃す筈がなかった。

アリヤに向かってさほど離れていない距離を更に詰めてくる。

「くっ――！」

元々アリヤは遠距離魔導師。
遠距離から相手に詰める時間さえ与えず、短時間で決着をつける戦闘スタイル。

当然詰められた時の為に距離を開く魔法もある。
だがアリヤにはウィズと２４番の間に居続けるしかなかった。

そしてアリヤには戦闘経験が著しく少なかった。
決定的な隙を見せ、つかれたら対処方がなかった。

「ハイペリオン！」

諦めかけた時、アリヤの前にベルカ式の魔法陣が現れた。
驚き、後ろを振り返る。
そこに居たのは、立っていたのは……ユリア。

「っ。……ユリ――」
「何ボケっとしてんのよ！！」

右手で頭を抑え、前屈みになりながら怒鳴る。
頭からは血が流れ、良く見れば視線もぶれている。

「うけとり――なさい！！」

そう叫んでユリアが投げたモノをアリヤが手に取り、直ぐに確認する。

いや、実際確認するまでも無かった。

自分達は同位体。

たとえ数年の時離れていたとしても、その考えが分からないはずがなかった。

投げ渡されたのは……ベガ。

アリヤはすぐさま右手首にベガを装着し、ベガを目覚めさせる。

「セット……アップ！！」

だがそれは、ユリアの時の様なレザーグローブではなく、黒金装手（フルメタル・ガントレット）。

指先が鍵爪になっており、至る所が鋭利に突き出す。

鈍く灰色に輝く光を受けたその容姿はまるで堕天使。

２４番はその姿に脅威し、咆哮しつつアリヤに走り迫る。

だが、アリヤは臆することなく、その怪物を睨みつける。

「……目は覚めてるわね、ベガ」

《無論です。マスターこそ私の扱い方を覚えてますよね？》

「当たり前でしょう？」

距離は縮まる一方。
アリヤはまだ動かない。

「さぁ、誘ってきたのはアナタよ。私の気が済むまで……――」

装甲に包まれた右手を後ろにする様に、半身を取る。
その鍵爪の先にはスフィアになる過程を飛ばして出来上がったアルコン。

「踊っていきなさい！！」

アルコンが飛ぶ。
それはまさに光だった。
アリヤが腕を振った刹那、２４番の胸部で爆発が起こり、動きが止まる。

その隙にアリヤは右手に剣を作り出す。
しかしそれもまた、今までも半楕円形のものではなく、自身の身長程もある破壊剣（バスターソード）。
その形はアテナのバスターシルエットに酷似していた。

アリヤはバスターソードを片手で握り、前傾姿勢のまま２４番に向かって走り出す。

《随分早い終幕ですね》
「結局、私の相手には……」

ベガとアリヤは軽く会話を交わす。
戦闘中とも思えない気軽さで。

そしてアリヤは高く飛び上がる。
２４番の頭上へ。

だが２４番がソレをみすみす見過ごす訳でもない。
手に魔力スフィアを作り出し、打ち出す。

「ベガ！！」
《――Ｅｓｃｕｄｏ（エスクード）！――》

一瞬だけ張られたシールド。
それは無駄な魔力を一切排除し、当たる瞬間のみ展開された。

「私の相手には、役不足なのよ！！」

落下の際、自分の後ろで魔力をブースター代わりに噴出させ、勢いをつける。
そのまま落下速度も味方に付け、アリヤは一文字に２４番を叩きき

った。

文字通り真っ二つに切り離された２４番。
しかし切り離されても倒れることは無く、その体を繋げようとしているのか触手の様なものが生え、お互い絡み合い始める。

だがその光景を見てもアリヤは動揺することも無く、次の行動に移る。

「ベガ、封印するわよ！　ユリア！！」
「は、はいぃ！？」

突然の呼びかけに取り乱すユリア。
しかしアリヤはそんな事気にした様子もなく続ける。

「２４番を封印するわ、手伝って！！」
「手伝ってて……」

さすがのユリアの動揺するしかなかった。
今までこそ、その強気な正確でどうにか乗り切ってきたが、母親を目の前にした今、年相応にまで戻っている。
それは単に母親、アリヤの記憶があってこそなのだが。

「アナタにしか頼めないの。私と同位体である……私の娘にしか！！」

「――！」

その一言にユリアの目の色が少し変わる。
その一言をずっと待っていた。いや、正確には言ってほしかった。

「……どうすればいいの？」

ユリアの中でまだアリヤを許した訳ではない。
だが、芽生えた気持ちは『今の自分を見せ付けてやる』だった。
ここまで自分は一人で成長したのだと。
アリヤ（母親）が居なくても、ココまでやれるのだと。
その気持ちの奥に本心を隠していると、自分で気づいていながら……。

「術式はベガに入ってるから起動させて、対角線上に２４番を置いて。そしたら私が封印させるから！！」

「……」

ユリアは投げ渡されたベガを受け取りレザーグローブに変化させる。
そして直ぐに術式を起動。
２４番が対角線上に来るよう位置を移動させる。

「コレでいいの！？」

「さすがユリアちゃん！　動きが早い！！」

軽口を叩きつつ、アリヤも術式を起動させる。

二人の術が起動した瞬間、２４番を通るように二人を灰色の線が一本出来上がる。

「――っ！？」

ユリアの顔が歪む。

「ユリアちゃん！」
「いいから続けなさいよ！　付いていくから！！」
「――くっ！」

アリヤはそれ以上心配の言葉を掛けず、術式の起動を急ぐ。
ユリアの限界量がギリギリだと言う事を理解していると言う事だ。

元々、同位体だと言っても、分割思考（マルチタスク）の使い方は経験だ。
その差はどう足掻いても、よっぽどの例外が無い限り埋まる事は無い。
だからと思い、ユリアにベガを渡したのだが……それでも差はあったようだ。

ならば心配している時間も惜しかった。

一刻でも早く終わらせることが、最善の策だと思ったのだ。

「――囲め、戒めるべき者を――」

アリヤが第二節の術式を紡ぎ、２４番をピラミッド型のゲージが囲い込む。

「――隠せ、この世に在らざるべき者を――」

第三節目の術式。
２４番を囲っていたゲージが少しずつ上から圧力が掛けられるように縮み始める。

「（！？　そんな……まさか――！！）」

しかし、途中で２４番が押し返し始めた。
これにはアリヤも驚きを隠せなかった。

今展開している術式は、今の様な万が一を考え、２４番専用に作り上げた封印魔法。
だが現実は押し返し始めている。

アリヤは自分が計算を間違えるような事は無いと思っているし、事実そうである。

ならば考えられる事は一つだった。

「（２４番が……成長してる！？）」

ソレしかなかった。

だが、それに気づいた所でアリヤにはどうしようも無かった。
この封印術式はアリヤの限界ギリギリまでマルチタスクを使う魔法だ。

一人専用で使う魔法を二人で使っているが、レベルを上げることは叶わない。
理由は封印術を使う前の戦闘。そのせいで一人で使う筈だった魔法をユリアとともに使用していた。

どうすることも……できない。

だがしかし、アリヤは失念していた。

子供の成長は、親が思うほど――

――遅くは無い、と言う事を。

「はあぁぁぁ！！」
「！？」

ユリアが叫び、術の効果が強まった。

「（ユリアちゃんの魔力が……違う！　術式を上書きしてる！？）」

アリヤが組んだ封印術式、その術式をユリアが一人用から二人用に書き換え始めた。
これならば一人用を二人で使うよりも、何倍も効率が上がる。

「このまま……潰れろ！！」

セリフ通り、２４番は一瞬にてゲージと共に潰れ始める。
そして、アリヤがその瞬間を見逃すはずも無い。

「――封印！！――」

アリヤが開いていた右手を握り、ゲージは小さな発光の後、消え去った。
まるで最初から、２４番もケージも無かったかのように――……。

「成り損ないでも……侮れないでしょ？」

ウィズの小部屋

ウ「えと……俺の母さんで問題ないよな？」
ア《間違うことなく相棒の母親ですね》
ウ「うそだぁぁぁぁぁ！！」
ア《あの戦闘センスは相棒には全く受け継がれてないようですね》
ウ「……アレだ、俺は親父似なんだよきっと！」
ア《トウギさんは強かったですよね？》
ウ「うっ……」
ア《ユリアさんは言わずもがなですし……やっぱり相棒だけですね、弱いの》
ウ「ぐはぁ！！？」

麗×零さん

ウ「なんか他のコメでもそうなんだけど、母さんの人気が地味にあるんだよな」
ア《強いのは今回で証明されましたが……可愛いという意見がチラホラ》
ウ「ん～……母さんが好かれるのは嬉しいけど、息子としては微妙な気分」

ア《後は相棒がヘタレとも言ってますね♪》
ウ「見ないようにしてたのに！！」

青いタヌキさん

ア《さぁ相棒、何か言う事が在りますよね？》
ウ「……アイツの現状、年末企画は流れました、ごめんなさい」
ア《よく言えました》
ウ「ふぅ……って、よく考えたら何で俺が謝ってんの！！？」
ア《相棒だからですよ》
ウ「理不尽だ！！」

NKさん

ウ「うわっ、こっちはユリアに萌えてる」
ア《まぁ、いつもは見られない姿を晒してましたからねぇ……》
ウ「にしても相変わらずユリアも人気だな……俺は？」
ア《相棒に在るわけ無いじゃないですか～、いいとこなんて無いんですから》
ウ「何気に酷いこと言われてる！！？」

幕間．母は強し（後書き）

上でも少し触れましたが、リアルの状況が酷く、計画していた年末年始企画が間に合いそうに在りませんでした。
何とか別の機会に書きたいと思っていますので、よろしければ待っていてください。

そしてその変わりにはなりませんが『４６．ユニゾン／姉弟共闘』の最下部に挿絵を掲載しておきました。
よろしければそちらも感想ください。

それでは皆さん、良いお年を！！

59．ご対面

さて、どうしたモンかなぁ……。

《諦めるしか無いでしょうね》

「簡単に言ってくれるなよ……」

ユリアをみつけたその日、俺たちはどこにも止まることなく真っ直ぐ帰ってきた。

時間は既に１９時前といい時間。

あの暴走族たちはスバルたちが既にゲンヤさんたちに引き渡して、現場も引継ぎ作業までやってくれてたから問題なく戻ってきたんだけど……。

「私、なんだかお腹痛いです」

「あ、あはははは……」

俺の後ろでお腹をさすってるティアナと苦笑いをしているスバル。

この後に起きる事が簡単に想像できるだけに二人の反応は間違ってない。

原因は俺の前でなんだかキャイキャイ言ってる二人なんだけど。

どうなることやら……。

「はや姉、いる？」

「ウィズか？開いてるよ～」

部隊長室の前に立ちノックをする。
まぁ、事前に連絡を入れてたし居るって事は分かってたけどな。

中に居たのははや姉一人だけだった。
リィンも居るもんだと思ってたけど、まぁ食堂あたりだろう。
時間もそんなもんだし、別に不思議なことじゃねぇか。

「あれ、ユリアはどないしたんや？」
「あ～……」

まぁ、当然の疑問だよなぁ。
ユリア探索ってことで出かけたんだし。

「その、さすがのアイツも今回の事には負い目を感じてるみたいでさ……」

勿論嘘っぱちだ。
いや、感じてるかも知れねぇけどだからって態度に表すヤツじゃねぇし。

因みに今は部隊長室の前で二人で色々計画を立ててるところだろう。
ふむ、ティアナたちを部屋に帰したのは間違いだったか……。
負担も少しは減ったかもしれないのに。

「まぁ、言う事は確かにあるけど、負い目を感じることでもあらへんのに」

因みに予め事情は連絡している。
だからこそこの理解力なんだけど……。

ゴメンはや姉、先に謝っとく。
今からすっごく疲れると思います。
主に精神的な感じで。

「アテナ、二人呼んでくれ」
《了解しました～》
「……二人？」

アテナの間の抜けた声にはや姉の疑問の声が続く。
と――

「やっほーはやて、一週間ぶり～」
「ユリアちゃん、まずは謝りましょうね？」
「え～……」

部屋に入ってきて早々に起こられてるユリア。
手を振りながら入ってきたんだけど、その手を母さんに掴まれて不満そうな顔をしてる。
っつか、そこは不貞腐れるところじゃねぇだろ。

「なぁ、ウィズ」
「ん？」

いつの間に俺の隣に来たんだろうか。
はや姉が視線はユリア達の方を見たまま、俺の肩を叩いてきた。

「私、疲れてんのかな？」

「働きすぎなのは否定しないけど」
「ユリアが二人居る様に見えるんやけど。しかも一人は凄い大人の雰囲気やけど」
「あ～、それは全然現実ですよ？」

「なによはやて、私に大人の雰囲気が無いって言うの？」
「ユリアちゃんはまだ9歳でしょ」

「ど、どういうことやーーー！！！」

はや姉が壊れた。

「ちょ、ウィズ！どう言う事かキッチリ説明せんかい！」
「す、する！するから胸ぐら掴んで揺するのは止めて欲しいかな！！」

「元気な子なのねぇ、はやてちゃんって」
「……お母さん、それ違う」

横でこんな会話が聞こえた。

「はやて、さっき凄い声がきこえたけどどうし……ユ、ユリアが二人ーー！！？」

あぁ、更なる騒ぎの予感。

「では改めまして、アリヤ・エテルノです」
「は、はぁ。起動六課部隊長八神はやてです」
「えと、ライニング分隊隊長、フェイト・Ｔ・ハラオウンです」

後から入ってきたフェイ姉も含めて話す事になった。
向かい合うようにソファーに座り、はや姉とフェイ姉。
俺の方は母さんを挟んで座ってる感じ。

で、調度今ユリアと再開したところから、母さんの事まで話し終えたところだ。
因みにユリアは途中から母さんの肩を借りて眠ってしまった。
今回結構ムリしてたみたいだし、皆何も言ってないけど。

にしても俺の本名、エテルノって言うのか。
ん?でも前にユリアが母さんの苗字って言ってたような……。
なら親父の名前が神埼なのか?
いやいや、二人共ミッド出身なんだからそんな訳ないか。
……まさか偽名?その可能性が一番高い……ってか自然か。

「にしてもはやてちゃん大きくなったわねぇ。覚えてる、私の事?」
「スミマセン、薄っすらとは覚えてるんですけど……」
「ま、まぁ、そうよねぇ。アハハ~……ハァ」

突然話題を切り替えた母さん。
その質問にはや姉は本当にすまなさそうに答えた。
母さんもショックを受た見たいで、隠そうとはしてるんだけど隠し切れてない。
っつか母さんは9歳の子供の記憶力にどれだけ期待してたんだろうか。

「フェイトちゃんだったかしら?そっちの子は始めてよね?」
「あ、はい」

「知ってるわよ～。高町さんに並んで有名ですもんね」

顔が赤くなるフェイ姉。

っつかなんか母さんおばさんくさい。シャマル姉さんあたりと仲良くできそう……。

「はぅ！！？」

顔の横を何かが掠った！

少し痛かったから絶対に切れてる！

「ウィズ君、私のことおばさんくさいとか思わなかった？」

「そんなことないです！！」

「そう？なら良いけど……とりあえず立ってなさい」

「はい……」

静に母さん達の後ろに移動する。

ユリアの感の良さは母さん譲りらしい。

どうも俺は家族間では考える自由すら無いらしい。

ほら、はや姉たちも苦笑いしてるじゃないか。

……いや、二人共いつもの事、見たいな顔してる！！

と、俺がショックを受けてるうちに今度は母さんの表情が真剣なものになった。

「にしても、本当にありがとうね。はやてちゃん、フェイトちゃん」

「えっ。あ、あの頭上げてください。急にそんなん言われても……」

「そ、そうです。私達そんな頭下げられることなんかなにも……」

急に頭を下げた母さんを見てはや姉が慌てだした。
どうにも母さんのペースにまだ付いていけないらしい。

「ずっとウィズ君の事、見守っていてくれたんでしょう？」

さっきまでのふわっとした空気を全部無くして、真面目な母さん。
その言葉にどれだけの感謝の言葉を込めたのか理解したのか二人も真剣な表情になった。

「気にしないでください、アリヤさんにも事情があったんですから」

フェイ姉が答える。

「そうですよ。それにウィズは家族なんですから」

続いてはや姉が。
かく言う俺はその光景を見て、ってか二人が言ってくれた事に少し泣きそうになってたりする。

なんて言うか、局に入ってから今までの事を思い出したから。
でもここで思い出すことじゃない。
こみ上げてくるものをグッと堪える。

思いだすのは、まだ先で良い。

「ならはやてちゃんも私の家族ね！！」

「は？」「は？」

人が少し欝ってる時に、空気をぶち壊す明るい声が響いた。
言っとくけど「は？」って声は俺じゃなくて姉さんたちな。
俺はタイミング逃したから。

「あの、アリヤさん？それは――……」
「ダメ！お母さんと呼びなさい！」

あ～……なんかこういう光景最近良く見てたなぁ。
はや姉の立場は逆になってるけど。

「はやてちゃんはウィズ君のお姉ちゃんなんでしょ？」
「まぁ、はい」

混乱してるのか相手が母さんだからか、いつも自信満々で答えてることが曖昧になってる。

「で、私にお姉ちゃんと呼べって言ったわよねぇ？」
「ユリア、起きてたの？」
「ついさっきだけどね」

フェイ姉に答えながらも頭は母さんに預けたままのユリア。

「（っつかお前はや姉のこと姉さんって呼ぶの嫌だったんじゃないのかよ？）」
「（お母さんが正義よ。ジャスティスよ）」

あそ。
よくそう言う事普通に言えるよな。

「私はウィズ君のお母さん。はやてちゃんはウィズ君のお姉ちゃん。だから親子、でしょ？」

言ってる事は間違ってない。
間違ってないけど、間違ってる。
前提がもうゴチャゴチャだ。

《（まぁ、ユリアさんのお母さんの前に、ユリアさんと同位体ですからねぇ）》

「（……納得した）」

このメチャクチャっぷり、少しの違いはあれどまさにユリアだ。
ん～、やっぱ俺は俺を掛け合わせたもう一人の方に似てるって事かね。
トウギのヤツも母さんには似てねぇし。

「え、えっと……」

困った様に口ごもるはや姉。隣では何となく居づらそうなフェイ姉。
それなりに付き合い長いから分けるけど、諦めるしかないって分かってるけどなぁ～……ってかんじなんだろう。

「えぇと、急には恥ずかしいっていうか……」
「まぁ、そうよね。私だって急に言われたら混乱するわ」

なら言うなよ、とか思うのは無駄なんだろう。
母さんだし。
まだちゃんと会って一日も経ってないけど、正確は何となくわかった。
なんて言うか、勢いで生きてるって言うか、一個抜けてるって言う

か……。

《（どうしたんですか相棒。自虐なんかしだして。新しい趣味ですか？）》

「（違うからね！！？なんだよ自虐が趣味って！？）」

《（相棒ならあり得る話ですので……）》

「（ないよ！　そんなの全然ない！！）」

アテナは六課に居る間に徹底的に俺に対する考え方を改めさせないと駄目だな。

じゃないとこれから苦労しそうだ。

「だからはやてちゃん、一緒に晩御飯作りましょう！」

「……へ？」

俺の声ね。

はや姉たちはもう頭抱えてる。

「やっぱり親子の共同作業って言ったら料理でしょ！」

「なんでそうなるんや！？」

あ、はや姉口調が普段どおりになってる。

それだけテンパってるんだろうけど……まぁ、仕方ないよな。

「そうと決まればはやてちゃん！！」

「うわ！？」

サッと立ち上がったのでユリアが体制を崩した。

だけど母さんは気にしないではや姉の手を掴む。

「行くわよ！いざ、私達のヘブンへ！！」
「ヘブンってなんですか！？あ、ちょ、引っ張らんといて、こける！！」
「気合でカバーよ！」
「無茶な！ウィズ、助けて！ウィズゥゥゥ～～……」
「あ、待って！私も行く！」

はや姉の言葉に耳をかさずに部屋を出て行った母さんたちと、ソレを追いかけるユリア。
最後の叫び声が段々遠くなっていった。

部屋に何ともいえない空気が漂う。

「行っちゃったね」
「うん。なんか凄かった」

それしか言いようが無い。

「にしても晩飯作るって事は、後でまた呼ばれるんだろうなぁ」
「ならウィズ。模擬戦する？」
「なんで！？」

凄くいい顔で言われたけど、なんでそうなるのか分からない。
ってか何でそんな結論になった！？

「晩御飯までにお腹すかせておいたほうがいいよ」
「いや、確かにそうだと思うけどね！？」
「あと最近模擬戦してなかったし……どれくらい強くなってるか気になって」

結局そこですか！？
っつか仮にも俺今日結構な怪我してるからね、意識失ったりしてたからね！？

うん、ここは丁寧に断らせてもらおう。

「フェイ姉、気持ちは嬉しいけど、今日は……」
「テスタロッサの言うとおりだな」
「マジでか！？」

後ろからガシッと肩を掴まれた。
言わずもがなその主はシグナム姉さん。
あと、後ろにアインス姉さんもいた。

「主の叫び声を聞いて来てみたが、いいタイミングだったようだ」

いいえ、確実にバッドタイミングです。
まぁ、今目の前でフェイ姉も残念そうにしてるけど、別の理由なんだろうチクショウ。

「今日は体を動かした後見たいだな。これは期待できる」

何を根拠にそんな事を行っているんでしょうね、この人は。

「それにアインスとのユニゾン状態を慣らしておくのも大事だろう？」
「そうだね。じゃぁ行こうかウィズ」

何を思ったのかフェイ姉が空いている方の肩を掴んできた。

「む。まてテスタロッサ。私が先だ」
「駄目です。今回は私が先に提案したんですから」
あの二人共？
お願いですから俺の言う事も少しは聞いてくれないでしょうか？
とまぁ、そんな事も言えるはずもなく、どっちが先に戦るか揉めてる二人を見る。
「（アインス姉さん、助けてくれない？）」
「（諦めろ。それにユニゾンを調整するには良い機会だ）」
いや、まぁ、そうなんだろうけどね。
なんで俺の終わり方はいつもこんなんなんだろうね……。
《（相棒だからです）》
「（チクショーーーー！！）」

ウィズの小部屋

ウ「という訳で今回は全く内容の無い話でした」
ア《アリヤさんとはやてさんの対面ですが……まぁ、アリヤさんが一人楽しんでます形ですね》
ウ「今回の話で母さんの人となりは理解できたかと思うな」
ア《まぁ、今回のはそれが一番の目的でもありましたからねぇ》

夕さん

ウ「おー始めましてだな」
ア《まぁ、活躍しまくっては相棒じゃぁありませんからねぇ》
ウ「む……」
ア《まぁ、いいではないですか。最強なんて面白くないです。相棒は》
ウ「最後の一言いらない！！」

バルディッシュさん

ウ「ありがとうございます」
ア《今回は三人称での挑戦でしたので少し不安だったらしいです》
ウ「まぁ、一人称よりは少し書きやすかったらしいけど」
ア《アリヤさんは戦闘経験を積めば隊長陣とも接戦できる、という裏設定らしいです》
ウ「なんて恐ろしい……」
ア《相棒にもその片鱗があればよかったのにですねぇ》
ウ「ぐふっ！？」

ナイトホークさん

ア《む、レイラ派なんで消えてしまえばいいんです》
ウ「いきなり何言ってんの！！？」
ア《この物語の主役は私だと、なんど言ったと思ってるんですか！？あ、ヒロインでした》
ウ「どっちも違うから！？ってかデバイスと恋に落ちるなんて嫌す

ぎる！」
ア《それは意見の相違ですね》
ウ「ちがぁぁぁぁう！！」

麗×零さん

ウ「今回も母さんのターン！」
ア《なんだか私が抜かれそうなほどアリヤさんの人気が上がっているような……》
ウ「あ～、確かにそれは俺も感じてた」
ア《皆さん騙されすぎですよ！？あの人実年齢凄いことになってるんですからね！？３０でも可笑しくないんですよ！！》
ウ「おまえオミットされても知らねぇからな」
ア《！？》

59．ご対面（後書き）

さて、今回もずっとアリヤのターン。
今回の話で彼女の人となりを少しでも理解していただけたかな?と。
あの人は好き勝手に動かせるので好きです。
そうしていればアリヤの性格になりますしね。

さて、どこかで書いたような気もしないでもないんですが、ここで簡単な強さの図をば。

本気隊長陣＞U・FDウィズ＞リミッター付き隊長陣＞アリヤ・ユリア≧ウィズ＞FW

ってな感じですかね。

まぁ、さておき、本当に完結が迫ってきました。
なんか一話書くのにも色々と思うところがありつつ書いております。

この次はどうしようとか、次回作を書くべきか、とか。
まぁ、次回、次々回で終わる事は無いですが。

のこりも温かく見守っていただけると嬉しいです。
そして今回こそ、リクエストを受け付けようかな、と。

誰かとの絡みや、模擬戦、はたまた私が知ってるものであれば他一次作品とのクロスなど。
メッセージでの受け取りにさせていただきます。
感想などにあれば、誰のを採用したかなど、色々分かっちゃうので。

まぁ、あれば、ですけどね。

それでは！！

60．歯医者さんとこれから

「索敵状況は？」
《此方ではキャッチ出来る範囲には居ません》
《同じく。索敵範囲内に反応は無い》
「了解。そのまま索敵しておいてくれ」
《了解です》《了解した》

物陰に隠れながら、アテナとレイラの報告を聞く。
索敵も乱用しすぎると居場所がバレるからたまったもんじゃない。
もう少し向こうが無能なら常に索敵しておけるんだけど……くそっ。
思うように動けないったらありゃしねぇ。

「おじいちゃん……」
「大丈夫だヴィヴィオ。絶対に逃げ切ろう」

俺の腕の中に居るヴィヴィオ。
少しでも安心出来るようにやさしく声をかけてやる。
あんな小さい事がまさかこんな状況になるなんて思って無かったんだろう。
俺だって思ってなかった。

過ぎたことを悔やんでも仕方ない。
とにかく何があってもヴィヴィオと二人無事に出る。

とりあえず、出口までの距離はあと少し。
外に出てインビエルノで郊外まで出ればこっちのもんだ。
向こうも大きな動きは出来ないだろう。

周りに誰も居ない今のうちに一気に行くか。

そう思い、ヴィヴィオを抱き上げ、立ち上がったとき――。

《相棒、魔力反応です！！》
「な――っ！？　しまった、バインド！？」

体を緑色のバインドで締め上げられる。
そして同時、首に感じる冷たい感触。

「やっと見つけたわ」
「皆に連絡してくれ。……さぁ、観念しろ」
「く……」

ここは大人しくするしかなかった。

今の俺はとある部屋の中央にバインドで椅子に縛りつけられている。
ヴィヴィオは縛り付けられては居ないが、二人の女性に囲まれている。

「いーやーだー！！」
「いい加減観念しー！」
「あいたぁー！？」

拳骨で頭を殴られた。
……はや姉に。

「暴力で解決しようとするのは駄目だと思います！」
「ほぅ。未だに自分の立ち位置が分からないみたいだな」
「いや、俺はただ平和的解決を――そのレヴァンティンは仕舞ってほしいな！？」

因みにもう分かってるとは思うが、ヴィヴィオの周りに居る女性はなの姉にフェイ姉。

「いやー！　おじいちゃんも行かなくていいって言ってくれたもん！」
「あのねヴィヴィオ。ウィズ君の言うこと全部信じちゃ駄目だよ」
「うん。あんな風になったら駄目だ」

駄々をこねるヴィヴィオに二人がかりで説得している。
でもな、フェイ姉。あんな風ってなにかな？

《何なら代弁しましょうか？》
「いや、薄々分かってるからいい」
《ヘタレ、と言う事だろうな》
「レイラが言っちゃった！？」

でだ。
なんで俺……というか俺とヴィヴィオがこんな目にあってるかと言うと……。

「全く……いい加減観念したらどうだ。医務室でシャマルが待っているぞ」
「だから大丈夫ですから。うん、これ本当」
「ならこれを銜えてもらおか～」

そう言うのは意地悪な顔をしたはや姉。
その手にはキンキンに冷えてるだろうアイスキャンディ。

「謹んで遠慮させてもらいます」
「大丈夫やって。何ともないんやったら美味しいだけやから」
「いや、そんな奢ってもらうなんて悪い――」
「ゴチャゴチャ言わんでさっさと銜えーー！！」
「も、モゴーー！？　っ～～～！！？」

銜えた途端に口に走る痛み。
何て言うか……キーン！ってやつ。

「（お願い、取ってください！！）」
「ほれ。これでも大丈夫っていうんか？」

喋れないので念話で頼んだ。
意外にもはや姉はあっさり取ってくれたんだけど……いい顔でそんな事を言ってきた。

「いやでもさ、虫歯くらい放っておいたら治るって思うんだよ」
「ヴィヴィオもー！」

なの姉達に挟まれながらも手を挙げながら言うヴィヴィオ。

味方が居るのは嬉しい。
嬉しいけど……なんだろう、皆が俺を睨んでる気がする。

「困ったおじさんだね」
「ヴィヴィオに悪影響を与え始めてるね」
「あ、ちょ……なの姉、フェイ姉？　目が怖いですけど？」

いつの間にかレイジングハートとバルディッシュを構えてるし！
しかもコッチ向けてませんか！？

《確実に向けてますね、お二人とも》
《魔力も集まりつつある。マスター、今までありがとう》

魔力が集まってることくらい見れば分かります！
それにレイラ！今までって何かな！！？

「ウィズ君、久しぶりに私達のしつけだよ」
「久しぶりだし、シッカリやらせてもらうね」
「あ、やめ……ひ、ヒィィイイィィィィ！！？」

「おじいちゃん大丈夫ー？」
「もう俺の味方はヴィヴィオだけだよ……」

ぐたっりしていた俺にヴィヴィオが心配してくれる。
なの姉とフェイ姉もさすがにやりすぎたと思ったのか、目線を逸ら

して気まずそうにしてる。

「なのはママもフェイトママもめっ、だよ」
「あ、あははは……」

ふむ。なんか新しい光景だな。
なの姉とフェイ姉の二人がなんかタジタジだ。

「で、ウィズ？」
「……なんでしょうか？」

スッゴイ笑顔のはや姉に呼ばれました。
その笑顔がスッゴク怖いんですけど、そんな事も言えないから素直に返事する。
だってまだ椅子に縛られたままだもん、シグナム姉さんレヴァンティン構えたままだもん！！

「一応～聞くけど、ちゃんと歯は磨いてた……やんなぁ？」
「み、磨いてた、磨いてヒィィィ！！？」
「分かっていると思うが嘘を付けばどうなるか……分かってるな？」

く、首筋にまた冷たい感覚が！！？
あ、今プツって鳴った！！なんか首に伝ってる！！

「おじいちゃん、嘘付いたの？」
「ソレを今シグナムさんが聞いてるところなんだよ、ヴィヴィオ」
「ヴィヴィオは嘘を付いたらダメだよ？」

あ～、コラコラ。
俺を反面教師みたいにしてヴィヴィオに教育しない。
今回は本当に嘘付いてないんだから。

「あ、アテナ！　お前からも何か言ってくれ！　主に俺の無実を！！」

情けないが、今の俺の状態では言葉に信憑性なんか皆無なので援護を求める。

《確かに歯はちゃんと磨いていましたね》
「ほんまか？」
《まぁ、その後に色々食べてましたが》
「……へぇ？」
「ギャアアァァァ！！？　何言ってんの、何言ってんの！！？」

背中任せたら後ろからザックリいかれたんですけど！！？

「ウィズ？」
「う、嘘です！　アテナが言ってることは全部嘘だから！」
《む……因みに歯磨きの時間の極端に短く、歯磨き粉は苦いと言う理由でごくごく少量でした》
「いやあぁぁぁぁ！！！？？」

だって苦いんだもん。

って違う！！

「あんたまだ歯磨きできなかったんか……」
「その同情と哀れみを含んだ顔をどうにかしてください」

ぶっちゃけ怒られたほうがましだった。
みんなみんな可愛そうな視線を送ってくるもんだか……うん。
言葉にできない。

「おじいちゃん、歯磨きできないの？」
「はぅ！？」
《あ。相棒になにか突き刺さりましたね》

「小さい子は素直だからな」
「シグナム、それ何か違います」
「そうか？」

さて、話はそれてねぇけど逃げれる雰囲気なんじゃね？
なんて一瞬思った俺を殴り飛ばしたい。

何年姉さんたちと付き合ってきたんだよ、って話ですよ。
ここで逃げたもんなら俺は死ねる。
物理的に。

《じゃぁ逃げます？》
「お前今まで何聞いてた！？」
《今ならバインド解除に手を貸しますよ？》
「……マジか？」

どこまで行っても俺は変われないらしい……。
目から流れたのは汗だと思いたい。

「いや、やっぱりいい。死にたくねぇし」
「ほぅ……貴様は死んでみたかったのか？」

「なんかもう……ホントスミマセンでした」

5分後、とりあえず全力で謝ってみた。

その間に何があったかは想像してほしい。
いや……思い出させないで欲しい。
その後はまぁ、結局俺ごときが姉さんたちの鉄壁の陣営に勝てるはずも無く歯の治療をされました。
で、その夜。
《それで相棒？》
「ん～？」
自室のベッドに寝転んでいた時にアテナが声をかけてきた。
俺は体を起こし、ベッド横にある台の上に置いていたアテナを見る。
《もう六課解散まで一ヶ月切りましたが、どうするんですか？》
「あ～……そのことか」
《はやてさんからも催促のメールが来てますよ。今日明日中に提出しなければ自分の下に付かせる、と》
それはそれで魅力的なご意見で。

ってか本人はそうなると思ってるんだろうな。
どれだけ奇跡の部隊に所属していたっても、一ヶ月切ってるし。
何より俺の事はＪＳ事件で管理局に知れ渡っている。
この時期に俺の事を受け入れてくれる部隊は少ないはずだ。

でも……

《相棒。決まっているなら早く言ったほうがいいですよ？》
「やっぱ分かるか？」
《相棒とは長い付き合いですからね》

なるほど。
そりゃ納得だ。

《因みに私は何を言っているのか分からん》
「それ言う必要あったか？」
《私を忘れてるのでは無いかと思ってな》

正直忘れてました、はい。
だって最初の方にちょこっと出ただけだもん。

……ん？　最初の方ってなにさ？

《とりあえず、明日にでもちゃんとはやてさんに言ってください。

いいですね？》
「あぁ。分かってるよ」

明日……いや、今からでも行ってちゃんと言わせて貰う。
俺の考えをしっかり言って、納得してもらう。
納得して欲しいな。

ウィズの小部屋

ウ「と、いう訳で、次回はなんと最終回です！」
ア《私と相棒が結ばれてうっふんあっはんします》
ウ「しないから!?　なに嘘ついてくれちゃってるの!?」
ア《いえ、最後ですからココで言っておけば実現されるかと思いまして》
ウ「そういって今までされたことがあったか？」
ア《あー、そういえばありませんでしたね》
ウ「だろ？　諦めろ」
ア《余裕のある相棒にムカつきます》
ウ「なんで!??」

バルディッシュさん

ウ「俺の親父かぁ、どんな人なんだろうな」

ア《とりあえず血は繋がってないくせに相棒とそっくりでしたよ》
ウ「そうなの？」
ア《えぇ。アリヤさんに頭が上がらないところとか、ヘタレなところとか》
ウ「うれしくない！！！」

夕さん

ウ「母さんは本当にパワフルだなぁ」
ア《ユリアさんが似たんでしょうね。って事は将来ユリアさんもあぁなるってことでしょうか？》
ウ「なんでだろう。俺に居場所がない気がする」
ア《正解！！》
ウ「お前俺の味方するき無いだろ！？」
ア《相棒は好きですが命の方が大事です！》
ウ「ぬぅ！？　正論だけど納得いかねぇ！？」

NKさん

ア《アリヤさんは経験を積めばなのはさんたちと互角に戦りあえる、と私は予想しています》
ウ「そういえば前もそんな事いってたな？」
ア《えぇ。あの人は言わば才能を開花させることができなかった天才ですからね》
ウ「開花できなかった天才……なんか嫌な二つ名だな」
ア《……あとはユリアさんですか》
ウ「あぁ、べったりだったなぁ。まぁ、言動から予想は付いてたけどあそこまでとは……」
ア《年を考えれば当然なんですけどね》

60．歯医者さんとこれから（後書き）

お久しぶりです、八神煌斗です。
ギリギリ三月中に間に合いませんでした、ゴメンナサイ！！

そして、作中で言ったように次話で最終話です。
挨拶は次話を投稿した際にさせていただきますが、この場を借りて皆様に感謝の言葉を申し上げたいと思います。
こんな作品にお付き合いいただきありがとうございました。

さて、ウィズはどの道を選んだのか。
そしてその道を選ぶために選んだ方法とは。

最後ですのでウィズには活躍してもらいたいと思っています。

それでは次回、お会いしましょう。
では！！

61．意地と七番目

急にここ数年の事が走馬灯のように頭に浮かんだからだ。

あの二年。最初の頃は何度泣いたか分からない。
軽い気持ちで局に入った訳じゃない。だけど何度辞めようと思ったか分からない。

それでも姉さんたちに心配掛けたくなかった。
俺が辞めたら絶対に心配するのは目に見えてたし。

そして今年、六課に来た。
その報告を受けたときは本当に嬉しかった。
リニアの上でモニター越しでもはや姉にあえた時、冷静を装ってたけど、内心泣きそうになった。
多分安心できたんだろうな。

でだ。
ある意味あの二年間よりも色々あったなぁ。

最初にＪＳ事件。本当の意味で自分の事を知った事件。
戦う目的を思い出した事件。

自分がプロジェクトＦ．Ａ．Ｔ．Ｅの派生の研究、Ｆ．Ａ．Ｔ．Ｅ．ソルジャー計画の完成例。
その中でも特例の闇の書の封印装置として作り出された生態ロスト

ロギア。

そして間を空けずにユリア、俺の妹との邂逅。
トウギとの関係に、自分のやりたい事の再確認。
海鳴にあるマジックホールを巡っての決戦。

はや姉を殺すための能力で、はや姉達を救った。

最後に、母さんとも再会を果たした。

うん、こう振り返ると濃すぎるな。
一年の濃さじゃねぇって。

「さて、そろそろいくか」

椅子から立ち上がり、小さなカバンを肩に担ぐ。

《忘れ物はありませんよね？》
「んなもん、ねぇって」

首にかかったアテナに答えながら、一年間過ごした部屋を見渡す。
忘れものしてたらマズイしな。

「さて、最後の大一番。思いっきりやるか！」

俺は部屋を後にした。

「来たな」

「うん。来たよ」

訓練場で待っていたのはシグナム姉さん。

フォワードやなの姉たちは休憩中、俺達の会話を見守るように聞いている。

「準備が出来たら来い」

それだけ言ってシグナム姉さんはすでに廃墟に設定されているビルの上まで飛んでいった。

俺は肩に担いでいた荷物を降ろし、簡単に準備運動を始める。

「ウィズ君、頑張って」

屈伸をしている最中、なの姉は話しかけてきた。

後ろにはフェイ姉もいる。

姉さんたちは皆事情を知っている。だからこその一言だろう。
逆に何も知らないフォワードたちはいつもの俺とシグナム姉さんの模擬戦とは雰囲気が違うと言う事を感じとってるのか、不安そうな顔でコチラを見ている。

「うん。今俺に出来ること、俺の力を全部出し切る」

六課に来て初めて戦ったのがシグナム姉さん。
いや、そもそも俺が剣を握って初めての模擬戦がシグナム姉さんだ。
俺自身の成長を感じるにはこれ以上ない相手だろう。

「でも、なにも今日じゃなくっても……まだ解散まで日にちあるよ？」
「ゴメン。俺は一日でも早いほうがいいと思ってるんだ」

俺を引きとめようとするフェイ姉に、軽く答え俺はアテナを展開する。

レイラはユリアたちに渡している。
母さんもユリアも会えなくなる訳じゃないんだからと、今日は二人で町に出かけている。
少し悲しくなったのは内緒だ。

話がそれた。
貰ったチャンスは一度きり。フェイ姉が俺を止める理由も分かる。
アテナだけの展開。ココ数ヶ月見ていなかった懐かしい騎士甲冑に感触を確かめる。

「どうだ、そっちは？」
《実を言うと少々不安だったんですが、大丈夫ですね。むしろ相棒の魔力量が上がっているのでそれに比例して防御力も上がっています》

嬉しい誤算だ、と今はテクニカルになっているアテナを一度横に振る。

はや姉に出された条件。

――殺傷設定、卑怯な行為以外やったら奇策でもなんでも使ってええ。自分の持ってるもん全部出し切って、シグナムに勝ち。話しはそっからや。

正直言って、俺の意見は蹴られるのを前提だった。
だからこそはや姉の出した条件は納得ができる。

はや姉は、俺の進路に不満があって、それ以上に心配してる。

だからこそ到底達成できないような条件を出してきたんだろう。

六課にきて直ぐの頃だったら俺は諦めていたと思う。

だけど、今回ははや姉の思い通りにはならなかった。

その条件を俺が飲んだことだ。

この勝負、絶対に負けられないんだ。

勝って認めてもらいたい、ってのもあるけど、俺が俺を認め切れてない。

俺の戦う目的も、やりたい事も思い出した。

だけど、まだ自分を認め切れてない。

俺は――になりたいんだ。

「じゃぁ、行って来る」

ハイペリオンを展開してシグナム姉さんが立つ向かいのビルに立つ。

「最後に聞くぞ。本当に今日でいいんだな？」

地上は遠く、風も強く吹いているのにシグナム姉さんの声は簡単に聞き取れた。

「いいよ。これでズルズル引き伸ばしてたら、俺はまた逃げることになる」
「……そうか」

これ以上は話す言葉も無い。
シグナム姉さんは構えを取る。

俺は――――。

「はぁぁ！！」

構えを取らずに跳び、シグナム姉さんに切りかかる。

姉さんは直ぐに刃を止める為にレヴァンティンで防ごうとする。
だが俺の目的は刃での一撃じゃねぇ！！

「アテナ！！」
《――Ｌｏｄｅ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ！――》

二発のカートリッジを消費し、アテナの刃に魔力を纏わせる。
同時に俺はアテナを担ぐように振りかぶる。
形はまるでアテナを背中に隠すように。

「その程度……」

カートリッジを二発消費した俺の必殺技、それなりに威力はあると思う。

しかし相手は姉さん。俺の技を知り尽くし、基礎を叩き込んだ相手。

冷静でいられるのが当たり前だ。

そう――冷静でいて貰わなければならない。

「アテナ！！」

《速力付与、最大展開！！》

速度上昇の魔力付与を維持したままシグナム姉さんの背後に回りこむ。

勿論、どれだけ早く動いても、今の俺じゃ姉さんの視界外に出る事はできない。

それも、計算済みだ。

《――Ｔｅｃｈｎｉｃａｌ（テクニカル）　ａｎｄ（アンド）　Ｂｕｓｔｅｒ（バスター）　Ｓｉｌｈｏｕｅｔｔｅ（シルエット）　――》

「なに！？」

そう、二発のロードはこの為。
アテナの二重展開（ダブルオープン）の為の一発。
そしてもう一発は――……。

「ソードダンス……サードカラーズ！！」

バスターを地面に叩きつけ、サードを発動させる。
俺が一撃を姉さんに入れるのは難しい、というのは重々理解してる。
だったらどうするか。
防がれること前提で考えればいい。
サードなら他の攻撃と違ってコレといった剣筋がない。
姉さんだって無傷とはいかなかった筈だ。
この隙に――……

《相棒、魔力反応感知！！》
「っ！？」

お互い戦っているんだ。魔力反応がある事はおかしいことではない。
しかし、アテナが態々告げてきたって事は、向こうが何かを仕掛けてきてるってことだ。

「駆けろ――」

「ちっ！！」
「――隼！！」

一体に漂っていた土ぼこりを穿ち、紫色の一矢が迫り来る。
ほぼ反射的にバスター状態のアテナを盾代わりにし、矢を防ぐ。
だが、紫色の矢の勢いは衰えることを知らず、押してくる。

「ぐっ……ちくしょう、がぁ！！」

矢と垂直にしていたバスターの剣先をずらし、矢を滑らせいなす。

「はあぁぁぁあ！！」
「アテナ！」
《――Ｔｅｃｈｎｉｃａｌ（テクニカル）　Ｓｉｌｈｏｕｅｔｔｅ（シルエット）！――》

いなすと同時に、煙の尾を引いて姉さんが刃を振るう。
即座にテクニカルにシルエットチェンジ、速力付与を最大まで展開させる。

切っては防がれ、防いでは切り。
お互いに距離を取る。

瞬く間の攻防。

しかしその攻防で、俺は傷つき、姉さんにはたったの一太刀しか与えられなかった。

「（くそ。あんだけ出してたったの一太刀かよ）」

《（まぁ、今の相棒では妥当なところでしょう）》

俺の愚痴に相棒が反応する。

だが、俺もアテナもそこまで追い詰められてるわけじゃない。

《（相棒はまだ、全力の『ぜ』の字しか出してませんからね）》

「（……そこは『ぜ』の字もだしてない、じゃねぇのか？）」

《（字際出しているでしょう？）》

「（ちがいねぇ！！）」

そして俺は静にアテナのコアに手を添える。

「アテナ、出せ！！」

取り出すのはあの戦い、アング達との最終決戦でユリアが作ってくれたカートリッジの十字ベルト。

それを腰に巻き、更にカートリッジをロードする。

《――blanco（ブランコ） ala（アーラ）！――》

出現する純白のビーム状の翼。

「解除申請！」

「第三封印、解除！」

ついでに第三封印も解除、さらに魔力量の絶対量を上げる。

「ようやく、出してきたか」

向かいに立つ姉さんが、それを待っていたと言いたげな表情で言ってくる。

「エクタレンテ、だったか？　それを出さないのか？」

「さぁ？　もしかしたら次の瞬間にでもだすかもよ？」

実際エクタランテはカートリッジの消費が激しすぎる。

いや、確かにそれに比例した能力がエクタランテにはある。

しかしアテナの本領はエクタランテじゃない。

エクタランテさえも、アテナの能力の一端に過ぎないんだ。

ならここでエクタランテを出すのは得策じゃない。

「（アテナ、少し無理させるぞ？）」

《（その使い方こそ、私の本領ですよ？）》

その意気だ。

「アテナ、ダブルソード！」

《――Ｄｏｕｂｕｌ（ダブル）　Ｓｉｌｈｏｕｅｔｔｅ（シルエット）！――》

テクニカルからダブルに切り替え、姉さんに突っ込む。

「いまさら、そのシルエットで！！」

「だれが、このまま行くって言ったよ！！」

《――Ｇｕｎ（ガン）　Ｓｉｌｈｏｕｅｔｔｅ（シルエット）！――》

ダブルからガンシルエットへ。

体に急停止をかけ、ガンシルエットの剣先を向ける。

「ブランコスフィア」

《――Ｆｉｒｅ！――》

トリガーを引き、計１０発のスフィアを打ち出す。
刃の攻撃と思わせての遠距離攻撃。
さすがの姉さんも反応が一瞬遅れれば、全て交わす事はできない筈！

――筈、だったんだけど……。

《――Ｓｃｈｌａｎｇｅｆｏｒｍ（シュランゲフォルム）――》

「……うそん？」

《そういうのはいいですから！　早く第二派を！！　相棒～～！！》

確かに姉さんは全てのスフィアを交わしきる事はできなかった。
だが、交わせないなら切ればいいと思ったんだろう。
姉さんはレヴァンティンを蛇腹剣、シュランゲにフォルムチェンジし全てを切り落とした。

「はぁ！」

そしてそのまま、俺に攻撃を仕掛けてくる。

《――Ｌｏｄｅ（ロード）　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ（カートリッジ）！――》

「フォース・カラーズ！！」

再びトリガーを引き、繰り出すのはガンシルエットのソードダンス。
カートリッジの消費を一発に押さえ、砲撃の威力を抑え、限りなく細くする。

これのお陰で細かい操作ができるようになる。
いわば砲撃のシュランゲ。

それによりシュランゲの攻撃を弾く。

「そんな使い方があったか」
「まぁね。っても二度は使えない一度きりの攻撃だよ」

実際姉さんには二度と通用しないだろう。
さて、どうしようか……。

ここで万華鏡かコネクションを出してもいいけど、そこで決められなかったらそれこそ勝負は決まってしまう。

どっちを出すにしても、まだ決め手にはかける。

「ウィズ」

そんな時、シグネム姉さんが静に、怒りを込めて話しかけてきた。

「いつまでそうしているつもりだ？」
「――っ」

心臓をつかまれた気がした。

「エクタランテばかりか、万華鏡やフルドライブを抑えた状態で私に勝つつもりか？
　貴様が何を考えているかは知らないが、その程度でこの先進んで行こうと思っているなら、ここで私が引導を渡してくれる」

カチャリと、音を立てながらレヴァンティンの剣先を俺に向けてくる。

そして気づく。
いや、思い出す。

「――あぁ、俺はまた甘えてた見たいだ」

この勝負は元々、俺を諦めさせるためだと思ってたじゃないか。
なのに俺は姉さん達は最後にはわかってくれると、最後には認めてくれると思っていた。

甘えるな。

そんなに甘い世界じゃない。

俺がこれから進もうと思っているのはそんな世界じゃないだろう。

「アテナ、七番だすぞ」

《本気、ようやく出すんですね》

「まぁな。ってか、気づいてたなら言ってくれよ」

《それこそ自分で気づいてください》

まぁ、そうですよね。

「七番？　万華鏡を出す気になったか？」

「違うよ。万華鏡にはシルエットが付いてないでしょ？」

万華鏡はあくまでコネクションの一部。

いうなればコネクションの劣化品、アテナの能力のひとつだ。

「俺が六課に来て一回も出してないシルエットがひとつだけあるんだよ」

「なるほど。確かに万華鏡がシルエットでないなら、まだ一つ出していないな」

凡庸性が高いノーマル。速度上昇のテクニカル。
破壊力のバスターに遠距離のガン、手数のダブル。そして万能のエクタランテ。

そして最後は、姉さん達から学んだこととは別。
あの二年間で身に着けた戦闘技能を存分に吐き出せるシルエット。

《――展開します》

白銀の光がアテナを包み、次の瞬間には光は消える。

「……なんだ、そのシルエットは？」

その言葉は正しいと思う。
今のアテナは到底思いつく限りの剣の形をしていないだろう。
二枚の曲線を描いた刃が円を形取り、俺の右手甲に装備される。
あるのは刃だけ。それ以外はグリップもあったもんじゃない。

「何だって言われたら困るかな。まだ名前もないからね」
《強いて言うならセブンスシルエット、と言ったところでしょうか》
「さぁ、行くぜ、姉さん！！」

ウィズのコメ返し

ウ「さて今回は二部構成だ。終わりは次の話で」
ア《では早速コメ返しに行きましょう》

夕さん

ウ「ヘタレの王ってドウ言う事!?」
ア《文字通しの意味でしょう？　これで相棒も王の仲間入りですね！》
ウ「だから何でよ!?　普通に酷くね!?」
ア《相棒のコレまでの態度がいけないんでしょう?》
ウ「がはっ!?」

麗×零さん

ウ「いや、そのですね……」
ア《相棒はソレでもだめだったんですよねぇ?》
ウ「人が言葉濁してるのに言っちゃった!?」
ア《さて、相棒の進路は次の話でちゃんと明かされます。では引き続きお楽しみください》
ウ「……」

ＴＯＵＤＡさん

ウ「か、カリエスウォー？」
ア《元ネタが分からないので私にはボケようがありませんね》
ウ「別にボケないで良いから！なんでいつもソッチに考えるかな！？」
ア《いえ、私の中の何かがそうしろと訴えてくるので》
ウ「もう疲れたよ……」

NKさん

ウ「いやだって、歯医者なんていくつになってもいやだろ？」
ア《そうかも知れませんが逃げ出すのは相棒くらいでしょう？》
ウ「……いや、やっぱ探したら居ると思うって」
ア《なんか嫌な間がありましたが良いでしょう。セラフィムの言うとおり武器が増えましたし》
ウ「ヒィ！？」

61．意地と七番目（後書き）

後書きは次話で

62．エピローグ

～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・

「はや姉、入るよ？」

外から一声かけて、俺ははや姉の居る部屋の中に入る。
はや姉の部屋は何度か来たことがある

「どうしたんや？　あ、もしかして私についてくる気になったか？」

相変わらず勘が良い。良いけれど、今回が少しだけ外れていた。

「いや、進路の事を話しに着たんだけど、内容は違うかな」
「ん？　ならシグナムの下にでもつくんか？」
「……なんでそうなる？」
「え、だってシグナム、ウィズが下についてくれたらなぁ、って言ってたし」

何を言ってくれてるんだろうね、あのお姉さまは。

あの時言ってたの、やっぱり本気だったのね。

「あ～、うん。そんなことより……」

「進路の件やろ？　結局どうすることにしたんや？」

気のせいだろうか。

はや姉の空気が少し変わった気がする。

「うん。俺、管理局を辞めようと思ってるんだ」

～・～・～・～・～・～・～・～・～・

右腕に装備したセブンスを構え、俺は駆け殴るように姉さんに切りかかる。

「はあぁぁあぁ！！」

「その程度、今さら！」

だが案の定、簡単にレヴァンティンで防がれる。

が、このシルエットは相手に防がれてからが本領を発揮する！！

「回れ！！」

「――なに！？」

セブンスが甲高い音を立て、火花を散らしながら回転し始める。

セブンスシルエットは言わば回転刃。

このシルエットは雅に俺だ。

相手に攻撃を防がれる前提だったり、とにかくコレといった特徴がない。

俺が今までコイツを出さなかった理由のひとつだ。

だけど、俺のプライドの話だ。

完成していないシルエット、コイツで勝ちたい。

未完成でも、完成品に迫ることができるって、証明したい！！

「くっ――」

火花を散らし、姉さんの剣を弾くことに成功する。

が、俺の右手のセブンスも一緒に弾かれる。

「はあぁぁ！！」

だが弾かれることを予想していた俺はそのまま、体にかかる回転力

を利用して姉さんに蹴りをくりだす。
その一撃は、俺にしては珍しく、姉さんのわき腹に一撃入れることに成功。
姉さんは横に飛ばすことができた。

「どんどん行くぜ！！」
「そう何度も同じ手を食らうか――ー！！」

空中で急制動をかけ、俺の方に文字通り飛んでくるシグナム姉さん。
レヴァンティンを構え、領域に入った瞬間に俺を切るつもりだろう。
それに対抗するために俺もセブンスを構え――

「やっぱ無理だな！」
「――は？」

姉さんの脇を潜るように、打ち合わずに交わした。

「き、貴様！　それでも騎士か！？」
「あいにく、こちとら正面きって勝てないことくらい分か切ってんだよぉ！！」

振り向きざま更に切りかかってくる姉さん。

だかど俺の行動に気が緩んだのか、混乱してるのか。その太刀筋はさっきよりゆるい。

後ろにバク転し、交わし、足が付くと同時に体を屈め、足払いをかける。

「くっ。騎士ならもっと正々堂々と――！！」

「奇策でもなんでもって言ったのは、はや姉だぜ！」

足払いを交わしながら叫ぶ姉さん。

どうにも俺の行動でリズムか崩れたらしい。

それならそれでコッチのモンだ。

足払いを交わすために、飛ぶのではなく、跳んだ姉さんに両手を軸にしての蹴りを入れる。

もともと騎士らしくない、アクロバティックな動きは得意だ。

だからこそ、俺はテクニカルとハイペリオンを組み合わせた戦闘方法を一番多用してた。

だけどこのセブンスは両手が自由になるから、更に動きの幅が広がる。

「このまま攻めきる！　アテナ、宝剣展開！」

《マスターコード、認証！！》

セブンスが急激に回転し始める。

《――Ｌｏｄｅ（ロード）　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ（カートリッジ）！！――》

さらにカートリッジを5発ロード。
付け焼刃だとはわかってるが、姉さんがペースを取り戻す前に決める必要がある。

「ブレード、オープン！！」
《――Ｅｓｐａｄａ（エスパーダ）　Ｏｐｅｎ（オープン）！――》

出現する純銀の刃。
それは眩い光を放ち、本来の刃よりも圧倒的な存在感を持つ。

「それが、本来の姿……と？」
「どうだろうね？」

本来の姿、なんて立派なもんじゃない。
この刃を使ってるだけで俺の魔力はドンドン奪われていく。
5分、いや、3分も持たないだろう。

姉さんも調子を取り戻し始めてる。
ここで決めなきゃ最悪の形で終わる。

ゆっくり、だけど早く。
早く、それでも確実に。

セブンスを装備している右手を後ろに、半身の体制をとる。
重心を落とし、全魔力をある一点に集中させる。

この体制は姉さんも一度見ている。
だからだろう。

姉さんが、一閃の構えを取ったのは。

向こうもそのつもりなんだ。
一撃で勝負を決める。

「（アテナ、これで決めるぞ）」
《（了解です）》

音が消える錯覚に落ちる。

「紫電――」
「龍牙――」

同時。
俺達は駆ける。

「――　一閃！！」

そうして振るわれるのはレヴァンティン。
俺もセブンスを振るい、抵抗しようとする。

――が。

「なっ！？」

互いの刃はぶつかることなく、いや、レヴァンティンの刃がセブンスの刃がすり抜ける。

俺はそのまま自身の速度を殺さずに姉さんの後ろに回りこむ。

姉さんは今の一撃で決めるつもりだったようで一瞬だが反応が遅れている。

その隙に再び光刃を元の大きさに戻る。

「――幻閃！」

俺の刃が姉さんの背後を捕らえた。

「一つ、聞いていいか？」
「なに？」

セブンスの刃先を姉さんの首筋に限りなく近づけた状態。
そんな状態で姉さんが声をかけてきた。

「確かにお前の刃は存在していた。なのに何故すり抜けた？」
「簡単だよ。そこに俺の刃は存在していなかった。それをあるように見せたんだ」

母さんと再会してから新たに知った俺の魔力の特性。
それは【発光】。

確かに言われて見れば俺の魔法は事あるごとに姉さん達とは少し違ってまさに光ってるって感じだった。

アテナにしてもシルエットチャンジする度に一々光りやがる。
思い出したらスフィアの暴発、あれもれさえも光ったりしていた。

そこを利用したのが今回の技、龍牙幻閃。

電球の光を電気の量で調節できるように、魔力の光量を魔力で調節

する。
他者からは魔力刃が光を放っているように見えるが実際の刀身はかなり短くしてる。
その刀身を信じて打ち合おうとすれば当然相手の剣は光を切るだけ。
手ごたえなんか無い。
そして最後に俺は刀身を伸ばして相手に切りかかる。
魔力刃と俺の魔力の特性を組み合わせて完成する、唯一の技。
以上のことをかいつまんで姉さんに話す。
「なるほど、だから【一】ではなく【幻】か」
そう静かに言い、剣をゆっくり下ろす。
「私の負けだ。……行くがいい」
あごで指す方向を見ればそこに居るのは戦う前には居なかった、はや姉の姿があった。

シグナム姉さんと一緒にみんなの所に戻ってきた。
俺は迷わずにはや姉の前に立った。

「まさかシグナムに勝つとはなぁ。ビックリやわ」
「俺もだよ。まぁ、シグナム姉さんが本気だったとは思わないけどね」

二人で小さく、苦笑う。

そしてはや姉は右手に持っていたカバン、俺の持ってきたモノを手渡してくる。

そこに言葉は無い。
当然の様に、俺も何も言わずに受け取る。

「ウィズ、本当に勝っちゃったね」
「どうだった？　俺、中々強くなったでしょ？」

話しかけてきたフェイ姉に左手で力コブを作りながら答える。
当然調子に乗らない、とか言われて頭を優しく叩かれた。

「私が一年間鍛えたんだもん。強くて当然だよね？」
「……シグナム姉さんとの模擬戦の記憶しかないですけど？」
「あ、あれ？　そうだっけ？」

目を泳がせるなの姉。
だけどココだけは譲れません、はい。

《相棒、最後なんですからソレくらい譲りましょうよ？》
「俺の血の一年間を偽れと？」
「そうか、私との再戦がそんなに望みか」
「ヒィィ！？」

頬にヒヤリとした何かを添えられ、仰け反る俺。
慌ててバックを下に落としてしまった。

「なにするんですか！？」
「いやなに。別れの前のおふざけだと思ってくれて良い」

えぇ、えぇ。確かに俺の中に確りと残りましたよ。
でもどうせだったらもっと良い思い出を残して欲しかったよ。

「ってウィズさん、別れるってどう言う事ですか！？」

シグナム姉さんの言葉にスバルが声を上げた。

まぁ、それも当然だろう。
だってこのことを皆に言ったのは昨日の夜なんだから。

～・～・～・～・～・～・～・～・～・

「管理局を辞めてどうするんや？」

はや姉は特に驚くこともなく、俺に聞いてきた。
だから俺も特に慌てることも無く、普通に話す事ができた。

「そうだな。とりあえず次元世界を旅でもしてみようかな、って思ってる」
「そう言う意味やない」

あぁ、どうやら勘違いしてたみたいだ。
はや姉は驚いてないだけで、怒ってるんだ。
表情に出してないだけど、少しでもつつけば爆発しそうなくらいに。

「うん。でさはや姉、ひとつだけお願いがあるんだ」
「……なんや？」
「俺をはや姉の特別固有戦力にしてくれないかな？」
「アホな事いうんやない！！」

机を強く叩いて怒鳴るはや姉。
だけど俺はアホなことを言ってるつもりもない、マジメだ。

「俺はロストロギアだ。言いたくないけどシグナム姉さん達だって特別固有戦力認定されてるだろ？」

シグナム姉さんたちは夜天の魔道書の守護騎士プログラムとして、認定されている。
たしかに管理局に入隊してるし、階級も貰ってるけど、大前提は覆らない。

それを逆に利用させてもらう。
この一年で俺は自分の事を本当の意味で知れたし、考える時間もあった。

「管理局に入った理由は、姉さん達の近くに居たいってのもあったけど、一番の理由は姉さん達を守りたいって思ったからなんだ。
小さい頃からずっと思ってた。だけど、今のまま管理局に入ってたらどうしても守りたいときに近くに居られない」

それに、特別固有戦力なら管理局の機器も最低限使うことができる。

「ウィズの気持ちは良く分かった」

俺の話をずっと聞いていたはや姉が口を開いた。

「でもそれをはいそうですか、って頷くわけにもいかへん。私達にとってはウィズはまだ弱いんや」
「うん」

そんなこと分かりきってる。

姉さん達を守れるほど自分に実力がないってのも。
だからこその次元世界の旅。

「やから、条件がある」
「条件？」
「殺傷設定、卑怯な行為以外やったら奇策でもなんでも使ってええ。自分の持ってるもん全部出し切って、シグナムに勝ち。話しはそっからや」

～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・

「ま、そう言う事があったんだよ」

昨日あったことを簡単にフォワードたちに簡単に話す。
勿論守りたいとかそういうのは恥ずかしいから言ってない。

「それでその荷物だったんですね」

「まぁな。負けるつもりで勝負なんかしねぇって」

キャロの頭に手を置きながら答える。

《それで負けたら面白かったんですけどねぇ》

「なんで他人事なのかな！？」

《まぁ、所詮相棒ですので》

「俺の存在って所詮程度！？」

このまま良い空気でいけると思ってた頃が俺にもありました……。

一回咳払いをして空気を落ち着かせる。

「ま、そう言うことだ。だからなんかあったら俺に連絡してくれ」

フォワードにそう告げ、改めてはや姉に向き直る。

「約束は約束やからな。私は何も言わんよ。ウィズのやりたい様にやり」

「うん、ありがとう」

そこにあるのは笑顔を作ろうとしてるはや姉。

俺も笑顔なんて作れてないだろう。
いくら俺が望んだ進路だといっても、また離れ離れになるんだ。
仕方ないことだと、自分で思う。

「いつでも連絡して。昔みたいに音信不通になることは無いからさ」
「当たり前や。またなったら八神家総動員で探し出したるからな」

それは怖い。いや、シャレにならないって。
俺はカバンを持ち直す。

「じゃぁ、行くね」
「うん。ウィズ、頑張りや」

俺達に言葉は必要ない。
言いたいことなんて、全部わかる。

行って欲しくない。
別れたくない。

知られたくない事も、知りたいことも全部分かる俺達だからこそ。
お互い隠してるって分かってるからそこに触れずに会話する。

そして俺はインビエルノを出し、跨る。

「いつでも戻っといで。美味しいご飯用意して待ってるからな」
「ありがとう」

アクセルをふかし、俺は走り出す。

機動六課。
俺も一年間過ごした家が離れていく。

いつか、この一年間も思い出になって色あせていくんだろう。
けれども、俺は忘れない。

一年で学んだ俺の生きる意味と、思い出させてくれた生きる理由。
遥か記憶の片隅に隠れることになったとしても、忘れることなんか決してない。

俺は走り出す。
自分の為に。姉さん達の為に。可愛い後輩達の為に。

やりたい事を、大手を振って出きるように。

帰る場所は、願う限り、無くならない事を知ったから。

俺は、一歩踏み出す。

「あ、ウィズ～。申請とか色々あるから明後日には戻っといでや～」

「マジか！？」

後書き

皆さんこんにちは、八神煌斗です。

これにて魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　ＷｉｔＨ　２ｎｄは終わりを迎えました。

今まで応援してくださった皆様、感想を下さった皆様、ありがとうございました。

読んでくださる皆様が居たからこそ、最終回を迎えることができました。

時系列では機動六課時代の一年間ですが、後半は私の妄想の産物です。

閲覧数が減ったりしても、感想を読むたび元気を貰いました。

なんど２ｎｄに入ってやめようと思ったことか分かりません。

メッセージでも何度か辛辣なお言葉をいただきました。

ですか、ここまで読んでくださった皆様が居たからこそここまでこれました。

思えばこの作品を書き始めたのは二年前。

一度一作品目を消してもいるのでソレくらいになります。

最初は本当に軽い気持ちで始めました。

しかし、感想を貰うたびにコレは自己満足だけで終わらせられるモ

ノではないと感じていきました。
読みたくないなら読まなければ良いのに。
こんな考えも通用しません。

こうやってネットで公開している以上、何を言われても自分の責任です。

そう言うものを感じさせてくれたのもこの作品です。
本当にありがとうございました。

続編の予定は今のところありませんが、いつかウィズたちを書けたらばな、と思っています。

また今私の中ではオリジナルを書きたい等色々な思いも生まれてきています。

もし投稿した際にはまた暖かい目と厳しい目で見守ってもらえれば幸いです。

それでは皆様、また会うその日まで、しばしお別れです。

それでわ！！

P．S．
ただいま「私立聖祥学園高校」の名前でクロス小説を書いております。
ウィズもチョコチョコでる予定なのでよければ覗いてみてください。

人気投票結果イラストは近々掲載予定です。
その際はまた活動報告で報告させていただきます。

番外編　01．はやての新しい魔法（前書き）

一日早く投稿することができました。
では、久しぶりのウィズ、ご覧ください。

番外編　01．はやての新しい魔法

「で、なにデバイスと睨めっこしてんの？」
《はやてさんも相棒の菌に感染しましたか？》
「俺の菌ってなに！？」

申告書類の記入の為に機動六課に帰ってきてた俺。
あんな別れ方をしといて、次の日に戻ってくるのは恥ずかしかったけど、書類に関しては放っておく訳にもいかなかったから渋々戻ってきた。
案の定俺を見た隊員達は一瞬目を逸らし、半笑いで接してくれた。
悲しかった。

でだ。
部隊長室の扉を潜るとはや姉が座りもせずに。夜天の魔道書を広げ鬼気迫る形相で睨めっこしていた。
はや姉の横にいるリィンもオロオロした様子で見守っている。

「リィン、はや姉どうしたんだ？」
「あ、ウィズです～。早いお帰りですね？」
「ぐっ！」
《リィンさんは本当に純粋キャラなのでしょうか？　私は偶に分からなくなります》

その一言を聞くだけで、俺はお前がどれだけ黒いのかよく分かるよ。
黒は白の事を理解できないんだよな、わかるよ。

「それが、はやてちゃん。昨日あ、と言ってからずっとこうなんですぅ」
「昨日から？」

詳しく聞くと、はや姉は俺が昨日出て行って少ししてからこうなったらしい。

俺が出た後、そのままフォワード陣がフェイ姉と模擬戦をし始め、それを見ていたはや姉が突然おかしくなった。

うん、はや姉がおかしくなる理由がわからん。

「……んぉ？　ウィズやんか。おかえり」

リィンと話しているとようやくはや姉が俺に気づいてくれた。
とりあえず今の状況を聞いてみようか。

「はや姉、デバイス睨みつけてどうしたの？」
「ん？　ちょっとティアナの戦いを見てて閃いてな」
「ティアナの？」

はて？

ティアナとはや姉の戦闘方法に共通点が見つからないんだけど。
指揮官って所ではあるっちゃあるけど、こう言ったらアレだけど、
ティアナからはや姉が学ぶことなんてそうそう無いだろ。
いくら光るモンがあるったて、今更感が拭えない。

「私は固定砲台やろ？」
「あぁ、まぁそうだね」

はや姉の戦闘方法はどうしてもその表現が的確だと思ってしまう。
アングとの戦闘の時だって、動きは必要最低限。俺のシルエットチェンジの隙を作る為に撃ってたけど、アレだってあまり動いてなかった。

むしろアレでも動いてた方だ。

まぁ、それに見合う威力の魔法が撃てるし、本気で戦闘に向かうならヴォルケンリッターの姉さん達もいるから全くのハンデともいえないんだけどな。

「で、それがどうかした？」
「うん。私もな。ティアナ見たいに幻術魔法が使えへんかな、と思ってな」
「幻術を？　……あぁ、そういうこと？」

確かにティアナのフェイクシルエットははや姉に効果抜群かもしれない。

本体の姿を隠して、別の幻を作り出す。

はや姉がもし使えたら本人がいない所から魔法が飛んできて、かつ見えている本体には攻撃が届かないときた。

なるほど、確かにはや姉にぴったりな魔法と言っても良いだろう。

「それで夜天の魔道書にソレっぽい魔法があったからチョコチョコ～と弄ってな」

「新しい魔法作ってたってことでいいの？」

「まぁ、纏めたらそう言うことやな。でも上手くいかんくてなぁ。これで上手くいかんかったら最後にしよかと思ってたとこや」

なるほど、ようやく理解した。

俺が来るって言ってた時間には少し早いし、俺が来る前には終わらせておこうとでも思ってたんだろう。

はや姉自身あんまり回りに自分の努力を見せるタイプじゃないし、本人が慌ててないのも単に俺が身内だからだろう。

「今調度終わったところやから少しだけ待ってくれるか？」

「良いよ。俺も少し早くついてるしね」

「ありがとうな」

そしてはや姉は魔導書を開いてボソボソと、何かを呟きだした。

初めての魔法だからちゃんと詠唱から始めてるんだろう。

俺の魔法は基本詠唱ないけどな。

《そこまで複雑な魔法を持ってないだけでしょう？》

「……うるさいな」

《はやてさんたちなら相棒の魔法、一回目で無詠唱で使えますしね》

「だからうるさいよ！？」

と、俺が相棒と話している間に詠唱が終わったのか、魔道書が光だし部屋を一瞬包み込んだ。

そして光が収まり、最初に俺の視界に映ったものは先程まで無かった人影だった。

「む……ここはどこだ？」

「……うそん？」

《これまたとんでもないフェイクシルエットですね》

灰色の髪に翡翠の瞳を持ったはや姉だった。

「それで、はやての魔法で出てきちゃったんだ？」
「まぁ、一人でよかったって言ったらそうなんだろうけど……」

と、食堂でフェイ姉と話しながら視線を動かす。
そこには双子よろしく、全く同じ顔を持った二人が言い争っている。

「こら、行儀よくしいって言ってるやろ！」
「痛いぞ塵芥」
「ならさっさとその足机から下ろさんかい！」
「塵芥が我に物申すでない」

はや姉が作り出したシルエットから出てきたのははや姉を模ったマテリアルだった。

容姿は今のはや姉と同じくらい、もともとフェイクの魔法が元なんだから姿かたちが似てるのは分かるけど、なぜに人格を持って、しかもソレがマテリアルなのだろうか。

敵意が無いから一応放っておいてるけど。

「にしても、ああやって改めてみると本当に見た目そっくりなん

だな」
「正確は逆だけどね。マテリアルの方が唯我独尊な所とか……」
《ある意味、はやてさんにもその片鱗はありますけれどね》
「そ、それは……アハハハハ」
「フェイ姉、目逸らさないで」
「こら、そこの塵芥共」
フェイ姉と話しているといつの間に近寄ってきたのかマテリアルが俺の後ろに居た。
「我にはちゃんとロード・ディアーチェと言う名前がある。マテリアルと言うふざけた名前で呼ぶでない」
「お前ちゃんと名前あったのか」
「うむ。まぁおぬし達は知らぬ仲でもない。今回ばかりは許してやろう」
知らない仲だったら俺襲われてなんだろうか？
今の戦力だったら負ける気はしねぇけど、それでも六課（ここ）を戦場にはしたくないし、何も言わないで置こう。
「了解。んじゃこれからはアーチェとでも呼べば良いのか？」
「む。アーチェとはまた軽々しいが……まぁ、許そう。今後はそう呼ぶことだな塵芥」
「俺は塵芥扱いかよ……」

不満を言いつつも、腕を組み満更でもないアーチェを見て苦笑いをする。その後ろではや姉が不満そうに俺達を睨みつけているのは見なければよかった。

「で、アーチェはいつまでコッチにいるんだ？」

この意味は当然いつまで出てきているか、と言う意味だ。今のアーチェは闇の欠片事件の時や、アングが作り出した核で出来ている存在でもない。はや姉が自分の魔力を注ぎ込んで生まれた存在だ。実体を持った虚像で間違いは無いが、魔力が尽きたら消えることには変わりないだろう。

「そうだな。少なくとも今日中は持つであろう。当然戦闘をしたらその限りでは無いがな」

「そうやな。私自身調整の予定だったか、そんなに多くの魔力注ぎ込んだ訳でもないし」

多くの記憶を注ぎこんだわけでもないのに今日一日持つのか。やっぱはや姉の魔力保有量は桁違いってことか……。

「うわ、本当に居る……」

「あ、なの姉」

俺がはや姉の魔力保有量に驚き呆れてる所になの姉が来た。
事前に説明はしていたからそんなに驚かなかったものの、やっぱ目の前にすると驚くらしい。

因みに今六課に隊員は少ない。
これははや姉が本局に六課がどれだけ、文字通り死ぬ気で動いてきたかを伝えに言って完璧な休暇をもぎ取った結果だ。
だからこそ今の六課には最低限の人員しか居ずに、混乱も最低限に抑えられた。

「これも我の力と言うわけだ」
「いや、これ私の力やからな？」

ドヤッと胸を張るアーチェに対してツッコミを入れるはや姉。
それに対して不満顔のアーチェ。

「む？　塵芥よ。貴様は我の弟だろう。我を養護しろ」
「ここでまさかの俺に振ってきた！？」

完全に傍観に徹していたから、不意打ちも良いところだ。

「いや、まぁ……どっちかってとはや姉だろ」
「何だと!?」
「ほれ見てみぃ！」

俺の一言にアーチェは驚きの声を上げて、はや姉は自慢げに頷く。

まぁ、間違ってないだろ。
それにアーチェは今までの会った中でも温厚な方に入るだろうし、ここで気に入らないからって攻撃してくるなんてこと……。

「ならば我の力を見せてやろう!!」
「してきたよーー!?」
《相棒が変なフラグ立てるからですよ!!》
「だって大丈夫だと思ったんだもん!!」
《だもんとか可愛くないですからね!!》
「そんな事思って言ったんじゃねぇよ!!」

「そこ！　漫才してへんで止めるの手伝わんかい!!」

アテナと喋ってると、はや姉がアーチェをはおいじめしながら叫んできた。

見ればなの姉とフェイ姉もアーチェの手を塞ごうと必死になっている。
因みにアーチェの手には確りと夜天の魔道書らしきものが握り締められている。

「うぬあぁぁ！　離せ、離さぬか！」
「離したら魔法を使うつもりやろうが！」
「当然だ！」
「なら離すかい！」

なんだろうなぁ。

面白い。
なの姉とフェイ姉は別としても、同じ顔の二人が取っ組み合ってるのは中々に変な光景だ。

「えぇい。塵芥！　特別にウィズと名前を呼んでやる！　だから我を助けよ！！」
「いや、今更名前で呼ばれても違和感しかないわ」
「なんと！？」

別に塵芥って呼ばれたい訳じゃねぇけど、アーチェにウィズって呼ばれるほうが違和感がある。

それに俺は基本はや姉の味方なのですよ。今日からはや姉の特別固有戦力になる訳だし、初日から裏切るわけにはいきません、はい。

「ぬあぁぁぁぁぁ！　あまり我を舐めるなよ！」

アーチェが叫んだと思うと、手に持った魔道書が光りだす。
それはどう見ても魔法の発動前の光であって、既に足元には魔法陣が出来上がってるわけで……。

「ウィズ君、レイラのシールシルエットを！」
「ウィズ早く！」

なの姉とフェイ姉がせっぱ詰まって言ってくるんだけど……。

「今俺レイラ持ってねぇぇぇぇ！！」
《ヨッシャァ！！》
「喜ぶなよ！？」

確実にアナザーなら拳を作ってただろうアテナにツッコミを入れている間にも魔法陣の輝きは増して――。

「おや……ここはどこでしょうか？」
「誰だ、僕の眠りを妨げたのは！？」
《相棒です》
「おまっ、マスター裏切りやがったな！！」

俺達の目の前に居たのはなの姉とフェイ姉に似たマテリアルたちだった。
因みに見た目は9歳前後。

「む……、さすがに魔力を込め切れなかったか」
「込め切れなかったか、ちゃうわーー！！」
「だから痛いと言っているだろう、塵芥！？」

はや姉の激しいツッコミがアーチェの脳天に炸裂した。

「あ、なんだか懐かしい」

フェイ姉はなんかずれてたけど。

番外編　01．はやての新しい魔法（後書き）

お久しぶりです、八神煌斗です。

久しぶりのウィズはどうでしたでしょうか？
ロードをアーチェと呼んでいるのは、正規のマテリアルでは無い、という意味です。他に他意はありません。

それでは次話でお会いしましょう。

番外編　０２．明日へ（前書き）

お待たせしました。
番外編なので、色々端折っているところも有りますがご了承ください。
それでは魔法少女リリカルなのは　ＳｔｒｉｋｅｒＳ　ＷｉｔＨ　２ｎｄ、番外編どうぞ！！

番外編　02．明日へ

「なのは、お久しぶりです」
「うん。久しぶり」

「オリジナルは僕の事覚えてるか？」
「うん……というか、名前……」

マテリアルの二人が現れて暫く、既にチビッコマテリアル組みはそれぞれ元となった二人と話してる。

それに比べて……。

「だから痛いと言っているだろうが、塵芥！！」
「やったらもっと行儀よくせんかい！」
「王たる我の頭を叩くのがどれだけの狼藉か分かって――」
「知るか！！」
「貴様はもっと我を敬え！？」

はや姉とアーチェはさっきからずっとあの調子だ。
アーチェが机に足乗せるとか行儀の悪いことをして、はや姉が頭を引っぱたく。
それが恒例の形になっている。

《相棒も傍から見たらアレと似たり寄ったりですよ？》
「マジデか！？」

なんだか、凄く悲しくなりました。

「ぬぅぅ、ウィズ！　いい加減この塵芥をどうにかせぬか！」
「いや、無理」
「うぬぅあああぁぁぁぁ！！！」

何故かアーチェが俺の事をウィズと言うようになったが、扱いはむしろ酷くなってる気がする。

なにせ不味くなったら直ぐに俺の方に助けを求める。
その度にはや姉から睨まれるし、断ったらアーチェに睨まれるし…
…さっきから変な圧迫感に包まれている。

「さて、そろそろ私帰ってもいいですか？」
「むっ。ダメだ。我が一人ぼっちになってしまう」
「……王様、僕の事忘れてない？」

なの姉似のマテリアルが、満足したのか突然の帰って良いか宣言をした。
アーチェは言葉こそ冷静なのだが、どこか焦って居る様で、後ろに立っているフェイ姉似のマテリアルの事は完全に放置している。

《さすがフェイトさんのマテリアル》
「アテナ、それどう言う意味かな？」
「今言ったのアテナだからね？バルディッシュは仕舞って欲しいな？」

フェイ姉の変な所に触れてしまったのか、俺の首元に金色の魔力刃が添えら、俺は冷静に対処する。
嫌なとこばっかり慣れおってからに、俺。

「と、そう言えばお前等にも名前はあるのか？」

アーチェにも名前があったんだ。
当然この二人にも名前はあるだろう。

《なの派にフェイ党ですかね？　あ、ならアーチェさんははや亭が本名ですか？？》
「……お前何言ってんの？」
《なにかビビッときました》
「毎度毎度ご苦労さん」
《いえいえ、それほどでも》

はてさて、コイツには嫌味と言うものが通じているのだろうか？

《通じません。相棒の言葉は全て愛のある言葉に自動翻訳されます》

「何その無駄な翻訳機能！！？」

「私には一応シュテル・ザ・デストラクターと言います」

「で、デストラクター……？」

「わ、私を元にしてるんだよ……ね？」

《むしろ元にしているからでは？》

「アテナ、何か言ったかな？」

「今アテナって言ったよね？なんで俺に向かってレイジングハート向けてるのかな！？」

瞳からハイライトが消え、砲撃モードのレイジングハートを突きつけてくる。

って、冷静に解説してるけど俺だって気が気じゃない。

「一応デストラクターと言うのは称号ですので、なのはは関係ないのですが……」

なんかシュテルが言ってるけど、なの姉が聞いてくれない。

んでもって、少しずつ桃色の光が集まってきている。

にしても、デストラクター……。思い出すのはティアナを撃墜した時の――。

「ウィズ君？」

「アテナ、言って良い事と悪いことがあるんだぞ？」
《私を売るんですか！？》
「お前だって今まで散々俺を売ってきましたよね！？」

にしてもデスとか、普段のなの姉とは全くの無関係な名前だよな。
確かに怒ったときとかはメチャクチャ怖ぇけど、それ以外だったら優しいし。
んで……。

「レヴィ・ザ・スラッシャー！　カッコイイだろ！！」
《スラッシャー……。まぁフェイトさんのイメージ通りですか？》
「レヴィっつう意味が分かんねぇけどな」

スラッシュって確か切るとか、そんな感じな意味だった気がする。
フェイ姉の魔法は殆ど斬撃に準じたものだし、これはあながち間違ってないってことか？

「そして我が――」
「ロード・ディアーチェやろ？」
「我のセリフを返せ、この塵芥があぁぁぁぁぁ！！」

……仲が良いのは、良いんじゃないですか？

「王さまー、僕お腹すいた」
「……アンタらの王さまはコッチや」

そしてマイペースのレヴィ。

当の王様はシュテルに帰らないで欲しいと上から目線のクセにひたすら頼み込むという、なんだか面白い図が出来上がっている。

「シュテル！　我を一人にして平気だというのか！？」
「特にコレと言って心は痛みませんが？」
「ぬうぅぅ！」

いや、どちらかと言えば頼み込んでるアーチェをシュテルがのらりくらりと交わしてる様に見える。
目線も横にズらしてるし、半目になっている。

どこからどう見てもヤル気が一切見られないのが、シュテルなんだろうな。
何となくだけど分かってきた。

「成る程、それは名案かも知れませんね」
「ん？」

急に静かになったと思って、見てみると何故かシュテルが俺を見ながらコッチに向かって歩いてくる。

「ウィズさん、少し遊びましょう」
「死亡フラグ！？」

突然この子は何を言い出してるかね！？

「いえ、王が暇ならばウィズさんに相手をしてもらえば良いと言うので」
「ちょっとアーチェ！？　何いって――」
「あ、僕もやるー！」
「第二段！？」

遊ぶ、という単語にレヴィまで反応しやがった。
さっきまではや姉とじゃれてたくせにいつの間にか俺の制服の上着の端を握って引っ張っている。

「いや、遊ぶって――まさかとは思うけど……」
「私と戦っていただきます」「僕と戦おう！！」
「やっぱりかーーー！！？」

その場で素早く回れ右をし、その場から全力で逃走した。

「で、ここは……？」
《訓練場ですね》
「結局誘導されたよ、チクショーー！！」

行く先行く先にマテリアルズが居るし、最後の方なんかは面白がったはや姉や、模擬戦が見てみたいとか言ってなの姉まで参加してきやがった。

そしてあれよあれよと言う間に気づいたらココに立たされていたんだよ。

目の前には既にシュテルとレヴィも立ってるし、横には――。

「で、なんで姉さんまで居るのさ？」
「主が良い機会だと言うのだ」
「良い機会？」

そう。

何故か俺の横には既に甲冑を纏ったアインス姉さんが立っている。
良い機会って意味が分からずに俺ははや姉に通信を繋ぐ。

『元々アインスはウィズに着いていって貰おうと思ってたんよ』
「はい？」

はや姉の談はこうだ。

俺がはや姉の固有戦力になるのはもう決まったことだから何も言わない。が、しかしそれでも心配なことには変わらない。

ならばまだちゃんと認定を受けていないアインス姉さんを俺のデバイスとして認定させれば、俺を一にすることもないし、俺自身の戦力アップにも繋がると。

現時点のアインス姉さんははや姉と契約する前の体で限界しているが、その核が故障していた為に本来の夜天の書の管理プログラムとしての力を十全と出す事はできない。

それは六課で修繕しても変わる事は無かった。

それに足してアインス姉さんの最大の特徴のユニゾン機能は俺としか作用しなくなってしまっているらしい。

ならば俺と一緒に居たほうが何かと良い、と言うのがアインス姉さんの案、だそうな。

「そういうことだ。これから先の事を考えても、私も必要だと考えた」

《言っておきますけれど、相棒は渡しませんからね？》

「いらん」

「その発言に傷ついた！？」

いらん、って何だよ！？

言葉が少ない分余計に傷つくよ！？

「ウィズーー！　早く始めるぞーー！！」
「向こうやる気満々じゃねぇか！！？」

ジャケットを着たレヴィをが自分のデバイス、バルニフィカスを振り回しながら叫ぶ。
その横にいるシュテルもなんかジト目でコッチ見てるし……。

《やるしかなさそうですね》
「はぁ、なんでこんな目に……」

愚痴ってても仕方ないか。
俺はアテナをテクニカルにして、甲冑を装備する。

「ウィズ。私は接近戦は心持たない。後方で援護に徹する」
「ん……」

アインス姉さんに短く返します。

正直姉さんが付いてくれてるって言っても、勝ち目が薄いことには変わらない。
昨日シグナム姉さんに勝って、それで直ぐ負けたら姉さんの面子を汚すことになる。

それに、俺はこれから負けるつもりなんか無い。

「それじゃ、いくぞーーーー！！」

「て、もう来るのかよ！？」

地面にぶつかるかというギリギリのラインを低空滑走するレヴィ。

そのままコチラに向かって、バルニフィカスを振りかざした。

「っ――。はえぇ！！」

バックステップを踏み、ギリギリの所でその刃を交わし、アテナを振るう。

鈍い鉄ががぶつかる音がして、俺とレヴィはそのまま鍔迫り合いになる。

このままバスターに切り替えて、押し切る。

んで、サードカラーで仕留めて――。

《相棒、前を！》

「前――っ！！」

レヴィに向けていた視線を少し上げると、紅の魔力光がコチラを向いていた。

「行きます、ウィズさん！」
「くっ！」

直ぐにその場を離脱しようとするが、思いの他レヴィの力が強くて振りほどくことが出来ない。
それに万が一ここを抜け出しても、レヴィの速さは本物だ。俺が抜け出すことは――。

「アテナ、コチラにハイペリオンを張れ！！」

俺の言葉ではない。
チラリと後ろを盗み見ると、アインス姉さんの辺り一面に血の様に赤い、小さな刃がいくつも構成されていた。

「アテナ！　ヘキサグラムだ！」
《――Ｈｙｐｅｒｉｏｎ（ハイペリオン）　Ｈｅｘａｇｒａｍ（ヘキサグラム）！！――》

俺の背面に出来上がるヘキサグラム。
この一年の戦いと経験を得て、その防御力は中々もモノだと自負してる。

「ブルーティガー……ドルヒ！！」

振り下ろされた右腕を合図に解き放たれる鮮血の刃。
いくつかはヘキサグラムにぶつかり、衝撃が俺に来るが、それでも大体の数はシュテルに向かって、襲い掛かる。

当然、チャージをしていたシュテルはそれを中断。
その場から大きく飛び、刃を避ける。

「シュテル！！」
「っ。――こんのやろ！」
「うわっ！？」

アテナをバスターにして無理やりにレヴィを弾き飛ばす。
驚いたレヴィそその隙を突いて俺は一度アインス姉さんの元まで下がる。

「ちっ、強ぇなクソッ」

当然と言えば当然なんだろう。
闇の書の中にあったマテリアルがなの姉とフェイ姉を元に作り上げたその体。
これで弱いはずが無い。

なにか、何か無いか。
あの二人を倒せる作戦が……。

《相棒がカッコつけてます》
「ふむ。そういう年頃……と言う解釈で良いのか？」
《厨二病と言う解釈もありますね》
「あんたら、何勝手な事言ってくれてるの！！？」

コッチが真剣に勝つ手段模索してるって時に！

《あーだ、こーだと考えてる相棒が勝てるはず無いでしょう？》

む？
突然しんみりと何を言い出し取るんだコイツは。

《相棒のスタイルは良く言えば行き当たりばったりでしょう？何の為に私の中に七つの剣が収められていると思っているのですか？》

不屈の心、レイジング・ハート。
閃光の戦斧、バルディッシュ。
祝福の風、リィンフォース。

俺もはや姉たちの弟だ。当然アテナにもその名はある。
剣の宝庫、アテナ。

《私は相棒の為に全力を出します。力も頭脳も足りないアナタが無駄に考えても仕方ないでしょう》

アテナの叱咤を聞き、俺は感じていた。
口元が釣り上がっていくのを……。

《目の前の、一秒先だけを考えて行動しなさい。足りない分は――》

「っ！　こら、ウィズ！！」

アインス姉さんが驚きの声を上げる。
だが俺はお構い無しに、足を一歩、さらに一歩と前に進める。

「はぁ……ウィズ！　思うようにやれ！　今の私は、お前のユニゾンデバイスだ！」

姉さんの声に嬉しさを感じ、更にもう一歩踏み込む。
そして、俺の右手に納まっている相棒に最後の言葉を――。

「足りない分は、お前が補え、相棒！！」
《分かってるじゃないですか、相棒！！　大好きです！》

その告白はいらなかったな。

《酷い！？》

結果だけ言うと、俺は何とか二人に勝利を収めた。
とは言っても、何とか耐えたのは中盤戦までで、その後はアインス姉さんとユニゾン。コネクションを使ってのごり押しだった。
二人は模擬戦が終わると同時に魔力を使い切ったのか消滅。
それに怒ったアーチェにはや姉のハリセンが炸裂、本人も魔力が切れるまではや姉に監視されるなどしてこの人騒がせな珍事件は終わりを告げた。

その数年後。
夜天の守護騎士、烈火の将、鉄槌の騎士、湖の癒し手、守護獣、祝福の風に名に続き、重ねの剣士の名が知られる事になる。

番外編　０２．明日へ（後書き）

これにて！
魔法少女リリカルなのは　ＳｔｒｉｋｅｒＳ　ＷｉｔＨ　２ｎｄ
完！　結！

今まで本当にありがとうございました。
これにてＳｔｒｉｋｅｒＳ編は完結となります。

いつかこの今回の番外編０２の完全版を掲載するかも知れませんが、物語自体はこれにて終幕。
ウィズの本当の自分を見つめなおし、前を見て生きる。これがＳｔＳ編で目指したウィズの到達点です。

無印は言わずもがな、ウィズはいません。
Ａ'ｓ編は……まぁ、有りますけれども完結していませんのでココでは言わないと言う事で。

もしかしたらｖｉｖｉｄやＦｏｒｃｅを書くかもしれませんが、直ぐにではないでしょう。

それでは今までウィズを応援してくださった方は本当にありがとうございました！

近々外伝のＡ'ｓ編を更新したいと思っているのでウィズに会いたい方は是非。
私の活動に関してはもう一本の作品、アオの織姫にて活動中です。

それでは皆さん！

ＳｔＳのウィズとはさようなら！

それでは！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8273i/

魔法少女リリカルなのは StrikerS WitH 2nd

2012年1月10日05時49分発行